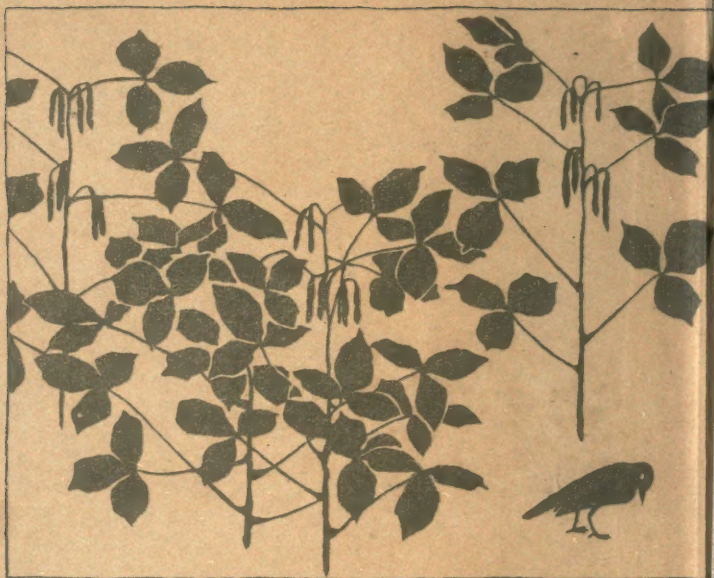


EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03030 7334









(岡山製本)

大正二年一月二十八日印刷
大正二年一月三十一日發行

有朋堂文庫
義經記・曾我物語
(非賣品)

東京市神田區錦町一丁目十九番地

編輯者兼
發行者

三浦理

東京市本所區番場町四番地

印刷者

平井登

東京市本所區番場町四番地

印刷所

出版印刷株式會社分工場

東京市神田區錦町一丁目十九番地

發行所

有朋堂書店

不許複製製

蓬萊山には千年經る

六六九ノ二

まだしきに

六六四ノ三

みこしちの

二七ノ二三

路遠く

六四五ノ二

みなもとほ(せき)

九八ノ三

みなもとほ(たれ)

九八ノ二〇

見るとても

一六二ノ一

もがみ河(岩)

三二九ノ二九

もがみ河(せ)

三二九ノ二

もみぢては

六〇六ノ六

もろともに

七四三ノ一

夢かとも

三六一ノ七

吉野山

二六四ノ二〇

よもの海

三〇九ノ四

夜ならば

五三三ノ二三

六道の

三四五ノ六

別れをば

五三五ノ二

わかれのことさら悲しき

は

六八ノ九

忘れては

三六ノ五

渡るより

六三四ノ四

○若宮

四五〇ノ三

○鷲尾の七郎

一三四ノ一

○和田義盛

曾我兄弟の命請ひ

四七二ノ一

曾我兄弟に對する好意

五二九ノ二〇

與一を論ず

五四二ノ二

酒宴

五七〇ノ二

虎、十郎と酒宴

五八五ノ五

鹿論の取鎮め

六五一ノ九

曾我兄弟の訣別

六七七ノ二〇

○六韜兵法

五〇ノ一

○六孫王

三六ノ一四

○李將軍

六三ノ四

○量智坊の阿闍利

七ノ一〇

ロ

○盧橘

四三ノ一二

ワ

○和歌、歌謠

いさり火の

一四九ノ一〇

いそぐとて

五四ノ五

急げども

一六二ノ三

出でていなば

五四ノ九

同

七五ノ七

いまばとて

五三ノ一二

うき世ぞと

七六ノ一〇

うづらなく

二八ノ六

馬は吠え

六九ノ八

浦のみち

三〇ノ六

逢ふと見る

五四ノ二

同じくは

六三ノ三

おもふかひ

五四ノ一四

數ならぬ

五五ノ二

風に靡く

六五ノ七

形見とて

五四ノ七

きのふこそ

五三ノ二

君が代は(千代に八千代)

五八ノ三

君が代は(千代に一度)

六八ノ七

今日出でて

六二ノ三

くり原や

二八ノ一〇

ことわりや

五七ノ三

さだめなき

七五ノ九

さつき待つ

四三ノ一

さみだれに

六四ノ二

鳴がふす

二八ノ四

しづやしづ

二六ノ九

捨つる身に

五五ノ一

住みなれし

二七八ノ六

住吉の

五六ノ九

ちいぶ山

六二ノ一

露とのみ

七六ノ九

つらからば

二七ノ三

虎と見て

六二ノ三

夏山に

五二ノ一四

名ばかりは

六〇ノ二

のちの世も

三四ノ八

初春の

五六ノ五

春をだに

二七八ノ一

ひきまはす

三三ノ二

古里の

六〇ノ七

平泉寺にて笛の吹奏

二九ノ三

義經の御供

四ノ八

如意の渡の難

三〇四ノ二

○頼朝

伊藤を惡み曾我兄弟を誅せん

四六五ノ五

浦の難

三二〇ノ二

謀叛、源氏の諸勢

九八ノ三

實房の子の平癒祈願

三二七ノ一

義經と對面

一〇六ノ五

北の方の御産

三三ノ三

忠信の剛勇に感激す

三三ノ四

次信忠信兄弟を弔ふ

三七ノ二

勸修坊と對面

二三ノ二

秀衡の死を悼む

三四ノ七

靜を召す

二四三ノ四

募兵の廻文

三五ノ二

義經を討たんとす

三六ノ三

基成へ返書

三八ノ二〇

泰衡征伐

三五ノ一

衣川の讀經

三四ノ八

伊東の女に通ず

四九ノ二〇

衣川の自刃

三九ノ二

北條の許に入る

四八ノ一

○義連

四一ノ二

北條の女へ文

四三ノ三

○義朝

一ノ四

伊豆の御山に忍ぶ

四三ノ六

其都落及子息

三ノ二一

謀叛の企

四九ノ二

其子息

四二ノ九

諸敵討伐、治世

四四ノ七

○義盛

四二ノ九

杉山に逃れ鎌倉に入る

四四ノ七

其來歴

四二ノ九

曾我兄弟を召す

四八ノ五

○頼義

リ

伊藤を惡み曾我兄弟を誅

四六五ノ五

せんとす

四七九ノ四

曾我兄弟を許す

四八三ノ三

二所御參詣

五二五ノ一

淺間の狩

五三九ノ七

鹿の音を憐む

六四六ノ五

富士野の狩

七二四ノ一〇

相澤が原

七二九ノ三

富士野の巻狩

七三三ノ七

五郎の申開き

七三七ノ五

十郎の首實檢

一六ノ五

曾我の母に知行

七二四ノ一〇

伊東禪師を召す

七三三ノ七

曾我兄弟を祀る

七三七ノ五

○八幡三郎

祐經の依頼

河津三郎を討つ

三七六ノ七

四〇四ノ四

ユ

○由井の濱

○ゆかさの峠

○行家

○夢(其賣買)

○湯本の杉

○由良の三郎

○由利の太郎

四六八ノ三

六三四ノ六

四四二ノ三

四三二ノ八

六三七ノ四

七三六ノ二〇

二四ノ六

ヨ

○楊貴妃

○ようぎやう上人

○横川の前司覺範

四三五ノ二

七五六ノ八

一八五ノ二四

○義經(今若、遮那王參照)

鞍馬を出づ

陵の許に到る

板鼻の宿の話

上洛

鬼一法眼を訪ぬ、六韜兵

法

鬼一法眼の女と通ず

湛海と闘ふ

法眼を辭し山科に到る

辨慶と闘ふ

辨慶を臣とす

頼朝に與せんとす

頼朝と對面

平家追討、任官、梶原の

讒言

腰越の申狀

二〇ノ二

三四ノ二〇

三六ノ七

四六ノ一四

四八ノ八

五三ノ四

五九ノ三

六四ノ二

九〇ノ四

九三ノ二

一〇三ノ八

一〇六ノ七

一一〇ノ六

一二五ノ六

土佐坊を召す

土佐坊と戦ふ

院宣、都落ち

大物浦の奇勝

吉野に靜と別る

櫻谷に忍ぶ

白絲の瀧を越ゆ

南都の勸修坊とく、この許

に至る

南都の寓居

南都を出づ

北國落、山伏の出立

北の方を引具す

大津次郎の厚意

使者道を教ふ

三の口の關

平泉寺の難

一三三ノ九

二九ノ二〇

一三八ノ二

一五〇ノ一

一五七ノ二

一九四ノ一

二〇〇ノ二

二〇七ノ六

二三三ノ八

二三八ノ二

二六七ノ一

二七〇ノ一四

二七八ノ二

二八六ノ五

二九〇ノ五

二九四ノ二

○侯野の五郎

三九七ノ八

○水尾の帝

三六一ノ一〇

○松井田の宿

五二七ノ二三

○三原野

五三三ノ一

○萬劫御前

三七二ノ一

○みまの彌太郎

二二〇ノ七

○鞠子川

六三三ノ六

○宮の越

三〇二ノ六

こ

○三浦の平大夫爲繼

一七二ノ二〇

○武藏坊(辨慶参照)

三〇五ノ四

○三浦の平六兵衛

五三三ノ八

○むしばみ

六四二ノ九

○三浦別當

五一七ノ八

○宗任

一七二ノ三

かたかひに通ず

曾我十郎に陳謝

五二九ノ一〇

メ

○三浦與一

○名曲(琵琶)

一六三ノ七

曾我兄弟の依頼

五四〇ノ八

出家

七七七ノ一

モ

○眉間尺

四九三ノ一

○目蓮

七五五ノ二

○陵(ミサ、ギ)

三四ノ九

○基成

三三七ノ六

○三島の大明神

六四ノ九

ヤ

○柳下の小六郎

三九七ノ六

○薬師如來

六〇一ノ一

○泰衡

義經を迎ふ

三三三ノ二

泉の冠者夜討

三三五ノ四

故入道の遺言に背く

三三七ノ一

義經の首獻上

三五三ノ二

○矢立の杉の由來

六三七ノ四

○山木判官兼隆

四三三ノ八

○山科の左衛門

二七八ノ二

○山科の法眼

一九二ノ一

○山田の四郎與政

一三九ノ二

○大和坊

二六八ノ一三

○山の井の三位

七三ノ六

○山彦山

五九七ノ六

素性

六七ノ二

書寫山の夏行

七八ノ一

院の御所に書寫山の失火

を告ぐ

八六ノ四

千本の大刀、義經と戦ふ

八九ノ一

清水參拜、義經に臣仕

九二ノ六

土佐坊と戦ふ

一三〇ノ三

死靈を射る

一四三ノ七

小溝太郎と戦ふ

一五四ノ二

靜に對する非難

一五七ノ四

吉野の評議

一七〇ノ二

御嶽左衛門を訪ふ

一九四ノ五

白絲瀧の失敗

二〇一ノ七

白絲瀧の舞

二〇四ノ九

怪しき使者を誅す

二八八ノ二

三の口の關

二九〇ノ三

平泉寺の衆徒に陳す

二九五ノ九

富樫が館に至る

三〇二ノ七

義經に謝罪

三〇八ノ四

笈の辯疏

三二〇ノ六

實房の子の平癒祈願

三七〇ノ三

龜割山に水をとりなや

む

三一ノ二

衣川の舞

三四ノ七

衣川の奮戦

三四三ノ一〇

二王立の最期

三四六ノ九

ホ

○保昌

五三七ノ六

○北條の四郎時政

都攻めの大將軍

一三八ノ九

頼朝來り倚る

四三八ノ九

曾我五郎の元服

四九七ノ五

○彭祖

四三八ノ二

○法然坊

二三一ノ四

○法然上人

七六六ノ三

○蓬萊宮

四三五ノ五

○本田の次郎親經

六九三ノ二

○堀の藤次親家

六波羅に馳せ上る

二二九ノ五

勸修坊を遇す

二三二ノ二

靜召捕の使者

二四三ノ四

御前へ遁れ入る

七〇八ノ四

義經へ使者

一〇五ノ四

曾我兄弟斬首の役

四六九ノ一

マ

○將門

四七〇ノ二

○正盛

一六二ノ八

○増居の十道

三四四ノ三

ヒ

○比叡山の始

五九ノ二〇

○毗首羯磨

六三ノ二二

○備前の平四郎

土佐坊と戦ふ

一三三ノ二

吉野の評議

一七〇ノ九

自害

三四四ノ三

○常陸坊

小溝太郎と戦ふ

一五四ノ二

吉野の評議

一七〇ノ三

落ち失す

三四一ノ六

○費長房

四〇二ノ二

○ひづめの五郎

三三三ノ一〇

○秀衡

義經を迎ふ

四三ノ二

同

三四ノ二

佐藤二子の元服

三八ノ八

病死、遺言

三三ノ一

○飛天外道

五七ノ二

○姫斬

六四ノ五

○貧女の一燈

七五ノ五

○鶴鳥越

一二ノ六

○平塚の宿

五四ノ二

フ

○武悪大夫

六四ノ四

○風習(男の十五より内に設けたる子をば嫡子には立

てぬ事なり)

三七ノ二

○深見草

六六ノ七

○富士の卷狩

六七ノ三

○伏見大納言實基卿

五三ノ二

○藤原の利仁

四七ノ一〇

○佛教佛説

生死の根源

七二ノ二

悟と迷

六三ノ三

○ぶつしやうこく

六〇ノ七

○船越の八郎

七三ノ六

○船の始め

六五ノ八

○ふみやう王

六二ノ二

○ふん女

五四ノ一

○富樓那の辯

六九ノ三

○布留の社

四四ノ一

ヘ

○平權の頭

三〇四ノ二

○平宰相信業

五二ノ三

○平泉寺

二九四ノ二

○別當の次郎

七五ノ三

○辨慶

○ねんいち

二九七ノ二〇

○念じゆの關

三五ノ二一

○信成

六九ノ二四

○信賴

三七ノ七

ハ

○伯仲

四九三ノ三

○莫耶

四九二ノ三

○伯陽

四三四ノ五

○箱王(曾我五郎參照)

父の死、母の訓言

四〇九ノ一四

雁を見て亡父を戀ふ

四五ノ二

母の意見

四五六ノ二三

頼朝に召さる

四六二ノ四

斬られんとす

四六八ノ八

箱根の悲歎

四八三ノ一

祐經を討たんとす

四八七ノ一

十郎と謀る

四九五ノ五

○箱根山

六三九ノ一

○箱根の別當

六三四ノ三

祐親に意見

三六四ノ三

伊東調伏

三六五ノ一〇

曾我兄弟の訣別

六三九ノ八

曾我の追福

七三二ノ二一

虎と母との來訪

七四四ノ八

曾我兄弟の追善

七四九ノ一

○波止土渡

六〇〇ノ四

○畠山

奥州征討

三五四ノ六

八幡殿の笛の役

二六二ノ三

○畠山重忠

忠諫

二四ノ六

都攻め

一三八ノ九

頼朝を攻む

四四三ノ八

曾我兄弟の命請ひ

四七三ノ六

曾我兄弟に對する好意

五二七ノ五

曾我兄弟に贈歌

六六三ノ九

曾我への好意

七〇〇ノ五

頼朝の前に伊豆次郎を

難す

七二六ノ二一

○畠山の六郎重保

六四九ノ五

○八劍大明神

四二六ノ四

○八幡大菩薩

四五〇ノ三

○初音(鼓)

一六二ノ七

○斑足王

六一二ノ九

○范蠡

五五三ノ四

○はらない國

一九六ノ四

○原の小次郎

七〇三ノ三

○はらう權の守

三〇九ノ二一

○土佐坊

義經の討伐

一一八ノ一

生捕らる、最後

一三七ノ八

○土肥次郎

宴席の評議

三八九ノ一

祐重を悼む

四〇八ノ二

○土肥の杉山

九八ノ四

○土肥彌太郎遠平

三七六ノ二

○友斬

六四二ノ一〇

○ともとしの冠者

三三五ノ一〇

○朝長

二ノ三

○虎

十郎の戀

五二ノ六

其素性、曾我の住ひ

五〇ノ二〇

十郎へ思さし

五八六ノ二

義盛の席に出です

五八〇ノ二

惜別

五九一ノ七

山彦山に十郎と別る

五九八ノ一四

曾我の母を訪ふ

七三九ノ五

箱根に上る

七四三ノ二

出家

七五九ノ一

井出の館の跡を見る

七六〇ノ二

手越の少將を訪ふ

七六三ノ二

高麗寺の山奥に籠る

七六六ノ六

曾我母の來訪、法話

七六八ノ八

曾我兄弟の夢

七六九ノ二

往生

七七七ノ二

ナ

○直江の次郎

三〇九ノ九

○長崎大夫

三四〇ノ二

○長崎の次郎

三四四ノ二〇

○長盛

一五六ノ二

○泣不動の由來

六三三ノ一

○那須野

五三六ノ一

○なん闕

一四ノ八

○業平

三六〇ノ九

ニ

○錦戸

三三四ノ三

同

三三五ノ九

○錦戸の太郎頼衡

三七七ノ一〇

○新田三郎

五二七ノ三

○新田四郎忠常

六五七ノ七

○新田の四郎

七〇六ノ二

○二宮太郎

六三五ノ二

○二宮の姉

七六七ノ五

○日本三番の貝

三九一ノ五

○如意の城

三四〇ノ一

ネ

チ

- 智興大師
- 地神五代
- 千葉介常胤
- 治部の君
- 治部の法眼
- 中院谷

ツ

- 次信
- 月見殿
- 筑紫のなかだ
- つゝら井
- 敦賀の兵衛
- 劍羽

三三七ノ九
三五七ノ三
四七三ノ一
二六八ノ二〇
一六七ノ二三
一六九ノ一四
一七三ノ七
三五五ノ五
七三六ノ一
一八〇ノ二
二八六ノ一
五五一ノ四

テ

- 程嬰
- 手越の少將
- 祐經の酒宴
- 虎の來訪
- 出家
- 高麗寺の山奥に籠る
- 曾我の母へ法話
- 曾我兄弟の夢
- 往生
- 豐島の冠者
- 鐵圍山
- 天神七代
- てる日の太郎

ト

三八〇ノ八
六六六ノ八
七六三ノ二
七六四ノ二一
七六六ノ六
七三二ノ二
七三六ノ三
七七二ノ二
一五二ノ六
五三九ノ二
三五七ノ二
三四二ノ八

- 藤九郎盛長
- 賴朝の戀の仲介
- 夢想
- 東光房の阿闍梨
- 團三郎〔ダウザアラウ〕
- 虎を送る
- 曾我への使者
- 出家
- だうそ神
- とうよう夫人
- 富樫の介
- 砥上が原
- 屠岸賈
- 時武
- 常磐
- 毒蛇
- 土佐の太郎

四三三ノ八
四三三ノ二
六ノ二
五九八ノ六
六八二ノ八
七三六ノ六
四三三ノ三
四九一ノ二〇
三〇三ノ八
五二一ノ一
三八四ノ一
七〇四ノ八
三二一ノ四
六四一ノ一四
一三五ノ六

館廻り

六五ノ八

祐經の宴席

六六ノ八

曾我への文

六八ノ二

敵討の出立ち

六八ノ四

館々の咎め

六八ノ三

祐經を討つ

六九ノ九

名乗りを上げ

六九ノ二

最期

七〇ノ四

○曾我太郎祐信(祐信を見よ)

○曾我の母

愁歎

七二ノ七

大磯の虎と物語

七三ノ九

箱根に上る

七三ノ二

虎を訪ふ

七六ノ五

往生

七六ノ八

○曾我ばやし

六三ノ一四

○そのあま

二四ノ二

タ

○大宰証

五五ノ一三

○泰山府君の祭

四九ノ五

○帝釋

五三ノ一〇

同

七四ノ一四

○大東寺

二ノ一〇

○大辨財天

五七ノ一〇

○大物の浦

一五ノ一

○大樂平馬之助

七〇ノ五

○高館

三二ノ一

○瀧口

熊を射る

三八ノ九

角觚

三九ノ六

○啄木のしらべの鼓

一六ノ五

○竹の下の子八

三九ノ七

○但馬の阿闍梨

二三ノ六

○忠信

先駈敵將を射る

一五ノ二

吉野に止る

一七ノ三

吉野の奮戦

一八ノ一

都に忍ぶ

二〇ノ一

かやの變心

二二ノ二〇

六波羅勢の來襲

二四ノ二

六條堀川の最期

二六ノ二

○橘の由來

四九ノ二

○たちばな餅

二〇ノ六

○玉造むろの里

二八ノ四

○湛海坊

義經を討たんとす

五四ノ八

義經に討たる

六三ノ九

○田村の帝

三五ノ六

○大夫種

五五ノ一〇

小次郎を討たんとす

五〇七ノ四

義村を射んとす

五七〇ノ二

浅間の狩に敵を討たんとす

五三五ノ五

とす

五三九ノ九

最後の決心

五四五ノ八

景季を避く

五四七ノ九

化粧坂の遊君

五八七ノ七

宴席に兄を護る

五九〇ノ四

義盛の宴席に加はる

六〇五ノ四

千草の花見

六〇八ノ七

母に小袖を乞ふ

六二六ノ六

母の宥免

六三二ノ一

辭世、母との訣別

六三三ノ六

鞠子川にて十郎に意見

六四〇ノ二

箱根別當に訣別

六六〇ノ九

景季の奸を譏る

六六一ノ六

祐經を射損す

六六一ノ六

和田に訣別

六七〇ノ二〇

曾我への文

六八二ノ二

敵討の出立ち

六八六ノ二

館々の告め

六八七ノ三

祐經を討つ

六九四ノ九

名乗りを上げ

六九七ノ二

十郎の落ちんとするを

七〇〇ノ二

意見

七〇七ノ二

兄の屍にとりつき悲歎

七二〇ノ二

搦めらる

七二三ノ三

頼朝に召され申開き

七三三ノ三

實光と太刀の論

七三六ノ六

斬らる

七三六ノ一

○曾我十郎祐成（一萬參照）

元服

四八二ノ三

箱王と謀る

四九五ノ二

時政に箱王の元服を請ふ

四九七ノ六

京の小次郎に謀を明す

五〇六ノ四

小次郎の密告、母の意見

五〇八ノ二

見

虎に通ふ

五二二ノ七

土肥の女と通ず

五三三ノ一〇

かたかひの悶着

五三八ノ一

虎を曾我に連れ歸る

五三三ノ四

最後の決心

五三九ノ二

虎の詞を立聞く

五六二ノ一

三浦黨と闘はんとす

五八二ノ一

惜別

五九二ノ八

山彦山に虎と別る

五九七ノ六

千草の花見

六〇五ノ四

母の小袖を賜はる

六〇七ノ八

母に五郎の赦免を乞ふ

六二四ノ一

辭世、母との訣別

六二〇ノ一三

祐經を射損す

六六一ノ四

○白鬘の大明神

六〇一ノ五

○次郎貝

三九一ノ四

ス

○祐清(伊東九郎を見よ)

○祐親(伊東次郎を見よ)

○祐經

静へ使者、其妻女

八幡殿の鼓打

都の出仕

所領争

申狀

告訴、失意

任左衛門尉

曾我兄弟を讒訴

箱王に刀を與ふ

狩場に難を通る

二五三ノ一〇

二六〇ノ六

三七一ノ七

三七二ノ二

三七三ノ九

三七五ノ一三

四五二ノ七

四五八ノ九

四八八ノ二

六六一ノ三

酒宴、曾我十郎に辯解

六六六ノ六

館をかふ

六九二ノ三

曾我兄弟に討たる

六九四ノ九

○祐信

河津の妻子を迎ふ

四一四ノ八

景季來使

四五九ノ九

曾我兄弟を連れ鎌倉着

四六四ノ二

曾我兄弟の介錯

四六九ノ一

曾我兄弟を連れ歸邸

四七九ノ二

愁歎

七三二ノ八

○角軀

三九二ノ四

○駿河の次郎

三三六ノ一

セ

○西施

五六一ノ一〇

○西塔の武藏坊(辨慶参照)

七七ノ三

○晴明

六二七ノ一

○清和天皇

三六一ノ九

○せきそ

四三七ノ七

○石竹の傳説

六三六ノ九

○關戸の宿

五三六ノ六

○關屋

二ノ一〇

○石淋

五六〇ノ三

○せんふ仙人

四七八ノ二

○千鶴御前

四三三ノ五

○せんのはら

一九六ノ八

ソ

○僧正が谷

一一ノ二

○巢父

五四八ノ二〇

○早離速離

七五一ノ八

○曾我五郎時致(箱王参照)

元服

五〇〇ノ二

母の勘當

五〇一ノ二

○靜

義經の急を救ふ

二七ノ一

都落ちの供

一四〇ノ九

義經と訣別

一六〇ノ二〇

吉野に迷ふ

一六四ノ一

妊娠、鎌倉下向

二四一ノ五

男子出生

二四六ノ八

八幡宮の舞

二六三ノ六

出家、死

二六五ノ二

○しどろの源七

五二ノ一〇

○信濃坊かいふん

辨慶に戯る

七九ノ五

辨慶に苦しめらる

八三ノ一四

所刑

八八ノ二

○しばう

四七ノ六

○新開の荒四郎

曾我兄弟に駈向ふ

七四ノ二二

曾我の太刀を譏る

七三ノ三

○新宮の十郎義盛

六ノ四

○神佛怪異

繪像の不動明王

六三ノ七

小龍雨を降らす

四四六ノ三

住吉明神の示現

一四九ノ一

曾我兄弟の怨靈

七五六ノ四

大刀の奇特

六四一ノ四

平家の悪靈

一四三ノ一

○神武天皇

三五七ノ四

○舍衛城

六二〇ノ九

○釋尊

五九九ノ二

○しやさう

三七ノ七

○遮那王(義經參照)

命名

一三ノ一

奥州下向を思ひ立つ

一八ノ六

鏡の宿に賊を討つ

二五ノ二

元服

三二ノ三

○十禪寺

二〇ノ二

○周の文王

四四五ノ四

○十六卷の書

四七ノ五

○須彌山

五三八ノ二

○しやうかい禪師

六ノ二

○證空阿闍梨

六八六ノ四

○しやうかう殿

四一七ノ五

○淨藏淨眼

七五二ノ八

○少輔の御料

三七ノ二〇

○しやうめつ婆羅門

六二〇ノ二

○せうめいくわう神宮

七五七ノ六

○正門坊

九ノ二

○杵臼

三八ノ八

○書寫山

七八ノ一

○白絲の瀧

一九八ノ二四

○しらない國

一九六ノ四

を破る理はなし

四七八ノ八

夏竹は生ひ出づれば直な

り梅檀は嫩葉より香ば

四八八ノ一

良薬は口に苦くして而も

病に利あり忠言は耳に

逆ひて而も行を利せり

○小早河の合戦

五〇四ノ七

○小町

九八ノ四

○小溝の太郎

二八八ノ四

○金王殿

一五三ノ二四

○權操僧正

二九三ノ二〇

○毘陽野の太郎

四六六ノ一

○五郎丸

八八ノ三

卷狩の出立ち

六四七ノ八

五郎を捕ふ

七〇九ノ一

○衣河

三三五ノ二四

サ

○在五中將業平

五三四ノ五

○さいの神

四三三ノ三

○さいばう

二四三ノ二

○藏王權現

一六五ノ八

○境の冠者

一四〇ノ二

○坂上田村丸

四七〇ノ九

○前の少將後少將

七五二ノ九

○櫻谷

一九四ノ二

○櫻本の僧正

七四〇ノ六

○酒(みきの傳説)

四三七ノ四

○貞任

一六〇ノ七

○佐藤三郎義信

三三八ノ九

○佐藤四郎義忠

三三八ノ九

○實房

三六〇ノ八

○さば(散飯)の由來

七四七ノ六

○佐原の十郎

二二九ノ二

勸修坊を遇す

二五八ノ七

八幡宮の舞殿急造

二五八ノ七

○左馬の九郎義經(義經を見

よ)

○三王の三塚

三三ノ二

○三條小鍛冶

四九四ノ九

○三條小鍛冶

三四九ノ四

シ

○しきたい(腹巻)

一一ノ一〇

○重家

三三九ノ九

高館に至る

三三九ノ九

衣川の最後

三四二ノ八

○しげみが谷

二〇六ノ一四

○四條の聖人

九ノ二

○しやう

五四九ノ七

○志太三郎先生義憲

四四二ノ一四

親は一世の契主は三世の

契

會稽の恥を雪む

風になびく刈萱男に従ふ

女

金を試みるは火なり人を

試みるは酒なり

壁に耳石に口

神は正直の頭にやどり給

ふ

勸學院の雀

兄弟は後生までの契

孔子のさばれ

吳藍は園生に植ゑてもか

くれなし

毛を吹きて疵を求む

賢人二君に仕へず貞女兩

二三七ノ四

五六七ノ四

二八〇ノ七

五〇七ノ六

二七九ノ三

一六七ノ三

六二七ノ二

二三七ノ五

二〇二ノ五

二四ノ一

二三四ノ二

夫に見えず

下郎の口きゝたるは反つ

て身を食む

師弟は三世の契

侍のことばは綸言にも同

じなほし汗の如し

新酒百薬の長

神明は正直の頭にやどり

給ふ

順風に帆をあげ

大慈大悲の誓願には枯れ

たる草木にも花咲き實

のなる

橘はいほくに生じて枳殼

となる

長者の萬燈より貧女の一

燈

五四九ノ五

二八九ノ二

二三五ノ四

三三九ノ三

四三八ノ二〇

三六四ノ二二

二五ノ一

四六四ノ一

五〇六ノ二

七五ノ六

貞女兩夫に見えず

天に口なし人を以つてい

はせよ

同

天の興を取らざるは却つ

て科を得る

毒藥變じて藥となる

情は人のためならず

盜する子は憎からで繩つ

くる者を恨む

能は稽古による

貧は諸道の妨

富貴にして善をなし易く

貧賤にして功をなし難

し

よこがみを破る

理を破る法はあれども法

五五一ノ五

二二〇ノ八

二七八ノ二〇

四〇五ノ二

四三八ノ六

五三ノ三

六〇九ノ八

四五四ノ二〇

五四七ノ二四

三七五ノ二二

二二四ノ三

○木曾義平

四四三ノ一

○吉次信高

牛若を誘ふ

一三ノ五

長者の家に宿る

二三ノ二

秀衡の恩賞

四六ノ四

○吉川三郎

三九ノ五

○貴船の明神

一一ノ三

○京の君

二六八ノ九

○京の小次郎

曾我兄弟の謀に同ぜず

五〇五ノ一〇

最期

七三六ノ九

○きよはく

五七四ノ一〇

○清盛

三ノ四

同

四四二ノ二

ク

○菫美入道寂心

三六三ノ四

○菫美の工藤祐經（祐經參

照）

三七〇ノ一四

○工藤一郎（同前）

三七二ノ二

○工藤左衛門祐經（同前）

四五八ノ九

○工藤大夫祐隆

三六三ノ五

○工藤武者祐繼

三六三ノ七

○鞍馬

七ノ六

ケ

○けいしやう

四四四ノ五

○源氏の系譜

三六一ノ二四

○玄宗皇帝

四二五ノ二

○源平の兩氏

三五八ノ一

○化粧阪の麗の遊君

五四七ノ二

コ

○吳王夫差

五五三ノ一

○孝元寺

五六八ノ二

○幸壽の前

五一ノ一〇

○上野の判官

一五一ノ六

○甲の聲、乙の聲

九五ノ八

○かうふ山

一九六ノ五

○閻魔

五五三ノ一

○かうりよく

六二五ノ一

○腰越

一一ノ六

○腰越狀

一一五ノ六

○小柴の入道

二〇九ノ七

○伍子胥

五五三ノ一

○御所の黒矢五

七〇三ノ四

○姑蘇臺

五六三ノ九

○後藤内範明

一七ノ三

○諺

憐み胸をも焼く

五一ノ七

親の心を子知らず

三七ノ八

○兼房

義經都落の御伴

二七五ノ四

義經北の方御産の心痛

三〇〇ノ一〇

義經北の方及若君の死

三五〇ノ八

衣川の奮戦

三四二ノ四

最期

三五二ノ二

○蒲の御曹子

二ノ五

○兜の龍頭の始め

五七二ノ一〇

○鎌倉の權五郎景政

一七二ノ〇

○鎌田の三郎正近

八ノ八

○勸修坊

義經を遇す

二三三ノ八

關東に下る

二二九ノ二

頼朝と對面

二五五ノ三

○菅丞相

七五六ノ二

○漢の高祖

四三五ノ四

○漢の明帝

四三七ノ五

○かんばく

五四九ノ七

○監物太郎

三ノ三

○龜(しやうめつ婆羅門の話)六二〇ノ九

○龜井の六郎

一三三ノ二

土佐坊と戦ふ

三四三ノ六

衣川の最期

三三三ノ九

○龜鶴殿

三〇〇ノ九

○龜割山

二〇九ノ八

○かや

五三〇ノ七

○苜谷の宿

一八〇ノ三

○川くら法師

一一四ノ一

○川越の太郎

五六八ノ六

○蛙の歌

三七八ノ二四

○河津三郎祐重

三九八ノ七

列卒を催す

四〇四ノ七

角觥

四〇四ノ七

討たる

キ

○鬼一法眼

四八ノ五

○菊水

四三八ノ二

○菊多の關

一四ノ八

○菊池の次郎

一三九ノ二

○きくわく

三八ノ九

○喜三太

一二七ノ三

土佐坊と戦ふ

二六九ノ二

強力に出立つ

三四一ノ四

衣川の奮戦

三四七ノ五

最後

二ノ八

○岸の岡

一五六ノ三

同

○紀信

七二六ノ六

○鬼子母

七四五ノ二

○木瀬川の龜鶴

六六六ノ九

○岡部の三郎

七〇二ノ四

○笠井の六郎清重

六四七ノ一

鹿の爭

六四九ノ一

○小川の三郎祐定

七三ノ四

○迦葉尊者

五九ノ二

詠歌の恩賞

六五九ノ九

○奥野

三八ノ四

同

七四六ノ一

重忠の歌をいぶかる

六六四ノ四

○鬼王

六八二ノ八

○柏ヶ峠

三八九ノ一

和田の言葉を聞答む

六七八ノ二

○鬼若(辨慶の幼時)

七四ノ二

○かたかひ

五七ノ八

○梶原景時

一一ノ六

○小野の宮

三六ノ八

○片岡の八郎

謔言

一一ノ六

○女(佛説上の女)

七三ノ二

土佐坊と戦ふ

一三ノ二

靜を召捕の議

二四一ノ一〇

○御房

四三ノ八

大風に帆柱に上る

一四六ノ二

靜を預らんの議

二四五ノ二

カ、クワ

敵船を射る

一五二ノ二

靜に舞を勧む

二五二ノ一〇

直江津に船を求む

三三ノ二

八幡殿の鐘の役

二六〇ノ二

○鏡の宿

二四ノ五

衣川の自刃

三四五ノ九

泰衡を賤かし義經を討た

三六ノ六

○柿本の紀僧正眞濟

三五ノ四

○梶原景季

しめの議

四七〇ノ六

○覺日坊の律師

七ノ一〇

曾我兄弟召捕の使者

四五九ノ五

曾我兄弟の命請ひ

二二ノ五

同

一二ノ二

曾我兄弟の命請ひ

四六五ノ九

○梶原景久

三六ノ二

○景延

四三ノ一〇

曾我兄弟を咎む

五三九ノ一

○桂の親王

七三ノ五

○賴朝に仕ふ

四三六ノ二

三原の詠

五三ノ四

○加藤の彌太郎

三六ノ二

○夢合せ

四三六ノ二

化粧阪の遊君

五七ノ三

○金石

三六ノ二

正門坊の謀叛教唆

剃髪を拒む

○碓氷の峠

○白杵の八郎

○宇田の小四郎

○宇治の橋姫

○宇都宮彌三郎朝綱

曾我兄弟の命請ひ

宇都宮の狩

○優填王

○うんしやうれう

○海野小太郎行氏

エ、エ

○穎川

○江田の源三

土佐坊の下人を嫌す

一〇ノ四

一二ノ六

五八ノ三

七〇三ノ一〇

七〇三ノ九

六四二ノ一

四七二ノ二

五三六ノ一

六〇三ノ二

六二五ノ七

七〇三ノ七

最後

○越王勾踐

○江戸の太郎

○海老名の源八

○江間の小四郎

かやの密告

忠信と戦ふ

勸修坊を遇す

討たる

○燕國の王猛火の雨乞

○慧亮和尚

オ、ヲ

○大内三郎

○大藏太夫光任

○奥州丸

○王昭君

一三ノ三

五五三ノ二

一〇一ノ二

三九〇ノ二四

二二四ノ六

二二八ノ三

二三〇ノ三

四四九ノ二

六五二ノ二

三五九ノ五

三六二ノ四

一七〇ノ二

七三ノ二〇

四四ノ六

○王麗與

○大津次郎

○往藤内

祐經の宴席

祐經に意見

討たる

○大野の湊

○大庭三郎景親

○大庭平太景信

頼朝を慰む

宴席の評議

○大見の小藤太

祐經の依頼

伊東を狙ふ

河津三郎を討つ

討たる

○緒方の三郎維義

五五六ノ六

二七九ノ二

六六八ノ二

六七二ノ一

六九五ノ二

三〇四ノ四

四四三ノ六

三七七ノ六

三八九ノ二

三七六ノ七

三七九ノ二

四〇四ノ三

四一六ノ二

一三九ノ二

八幡殿の舞

二五九ノ四

○鼯鼠の不思議

四二六ノ一〇

○一法師丸

七二ノ五

○一萬(曾我十郎參照)

父の死、母の訓言

四〇九ノ一四

亡父を墓ふ

四二一ノ八

雁を見て亡父を戀ふ

四五三ノ二

母の意見

四五六ノ一三

頼朝に召さる

四六二ノ三

斬られんとす

四六八ノ一〇

○一卷の書

四七ノ七

○伊豆次郎祐兼

五郎請取り

七五ノ八

流罪、死

七二ノ二

○和泉

一二ノ三

○泉の冠者

三三ノ九

○出雲路の神

四三四ノ五

○伊東九郎祐清

大見八幡を打つ

四一五ノ三

父の計を頼朝に密告す

四二六ノ八

上洛、戦死

四四八ノ二

○伊東次郎祐親

所領の争

三六三ノ八

金石を引受く

三六七ノ五

奉行所買収

三七三ノ三

防戦の用意

三七五ノ一〇

祐重を悼む

四〇五ノ九

出家

四二一ノ六

河津の妻に再婚を勧む

四一三ノ二

千鶴を柴濱にす

四三三ノ六

斬らる

四四五ノ八

○伊東の禪師

七三ノ六

○伊東武者

三六六ノ七

○犬房

十郎を見咎む

六六六ノ六

五郎の顔を打つ

七三三ノ四

○井上左衛門

荒乳山の關

二八六ノ一

義經を遇す

三〇〇ノ二

○いほうの五郎盛直

一三五ノ二四

○今の劍

三四九ノ四

○いや桶の頭

三九ノ四

○入間川

五二六ノ一三

ウ

○有爲の都

六三九ノ三

○浮島が原

頼朝義經の對面

一〇五ノ一

その由來

六四五ノ五

○牛若(義經參照)

其頓悟

六ノ五

義經記・曾我物語索引

（語句は發音に従つて五十音順に排列し其假名遣に拘泥せず）

ア

○愛甲の三郎	七〇二ノ九
○あいのいけ	三〇一ノ一四
○青墓の宿	三〇ノ五
○あがりの松	三〇二ノ一
○惡源太義平	二ノ一
○惡七兵衛景清	三ノ三
○朝妻	五三七ノ六
○朝日御前	四二九ノ八
○朝比奈義秀	五八二ノ三
虎の迎へ	五八九ノ六
五郎の草摺を切る	六四五ノ六
○愛鷹山	

○阿闍世王
○阿修羅王
同

○安宅のわたり
○安達の新三郎
○安達 of 四郎清忠
○あつかしゑ（地名）

○熱田の明神
○阿難尊者
○あれはの松
○阿野の禪師
○相澤彌五郎
○安西の彌七郎
○安樂寺

七五四ノ五
五三八ノ一〇
七四七ノ一四

三〇一ノ一四

二四七ノ三

三七七ノ二

一六ノ八

四二六ノ五

六〇三ノ三

二八八ノ八

三三ノ七

三九二ノ六

七〇三ノ二

八ノ二

○荒乳の山の傳説

イ、イ

○いわう禪師
○池の尼
○伊勢のかんひら義連
○伊勢の三郎

其素性

義經に従ひ奥州に下る

土佐坊と戦ふ

吉野の評議

自害

○磯の禪師

鎌倉に下る

二八三ノ二

一九八ノ五

一〇七ノ二

四二ノ二

四三ノ八

九八ノ一

一三三ノ一

一七〇ノ二

三四四ノ五

二四三ノ二〇

を並べ膝を組み、端座合掌して、念佛百遍稱へて、一心不亂にして、音樂雲に聞え、異香薫じて、聖衆來迎し給ひて、眠るが如く往生の素懷を遂けにけり。高きも卑しきも、老少不定の世の習ひ、誰か無常を遁るべき。富も寶も、遂には夢の中の樂なり、殊に女人は罪深き事なれば、念佛に過ぎたる事あるべからず。かやうの物語見聞かん人々は、狂言綺語の縁により、あしき心を翻へし、誠の道に赴き、菩提を求むる便となるべし。其の心無からん人は、かゝる事を聞きても何にかはせん。よくく耳に留め心にそめて、亡き世の苦惱を遁れ、西方淨土に生るべきものなり。

三明一第一に宿命明とて宿世の事に通達する智慧第二に天眼明とて未來世の事に通達する智慧第三に漏盡明とて現在の苦を知つて一切の煩惱を斷盡する智慧

けるは、五ちうの闇晴れ、三明の月朗にまします、大聖釋尊さへ、耶輸陀羅女の別を思し召す、況や我等此の年月戀しと思ふ處に、目前に兄弟を夢に見て、昔戀しくなりぬ。されば夜の猿は傾く月に叫び、秋の虫は枯れ行く草に悲むとかや。鳥獸までも哀別離苦を悲むと見えたり。然れば此の道は、迷ひなば共に惡道の輪廻斷ち去り難し。悟りなば皆正等菩提の因縁なりぬべし。偕老同穴の契誠に顯はれ、九品蓮臺の上にては、もとの契を失はず、一蓮に座を並べ、解脱の袂を絞るべし」とて、少將も共に涙をぞ流しける。さて彼の二人の尼、志淺からずして、虎が嶺に上りて花を摘めば、少將は谷に下りて水を掬び、一人花を供ふれば、一人は香を供じ、俱に一佛淨土の縁を結ぶ。谷の水峯の嵐發心の媒となり、花の色鳥の聲自ら觀念の便となる。つくづく思へば萬物轉變の理、しさうをんるの習、三界より下界に至るまで、一つとして遁るべき様なし。日月天に廻りて、有爲を旦暮に顯はし、寒暑時を違へず、無常を晝夜に盡す。されば漢の高祖の三尺の劍も、遂に他の寶となり、秦の始皇の玻璃の都も、おのづから荆棘の野邊となる。彼を思ひ是を見るにも、唯偏に浮世を通れ、誠の道に入るべきものをや。かよりし程に二人の尼、行業積り七旬の齡たけ、五月の末つ方少病少惱にして、西に向ひ肩

をおさへていひけるは、「今の法門聽聞申し候へば、信心肝に銘じ有難く候ふ。今より後は方々の御弟子にて候ふべし」とて、三度伏し拜まれけり。有難かりし事どもなり。

十 母と二宮行き別れし事

初夜一夜を
初中後の三
時に分つ初
夜は八時頃

さる程に日もやうく傾きて、高麗寺の入相も聞ゆれば、餘波盡きせず思へども、各立ち出でて二宮の里へとてこそ歸りけれ。虎少將は門送して後の隠るゝ程見おくり、涙と共に庵室に歸り、初夜の禮讃はじめて、念佛心細くぞ申しける。其の後人々の行方を聞けば、各宿所に歸り、聞きつる法門の如く、造次顚沛一心不亂に念佛す。昔は夫婦偕老の別を慕ひ、今は兄弟のかく成り行く事の思ひや積りけん、老病といひ歎といひ、六十の暮方に念佛申して、遂に往生しけるとぞ聞えける。さて二人の尼御前或夜の夢に、十郎五郎打ち連來り、頭には玉の冠を着、身には瓔珞を飾り、光明赫奕として、各を伏し拜み申しけるは、「此の間念佛申し經を續み、懇に弔ひ給ふ故に、兜率の内院に參る。これ然しながら、夫婦偕老の契深きによつて、無爲眞實の解脱の因となる、其の恩德は億々萬劫にも報じ難し」とて虚空へ飛び去りぬ。虎夢覺めて、只現の心地して思ひ

字十方三世佛、彌字一切諸菩薩、陀字八萬諸聖經といふ時は、八萬經法諸佛菩薩も、名號は廣大の功德となれり。されば天台には法報應の三身、空假中の三諦なりと釋しましまし候ふ。森羅萬象せんが大ぢ、彌陀に漏れたる事なし。是によつて只専ら彌陀を以つて法門の主とすと釋し給へり。じやうゑの行には威徳たり、大りそくぜんしやう功德と説き、ほふゑの行には、一萬三千佛を、高さ十丈に、黄金を以つて十度作り供養せんよりも、一遍の名號は勝れたりといへり。善智識の教を深く信じて、南無阿彌陀佛くと、唱ふれば、三祇百大劫の修行をも超え、塵沙無明の惑をも斷ぜず。致使凡夫念即生、不斷煩惱得涅槃とて、終焉の時は一さんの心を變化して、觀音勢至無數の聖衆、化佛菩薩踴躍歡喜して、須臾の間に無爲の報土へ參りなば、無邊の菩薩を同學とし正覺の如來を師とし寶地に遊び樹下に往きて、鸚鵡、舍利、迦陵頻伽の聲を聞き、空無常無我的四德波羅密の悟を開き給ひなば、過去のをんしよ世々の父母、妻子眷屬有縁の衆生を導かん爲に、とうねん猛火の焰に交り給ひ、紅蓮大紅蓮の氷に入り給ふとも、解脱の袂は安樂として、濟度利生し給ふべし。但し往生の定不定は信心の有無によるべし。ゆめく疑ふ事勿れ、と宣ふを、われくは聽聞申して候ふ」と申しければ、母感涙

八葉の嶺―
靈山を蓮花
の八葉に比
していふ

内典外典―
佛經と漢籍

障の闇照す事なし。高野山は嵯峨の天皇の御宇、弘法大師の地をしめし、八葉の嶺八つ
の谷、れい／＼として水潔しといへども、三從の垢を濯がず。其の他金峯山の雲の上、
醍醐三井寺霞の底深し。白山書寫の寺、斯様の所々には女人近づく事もなし。されば或
經の文には、三世の諸佛の眼は大地に落ちて朽つるとも、女人成佛する事なし、といへ
り。又或經の文には、女人は地獄の使なり、能く佛の種を斷つ。外の面は菩薩に似たれ
ども、内の心は夜叉の如し、といへり。されば内典外典に嫌はれたる處に、彌陀如來こ
そ、極重惡人無他方便と誓ひて、別に又女人成佛の願を起し給ふ。か程に懇に憐み給
ふ事を、信ぜず行ぜずして、又三途に歸らん事、喻へば耆婆が萬病を癒す藥に、種々の
藥をなんりやう合せりとは知らざれども、服すれば則ち癒ゆ。病癒めて重き者の、藥
許にてはと疑ひて服せずば、耆婆が術も扁鵲が醫方も益あるべからず。其の如く煩惱惡
業は極めて重し。此の名號にてはいかゞと疑ひて、信ぜず行ぜざらんは、彌陀の本願も
釋迦の説法も空しかるべし。抑藥を得て服せずして死せん事、崑崙山に行きて玉を取
らずして歸り、旃檀の林に入りて梢をまたずしてはてなば、後悔するとも由なし。其の
上五劫思惟、兆載永劫の萬善萬行、諸波羅密の功德を、三字にをさめ給へり。されば阿

畜生三がい
—三がい
残害か
泥梨—梵語
奈落到同じ
地獄のこと

三密—身密
語密意密と
て手に印相
を結び口に
陀羅尼を唱
へ意に大日
如來を念ず
ること

迷ひ出でて、三界六道に生れ、衆生とはなれり。されば地獄の八寒八熱の苦、餓鬼の饑饉の愁、畜生三がいの思、其の外天上の五衰人間の八苦、一つとして受けずといふ事なく、上は有頂天を限り、下は泥梨を極として、出づる事はなきが故に、流轉の衆生とは申すなり。然りと雖も宿善や催しけん、今人間に生れぬ。内に本有の佛性あり、外に諸佛の悲願あり。人木石に非ず、發心せばなどか成佛得脱なからん。それにつきて修行區々なりと雖も、我等如きの衆生は、諸經の德に叶ひ難し。先法然坊が如くは、七千餘卷の經藏に入りて、つらく出離の要機を案するに、顯につけ密につけ、開悟易からず。事といひ理といひ、修行じゆしがたし。一實圓融の窓の前には、卽是の妙觀に疲れ、三密道諦の床の上には、又現世のせうにう現し難し。然る間世の業をはかりて、淨土を願ひ他力を頼みて名號を稱ふ。誠に淨土の經文は、直指だうじやうのもくぞくなり。有智無智誰の人が歸せざらんや。既に正相早くくれて、戒定慧の三學は名のみ残りて、有經無人、有名無實也。殊に女人は五障三從とて、さはりある身なれば、卽身成佛は先おきぬ、問法結縁の爲に靈佛靈社に詣づるさへ、踏まざる靈地あり、拜せざる佛像あり。天台山は桓武の御願、傳教の御建立なり、一乘の峯高うして眞如の月朗なりと雖も、五

中の營いごみに心を懸かけ、再度三途みたとびの故郷こきやうに歸り、いかなる苦患くけんをか受け候はんずらん、とかねて悲かなしく候ふ。されば尊たつさき人にも逢あひ奉り、女人にょじんの得道さくどうすべき法門ほふもん聞かまほしく候へども、然るべき縁えんなければ、とかく過すぎ行き候ふ處に、今の念佛ねんぶつ申すとて、人なみく々に稱こたへ申せども、何と心を持ちも、いかやうなる趣おもむきにて往生わうじやうすべく候ふや。かつて思ひわけたる事も候はず。同じくは序ついでに委くはしく承り候はど、いか許はかり嬉うれしく候ひなん」とぞ言はれる。是偏ひとへに彼の者もの共の死したりける縁えんによつて、佛道ぶつどうにこよろざしけり。誠に彼の者死して親おやに思ひをかけよるとは雖も、佛道ぶつどうにも入りなば、一つの孝行かうぎやうにも成りなん、とぞ思おもはれける、有難ありがたくこそ覺えけれ。

九 少將法問の事

かくて母も二宮にのみやも、「佛道ぶつどうの趣おもむき委くはしく聞かまほしくこそ候へ」と申しければ、虎少將の方を見やり少し打ち笑わらひ、「姉御あねごは念佛ねんぶつの法門ほふもんども知らせ給ひて候へ。申して聞かせ参らせ給へ」と申しければ、「妾わらはも委くはしき事は知り参らせず候ふ。一年都ひとこにて、法然上人ほふねんしやうにんおほは仰せられしは、抑生死おほくしやうじの根源こんげんを尋ね候へば、只一念ただねんの妄執まうしゆにひかされて、由よしなく法性ほふしやうの都みやこを

三時―晨朝
日中、黄昏

の悲を翻へして、菩提の彼岸に至る事もや、と聖經の要文どもあらく尋ね求め、然るべき善智識にも逢ひ奉るか、と諸國を修行し都に上り、法然上人に逢ひ奉り、念佛一行をうけ、一筋に淨土を願ひ候ふなり。あの尼御前は、わが姉にてましまし候ふ。自らを羨みて同じく共に様を變へ、一つ庵に閉ぢ籠り行ひ候ふなり。今思ひ候へば、此の人は發心のたよりなりけりと嬉しく覺え候ふ。其の上妾不思議に、釋尊の遺弟に連りて、比丘尼の名を汚し、辱くも本願の稱名を頼み、三時に六根を清め、一心に生死を離れん事を願ひ候ふ。本願いかでか誤まり給ふべきかと、疑の心も候はず。五郎殿も同じ烟と消え給ひしかば、二人ともに成佛得脱と弔ひ奉らん爲に、二人の位牌を安置して候ふなり。諸法悉緣機とて、何事も縁にひかれ候ふなれば、二人共に順緣逆縁に、得道の縁とならん事疑あるべからず。凡分段輪廻の里に生れて、必ず自滅の恨を得、妄想如幻の家に來ては、遂に別離の悲あり。出づる息の入る息を待たぬ世の中に生れ、剩遇ひ難き佛教に遇ひながら、此の度空しく過ぐる事、寶の山に入り手を空しくするなるべし。あひかまへて佛道に御心をかけ、淨土へ參らん、と思し召すべきなり」と申しければ、母も二宮の姉も渴仰肝に銘じて、隨喜の涙を流して申しけるは、「世路に交はるならひ、世の

をさあい者
—幼者

天上の五衰
—天人も死
期ありて五
種の死相を
顯す、第一
衣染三塵埃
—第二花鬘萎
悴第三兩腋
汗出第四臭
氣入レ身第
五不レ樂二本
座

來りて候ふぞや。又親子恩愛の至つて切なる事、人の申しならはすをも、我が身の上かと思はれ候ふ。年月やうく過ぐれども、忘るゝ事も候はず。されば様を變へんと思ふも、をさあい者ども棄て難くて、思ひもきらず候ふ。是と申すも、志の至つて切ならざるかと、我が身ながらもうたてく覺え候ふ。御身もさして久しき契にてもましまさず、其の上所領持ちて便ある事ならねば、思出がましき事もなし。只偏に前世の宿業にひかれて、互に善智識になり給ひぬと、餘に尊く哀におほえて、妾までも一つ蓮の縁を結ばよやと思ひ候ふなり。凡人間の八苦、天上の五衰は、今に始めぬ事にて候へども、前業の拙き身なれば、無常の理にも驚かず、つれなく憂世にながらへ候ふ。我が身ながらもあさましく候ふ。然るに五障三從の身ながらも、幸に佛法流布の世に生れて、出離生死の道を求むべく候へども、女人の愚さはそれも叶はず候ふ。面々は此の程思ひとり給ふ事なれば、後生の助かるべき事をも知らせ給ひて候ふらん。あはれ語らせ給へかし。叶はぬまでも心にかけて見候はん」といひければ、虎涙を止めて申しけるは、「誠にこれまでの御入夢の心地して、御志あり難く思ひ候ふ。かゝる身となり果てぬるも、然しながら、十郎殿故と思ひ奉れば、時の間も忘るゝ事も侍らず。此の世は不定の境なれば、哀別離苦

阿彌陀の三尊——中央に阿彌陀佛、左右に觀音、勢至の二菩薩あり

らに現とも覺えず候ふ。先づ内へ入らせ給へ」とて、二間なる所を打ち拂ひ、「是へ」と請じ
いれつゝ、亡き人の母や姉ぞと見るよりも、流るゝ涙を抑へかねけり。母も姉も泣く泣
く、庵室の體を見廻せば、三間に造りたるを、二間をば持佛堂にこしらへ、阿彌陀の三
尊を東向に懸け奉り、淨土の三部經、往生要集の八軸の一乗妙典も、机の上に置かれた
り。又傍に古今、萬葉、伊勢物語、狂言綺語の草子どもちらされたり。佛の御前に六時
に花香あざやかに供へ、二人の位牌の前にも花香同じく供へたり。二宮の姉いひけるは、
「あら有難の御志の程や。これを忘るまじき事と思ひ給ひて、二人の位牌をたて弔ひ給ふ
事よ。偕老の契淺からずと申すも、今こそ思ひ知られて候へ。但し十郎殿許をこそ弔ひ
給ふべきに、五郎殿まで弔ひ給ふ事の有難さよ。妾は現在の兄弟にて候へども、是程ま
では思ひよらず。いづれも前世の宿執にて、善智識と成り給ひぬ」と、いひも果てず涙を
流しければ、母も少將も聲立つる許にぞ悲みける。やゝありて母いひけるは、「十郎が事
忘るゝ間も候はねば、常にも参り見奉りたく候ひしかども、心に任せぬ女の身なれば、人
の心をも憚るなどとせし程に、今までかゝる御住居をも見参らせず候ふ。彼の者共が七
年の追善、曾我にて取り營み、また御有様をも見参らせたく候うて、是なる女房を誘ひ

所こそ、彼の人の草庵にて候へ」と教へければ、嬉しくも分け入り見れば、誠に幽なる
 住居にて、垣には葛朝顔這ひかより、軒には垣衣交の忘草、露深くして、物思ふ袖に異
 らず。庭には蓬生ひ繁り、鹿の臥處かとぞ見えし。瓢箪しばく空しくして、草顔淵が
 巷に満ち、藜藿深く鎖して、雨原憲が樞を濕す、とも見えたり。誠に心細くて、人の住
 處とも見えざりけり。

八 虎出逢ひ呼び入れし事

諸も母や二宮の姉は、やゝ久しく彼方此方立ち廻り見ければ、中に幽なる聲にて、日中
 の禮參の勤もはてぬと思しくて、念佛忍びくくに心細く申しけるを聞きて、尊く覺え柴
 の編戸をほとくと叩き、「物申さん」といへば、虎「誰そ」と答ふるを見れば、未だ三十
 にもならざる者が、殊の外に瘠せ衰へ、いつしか老の姿に打ち見えて、濃き墨染の衣に
 同じ色の袈裟をかけ、菩提樹の珠數花の帽子とり具して、香の煙に染みかへり、かしこ
 くも行ひ入りたる其の姿、竹林の七賢、商山に入りし四皓も、是にはいかで勝るべきと
 羨しくぞ覺えける。此の人々を只一目見て、夢の心地して、「あら珍しの御渡候ふや。さ
 なりき

瓢箪云々―
 和漢朗詠、
 橘直幹の句
 瓢箪屢空、
 草滋三顔淵
 之巷、藜藿
 深鎖、雨濕三
 原憲之樞―
 原憲―顔淵
 と同じく孔
 子の弟子に
 して共に賢
 なりき

中品上生、
中品中生、
中品下生、
下品上生、
下品中生、
下品下生、

さても曾我の母御前は、一日片時も世に生存ふべき心地はなけれども、力及ばぬ憂世の
ならひとて、思はずに年月をぞ送りける。人の子の同じ齡なるを見ても、二人が面影身
に添ひて悲しく、人の病にて死ぬるをも、彼等がせめてかくあらば、取りあつかひし物
をともしふべきに、かりそめに立ち出でて、再度歸らぬ別こそ、神ならぬ身のつらさな
れ。餘の戀しさの折々は、常に二宮の姉を呼び、憂き事どもを語り合ひて、泣くより外
の事はなし。さても繋がぬ月日なれば、第三年も送り、七年に當る時に、姉を呼びてい
ひけるは、「今日は此の者共が、七年忌に當り候へば、追善を營み弔ひ侍るなり。さても
十郎が契深かりし大磯の虎、百箇日の佛事の序に、箱根にて尼になり、御山より行き別
れしが、善光寺に一兩年籠りて、其の後諸國を修行して、今程は大磯に歸り、高麗寺の
山の奥に、行ひすまして候ふ山聞き及びしに、いざや虎が住處見ん」といひければ、「妾
もさこそと思ひ候ふに、御供申さん」とて、二人曾我の里を立ち出で、中村通山彦山を
打ち越えて、高麗寺の奥に尋ね入り、夏草の繁みが末を分け行く程に、袖は涙裾は露に
しをれつゝ、彼のあたりなる里の翁に問ひけるは、「虎御前と申せし人の、尼に成りて住
み給ふ所は、何處にて候ふやらん」と問ひければ、「あれに見え候ふ山の奥に、森の候ふ

五 虎と少將法然に逢ひ奉りし事

さる程に、二人は打ち連れだち、麻の衣紙の袈を肩に懸けて、諸國を修行し、信濃の國善光寺に、一兩年の程、他念を交へずして念佛申し、過去聖靈頓生菩提と祈り、又都に上り、法然上人に逢ひ奉り、念佛の法談を委しく聽聞し、いやましに念佛修行すよみけるこそ有難けれ。

六 虎大磯に閉ち籠りし事

かくて虎は、山々寺々拜み廻りけるが、さすがに故郷や戀しかりけん、又は十郎の有りし邊やなつかしく思ひけん、大磯に歸り、高麗寺の山の奥を尋ね入り、柴の庵に閉ち籠り、一向千壽の經を誦し、九品往生の望怠らず、二人の尼諸共に、一つ庵に床をしめ、行ひすましておはしける。

七 母と二宮の姉大磯へ尋ね行きし事

九品往生一
往生の階級
に九種あり
上品上生、
上品中生、
上品下生、

云々―白樂
天の詩に松
樹千年終是
朽槿花一日
自爲榮

つひの住家
―終極の住
處

してや女は五障三從の罪深しと申すなり。偶人身をうけながら、殊に我等は罪深き身なり。其の故は只一生の間、人を誑さんと許なれば、心を往來の人にかけ、身を上下の輩にまかせ、日も西山に傾けば、夢の中の假の姿を飾り、月東嶺に出でぬれば、誰とも知らぬ人を待ち、夜毎に變る移香の、身に留まりて心を惱し、朝な朝なの手枕の、露に餘波を惜みつゝ、胸をのみ焦す事、かへすくも口惜しき憂身なり。此の世はつひの住處にあらず。水に宿れる月よりも、はかなしと思ふ折節、此の人々の事を聞き、又御身の變れる姿を見て、いよく憂世に心も留らず、昨日は曾我の里に花やかなりし姿、今日は富士野の露と消ゆ、朝に紅顔あつて世路に誇れども、夕には白骨となつて、郊原に朽ちぬ、といふも理なり。さればにや萬事は無二亦無三也。御身は十郎殿を善智識として、憂世を背き給ふ、我は又御身の姿を善智識として、衣を墨に染めん、と思ひ候ふ」とて、やがて翡翠の髪を剃りおとし、花の袂をぬぎかへて、濃き墨染に更めつゝ、年廿七と申すに、駿河の國手越の宿を立ち出でけり。世を捨つる身といひながら、心強くも住みなれし、我が故郷を立ち離れにし心の中、誠にやさしく哀なりしとかや。

すさまじー
不興氣なり

けるは、「過ぎにし夏の比、工藤左衛門に呼ばれて酒を飲みし時、十郎殿をも呼び入れ参らせしかば、初て見参に入りしなり。工藤左衛門惡口に、此の殿の思ひきり給へる色現はれて、只今事出で來ぬべしと、座敷もすさまじく候ひしに、何とか思はれけん、酒飲みおし静めて立たれし事、只今の心地して哀に候ふぞや。我々立ち出で、かくとも知らせ申し度く候ひしかども、御身も親しき事、人に知られんも憚ありしかば、さてのみ過ぎしなり。其の夜祐經の宿直の事、めのとの童にて妻戸の鑲はづさせし事、不思議にこそ思さめ。假令一夜の妻なりとも、互の情を思ふべきに、いかなる事にや、いかにもして討たせ参らせんと思ひし事、只偏に御身故ぞかし」と語りければ、虎は此の事をはじめて聞き、十郎殿最期の時、かゝる教をいか許嬉しく思ひ給ひけん、此の告なかりせば、いかでか本意を遂けさせ給ふべきにや、と思なる身は思はれて、いよく涙に咽びけり。

四 少將出家の事

かくて少將は虎が變れる姿を見て、誠に羨しくなれる姿かな。道理かな、ことわりかな。さらぬだに憂世の徒なるを思ふに、千年の松も遂には朽ち、槿の露の命ぞかし。ま

千年の松も

煙もなほぞ
立ち上る上
なきものは
思なりけり

にぞ着きにける。

三 手越の少將に遇ひし事

さても虎は、或小家に立ち寄りて、主の女を語らひて、少將御前を呼び出して、「旅人のこれにてと申すべき事の候ふ、と申し給へ」といひければ、「易き事」とて呼び出しけり。少將は、虎が變れる姿を見て、いひ出すべき言葉もなく、只涙をぞ流しける。稍有りて虎、泣くく申しけるは、「彼の祐成に相馴れて、既に三年になり候ふ。宿縁深きゆゑにや、又餘の人を見んと思はざりつるなり。此の人うせ給ひぬと聞きし時は、同じ苦の下に埋ればやと思ひしかども、つれなき命ながらへて候ふぞや。されば世を渡る遊者のならひは、心に任せぬことも候ふべし、と思ひて、百箇日の佛事の序に、箱根にて髪を剃して、只一人迷ひ出で、富士の裾野の邊にて、其の人の跡許なりとも見て、憂かりし心をも慰み、序に此の邊近くおはしければ、見参に入り物語をも申し、此の姿をも見え参らせんと思ひて、是まで來りて候ふ」と語りければ、少將も涙を抑へて、「けにいか許御歎きと思ひやられてこそ候へ」とて、泣くより外の事ぞなき。重ねて少將がいひ

思ひけん―
此下一本に
「翁申しけ
るは、いか
に」の九字
あり

涙を流しけり。諸共にかくては叶はじとや思ひけん、「御歎候ふとも、其の甲斐あるまじく候ふ。夜になれば、此の處には狼と申すもの、道行く人を惱し候ふ。御留り候ひては叶ふまじく候ふ。これより御歸り候うて、今宵は賤が伏家になりとも御泊り候ひて、一夜を明かさせ給ひ候へ。旅は何か苦しく候ふべき」と申しければ、「嬉しくも宜ふものかな。此の邊懇に教へ給ふに、宿まで思ひより給ふ事の嬉しさよ。左様に怖しきものよ候ひて、身を捨てとも何にかはすべき」とて、塚の邊にて念佛申し、「過去幽靈成佛得脱」と廻向すれば、十郎の尊靈もいか許嬉しく思すらん、と思ひやられて哀なり。虎涙の際よりかくぞつらねける。

露とのみ消えにし跡を來て見れば尾花がすゑに秋風ぞ吹く
うき世ぞと思ひそめにし墨ごろも今また露の何と置くらん
かくて井出の邊を行き別れ、其の夜は翁の所に留り、明けぬれば野原の露にしをれつゝ、
足に任せて行く程に、富士の烟を見るからに、つらき思ひに比へつゝ、其處とも知らぬ
道のべの、叢ことの虫までも、啼く音を添へて哀なり。けにたゞだにも秋の思は悲しき
に、やつれ果てぬる旅衣、いとどつらさを重ねつゝ、たどり／＼も行く程に、手越の宿

つらき思に
云々―新古
今集家隆の
富士のれの

洲蘆雨は云々―橋直幹の句、和漢朗詠集に見ゆ一本「雨」の上に「夜の」あり

一村松―一群の松

は是を聞き、別の涙乾かぬに、又打ち添へて、賤の男が情の言葉に、愁の色現れて、問ふにつらさの涙、忍びもあへぬ氣色を見て、翁さればこそと思ひて、共に袖をぞ絞りける。「さらば誘ひ申さん」とて、北へ六七町遙に野を分け行けば、亡き人の果てにける草葉の露かとなつかしく、洲蘆の雨他郷の歎、岸柳の秋の風遠塞の情、とかやも、思ひ出でられて、何處ともなく行く程に、日も夕暮の峯の嵐、心細くぞ聞えける。翁ある方をつまざして、「あれこそ井出の館の跡にて候へ。あの邊こそ工藤左衛門殿の討たれさせ候ふ處にて候へ。又彼處は十郎殿の討たれさせ給ひ候ふ處、此處は五郎殿の御生害の處さて又あれに見え候ふ松の本こそ、二人の死骸を隠し參らせたるどころ候ふよ」と、懇に教へければ、虎涙をおさへ、且は嬉しく、且は悲しくて、只泣くより外の事ぞなき。一村松の本に立ち寄り見れば、實にも埋れておほえ候ふ土の、少し高く見えければ、過ぎにし五月の末の事なれば、花薄菰生ひ繁り、其の跡だにも見えざりけれども、亡き人の縁と聞くからに、なつかしく覺えて、塚の邊に伏し轉び、「我も同じ苦の下に埋れなば、今更かゝる思ひはせざらまし。黄泉いかなる住處なれば、逝きて再度歸らざる」と、伏し沈みけり。哀なりし有様、譬へん方こそなかりけれ。誠に翁も心ある者なれば、俱に

の志候ふ。下向にこそ参り候はめ」とて行き別れけり。

二 井出の館のあと見し事

かくて虎思ひけるは、此の序に十郎の空しくなりし富士の裾、井出の館の跡を志して、箱根を後になして行く程に、其の日もやうく暮れぬれば、三島の拜殿に通夜申し、明くれば三島を出でて、車がへしに立ち休らひ、千本の松原心細く歩み過ぎ、浮島が原にも出でぬ。南は蒼海漫々として、田子の浦波滔々たり。北は松山かうくとして、裾野の嵐颯々たり。未だ旅なれぬ事なれば、彼處を何處と知らねども、志をしるべにて、やうやう歩み行く程に、井出の里に近づきぬ。虎は里の翁に逢ひて問ひけるは、「過ぎにし夏の比、鎌倉殿の御狩の時、敵討つて同じく討たれし曾我の人々の、跡や知らせ給ひて候はど、教へさせ給へ」といひければ、此の翁心ある者にて、虎が顔をつくぐと見て、「若御縁にても渡らせ給ひ候ふか、痛はしき御有様かな。人をも連れさせ給はず、只一人是迄御尋ね候ふ事、なほざりの御志とも覺えず。若十郎殿に御志深く渡らせ給ひし、大磯の虎御前にてましますか。有の儘に承り候はど、教へ参らせん」といひければ、虎

なほざり—
等閑、並一
通り

曾我物語 卷第十二

一 虎箱根にて行き別れし事

さる程に、大磯おほいその虎とらは、十郎祐成すけなりうちじに討死うちじにして後、いかなる淵川ふちかはにも入らばやと思ひけれども、亡なき人の菩提ぼだいの爲ためにもなるまじければ、偏ひとへに憂世うれよを背そむき、彼の人の後世ごせを弔さだはん、と思ひ立ち、袈裟衣けさころもなど調しらへて、箱根山はこねに上のぼり、百箇日ひゃくかじの佛事ぶつじの折節せりふしに、泣くく翡翠ひすずの飾かざりを剃おそり落おし、五戒かいをたもちけり。さしも美うつくしかりつる花の袂たもとをひきかへて、墨すみの衣ころもに喩なふ

にやつれ果はてけり。志こころの程ほどこそ類たぐひすくなき情なさけなれ。母ははこれを見て、「我も同じ墨すみの袂たもとになりて、彼等ほかが菩提ぼだいをも弔さだふべし。今此いまのつくも髪かみをつけても何にかはせん」とぞ、歎なげき悲かなまれける。別當べつたう様々さまざまに教訓けうくんして留とどめられけり。母御ごぜん前まへ力ちからなく、五郎ごろうが遺跡ゆゑせきなれば、名な殘ごり惜をしくは思へども、此處こゝにて日を送るべき事ならねば、別當べつたうに暇いさまを乞こひ歸かへるとて、虎御前こぜんに申まをされけるは、「曾我そがへ誘いざなひ、十郎じうろうが形見かたみに見参まゐらせ候まうはん」といはれければ、虎とらもつぎ御供おんとも申まをし、互たがひの形見かたみに見参まゐらせたく候へども、大磯おほいそにての追善つゐぜん、又は善光寺ぜんくわうじへ

髪

いはひー祀
りあがむる
こと

天台の座主、一字千金の力を以て、やうくなだめ奉り、神といはひ奉るに、威光あらたにまします、今の天満大自在天神是なり。其の外怒をなして、神と崇められ給ふ御事、承平の將門、弘仁の仲成よりこのかた其數多し。いか様にも此の兄弟の人々をも、神に御いはひあるべきにや」とぞ申されける。

七 兄弟神にいはるゝ事

さる程に頼朝、つくく思し召しけるは、此の者共の振舞世に超えし事なり。神にいはひても益あるべしとて、せうめいくわう神宮と崇め、富士の裾野に社を立て、松風といふ所を長く御寄進ありけり。即ち彼のように行上人を開山として、寺僧をする、禰宜神主を定めて、五月廿八日には、殊に讀經神樂、種々の奉幣を捧ぐる事今に絶えず。それよりして彼の處の闘絶えて、佛果を證するよし、神人の夢に見えけり。尊しともいふ許なし。されば此の神に参り、敵討たせてたべと祈りければ、必ず叶ひけるとかや。今も遠國近國の輩、歩を運び仰がぬ者はなかりけり。

五衰一枯衰
の誤歟

松風に――
本に――なし
豊一屋根瓦

天に傾き、松柏の青き色も、遂には五するの時あり。芙蓉の仇なる形は、松風に破るゝ例、歎きても餘あり。悲みてもたえず。只一筋に佛道を願ふ時は、草木國土悉皆成佛とぞ見えける。さても大將殿御出により、富士の裾野の御館、藁を並べ軒をつゞけ、數ありしかども、御狩過ぎしかば、一字も残らず元の野原になりけり。され共残るものとは、兄弟の嗔恚執心、或時は十郎祐成となのり、或時は五郎時致と呼ばはり、晝夜闘ふ音絶えず、思はず通り合する者は、このよそほひを聞き、忽ちに死ぬる者もあり、やうやう生きたる者は、狂人となりて、兄弟の詞をうつし、苦痛離れ難し、と歎くのみなり。君聞こし召されて、不便なりとて、ようぎやう上人といふめでたき法師を請じ、弔はるべきよし細やかにこそ仰せけれ。

六 菅丞相の御事

さても彼の者共が亡靈荒れければ、ようぎやう上人、頼朝に申されけるは、「昔もさる例こそ多く候へ。辱くも菅丞相の昔、讒言によつて筑紫へ流され、遂に歸京もなくして、空しくなり給ひし其の嗔恚残り、雷と成り給ひて、都を傾け給はんとし給ひしを、

を顯あらははさん爲なりにや、折をり節山風荒あらく吹ふきて、數かずの燈明とうみやうを一度に吹き消しけり。されば貧女ひんによが一燈許さうばかりは消えずありけり。目蓮もくれん不思議ふしぎに思おもひ召めし、袈裟けさにて煽あふがせ給たまひけれども、消えざりけり。其の時目蓮佛もくれんほとけに問とひ給たまふ。多くの燈明とうみやうの消ゆる中に、いかなれば一燈消えざる、と申させ給へば、佛ほとけ宣のたまはく、阿闍世王あじやせわうの萬燈まんとうの光くわう、疎おろにはあらねども、貧女ひんによが志ふかの深ふかき事を顯あらはさんが爲なりに、萬燈まんとうは消えて、一燈さうは残のこる、と示し給ふ、さればにや此このの貧女ひんによ成佛ひんによじやうぶつして、須彌燈光しゆみとうかう如來にょらいと申すは、此このの貧女ひんによの事なり。長者ちやうじやの萬燈まんとうより、貧女ひんによの一燈さうと申し傳へたるは此このの事なり。御志みしを勵はげし候へ。かへすく」と仰おほせられければ、虎こも母もろも諸共もろどもに、深ふかく追善つゐぜんの心あり。諸佛しよぶつ憐あはれ給ふらんと嬉うれしくて、各おの暇いさま申して歸かへりにけり。母虎もこに申しけるは、「今より後は常つねに來り妾わらはを見給へ。自らもまた十郎じちやうが名殘なごりに見奉りなん。暫しばらく曾我そがにましゝて、慰なぐさみ給へ」などと語りて行きけるが、虎こ申しけるは、「嬉うれしくは承り候へども、此このの人々の御爲みために、毎日法華經まいにちほけきやう六部ぶくづつ六人して、第三年まで志し候ふ。妾わらはなくては無沙汰むさたあるべし。委くはしく申しつけて參るべし」と申しければ、母は「實まことの御志みし有難ありがたくこそ候へ。あひ構かまへて絶えずとひ訪ぞはれ參らすべし」とて、泣く泣く打ち別わかれにけり。實じつにや有爲うゐ轉變てんぺんのならひ、花は根に歸かへり、鳥は古巢ふるすに入り、日月じつげつ

に勝れては候へ。かまへてくゝ怠らず弔ひ給へ」と仰せられければ、虎も涙を抑へて、「佛事と承りし事、穢身發願の儀なりければ、飽かぬ別の道、いつかは怠り候はん」と申しければ、別當重ねて申されけるは、「數多の寶を積まむよりは、誠の心にはしかず」とこそは宜ひける。

五 貧女が一燈の事

「さる程に、虎が志の深きをもつて、昔を思ふに、天竺に阿闍世王といふ大王あり。常に佛を請じ、數の寶を捧げ給ふ。或時佛の御歸り夜に入りければ、王宮より祇園精舍まで、十萬石の油をもつて、萬燈を灯し給ひけり。此に貧なる女あり。いかにもして此の燈明の數に入らばやと思ひけれども、朝夕の營だにも堪へ難き貧女なれば、一燈の力もなし。涙を流し、いかにと方便すれども叶はで、東西に馳走し、自ら髪を切り、錢二文にぞ賣りたりける。是にてもやと思ひければ、油を彼の錢にて買ひ、やうく一燈灯してくどきけるは、我前業いかなりければ、百千燈をだに灯す人のあるに、一燈をだに灯しかねたる、憂き身の程の恨めしさよ、とて、彼の燈明の下に泣き伏しけり。此の志

出でゝいな
ば―伊勢物
語の歌五の
句人は知ら
ねばとあり
咸陽宮―秦
の始皇の築
きし宮殿楚
兵の焚く所
となる

り見給へば、墓の上に草生ひけるを、別當見給ひて、「君見すや北邙の夕の雨、疊々たる青塚の色を。また見すや、東邙の秋の風、歴々たる白楊の聲を」といへる、古き詩を思ひ出で給ふ。是は元の住處と宣へば、軒の葱は紅葉して、おもひの色を顯せり。歎はいづれも盡きせねば、繁る甲斐なき忘草、其の名許はよしぞなき。九月上旬の事なれば、四方の紅葉の色は、袖の涙を染むるかと思え、よにふる里は苦しきに、易くも過ぐる初時雨、羨しくぞ覺えける。壁に書きたる筆のすさみを見れば、

出でていなば心輕しといひやせん身のありさまを人の知らねば

といふ古き歌のはしを、箱王丸とぞ書きたりける。師匠に暇をも乞はず、人に行方をも知らせず、只一人いづること、思ひよりて語り、幼かりし面影、只今の心地して、よしなき所へ來りけると絶えこがれければ、胸を焦す煙は咸陽宮の夕の煙に異らず。袂に落つる涙の、龍門原上の草葉を染むる、おもてに落つるちりのうみ、かこちよれいとも言ひつべし。さてしも有るべきにあらざれば、泣くく母は曾我に下りしが、虎は大磯に歸らんとす。別當も五郎に別れし心地して、「御名殘惜しうこそ候へ。さても此の度の御佛事有難く候ふ。過去幽靈定めて正覺なり給ふべし。また大磯の客人の御志こそ、世

虞氏—楚の
項羽の妾六親—父子
兄弟夫婦

しん床ゆかに上りて、虞氏ぐしがいにしへにあらねども、數行すかうの涙袂なみだたもとを濕うるほすらん。しやうらんの
匂におひ、空薰そらたきものとぞなりにける。宵曉よひあけつきの鐘かねの聲こゑ、枕まくらを並ならべし程には似ず、起居おきるに見れば、
なれ來し人はよもそはじ。山の端は出づる月影つきかげを、心苦しく待ち得ても、見し面影おもかげには異
らず。是ぞ慰なぐさみ給ふ事あらじ。實夫婦まことふうふの別忍わかしのび難がたけれども、昔も今も力に及ばざる道な
れば、思おもひ慰なぐさみ給ふべし。彼の唐たうの立宗けんそうの楊貴妃やうきひも、僅わずかに詞ことばを蓬萊宮ほうらいきうの浪なみに傳つたふらん。
穆公ぼくこうの弄玉ろうぎよくを重おもんぜしも、徒いたづらに鳳凰臺ほうわうだいの月によす。彼を思ひ是を思ふにつけても、昔
を今に準ならへて、一佛淨土いちぶつじやうどの緣えんを結び、願ねがはくは九品往生くほんわうじやうの望のぞみを遂さげて、七世の父母おち、六
親眷屬成佛けんくわくじやうぶつと、廻向えかうの鉦打かねうちち鳴ならし、別當高座べつたうかうざを下り給ふとて、

さだめなき憂世うれよといとど思ひしにとはるべき身のとふにつけても

と詠えいじ給ひければ、聽聞ちやうもんの貴賤哀きせんあはれを催もよほし、袖そでをしほらぬは無かりけり。供養くやうもやうく

過ぎしかば、僧達そうたちも皆歸みなかへり給ひ、やと暫しばらくありて、「急いそぎ下りたく候へども、偶たよくのほり

て候へば、五郎が幼こくて住すみ給ひし方を、見候はん」と申されければ、別當べつたう宜あたひけるは

「男をとこになりて後、其の形見かたみと思へば人をも置かず。わざと破やぶれをも修理しゆりせず、昔すこに少しも

違たがはず候ふ。いざさせ給へ。墓所はかしろをも築つきて候へば、御覽ごらんぜよ」とて連つれて行き、立ち寄

ひ、我が身の衰へるをば知らずして、子の成人を願ひしぞかし。此の恩を捨て、未だ盛にも満ちずして、母に先立ちぬ。されば孝經に曰く、君は尊くして親しからず。母は親しくして尊からず。尊親共に是を兼ねたるは、父ひとりなりと雖も、四の恩の中には二親なれば、母の歎も切なれども、あたるところの恥、父の方に身を捨て、各命を失ふ。人の親の子を思ふ闇に迷ふ道、愚なる子もいとほしく、片端なるも悲しきに、此の人々は弓馬の家に生れ、武略ともに賢し、後代に留む事、遠きも近きも知らぬ人なし。同じ兄弟といへども、仲の悪しきもあるぞかし。此の殿原は幼少竹馬の昔より、馴れむつづる事類なし。淨藏淨眼の古にも恥ぢず、早離速離の昔にも似たり。遂に富士の裾野にして、同じ草葉の露と消え給へり。彼の一條の攝政、謙徳公の二人の御子、前の少將後の少將とておはしける。朝夕に亡せ給へり。かゝる例もあれば、生死無常の理、はじめて驚くべきにあらず。今開眼供養の御經、人々の手跡のうらなり。かやうに書きおきしを、餘所にて見るだにも悲しきに、まして御身にあて、御心中さぞ思し召すらめ。それは親子の別の事、兄弟の契のわりなきを一言述べて候ふ。又夫に別るゝ歎、今一入色深き事なり、虚弓止まりて閨に寄せ立つ、上弦の月空に暮れぬ。三年のなじみ忽ちつき、こ

北邙—洛陽
の北方の山
名、漢以來
の墳墓の在
る處

孟蘭盆—梵
語、解倒懸
と譯し死者
の地獄にて
受くる非常
の苦を脱せ
しむる爲の
法會

釋迦大師のおんごんの教化を忘れ、悲しきかなや、閻魔法王の呵責の辭を聴けば、名利は身を助くと雖も、未だ北邙の屍を養はず。恩愛の心を惱せども、誰か黄泉の責を免れん。是に因つて馳走す、所得幾何の利ぞや。是が爲に追求す、所作たざいなり。暫く目を塞ぎて往時を思ふに、舊友皆空し。指を折りてこうしんを數ふれば、親疎多く隠れぬ。時移り事去りて、今何ぞ渺茫たらんや、人止りて我逝き、誰か又残りやせん。三界無安猶如火宅と見れば、王宮も是夢なり、天子といふもしよの身なり。況や下劣貧賤の輩、などか其の罪輕かるべき。しに苦をまし、業に随つて悲を添ふべし。思ひ悟らぬぞ愚なる。正に今ごんかく塵深くして、竹簡幾何の千卷ぞ。苦瀧雲靜にして、松風只一聲、苑中花月相傳ふるに主を失ふ、七月半の孟蘭盆の尊靈誰にかあらんと、泣くく當座にぞ書きける。實に理極りけり。「されば親の子を思ふ志の深き事は、父の恩を須彌に譬へ、母の恩を大海に同じといへり。我一劫の間説くとも、父母の恩盡くる事なし、と見えたり。胎内に宿り、身を苦しめ心を盡し、月を重ね日を送り、生るゝ時は、桑の弓蓬の矢をもつて、天地四方を射、身體髮膚を父母にうけ、敢て毀ひ破らざるを孝の始とす。襁褓の囊に包まれしより今に至るまで、晝夜に安きことなし。人の親のなら

一乗妙典
法華經

殿の塵とれ」と、様々下知し給ひけり。虎は別當の教化を聴く身ながらも、嬉しくぞ思ひける。其の後數の僧達集り給ふ。御經多しといへども、殊に勝れたる一乗妙典八卷を、同音に讀誦し給ふ。五十展轉の功力だにも有難し、誦持讀誦の結縁たのもしかりけり。御經やうく過ぎしかば、別當高座に上り、彼等が追善の鉦打ち鳴し、施主の志を量り給へば、先御涙に咽びつゝ、説法の御聲も出し給はず。やゝあつて別當涙をおさへ、花房を捧げ、「それ生死の道は異にして、音信を何の處にか通ぜん。分段境を隔つ。拜勤をいつの時にか期せん。二十餘年の夢、曉の月と空に隠れぬ。千萬端の愁、夕の嵐ひとり吟じて、雲となり雨となる、哀憐の涙乾く事なし。朝を迎へ夕を送りて、懷舊の腸絶えなんとす。所作未だやまざるに、百日の忌景既に満てり。悲の至りてなほ悲しきは、老いて子に後れ、恨のことに恨めしきは、盛にして夫に後るゝ程の愁なし。老少不定を知ると雖も、なほ前後の相違に迷ふ事、歎けどもかなはず、惜めどもしるしなし。されば佛も愛別離苦と説き給ふ。一生は夢の如し、誰か百年の齡を保たん。萬事は皆空し、いづれか常住の思をなさん。命は水の上の泡の如し、魂は籠の中の鳥、開くを待ちて去るに同じ。消ゆるものは再度見えず、去るものは重ねて來らず。恨めしきかなや、

羅王大らわうきに怒いかり、嗔しん恚ゐの猛火みやうくわをはなち、既に須彌すで しゆみの半分はんぶんまで攻め上り、鬪たうふ事恒河沙こうがしゃを
經かるとも盡つくることなし。其の時帝釋たいしやく、せんばうだうに楯籠たてこもり、仁王經にんわうぎやうを講かうじ給ひつよ、
四いしゆ五ごわうの印いんを結び給ふ。時に虚空こくうより磐石雨はんじやくの如ごとくに降ふり下り、修羅しゆらの大敵たいてきを粉
灰はひに打ち碎くだく。されども業因ごふいん盡つきざれば、復蘇またよみがへ生なり、大苦たいくを受けたり、と傳つたへたり。然れ
ども、鬼子母きしもは佛弟子ぶつでしとなりしかば、苦惱くなんを離はなるゝのみならず、法華ほつけの功德くどくあり。かや
うに鬼神きしんだにも隨喜ずいきすれば、此かくの如ごとくの佛果ぶつぐわの縁ありとかや。

四 箱根にて佛事の事

かくて別當べつたうは、彼の者共あつじの佛事ぶつじとり行はんとし給ふ其の隙ひまに、虎こにいよく教化けうふし給ふ
は、偶人たまうにんじん身を受け、此の度淨土たじやうどを希ねがはずは、また三途さんずにかへるべし。祐成すけなりを善知識ぜんちしきと
思おもひ、淨土じやうどを希ねがはんは何の疑うたがひか候ふべき。既にかやうの法身はふしんとなり給へば、他のた
め、未來永々みらいやうやう有難ありがたき御事ごじなり。法師ふしとて御導師おんだうしに成るべきにあらず。只心ただこころをもつて師しと
する時は、いかでか往生わうじやうの素懷そくわい空いしからん。また五郎ごろうは寵愛ちやうあいなじみにて、御思ごしどもに劣おと
らねば、一入弔ひとしほひ奉るべし。誰たれかある、僧達そうたちを請しやうじ申せ」とて、「持佛堂ちぶつだうの莊嚴しやうごんせよ。客きやく

さは―生飯
又ば散飯と
書く食に當
りて鬼神に
供する爲に
傍にすこし
取りわけ置
くもの

うに悲むにや。まして多くの人いかゞ」と示し給ひければ、鬼共頭をうなだれて、圍繞して伺候しけり。「いかに汝等、なほしもものゝ命をや斷つべき。止るならば、有所しらせん」と仰せられければ、鬼大きに悦び、「今より後は更に殺生仕るまじ。失ひし子の在所教へ給へ」とたいはう申しけり。「さらば堅く殺生を止めよ」と約束ありければ、鬼かさねて申すやう、「我等肉食を絶えては、身命助かり難し。御慈悲の方便にあづからん」と申す。佛御思案ありて、「さらば一切衆生の用ゐる飯の上を、少しさばを取り汝に與ふべし。それにて命をつぎ候へ」と佛勅ありければ、鬼承り、「我等は惡業煩惱にて身をまろめたり。假令佛勅の如く、頂戴申すといふとも、肉食を止めては命あらじ」と申しければ、「さらば一口の飯に、人の肉をすり塗りと與ふべし」と、御約束ありけり。さればにや、今に至りて、さばとて飯の上を少し取り、掌にあてと置く事は、此の謂にてぞありける。かやうに堅く誓約ありて、御鉢の下より子鬼を取り出し給ひけり。其の時鬼申しけるは、「我等神通を超えたりと思へども、佛の方便には及び難し。まして後世こそ恐しけれ」とて、即ち御弟子となり佛果を得るとかや。剩へ法華守護神となり、法華經を擁護せんと誓ひ給ふ。抑此の鬼子母は形世に越えければ、帝釋これを奪ひ取り給ひぬ。阿修

乙子―季子

難し。佛是を悲み思し召し、如何して此の殺生を止めんとて、智慧第一の迦葉尊者に告げ給ふ。迦葉佛に申し給ひけるは、「彼が五百人持ちて候ふ子の中に、殊に寵愛の子を御隠し候ひて、御覽ぜられ候へ」と御申ありければ「然るべし」とて、五百人の乙子を取り、御鉢の下に隠し給ふ。父母の鬼是を尋ねけり。神通自在の者なりければ、上は非想非非想天六欲天の雲の上、下は九泉八海龍宮奈落の底までも、くもりなく尋ねけれども無かりけり。鬼共力を失ひ、大地に伏し轉び、泣き悲みけるぞ愚なる。思の餘に佛に参り申しけるは、「我五百人の子を持ちて候ふ。其の中にも乙子こそ殊に不便に候ひしを、物に捕られて失ひ候ひぬ。餘に悲しく候ひて、到らぬ所もなく尋ねて候へども、我等が神通にては尋ね出すべしとも覺えず候ふ。然るべくは御慈悲を以つて教へさせ給ひ候へ」とて、黄なる涙を流しけり。其の時佛曰く、「諸子を失ひて尋ぬるは悲しきものか」。「申すにや及び候はず。是だにも出て來候はど、我等夫婦はいかになり候ふとも苦しからず。餘に可愛く候ふ」と申しければ、「左様に子は悲しく無慚なる者ぞとよ。汝五百人の子を養はんが爲に、物の命を殺す事、いか許とか思ふ。其の殺さるゝものの中に、親もあり子もあり、兄弟親類いか程の歎とか思ふ。思ひ知れりや、汝今只一人失ひてだにも、かや

曠劫と熟し
無窮の長年

かきうー歸依

第一の戒—
殺生は五戒
中の第一に
あり

まじき別の道、歎き給ふも理なり。歎くべし／＼とて、御涙をはら／＼と流し給ふ。「思へば誰も劣るべきにはあらねども、大磯の客人の御志こそ誠に有難くこそ候へ。あひかまへて、深く歎き給ふべからず。是を實の善知識として、他念なく菩提心を起し給へ、一念の隨喜だにも莫大にて候ふぞかし。かやうに思ひきり、誠の道に入り給ひ候はゞ、餘念なくて行じ給ひ候へよ。佛も六年仙人にきうし行じてこそ、法華をば授かり給ひし、かまへて惡念を捨て給ふべし。人々を討ちける人を、怨めしと思ひ給はゞ、嗔恚の妄執となりて、輪廻の劫盡くべからず。あながち手を下して殺し、行きて盜まざれども、思へば其の科を犯すにて候ふぞ。かまへて／＼殺生を心に除き給ふべし。されば第一の戒にて候ふぞ。女は殊に執情深きによつて、三途の業盡きず侍ふぞや。あひかまへて／＼と、細やかに教へられけり。

三 鬼の子捕らるゝ事

昔天竺に、鬼子母といふ鬼あり、大阿修羅王が妻なり。五百人の子を持ち、是を養はんとして、物の命を斷つ事、恒河沙の如し。殊に親の愛する子を好みて、捕り食ふ罪つくし

山、君を思へば心から、うはの空にや籠るらん。母も立ち出でて、急ぐといへば打ち出でぬ。おのづからなる道の邊、我が方遠くなり行けば、其處とも知らぬ毬子川、蹴上けて波や渡るらん。湯坂の峠を上るにも、別れし人も此の道を、かくこそ通ひ馴れしと思ひやらるゝ梓弓、矢立の杉を見あけつゝ、其の人々の射ける矢も、此の木の枝にあるらんと、梢の風もなつかしく、山路遙々行く程に、箱根の坊に着きにけり。やがて別當出で逢ひ給ひて、「さても御歎の日數の、あはれにて候ふ」と仰せられければ、此の人々も佛事の本意を申されけり。別當虎を見給ひて、「あれは何處よりの客人にや」と問ひければ、母ありのまゝにぞ語りける。別當有難き志とて、墨染の袖をぬらし給ふ。やゝありて別當、涙をとどめて仰せられけるは、「法師が思とて、かた／＼に劣り奉らず。さかりなる子を先に立つる親、若うして夫に後るゝ妻、世のつね多しと申せども、師に先立つ弟子は稀なり。それも先規なきに非ず。遠く震旦を思へば、顔回はいくわんしゆの弟子にて、才智並ぶ人なかりしかども、廿五歳にて師に先立ち給ふ。我が朝の慈覺は、大師の御弟子なりしが、師の天台大師に先立ち奉る、西方院の座主印賢僧正は、良賢大徳に後れ給ふ。かやうの事を思ひ出せば、愚僧一人が歎に非ず。けに／＼贖劫を経て、相見ん事ある

諸共に云々
—金葉集に
見えて二の
句苔の下に
は、五句見
るぞ悲しき
とあり

もろともに苔の下にも朽ちずして埋もれぬ名を聞くぞ悲しき

斯様に詠みたりし事迄、思ひ知られて忝くおほえ候ふぞや。それにつき候ひては、此の度の佛事心の及ぶ程營むべきにて候ふ。此の邊にはさりぬべき導師も候はねば、別當を導師に定め参りて候ふ。五郎が事忘れず御歎き候へは、一入懇なるべし。曉は伴ひ奉るべし」とて歸りにけり。虎は母が後姿を見送り、十郎が装思ひ出でられて、是も名残は惜しかりけり。さらぬだに、秋の夕は寂しきに、獨伏屋の軒の月、涙に曇る折からや、折知顔の鹿の聲、枕に弱る蟋蟀、軒端の萩を吹く風に、古郷思ひ知られつゝ、時しも長き夜もすがら、明しかねたる思寐の、逢ふ夢だにもなければや、片敷く閨の枕に置き添ふ露の重なれば、うつゝの床も浮く許、明方の雁の、侶を語ひ啼く聲も、羨しくぞ思ひやる。他處の砧を聞くからに、身に沁む風のいとどしく、鐘聞く空に明けにけり。

二 母虎を具して箱根へ上りし事

荒れぬる宿とは思へども、枕竝べし睦語の、出でぬる後の別路は、今も打ち添ふ心地して、起きもせず寐もせで物を思ひ居たる所に、馬に鞍置きひつ立つる。使は來たり木幡

あらまし―
末の事を豫
め言ふこと

上東門院―
藤原彰子、
一條院の皇
后

らで、なつかしかりける容顔、何しに年月不孝しけんと、過ぎにし方まで悔しきに、せめて三日打ち添はで、歸れと許のあらましを、如何に哀に思ひけん。いつの世にかあひ見て憂きを語りてまし」とて、又打ち伏して泣きけり。虎も涙に咽びつゝ、暫し物をも言はざりけり。互の心の内、さこそと思ひやられたり。「是なる御經は、彼等が最期に、富士野よりも送りたる文の裏に、書き奉りて候ふ。此の文を読まんとすれば、文字も見えず、近く寄りて讀み給へ。聞き候はん」とて差し出す。十郎が文と聞けばなつかしくて、讀まんとすれば目もくれ、何れをそれとも見え分かず、胸にあてゝ泣く許にてぞ有りける。流を立つる習、斯程の志あるべしとは思はざりしを、優しくも見ゆるなりけり、と思ふに涙ぞ増りける。「今宵は是に留まりて、心靜に物語申すべきが、箱根への用意させ候ひて、曉出で候ふべし。聞き給ひぬるや、是等が孝養せよとて、君よりは所領給はり候ふ。世には敵討つ者こそ、多く候ふなれども、心様人に勝るゝにより、斯様の御恩に預り候ふ。如何に言ふ甲斐なくとも、彼等が安穩ならんこそ嬉しくも」とて、「是や昔上東門院の御時、和泉式部が娘、小式部の内侍に後れて、悲みけるに、君哀と思し召して、母が心を慰めんと思し召し、御衣を下されしかば、和泉式部、

つれなき—
情無き

かりそめに
—ちよと輕
々に

れ、佛の御名を唱ふる障となり候へば、亡き人の御爲も然るべからず。此の度の御佛事の御布施に思ひ定めて候ふ」と言ひもはてず、打ち傾きけり。「仰の如く、形見は由無き物にて、此等が狩場より、返したる小袖を見る度毎に、心亂れ候ふぞや。是も此の度の御布施に思ひ向けて候ふ。御身は十郎が事許こそ歎き給へ。わらは程罪深き者は候はじ。河津殿におくれたりし時、一日片時の命も存命へ難かりしに、つれなき身の存命へ、百日の内に數多の子に後れたり。如何許とか思し召す。殊に彼等二人は身を離さで、雙の膝に据ゑ育て、父の形見と思へば、憂き時も彼等にこそは慰みしか、今より後は誰を見何に心の慰むべき。箱王は法師に成らざりしを、かりそめに不孝と言ひし其の儘、許せと言ふ人もなし。身の貧なるにより何となく打ち過ぎ、月日を送り、年來添はざりし事、今更悔しく候ふぞとよ。打ち出でし時、兄が連れて來り、限と思ひてや、許せと申せしに、さらばと言ひし言の葉を、嬉し氣なりし容顏の、現れたりし無慚さよ。親ならず子ならずは、老いたる妾が言葉の末、誰かは重く思ふべき、と頼もしく思ひて、つく／＼と凝視りしに、盃とり舉げかたぶく程涙浮びて候ひしを、不孝を許す嬉しさの、涙と思ひて候へば、斯様に成るべきとて、限の涙にて候ひけるを、凡夫の悲しさは、夢にも知

月やあらぬ
―伊勢物語
業平、月や
あらぬ春や
昔の春なら
ぬわが身一
つは元の身
にして

立入り見れば、何時しか庭の通路に草繁り、跡ふみつくる人もなし。塵のみ積る床の上、打ち拂ひたる氣色も見えず。今はの別の曉まで、見なれし所なれば、變る事はなけれども、其の主はなかりけり。思ひしより過ぎこし方のゆかしく、我が身は元の身なれども、心は有りし心ならず、月や有らぬ春や昔のかこち草、深き名残の盡きせねば、泣くより外の事ぞ無き。まろび入りたる其の儘にて、暫し起きも上らざりけり。枕も袖も浮く許、立ちそふ物は面影の、それと計の情にて、涙も更に止らず。やゝ暫く有りて、母出で會ひけり。虎を一目見しより、何とも物をば言はで、袖をば顔に押し當て、さめざめと泣きけり。虎も母を見て、有りし容顏の残り止る心地して、打ち傾き聲も惜まず泣き居たり。夫の歎子の別、さこそは悲しかりけめと、推し量られて哀なり。母涙をおさへ言ひけるは、「斯く有るべしと思ひなば、十郎が有りし時、恥しながら見奉るべかりし物を、身の貧なるにより、親むべきにも疎く、語らふべきにもさもあらで、萬思ふ様にも候はで、打ち過ぎし事の悔しさよ。十郎淺からず思ひ奉りし事なれば、唯十郎に向ふ心地して、なつかしく思ふ」と泣くく語りければ、虎も亦「身の數ならぬにより、御見參申さず」とて、是も涙を流しけり。「形見とて残し置かれし馬鞍、見る度毎に目もく

曾我物語 卷第十一

一 虎曾我へ來りし事

抑建久四年九月上旬の比なるに、世の憂きを思ふに、つながぬ月日も移り來て、昨日今日とは思へども、うき夏も過ぎ、秋も漸たちぬれば、彼岸をかけ、しやう林の霜にとふ、貞女何處にかある。くわんしよ衣を打ちて、れうしん未だかへらざる所に、せんき尼一人、濃き墨染の衣に、同じ色の袈裟をかけて、蘆毛なる馬に貝鞍おきて乗りし人出できたる。何者ぞと見れば、十郎が常に通ひし大磯の虎なり。彼等が母のもとに行き、近き所に立ち入り使をして言ひけるは、「此の人々の百箇日の孝養、大磯にてもかたの如く營むべけれども、箱根の御山にてあるべしと承り候へば、此の御佛事をも聽聞申し、我が身の營をもその序にして、一つの諷誦をも捧げばやと思ひ、参りて候ふ」と言ひければ、母聞きて、「嬉しくも思ひよりおはします物かな。十郎ありし方へ入らせ給へ。やがて見参に入るべし」と、荒れたるすみかの扉あけて呼び入れにけり。虎は十郎が住所へ

ありし方—
居室

十 三浦の與一が出家の事

三浦の與一も與せざりしが、幾程なくして御勘當を蒙り、出家してけり。人は只義と信との道をば、正しくすべき事をや。

正なやーけ
しからず

爲か。正なや人によりてこそ、左様の御言葉は候ふべけれ。口惜しき仰かな」とぞ申しける。御寮聞こし召し、此の法師も兄共には劣らざりけり。助け置きなば、又大事を起すべき者なり。よくぞ召し寄せたりける、と思し召しける。禪師重ねて申しけるは、「とても助かるまじき身、刹那のながらへも苦しく候へ」と、頻に申しければ、生年十八歳にして、終に斬られにけり。無慚なりし次第なり。君此の者の氣色を御覽じて、「剛なる者の孫は剛なり。哀彼等に世の常の恩を與へて召し仕はど、思ひ止まる事もありなまし。弓矢取る者は、誰劣るべきにはあらねども、斯程の勇士天下にあらじ」と、仰せもあへず御涙を流させ給ひしかば、御前伺候の侍共も、袖を濡さぬは無かりけり。

九 京の小次郎が死する事

爰に此の人々に語らはれ、同意せざりし一腹の兄京の小次郎も、同じき八月に、鎌倉殿の御一門、相摸守の侍に、由良の三郎が謀叛起して出でけるを、止めんとて、由井の濱にて大事の傷を蒙り、曾我に歸り、五日を経ずして死にけり。同じくは五月に、兄弟どもと一所に死にたらば、如何がよかるべき、とぞ申し合ひける。

ちけるをば知らせざりけるか」。「恐ながら將軍の仰とも存じ候はず。一腹一生の兄共が、親の敵討ち候ふとて知らせ候はんに、假令出家にて候ふとも、同意せぬ畜生や候ふべき。御推量も候へ」とぞ申し上げたりける。君聞こし召し、「汝が眼ざしを見るに、頼朝に意趣ありと見えたり。事を尋ねん爲に召しつるに、粗忽の自害所存の外なり」。「粗忽とはいかでか承り候ふ。既に御使給はつて、召し捕れとの御詔を承つて、其の用意仕らぬ事や候ふべき。哀兄共が知らせてだに候はゞ、二人の者共をば祐經に押し向けて、愚僧は一人にて候ふ共、君を一太刀伺ひ奉りて、後世の訴に仕るべきものを」とて、御前を睨み、言葉を放ちてぞ申しける。君聞こし召して、「頼朝には何の意趣かありけるぞ」。「我等が先祖の敵、又は兄共が敵にて候はずや。是につきても果報の勝劣程、憂き物は候はず。唯御威勢に押されて、斯様に罷り成つて候ふ。恐ながら身が身にて候はゞ、源平兩氏の戦に、何れ甲乙候ふべき」と申しければ、君は暫く物をも仰せられず、稍ありて猶も心を見んと思し召しけん、「其の手にても生きてんや。さも思はゞ助くべし」と仰せ下されければ、禪師承つて、からくくと打ち笑ひ、「よくく人とも思し召され候はずや。御助けある程ならば、争て是迄召さるべき。若さもとや申さんを、聞こし召されん

をや、同じ死する命、兄弟三人一つ枕に討死せば、如何が人目も嬉しからまし。今更後悔すれども叶はず。佛前に参りて、御經開き讀まんとすれども、文字も見えざりければ、卷き納め、珠數さらくと押し揉み、「南無平等大恵、一乘妙典願はくは、法華讀誦の功に依り、利那の妄執を消滅し、安樂世界に迎へ取り給へ」と祈請して、劔を抜き弓手の脇につきたて、右手へ引き廻さんとする所を、同宿早く見付けて、「是は如何に」と取り付き押へければ、「退き候へ。人手に懸らんより、清き自害をして見せ申さん。一つは同朋達の思し召さるゝ所もあり。空しく鎌倉へ捕られん事、寺中坊中の名折なり。放し給へ」と怒りけれども、大勢なれば力及ばず、其の上愈弱り果てにけり。誠に心ならず、人數多にて働かさず、自害半にぞしたりける。無念と言ふも餘あり。御使は庭上に充満して責めければ、力及ばず、上意黙止し難くして渡されにけり。口惜しかりし次第なり。御使請け取り輿に乗せて、鎌倉へこそ上りけれ。君聞こし召されて、御前に召されければ、昇れて参りけり。君御覽せられて、「和僧は河津が子か」と御尋ありければ、禪師坊前後も知らざりけるが、君の仰を聞きて、兩の手を押し動し、起き上らんと志しけれども叶はで、頭を持ち上げ、「さん候ふ、伊東が爲には孫候ふ」と申す。「諸兄共が敵討

偷盜貪欲愚痴邪淫妄語綺語惡口兩舌瞋恚

五逆―第一父を殺し第二母を殺し第三阿羅漢を殺し第四佛身より血を出し第五和合僧を破ること

願頼母しかりけり。此の人々は父の爲に、身を捨てける志なれば、罪にして然も罪にあらず、其の上在世の時も、仁義を亂さざりしかば、後の世までも惡道へは、墮在せられじ、と頼母しくぞ覺えける。

八 禪師法師が自害の事

諸も此の人々の弟に、御房とて十八になる法師一人あり。故河津の三郎が、忌の中に生れたる子なり。母思の餘に棄てんとせしを、伯父伊東の九郎養ひて、越後の國九上と云ふ山寺に登せ、伊東の禪師とぞ言ひける。九郎平家へ参りて後親しきにより、源義信が子と號して、折節武藏の國にありけるを、頼朝聞し召し、義信に仰せつけて召されければ力無く、家の子郎黨數十人下し事、不便なりし次第なり。大方同じ兄弟とは申しながら、乳の中より他人に養はれ、然も出家の身なり、是も唯普通の儀なりせば、彼等まで御尋あるまじきを、兄共の世に超え、名を萬天にあけし故ぞかし。義信の使は、本坊に來りて斯様の次第を言ふ。禪師法師聞きて、「心憂や、弓矢取の子が、我が家を捨てて他の親につく事は、ゆめくあるまじき事なり。斯様の罪過は、其の源を正されける

露の命も危くぞ見えし。親しき人々集りて、憂世の習、一御身獨の歎にあらず。さしも繁昌し給ひし平家の公達も、一度に十人二十人、目の前にて海中に沈み、弓箭にたづさはり給ひし時の別どもよ、日數積り年月隔たりぬれば、さてのみこそ過ぎ候ひしか。今の世にも或は父母に後れ、或は夫妻に別れ、又は親子兄弟に離れ、歎く者のみこそ多く候へども、忽ち命を捨つる者なし。誠に御子の爲に御身を捨て給はん事、逆なる罪の深さ、いか許と思し召す。泣く涙も猛火となりて、子に懸るところ聞きつれ。まして子の爲に、命を失ひ給はん事、罪業の程を知らず。いかにも身を全くして、後世菩提をとひ給へ」と、様々に申しければ、僅湯水ばかりぞ聞き入れける。さてあるべきならねば、僧達を請じ奉りて、正等正覺頓生菩提とぞ取り納めける。母の弔はるべき身の、逆なる事に歎き悲みける。けにや世の中の定めなき、涙の種とぞなりにける。箱根の別當も此の事を聞き、急ぎ曾我に下り、諸共に歎き給ふ。「箱王が出でし時の面影、愚老が涙の袖に止り、師弟親子の別變るべきに非ず」とて、さめくんと泣き給ふ。其の後は持佛堂に参り、彼の菩提を弔ひ給ひけり。七日々四十九日迄息らず追善あり。誠に彌陀の誓願は、十惡五逆の大罪をも、一念十念の力を以つて、來迎引接し給ふべき、他力の本

ものに喩ふ

さかし—
惻なり

「人のならひ神や佛に参りては、命を永く福幸をこそ祈るに、此の者共は只明暮死失せんとのみ申しければ、此の度遁れたりとも、終に添ひ果つまじきぞや。夫につけても箱王を、年比不孝して添はざりし事の悔しさよ。それは草の蔭にても聞け、誠には不孝せず。たとへば法師になさんとせし事の叶はぬに、不孝と言ひしを次手なくして、何となく月日を重ねし許なり。小袖直垂をきせし事も、日比に變らざりしを、二の宮の女房の着する様にて取らせしを、誠と思ひて妾をばつらき者にや思ひけん。よしなかくに今は歎きの便なり、打ち添ひ馴るゝ身なりせば、愈名残も惜しかるべし。かくて我が身は何にかは存らへ果てん憂き命、有るもあられぬ例かな」と、悶え焦れける。曾我の太郎も幼き時より取り育て、わりなき事なれば、實子にも劣らず、心様又さかしかりしかば、はいきやうちくていの思をなし、朝夕疎かならざりしかども、所領廣からざれば、一所を分くる事もなし。其の上御勘當の人々の末なれば、清けならんも恐ありなどと、思ひし事も夢ぞかし。今更後悔益なしとぞ歎きける。母は日の暮れ夜の明くるに従ひて、愈思ぞ増りける。「惜しからざりし憂身なれども、彼等が行方若やと思ふ故にこそ、辛き命も惜しかりつれ、今は淨土にて生れあひ、今一度見ん」とて、湯水を絶ちて伏沈みければ、

打ち伏しぬ。稍ありて息の下にて口説きけるは、「誠に、凡夫の身程はかなきものはなし。此の小袖を請ひて、永き世迄の形見と思ひて、折節こそあるに、二人連れて來たり、請ひける物を知らずして、返せと言ひけん悔しさよ。五郎も限と思ひてや、此の度強く言ひけるぞや。幾程なきもの故に不孝して、年比添はざりける悲しさよ。なほも心強く赦さざりせば、一目も見ざらまし。ひさしく添はざしりに、珍らしくも頼母しくも覺えしものを、せめて三日とも打ち添はで名残惜しさよ。なつかしかりつる面影を、何時の世にかは逢ひ見ん」とて聲も惜まず泣き居たり。いかなる賤の男賤の女に至る迄、涙を流さぬは無かりけり。二の宮の女房をはじめとして、親しき人々は集りて泣き悲む事斜ならず。思ひの餘に、母は十郎が居たりける所に倒れ入り、「爰にも住みしものを」と許にて憂かりし閨の傍に、書きたる筆のすさびを見れば、一切有爲法、如夢幻泡影如露亦如電、應作如是觀、とぞ書きたりける。我が身を有りとも思はぬ口ずさび、見るに涙も止まらず。此の押板には古今萬葉を始めとして、源氏伊勢物語に至るまで、數の草紙を積み置きたれども、今より後の慰びには、誰かは是を見るべき、と見るに思ぞ増りける。文をば二の宮の女房ぞ、泣く／＼讀み連ねける。聞くにつけても、心は心とも覺えず。

二の宮の女
房—兄弟の
姉
一切有爲法
云々—金剛
般若經の
語、一切生
あるものゝ
はかなきを
夢幻以下の

瀬川の鵜鶴御前より、大磯へつけさせ給ふ御使なり」とて、走り通りけり。二人のものども聞きて、仕損じ給ふべしとは思はねども、一期の大事なれば、心もとなく思ひ奉りしに、何事なくて本意を遂げ給ひぬるよ、と歎の中の喜にて、しだいの形見を面々に奉りけり。

六 同じく彼の者共が遁世の事

されば此の者共は、我が家にも歸らず、高野山に尋ね登り、共に髻切りて、墨染の衣の色に心をなし、一筋に此の人々の、後世菩提を弔ひけるぞ有難き。

七 曾我にての追善の事

諸も母は、子供の返したる小袖を取り上げて、おのゝ顔に押し當てよ、其の儘倒れ伏し、消え入り給ひにけり。女房達漸介錯し、藥など口にそよぎ、養生しければ、僅に目ばかり持ち上げける。せめての事に、文を開きて讀まんとすれども、目もくれ心も心ならねば、文字も更に見え分かず。「恨めしや妾を」と許言ひて、胸に引き當てまた

しやうある
—生ある
覺束なき—
心懸りなる

大勢に取り込められ、いかに隙なくましますらん、今は御身も疲れ給ふらん、と思へば、走り歸りて御最後を見奉らまほしきも、隔りぬれば叶はずして、只泣くより外の事ぞなき。暫くありて松明の数も次第に少く、火の光も薄くなり行けば、君の御命もかくやと火の光も名残惜しく思ひければ、道の邊に倒れ伏し聲も惜ます泣き居たり。馬もしやうある物なれば、人々の別をや惜みけん、富士野の空を顧みて、二三度までぞ嘶えける。さてあるべきにあらざれば、遠近のたづきも知らぬ山中に、覺束なきは富士野なり。泣く／＼駒の口を牽き、故郷へとは急けども、行きもやられぬ山路の、末もさだかに見え分かず。爰に人の使とおほしくて文持ちたる者、後より急ぎ来る。團三郎袖をひかへて、「今宵井出館には何事のありければ、松明の数の見え候ひつる」と問ひければ、「さればこそとよ。知り給はずや、曾我の十郎五郎といふ人兄弟して、一族の工藤左衛門の尉殿を、親の敵とて討ち給ひぬ。剩へ御所の内まで斬り入りて、日本の侍達の斬られぬは候はず。手負死人二三百人もこそ候ふらん。されども兄の十郎は夜半に討死し給ひぬ、弟の五郎殿は曉に及び生捕られ給ひき。この人々のふるまひは、天魔鬼神の荒れたるにや、かゝる夥しきことこそ候はざりつれ。かやうの事を大磯の虎御前の妹、木

御不審—御
勘當

申されければ、君聞こし召し、「左様の不覺人にてあるべくは、誰にても仰せ付けらるべき物を」とて、伊豆次郎は御不審を被り、奥州外の濱へ流されしが、幾程なくて悪しき病をうけて、同じ年の九月に廿七歳にして失せにけり。これ偏に五郎が憤の報の所にやと、唇を反さぬ者はなかりけり。時致は五月に斬られければ、祐兼は九月に失せにけり。不思議なりし例、因果歴然とぞ見えける。

五 鬼王團三郎曾我へ歸りし事

爰にこの人々の郎黨に、鬼王團三郎とて二人の者あり。彼等は富士の裾野井出の館より、次第の形見を取り持ち曾我の里へぞ急ぎける。されども惜みし名残なれば、心は後にぞ留りける。けにや幼少よりとり育て奉り、世にも出で給はゞ、我々ならでは誰かはあるべき、と人も思ひ我も亦頼しかりつるに、かやうに成り行き給ひしかば、慕ひあぐがれしも叶はで、泣くく曾我へぞ歸りける。思の餘に道の邊に暫し休らひ、富士野の方を願みれば、松明多く走りめぐり、只萬燈會の如し。今こそ事出で來ぬると見えければ、我が君の御命いかゞ渡らせ給ふらんと、心もとなさ限なし。只二人ましませば、

紀信—漢の高祖の臣、高祖榮陽に圍まれし時高祖の身代となりて楚軍に降れり

打處も覺えざりける所に、筑紫のなかだと申しけるは、御家人訴訟の事ありて左衛門尉につきけるが、訴訟叶ふべき比祐經討たれければ、是等が所爲とや思ひけん、わざと太刀にては斬らで苦痛をさせん爲に、鈍き刀にて搔首にぞしたりける。さしたる親類知音にあらざる者も、別を惜み名残を悲ますといふ事なし。然るに勇士の至つて猛きは、敵を破り利を碎き、軍の先を駆くる故に、敵の爲に囚ると雖も、藝を感じ身を助け情をかくるは先規なり。傳へ聞く紀信が軍車に乗りしも、武威を感じ、楚王將になさんといひしかども、自ら死を望み、沛公軍を破り、片時も生きん事を悲みて、戦場の石に腦を碎きてうせにき。因て勇士敵の爲に命を暫くも全うせざるは、古今の例なり。然れば五郎も背にや亡せんと思ひしが、夜明けて死す事矢立の杉の一二の枝の謂なり。

四 伊豆次郎が流されし事

さても悪事千里を走るならひにて、伊豆次郎水練なりと鎌倉中に披路ありければ、秩父重忠御前にて此の事を聞き、「曾我の五郎をば重忠給はつて、重代のかうひらにて誅し候ふべきを、不覺第一の伊豆次郎に下し給はつて、可愛き次第と承り、口惜しく候ふ」と

晉の文王は云々―文王は文公の誤齊の桓公は云々―管仲を用ひし事

構へて―注意して

の上の御恩有難し、と皆人感じける。是や文選の詞に、晋の文王は其の仇を親みて諸侯をさと、齊の桓公は其の仇を用ひて天下を匡す、とは、今の御代に知られたり。五郎委しく承つて、「首を召されんに於ては遁るゝ所なし。暫時も存へ申さん事深き愁と存すべし。母が事は辱く仰せ下され候へども、故郷を出でし日より一筋に思ひきり候ひぬ。御恩に一時も疾く首を召され候へ。兄が遅しと待ち候ふべし、急ぎ追ひ付き候はん」とすゝみければ力なく、御厩の小平次に仰せつけられ斬らるべかりしを、犬房が「親の敵に候ふ」とて、ひらに申し受けゝれば渡されにけり。口惜しかりし次第なり。祐經が弟に伊豆の次郎祐兼といふ者あり、五郎を請取りて出でにけり。時致東西を見渡し「某が姿を見ん人々は、いかに嗚呼がましく思ふらん。さりながら親の爲に棄つる命、天神地祇も納受し給ふべし。つけたる繩は孝行の善の綱ぞ、各よつて手をかけ結縁し給へ」と申しければ、けにもといはぬ人ぞなき。其の後五郎をばはますかにつれて、松が崎といふ處の岩間にひきする斬らんとす。時致見かへり申しけるは、「構へてよく斬り候へ。人もこそ見るに、惡しく斬り候はど、惡靈となつて七代まで取るべし」といひければ、祐兼聞きて、誠に斬り損じなばいかなる惡靈にも成るべし、と思ひしより、膝振ひ太刀の

しさよ。夫それにつきても前生ぜんじやうの宿業しゆくごふこそ拙つたなけれ。現在げんざいの果くわを見て未來みらいを知る事なれば、來う世ぜまたいかならん。南無阿彌陀佛なむあみだぶつとぞ申しける。犬房いぬばうはなほも打うたんと寄りけるを、「いかにや退のき候へ」と、繩取なはとりの者共いひけれども退のかざりけり。御寮御覽ごれうごらんせられて、「犬房退のき候へ。なほもの問はん」と仰おませられければ、其の時退のきけり。是これや禽鳥百さんてうももを數かずふると雖も一鶴くわくしに如しかず、數星相連すせいあひつらなると雖も一月ぐわつしに如しかず。君の御詞おんことば一つにてぞ退のきける。

三 五郎が斬らるゝ事

さて其の後君仰おませられけるは、「汝が申す所一々に聞き開ひらきぬ。されば死罪しざい宥なだめて召し使ふべけれども、傍輩ほうはい是を嫉そねみ、自今じこん以後いご狼藉らうぎやく絶たゆべからず。其の上祐經すけつねが親類しんるゐ多ければ、其の意趣いしゆのがれがたし。然れば向後きやうこうの爲に汝を誅ちゆうすべし、怨うらみを残のこすべからず。母が事をぞ思ひおくらん、不便ふびんにあたるべし。心安く思ひ候へ」とて御硯おんすゐ召し寄せ、曾我そがの別所べつしよ二百餘町を、彼等兄弟が追善つぜんの爲に、賴朝よりざう一期母一期ごごと自筆じひつに御判ごはんを下され、五郎に戴いたかせ、母が方へぞ送られける。けにや心の猛たけく情なさけの深ふかき事人に勝すぐるゝにより、屍かばね

心にくから
ず一ゆかし
からず
さんしー君
子の誤か

はれて、小柴垣を破りて逃げしは如何に。御分の良き太刀も心にくからず」と言ひければ、聞く人皆汗を流さぬはなかりけり。實光なまじひなる事をいひ出し、赤面してぞ立ちにける。これやさんし一言思慮あるべき事にや、とぞ申しける。

二 犬房が事

爰に祐經が嫡子犬房とて、九つに成りける童あり。御前さらぬ切者にてぞ有りける。傍にて父が事をつくぐ聞き、さめぐと泣き居たりしが、思ひやかねけん走りかより、五郎が顔を扇にて二つ三つ打ちけり。時致打ち笑ひ、「汝は祐經が嫡子犬房な。其の年の程にてよくこそ思ひよりたれ。打てやく、打つべしく犬房よ。我々も幼少にして、汝が親に父を討たせぬ。年比の思いかばかりぞや。今更思ひ知られたり。誠に古りにし事を思へば、打つ杖はいたまずして、弱る親の力を歎きしこころざし、五郎が今に知られたり。討たるよをば痛まず、ぬしが心を思ひやるこそ哀なれ。珍しからぬ事なれども、果報程勝劣ある物はなし。我々祐經を思ひかけて、此の二十餘年の春秋を送りしに、汝はいみじき生れじやうかな。昨夜討ちたる親の敵を、只今心のまゝに討つ事の義

泣き居たり。和田畠山を始めとして、皆袖をぞ濡されける。かゝる所に十郎が太刀を御侍に取り渡し、善きぞ悪しきぞと申し合ひける。中にも昨夜追つ立てられ、柴垣を破り逃げたりし、新開の荒四郎實光進み出でて申しけるは、「曾我の者共は敵討つて、高名はしたれども、太刀こそ悪き太刀を持ちたれ。是程のえせ太刀を持ちて、君の御前にて斯る大軍しける不思議さよ」と言ひければ、時致聞きて、眼を見出し荒四郎をはたと睨んで、「吾殿は何處を見てそれをえせ太刀とは申すぞ。只今御前にて申して無用の事なれども、男の悪き太刀持ちたるは恥なる間申す也。それこそ、や殿、よく聞け。平家に聞えし新中納言の太刀よ、屋島の合戦に如何がし給ひけん、船中に取り忘れ給ひしを、曾我の太郎取つて、九郎判官へ参らせしを義経、神妙なり、さりながら、御分高名して取りたる太刀なれば、汝に取らする、とて給はりたる太刀なり。奥州丸と言ふ太刀是なり。祐成が元服せし時、曾我殿の給びたるぞとよ。夫に就きては思の儘に敵を討ち取りぬ。兄弟して斬り止むるもの、一二百人こそあるらん。是程こらへたる太刀を、いかでえせ太刀なるべき」實光なほも止まらず、「既に太刀折れぬる上は」と言ひければ、五郎から／＼と打ち笑ひ、「人の太刀悪しと言ふ人、定めて善き太刀は持ちぬらん。但しあのえせ太刀に追



孫金鉞
騷動之
圖



いづれをわ
きて云々―
其の働振五
郎との甲乙
あり難しの
意

しき武士かな」とて、御袖を顔に當てさせ給ひければ、御前祇候の侍ども、心あるも無
きも、皆涙流さぬは無かりけり。稍ありて君、御涙をおさへさせ給ひて、さて十郎が振
舞を聞こし召すに、いづれをわきて言ひがたし。「誠に討たれたるやらん」と仰せられけ
れば、「新田に御尋ね候へ。黒鞘卷に赤銅作の太刀、村千鳥の直垂ならば、誠に候ふ」
と申す。さらば實檢あるべしとて、新田の四郎を召されければ、黒鞘卷に赤銅作の折太
刀、村千鳥の直垂に、首を包みて童に持たせ、五郎が弓手の方を間近く、首を見せてぞ
通りける。五郎は今迄思ふ事なく高言して有りけるが、兄が首を一目見て、膽魂も失ひ、
涙に咽ぶ有様は、盛りなる朝顔の、日蔭に萎るゝ如くにて、無慙といふも餘あり。稍あ
りて申しけるは、「羨しくも先立ち給ふ者かな。同じ兄弟と言ひながら、幼少より親の敵
に志深くして、一所とこそ契りしに、祐成は昨夜夜半に討たれ給ふに、時致は心ならず、
今迄長らふる事の無念さよ。誰か此の世にながらへて候ふべき。死出の山にて待ち給へ。
聽て追ひ付き奉り、三途の川をば手に手を取り組み渡り、閻魔王宮へは諸共に」と言ひ
も果てず、涙に咽びけり。袖にて顔をも押へたけれども、高手小手に縛められければ、左
手へ傾き、右手へうつぶき、猶しも溢るゝ涙をば、膝に顔を持たせつゝ、只さめぐと

とんこうの
魚―呑鈎の
魚か

かまへーこ
しらへ

聞こし召されて、「敵討つての後、身を軽く思ふは道理なり。頼朝を何とて敵と思ひけるぞ。」「自業自得果とは存じ候へども、伊東入道が謀叛により、我等が本領永く絶えぬ。先祖の敵にては渡らせ給はずや。又は閻魔王の前にて日本の大將軍、鎌倉殿を手に掛け奉りぬと申さば、一の罪や赦さるべき、と随分窺ひ申しつれども」と申す。「扱五郎丸には如何にして抱かれけるぞ。」「それは彼の童を女と見なし、何事か候はんと存じて、不慮に捕られて候ふ。斯様なるべしと存する者ならば、只一太刀の勝負にて候はんずる者をとて、後悔益なし。是偏に宿根の盡きぬる故なり。けにや羅網の鳥は、高く飛ばざるを恨み、とんこうの魚は、飢を忍ばざるを歎く、とはようらの言葉なるをや、今こそ思ひ知られたり。君の御佩刀の鐵の程をも見奉り、時致が腐太刀の刃の程をも試し候はん者を」と、言葉を放ちてぞ申しける。君聞こし召され、「猛將勇士も、運の盡きぬる上は」と仰せられ、双眼より御涙を流させ給ひて、「これ聞き候へ人々、口比は思はぬ事なれども、只今頼朝に問はれて、當座のかまへの言葉なり。叶はぬ迄も通れんとこそ言ふべきに、露ほども命を惜まぬ者かな。世にありなば思ひ止まる事も有ぬべし。餘の侍千萬人よりも、斯様の者をこそ一人なりとも召し使ひたけれ。無慙の者の心やな。惜

にて候ふ。面傷おもてきずはよも候はじ。只今ただいま召し出して御覽ごらん候へ」と申しければ、聽やぶて御使して聞きここし召されけるに、申す如く面傷は無かりけり。面目めんぼくなうぞ聞えける。「又王藤内わうとうないを何とて討ちけるぞ」。「恐れ入おそつて候へども、年比としごほの傍輩けうはいの討たれ候ふを、見捨みすてゝ逃にぐる不覺ふかくじん人や候ふべき。誠に健氣けんきに振舞ふるまひ候ひつる者をや。人富ひとみみて故郷こきやうに歸かへらざるは、錦にしきを着きて夜行よるくが如しと言ふ、古き言葉をや知りたりけん、所領安堵しよりやうあんぞの印、本國ほんこくに下りしが、祐經すけつねに暇乞いさまこひとて道より歸りての討死うちじに、不便ふびんなり」とぞ申しける。此の言葉により、「神妙しんぼうなり。是も頼朝よりともが先途せんずに立ちけるよ」とて、「本領子孫ほんりやうしそんに於て仔細しさいなし」と、重ねて御判ごはん下されけり。是も兄の十郎じやうが館やかたを出でし時、王藤内わうとうないが妻子さいし、さこそ歎なげかざらん、無慚むざんなりしと言ひし、言葉ことばの末にぞ申しける。偏ひとへに時致ときさげが情によつて、所領安堵しよりやうあんぞす、有難ありがたしとぞ感じかんける、稍ややありて、「頼朝よりともをも、敵かたきと思ひけるか」と御尋おんたづねありければ、五郎承ごろうじやうつて、「さん候ふ。身に思の候ひし時は、木も萱かやも怖おそしく、命いのちも惜おししく存ぞんじ候ひしが、敵かたき討つての後のちは、如何いかなる天魔疫神てんまやくじんなりとも、と存ぞんじ候ふ。まして其の外は、生いきたる者とも思ひ候はず。されば千萬人きふにんの侍きぶらひよりも、君一人をこそ思ひ掛け奉りしかども、御果報ごくわほう目出度めでたき御事ごじにて渡わたらせ給へば、御運ごうんにおされて、斯様かやうに罷まかりなりて候ふ」と申したりければ、君

けいしやく
—景述、官
人の行跡を
いふ令の
語、轉じて
勘考の意

もろこし—
唐が原、相
摸の地名

こざかしく
—小賢しく

喜び出したつる母や候ふべき。御けいしやく」とぞ申しける。「扱親しき者共には如何に」。
「身貧にして、世にある人々にかくと申し候はんは、只手を捧けて是を縛らせ、首を延
べてこれを斬れ、とこそ申し候はんすれ。誰かは頼まれ候ふべき。愚なる御説かな」とぞ
申しける。君けにもとや思し召しけん、「父母親類に至る迄も仔細なし。又祐經は、伊豆
より鎌倉へ繁く通ひしに、道にては、狙はざりつるか」。「さん候ふ。この四五箇年の間、足
柄、箱根、湯本、國府津、酒匂、大磯、小磯、とかみが原、もろこし、相摸川、懷島、や
つまとが原、腰越、稻村、由井の濱、深澤邊に徘徊し、野路、山路、宿々、泊々にて狙
ひしかども、敵の連るゝ時は四五十騎、連れざる時も二三十騎、我々は、つるゝ時は兄
弟二人、連れざる時は只一人、思ひながらも空しく今迄延び候ひぬ。又「祐經は敵なれ
ば限あり、何とて頼朝がそとろなる侍共をば、多く斬りけるぞ」。「それこそ理にて候
へ。御所中に参りて、かゝる狼藉を仕る程にては、千萬騎にて候ふとも、餘さじと存す
る所に、こざかしく、敵は何處にあるぞ、と尋ね候ふ間、公には忠を盡し、忠には命を
捨つる習神妙に存じて、是にありと申す聲に驚きて、足の立處も知らず、逃げのびし間
罪つくりと存じて、追うて斬り殺すに及ばず、戦ふ許の側太刀、かたの如く當てたる迄

取り、昨夕けふふべの夜半やはんに御前おんまへにて、本意ほんいを遂つぎげ候まをひぬ。今は何をか思おもひ残のこして、命惜いのちをしく候まをふべき。御恩ごおんには、今一時いまひとときも疾はやく頭かうべを刎はねられ候まをへ」とぞ申しける。彼は京へは上のほらざりしかども、箱根はこねの別當べつたうに契約けいやくせし故ゆゑ、太刀たちの出所いでどころをも隠かくし、又は別當べつたうの罪科ざいこもやと思おもひて、斯様かやうにぞ申したりける。君聞きここし召めされ、「此この太刀たちの出所いでどころ、隠かくさん爲なにこそ申まをすらん。更に別當べつたうの咎とがにあらず。先祖重代ぢゆうだいの太刀たち、箱根はこねの御山おやまに籠こめし由よし、兼かねてより傳つたへ聞きこく。如何いかにもして取り出ださばや、と思おもひしを、神物しんもつになる間ま、力ちから及およばざりつるに、只ただ今頼朝いまよりざらが手わたに渡わたる事偏ひとへへに、正八幡大菩薩しやうはちまんたいはさつの御計おんはからひと覺おぼえたり。斯様かやうの事無なくては如何いかにして、再主ふたたびぬしになるべき」とて、自ら御頂戴ごちやうだいありて、錦にしきの袋ふくろに入れ深ふかく納をさめ給たまふ。御重ごちゆう寶ほうの其そのの一つなり。代々傳だいてつたはりけるとかや。やゝありて君仰おほせられけるは、「此この事會我たうだいの父母ちちははに知らせけるか」。五郎承ごろうじやうつて、「日本にっぽんの大將軍だいしやうぐんの仰おほとも存ぞんじ候まをはぬ者ものかな。當代たうだいならすいづれの世よにか、繼子けいしが惡事あくじく企くだてんとて、暇乞いさまこひ候まをはんに、神妙しんべうなり急いそぎ僻事ひがことして、我われまどひ者ものになせとて、喜よろこぶ父ちちや候まをふべき。又母ははの慈悲じひは山野さんやの獸類けだもの、江河かうがの鱗族うろこづまでも、子こを思おもふ志こころの深ふかき事は、父ちちには母ははすぐれたりとこそ申し候まをへ。況いはんや人界にんがいに生しやうを受け、廿歳餘はたちあまりの子供こどもが、命死いのちしなるとて母ははに知らせ候まをはんに、急いそぎ死しにて物思ものおもはせよとて、

入れられける。「其の上敵の爲に捕はるゝ者、時致一人にも限らず、殷湯は夏臺に捕はれ、文王は羑里に捕はる、更に恥辱に非ず」とて、打ち笑ひてぞ居たりける。哀と言はぬ者ぞなき。五郎御前に参りければ、君御覽ぜられて、「これが曾我の五郎と言ふ者か」。「某が事候ふよ」とて立ち上り、縄取中に引き立てければ、警固の者共、狼藉なりとて引き据ゑたり。其の時相摸の國の住人新開の荒四郎實光、伊豆の國の住人、狩野の助宗持座敷を立つて、「申し上ぐべき事あらば、急ぎ申し候へ」と言ふ。時致聞きて大の眼を見出して、彼等を礎と睨みて、「見苦しきぞ人々、御前遠くばさもありなん、近ければ直に申すべし。左様なれば問はれて申す白狀に似たり。問はるゝによりて申すまじき事を申すに非ず。面々骨折りに退き候へ」とて、嘲笑ひてぞ居たりける。君聞こし召され、「神妙に申したり。各退き候へ。頼朝直に聞くべし」と仰せ下されけり。扱五郎居直り、顔振り上げて、高らかに申しけるは、「兄にて候ふ十郎が最後に申し置きて候ふ。我等が父を祐經に討たせ候ひしより以來、年月狙ひし心の内、如何許とか思し召され候ふ。それにつき候ひては、一年君御上洛の時、酒匂の宿より附き奉り、祐經が御供して候ひしを、泊泊に徘徊し、便宜を窺ひ候ひしかども叶はで京にり上、四條の町にて鐵よき太刀を買ひ

曾我物語 卷第十

一 五郎御前へ召し出され聞こし召し問はるゝ事

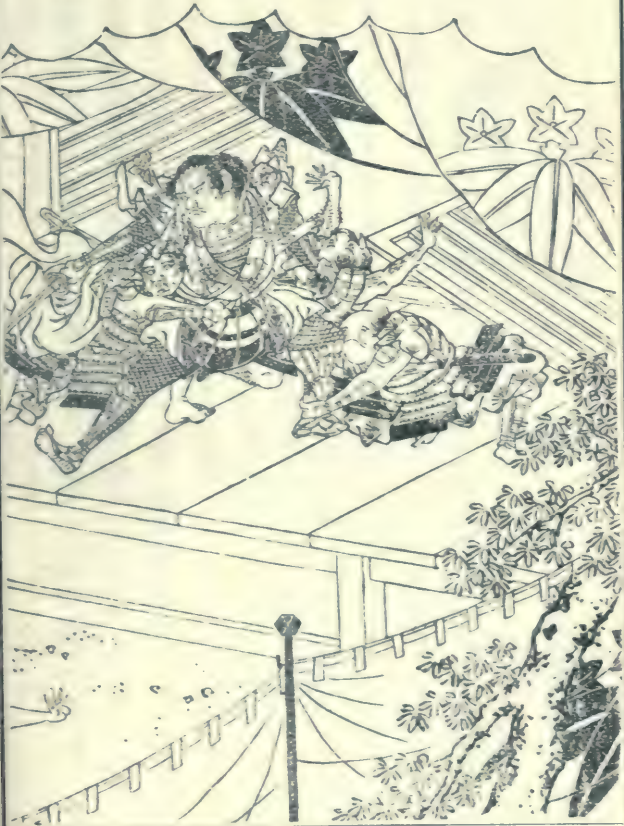
扱も仰を承つて小平次罷り出で、御廐の下部、總追國光五郎を預り、既に御廐の柱に縛り付けて、其の夜は守り明しける。「大將殿より尋ね聞こし召さるべき事あり、曾我の五郎連れて参れ」との御使ありければ、小平次繩取にて参りけるを、母方の叔父、伊豆の國の住人に、小川の三郎祐定申しけるは、「如何に小平次侍程の者に繩付けずとも、具して参れかし。山賊海賊の輩に非ざれば、逃げ失すきにも非ず。事により人にこそよれ。無下に情無し」と言ひければ、五郎聞きて、「誰一言の情を残す者のなきに、御分の芳志の嬉しさよ。さりながら御分、時致に親しき事皆人知れり。斯様になりて親類入るべからず。詮無き沙汰して人に聞かれ、荷擔人したりと言はれ給ふな。人の上を善く言ふものは無きぞとよ。時致は、盜強盜せざれば、千筋の繩は付くとも恥ならず。是は父の爲に誦み奉りし、法華經の紐よ」とて、事とも思はざる氣色して、御坪の内へぞ引き

かなぐりー
一本下につ
くの二字あ
り

郎は足を踏み落し、立たんとする所に、小平次起き上り、双の足に取り付きければ、其の外の人々、餘すな漏すなとてかなぐり、是や文選の辭に、百足虫は死に至れども戯れずと言ふ、心は猛く思へども多勢に叶はずして、空しく搦め捕られけり。無慙なりし有様なり。君も此の由聞こし召して、糸毛の御腹巻に御重代の鬚切ぬき、出でさせ給ひける所に、相摸の國の住人、大友左近將監が嫡子に、一法師丸とて生年十三になりけるが、御前さらぬ者なるが、小賢しく御寮の御袖を控へ奉り、「日本國だにも君は居ながら從へ給ふに、是は僅なる事ぞかし。いか様若き殿原の醉狂か、又は女の盃論か宿論か、いづれにてか候はんに、御座ながら尋ね聞こし召され候へ」と止め申しければ、實にもとや思し召しけん、止まり給ひけり。さしも出でさせ給ひて、五郎に見えさせ給ふものならば、危くぞ覺えける。後に彼の一法師いしくも申したりとて、御恩賞にぞ預りける。誠に古き言葉を見るに、大ざうとうけいに遊ばず、君子はふんしに拘はらず、と言ふ事、今こそ思ひ知られたれ。其の後小平次御前に参り、畏りて申し上げけるは、「曾我の五郎を搦め捕りて候ふ。十郎は討たれて候ふ」と申したりければ、「神妙に申したり。五郎をば汝に預くるぞ」と仰せ下されける、哀なりし次第なり。

五郎丸
時致と
組為図





太刀むね一
刀背

ならへず一
こらへすの
誤か

爰に五郎丸とて、御寮の召し仕はるゝ童あり。元は京の者なりしが、叡山に住して十六の年師匠の敵を討ち、在京叶はで東國に下り、一條の次郎忠頼を頼みたりしに、忠頼御敵とて討たれ給ひて後、此の君に参りたりしが、究竟の荒馬乗の剛の者、七十五人が力を持ちけり。宵の程は、夜討といへども音もせず、御前近く祇候せしに、五郎が親家を追うて入るを見て、薄衣引き被き、幕の傍に立ちけり。五郎一目見たりけれども、館を出でし時、女房に手ばしかくるなと、兄が言ひし言葉ありければ、太刀むねにて通り様に、一太刀當てよぞ過ぎにける。五郎丸と知るならば、唯一太刀に失はんと、危ふくこそ覺えけれ。時致も親家を手捕にせんと思ふ所を、五郎丸我が前をやり過し、續いて懸る腕をくはへて取り、「得たりやおう」と抱きける。五郎は大力に抱かれながら、物ともせず、「こは如何に女にては無かりけり。物々しや」と言ふ儘に、續いて内へぞ入りにける。五郎丸叶はじとや思ひけん、「敵をばかうこそ抱け、斯様にこそ抱け」と、高聲なりければ、彼等が傍輩、相摸の國の前司太郎丸走り寄り、「逝すな」とて取り付く。其の後御厩の小平次を始めとして、手柄の者共走り出でて、四五人取り付きけれども、五郎は物ともせず、二三人をば蹴倒し、大庭へ蹀り出でんと心ざしけるが、板敷ならへずして、五

を斬り分けて走り寄り、兄が死骸に轉び懸り、「恨めしや時致をば誰に預け置き、何處まで生きよとて、捨てよは何處へ御座するぞや。ながらへ果つべき憂身にも非ず。連れて座ませや」と打ち口説き、涙に咽びて伏したりけり。實にや同じ兄弟と言ひながら、互の志深ければ、別の涙さぞ有るらんと推し量られて哀なり。茲に又堀の藤次と名乗りて、武者一人出でて、「五郎は何處へ行きたるぞや。兄が討たるよを見捨てよ落ちけるかや。未練なり」とて尋ねける。五郎此の詞を聞き、起き上り太刀取り直し、「や殿、藤次殿、兄の討たるよを見捨てよ、何處へか落つべき。祐成は新田が手にかよりぬ。時致をば吾殿が手にかけて首を取れ。惜まぬ身ぞ」と言ひければ、藤次は五郎が太刀影を見て、かいふいて逃けにける。五郎追つ懸け、「汝は何處まで逃ぐるぞ」とて追つ懸けよれば、他所へ逃けては叶はじと思ひけん、御前さして逃けにける。五郎も續いて入りければ、親家幕をつかんで投げ上げ、御侍所へ走り入り、五郎も幕を投げ上げて、親家を掴まん掴まんと思ひける風姿は、只天魔の如く、雷の落ちかよるかと思えける。

十五 五郎召し捕らるゝ事

犬居になり
て一屍もち
つきて

龍門―白樂
天の詩の語
前にいづ

り、太刀より傳ふ血ののりに、手の内繁く廻りければ、太刀を平めて討ちければ、十郎が太刀鐔元より折れにけり。忠常勝に乗つて討つ程に、左の膝を斬られて、犬居になりて腰の刀を抜き、自害に及ばんとする所を、忠常太刀取り直し、右の肘の端を指し通す。忠常今はかうと思ひ、館を差して歸りけるを、十郎伏しながら、懸けたる言葉ぞ無慙なる。「や殿、新田何處へ行くぞ、情なし。同じくは首を取つて、上の見參に入れよ。親しき者の手に懸らんは本意ぞかし。返せや殿、忠常」と、呼ばられて、實にもと思ひけん、即ち立ち歸り、乳の間斬りて押し伏せたる。祐成が最後の言葉ぞ哀れなる。「五郎は何處にあるぞや。祐成こそ新田が手に懸り、空しくなるぞ、時致は未だ手負ひたるとも聞えず、如何にもして君の御前に參り、幼少よりの事ども、一々に申し開きて死に候へ。死出の山にて待ち申すべきぞ。追つ付き給へ南無阿彌陀佛」と言ひも果てず、生年廿二歳にして、建久四年五月二十八日の夜半許に、駿河の國富士の裾野の露と消えにけり。弓箭取る身の習、今に始めぬ事なれども、親の爲に命を輕くし、屍は路逕の岐に捨つれども、名をば龍門の雲井にあぐる、哀と言ふも愚なり。五郎は兄が最後の言葉を聞きて、死骸なりとも今一目見んと思ひ、又忠常を討つべきと思ひけん、太刀振り廻し、大勢の中

れ。

十四 祐成討死の事

稍暫時ありて、伊豆の國の住人に新田の四郎、十郎に打ち向ひ、「如何に曾我の十郎祐成か。」「むかひは誰そ。」「新田の四郎忠常よ。」「扱は御分と祐成は正しき親類なり。」「其儀ならば互に後ばし見するなよ。」「左右にや及ぶ。今宵未だ尋常なる敵に逢はず。言甲斐なき人の郎黨の手に懸らんと心に懸りつるに、御邊に逢ふこそ嬉しけれ。」「一河のしるしに同じくは、忠常が手に懸けて、後日に勸賞に行はれ給はど、御邊の奉公と思ひ給へ」と言ひて打ち合ひける。十郎が太刀は少し寸延びければ、一の太刀は新田が小肘に當り、次の太刀にて小鬚を斬られけり。されども忠常、究竟のつはものなれば、面も振らず、大音聲にて罵りけるは、「伊豆の國の住人、新田の四郎忠常、生年二十七歳、國を出でしより、命は君に奉り、名をば後代に止め、屍は富士の裾野に曝す、さりととも後は見すまじきぞ。御分も引くな」と言ふ儘に、互に鎧を削りあひ、時を移して戦ひけるに、新田の四郎は新手なり、十郎は宵よりの疲武者、多くの敵に打ち合ひて、肱下り力も弱

一河のしるし
説法明
眼論に曰く
宿二樹下、
汲二河流、
一夜同宿一
日夫妻、皆
是先世結縁

べつの次郎
—親の別當
の別を取り
たるならむ
恥ある一名
譽を重んず
る

や、引くな」と言ひて飛んで懸る。言葉は主の恥を知らず、「御免あれ」とて逃けけるを、十郎繁く追つ駈けたり。餘りに迹所なくして、小柴垣を破りて、高道にして逃げにけり。次に甲斐の國の住人、市川黨に、別當の次郎進み出でて申しけるは、「如何なる白痴なれば、君の御前にて斯る狼藉をば致すぞ。名乗れ聞かん」と言ふ。五郎申しけるは、「事新しき男の問ひ様かな。曾我の冠者原が、親の敵討ちて出づると幾度言ふべきぞ。臆して耳が潰れたるか。親の敵は陣の口を嫌はず。扱斯様に申すは誰人ぞ聞かん」と言ふ。「是は甲斐の國の住人、市川黨の別當の大夫が次男、べつの次郎定光」とぞ答へける。五郎聞きて、「吾殿は盗人よ。御坂片山つるはんどくに籠り居て、京鎌倉に奉る年貢御物のひやうじの少なきを、遠矢に射て追ひ落し、片山里の下司人の立て逢はざるを夜討などにし、物取る様は知りたりとも、恥ある武士に寄り合ひ、晴の軍せん事はいかでか知るべき。今時致に逢ひて習へ、教へん」とて、踢り懸り打つ太刀に、高股きられて引き退く。是等を始めとして、兄弟二人が手に懸けて五十餘人ぞ斬られける。手を負ふものは三百八十餘人なり。數々出づる松明も、一度に消えて元の闇にぞなりにける。人は多くありけれども、此の人々の氣色を見て、此所や彼所に群立つて、寄する者こそ無かりけ

高紐―鎧の
胴釣りの紐

無下なる者
―甚つまぬ
者

み違ひ、側目にかけてちやうど打つ。肩先より高紐の端へ、切先を打込まれ、引き退くとは見えしかど、それも其の夜に死ににけり。比しも五月廿八日の夜なりければ、闇さは暗し、降る雨は車軸の如くなり。「敵は何處にあるぞや」とて、走り廻る所を、小柴垣に立ち隠れて、出づるをちやうど斬りては蔭に引き籠り、向ふ者をばたと斬る。斬られて引き退く者を、後陣に受け取りて、味方討する所もあり。二人の者共、呼ばはりけるは、「武藏相摸のはや者共は如何に。是も重代是も重代と思ふ太刀と刀の鐵の程をも見せよかし。敵は十人ある、二十人あると、後日に沙汰するな、我等兄弟許ぞ。火を出せ其の明にて名乗り合はん。無下なる者共かな」と呼ばはりければ、御殿の舍人、時武と言ふ者、傘に火を付けて投げ出す。之を見て館々より我劣らじと、雜人の蓑笠に火を付けて投げ出す。二千軒の館より、松明を出しければ、萬燈會の如し。白晝にも似たり。彼等二人は素肌にて敵に逢はんと走り廻る有様は、小鷹の鳥に逢ふが如し。斯る處に武藏の國の住人、新開の荒四郎と名乗りかけて、進み出でて申しけるは、「敵は何十人もあれ、某一人にや越ゆべき。出で會へや對面せん」とぞ言ひたりける。十郎打ち向ひて、「優しく聞ゆる者かな。大將に代りて仕へる者は、必ず其の陣を破るとは、文選の詞なるを

いしく—よ

十郎に走り向ひて、左の手の中指二つ討ち落されて逃げけるが、御所の御番の内に走り入り、「敵は二人ならでは無く候ふ。いたくな騒ぎ候ひそ」と言ひければ、「神妙に申したる。いしくも見たり」とて、高名の御意にぞ預りける。四番に遠江の國の住人、原の小次郎斬られて引き退く。五番に御所の黒弥五と名乗り押し寄せ、十郎に追ひ立てられ、小鬘斬られて引き退く。六番に伊勢の國の住人、加藤の彌太郎攻め來つて、五郎が太刀を受け外し、二の腕斬り落されて引き退く。七番に駿河の國の住人、船越の八郎押し寄せ、十郎に高股斬られて引き退く。八番に信濃の國の住人、海野小太郎行氏と名乗りて、五郎に渡り合ひ、暫し戦ひけるが、膝を割られて犬居に伏す。九番に伊豆の國の住人、宇田の小四郎押し寄せ、十郎に打ち合ひけるが、如何がしけん、首討ち落されて廿七歳にて失せにけり。十番に日向の國の住人、臼杵の八郎押し寄せ、五郎に渡り合ひ、眞額割られて失せにけり。此の次に、安房の國の住人、安西の彌七郎と名乗つて、「敵は何處にあるぞや」とて立ちけるが、十郎打ち向ひて、「人々は優くも面も振らで討死したるは見つらん。愚人は銅を以て鏡とす、君子は友を以つて鏡とす。引くな」と言ひて討ち合ひけり。彌七も然る者なり、「さうにや及ぶ」と言ひあへず飛んで懸る。十郎足を踏

六種震動一
佛説に見ゆ
即ち動起踊
(以上形)震
吼覺(以上
聲)の六
蕙薔は云々
一香草と臭
草、善惡一
にすべから
ざる喻、世
説に見ゆ
けう鷺一巢
鷺にてふく
ろうと鳳凰
なるべし

馬よ、鞍よ、とひしめき周章つる程に、具足一領に二三人取り付きて、引き合ふ者もあり、繫馬に乗りながら、打ちあふる者もあり、某かれがしと罵る音は、唯六種震動にも劣らず。稍ありて武者一人出て来て申しけるは、「何者なれば我が君の御前にて、斯る狼藉をば致すぞ。名乗れ」とぞ言ひける。十郎打ち向ひて、「以前名乗りつれば定めて聞きつらん。斯く言ふ者は如何なる者ぞ。」「是は武藏の國の住人、大樂の平馬の助」と名乗る。祐成聞きて「蕙薔は入る者を同じくせず、けう鷺は翼を交へず、我等に逢ひて斯様の事は過分なり。これこそ曾我の者どもよ、敵討つて出づるぞ。止めよ」と言ひて追つ駈けたり、馬の助詞には似ずかいふつて、逃けにけるが、押付のはづれに胛骨かけて打ち込れ、太刀を杖につき引き退く。二番に是等が姉婢、横山黨愛甲の三郎と名乗つて押し寄せたり。五郎打ち對ひ言ひけるは、「紫燕は柳樹の枝に戯れ、白鷺は蓼花の蔭に遊ぶ、斯様の鳥類までも、己が友にこそ交はれ。御分達相手には不足なれども、人を選ぶべきに非ず。時致が伎倆の程を見よ」とて、紅に染りたる友切眞額に差し挿し、電の如くに飛んで懸る。叶はじと思ひけん、少し棲む處を、進みかよつて討ちければ、五郎が太刀を受け外し、弓手の小腕を打ち落されて引き退く。三番に駿河の國の住人、岡部の三郎、

養報恩をこそ送らざらめ。科も無き母痛められ、子供の行方知らぬ事あらじとて責め問はれ、禁獄死罪にも行はれば、我等がいたさずして叶ふまじ。來心に逃げ隠れ居て、彼所此所より搦め出だされ、あまつさへ諸國の侍共に、幾程の命惜みて、曾我の者共が髻切り乞食をす、と沙汰せられん事は恥かし。其の上一旦隠れ得たりと言ふとも、東は奥州外の濱、西は鎮西鬼界が島、南は紀伊の路熊野山、北は越後の荒海までも、君の御息の及ばぬ所あるべからず。天に翔り地に入らざらん程は、一天四海の内に、鎌倉殿の御權威及ばざる事なし。唯羅網の鳥、釣を含む魚の如し、信實の仰とも覺えず。時致におきては、向ふ敵あらば、太刀の目釘堪へん程は、命こそ限りなれ」と申しければ、十郎聞きて、「和殿が心見んとてこそ言ひたれ。祐成が心をもかねてより知りぬらん。一足も引き候ふまじき」と語らひて、寄する敵をぞ待ちかけたり。

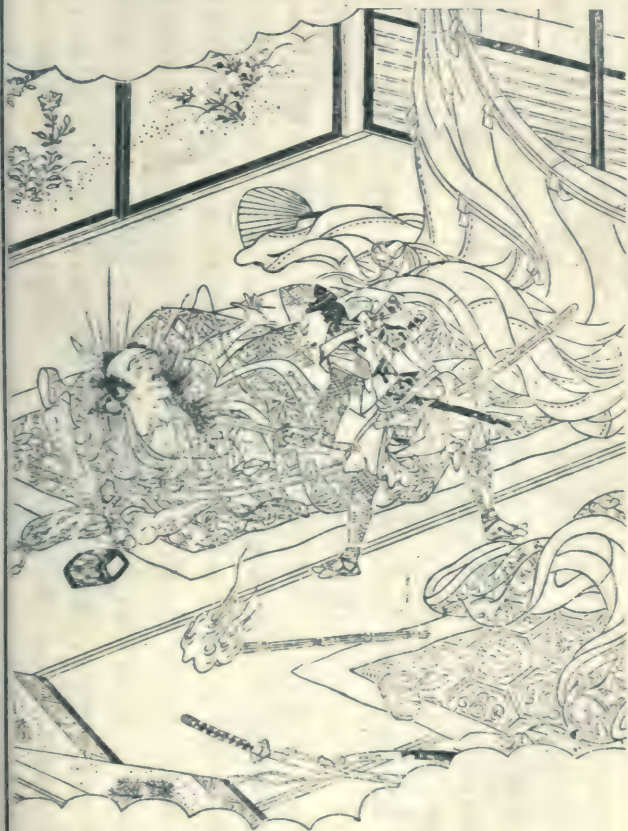
十三 十番斬の事

去る程に夜討の時、恐しさに聲も立てざりし二人の君共が、「御所中に狼藉人ありて祐經も討たれたり、王藤内も討たれたる」と、聲々にこそ呼ばはりければ、鎧、甲、弓矢、太刀、

門もんの尉祐經じようすけつねを討うち取り罷まかり出でづる。我われと思おもはん人々ひとらは、討うち止とめ高名かうみやうせよ」と言いへども、晝ひるの狩場かりくらに疲つかれければ音おともせず。小柴垣こしかきの下もとに跳をり寄より、猶聲なほこゑを舉あげて呼よばはりけれど、東西南北とうざいなんぼくに音おともせず。三浦みやうの館やかたには、かねてより知りたれば、態わざと出でづる者ものもなし。次の館やかたに聞きき付けて、坂西はんざい、赤澤あかざは、柏原かしはらを始はじめとして、宗徒むねだの者共ものども出でんとする所ところを、重忠しげたけ聞きき、「餘あまりな騒さわぎぞ。一定ぢやう會かう我われの人々ひとらが本意ほんいを遂さぐると覺さえたり。如何いかに嬉うれしく思おもふらん。心靜しづかによくさせよ。さらぬだに若わかき者は、心騒しさわぎて仕損しそんずる事ことありぬべし。靜しづまり候しづへ」とありければ、出でづる者ものこそなかりけれ。兄弟けいだいの人々ひとらは暫しばし休やすらひ、敵かたきを待まちてども無なかりければ、十郎言じじろいひけるは、「いざや時致ときぢ一先落まつおちちて、今一度母ははに逢あひ奉ほうり、思おもふ事ことをも語かたり申し、猶事なほ延のびば髻もこりを切り、如何いかならん野のの末すえ、山やまの奥おくにも閉しぢ籠こもり、父ちちの孝養けうやうをもせん。それ叶かなはずば心靜しづかかに念佛ねんぶつ申し、自害じがいするまで」と言いひければ、五郎聞ごろうきき、餘あまりの憎にくさに音おともせず。稍ややありて、「此このの仰おほせこそ條々然じょうじょうぜんるべしとも覺さえず候しへ。弓矢取ゆみやる者ものの習ならひには、假初かりそめにも一足ひとあしも逃にぐると言いふ事こと、口惜くちをしき事ことにて候しふ。命いのちの惜おししき者ものこそ入道にんどうをもし山林さんりんに閉しぢ籠こもり候しはんすれ。幼少えうせうより思おもひし事ことは遂さぐるなり。何事なにことを思おもひ殘のこして落おちち候しふべき。母ははに對面たいめんの事こと、科さかを懸かけ奉ほうるべき爲ためか、させる孝けう

我が
兄弟
の
意
と
導
の
圖





れたに―れ
たさに歟

さんき―慚
愧なるべし
六根―耳目
鼻舌身意

どめを刺しけるか。とどめは敵討つての法なり。實檢の時、とどめの無きは、敵討ちたるに入らず。「さらばとどめを刺し候はん」とて、五郎立歸り、刀を抜き取つて押へ、「御邊の手より賜はつて候ふ刀ぞかし。只今返しぬるぞ、確に受け取り給へ。取らずと論じ給ふな」とて、柄も拳も通れくと刺す程に、餘りに繁く刺しければ、口と耳と一つになりにけり。扱こそ後に人の申しけるは、「宵に悪口せられし其のねたに、慙と口を裂かる」とぞ申しける。幼少より敵を見んと箱根に祈請申し、御前にて祐經を見初むるのみならず、一腰の刀を得たり、今とどめを刺したる刀是なり。權現の御恵とて感じける。流石に離れぬ一門の中、哀れと思ひけん、「我過去の宿業と言ひながら、一念の瞋恚により、敵味方とは隔てたるなり。さんき懺悔の力により、六根の罪障を消滅し、因果の輪廻を只今盡し果てよ、一念の菩提心誤り給はで、一つ蓮の縁となし給へ。阿彌陀佛」と回向して、館をこそは出でたりけれ。十郎は庭上に立ちて、五郎を待ち得て言ひけるは、「我々名乗りて人々に知られん」「尤も」とて、大音聲にて罵りけり。「遠からん人は音にも聞け、近からん者は目にも見よ。伊豆の國の住人、伊東の次郎祐親が孫、曾我の十郎祐成、同じく五郎時致とて、兄弟の者共、君の館の前にて、親の敵一家の工藤左衛

給ふな。人々をば見知りたり。後に争ふな」とは言ひけれども、刀をだにも取らずして、高這にしてぞ逃げたりける。十郎追つ懸けて、「晝の詞には似ざるものかな。何處迄逃ぐるぞ。餘すまじ」とて、左の肩より右の乳の下かけて、二つに斬つて押し退けたり。五郎走り寄り、左右の高股二つに斬りて押し退けたり。四十餘の男なりしが、時の間に四つになりてぞ失せにける。逃げば逃がすべかりし者を、かいふしては逃げずして、慙なる詞言ひて四つになるこそ無慙なれ。五郎、王藤内が果を見て、一首取り敢へず詠みたり。

馬は吠え牛は嘶くさかさまに四十の男四つになりけり

十郎聞きて「よく仕りたり。一期詠じても、是程こそ詠み候はんすれ。秀歌に於ては、時致集にも召されなん。思ふ本意をば遂げぬ。今は憚る事無し」と、高聲に言ひ散し、どつと笑ひて出でにけり。

十二 祐經にとづめを刺す事

扱も兄弟は、敵を心の儘に討ちて、門より外に出でけるが、十郎言ひけるは、「祐經にと

年一度現
す

き引きては當て、七八度こそ當てにけれ。やゝありて時致、此の年月の思ひ、唯一太刀にと
思ひつる氣色顯はれたり。十郎是を見て、「待て暫し、寢入りたる者を斬るは、死人を斬
るに同じ。起さんものを」とて、太刀の切先を祐經が胸もとに指し當て、「如何に左衛門
殿、晝見參に入りつる曾我の者共參りたり。我等程の敵を持ちながら、何とて打ち解け
伏し給ふぞ。起きよや左衛門殿」と起されて、祐經もよかりけり、「心得たり。何程の事
あるべき」と、言ひも果てず起き様に、枕元に立てたる太刀を取らんとする所を、「やさ
しき敵の振舞かな。起しは立てじ」と言ふ儘に、左手の肩より右手の脇の下、板敷まで
も通れところは斬り付けよれ。五郎も「得たりやおう」と罵りて、腰の上手をさし上げて、
疊板敷斬り通し、下もち迄ぞうち入りたる。道理なるかな、源氏重代友切何者か堪るへ
き。當るに續く所なく、「我幼少より願ひしもこれぞかし。妄念拂へや時致」「忘れよや五
郎」とて、心の行くく三太刀宛こそ斬りたりけれ。無慙なりし有様なり。

十一 王藤内を討ちし事

斯て後に伏したる王藤内、寢おびれて、「詮なき殿原の夜中の戲哉。過し給ふな、人達し

無明の酒―
昏迷して覺
むる期なき
をいふ佛經
の語

優曇華―譯
して瑞應華
といふ三千

へぞ入りにける。兄弟ともに立ち添ひて、松明振り上げよく見れば、本田が教に違はず、敵は此所にぞ伏したりける。二人が目と目を見合せ、あたりを見れば人もなし。左衛門の尉は、手越の少將と伏したり。王藤内は覺少しひき退けて、龜鶴とこそ伏しにけれ。十郎敵を見付けて弟に言ひけるは、「和殿は王藤内を斬れ。祐經をば祐成に任せよ」とこそ言ひける。時致聞きて、「愚なる御詞かな。我々幼少より佛神に祈りし事は、王藤内を討たん爲か。此の者は逃げば逃すべし。立ち逢はど斬るべし。祐經をこそ千太刀も百太刀も、心の儘に斬るべけれ。早斬り給へ、斬らん」とて、勇み懸りて立ちたりけり。果報目出度祐經も、無明の酒に酔ひぬれば、敵の入るをも知らずして、前後も知らでぞ伏したりける。二人の君どもをば衣に押し巻き、疊より押しおろし、「汝聲立つな」と言ひて、松明側に指し置き、十郎枕に廻りければ、五郎は後にぞ廻りける。二人の君共はじめより知りたりけれども、餘り恐しさに、音もせず。兄弟の人々は、祐經を中に置きて、各目と目を見合せ、打ち領きて喜びけるぞ哀れなる。三千年に一度花咲き實なる、西王母が園の桃、優曇華よりも珍しや。優曇華をば拜みて手折ると言ふなれば、それに譬ふる敵なれば、拜みて斬れや斬れとて、二人が太刀を左衛門の尉に、當てとは引

に披露せられんこそ悲しけれ。自害して失せなん」とて立ちたりけれ。

十 祐經討ちし事

去る程に兄弟の人々、敵は討ち漏しつ、呆れて立ちたる處に、秩父殿の御内なる本田の次郎親經、具足指し固め、夜廻の番なりしが、「庭上今宵も餘しけるよ」と、小聲に言ふ音しけり。いか様伊豆駿河の盜賊の奴原にてあるらん。討ち止め高名せん、と思ひ、太刀の鐔元二三寸透し、足早に歩み寄りけるが、心をかへて思ふ様、一定會我的殿原の、日比の本意を遂げんとて、夜晝附け廻りつるが、左様の人にててもや、と障子の隙より忍びて見れば、案にも違はず、兄弟は敵のかへたる館を知らで、呆れてこそは居たりけれ。痛はしく思ひ、左衛門の尉が伏したる館の妻戸を密に押し開き、何とも物をば言はずして、扇を出して招きけり。五郎此の山きつと見て、本田が我等を招くは様こそあれ、と思ひ、松明わきに引き側め、廣縁につと上り、「何事ぞや本田殿」と叫げば、本田小聲になりて、「夜陰の苗字は詮無し。波にゆらるゝ沖つ船、知邊の山は此方ぞ」と言ひ捨てゝこそ忍びけれ。「其所とも知らぬよる浪、風を頼りの港入り、心有るよ」と戯れて、館の内

りけり。されば神慮の御助にや、咎むる者も無かりけり。「すはや好きぞ」と叫きて、足早にこそ通りけれ。唯事ならずとぞ見えける。

九 祐經館をかへし事

既に祐經が館近くなりて「此所ぞ」と言へば、打ち領き既に館へ入らんとしける時、十郎弟が袖を控へ、「我々敵に打ち逢ひなば、刹那の隙も有るまじ。今こそ最後の隙なれ。心靜に念佛せよ」と言ひければ、「然るべし」とて、兄弟西に向ひて手を合せ、「臨命終の佛達、親の爲に回向する、迎へ取り給へ」と祈念して館の中へぞ入りにける。されども王藤内が申す様に隨ひ、祐經思はぬ所に館をかへたりければ、唯空しく土器踏み散して、一人も無かりけり。是は如何にと松明振り上げ見れば、館も同じ館、座敷も宵の所なり。人は多く伏したれども、晝の狩場に疲れ、酒に酔ひ伏しければ、誰そと咎むる者もなし。此の人々は力無く館を立ち出でて、天に仰ぎ地に伏し、悲みけるぞ道理なる。「敵に縁なき者を尋ぬるに、我等には過ぎじ。今宵はさりとともと思ひしに、あましぬるこそ口惜しけれ。斯様にあるべしと知るならば、曾我へ人をば返すまじき者を、さなきだに世間

眞如禪定の時は云々―眞實修行に入る時は一心をこめて他事あるまじき也

給ふにや、眞如禪定の時は、無二亦無三と説かれてこそ候へ。さるにおきて自も無く他もなく、法界平等なり、何者かありて、邪とも又正とも隔てん。萬法一如にして、阿字本不生の願をなし給へ、と示し給ひければ、匿王猶しも邪に入つて、自らが言葉徒になりて、無禮に等しく候ふべきにや。愈怒を高くして、尊者の理に受け候はず。是ひとへに驕慢瞋恚の外道と、あさましくこそ覺えけれ。其の時富樓那、にやくいしきたんか

長道具―長刀熊手類の長き武器

いをんしむしやうくが、斯様の人は、正に邪道を行じて、如來を見る事叶ふべからず、そこそ説かれて候へ。色に耽り言葉に尋ねんは、むじやうしはくかんくつと見えたるをや」。匿王猶承つて、其の繩は誰か致しける。其の心に歸りて尋ね給へど、外には無し、と宣ひける所に、匿王一理を受けて、恭敬禮拜して、佛果に生じ給ふ。即ち尊者引き具し、靈山に參り給ふ。實にや本文に、私の志を忘れ、誠の苦行によつて、波斯匿王も方便の教化によれり。かへすく私なしとこそ示されてこそ候へ。但し梶原と言ふ曲者の館の前如何すべき。我等を見知りたる者なり。されども歸るべき道にもあらず。浮沈爰に極れり。運に任せよ」とて通る。案の如く辻固の兵、數十人長道具立ち並べ、誠に厳しく見えたり。詮方なくして、「南無二所權現助け給へ」と念じて、知らぬ様にて通

富樓那一釋
迦十六弟子
中にて説法
第一の人

勿^なれ。大事^{だいじ}の前に小事^{せうじ}なし、とこそ見え候へ。身ながらも善^よくこそ陳^{ちん}じぬれ。是^{こゝ}や富樓那^{ふるな}の辯^{べん}舌^{ぜつ}にて、波斯匿王^{はしのくわう}の憤^{いきどほり}をやめけるも、今に知られたり」とぞ申し合ひける。

八 波斯匿王の事

「抑^{そも}富樓那^{ふるな}の辯^{べん}舌^{ぜつ}にて匿王^{くわう}の怒^{いかり}をやめける山來^{さんらい}を尋^{たづ}ぬるに、昔釋尊^{しやくそんりやうぜん}靈山^{りやうせん}にて法^{ほふ}を説き給ひしに、波斯匿王^{はしのくわうもんばふけちん}問法結縁^{もんぽうけつえん}の爲^{ため}に參^{まゐ}らせられたり。富樓那尊者^{ふるなそんじや}と申^{まう}すは、辯舌^{べんぜつ}第一^{だいいち}の佛^{ぶつ}弟子^{でし}にて座^{ましま}しけり。然^{しか}れども匿王^{くわう}の臣下^{しんげ}の子^こなり。教法^{けうぽう}に心^{こゝろ}を染^そめて、匿王^{くわう}の方^{かた}をだに見遣^{みつか}り給^{たま}はざりけり。匿王^{くわう}怒^{いか}りを爲^なして曰^{いは}く、「扱^{さて}も尊者^{そんじや}は自ら佛前^{ぶつぜん}にありつるを、終^{つひ}に夫^それとだにも見^みられざりつる奇怪^{きくわい}さよ。此^{こゝ}の度^{たび}參^{まゐ}らん時は、其^{その}の色^{いろ}見^みすべし」とて、高臣^{かうしん}數相^{かずあひむ}具^ぐし、怨敵^{をうてき}を含^{ふく}みて參^{まゐ}られける時、富樓那尊者^{ふるなそんじや}は路中^{ろちゆう}にて行き逢^あひ給^{たま}ひ、如何^{いか}に尊者^{そん}者^{じや}、何處^{いづこ}へ、と宣^{のたま}ふ。尊者^{そんじや}聞^{きこ}き給^{たま}ひて、殊^{こと}の外^{ほか}恭敬^{くわうぎやう}して、過^かぎにし佛^{ぶつ}の御説法^{ごせっぽう}の時、君參^{まゐ}り給^{たま}ひしかども、法文歡喜^{ほふもんくわんぎ}の砌^{みせり}、身^みを忘れ他^たを知らざりし事^{こと}なれば、其^{その}の禮更^{れいさら}に無^なかりしなり。匿王^{くわう}は未^{いま}だ心^{しん}ぞく殘^{のこ}り、是非^{ぜひ}にたづさはり給^{たま}ひき。それ亦^{また}道理^{だうり}なきに非^{あら}ず。御憤^{ごふん}默止^{もくし}し難^{がた}し。王宮^{わうぐう}よりの御金^{おのてんぎん}、さぞと知られて急^{いそ}ぎ參^{まゐ}りたり。誠^{まこと}に此^{こゝ}の道理^{だうり}辨^わへ

者共怒りける其の中へ、ながくと立ち交り、「御分達我々をば見知り給はずや。廳南殿の御内に、彌源次彌源太とて、兄弟の厩の者なり。何時ぞや宇都宮殿北山へ御出の時、見參に入りたりしをば、忘れ給ひ候ふや」と言ふ。其の中に溫和しき雑色歩み出で、十郎が顔をつくぐと守りけり。祐成彼奴は怖しと思へば、松明少し側へ廻し、眼を少し眇めて居たりけり、此の者共よく守りて、「誠に思ひ出したり。片瀬より關戸へ御歸りに、參り逢ひたる様に覺ゆるぞや」。十郎、事こそよけれと思ひければ、「さぞとよ殿原、其の時の酒盛には、座敷の一の狂人ぞかし。忘れ給ふか」と言ひければ、「實に其の人にてましましけり。殿は人をば宣へども、二王舞をばし給はぬか」。傍なりける男が、「是程の知音にてましますや。御使なるに急ぎ通し給へ」と言ふ。「哀れ濁酒一桶あらば、如何なる御使なりとも、得手の二王舞を所望申さぬか。一番見たし」と言ひければ、十郎聞きて、「同じ心にて候ふ。さりながら後日に參り逢はん」とて、側目にかけてぞ通りける。此の者共打ち寄りて、「誤りけん、通り給へや人々」とて、木戸を開きて押し出す。兄弟の人々は、鰐の口を逃れたる心地して、十郎言ひけるは、「斯様の處にては、如何にも降を乞ふべきに、御分の雜言心得ず。孔子の言葉をば聞き給はずや。事を見ては勇む事

おさへてー
強ひて

ける。五郎打ち寄りて、「御内方の者なり。苦しからず」とて打ち寄り、木戸を押し開く。「おさへて通るは様あり。我等が知らぬ人有るまじ。御内方とは誰なるらん。苗字を名乗れ」とぞ咎めける。「我等は苗字もなきものなり。通し給へ」と言ひければ、「御内方へとは虚言なり。やはか通る」と廣言して、木戸を荒くぞ押し立てたる。五郎は木戸を閉てられて、大きに怒つて言ひけるは、「苦しからねば通るなり。苦しき者の振舞をみよ。これこそさる所へ強盗に入る者よ。止めんと思はん奴原は組み止めよ。手には懸けまじき者を」と言ひければ、番の者共是を聞き、「夜半のひやうじは何の用ぞや。斯様の狼藉静めん爲なり。打ち止めよ」と追つ駆けたり。五郎も「心得たりや、事々し。懸かりて見よ」と言ふ儘に、太刀取り直し待ちかけたり。十郎少しも騒がず、静々と立ち歸り、「是は更に苦しからぬ者にて候ふ。廳南殿より廳北殿へ大事の御物具の候ふを、取りに参り候ふが、夜深に候ふ間人を連れて候へば、若き者にて酒に酔ひて雑言申し候ふ。只某に御免候へ」と、打ち笑ひてぞ言ひたりける。御免と言ふに勝に乗り、「さればこそとよ不審なり。其の儀ならば事易し。廳南殿へ尋ね申す可し。其の程待ち給へ」とぞ怒りける。十郎聞きて、かよる笑止こそなけれ、さりながらも陳じて見んと思ひければ、此の

さうにや云々―兎角仰せらるゝまでもなし

五つ一夜の八時頃

多あるべきぞ、太刀の振り廻し心得候へ。罪造に手ばしかくるな。後日の沙汰も憚りあり」と言ひければ、「さうにや及び給ふ」とて、足早にこそ急ぎけれ。

七 館々の前にて咎められし事

此處に座間と本間と館數十軒向ひ合ひてぞ打ちたりける。彼の兩人が郎黨箒を數多とこゝろに焚かせ、木戸を結び重ね辻を固め、通るべき様なかりけり。如何せんとやすらふを見て、「何者ぞ是程に夜深けて通るは。殊に其の體事がましく出で立ちたり。怪しや通すまじ」とぞ咎めける。「苦しからぬ者なり。是も用心の態人をこそ咎むべけれ」。「いや誰にてもましまして、五つ打ちて後叶ふべからず、との御掟なり。通すまじき」とぞさへける。十郎打ち向ひて、「御咎あるまじき者なり。是は土屋殿より愛甲殿への御使なり。通し給へ」と言ひければ、「さらば通せ」と許しけり。此處をば過ぎぬれど、いまだ幾個の木戸幾重の關警固をか通るべき。事難しき折節かな、と足早に行きけるに、千葉の介が館の前をぞ通りける。此處にも木戸おきぶく立てよ、番装束の警固の者數十人、これも箒を焚きてぞ固めける。「何者なれば是程夜更けて通るらん。遣るまじき」とぞ咎め

六 兄弟出立つ事

一寸斑―烏帽子の紐を白黒一寸置に斑に染めたるものから賞布―さよみに同じ木皮もて製せる一種の布

扱も此の人々は、郎黨共はこしらへ返しぬ。今は思ひ置く事なし。いざや最後の出立せん。然るべしとて、十郎が其の夜の出立には、白き帷子の腋深く搔きたるに、群千烏の直垂の袖を結びて肩に懸け、一寸斑の烏帽子懸を強くかけ、黒鞘巻赤銅造の太刀をぞ持ちたる。同じく五郎が装束には、拾の小袖の腋深く搔きたるを、狩場の用意にやしたりけん、から賞布の直垂に、蝶を二つ三つ所々に書きたるに、紺地の袴の括ゆるらかに寄せさせ、袖をば結びて肩に懸け、平紋の烏帽子懸を強くかけ、赤木の柄の刀を差し、源氏重代の友切肩に打ち懸け、誠に進める姿ぶきが昔とも言ひつべし。頼母しとも餘りあり。十郎松明振り上げて、「此方へ向き候へや時致、飽かぬ顔見ん」と言ふ、五郎聞きて、敵に逢ひ刹那の隙もあるまじければ、是こそ最後の見参の爲なるべし。誠に祐成を兄と見奉らんも、今許と思ひければ、兄が顔をつくつくと守りけり。十郎も又弟を見んも是を限と思ひければ、松明差し上げつくく見、涙ぐみけり。互の心の中推し量られて哀なり。「今は是迄候ふ、御急ぎ候へ」とて、五郎先に進みけるを、十郎袖を控へて、「女數

しだいー兄
弟か

菩提ー佛道

刀を抜かんとす。時致早くも座敷を立ち、二人が間に押し入つて、涙と共に言ひけるは、「誠に汝等が志は切なり。然りとは雖も、我々は程様を變へ制するを聞かずして、狼藉を致すものならば、淺間大菩薩も御照覽候へ。未來永劫不興すべし。我等に命を捨つると言ふとも、故郷へ形見を届けずば、長く志に受くべからず。此の上は制するに及ばず」と、荒らかにこそ叱りけれ。あかぬは君の仰なり、しだいの形見を給はつて、曾我へとてこそ歸りけれ。互の心の内さこそは悲しからめ、と思ひ遣られて哀れなり。

五 悉達太子の事

斯て鬼王團三郎は、次第の形見を賜り、泣くく曾我へぞ歸りける。是や悉達太子の十九にて、菩提の志を起し、檀特山に入り給ひしに。車匿舍人犍泥駒を賜り、王宮へ歸りし思、今更思ひ知られたり。鞍の上空しき駒の口を引き、故郷へとは急けども、心は後にぞ止まりける。五月雨の雲間も知らぬ夕暮に、何處を其所とも知らねども、其方ばかりを顧みて、涙と共に歩みけり。心の中ぞ無慙なる。

三伏―夏至
後の第三庚
日を初伏と
し第四を中
伏とし立秋
後の初庚を
末伏とす此
の二十日間
は極暑の候
也

ばど、誰^{たれ}やの者^{もの}にか劣^{おと}るべき、と頼母^{たのも}しくも可憐^{いとし}しくも思^{おも}ひ奉^{ほう}り、今^{いま}まで影形^{かげかたち}の如^{ごと}く附^つき添^そひ参^{まゐ}らせたる印^{しるし}に、情^{なさけ}無くも落^おちよと承^{うけ}る、假令^{たとひ}罷^{まか}り歸^{かへ}りて候^{まち}ふとも、千^ち年^{ねん}萬^{まん}年^{ねん}を保^{たも}ち候^{まち}ふべきか、只^{ただ}御供^{おんども}に召^よし具^ぐせられ候^{まち}へ」とて、稚^{いさけ}き子^この親^{おや}の跡^{あと}を慕^{した}ふ如^{ごと}くに、聲^{こゑ}も惜^{をし}まず泣^なき居^ゐたり。兄^{あに}弟^{てい}の人^{ひと}々^々も、心^{こゝろ}弱^{よわ}くぞ見^みえける。いかにもして歸^{かへ}すべき者^{もの}をと聲^{こゑ}を高くして、「如何^{いか}に未^み練^{れん}なり、君^{くん}臣^{しん}の禮^{れい}も黙^{もく}止^どし難^{がた}けれど、心^{こゝろ}に従^{したが}ふを以^{もつ}て孝^{かう}行^{こう}とせり。其^{その}の上^{うへ}終^{つひ}に添^そひ果^はつまじき身^みなれば、名^な殘^{ざん}惜^しき事^{こと}盡^つくべきにあらず。急^{いそ}ぎ出^で候^{まち}へ」とて、荒^{あら}らかにこそ宣^{のたま}ひけれ。鬼^{おに}王^{わう}居^ゐ直^{ちよく}り、畏^{かしこま}つて申^{まを}しけるは、「某^{それがし}も母^{はは}の胎^{たい}内^{ない}を出^でで、竹^{ちく}馬^ばに鞭^{むち}をあてしより、君^{きみ}に附^そき添^そひ申^{まを}し、成^{せい}人^{じん}の今^{いま}に到^{いた}るまで、片^{へん}時^しも離^{はな}れ奉^{ほう}る事^{こと}なし。其^{その}のしるしにや落^おちよとの仰^{おほせ}こそ、誠^{まこと}に御^{おん}怨^{うら}めしくは候^{まち}へ。捨^すてられ参^{まゐ}らせて後^{あと}、何^{なん}に懸^かりて片^{へん}時^しのながらへもあるべき。憂^{うれ}身の果^{はて}こそ悲^{かな}しけれ」と、さめぐと泣^なき居^ゐたり。誠^{まこと}に志^{こころ}深^こく、なじみの久^{ひさ}しければ、互^{たがひ}に語^{かた}り給^{たま}へば、憂^{うれ}につけても、夜^よや明^{あけ}け日^ひや暮^{くれ}れん。「既^いに明^{あけ}方^{がた}近^{ひか}くなるものを、急^{いそ}けや汝^な等^ら、早^{はや}くも行^いけ」と重^{かさね}々^々責^とめければ、二^ふ人^{にん}の者^{もの}共^{ども}言^{こと}ひかねて、「御^{おん}供^{ども}申^{まを}すへき命^{いのち}何^{なん}處^{ところ}も同^{おな}じ事^{こと}よ。住^すみ果^はつべき終^{つひ}の住^{すま}い處^{かた}、後^{あと}れ先^{まづ}だつ道^{みち}芝^{しば}の、變^{かは}らぬ露^{つゆ}の濡^{ぬれ}衣^{ころも}、拂^{はら}ひて御^{おん}供^{ども}申^{まを}さん」とて、二^ふ人^{にん}が袖^{そで}をひきちがへ、既^いに

ゆゑしき
すぐれて

九夏―夏九
十日

は汝等に取りするぞ。亡き後の形見に見候へ。鞭と弓懸をば二人の乳母が方へやるべし。沓行膝は守り育てし二人が守に取らせよ。夜もこそ更くれば、是を持つて落ち候へ」と有りければ、二人の者共忍の形見を受取りて申しけるは、「我等相摸を出でしより、自然の事候はど、君より先に命を捨て、暫く三途の御供とこそ存じ候ふに、下郎をば命惜む者と思し召し、斯様に承り候ふか。只召し具せられ候へ。ゆゑしき御用にこそ立ち申さずとも、志ばかりの御供」と申しければ、十郎聞きて「各が思ひ寄る所誠に神妙なり。斯様な者共を、世に無ければ恩をもせて離れん事こそ無念なれ。浮世の中何事も思ふやうにならば、いかで叶はぬ事あらん。主君は三世の縁あり。來世にて此の恩をば報ずべし。唯此の形見どもを、悉く曾我へ届けたらんは、最後の供に勝りなん。狩場に事出て來ぬと聞えなば、物思ふ子持ち給へる母の、我が子供やらんと歎き給はんに、急ぎ参りて此の由かくと申すべし。今少しもとく急げや」とありければ、團三郎承つて、「かへり候ふまじ。聞こし召せ。君をばちの中より某こそ取り上げ奉りては候へ。されば九夏三伏の暑き日は、扇の風を招き、立冬素雪の寒き夜は、衣を重ねて肌を溫め参らせ、膽心を盡し育て、月とも星とも明暮は、見上げ見下し頼み奉り、御世に出でさせ給ひ候

でし時、互の形見給はり参らせ置きて出し事、信濃の御狩に徒にて下り狙ひし事、虎に契をこめし事、鞠子川湯坂の峠、箱根寺大崩までの有様、矢立の杉の事ども、今の様に覺えたり。思ふ事ども詳しく書き、命をば父に回向申し、讀誦の御經は母に手向け奉る。親は一世の契と申せども、これを形見にて來世にては参り逢はん、と同じ心に書き止めければ、大きなる巻物一つ宛ぞ書きたりける。十郎が言葉の末五郎に代りたるは、大磯の虎が事なり。五郎が言葉の十郎に代りたるは、箱根の別當の事なり。扱いづれも同じ文章なり。哀にこそは覺えけれ。

四

鬼王團三郎曾我へ歸りし事

扱鬼王團三郎を呼びて、「汝は急ぎ曾我へ歸るべし。小袖をば上へ参らせよ。馬鞍は曾我殿に奉れ。自然の時は御先途に代り参らせ候ふべき由、随分心に懸けしを、父の敵に志深くして、先立ち申す事無念に存じ候へども、恐れながら二人の子供の形見に御覽候へ。五つ三つよりして、左右の御膝にて、育てられ参らせし御恩、忘れ難くこそ存じ候へ。肌の守と鬢の髪をば、弟どもの形見に御覽じ候へとて、二宮殿に参らせよ。弓と矢

自然の時—
もしもの事
のある時

かりし事どもなり。

三 曾我への文かきし事

さても兄弟の人々は、更けゆく夜半を待ち兼ねて、十郎いひけるは、「いざや此の隙に、幼少より思ひし事を委しく文に書きて、曾我へ参らせん」。「然るべし」とて、各文をぞ書きける。我等五つや三つの年より、父の討たれにし事忘るゝ隙なくて、七つ九つと申せしに、月の夜に出でて、雲井の雁金を見て父を戀ひ、明くれば小弓に小矢を取り添へて、障子を射通し、敵の命に準へ、彼を討たん事を願ひ歎きしを、母の制し給ひし事、また父の戀しき時は、一間所にて、一人は語りて慰めども、人々には言はざりしなり。祐成は十三にて元服し、五郎は十一より箱根に上り學問せしに、十二月の末つ方に、里々より衣裳音物、取り添へく餘の稚子達には送れども、箱王が里よりは贈物もなし。まして父の文もなし。明暮父を戀しく思ひて、權現へ参り、敵を見んと祈りしに、程なく御前にて、祐經を見そめし事不思議なりとて、法師になるべかりしを、此の事によりて、只一人夜に紛れて、曾我へ逃げ下りしなり。男になりて、母の勘當蒙りし事、又打ち出

音物―心づ
けの贈物

しにて通りけり。和田宣ひけるは、「今暫くも候ひて物語申したけれども、源太と申す曲者が御前に参りつるが、いか様にか申し上げ候はんずらん。相構へて爲損じ給ふな」といひ置きて、和田は御前へぞまゐられける。此の人々は館に歸り、夜の更くるを待ちけるが、やゝありて十郎申しけるは、「件の梶原が御分がいひつる事を立ち聞きけるが、いか様大勢にて寄せぬと覺ゆる。館を替へん」と言ひければ、五郎聞きて、「源太程の奴何十人も候へ、一々に切り伏せん」と申す。十郎聞き、「身に大事さへなくば、いふに及ばず、但し某に任せ候へ」とぞ申しける。

二 兄弟館をかへし事

かくて兄弟の人々は、柴の庵をひきはらひ、思はぬ所へより居つゝ、時を待つこそ哀なれ。是をば知らで、源太百餘人の兵を引き連れて、人々の館へぞ押し寄せたる。されども人なかりければ、日本一の不覺人、かやうに有るべしと思ひしに違はず、人にてはなかりけり、と高言して歸りしは、をこがましくぞ見えし。是や鼠深く穴を掘りて、群禽の害を通れ、鳥高く飛んで、さうめいの害を遠ざけるとは、かやうの事なり。危ふ

わざん―和
譏、前にい
づ
むもれ―お
ぼれの誤

て、御分御耳に入らんとは宣ふぞ。この面々我に親しき事、上にもしろし召されたり、それにつきては御狩と承り、必ず召はなけれども、末代の見物に、忍びて御供仕り候ふ。若き者の習、木瀬川にて女共と遊び候ひしが、君相澤の御所に御入の由承り、急ぎ参り候ひし間、引出物をせず候ふ。歸に何にても取らせんと申し候ふ間、道の者は恥しきぞ、引出物せばよくせよ。爲損じなば一家の恥ぞと申しつるが、此の事ならでは何申したりとも覺えず。急ぎ御申ありて、義盛失ひ給へ」と高聲なりければ、景季も、「一興にこそ申し候へ。何とて和田殿は某に逢ひ給へば、よし無き事にも角を立てゝ宣ふらん。是は苦しからぬ」とて、空笑して通りけり。なほもわざんの者にて、何とか言ふと暫し佇む。是をば知らで、和田殿宣ふは、「水をよく泳ぐ者はむもれ、馬によく乗る者は落ち、口は晝中に移る、月は満るに傾く、昊天に踞れ厚地に躋せよ、とあるをや、此のものは十分に過ぎて如何ぞと覺ゆる」。五郎是を聞き、「御ちんほうを用ひす通る者ならば、しや細首ねち切つて、捨て候ふべきを」と申しければ、梶原立ち聞きて、誠や此の者は、朝比奈にみぎは勝の大力、烏澁の者と聞きたり。此處にて事爲出し勝負せんより、上様へ申しあけ、我が力もいらで失はん事、易かるべし、と思ひ定めて、聞かざるよ

はるか久
瀾

斧の柄の朽
つる一晋の
王質山に入
りて仙人の
碁を圍むを
見暫時と思
ひし程に持
ちし斧の柄
朽ちたりと
の故事

へぞ行きける。頼て義盛出で合ひて、「いかに殿原達、はるかにこそ存ずれ。狩くらの體
是が初にてぞましますらん。何とか思ひ給ひけん。誠に見物には上やあるべき」。十郎扇
笏に取り直し畏つて、「さん候ふ。斯様の事は珍らしき見物、末代の物語に、あの冠
者に見せ候はん爲、二三日の用意にて罷り出で候ふが、餘の面白さに、斧の柄の朽つる
を忘れ、曾我へ人をこして候ふ。其の程と存じまりて候ふ」といひければ、和田聞き
て、何條其の儀あるべき。日比の本意を遂げんとするが、一家のみはてに、義盛に今一
度對面せんとてぞ來りぬらん、と哀に思ひければ、「さぞ思すらん。數多度見て候ふだに
も面白く候ふ。まして若き人々の、初て見給はんにさぞ思し召すらん、嬉しくも來り給
ふ者かな。豫てより知り奉りなば、初より申すべかりつる者を」とて、酒取り出し勸め
けり。盃二三度廻りて後、和田宣ひけるは、「相構へて、せばよく爲給へ、爲損じなば一家
の恥辱なるべし。後楯には成り申すべし。頼もしく思ひ給へ」とて、盃さよれけり。折節
梶原源太館の前を通りけるが、かくいふを聞き、「何事ぞや和田殿、曾我の人々にせばよ
くせよと、仰せられつる不審なり。御耳にや入り候ふべき」といふ。和田殿聞きて、こは
如何に、曲者通りけるよ。さりながら陳じて見ん、と思ひければ、「自然の物語何と聞き

曾我物語 卷第九

一 和田の館へ行きし事

「來つて暫時も留らざるは、有爲轉變の悟、去りて再度歸らざるは、冥途黄泉の別なり。愛傷戀慕の悲、今にはじめぬ事なれども、日本國に我等程、物思ふ者あらじ、と案ずるに、劣らず歎をする者のあるべきこそ不便なれ。五郎聞きて、「たれやの者か我等に勝りて候ふべき」。さればこそとよ、備前の王藤内が、七年御不審蒙り、此度安堵の御下文を賜はりし使先に下り、かくといはゞ、國に留る親類、集り悦びあはん處に、又人下りて、討たれぬといふならば、さこそ歎かんすらん、と深き言葉を案ずるに、人として能あるものは、天の加護により、人として財あるものは、歎による、と見えたり。されば王藤内助けばやとは思へども、雜言餘に奇怪なれば、祐成に於ては餘す可からず。御分も漏すな」と申しければ、「承る」とぞ申しける。「かくて夜の更けん程待たんも遙なり。いざや和田殿の館へ行き、最後の對面せん」。然るべし」とて、二人打ち連れ、義盛の館

面にあてゝ
―面に向つ
て

竝ならべおきて、酒盛半さかもりなかほなりしに呼び入れ、祐成すけなりも舞まひをまふ程の事なりつるに、面おもてにあてゝ
廣言くわうげんどもしつる無念むねんさよ。一刀ひとささしいかにもと思ひけれども、和殿わだのに命いのちが惜まれて、手
に握にぎりたる敵かたきを逃のがしつるこそ無念むねんなれ。五郎聞きて、「是これや寶たからの山に入り、手てを空そらしくす
る風情ふぜいなり。嬉うれしくも御ごこらへ候ふものかな。あまし候ふべきにも候はず。南無阿彌陀なむあみだ
佛ぶつ」とぞ申しける

おしむろー
おほむろの
誤ならむ

べ候ふなり。下野の國には、小山、宇都宮、結城、長沼、氏家、鹽谷、木村、皆川、足柄、まのだの人々、屋形を並べ候ひぬ。相摸の國には、座馬、本間、土屋、愛甲、土肥の次郎父子、糟屋の藤五、澁谷、佐藤、秦野の右馬丞、岡崎、三浦の人々、伊豆の國には、入江、藥科、木津川、船越、大森、桂山、遠江の國には、石尼、清水、參河の國には、設樂、中條、尾張の國には、大宮司、宮の四郎、關の太郎、美濃の國には、山本、柏木、たつる、錦織、佐々木黨、屋形を並べ候なり。當番の人々には、結城の七郎、川越、高坂、大胡、おしむろ、難波の太郎、上總介父子、屋形を並べしなり。坂東八箇國、海道七箇國のみに非ず、三年の大番、訴訟人といふ程の者の屋形、雲霞の如くなり。さて君の御座所をば真中に、四角四面に瑠璃を延べ、五十九間に飾られたり。面々思ひくの屋形造、いろくの幕の紋、金銀を鏤めてこそ飾られけれ。およそ屋形の數二萬五千三百八十餘軒なり。總じて上下の屋形の數、十萬八千軒のきを並べてこうちをや、り、薨を並べてうちたりけり。東にそなたるは梶原平三景時、西のはづれは左衛門の尉祐經が屋形なり、幾程とこそ思ひけん。五郎聞きて、「客人は何處の國の如何なる人にて候ひける。」備前の國の住人、吉備津宮の王藤内、手越の少將、木瀬川の龜鶴を

も、是程よりつかずして心をつくす、便宜よく候はゞ御ふち候ふべきものを、さりながら一太刀づつ、ともぐに斬りたく候ふぞかし。其の屋形の様御覽じ候ひけるにやし。「其の爲案内はよく見おき候ひぬ。但し屋形の數多くして、見知りたる人は所々にこそ候ひつれ。扇開きてこそは數へけれ。先君の御屋形に竝べてうちたりしは、北條の四郎時政、御一門には、一條、板垣、逸見、武田、小笠原、南部、下山、山名、里見の人々、石山、山形、梶原、屋形を並べて候ふなり。東には、和田、畠山、黒戸、姉崎、本田、榛澤、池邊、兒玉、小澤、山口、丹の横山、きいの兩黨、岡部、坂西、金子、村山村折、なかさや、岡原、比企、中條、みたむろの人々、屋形をならべて候ふ。常陸の國には、佐竹、山内、志田黨、近島、行方、こく、宍戸、森山、ちよはの殿原、下總の國には、千葉介常胤、相馬次郎諸胤、けしの三郎胤盛、こくほの五郎胤道、たうの六郎胤兼、葛西三郎清重、大猿島、大島、小原、屋形をならべ候ふなり。上野の國には、伊北、伊南、廳北、廳南、印藤、金岡、小寺、深須、山上、大越、大室、上總の國には、桐生、黒川、丹後、片山、新田、園田、玉村、安房の國には、安西、金丸、東條、信濃の國には、内藤、片桐、黒田、周防、齋藤、村上、井上、高梨、海野、望月、屋形を竝

須彌—梵語
妙高山と譯
す高さ八萬
四十由旬と
佛經に見ゆ
落ちば—王
藤内が遁げ
ば

現はす、人酔ひて本心を現はす。思ふ事こそいはれ候へ。恒河沙はつき、螢の火にて
須彌は焼くるとも、討たるゝ事あるべからず。南無阿彌陀佛」とぞ申しける。後に思
ひ合はすれば、是や最後の念佛、と哀にぞ覺えし。十郎かく言ふを立ち聞きて、即ち館
の内へ走り入り、如何にもならばや、と思ひしが、五郎に憂身の惜まれて、只空しく歸
りける、心の中こそ無慙なれ。抑只今の言葉どもよく／＼思へば、唯王藤内が言はする
言葉なり。今宵は落ちば落さんと思ひつれども、今の言葉の奇怪なれば、一の太刀には
左衛門、二の太刀には王藤内、と思ひ定めて、館よりこそ歸りけれ。

十五 屋形の次第五郎に語る事

五郎兄を待ち兼ねて、心もとなくして佇みける處へ、十郎來りて、「いかに待遠なるか」。
五郎聞きて、「さらぬだに人を待つは悲しきに、愚に思し召すものかな」。「祐成もさ存す
るを、敵左衛門が屋形へ呼び入れられ、酒をこそ飲みつれ」。「さていかに、便宜あしく
候ひけるか」。「言ふにや及ぶ。亂舞のをりふし、あはれと思ひしかども、御分一所にこ
そ、と存じて、堪へつる志おし量り給へ」。五郎も聞きて、「御ふちはさる事にて候へど

蠅螂―かまきり、莊子に猶蠅螂之怒、臂以當車轍と見え不可能なる事の喻寸の金―一本此上に寸の金にて尺の木をば切れども尺の木にての十九字あり

候ふ。何様明日参りて、常々宿直申すべし」と、暇乞うて出でにける。祐成案者第一の男
子にて、敵何とか言ふらんと思ひ、小柴垣に立ち隠れ、聞く事は知らで、王藤内、「此の殿原
の父をば、誠に討ち給ひけるか」と問ふ。左衛門の尉聞きて、「今は彼等が聞かばこそ、以
前具に申しつる様に、我等嫡孫にて持つべき所領を、彼等が祖父に横領せられぬ。某が
在京ながら、田舎の郎黨共に申し付けて、彼等が父河津の三郎と言ひし者を討たせし
なり。人もやさぞ知りて候ふらん。此の者共の子孫は、皆謀叛の者、君に失はれ奉り、
今祐經一人に罷りなる。然れども君不便の者に思し召し、先祖の所領拜領の上は、祐
經に狭められ、思ひながらぞ候ふらん。かれが此の比の分限にて、祐經に思ひかゝらん
は、蠅螂が斧を取つて隆車に向ひ、蜘蛛が網をはりて、鳳凰を待つ風情なり。哀れなる」
とぞ申しける。王藤内聞きて、「それこそ僻事よ。世にある人は所領財寶に心が留り、思
ふ事は滞るなり。されば寸の金を切る事なし。貧なる侍と鐵とは、あなづらぬも
のをや。何とやらん悪しき様に仰せつる時には、頻りに目をかけ奉り、刀の柄に手を掛
け、片膝押し立てつる時、事出で來ぬと見えしが、されども色には出さず、よき兵か
な」とぞ譽めたりける。左衛門の尉是を聞き、「何程の事か仕るべき。龍は眠りて本體を

けれ。其の土器、祐經乞うて、「方々は何か思ひ給ふらん知らねども、今日よりして、親子の契約あるべし。あの小童奴を弟と思召され、汝も兄と思ひ奉れ。他人の惡からんは恨にあらす。親しき中の疎きをば、神明も憎み給ふ事なれば、今より後互に憚あるべからず。此の盃賜りて祝ひ候はん。但し所望候ふぞや、十郎殿は亂拍子の上手と聞けども未だ見ず、一番舞ひ給へ。一つは客人の爲、一つは祐經が祝のあやにく如何あるべき。御前達面白く候ふべし。早々」と責めければ大房囁ぞ立てたりける。祐成、仔細に及ばずして、持つたる扇さつと開きて、「君が住む、總尾が山の瀧つ瀬は」と言ふ一聲を揚げて暫舞ひけるが、ちどに心を通して、兎やせん角やせまし、と思ひ亂るる舞の手に、夜更けは入るべき道づたひ、番はづさん長舞に、此處より入り彼處より廻らん。彼處はつまり此處は通路、忍びて入らば音は立たじ、入るとも知らじ。さす腕袖の返に目を遣ひ、半時許ぞ舞うたりける。座敷に連る人々は、見知る印の無き儘に、興を催す許なり。君どもを始として、囁すも覺えぬ風情なり。かくて十郎舞ひ入りければ、祐經盃思ひがへしとて、十郎にさしたりければ、十郎取り上げ、三度乾して扇取り直し、畏つて申しけるは、「今宵は是に御宿直申したく候へども、北條殿に申し合する仔細

御前達―遊
女を指す

にさす。其の盃龜鶴にさす。其の盃を十郎にさす。酒を八分にうけて思ひけるは、憎き敵の廣言かな。身不肖なり、何事かあるべき、と思ひこなし、初對面に、さんぐくに言ひつるこそ奇怪なれ。此の君共が耳こそ、東八箇國の侍の聞くところ、日比は親の敵、只今は日の敵、あをに衣を重ねても逃すべきに非ず。うけたる盃、敵の面にうちかけて、一刀刺し、如何にもならばや、と千度百度進めども、心をかへて思ふ様、待て暫し、兄弟と言ひながら、祐成と時致は、父の敵に志深くして、一所にて兎にも角にも、と契りしに、心はやりの儘に、祐成いかにもなるならば、五郎空しく縛められ、恨みん事こそ無慙なれ。爰は堪ふる所と思ひ靜めて止りしは、情深くぞ覺えける。左衛門の尉は神ならぬ身の悲しさは、我に心をかくるとは、夢にも知らずして、「十郎殿、盃は如何にほし給はぬ。御前達數多坐せば、肴待ち給ふと覺えたり。今様を謠ひ給へ」と言ひければ、二人の君、扇拍子を打ちながら、

蓬萊山には千年經る、千秋萬歳重れり。松の枝には、鶴巢くひ、巖の上には龜遊ぶ

と言ふ一聲を返し、二遍迄こそ謠ひけれ。其の時盃取り上げて、三度迄こそ乾したり

り。「是なる客人をば知り給ふにや」。「今日初めて見参に入り候へば、争でか見知り奉るべき」。「あれこそ、備前の國、吉備津宮の王藤内とて、さる人なるが、今年七年君の御不審を蒙り、所領召されて有りつるを、この三箇年祐經とりつぎ申しつる間、御免を蒙り、所領に安堵して、蒲原まで上り給ひしが、祐經に名残惜まんとて歸り給ふ。斯様に、他人だにも、申し承れば親しくなるぞかし。まして殿原と祐經は、從兄弟甥と言ふ者なれば、今は親とも思ふべし。便宜然るべく候はゞ上様へ申し入れ、奉公をも申し、一所をも賜りて、馬の草飼所をばし給へ。殿原は祐經が思ひ奉る様には、思ひ給はじ。北條へは、常に越えて遊び給へども、何を恨みてか、更に伊豆へは見え給はず。しもたてぬ賢人顔せんよりも、我々に睦びて、若き者共に背かずして座せ。面々の馬屋を見るに瘦せ弱り候ふ。伊東に馬ども數多候へば、乗りつけて乗り給へ。愁に人の言ふ事について、祐經討たんと思ひ給はん事、今生にては叶ふまじ。曾我殿原」と、廣言しけるが如何思ひけん、言葉をかへて言ひけるは、「醉狂の餘り。言失仕ると覺えたり。今より始めて、互の遺恨を止めて、親子の契たるべし」とて、盃取り寄せ客人なればとて、王藤内にはじめさせ、其の盃珍しきとて、十郎にさす。其の盃少將にさす。其の盃を祐經

ゐんくわい
―員外にて
人外に同じ
き歟

は祐經すけつねを敵かたきと宣のたまふなる、努々ゆめく用ひ給ふべからず、人の讒言ざんげんと覺おぼえたり。差當さあたる道理だうりに任まかせて、人の申こゝろすも理ことわりなり。伊東おほぞは嫡々ちやくくなる間、祐經すけつねこそ持もつべき所なるを、面々めんめんの祖父おほぢ伊東殿わたりやう横領わうりやうし、一所しよをも分わけられざりしかば、一旦いつたんは恨うちむべかりしを、第一やうぶ養父やうふなり、第二に叔父そふなり、第三に烏帽子えぼし親おやなり、第四に舅しやうごなり、第五に一族そくの中なかの長者おきななり。一方ひさかたならざるによつて、堪こらへて過すぎしに、是こゝろは只ただ高たかきに望のぞみ登のぼらざれ、賤いやしきを謗そしり笑わらはざれ、と言いふ本文ほんもんを捨すてよ、我等われらをるんぐわいに思おもひ給ふ故ゆゑなり。面々めんめんの父河津殿おくの、奥野おくのの狩場かりばの歸かへりに討うたれ給ひぬ。獵師れふし多おほき山やまなれば、をこしの矢やにや當あたり給ひけん、又は伊豆いづ、駿河すまがの人々多おほく打ち寄より、角力かくりきとりて遊あそび給ひけるに、股野またのの五郎ごろうと勝負しやうぶを爭あらそひ、當座たうざに喧嘩けんかに及びしを御寮ごれうの御成敗ごせいはいに依より靜しづまりぬ、左様さやうの宿意しゆくいにてもや討うたれ給ひけんを、在京ざいけいしたる祐經すけつねに、かけて申まをされけるなれども、更またに知らず。剩あまつさへ祐經すけつねが郎黨らうだう共數どもあま多失たうしひぬ。其の時分じぶん頓たひて對決たいけつを遂さけたりせば、遁のがるべがりしを、幾程いくばく無なくして當御代たうみよとなりて、面々めんめん親おやしき人々みなおんなか皆御敵みなみかたきとて、ながらへ給はぬ。只祐經ただすけつね一人にんになりて、終つひに此こゝの事ことさんだんせずして止やみぬ。然しかれば只祐經ただすけつねがしたるになりて、年月としげを經へ候まちふ。是不祥こゝろふしやうと言いふも餘あまりあり。よく聞き給へ十郎殿じやうだん。祐成すけなり聞ききて、兎角うかく言いふに及およばず、只謹ただつしんで居ゐた

すゝろなる
—妄なる

れば敵左衛門が館なり。是は如何に、彼等は一ツ木瓜の幕をこそ打つべきに、心得ぬ者かな。誠や人人に非ず、鹿を以つて人とし、家家に非ず、何處を以つてか家とす。繼ぐべきをば繼がで、すゝろなる曾我の某と呼ばれぬる上は、家の紋いるべからず、祐經は誠やらん、我々が先祖の知行せし所領を知るによつて、斯様になり行く者をや。哀昔は斯様に無かりし者を、と見入れて歸りける。

十四

祐經が館へ行きし事

かくて祐經が嫡子犬房、祐成を見つけて、「只今十郎通り候ふ」。左衛門聞きて、「玉の井の十郎か横山の十郎か」と問ふ。「曾我の十郎殿」と言ふ。「是は祐經が館にて候ふ。立ち寄り給へ」と言はせければ、祐成少も憚らず、館の内へ入り見給へば、手越の少將は、左衛門の尉が君と見えたり。木瀬川の龜鶴は、備前の國古備津宮の王藤内が君と見えて、嫡子犬房に酌取らせ、酒盛しける折節なり。幾程の榮華なるべき、今宵の夜半にひきかへん事の無慙さよ、と思ひながら座敷にぞ直りける。祐經、敷皮を去りて、「是へ」と言ふ。十郎、「かくて候はん」とて、押し退け居たり。祐經が初對面の詞ぞこはかりける。「誠や殿原

君—遊君

本此の上に
遠きの三
字あり

人の常つねの情なさけ、と抱朴子に見えたり。されども歌の心は如何いかに」と問へば、「知らず」と言ふ。十郎は萬よろづに情深なげふかくして、歌の心を得たり。「思ふ事あらば今宵限と告げ給ふぞや。君は明日伊豆の郷がう、明後日鎌倉へ入らせ座ましす由、其の聞きこあり。思ひ定め給ふべし」と言ふ。「珍めづしくも思ひ定め候ふべきか」。「申すにや及ぶ」とぞ申しける。元來剛ぐわんらいなる時致ときぢが、重忠しゆたには勇いさめられ、愈いよ今宵を限かぎりとぞ定めける。豫かねてより思ひ定めし事なれども、差當さあたりて心細ほそさ、思ひやられて無慙むざんなり。日暮ひくれ、君井出の館やかたへ入り給ひしかば、國々だいにの大名小名みやうおんざも、御供みやくしてぞ歸りける。曾我兄弟も人竝ひとなら々に柴しばの庵いはりへぞ歸りける。

十三 館廻りの事

道みちにて十郎申す様やう、「和殿わどのは館やかたへ歸り給ふべし。二人連つれては人も怪あやしく思ひなん。祐成すけなり許はかり行きて、館やかたの案内あんない見て歸らん」とて、太刀ばかり持たせ、館々やかたを廻めぐりけり。思ひくゝの幕まくの紋もん、心々の館やかたの次第しだい、なか／＼言葉ことばも及およばれず。爰こゝに二つ木瓜もくかうの幕打まくうちたる館やかたあり。誰たが幕まくやらん、是は我等が家の紋もんなり。御敵おんてきとなり亡ほろびぬ。伊東いとうと名乗なる者無なければ、此の幕打まくうつべき者なし。誰たれなるらんと不思議ふしぎにて立ち寄り、幕まくの物見ものみより見入れけ

には、明日鎌倉へ入らせ給ふべきなれば、今宵討たでは叶ふまじ。此の由知らせんと思ひ給へども、人々數多有りければ、歌にてぞ訪ひ給ひける。

まだしきに色づく山の紅葉かなこの夕暮を待ちて見よかし

と詠め給ひて、涙ぐみ給ひけり。折節梶原源太左衛門が、近う控へたりしが、「何事にや曾我の殿原に、まだしきに色づくと詠じ給ふは心得ず」。重忠聞いて、「夏山に夕日影のさし残る風情、初紅葉に似ずや。この夕こそ猶も移り行かば、誠秋にやなり行かん」。源太猶も言葉あり顔なりしを、君より急ぎ召されしかば、駈け通るとて、「重忠の御歌の不審残りて」と言ひながら、馳せ過ぎければ、人々聞きて、「今に始めぬ梶原がわん譏とは言ひながら、ことにかよりて見えぬるをや」と申し合ひける。重忠仰せけるは、「命を養ふ者は病の先に藥を求め、世を治むる者は亂れぬ先に劍を習ふ、と三部論に見えたり。夫迄こそ無くとも、斯様のえせ者を近く召し使ひて、末の世如何」とぞ仰せける。其の後曾我の人々を近付けて、「今宵重忠が所へ座せ、歌の物語を申さん」と宣へば、畏り存じ候ふ由返事して、十郎弟に言ひけるは、「畠山殿は情を以つて、早此の事を知り給ひけるぞや。耳を信じて目を疑ふ者は、耳の常の弊なり。尊みて近付くを賤む者は、

わん譏—和
譏と書くよ
き顔して相
手を譏言す
ること
えせ者—惡
人

尊みて—

介錯―介抱

たいさんの
龜は云々―
枚乗の諫―
吳王―書に
泰山之雷穿
石、彈極之
綆斷、幹、水
非石之鑽、
索非木之
鋸、漸靡使
之然―也と
ある句の誤
なり

下り立つて、兄を介錯しける、心の内こそ悲しけれ。「哀實に我等程、敵に縁なき者あらじ。只今はさりとともそこそ思ひしに、馬強かりせば、斯様にはなりゆかじ。是も貧より起る事なり、人を恨むべきにもあらず。叶はぬ命ながらへて物を思はんよりも、自害して惡靈にもなりて、本意を遂げん」とぞ悲しみける。十郎是を聞きて、「暫く待ち給へ。それたいさんの龜は巖を穿ち、雷は石を穿つ、たんさくの釣瓶の繩は井桁をきる、水は石の鑿にあらず、なほは木の鋸に非ず、せんひの然らしむる所なり。只心をのべて功を積み給へ」とて、馬引き寄せ打ち乗りける。

十二 畠山歌にて訪はれし事

其の後は人々如何に見るらんとて、十郎駈くれば五郎控へ、五郎行けば十郎止り、他目をも包みければ、時移り事延び行きければ、其の日も己に暮れなんとす。畠山殿は程近く座せば、兄弟の有様をつくぐと御覽じて、今まで本意を遂げざるぞや。あはれ平家の御代と思はゞ、などか矢一つとぶらはざらん。當君の御代には、斯様の事も叶はず、重忠も若き子供を持ちぬれば、人の上とも思はずして、誠に無慙に覺えたり。梶原觸狀

中差―普通の
の征矢その
左にさす二
筋の雁股
(又は鎗矢)
を上差とい
ふに對す

取り、金砂にて裏打ちたる浮紋の竹笠、嵐に吹き靡かせ、黒き馬の太く逞しきに、白覆輪の鞍置いてぞ乗つたりける。馬も聞ゆる名馬なり、主も究竟の乗手なり、三つある鹿に目を懸けてこそおつすがうたれ。三つある鹿には隔りぬ、馬の駈場もよかりけり。十三郎是を見て、「此の鹿は埒の外に列卒を破りて落ち来るにや、追ひ返し奉らん」とて、十三束の大的中差取つて番ひ、矢所多しと言へども、奥野の狩場の歸り様に、父の射られけん鞍の山形の端、行膝の引合、報のしらする恨の矢、餘の所をば射べからず、如何なる金山鐵壁なりとも、志のなかは通らざらん、と左手になしてぞ下りける。五郎も同じく、中差取つて差し番ひ、左衛門の尉が首の骨に目をかけて、大磐石を重ねたりと言ふとも、なか斬つて捨てざらん、と鞭に鎧を揉み添へて、右手に相付け馳せ竝べ、三つある鹿と左衛門を真中に取り込め、矢先を左衛門に指し當てよ引かんとする所に、祐經が暫しの運や残りけん、祐成が乗つたる馬を、思はぬ伏木に乗りかけて、眞倒にころびけり。あやまたず弓のもとを越して、馬の頭におり立つたり。五郎は之を知らずして、矢筈を取り立ち上りけるが、兄の有様を一目見て、目もくれ心も消えにけり。此の隙に、敵は遙に馳せ延びぬ。鹿をも人に射られけり。五郎空しく引き返し、急ぎ馬より

夏毛―鹿の也
たかうすべ
う―高をす
めどりふ
(護田鳥文)
にて白羽の
上方に高く
薄黒の文あ
るものとぞ
ひやう紋―
紋の中を色
々に彩りた
るもの

偽を以つて危し。人は巧にして偽らんよりも、拙うして誠あるには如かず。此の者の振舞は、世の煩ともなりぬべし。其の上奉公申すべき爲ならず。哀身に思だに無かりせば、此の冠者が頼一太刀斬つて、慰まんずる者を」とぞ申しける。諸兄弟は、見え隠に連れつ離れつ、心を盡し狙ひけるこそ無慙なれ。十郎が其の日の装束には、萌黄句の裏打ちたる竹笠、村千鳥の直垂に、夏毛の行膝深くひつこうで、たかうすべうの鹿矢、管高に取つてつけ、重簾の弓の真中取り、葦毛なる馬に具鞍置きてぞ乗つたりける。五郎が其の日の装束には薄紅にて裏打つたる、ひやう紋の竹笠眞深に被て、からざいみに蝶を二つ三つ所々に附けたる直垂に、紺の袴、秋毛の行膝、たぶやかに穿き下し、鶴の元白の征矢、管高に負ひなし、二所簾の弓の真中取り、鹿毛なる馬に、蒔繪の鞍置きて乗つたり。遙に遠き敵を見付けて十郎につけ、下にて祐經を見附けて五郎につけ、互に心を通はしけり。人は皆、鹿に心を入れ、如何にもして、上の見參に入らん、と嶺に登り谷に下り、野を分け里を尋ねけれども、よそめいかどと思ひしに、列卒を破りて鹿こそ三頭出で来りけれ。是は如何にと見る所に、彼の祐經こそおつすがひて落しけれ。其の日の装束花やかなり、浮線綾の直垂に、大班の行膝に、切斑の矢負ひ、吹寄簾の弓の真中

しよし―所
司歟

を聞いて、「鹿射外し歌よみてだに恩賞に預る。況て好く止めたらん輩は、如何に」とぞ申しける。御寮、左衛門の尉祐經を召して、「不審なる事あり、用心せよ」と仰せ下されければ、畏り存じ候ふ由を申しける。爰に梶原源太景季、侍のしよしにて、總奉行第一の者なれば、上の御説を承はり、曾我の人々を近付けて申しけるは、「神妙に御供申され候ふ。奉公は何れも同じ事。御宿に大事の御物具あり、留守の御宿直申されよ。如何様今度鎌倉へ入らせ座して、御免蒙り給ふへし。奉公心に入れられよ」と申しければ、祐成是非に及ばずして、「畏り入り候ふ。よき様に御申し候へ。頼み奉る」とぞ返事しける。源太重ねて申す様、「御給仕によつて、本領仔細あらじと存じ候ふ」と言ひてこそ歸りにけれ。時致是を聞きて、「あはれ源太、我々を賺さんと思ひたる氣色の、さし現はれたる奴かな。蛇は一寸を出して其の大小を知り、人は一言を以つて其の賢愚を知る。狐の子は小狐より。父が孫を繼ぎて、此の冠者が頼の白さよ。いつの奉公によりてか、御氣色もよかるべき。定めて御寮の仰には、其の冠者原は誰が許して、狩場へは出でけるぞ。よくく賺し置きて、首を斬れとの御説か、流罪せよ、との仰にてぞあるらん。實にや古き詞を案するに、國の賢を以つて興し、諛を以つて衰ふ。君は忠を以つて安じ、

との序とし
又立ち来る
くも(雲)に
懸りて調を
爲す
龍頭鶴首―
軸に龍又は
鶴といふ水
鳥の形を飾
に付けたる
船

うを平け、御代を治め給ふ事、一萬八千歳となり。然るに船の船の字を、君に薦むと書きたり。又天子の御駕を龍駕と名付け奉り、又船を一葉と言ふ事も、此の時よりぞ始りける。又君の御座船を、龍頭鶴首と申すも、此の御代よりぞ起りける」と申しければ、「諸極樂の弘誓の船は如何にや」。「夫は菩薩聖衆の御法にて、凡夫の及ぶ所に候はず」とぞ申されける。同じく、富士の高嶺を遙々と見上げさせ給ひて、昔竹取の翁、鶯の卵を養じて、かぐや姫となりし行方又
風に靡く富士の烟の空に消えて、行方も知らぬ我思かな
と詠じし西行法師が下心まで、思し召し出しけり。

十一 祐經を射んとせし事

梶原源太左衛門景季は、未だ鹿に逢はずして、落ち来る鹿を待ちかけつゝ、駈け並べよつ
びいて放つ。されども上を遙に射越して通しけり。景季取り敢ずかくこそ申しけれ。
夏草の繁みが下を行く鹿のそでの横矢は射にくかりけり
君聞こし召して、神妙なりとて、これも富士の裾野にて、百餘町をぞ賜りける。人々は

なり。御所方の人々是を見て、「新田が謀叛眞なり。餘すな方々」とて、非番當番の面々出で合ひて、火出つる程こそ戦ひけれ。御所方の人々數多討たれしかば、新田が陳ほう逃れずして、二十七にて討たれにけり。不便なりし事どもなり。是然しながら富士の裾野の猪の咎なり、とて、舌を卷かぬは無かりけり。是や靈神怒る時は、災害衝に滿るなるも、今こそ思ひ知られたれ。

十 船の始りの事

諸も御寮は、何時の暮より、御狩の興に入り、四方の海山をぞ眺めさせ給ひける。折節沖つ島の木の間より、漕ぎ浮べたる蟹小舟、同じ風にぞ行き違ふ。「實に不思議なる舟のあやつりかな。誰人か仕始めつらん」と仰せられけり。千葉の介が申しけるは、「船の始は昔黃帝の御時、しうと云ふ逆臣ありて、おうごうと言ふ海を隔て、攻むべき様なかりけり。爰にくわてきと言ふ臣下あり。折節秋の末なるに、寒き嵐に散る柳の、一葉の上に乗りつゝ、次第々々に小蟹の、いとはかなくも柳の葉の、汀に寄りし秋霧の、立ち來るくもの振舞、實にもと思ひそめしより、たくみて船を造らせ、おうごうを易く渡り、し

小蟹―蜘蛛の枕詞、ここにてはい

威にや押されけん、御前近き枯杭に、躓き弱る所に、過たず腰の刀を抜き、胴中に突き立て、助骨二三枚掻き切りければ、猪は四足を四五寸土に踏み入れて、立すくみにこそなりにけれ。新田は急ぎ飛び下りて、かすの止を刺す。上下の狩人これを見て、「前代未聞の振舞かな、面白くも止めたり。乗りも乗つたり、堪へも堪へたり」と、感ぜぬ人こそ無かりけれ。君も此の由御覽じて、「狩場の中の高名は、是に如かじ」と御感あり。富士の下方にて、五百餘町を給りけり。勢餘りてぞ見えし。されども此の猪は、富士の裾隠居の里と申す處の、山の神にてぞ座しける。凡夫の身の悲しさは、夢にも是を知らずして、止めにける御咎にや、やがて其の夜、曾我の十郎に打ち合ひ、數多の手負ひ危かりし命、幾程なくて、田村の判官が謀叛同意の由讒言せられて、討たるべかりしを、重保につき申し開き、御目にかゝらんとて参じける折節、めしの御馬放れたりしが、御庭狭しと馳廻る。日本一の荒馬なれば、追ひ廻す人々是を見て、「よしや新田、取れや忠常、繩を懸けよ、過すな」と、聲々に呼ばはりて、庭上騒動す。新田が郎黨門外に集りて、「我等が主、只今搦め取らるゝぞや、主の討たるよを見捨てよ、何處迄か逃るべき」とて、思ひきつたる兵ども、二三十人抜き連れて、御前指して斬つて入る、新田が運の極

が神變も、及ぶべしとは見えざりけり。近づく者をたければ、落ち合ふ者も無くして、徒らに中を明けてぞ通しける。忠常是を幸と、駈け寄せけり。御前近うなりければ、「よしや新田よしや忠常」とぞ仰せ下されける。人もこそ多き中に、斯様の御説蒙る事、生前の面目、何事か是に如かんと存する間、鐵とうを丸めたる猪なりとも、餘さじ者を、と思ひければ、大の鹿矢を抜き出し、只一矢にと引いて放つ所に、矢よりも先に飛び來たり、乗りたる馬を主共に、宙にすくうて投げあけ、落ちば懸けんとする所に、叶はじとや思ひけん、弓も手綱も打ち捨てよ、向様にぞ乗り移る。されども倒にこそ乗つたりけれ。猪は乘られて腹を立て、馬を彼處へ駈け倒し、雲と霞に分け入つて、虚空をとんで廻りしは、周の穆王、釋尊の教法を聞かんとて、八匹の駒に轡を上げ、萬里の道利那に飛び着きしも、是には争で勝るべき。新田は、習ひし手綱の樣、腰もきれよと挟みつに、尾筒を手綱に取り、樂天が傳へし三頭王良が祕せし手綱、是なりけりと堪へけれど、詮方なくぞ見えたりける。猪は愈猛りをかき、木の下萱の下、巖岩石を嫌はずして、宙に飛んで廻りしかば、烏帽子、竹笠、沓、行膝、一度に切れて落ちにけり。大童になりて、只落ちじとばかりぞ堪へける。大きに猛き猪も、數多手は負ひぬ、新田が

其二

仁田郎

猛獸を

仕る

圖



古代に於ける
弓術の達人



の怒龍の喉
下に徑寸の
逆鱗あり是
に觸るれば
怒つて其の
人を殺すと
いふより出
づ

忠常—原本
たゞつな

養由—支那

え上りて、炎空に滿てり。大王も烟に咽び、前後辨へ難し。已に御衣に火の付きければ、目を閉ぎ掌を合せて、正念に住して、火坑變成池と念じ給ひければ、天是を憐みて、大雨俄に降り下りて、山の如くなりつる猛火を消し、國王も助かり給ひ、人民も命を繼ぎ、五穀成就しけるとなり。されば論語に曰く、過りて改むるに憚る事勿れ。過りて改めざるは、賢かへりて愚なり、と見えたり。此の文の名を圓珠と言へり。まどかなる玉の、盤を走るとよそへてなり。君御言葉の重き一つにて、多勢の靜まりけるにて知られけり。曾我の人々は、あはれ事の出で來れかし。荷擔人する風情にて、狙ひ寄つて一刀、刺さむと許思ひけり。斯くて日も暮方に成りしかば、今日を限と、傾く日影を惜みけり。

九 新田が猪に乘る事

爰に伊豆の國の住人、新田の四郎忠常、未だ鹿に逢はずして、落ち來る鹿を相待つ處に、幾年經るとも知らざる猪が、ふしくさかく十六つきたるが、主を知らぬ鹿矢ども、四つ五つ立つたりしが、大きに猛つて駈け廻る。譬へば、養由が術、きよりくりう

思ふに。

八 燕の國早魃の事

大國―支那

しやうめい
―生命歟

逆鱗―人君

大國の燕の國、早魃する事三箇年なり。然れば草木悉く枯れ失せ、人民多く亡びける上は、鳥獸に至るまで、生き残るべしとは見えざりけり。國王大きに歎き給ひて、大法祕法、残さず行ひ雨を祈られ共、驗なし。大王思ひの餘りに、諸天に恨み奉りて曰く、「我生れてより此の方、禁戒を犯さず、事を妄に行ふとも思はず候ふに、斯の如く早魃して、人のしやうめいすくなし、若我が身に過る所あらば、戒め給へかし」と歎き申さるれども、其の驗なし。今は身命を民の爲に捨てんには如かじとて、廣き野邊に出で、萱を多く集めて、高さ廿丈に積み上げさす。公卿大臣、奇異の思ひをなす所に、國王臨幸なりて、其の萱の上に登り給ひて、「火をつけよ」と綸言なりければ、臣下大きに辭してつくる者なし。其の時大王宣ふ、「若し過りて、政事猥なること有らば、焼けぬべし。焼くる程の身ならば、命生きても益なし。若又過らずは、天是を守るべし」とて、大きに逆鱗ありければ、綸言背き難くして、四方より火をつけよれば、猛火山の如くに燃

白まぬ者—
俗にいふひ
け取らぬ男

魚鱗—中高
になりて突
出する陣法
鶴翼—廣か
りて敵を包
む陣法

よ」と言ふまゝに、既に中指抜き出す。梶原が郎黨は、言ふに及ばず時の綺羅、竝ぶ者
なかりしかば、知るも知らぬも押し竝べて、梶原方へぞ馳せ寄りける。三浦の人々も是を
見て、源太に意趣ある上は、秩父方へは疎遠なり、見放すまじ、とて馳せ寄りける。以下の
人々兒王の人々は、梶原方へぞ與力する。みま本間の人々は、秩父方へぞ寄せ来る。駿
河の國の人々は、梶原方へぞ寄りにける。伊豆の國の人々は、北條殿を先として秩父方
へぞ馳せ寄りける。安房と上總の武士は、二つに割れて寄りにける。常陸下總の人々
は、秩父方へぞ集りける。八箇國のみにあらず、日本國中に名を知らるゝ程の侍、魚鱗
に重なり、鶴翼に連りて、ひたひしめきに薙きけり。畠山殿は、始めより知り給ひし
が、如何思はれけん、知らぬ由にてぞましましける。頼朝これを御覽じて、「あれく義
盛靜め候へ」と、仰せ下されければ、和田殿、兩陣の間へ馬駆け入れ、「上意にて候ふぞ。
鹿論の事互に其の理あり。所詮鹿をば上へ召され候ふ。兩人御前へ參られよ、との御説
にて候ふ」と、大音聲にて言ひ、其の後勢子を召し、彼の鹿を昇せ、六郎と源太と引き連
れ、御前差して參られけり。さてこそ兩陣は破れにけれ。危ふかりし事共なり。さ
ればにや、君の御惠遍く、御憐深くして、事靜まりぬ。方々も安穩なるにて、昔を

中や絶えな
む―古今集
の龍田川紅
葉みだれて
流るめり渡
らば錦中や
絶えなむを
引用す

此の鹿を取れ。重保も駒打ち寄せ、「雑人は無きか、重保が止めたる鹿のかはたて」。源太
さる者なりければ、少しも怯む氣色はなし。「臆したる奴原かな。景季が止めたる鹿のか
はたてかきて取れ」。重保さらぬ體にて駒駈け廻し、「雑色共は、など鹿をば取らぬぞ」と、
早事實なる詰論なり。源太は手綱搔くり駒打ち寄せて小聲に言ふ様、「戀路に迷ふ隠し文
やる者こそ主候ふよ」。重保聞いて、「優しく宣ふ譬かな。思ひの色の數夜まで、空しく返
すには、返し得たるぞ主となる」。源太打ち笑ひ、「吉野龍田の花紅葉、誘ふ嵐は主ならず
や」。重保聞きて、「言れずや誘ふ嵐も其の儘に、終に連れても行かばこそと宣ふ、龍田の
河の河波に、散りて流るゝ花の雪、紅葉の錦渡りなば、中や絶えなんさりながら、流れ
て止る所こそ、誠の主と思はるれ」。實に故ありて聞えたり。波にも連れて行かばこ
そ。かゝるるせきも主なるべき。「るせきも留め果てばこそ。流れて止る湊こそ、誠の
主とは覺えけれ」。源太此の詞を打ち捨て、「更け行く月の傾くをも、詠むる者こそ主と
なれ」。重保聞きて高らかに打ち笑ひ、「世界を照す日月を、主と宣ふ過分なり」。過分は
人によるものを、御分一人に歸すかとよ。重保たまらぬ男子にて、「獨に歸すか歸せざる
か、手竝の程を見せん」とて、既に矢をこそ抜き出す。源太も白まぬ者なれば、「案の内

七 源太と重保が鹿論の事

矢目―矢の
あたりしあ
と

斯かる所に上の繁みより、鹿一頭出で来り、梶原源太ひかへたる、左手を通りてぞ下りける。景季幸にやと喜びて、鹿矢を打ち番ひよつぴき放つ。追つ様筋かひに首をかけ、つとぞ射貫きたる。されども鹿はものともせず、思ふ繁みに飛び下る。二の矢を取つて番ひ、鞭打ち下す所に、不思議に馬を乗り懸けて、足竝亂るゝところに、下り立つて、馬引つ立つる其の隙に、畠山の六郎重保、馳せ竝べてよつぴいて放つ。源太が矢目をはきり迄ぞ射ける。源太にはしたゝかに射られぬ。鹿は少しもはたらかず、二つの矢にてぞ止まりける。重保馬打ち寄せて見る所に、源太も駆け寄せて、「鹿は景季止めて候ふぞ」。重保聞いて、「心得ぬ事を宣ふものかな。鹿は重保が矢一つにて止めたる鹿を、誰人か主あるべき」。源太弓取り直し嘲笑ひて申す様、「狩場の法定まれり。一の矢二の矢次第あり、矢目は二つも有らばこそ、一二の論も有るべけれ、景季も正しく射つるものを」とて、見れば實にも矢目は一つならでは無かりけり。さりながら御前で、取らるゝ者ならば、時の恥辱に思ひければ、源太大きに怒りをなし、「勢子の奴原は無きか、寄りて

の物數ものかずは此の人々とぞ聞えし。爰こゝに葛西かさいの六郎清重きよしげひ日の暮方くれがたに至るまで、鹿しか一頭かしらも止め
 ずして、勢子せこに漏るゝ鹿しかもやと、繁しげみくゝに目をかけて廻りける。折をり節ふし右手みぎでの繁しげみよ
 り、鹿しか一頭かしら出でて来る。願ねがふ所と見渡せば、矢や比ひに少し延のびたり。鎧よろいに鞭むちを打ち添そへて、
 下くだり様さまにぞ落おしける、既に二三段だん切り違ちがへて、弓ゆみ打ち上あげて引かんとする所に、思はぬ
 岩石がんせきに、馬うまを乗り掛かけて、四つ足一つに立てかねて、わなよきてこそ立ちたりけれ。お
 ろすべき様やうもなく、進退しんたいこゝに谷きれり。上下じやうげ萬民ばんみんこれを見て、唯ただ「あれはく」とぞ申し
 ける。今は馬人うまひにとりごと諸共もろともに、微塵みじんになるとぞ見えたりける。清重きよしげ手綱てづなを靜しづかに取り、とねりな
 しを結び置き、かどみの鞭むちを打ち添そへて、二つ一つの捨手綱すてたづな、むごんりうに落ちかよ
 り、放はなせば後うしろに下り立つたり。馬は手綱てづなを捨てられて、眞砂まきごにつれて落ちて行く、かづ
 き弓ゆみのもと岩角いはかどにえり立て、暫しばしこらへて立ち直る、諸人目しよにんをこそすましかれ。「乗のりた
 り下りたり、据すゑたりや堪こらへたり」と、暫しばしは鳴も靜しづまらず。君も御感ごかんの餘あまりにや、常陸
 の國小栗をぐりの庄しやう三千七百町下されけり。時の面目めんぼく日の高名かうみやう、何事かこれにしかん、と感かんぜ
 ぬ人こそ無かりけれ。

むごんりう
 ー今いふ自
 己流

ふぢまつの
藤の松に懸
りたる模様
の衣服
しばうち長
に一行藤の
裾長々と着
たる也

持ち馬に乗る侍、三百萬騎もあるらんと見えし。其の後勢子を山へ入れけるに、東は愛鷹の峯をさかひ、西は富士川を際として、引き廻されけり。勢子は雲霞の如し。嶺に登り谷に下り、野干を平野に追ひ下し、思ひ／＼に射止めけり。御寮の其の日の御装束には、羅綺の重衣のふぢまつ、風折したる立烏帽子に、狩衣は柳色、大紋の指貫に、熊の皮の行膝、しばうちながにめし、連錢葦毛なる馬の五尺に餘りたるに、白鞍置かせ、厚房の鞆かけてぞ召されける。御劔の役は江戸の太郎、御笠の役は豊島の新五郎、沓の役は小山の五郎、御敷皮は金子の十郎なり。其の外一人當千の武士、六七百人御馬の廻りと見えたりし。其の中に殊に勝れて見えたりしは、五郎丸なり。萌黄緘の胴丸に、一尺八寸の太刀指し、四尺八寸の太刀を佩き、黒金の棒の三人して持ちけるを、もと輕けにつきて、御馬の前にぞ立ちたりける。御陣の左右には和田畠山いづれも鷹をぞ据ゑさせける。馬うち靜かにして又竝ぶ人なくぞ見えし。其の外數千騎の出立、花を織り月を招く粧、廣き富士野も所なくぞ見えし。かくて山より鹿ども多く追ひ下し、思ひ／＼に止めて、御寮の御見參にぞ入れにける。畠山の六郎重保、左手右手に相付けて、鹿二頭止む。宇都宮五頭、一條板垣五頭、武田小山の人々も、五頭こそ止めけれ。其の狩場

伏せる小夜
の中山とあ
るを引く
滄波路遠く
―和漢朗詠
橋直幹の句
に蒼波道遠
雲千里、白

霧山深島一
聲とあり娘
の詠歌の事
は虚構也

次郎―六郎
の誤か

と詠みたりければ、父聞きて、先の下の句を繼ぎけり。はくぶ山深うして鳥一聲、と言ふ詩も、今更思ひ知られたり。其の夜は君浮島が原に御泊りあり。此の人々も便宜善くば、と伺ひけれども、用心隙なかりければ力なし。其の夜も其處にて伺へども、北條殿の警固にて隙もなし。

六 富士の狩場への事

御れうは相澤の御所にましましけるが、梶原源太左衛門を召して仰せ下されけるは、「昨日の狩場より勢子少くては叶ふまじ。其のよし相觸れよ。承つて人々に觸れ、射手を揃へけり。先武藏の國には、畠山の庄司次郎重忠、三浦の和田左衛門義盛、三浦介義澄、下總の國には千葉の介、甲斐の國には古郡左衛門兼忠、武田の太郎信義、下野の國には宇都宮の彌三郎友綱、横山の藤馬の丞、相模の國には松田河村の人々を先として、以上三百餘人なり、若侍には、畠山の次郎重保、梶原源太左衛門景季、朝比奈三郎義秀、同じくひこ太郎、御所の太郎、森の五郎、林の四郎、小山の三郎、笠井の六郎、板垣の彌次郎、本間の彦七、澁谷の小五郎、愛甲の三郎を始めとして四百五十餘人なり。總じて弓

りては、或は壽命長遠と祈り、諸病悉除とこそ祈るに、此の人々の明暮は、父の爲に命を召せとのみぞ申しける、無慙なりし事どもなり。斯様の事迄も、最後の文に詳しく書きて、富士野より曾我へ返しける。母見給ひて、五つや三つより思ひ立ちけるとも知られけり。

五 浮島が原の事

諸も御寮は、浮島が原に御座の由承り、曾我兄弟も急ぎ追つ付き奉りぬ。浮島が原を通りけるに、彼の原の昔は、海にてありけるに、大國より愛鷹山と言ふ山、富士と丈競せんとて、來りけるを、權現蹴崩し給ひければ、其の山海に浮きて、今の浮島が原になりけり。一方は海漫々として雲行客の跡をうづみ、一方はよこをり伏せる小夜の中山、宇津の山邊續ぎ、東路わけて遙かなり。或人東國に下りけるが、此の原にて、滄波路遠くして雲千里と云ふ、詩の上の句を作り、下の句をよせかねたりける折節、十六歳になりける娘を連れたりけるが、詩をば作り得ずして、路遠く雲井はるけき山中に又ともきかぬ鳥の聲かな

よこをり伏
せる―古今
集甲斐歌に
甲斐がねを
さやにも見
しかけけれ
なく横ほり

よ。祈禱は頼母しく思ひ給へ。此の法師が息の通はん程は、明王を責め奉らんに、何の疑があるべき」と宣ひけり。時致承つて、「仰かたじけなけれども、更に野心の儀は候はず。御不審の條尤もにて候へ共、「恐れ奉つて参らぬなり。狩場より歸りには参るべく候ふ。又は思し召し合する事も候ひなん」とて罷り立ち、さらぬ體にはもてなせども、今を限なれば、忍びの涙を流しけり。別當も縁まで立ち出で給ひて、遙々見送りつゝ、名残惜しくぞ思はれける。兄弟の人々は、駒に鞭を打ち、急がれける程に、三島近くぞなりにける。

四 三島にて笠懸を射たる事

託宣―神佛
の人につき
ていはるゝ
言

十郎道にて申しけるは、「只今別當の御詞、偏に御託宣とおほえたり。其の上我等に權現より劔一つ宛給はり候ふ上は、今度敵を討たんこと疑ひあるべからず」と喜びて、三島の大明神の御前にこそ着きにけれ。此の人々疊紙を挟み、七番宛の笠懸を射て、法樂し奉り、敵の事心の儘にぞ祈られける。「誠に思ふ事叶はずは、我等敵の手にかゝりて、足柄を東へ二度歸し給ふべからず、南無三島の大明神」とぞ念じける。皆人は、神や佛に詣

に、義朝よしともの末すえの子、九郎判官殿未だ牛若殿はうぐわんぎのいまうしわかぎのにて、鞍馬くらまの東光坊とうくわうぼうの許もとに、學文がくもんしておはしけるが、如何いかにしてか聞き給ひけん、折々毘沙門せりくびしやもんに詣り、歸命頂禮きみやうちやうらいねが願ねがはくは、父義朝よしともの太刀たち、此この御山おやまに籠められて候ふ。父の形見かたみに一目見せしめ給へと、祈念きねん申されければ、多門たもん哀あはれと思し召しけるにや、此の太刀たちを下し給ふと夢想むさうを蒙り、喜びの思ひをなし、急いそぎ参りて見奉り給へば、御戸おんご開けて此の太刀たちあり。盗み出して深く隠し置き、十三になり給ひける年、相傳さうでんの郎黨奥州らうだうあうしうの秀衡ひでひらを頼み、商人あきうぎに伴ひ下り給ひけるに、美濃なるひの國垂氷しゆくの宿しゆくにて、商人あきうぎの寶たからを取らんとて、夜討よううちの多く入りたりしかども、起おき合あふ者も無かりしに、牛若殿うしわかぎの一人起き合ひ、究竟くつきやうのつはもの十二人斬り止め、八人に手を負おうせて、多くの強盜がうたう追つ返す。高名かうみやうしたる太刀たちなりとて、奥州あうしうまで祕藏ひさうせられけるに、十九の年兵衛ひやうゑの佐殿謀叛すけざのむほん起し給ふと聞こし召し、鎌倉のぼに登り見参けんざんに入り、幾程いくばう無くして、西國さいこくの大將軍たいしやうぐんにて發向はつかうせられけるに、今度の合戦かつせんに打ち勝たせ給へとて、此の御山おやまへ参らせ給ひて候ふ。自然しぜんに僻事ひがじし出し候ひて、上より御尋おんたづねあらば、法師ほうしが御邊ごへんに奉りて、狼藉らうぜきなりと御不審ごふしんあらん時は、京きやうに上り、四條でうの町にて買ひ取りたる由申さるべし。御分男ごぶんなんになり給へば、今は見参けんざんに入れ度は無けれ共、志を思ひやられて哀あはれなるぞと

多門一四天
王の一、毘
沙門天とも
いふ

たり。夫よりして八幡殿へ譲られける。夫にての不思議には、其の比宇治の橋姫の、あ
れて人を取りけり。或夕暮に八幡殿、宇治へ参られけるに、人の申すに違はず、川の水
浪しきりにして、十八九許なる美女一人橋のうへに上りて、八幡殿を馬より抱き下し、川
の中へ入れんとす。彼の太刀おのれと抜け出でて橋姫の左手の腕を斬り落す。力及ばず
川の中へ飛び入りぬ。夫より狼藉も止りけり。然れば此の太刀を姫斬と名付けて持たれ
たり。夫より六條の判官爲義の許へ譲られたり。夫にての奇特には、此の太刀に六寸許
勝りたる太刀を添へて置かれたるに、夜に入りぬれば斬り合ひけるを、判官此の由聞き
給ひて、豫てよりやうある者をとて、五夜までこそ立ち添へて置かれけれ。五夜の隙な
く戦ひ、六夜と申すに我が寸に勝りたるを、安からずや思ひけん、餘る六寸を斬り落す。
されば友切と名付て持たれたり。源氏重代にも傳ふべかりしを、保元の合戦に、爲義斬
られ給ひ、嫡子左馬守義朝の手へ渡りけるに、佛法守護の佛とて、鞍馬の毘沙門に籠め
給ふ。されども過ぎにし合戦に、父を斬り給ひしかば、多門も受けずや思しけん、合
戦に打ち負け、東國指して落ち給ふ。尾張の國智多の郡、野間の内海と言ふ所にて、相
傳の家人、鎌田兵衛正清が舅、長田の四郎忠致に討たれ給ひて後、傳ふべき人なかりし

よりの名
清水の御曹
司一義高

鑢鄧一名工
の名こゝは
刀鍛冶の意
に用ひたり

聲になり給ひて、國の大將軍給はつて、海道を攻め上り給ひ候ふ由聞えければ、彼の寶を祈の爲とて此の御山へ參らせらる。寶殿の事は、一向別當の計ひたるに依て、是を御邊に奉る。高名し給へ」とてひかれけり。五郎には、兵庫鑢の太刀を一振取り出しひかれけり。「此の太刀と申すは、昔頼光の御時、大國より、武惡大夫と言ふ鑢鄧を召し、三箇月に作らせ、一箇月に磨かせ二尺八寸に打ち出す。秘藏竝ぶ者無くして持たれけり。或時二つの太刀を枕上に立てられし時、俄に雨風吹きて此の太刀を吹き動しければ、は風に傍なりける草紙、三帖の紙數、七十枚切れたりけり。頼光、てうかと名付けて持たれたり。夫より、河内守頼信の許へ讓られぬ。夫にての不思議には、此の太刀を抜かれれば、四方五たんぎりの虫も翼も切れ落ちにければ、むしばみとぞ附けられける。夫より頼義の許へ讓られたり。夫にての不思議には、折々御所中震動して、人死し失すること度々なり。或時頼義、此の太刀を枕に立てられしに、例の如く雷電はけしくして、御所中騒し。此の太刀己と抜け出でて、大地一丈が底に入り、かゝる惡事仕る大蛇の尾頭、九尋ありけるを、四つにこそは切りたりけれ。其の後よりぞ御所中の狼藉も止りける。怪みて跡を尋ねて見給へば、かゝる不思議をしたりければ、毒蛇と名付けて持たれ

おこたりー
謝罪

て思ふべきにあらず。御身こそよそがましくし給へ、面々の心中はじめより委しく知りて候ふぞ。哀にのみこそ思ひ奉れ。いかでか怨み申すべき。人に頼まるゝ事、在家出家によらず、愚僧も年だに若く候はゞ、などかはたよりに成らざるべき」とて、墨染の袖を顔におしあて、さめぐと泣き給へば、十郎承り、「御意畏り入り候へども、さらに野心の候はず。時致も其の後やがて罷り上り、男に成りて候ふおこたりをも、申すべきに候ひしを、母に不孝せられて候ひぬ。また恐をなし奉るゆゑ、今に遅なはり候ふ。別當聞き給ひ、「祈禱はたのもしく思ひ給へ。千騎萬騎の方人と思し召せ」とて、酒取り出し、三々九度勸め給ひけり。

三 太刀刀の由來の事

「何を以つてか、方々の門出祝はん」とて、鞘卷一腰取り出し、十郎にひかれけり。此の刀と申すは、木曾義仲の三代相傳とて、三つの寶あり。第一にりうわう作りの薙刀、第二にくもをどしと言ふ太刀、第三に此のかたななり。名をばみちんと言ふ。通らぬ者なればなり。されば此の三つの寶を秘藏して持たれたり。御子清水の御曹司、鎌倉殿の

曾我物語 卷第八

一 箱根にて暇乞の事

眞如——萬有の實體をいふ
本地——この權現の印度にての本體
願はくは——一本此下に
「今生にては思ふ敵を討たせ後世にては共にとあり」

抑箱根山と申すは、關東第一の靈山なり。後には高山峨々と連りて、眞如の月影を宿す。前には生死の湖漫々として波煩惱の垢をすよけば、無始の罪障も消滅すと覺えたり。本地文殊師利菩薩、衆生を化度し給へば、有爲の都と名づけたり。されば一度縁を結ぶ者は、長く惡所に墮さじ、と誓ひ給ふ事、頼もしくぞ覺えける。此の人々は御前に参り、「歸命頂禮、願はくは淨土に迎へとり給へ。時致十一よりこの御山に参り、今に至るまで毎日三卷づつ、普門品怠らず讀み奉るも只此の爲なり、憐み給へ」と念誦して、別當の坊へ行きにけり。

二 同じく別當に逢ふ事

行實やがて出で逢ひ給ひて古今の物語し給ふ。「男になり給へばとて、昔になりかはり

ぞかし。いかでか上矢を參らせざらん」とて、十郎一の枝にとどむ。五郎二の枝にぞ射立てける。何となく射けれども、十郎はよひに討たれ、五郎はあしたに斬られにけり。此の杉の瑞相現れて、一二の枝のへだて不思議なりける次第とは、今こそ思ひ合せけれ。さても兄弟は、駒を早めてうつ程に、箱根の御山にぞ着きにける。

は、其の事こそ叶はずとも、せめて道よりなど最後の言傳だになかりつるぞと、怨み給はん事さぞあらん、と思へば包む其の涙、先立ちぬるこそ悲しけれ。

十一 矢立の杉の事

「とても捨つべき命ども、遅速は同じ事ながら、さりぬべき便宜もこそあらめ、一時も急げや」とて、駒を早めて打つ程に、矢立の杉にぞ着きにける。「此の杉と申すは、元は湯本の杉といひけるを、一年九州阿蘇の平權守とて、虎狼の逆臣あり、九國をうち從へて、ちやうずる事四年なり。軍する事五十餘度なり。度ごとに勝てり。其の時の齡七十二歳なり。剩天下をなやまし奉らんとて、國を催す聞ありければ、六孫王の御時、其の討手の爲に、關東の兵を召されのほりしに、此の杉のもとに下り居て祈りけるは、九州に下り權守をうち從へ、難なく都に歸りのほり、名を後代にあぐべくは、一の矢受け取り給へ、とて、各射けるに一人も射損ぜず。さて筑紫に下り合戦するに、なんなくうち勝つて取り上りぬ。其の時よりして矢立の杉と申しけり。門出目出度き杉とて、上下旅人、心あるもなきも、此の木に上矢をまるらせぬはなし。況や我等思ふところありて行く者

六孫王―經基、清和の第六子貞純親王の子源姓を賜はりて人臣となる

笠懸——騎射
笠を的に用
ひたるより
の名なれど
も普通は藁
を革にて包
みたるを用
ふと也

やありて申しけるは、「いかでかやうの大事、聲には知らせ候ふべき。異姓他人にては候はずや。いかなる人か、世になき我等が、死にと行くとかたらはんに、同意する者や候ふべき。たと對面ばかりにて御通り候へ」。十郎聞きて、「御分の心を見んとてこそ」と相談し、あひ近くなりければ、此の人々馬より下り、弓取りなほし色代す。「人々は何處へ往き給ふぞや」「鎌倉殿富士の御狩とうけたまはり、狩場の體見まゐらせて、末代の物語と思ひ立ちて罷り出で候ふ」と申す。義實聞きて、「あはれ人々の無用の見物かな。馬鞍見苦しくての見物然るべからず。これより歸り給へ。某も御供と仰せられつるを、見苦しさに、風の心地と梶原が方へ申して遣し候ふ。面々もたど是より歸り給ひて、二宮に逗留し、笠懸など射て遊び給へ」と申しければ、十郎、「畏り存し候へども、斯様の事は重ねて有難き見物と存じ、既に思ひ立ちて候ふ。馬弱くば山をば牽かせ候ふべし。歸りには参り、暫くも逗留仕り候ふべし。設の肴御用意候へ」と申しければ、「此の上は御歸りをこそ待ち申すべし」とて、馬引き寄せ打ち乗り、東西へ打ち別れにけり。只世の常とは思へども、是ぞ最後の別れなり。さても我等討死の後、形見ども曾我より二宮へも送りなん。其の時にこそ、男子なりせば一みちにならで有るべきに、女の身の悲しさ

此の人に云々十郎と同じ心に悲しみては

とうち眺め涙くみければ、五郎此の有様を見て、此の人に同心しては、はかなくしき事あらじ。いさめばやと思ひければ、怒り聲になりて、「殿こそは、大磯、小磯、曾我故郷をも眺め給へ。時致に於ては思ふ事こそ急がはしく候へ」とて、駒ひき退け駈け出し、二町許駈け通りぬ。十郎興さめて思ひながら、駒駈け出し追ひつきけり。五郎ひきさがり、口説きけるは、「人界に生を受くる者、誰かは最後の餘波惜しからで候ふべき。鬼王團三郎が心をも御恥ぢ候へかし。彼等をば曾我へ歸し候ふべし。若此の事叶ひて候はば、申すにや及ぶ。仕損する者ならば、此の人々が、此處にては歌をよみ、彼處にては詩を詠じて、しもたてぬ事なんと嘲られんも口惜し。いかばかりとか思し召し候ふ」と申しければ、道理とや思はれけん、其の後は歌をもよまず、横目をもせず、うちける程に、大くづれにこそつきにけれ。

十 二宮の太郎に逢ひし事

隙ゆく道を見渡せば、馬乗五六騎出できたる、誰なるらんと十郎見るに、二宮殿と覺えたり。「いでや此の事いづばし語らん」といふ。五郎聞きて、餘の事なれば返事もせず。や

入れけるが、やゝありて十郎、

さみだれに淺瀬も知らぬ鞠子川波にあらそふ我が涙かな

五郎聞きて、歌の心あしくや思ひけん、むかばきづつみ打ちならして、かくぞ詠じける。
渡るより深くぞたのむ鞠子川親のかたきに逢瀬と思へば

かやうに思ひつらねて、通るところは、阿彌陀の院じゆ、かさま寺、湯本の宿を打ち過ぎ、ゆさかの峠に駒を控へ、弓杖突きて申しけるは、「人生れて三箇國にて、果つるとは理なり。我等生るゝ所は伊豆の國、育つところは相摸の國、最期どころは駿河國、富士の裾野の露と消えなん不思議さよ」。五郎聞きて、「其の最期所が大事にて候ふぞ。心得給へ」といさむれば、「仰せにや及ぶ」と宣へども、さすが故郷の餘波や惜しかりけん、我が故郷の方をはるゝと眺むれば、只雲のみかより、何處をそことも知らねども烟少し見えたるは、もし曾我にてや候ふらん」。團三郎これをかへり見て、「烟は曾我にて候はず。それより南の黒き森に、雲のかよりて候ふこそは、曾我にて候へ」と申しければ、古き事どもの思ひ出されて、十郎、

曾我はやしかすみなかけそ今朝ばかりいまを限の途と思へば

にあづかり給ふこと、有難かりし例なり。されば三井寺に泣不動とて、寺の寶の其の一なり。流させ給ひし御涙紅にして、御胸まで流れかよりて、今にありとぞ承る。誠に師匠の恩かやうにこそありたきものなれ。

九 鞠子川の事

鞠子川―相
摸、今酒
川といふ

阿防羅刹―
ともに梵語
地獄の獄卒
と鬼

「箱根を忍び出で候ひし時は、權現にも御暇をも申さず、まして師匠にかくとも申さざりし事、今に其の恐残りて覺え候ふ」と申しければ、十郎もさこそとて、箱根にぞ懸りける。鞠子川を渡りけるが、手綱はいくり申しけるは、「和殿三つ祐成五つの年より、廿餘の今まで、此の川を一月に四五度づつも渡りつらん、いかなる日なれば、今渡り果てん事の悲しさよ。などやらんいつよりも、此の川の水濁りて候ふ。心許なし」といひければ、五郎申す様、「皆人の冥途に赴く時は、物の色變り候ふとな。我等が行くべき道、曾我を出づるは、娑婆を別るゝにて候ふ。此の川は三途の川、ゆさかの峠は死出の山、鎌倉殿は閻魔王、御前祇侯の侍どもは、獄卒阿防羅刹、左衛門の尉は善知識、箱根の別當は、六道能化の地藏菩薩と念じ奉る。此の川の水、色變ると見えて候へ」とて、駒打ち

五躰一體と
兩手兩足
五臟—心肝
脾腎脾の五
機關

きやうじや
—行者なる
べし

及びければ、牛王の渡ると見えて、種々のさんせん幣帛、或は空に舞ひ上りて舞ひ遊
び、或は壇上を跳り廻る。繪像の大聖不動明王は、利劍を振り給ひければ、其の時晴明
座を立つて、珠數をもつて證空の頭を撫で、「平等大慧一乘妙典」と言ひければ、すなは
ち上人の苦惱さめて、證空に移りけり。頓て五躰より汗を流し、五臟を破り、骨髓を碎
く事いふに及ばす。是を見る人、晴明が奇特の貴さ、證空の志のありがたさに、上下袖
を絞るばかりなり。さて證空の頭より烟立つて、苦痛忍びがたかりしかば、年來頼み奉
る、繪像の不動明王を睨み奉り、「わが二つ無き命師命に奉ず、召しとらしめ屍を壇上
に留めん、と正念に住して、安養淨利に迎へ取り給へ。ちがしんしや卽身成佛、あやま
ち給ふな」と、一心の願をなしければ、明王あはれと思しけん、繪像の御眼より紅
の御涙はらくと流させ給ひて、「汝貴くも報恩を重くして、一人の親をふりすて、師命
に代る志はうじても餘あり、我またいかで汝が命に代らざるべき。きやうじやを助く
る大聖明王の誓、地藏薩埵に限らず、受くるところの苦痛を見よ」と新に靈驗顯れけれ
ば、明王の御頂より、猛火ふすほり出で、五體より汗を流し給ふ。貴しとも忝しと
も、言葉にもいひがたし。すなはち證空が苦惱止まり、智興大師も助かり、證空も誓

阿字―梵語
十二母音中
の最初のも
の一切の言
語文字阿字
より生ずと
爲す

ければ、袖そでひきわき難がたくて、掌たねを合せ、「みづからが申す道理ことわり、よくく聞きここしめし候へ。
惜をしみ思おもしめさるゝ御事ごじ、僻事ひがごとには存ぞんじ候はず。さりながら豫かねても申しゝ如く、此の世は
夢ゆめ幻まぼろしと住すみなし給へ。佛ほとけと申す事は外になし。我がなす胸むねのうちに、明あきらかなる月輪ぐわつりんの
曇くもらぬを悟さとりと申す、埋うづもるゝを迷まよひと申し候ふ。されば佛ほとけは、衆生しゆじやうに善惡ぜんあくへだてなきよし、説ご
きおかせおはしますものを、然さあらば親おやとなり子ことなり、師しとなり弟子でしとなる、これ皆みな
一心ぐわんの願ねがひにより、三箇さん大事だいじ 悉ことごとく阿字あじの一字じにこそ、をさまりて候へ」と怒りければ、
母ははひかへたる袖そでを少すこしゆるしける處に、棄恩きおん入無おんにふ爲信實しんじつ報恩謝ほうおんしゃの道理ことわりを、つぶさに説ご
ければ、母涙なみだをおさへて、「さらば」とて許ゆるしけり。證空しやうくうは嬉うれしくて、急いそぎ坊ぼうに歸りけり。
誠まことに孝行かうかうの程、天衆てんしゆ地類ちるいもあはれみを爲し給ふべきにや。

八 泣不動の事なきふ どうふ

晴明せいめい遅おそし、と待ちし事なれば、七尺しちしゃくに床ゆかをかき、五色しきの幣へいを立てたちて、きんせんさんぐ
數かずの供具ぐぐ、菓子くわしを盛り立て、證空しやうくうを中にすゑて、晴明せいめい禮拜らいはい恭敬くわんぎやうして、珠數じゆずさらくゝと押
しもみ、上うへは梵天ぼんてん帝釋たいしやく、四大天王だいいてんわう、下しもは堅牢けんらう地神ぢじん八大龍王だいりやうわうまで勸請くわんじやうして、既に祭文さいもんに

代り奉らば、御迎にも参るべし。さあらば一つ蓮の縁にも、などかはならで候ふべき。思し召しきり候へ」とて、餘波の袂をひき分る。母はなほも慕ひかね、「さらばみづからをも連れて、ひとつ蓮の縁になし給へや。捨てられて老の身の何となるべき」と、たゞ悲み給ふ。阿闍梨は母をなだめかね、斯様ならんと思ひなば、中々申し出すまじかりつるものを、又は母に暇申さずとも、思ひ定むべかりつる事を、心弱くて斯様に憂目を見ることよ。惜み給ふも道理なり。只一人ある子なり、一日片時も見奉らぬだに心もななくて、暇なき行法の間にさへ、心ならず思ひ見奉る事なし。まみゆる事遅き時は、杖にすがり來り給ひて、跪き背後に立ち、夏は扇をつかひ、冬は暖むるやうにしたよめ給ふ。これ然るべからず、と申せども、「幾程もなきみづからが、心に任せてくれよ」と仰せられければ、上人も憐みありて、心に任せよと御慈悲あるによつて、片時も離れ給ふ事なし。我また御憐のもだしがたさに、隙をはからひ見奉らんと通ひしぞかし。けにも今更別れ奉りなば、さこそ悲しくましますめ、と思へば、涙もせきあへず。誠にみづから亡せなば、やがてもだえ入り給ふべき志なれば、立つも立たれず居るも居られず、只惘然として泣く許なり。なほしも母は、ひかへたる袂を放さで寄りかより、泣き沈み給ひ

もだしがた
さに―默止
し難き故に

不孝する―
不孝の罪に
よけて勘當
すること

御恩許にて、母があはれみをば捨て給ふべきか。御身を殘し、みづから先立ちてこそ順次なるべけれ。思ひもよらぬ例」とて、證空の膝に倒れかゝり、涙に咽ぶばかりなり。證空は母の心を取り靜めて、「よくく聞こし召せ。師匠の御恩德には、何をか譬へて申すべき。はかなき仰ともおほえて候へ。」「はかなき母が生み置きてこそ、尊き師匠の恩德をもちうぶり給へ。母の恩大海よりも深しとは、誰やの人かいひおきける。」「親は一世師は三世、淺き憐なり。知らせ給ふらん。」「何とて情はましまさぬぞ。今日の命を知らぬ身の、恥をば誰か隠すべき。叶ふまじ」とて取りつきたり。「聞き給はずや、淨飯大王の御子悉多太子は、一人おはします父大王を振りすて、阿羅々仙人に給仕し給ひしぞかし。」「それは生きての御別、これは死すべき別なり、喻にもなるべからず。」「御詞の重きとて、只今かくれ給ふ師匠をや殺し奉るべき。」「誠にみづからものならずば、暇を乞ひても何かせん。七生まで不孝するぞ」と言はれつゝ、うち轉び給ひけり。かくて證空進退こゝに谷り、師匠の恩德を報じ奉らんとすれば、母の不孝永劫にも遁れ難し。身の置きどころなかりければ、母の御前に跪き、「不孝の仰悲みても餘あり、奈落の責いつをか期せん。此の世は假の宿なり、未來こそ實の住所にて候ふ。師匠の命に

晴明—安倍
氏天文博士
たり花山一
條天皇頃の
人

うたてし—
嘆かはし

まさば、まつりかへん」と申す。上人は苦痛の儘に、誰とはのたまはねども、御目を上げ
て、御弟子を見廻し給ふ。並び居給ふ御弟子、二百餘人あれども、我代らんと仰せらる
る方一人も無し。目を互に見合せ、赤面し給ふ色あらはれにけり。うたてかりし御事な
り。爰に證空阿闍梨と申して、十八に成り給ふが、末座より進み出でて、「吾報恩のあは
れみ盡し難し、何としてか報じ奉るべき。吾等が命なり共、代り奉る身なりせば、喜の
上の喜、何事かこれにしかんや。はやく」とて、墨染の袖をかきあはせ給ひて、晴明が
前に跪き給ふ。上人聞こし召し、惱める御眦に御涙を浮べさせ給ひて、御顔を振り
上げ、本尊の御方を御覽じけるは、證の命を御惜みありて、御身はいかにもと思し召さ
るゝ御容顔顯れたり。是又御慈悲の御志とぞ見えける。證空重ねて申されけるは、「深く
思ひ定めて候ふ。變すべきにも候はず。其の上上人の苦惱を見奉るに、刹那の間も惜しく
こそ候へ。御心に任すべきに非ず。急ぎ法會を行ひ、祀を急がれ候へ。但し八旬に餘る
母を持ちて候ふ。今一度今生の姿を見々え候ひて歸り参るべし。暫時待ち給ふべし」と
て、暇請うてぞ出で給ふ。證空阿闍梨を、哀と言はぬ者はなし。其の後母の許に行き、
此の事委しく語り給ふ。母聞きも果てず、證空の袖に取り付き、「思ひも寄らず、師匠の

よ。などわが敵討たであるべきと語れかし」けにや折による歌物語、あしく申すと覺ゆるなり。歌は兎もあれ角もあれ、此の度は敵討たん事易かるべし。老少不定の習なれば、もし我等敵に先立たば、惡靈ともなりて、取るべき者をや」と戯れつゝ、馬に鞭打ち急ぎけり。

七 三井寺の智興大師の事

十郎は、「足柄を越えて行かん」と言ふ、五郎は、「箱根を越えん」と言ふ所謂有り。此の三年別當の呼び給へども、男になりける面目なさに、見參に入らず、序に打ち寄りて、御目に懸るべし。最後の暇をも申さんとて参りたり、と思し召さば、聖經の一卷も、陀羅尼の一遍なりとも、弔ひ給ふべき善知識なり。其の上、師の恩を重くすれば、法にあづかる例あり。近き比の事にや、園城寺に智興大師とて、めでたき上人渡らせ給ひけり。顯密有驗の高僧と聞えけれども、未だ肉身を離れ給はざりける故に、重病に冒されて、苦痛惱亂辨へ難し。則ち晴明をよびて占はせけるに、「定業限にて助かり給ふべからず。たゞし多き御弟子の中に、報恩重くし命を輕くして、師の御命に代るべき人まし

園城寺—三
井寺
顯密—顯は
天台宗密は
眞言宗

曰く、汝馬じまの中の將軍しやうぐんなり。然るに父の敵かたきに志深こほし。父の取られける野邊のべに、我を具足ぐそくせよ、と言ふに、馬黄うきなる涙を流して膝ひざを折り、高聲かうじやうに嘶いほえけり。かうりよく大に喜びて、かのれうに乗り、馬に任せて行く程に、千里の野邊のべに出でて、七日七夜ぞ尋ねける。八日の夜半やはんに及びて、ある谷間たみに、獸多けだものく集り居たる其の中に、臥長一丈餘ふしだけ ぢやうもまじなる虎この、兩眼りやうがんは日月を雙なべたる様にて、紅の舌くれないを振りて臥しければ、肝魂きもたましひを失ふべきに、さる將軍の子なりければ、是こそ父の敵かたきよ、と矢取つてさし番つがひ、よつびいて放はなつ。過あやまたず虎の左の眼に射立てたり。少すこし弱よわると見えければ、かうりよく馬より飛んで下り、腰の刀かたなを抜き、虎を切らんと見ければ、虎にては無くして、年經としへたる石の苔蒸こけむしたるにてぞありける。かやうの志にて、つひに敵かたきを討つ。今の世の石竹いそちくと言ふ草、かうりよくが射いける矢なり、とぞ申し傳へたる。されば弓取ゆみとりの子は、七歳になれば、親の敵かたきを討つとは、此のこゝろなり。志により、石にも矢の立ちさふらふぞや。歌うたにもこのこゝろをよみけるにや、

虎と見て射る矢の石に立つものをなど我が戀こひのとほらざるべき」

十郎聞きて、「や殿との、歌物語心得ず。祐成すけなり如何なる鬼神おにがみなりとも、遁のがさじとこそ思ふぞと

し。我等も敵の手にやかゝらん、敵をや手にかけん、と思ふ憂身のながらへて、いつ迄物を思はまし。此の度はさりとも」と申しければ、五郎聞きて、「弱き御警を仰せ候ふものかな。何によつてか空しく敵の手にかゝり候ふべき。本意を遂けて後は知り候はず、それは兎も角も候ひなん。事長くは候へ共、昔大國に李將軍とて、猛く勇める武勇の達者あり。一人の子の無き事天に祈る憐みにや、妻女懷妊す。將軍喜ぶ處に、女房言ふ様、生きたる虎の肝をこそ願ひなれ。將軍易き事とて、多くの兵を引き連れ、野邊に出て虎を狩りけるに、却て將軍虎に喰はれて亡せにき。乗りたりけるうんしやうれうと言ふ馬、鞍の上空しくして歸りぬ。女房怪みて將軍虎に喰はれるや、と問へば、れう涙を流し膝を折り泣けども叶はず。わが胎内の子は、父を害する敵なり、生れ落ちなば、捨てん、と日數を待つ處に、月日に關守無ければ、程無く生れぬ。見れば男子なり。いつしか捨つべき事を忘れ、取り上げ、名をかうりよくと付けてもてなしけり。名將軍の子なれば、胎内より、父虎に喰はれるを安からず思ひ、敵取るべき事をぞ思ひける。光陰矢の如し、かうりよく早七歳にぞなりにける。或時、父重代の刀をさし、角の着きたる弓に、神通の鎬矢を取り添へ、厩に下り、父乗りて死にけるうんしやうれうに向つて

六 李將軍が事

李將軍一名は廣、漢の將軍として匈奴を伐ちて功あり、此の一段は將軍の虎を見て石に矢を射中てたりこの俗傳に基づきて假作せり

扱も鎌倉殿は、相澤が原に御座の由聞えしかば、此の人々も駒に鞭を添へて急ぎける。道にて十郎いひけるは、「名残惜しかりつる故郷も、一筋に思ひきりぬれば、心のひきかへて先へのみ急がれ候ふぞや」。時致聞きて、「さん候ふ。思ふ程は現、過ぐれば夢にて候ふ。心のまよに本意を遂げ、浮世を夢になし果てよ、早く淨土に生れつゝ、戀しき父、名残惜しかりつる母、かく申す我等まで、一つ蓮の縁とならん」とて、ひつかけくうつて行く。稍ありて十郎申しけるは、「我等が有様をものに譬ふれば、命々鳥に似たり。それをいかにといふに、大唐しくう山に雪深うして、春秋をわかざる山あり、其の山に頭は二つ胴一つある鳥あり。彼の山には青き草なければ、食ふべきものなし。されば、其の左の頭、偶餌食を求め服せんとすれば、右の頭中にて、取りて奪うて食ふ、或時、思ひけるは、所詮毒の虫を求め、右の頭を退治せん、と思ひ、毒の虫を求めいつもの如く服せんとす。彼の頭また奪うて食ふ。されば胴一つにてありぬれば、その身もいかでたまるべき、遂に空しくなる。其の鳥も明暮に、右は左をとらん、左は右をとらんとせしぞか

が關となり
歸りゆく雁
をしぼしと
ぢめよと也
烏帽子のざ
しき―座敷
にて頭につ
きたる様な
るべし

扇心あふぎのあるやらん、しばしといふ言ことばの葉はの詠よまれたるかな。さても十郎が供には團三郎
なり。五郎が供には鬼王おにわう其その他ほか四五人召よし具ぐして、打ち出でける有様ありさま、母は女房達にうぼうたちひき
連れ、廣縁ひろえんに立ち出で見送り、さまぐにぞ宣のたまひける。「直垂ひたしの着様きやう、行膝ひかきの引合ひきはせ、馬の
乗姿のりすがた、手綱たづなの取様とりやう、十郎は父に似たれども、器量きりやうは遙はるかの劣おとしなり。五郎は烏帽子のざし
き、矢やの負様おひやう、弓ゆみの持様もちやうに至るまで、穩おだやなる體父ていには少し似たれども、是も遙はるかの劣おとしな
り。山寺やまでらにて育そだちたれども、色黒くけすしく見ゆる。十郎は里さとに住みしかども、色白く
尋常じんじやうなり。我が子と思ふ故にや、いづれも清きよけなる者共ものどもかな。いかなる大將軍たいしやうげんといふと
も恥はづかしからじ。あはれ世にあらば誰たれにか劣おとしるべき。同じくは彼等かれらをば、父諸共ちちどもに見るな
らば、いかに嬉うれしくありなん」と、さめぐとこそ泣き給ふ。女房達にうぼうたちこれを見て、「物への
御門出おんかぎいでに、御涙おんなみだいまはし」と申しければ、「誠まことに彼等かれらが貧ひんなる出立いでたち、漫すざろなる事ども思ひつ
らねられて、袖そでのみ昔にぬれ候ふぞや。けに／＼千秋萬歳せんしゅうばんざいと、榮さかゆるべき子どもかぎいでの門出
なり。嬉うれしくも言ひ出し給ふものかな。此の度御狩たびみかりより歸かへりなば、上うへの御感被ごかんかうぶり、本ほん
領りやう悉ことごとく安堵あんぞして、思のまよなる歸かへるさ等待まちつべき」とてぞ、急いそぎ中にぞ入り給ふ。後
に思ひ合すれば、これぞ最後さいごの別わかれなり、と今こそ思ひ知られけれ。哀あはれなりし次第しだいなり。

ず、十郎はかやうの教も今を限と思ひ、心の色も現れて涙ぐみければ、急ぎ座敷を立ちにけり。五郎も餘波に涙を押へかね、よそめにもてなし立ちけるが、妻戸の敷居に蹴躓きうつ伏にこそ倒れけれ。されども人目に漏らさじとて、「色ある小鳥の、東より西の梢傳ひしを目につけ、思はずの不覺なり」とて打ち笑ひける。母是を見給ひて、「今日の道思ひ留り候へ。門出惡し」と有りければ、五郎立ち歸り、「馬に乗る者は墜ち、道行く者は倒る、皆人ごとのならひぞかし。さればとて留り候はんには、道行く者も候はじ」と、打ち連れてこそ出でにけれ、五郎はなほ母の名残を慕ひつゝ、今一度とや思ひけん、「扇の見苦しく候ふ」とて歸りにければ、母是をば夢にも知らずして、「折節扇こそなけれども」とてたびにけり。時致これも形見の數と思ひ、母の賜りけるよ、と思へば、扇さへなつかしくて、開きて見れば、霞に雁をぞ書きたりける。折にふれなば夏山の、繁る梢の松の風。五月雨雲の晴間より、遠里小野の里續き、我等が道の行末も、見るべきに、さはあらで、其の色違ふも理なり。憂身の上と案ずれば、古き歌を思ひ出でて、

同じくは空にかすみの關守りて雲路のかりをしはしとどめん

空にかすみの云々霞

これは爲世の唄の詠みし歌ぞかし。我等限の道を歎けども、誰ありて留むる者もなきに、

ちとぶ山云々一秩父に父を懸け母にはとそ(柞)を懸く

はやるーは
やまる

とぞかきける。

ちとぶ山おろす嵐のはけしきにえだ散り果てよはいかにせん

五郎時致生年廿歳、親は一世の契とは申せども、必ず淨土にては参り逢ふべし

とこそ書きたりけれ。各々箱に入れて、「我等討れぬ、と聞き給はゞ、此所に轉び入
て、伏し沈み給ふべし。いざやこしらへせん」とて、疊敷き直し、めん廓の塵うち拂
ひ、先見給ふ様にとて、さしいりの障子の際にぞ置きたりける。「空しき人をば常の所
よりは出さず、我等死人に同じ」とて、厩のあれ間より出でたりける。最後の文にこそ
かやうの事まで書きにけれ。かくて出でけるが、「いざや今一度母を見奉らん」とて、暇乞
にぞ出たりける、母宣ひけるは、「構へて人と諍し給ふな。世にある人は貧なる者を
ば、烏漕がましく思ひ侮るべし。左様なりとも咎むべからず。三浦土肥の人々は、さや
うにはあらじ。其の人々に交り睦び給へ。心のはやるまゝに、人のあひつけたる鹿を射
給ふべからず。公方の御許もなきに、弓矢持たずとも出で給ふべし。謀叛の者の末と
て、咎めらるゝ事もやあらん。いかにも事過し給ふな。年比憎まれずして養ぜられたる
曾我殿に、大事かけて恨かけ給ふな」と、細々とぞ教へける。五郎は聞きても色に出さ

れ、一人ある母には不孝せられ、貧なれば親しきにも疎くなり、あるか無きかの世になし者、誰やの人か憐むべき」とて、涙をはらくと流し給ひければ、其座にありし女房達俱に袖をぞ濡らしける。さて兄弟の人々は、我が方様に歸り、小袖を中におき、「嬉しくも推参しつるものかな。只今宥されずしては、多生劫を経るとも叶ふまじ。生きて二度歸るべきやうに、小袖返せ、と仰せられつるこそ愚なれ。何しに返せとは言ひつらん、神ならぬ身の悲しさよ、と後悔し給はん事今の様に覺えたり」とて、打ち傾きてぞ泣き居たる。「我等世にありて、心のまゝに親の孝養をも致さば、是程まで思はぬ事もありぬべし、此の三年こそ不孝の身にては候へ、それさへ戀しく思ひ奉りし折は、或時は物ごしにも見奉りて慰みしに、只今御宥を被り、一日だにもなくして出でん事こそ悲しけれ。死に給へる父を思ひて、孝養せんとすれば、生き給へる母に物を思はせ奉る。されば我等程親に縁なき者はなし。後の世迄盡きせぬものは、たと手跡に過ぎたる形見はなし。今や我等一筆づつ忘形見を残さん」とて、墨すり流しかくばかり、

今日出でてめぐり逢はずは小車のこのわのうちに無しと知れ君

祐成生年二十二、後の世の形見

鶴の丸―鶴
の羽を廣げ
丸くしたる
紋様

したるめ―
こしらへ

かなる高名かうみやうをも仕つかまつり、思はずの御恩ごおんにも預あづかり候はゞ。卒塔婆そとばの一本ほんをも心易こころやすくきざ
み、父聖しやうりやう靈そなに供へ奉らばやと存ぞんじ候ふ。母聞きて、「などやらん此の度の御狩みかりの御供おんごも、
心もとなく覺ゆるぞや。よき程にも候はゞ。思ひ留とどまり給へかし。さりながら衣裳いしやうの望のぞみ
あれば、小袖こそで惜むに似たり。それ〱女房達にうほうたちと宣へば、白き唐綾からあやに、鶴の丸とところどこ
ろ縫ぬひたる、小袖一つ取り出し、「十郎にも取らせぬるぞ。失うしなはずして返かへし候へ。十郎は
常つねに小袖こそでを借りて返かへさず。是は曾我殿の見知りたる小袖なり。一度とも見えすは、又例れい
の子供こどもに取らせたり、と思はれんも恥はづかし。小袖こそでをしたゝめて置くべし。構かまへて〱
疾く歸り給へ」とありければ、「承り候ふ」とて、練貫ねりぬきの着損きそんじたるに脱ぬぎ更へ、「見苦みぐるしく
候へども、人にたび候へ」とてぞ置きにける。小袖こそでのほしきにはあらねども、互たがひの形見
のかへ衣ころも、袖そでなつかしく打ち置きけり。扱さても兄弟は座敷ざしきを立ちければ、母見送り宣のたまひけ
るは、「過ぎにし比十郎小袖こそでを借り二度とも見せず。いかなる遊びものにも取らせぬる
よ、と思ひしに、さはなくして、弟の五郎に着きせけるぞ。又近ちかき比大口直垂おほくちひたくれし仕立したてゝ取ら
せしを、是も二度とも見せざりしが、團三郎だんざぶろうに着きせたりと思へば、是をも弟に着きせける
ぞや。誠まことに兄弟をば、野のの末山すえやまの奥おくにも持つべかりけるものをや、父には幼いさけなくして後おご

音とり調子
を合せ

君が代は云々
後拾遺集
大江嘉言
の歌

の事只今宥したるしるしに、此の盃思ひどりにせん。但し親と師匠に盃さすは、必ず着の添ふなるぞ。當時鎌倉にては、秩父の六郎が今様、梶原源太が横笛と聞く。されども他人なれば見もし聞きもせらればこそ。和殿は箱根に在りし時、舞の上手と聞きしなり。忘れずば舞ひ候へかし。十郎腰より横笛取り出し。平調に音とり、「いかにく遅し」と責めければ、暫し辭退に及びけるを、十郎はやし立てゝ待ちければ、五郎扇ひらき、かうこそ謡ひて舞うたりけれ。

君が代は千代にひとたび居る塵の白雲かゝる山となるまで

とおしかへしく、三遍踏みてぞ舞うたりける。其の儘調子をふみかへて、

わかれのことさら悲しきは親の別と子の歎

夫婦の思と兄弟といづれをわきて思ふべき

袖に餘れる忍音をかへして留むる關もがな

と二遍せめにぞ踏みたりける。母は昔を思ひ出づれば、彼等はさてもうき命、近きかぎ

りの涙の露、思はぬよそ目に取りなして、袖のかへしに紛らかし、しばし舞うてぞ入り

たりける。かくて酒も過ぎければ、十郎畏つて、「今度御狩に罷り出で、兄弟が中にい

まぼりー見
つめ

昔に―昔の
追慕に

勸學院―藤
氏の子弟
の學問所、
勸學院の雀
豪求を轉る
といふ諺あ
り

れば、十郎も嬉しくあはれにて、打ち傾き居たり。兄弟共に物をも言はず、只さめぐと泣き居たり。母此の有様を見て、「實にや親子の中程哀なる事なし。年老い身貧にして、人數ならぬ妾が詞ひとつを重くして、泣きしをるゝ無慚さよ。片端なる子をだにも、親は悲しむならひぞかし。いかでか憎かるべき。たゞ善かれと思ふ故なり」といひもわかで、母も涙を流しけり。其の後兄弟の者ども畏り居たるを、母つくぐと守り、いつしかの心地して、「汝自らを愚にや思ひけん、十郎がある處を見るに、五郎ありといふ時は心やすし。無しと聞けば心許なくて、妾も立ちて見るぞとよ。此の三年が程うち添はで、怨めしく悔しく思はれて、つくぐと見るに、直垂の衣紋、袴のきぎは、烏帽子のざしきに至るまで、父の思ひ出でられ、昔に袖ぞしをれける。さても五郎は箱根にても聞きつらん、十郎はいかにして經文をば知りけるぞや。祐成承り、「馬瘠せては毛長く、嘶ふるに力なし。人貧にして智短く、言葉賤し。何によつてか尊くも候ふべき」。女房達聞きて、勸學院の雀とかや申しければ、母打ち笑みて、「それゝ酒飲ませよ」と有りければ、種々の肴盃取り添へて、二人の前にぞ置きたりける。母取り寄せ飲みて、其の盃十郎飲む。其の盃五郎三度ほして置きければ、其の盃母取り上げて、「三年不孝

見ばやと思ひて、持ちたる扇あふぎさつと開き、大きに目を見出し、「兎ても角かくても生甲斐いきかひなき冠者くわじや、ありても何か益えきあらん。御前おんまへに召し出し、細首ほそくび打ち落おとしして見参けんさんに入れん」と、大聲を出して座敷ざしきを立つ。女房達にうはうたち驚おどろき、「いかにや」とて取りつく袖そでにひかれて、板敷いたじき荒あらく踏み鳴ならし怒いりければ、母も驚おどろきすがりつき、「物に狂くるふかや殿どの、身貧みんにして思ふ事叶かなはねばとて、現在けんざいの弟の首くびを斬きる事やある。それ程迄までは思はぬぞ。しばしや殿どの」とて取りつき給ふ。事こそ善よけれと思ひければ、「助け候はん。御宥おんゆるし候へ」といふ。母、「さらば宥ゆるす。留とどり候へ」と宣のたまへば、其の時十郎怒いかりを留とどめて。聲こゑを柔やはらかにし座敷ざしきになほり、畏かしこまり居たりける。されども忍しのびの涙なみだのすゝみければ、とかく物をば言はざりけり。五郎も恨うらみの涙なみだをひきかへて、嬉うれしさの忍しのびの涙なみだしきりにして、前後ぜんごを更さらにわきまへず、たゞ慎つしんでぞ居たりける。

五 母の勘當宥かんたうゆるさるゝ事

やとありて十郎座敷ざしきを立ち、「御宥おんゆるあるぞ時致ときぢ、こなたへ参り候へ」。五郎はしをるゝ袖そでに忍しのびかね、暫しばしは出でこそかねたりけれ。暫しばらくありて時致ときぢ、袖打そでち拂はらひ顔かほおしのごひ出でけ

地の重き事
は云々―不
孝者を載す
れば地神重
きに苦む也

んしやうは耳を燒き、ちそくは足をきる、せんめん舌を抜き、くわそくははを施し、くわうふめいは身を溫め、をしき子を殺す。是れ皆々孝行の爲ならずや。扁鵲もしんやくをしやうぜざる病をば治せず、けんしやう王も善言の聞かざる君をば用ひず、とこそ申せ。人の詞を聽かざる者、何の用にかたつべき。其の上不孝の者をば、同じ道をも行くべからず。急ぎ出でよ」とぞいひける。祐成重ねて申しけるは、「一旦の御心を背き法師にならざるは、不孝には似て候へども、父母に志の深き事は法師によるべからず。僧俗の形にもよらず。時致箱根に候ひし時、法華經一部讀み覺え、父の御爲にはや二百六十部讀誦す、毎日六萬遍の念佛怠らずして、父に回向申す、と承り候へば、大地を戴き給ふ堅牢地神も、地の重き事は候ふまじ。不孝の者の踏む跡、骨髓に徹りて悲み給ふなり。一つは彼の御跡をも弔ひ、一つは御慈悲を以つて祐成に御宥し候へかし。父に幼少より後れ、親しき者は身貧に候へば目も懸けず。母ならずして誰か憐み給ふべきに、斯様に御心強くましませば、立ち寄る蔭もなきまゝに、乞食とならむ事不便に覺え候ふぞや」。あはれ實に今を限と申すならば、いかど安かるべきに、申すべき事ならねば、忍の涙に目もくれて、しばしは物をも言はざりけり。なほも「宥す」と宣はねば、十郎怒りて

おそれければ―おそれれば歟
無慚―可憐
に

吳越も云々
―この二國
は中のわる
きに喩ふ、
らんでいば
こんでい
(昆弟)の誤
也
敵たう―敵
黨なるべし

居直り畏つて、「たゞ御慈悲には御許し候へ」とのみぞ申し居たりける。十郎は我が所にて、五郎を待てども見えざりけり。餘におそれければ、又母の方へ行きて見たれば、五郎内までは入り得ず、廣縁に泣きしをれて居たり。餘に無慚に覺えて、障子を引き明け畏つて、五郎が理をつくぐと聞き居たり。やゝありて、「某兄弟數多候へども、身の貧なるによつて、處々の住居仕る、たゞあの者一人こそ連れ添ひては候へ。祐成を不便に思し召され候はど、御慈悲を以つて御赦し候へかし。御子とても御身に添ふ者、我等二人ならでは候はぬぞかし」。母聞きて、「心にあふ時は、吳越もらんていたり、合はざる時は、骨肉も敵たうたり。智者の敵とはなるとも、愚者の伴とはなるべからず。位の高からぬをば歎かされ、智恵の深からぬをば歎くべし」とは、漢書の辭ならずや。十郎承りて、「それはさる事にては候へども、觀經の文を見るに、諸佛念衆生、衆生不念佛、父母常念子、子不念父母」と説かれて候ふ。此の文を釋すれば、佛は衆生を思し召さるれども、衆生佛を思ひ奉らぬところ見えて候へ。親として子を思はぬは無き者をや。母聞きて、「汝等は親のよきを申し集むるかや。いで又自ら子の孝行なる事をいひて聞かせん。孟宗は雪の中に筍を得、王祥は氷の上に魚を得、くわけんは眼を抜き、を

過去七佛の
法―過去の
七佛を請し
祈請する法
四大―地水
火風の四、
人身を作る
十二因縁―
人間の生死
輪廻する様
に十二の階
段を設くる
佛説

をとりて一千人に足すべし、といふ。やがて力士を差し遣し、彼の王をとりぬ。今は千人に満ちぬれば、一度に首を斬らんとす。こよにふみやう王合掌して曰く、願はくは我に一日の暇を得させよ。故郷に歸り、三寶を請じ頂戴し、沙門を供養して、闇路の便にせん、といふ。易き間の事とて、一日の暇をとらす。其の時王宮に歸り、百人の僧を請じて、過去七佛の法より、般若波羅蜜を講讀せしかば、其の第一の僧、ふみやう王の爲に偈を説く。こうせうしうこつ、けんこんとうねん、須彌巨海、といけやう、と述べ給ふ。ふみやう王此の文を聞きて、四十二因縁を得たり。法華無くうを悟る。さればにや斑足王、諸法空の道理を聽聞して、忽に悪心を翻して、捕籠むる千人の王に曰く、面々の科にあらず。我外道に勧められ、悪心を起す、不思議の至なり。今は助け奉るべし。急ぎ本國に歸り、般若を修行して、佛道をなし給へ。即ち道心起して、無上ほうにんを得たりと見えたり。是もふみやう王を許してこそ、俱に佛果を得給ひしなり。母聞きて、「其の如く佛果を請じて、多くの人を助くべき汝、などや法師になりて妾をば救はぬぞ。實や重きに從つて、道遠ければ、休む事地を選まずして仕へよ、とこそ古き言葉にも見えなれ。何とて妾がいふ事を聞かざるぞ。」「五郎も思ひきりたる事なれば、

こんれんだ
いー金蓮
歟
しこんー紫
雲歟

て此の太子、御位に即き給ひしが、母の御志を悲み、御菩提の爲三年胎内にて苦め奉りし日數千日にあてよ、千間に御堂を建て給ひけり。今のしかん寺是なり。日本には西の寺なり。さればにや后即ち成佛し給ふ時に、こんれんだいを傾け來迎し給ふ。其のしこんに準へて、藤を多く植ゑられたり。さてこそ藤の名所には入りたりけれ。母親の慈悲は斯様に候ひしなり。母聞きて、「老いたる自らあはぬ教のむつかしくて、腹をも裂きて死に亡せよとな。汝も母と見ず、妾も子とも思はぬぞ」とて、障子荒らかにたて給ふ。時致は此の度許し給はずしては、永劫を経るとも叶ふまじければ、五郎うち捨てよ。

四 斑足王の事

「仁玉經の文をば御覽じ候はずや。昔天竺に帝一人ましますに、太子おはしき。名をば斑足王と申す。外道等他の教訓につきて、一千人の王の首を取り、塚の神に祭り、其の位を奪ひ大王にならんとて、數萬の力士を集めて、東西南北、遠國近國の王城に、押し寄せくからめ捕り、既に九百九十九人の王をとり、今一人足らでいかどはせん、といふ。或外道教へて曰く、是より北へ一萬里行きて王あり、名をばふみやう王といふ。是

時、天神地神も是を捨て給へば、大地裂け割れて奈落到に沈む。母を殺さんとする子の命を悲みて、心ならず母走り向ひて婆羅門が髻をとり給へば、即ち頭髮抜けて母の手にとまり、其の身は無間に沈みけり。されども龜を放せし功力によつて佛果を得、法花經の普門品に、婆羅門神と説かれたり。斯様の子をだにも、親は憐むならひにて候ふものを。母聞きて、「や殿、それも、母がいふ事を聞きて、龜を放ちてこそ成佛はし給へ。汝何とて妾が教を聴かざるぞ。」「惡き子を思ふこそ、實の親の御慈悲にては候へ。又母の憐の深きには、事長く候へども、或國の王、一人の太子の無き事を歎き、天に祈りし感應にや、后懷妊し給ふ。國王の悅斜ならず、されども三年迄生れ給はず。公卿詮議ありて、博士を召して尋ね給ふ。勸文に曰く、御位は轉輪聖王たるべし。但し御産は平なるまじ、と申す。后聞き給ひて、賢王の太子いかでか空しくすべき。自らが腹を裂き破りて王子を恙なく、取り出すべし、と宣ふ。大王大きに御歎あつて許し給はず。后さらば干死にせんとして、食事を留め給ひしかば力なく、大臣に仰せつけて、御腹を裂かれにけり。其のなかばに后仰せられけるは、太子の誕生如何と問はせ給ふ。御恙なしと申せば、悦び給ふ色見えて、打ち笑みたるまゝ、御年十九にてはかなく成り給ひぬ。さ

背く者を許し候へとは説き給はぬぞとよ。」

三　しやうめつ婆羅門の事

「恐れながら、事長く候へども聞こし召され候へ。昔天竺に、しやうめつ婆羅門といふ人あり。物の命を千日に千殺して、惡靈に生れんといふ願を起し、早九百九十九日に、九百九十九人の生物を殺し、今千日に満ずる、日西山に上りて見れどもなし。曲江に下り船に乗り、海中に出でて、比翼の龜を一つ捕りて害せんとす。母是を悲みて渚に出でて見れば、波風高くして、雲雷電影しき其の中に、婆羅門龜を害せんとす。母是を見て、其の龜放せ。汝が父の命日ぞ。婆羅門聞きて、忌日ならば沙門をこそ供養せめ、といひて、おさへて殺さんとす。龜涙を流して、我八十年の後、かふたちこく大慈大悲に畢生安樂國、とぞ泣きける。母是を聞き、汝龜の言聞き知れりや。知らずと答ふ。龜は罪深きものにて、萬劫の罪障を経盡し成佛すべきに、今劔に従はど、又多劫を経かへすべき事の悲しさよと也。願はくは其の龜を放して、自らを殺し候へ、といふ。誠に龜の命に代り給ふべきにや、と言ひも果てず、龜を海上に投げ入れ、即ち劔を抜きて母に向ふ

ばうじ—忘
じ歟

とて惡者のありしは、勘當して行方知らず。是はたゞ、武藏相摸の若殿原の貧なる妾を
笑はんとてかく宣ふ、と覺えたり。然も留守居の體見苦し。早門の外へ出で候へ」と、事の
外にぞ宣ひける。時致思ひ切りたる事なれば、「其の箱王が参りて候ふ」。「それは誰が許
しおきたるぞ。女親とて卑しき候ふか。左様には候ふまじ。とても斯様に侮らるゝ身、七
代まで不孝するぞ。對面思ひもよらず」とぞ言はれける。五郎は許さるゝ事は叶はずし
て、結句後の世まで、と深く勘當せられて、前後を失ひ思にばうじ果てゝぞ居たりける。
稍ありて小聲になりて申しけるは、「斯様の身に罷り成りて、重ねて申し上ぐべき事、上
までは恐にて候へば、女房達心ある人あらば聞こし召せ。人の親のならひ、盜する子は憎
からで、繩造る者を恨むるは、常の親のならひにて候ふぞや」。母聞きて、「左様ならん者
を和殿が母にして、妾かやうなる者をば親とな思ひそとよ。人の言葉を重くせず、言葉を
かへすは善き子かとよ」。「御言葉を重くして、御返事を申さじとてこそ、御前の人々に
は申し候へ」。「左様に申すはかへり事にては無きか。一念の瞋恚には、具胝劫の善根を
たき、利那の怨がいには、無量億劫の苦報を招く。聞けばいよく腹ぞ立つ。其の座敷立
ちて」と宣ふ。「恐れながら普門品をば遊ばし候はずや」。「いかなる觀音の誓にも、掟を

練貫—縦を
生糸横を練
糸にて織り
たる絹

いふに、伊東殿の父、奥野の狩場より病つきて歸り、幾程なくて死に給ひぬ。御分の父河津殿、狩場にて討れ給ひぬ。かゝる事どもを思ひつゞくるに、狩場程憂き所なし。しかも謀叛の者の末、上にも御許なきぞかし。又馬鞍見苦しくて物を見れば、却つて人に見らるゝものを、思ひ留りて、親しき人々の方にて慰み給へ。斯様に申せば小袖惜むに似たり。善くは無けれども、紋柄面白ければ」とて、秋の野に、草盡縫うたる練貫の小袖一つ、取り出してたびにけり。十郎畏つて障子の中にて着替へ、我が小袖をば打ち置きて出でぬ。亡き後の形見にとぞ思ひおきたりける。五郎は不孝の身にて、兄が方に空しく泣き居たり。よく／＼物を案ずるに、母の不孝を許されずして、死なん事こそ無念なれ。推參して見ばや。生きたる程こそ仰せらるゝとも、死して後悔み給はん事疑なし。思ひきり申して見ん、とて、母の方へは出でたれども、さすがに内へは入り得ず。廣縁に畏り、障子を隔てゝ、「そも誰が御子にて候はん。時致にも召替の御小袖一つ賜りて、狩場の晴に着候はん」。母聞きて、「誰そや、來りて小袖一つといふべき子こそ持たね。十郎は只今取りて出でぬ。京の小次郎は奉公の者なり、二宮の女房は、又かやうにいふべからず。禪師法師とて乳の中より捨てし子は、叔父養育して越後にあり。又箱王

を誤り引けり

なりし志どもなり。「さて我等が思ひ立つ事、母に露程もしらせ奉るべきか。はからひ候へ」といひければ、時致聞ときさじきいて、「思ひもよらぬ御事なり。是程思ひ定めざるさきは知らず、今はいかでか事變へんじ候ふべき。其の上人うへの子が、謀叛むほん起して出で候はんに、其の親聞きて、急いそぎ死にても思はせよとて、悦よろこぶ母や候ふべき。それがしはたゞ御形見おんかたちを給はつて、最期さいごまで身に添そへ、此方こなたよりもまた參らせて、罷まかり出でんとこそ存ぞんじ候へ」。十郎聞きて、「實まことに此の儀然るべし。さらば其の序ついでに。御分ごぶんが勘當かんたうをも申し許ゆるして見ん」とて、母の方へぞ出でたりける。

二 小袖乞こそでこひの事

十郎御前おんまへに畏かしこまり、扇笏あふぎしやくに執り申しけるは、「奉公ほうこうを致いたし御恩被るべき身にては候はねども、末代まつだいの物語ものがたりに、富士野の御狩みかりの御供おんどもに思ひ立ちて候ふ。恐入おそれいりたる申事もうしごとにて候へども、御小袖おんこそで一つ貸し給はり候へ」と申しければ、母聞きて、「君臣きみしんを使ふに禮れいを以つてし、臣君しんきみに仕ふるに忠を以つてす、と論語ろんごの中に候ふぞや。何の忠によつてか御感ごかんもあるべき。御恩ごおんなくば無益むやくなり。哀此あはれのたびの御供思ひ止り給へかし。それをいかにと

深見草―牡丹の和名

花開き落ちて云々―白樂天の牡丹芳の詩中の花開花落二十日、一城之人皆如狂

れば、卯の花の蒼みたるが一房落ちたりけり。十郎これを取り上げて、「いかに見給へ五郎殿、老少不定のならひ、今にはじめぬ事なれども、老いたる母留り、若き我等が先立ち申さん事、是に等しきものを、開きたるは留り、蒼みたるは散りたるをや。名にし負ふ忘草ならば、餘波を思ひてや散りつらん。それは昔住吉に、諸神影向なりける事あり、御歸を留め奉らんとて、此の花を植ゑて忘草と名づけ給ひけるなり。歌にも、

もみぢては花咲く色を忘草ひとあきながらふたまちのころ

其の忘草は、紫苑とこそ聞きて候へ」とて、なほ草村に分け入りければ、深見草の盛と咲きたるを見て、「卯の花は蒼みてだにも散るに、此の花の思ふ事なけにさかりなるや。いかに咲くとも二十日草、盛も日數あるなれば、花の命も限あり。あはれ身に知る心かな」と涙ぐみければ、五郎聞きて、「此の草の事は、花開き落ちて、千日同じく、一城の人誑すが如し、と見えたり。これは樂府の詞なり。又歌にも、

名ばかりは咲かでも色の深見草花さくならばいかで見てまし

と口ずさみければ、十郎聞きて、「此の歌は未だ咲かざる時も、色深き草とこそ詠みたれ、盛の花には心や違ふべからん」と戯れけるにも、哀を残さぬ言の葉はなかりけり。無慙

曾我物語 卷第七

一 千草の花見し事

それ迷まよひの前の是非ぜひは、是非ぜひともに非ひなり。夢ゆめの中うちの有無うゐは、有無うゐともに無むなり。されば我等われらが身の有様ありさま、あればあるが間あひだなり。夢ゆめの憂世うれよに、何か現うつと定むべき。されば刹那せつなの榮花えいぐわにも、心をのぶる理ことわりを思へば、無爲むゐの快樂けらくに同じ。いざや最期さいごの眺ながめして、暫しばし思を慰なぐさまんとて、兄弟けいだいともに庭にはに下りて、植うゑ置きし千草ちぐさの榮さかえたるを、見るにも餘波なごりぞ惜うれしかりける。心のあらば草も木も、いかでか哀あはれを知らざるべき、と彼方かなた此方こなたに休やすらひけり。是によそへて古き歌を見るに、

古里ふるさとの花はなのものいふ世なりせばいかに昔の事を問はまし

古里の―後
拾遺集の歌
涅槃―梵語
不生不滅の
義釋迦の死
をいふ

今更思ひ出でられて、情なさけを残のこし哀あはれをかけずといふ事なし。五郎聞きて、「草木心なしとは申すべからず、釋迦しやか如來涅槃にょらいねはんに入らせ給ひし時は、心なき植木うえきの枝葉えだはに至るまでも、歎なげきの色いろを現あらはしけり。我等われらが別わかれを惜み候ふやらん。いかでか知り候ふべき」とて草を分けよ

檀だんにて如來にょらいを作り奉り、何を寫うつしたる姿すがたとも見えすぞ作りける。優填王うでんわう悦よろこの餘あまりに、毗首びしゅ羯磨かつまを止められければ、「吾われはこれ善法ぜんぽうの胎宮たいぐうなり。留とどるべからず」とて、遂つひに天に上りぬ。その像ざうを立裝けんじやうさんざう三藏さんざう盗み取りてこの國くにに渡わたし、多くの衆生しゆじやうを濟度きいじし給ふ。今の嵯峨さかの釋迦しやかこれなり。ましてや人間にんげんとして、如何いかでか恩愛おんあいを思はざるべき。十郎聞きて「大きに違ふ心かな。優填王うでんわうは利益方便りやくほうべんの戀こひなれば、愚癡ぐち凡夫ぼんぷ輪迴りんまの執着しゆぢやくなり。一つにあらじ」と笑ひて、各富士野おのの出立いでたちをぞ急いそぎける。

八つの苦―
生苦、老苦、
病苦、死苦、
愛別離苦、
怨憎會苦、
求不得苦、
五陰盛苦、

になりにつけり。この島に來る者を洩さず取りて喰ふ。また國に罪ある者をこの島に流せば、これをも取りて喰ふ。七萬二千人までぞ喰ひける。その罪盡し難し。佛これを愍み給ひて、阿難尊者を使ひ奉りて、善知識たち引導し給ひけるとかや。人まうは阿難を七度見奉りし結縁に、七度天上に生じて佛果を得たりとなり。かやうの縁を思ふには、彼等が後世もなどや一つ蓮に生ぜざらん、頼もしくぞ覺えし。さて十郎が心の猛きこと、四方にも聞えしかども、さしあたる恩愛の道には迷ふ習なり。實に夏の蟲の飛んで火に入り、秋の鹿の笛に心を亂し、身を徒になすこと、高きも卑しきも力及ばぬはこの道なり。八つの苦の中にも、愛別離苦と説かれたり。内典外典にも深く戒め給ふとなり。

十三 嵯峨の釋迦作り奉りし事

さても五郎待遠なる折節來りて、「この者を送りて今まで時を移しぬ。如何に遅しと不思議に思ひ給ひけん」とぞ申しける。五郎承り、「昔もさることの候ふ。釋尊母の報恩の爲に忉利天に上り給ふ、帝釋聞き給ひて、毗首羯磨といふ天人を下し給ふ。優填王悦びて旃

二世—現世
と未來

そ、かくとは申し聞かせけれ。團三郎申しけるは、「殿も今朝より御出あるべきにて候ふ。急ぎ御暇を申さん」といふ。虎は彼を近く呼び寄せて、「三年が程馴れにし汝にさへ、別れなん事もやあらん、と思へば」とて、袖を顔におし當て、さめくと泣きければ、團三郎返事にも及ばず涙を流しけり。「昔が今に至るまで、主従の縁淺からぬ事ぞとよ。構へて思ひ忘るな。二世までも朽ちせぬものぞ」といへば、團三郎暇乞ひて出でにけり。志は二世までも盡きせじ、とこそ覺えけれ。

十二 ぶつしやうこくの雨の事

されば縁により佛果を得る事を思へば、昔ぶつしやうこくに血の雨降りて國土紅なり。帝大きに驚かせ給ひて、博士を召して御尋ありければ、占象をひき申しけるは、「今宵不思議の子を生むものあり。尋ね出して遠き島に捨てらるべし」と申しければ、舍衛城のうちに、その夜子生みしもの千人なり。その中より選び出して見るに、口より焰を吹き出す子を生みたる者あり。即ちこれを人まうとぞ名づけよる。これ不思議の者として、官人に仰せ付けて島に捨てけり。然るにこの人まう、やう／＼成人する程に、猛き鬼の姿

蝸牛の角の上云々
蝸牛角上に
蠻觸二氏あ
りて相争ふ
といふ事莊
子の寓言人
事の小なる
に喩ふ

釋尊力なくして、今は寂光土に歸らんとし給ふ時に、東方より淨瑠璃世界の藥師如來
忽然と出で給ひて、「善哉や／＼はや／＼佛法を弘め給へ。吾人壽八萬歳の始より、この
處の主なれども、老翁未だ我を知らず、何ぞこの山を惜み申すべき。はや佛法を弘め給
へ。吾もこの山の守護として、共に五々百歳まで佛法を弘むべし」とて、二佛東西に去り給
ふ。その時の老翁は今の白鬚の大明神にてましくける。東方よりの如來は中堂の藥師
にてぞましくける。釋迦藥師の東西に歸り給ひき。今の十郎と虎がゆき別るゝには違
ひぬる心なるをや。蝸牛の角の上何事をか争ふ、石火の光のうちに、この身を寄せつら
ん。名殘の道盡くべからず、後世參り逢はん、といふ中にも、團三郎が心も恥しと
て、思ひ切りてぞ別れける。虎は峠に手綱ひかへ、祐成の後姿の暮るゝまで見送りけ
る。さてしもあらねば、泣く／＼大磯にぞ歸りける。母の許に入りしかば。友の遊君ど
も廣縁に出でて、「思ひ掛けざる今の御入かな。何時となき山路の寂しさ、推し量りて」
など戯れけれども、虎は馬より下ると同じく、衣ひきかづき打ち臥しぬ。遊君ども集
りて、「何とてこれ程御歎き候ふやらん。十郎殿に捨てられおはしますか」と、様々に慰め
けれども、かくといふべき事ならねば、唯うち臥し泣き居たり。人々討たれての後にこ

佛陀が成道を中心として始より終に至るまでに、一降兜率、二托胎、三出生、四出家、五降魔、六成道、七轉法輪、八入涅槃の八相を示しをいふ

洲を普く飛行して御覽じけるに、ゑんく／＼茫々たる大海の上に、一切衆生、四通佛性如来、常住無有變異、かくの如く立つ波の聲あり。この波止らん處、一つの國となりて、わが佛法を弘め、通達すべき靈地たるべし、とて、彼の十萬里の滄海を凌ぎて行くに、葦の葉一つ浮びたる所に、この波流れ止りぬ。今の比叡山の麓、大宮權現のおはします波止土濃これなり。さればにや波止土濃なりと書けり。かく御覽じおきて、釋尊天に上り給ふ。されば葦原の中つ國と申しならはせるは、この一葉の葦の故とかや。日本わが朝は、葦の葉を表するとぞ申しならはせるとぞ聞えし。その後人壽百歳の時、悉達太子と生じて八十年の春の比、頭北面西の時、跋提河の波と消え給ふ。されども佛は常住にして不滅なりしかば、無緣法界の妙諦をあらはし給ふなれば、葦の葉の島となりし中つ國を御覽じける時、鷗鷺草葦不合尊の御代なれば、佛法の妙事を人知らず。ことに漣や滋賀の浦の邊に釣をする老翁あり。釋尊彼に向ひ、「翁もしこの處の主たらば、この地を我に得させよ。佛法結界の地となすべし」と宣へば、翁答へて申さく、吾人壽六萬歳の始より、この處の主として、この湖の七度まで葦原になりしをも、正に見たりし翁なり。さればこの地結界となるならば、釣する所なかるべし」と深く惜み申せば、

五慾―五塵
ともいふ色
聲香味觸の
五に關する
慾情

八相成道―

轡くつわの音おとのする時は、若もやと思ふ折々をりの、その人ひととなく過ぎゆけば、その夜よは空しく床こしに臥ふし、鳥とりもろともに泣なき明あかす、枕まくらの上の塵ちりの海、思おもを深く湛たみへつゝ、夕ゆふべの鐘かねの響ひびきには、暮くるゝ便たよりを待ちかねて、乾ほされぬ袖そでのそのまゝに、はかなかりける契ちぎりかな。三年みせの夢ゆめは程もなく、別わかるゝ現うつしになりにけり。さて何時いつの世よに廻めぐり逢あひ、斯しかる思おもの又またもや」と、聲こゑを惜をしまず泣なき居ゐたり。「祐すけ成身なりの上をつくく思おもふに、罪つみの深ふかきぞ知られたり。幼いざなくして父ちちに後おくれ、本領ほんりやうだに他所よそに見みなし、母一人ははひとりの養育やしこみにて身命しんみやうを延のぶると雖なも、あるかひもなし。この三年み御身ごみにだにも相馴あひなれて、飽あかぬ別わかれの悲かなしさは、歎なげの中なかの歎なげなり。五慾よくの無常むじやうは春はるの花、娑婆しやばは假かりの宿やどりなり。秋あきの紅葉もみぢの風散ふちりて、草葉くさはにすがる露つゆの身こゝろ、後生ごしやう弔さうひてたび給たまへ」とて、東西とうさいへうち別わかれけり。

十一 比叡山始ひえいざんのはじまりの事

さて我われが朝てうひ比叡山えいざんの始はじまりを聞きくに、天地てんち既すでに別わかち、國い未まだだ定きらざる時は、人壽にんじゆ二萬歲にまんざいを保たもちける。迦葉尊かえんじん者は西天さいてんに出世しゆつせし給たまふ。大聖釋尊だいしやうしやくそんはその教義けうぎを受け、都率さそつてん天てんに住ぢゆうし給たまふ。「われ八相成道さうじやうだうの後のち、遺教流布ゆゑうりふの地何ちいづれの處ところにかあるべき」といふに、この南閼浮なんえんぶ

頼むぞ」と心強くも思ひ切り、控ふる袖を引き別けて、泣くく立別れけり。けにやか
んくの床の上には、遙に契を千年の鶴に結び、ぢんじやの筵の上には、遠く齡を萬劫
の龜に歸して契りしかども、遁れぬ別の途は力及ばす。互に後を返り見、坂中にやすら
ひて控へたり。幽に見えし姿も見えずなり行けば、そなたの空のみ返り見る。足曳の山
の彼方の戀しさは、いづれも同じ心にて、現ともなき涙の袖、夢の如くにうち別れにけ
り。思のあまりに、虎が馬の口控へたる團三郎に泣くくいひけるは、「祐成を見奉らん
も、今ばかりの名残なり。何事も細々と、いひたかりつるを、涙にくれていひも盡さず。
取りわき暇乞ひ給へるに、返事せざりし心許なければ、今一度呼び返し奉りてたび候へ。
物一言申さん」といひければ、團三郎、「唯世の常の出家遁世にてもなし」とて、さしても
騒がざりけるが、斜ならざる互の歎を見て哀に思ひ、急ぎ走り歸り、遙に行きたりける
十郎を呼び返し、もとの峠にうち上り、駒を控へて「何事ぞ」と問ひければ、虎は涙に目
もくれて、思ひ設けし言の葉も、何時しか今は失せ果て、鞍の前輪にうちかより、消
え入るやうに見えしかば、十郎わきていふべき言葉もなく、唯泣くばかりにてぞあり
ける。稍ありて虎は息の下にていひけるは、「何時となくさぞと契らぬ夕暮も、駒の足並

に模様をす
り出したる
鞍

たづき—手
がかり

三年通ひしに、馬は更れど鞍變らず。鞍かはれとも馬更らず。今日を最期の別なれば、留めおきて永き形見とも思ひ給ふべし。但し馬は生あるものにて更ることもあり、鞍をば失はで持ち給へ」と、いひく馬にぞ乗せたりける。

十 山彦山にての事

祐成も送るべしとて、馬に鞍置かせ打ち乗りて、「中村通に行くべし。大道は馬鞍も見苦し。虎を祐成が思ふとは皆人知られたり。伴の者どももかひくしからず」と、打ち連れてこそ送りけれ。曾我と中村の境なる、山彦山の峠まで送り來て、十郎こよに駒を控へ、今少しも送りたいくは候へども、必ずけさより出でんと定めしかば、定めて五郎も來たらん。名残は盡くべきにあらず。この世にて相見ん事も今ばかりぞ、と思へば、遣る方なくして涙に咽ぶ許なり。遠近のたづきも知らぬ山中に、道もさやかに見え分ず、かの松浦佐用姫が領布振る姿は石になり、それは昔の事ぞかし。今の別の悲しさに、駒近々とうち寄せ、手に手を取り組み、涙に咽ぶ許なり。稍ありて、「祐成が心のうち推し量り給へ。これにて年を送るべきにもあらず。唯一筋に淨土の縁を結ばん。來世を深く

出づると見
れば一月が
也

目結しぼ
り染

貝鞍一青貝

て、鬢びんの髪かみを切りて取らせぬ。虎とらは涙なみだもろともに受け取り、肌はだの守まもりに深く納をさめ、物をも
いはず伏ふし沈しづみぬ。同じ枕まくらにうち傾かたき涙なみだに咽じよぶばかりなり。日も既に暮くれければ、今宵こよう
ばかりの名残なごりぞ、と思おもひ遣やるこそ悲かなしけれ。千夜ちよを一夜よに重ねても、明けざれかしと思
はるよ、比くらさへ五月きつきの短夜みじかよの、有明ありあけなれば宵よひの間の、待まちたるも程ほどもなければや、出づる
と見ればその儘ままに、傾かたく空そらも怨うらめしく、八聲こゑといふも鶏にわとりの、夜よやしりふると明け易やすく、
夢ゆめ見る程ほどもまどろまで、東ひがしにたなびく横雲よこぐもの、東雲しのめしらむ憂枕うれし、まだ睦言むつごんの盡つきなくに、
後朝きんあさになる曉あかつきの、涙なみだに床とこも浮うきぬべし。互たがひの名残なごり心のうち、さこそと思おもひ知しられた
り。なほしも虎とらはうち臥ふして、消きえ入るやうに見えしかば、十郎じやう彼かれを勇いさめんとて、「暇申いさま
して祐成すけなりは、後生ごしやうにて参り逢あはん」とて驚おどろかせば、起おきなほりたるばかりにて、物いふ
まではなかりけり。「今いまを限かぎりの別わかれなり。後の世かたみまでの形見かたみ」とて、十郎じやう著きたりける目結めゆひの小
袖そでに、虎とらが紅梅こうばいの小袖こそでに著き換かへて、「心のあらば移香うつりがよ、暫しばし残のこりて憂うれき別わかれ、慰なぐさむ程ほども面
影かげの、著き換かへし衣きぬに留とまれかし。互たがひの名残なごりつきせず」と、又諸共もろともに打ち伏ふしぬ。「幾萬世いくよろづよを
重ねても、名残なごりつくべきにあらず。祐成すけなりも途みちまで送り奉るべし。日ひこそ傾かたき候けへ」とて、
茸毛あしひなる馬うまに貝鞍かいくら置おかせ、團三郎門だうざらうもんの邊はたに控ひかへたり。「この馬鞍返くらかへし給ふべからず。この

おのれ鳴き
てや―拾遣
集、紅葉せ
ぬ常磐の山
に住む鹿は
おのれ鳴き
てや秋を知
るらむ

人々しき―
人並々の

時鳥、憂世の夢か朝顔の、果敢なくならん身の程を、恥ぢす忘れぬ情の袖、前世の事といひながら、過ぎにし事の恥しさよ。奉公の身ならねば、御恩の時ともいはれず、くわいせんの身ならねば、理のあらん折ともいはれず、思出のなき事を思ひ出し給はんことよ」とて、さめくと泣きにけり。虎もこの言葉を聞きて、また打ち伏して泣くより外の事ぞなき。稍ありて起きなほり、「そもこれは何となり行く事どもぞや。是程の大事、女の身なりとも、いかでか人に洩すべき。一人まします母にだにも聞かせたてまつらず、振り棄てよ心強く思ひ立ち給はんこと、數ならぬ妾申すとも、止り給ふべきか。何につけても、飽かぬ別の道こそ悲みても餘あり。斯様の大事心おかず知らせ給ふこそ、返す返すも嬉しけれ。さてもこの年月の御馴染、いつの世にかは忘るべき。思ふに叶はぬ事なれども、御物具の見苦しきを見まゐらす折節は、人々しき身なりせば、などや便にもなり奉らざらん、としづ心を盡し明し暮しつるに、世を捨てよ何處ともなくならん」と仰せらるゝをこそ、身の置處なかりしに、思も寄らぬ永き別路とならん悲しさよ」とて、聲も惜まず泣き居たり。十郎もせん方なくして、「餘な歎き給ひそ、人もこそ聞き候へ、名残は誰も同じ心ぞ」と慰めつゝ、「これを形見に」とて、「祐成に添ふと思し召せ」と

圓伽―梵語
水のこと、
圓伽の水は
佛に奉る水

思出―後に
追想して心
慰む程のこ
と

衣ころもを濯すすぎて参まゐらせん。香かうを供そなへ給たまはど花はなを摘つみ、薪たきぎを拾ひろひ給たまはど圓伽あかの水みづを掬くび、一つ蓮はらすの縁えんをも願ねがはん。その睦むつじをも否いなと宣のたまはど、山々たらく寺々しゆぢやうを修行しゆぎやうして、他所よそながら見奉みまうらん。それも憚はしかり思おもひ召めさば、聞きき給たまへ。身みを投なげ一日いちにち片時へんしもながらへじ」とて涙なみだに咽むせび申しけり。誠に十郎じちろうが膝ひざの上うへも虎こが涙なみだに浮うく許ゆる、袖そでも絞しほりぞかねたりける。十郎じちろうはつくづくと案あんずるに、これほど思おもひ入りたる志しつゆ程ほども知らせずして、心強かく隠かくし逢あひぬるものならば、長ながき怨うらみとなりぬべし。若もし立ち返かへらぬ習ならひあらば、思おもひ出して念佛ねんぶつをも申まうすべし。さればとて、人ひとに漏もすなといはん事を空あだにやすべき、その上日ひ數かずなければ知らせばや、と思おもひ、「此事母このことにだにも知らせ奉まうらで、過あやしまかども、御身おんみのこよろざし切きつにして、知らせ奉まうるぞ。洩もし給たまふべからず。眞まことの道心どうしんにもあらず、出家しゆつげまた遁世とんせいにてもなし。年比としごと祐成すけなりが身みに思おもひありとは知り給たまひぬらん。その本意ほんいを逢あひけんと思おもへば、この度出たびでて後あと、再歸ふたたびるまじければ、相見あひまんことも今宵こよひばかりなり。さてしも何となく申し契ちぎりて、時ときの間まと思おもへども、三年さんねんになりぬ。いつ思出おもひでもなくて果はてん事ことこそ無念むねんなれ。御志おんしの程ほどこそ有ありがたく思おもひ奉まうれ。面々めんめん如ごときの人は、祐成すけなり風情ふうぜいの貧みしく頼たのむ所ところなきに、何なんによりてか露つゆの情なさけもあるべきに、三年さんねんの間まの顔かほの、變かはらぬ色いろは常磐山とこはなやま、おのれ鳴なきてや

つて斬られまゐらせし孫なれば、君にも召し使はれず御恩蒙ることもなし。況して先祖の本領は、年月餘所に見なすうへ、馬の一疋もけなだらかに飼はず、又父のためとて經卷の一部も書かず。あるとしもなき身の仕儀、人に見ゆるも恥しく、面ならぶる便なし。さればこの度御狩より歸りなば、出家を遂げ、墨の衣に染めかへて、頭陀乞食して靈佛靈社に参り、父の後世をも弔ひ、わが身をも助からん、と思ひ候ふなり。世にありとも夢幻の如く、法身を残すべきにあらず。花山の法皇だにも、萬乗の位を去りて、山林に交り給ふぞかし。況してや貧道無縁の祐成が、何に命も惜しかるべし。今度の御供を最期に定め、再歸らじと思へば、飽かぬ別の道すて難くて」と申しければ、虎聞きもあへず十郎が膝にかより、暫は物も言はざりけり。稍ありて、「怨めしや問はずば知らせじと思し召すかや。實妾は大磯の遊君、あさましき者の子なれば、誠の道をも思し召さじなれども、女の身の果敢なさ、身に代へてもこそ、と思ひ奉れ。見え初しよりなどやらん、思の色の深草よ、忍の袖の摺衣、忘れ奉る便もなし。御志は知らねども、御豫言の違ふをば、僞に又なるらん、と心を盡し待たれしに、さやうに思ひ立ち給はゞ、妾も同じく髪剃りおろし、墨の衣に身を簀し、一つ庵にあらばこそ、外に庵室引き結び、

束の間一暫
時の間

心許なさよ。何なるらん」と問ひければ、「今に始めぬ事とは言ひながら、憂世の中の定なさよ。この程のよろづあぢきなく、何事も心細く覺ゆれば、徒に契りおきし同じ世の、名の立つ程も如何にやと思へば、心に浮ぶ涙の零るゝぞ。實にや頼まぬ身の習、歎つ命も露の間も忌しくこそ思はるれ。」「實にもさやうに思ひ給はゞ、この度の御狩思し召し止り給へかし。君に知らるゝ宮仕の暇なき業にも候はず。止り給へ」といひければ、「思ひ立つ御供なり。何事かは」といひながら、斯程深く思ふ中思ひ知らせず出でなば、情の色も絶えぬべし。せめて夢程この事を知らせばや、とは思へども、女は甲斐なきものなれば、飽かぬ別の悲しさに、止めん爲に母にもや語り廣めん。この度は思ひ定めたるもの故、叶はぬ事を母聞きて、思の種ともなりぬべし。または五郎も怨みなん。思ひ切りたる一大事、女にさぞといはんこと悪しかるべし、と思ひ切り、何としもなく戯れけり。忍ぶとすれどその色の怪しく思ひ奉り、「覺束なし」と問ひければ、深き思の切なるに、束の間も思ひ合はする事なくて、はてぬるものならば、後の怨も深かるべし。よし思出に一端を、いひてや心を安むる、と身の有様を思ふには、憂きが住の詮なくて、世には住まじのその故を、いかにといひて知らすべき。「さればにや祖父入道の謀叛によ

の時扇笏あふぎしやくに取直とりなほし、「今暫いましばらくくも候ふべけれども、曾我にさしあたる用の事御座候ふ。後日ごにちにおそれ申さん」とて、兄諸共もろともに立ちければ、虎こも同じく立ちにけり。一座いざも不興ふきよう至極しごくにして、和田わだは鎌倉さかへ通りければ、この人々はうち連れて、曾我へとてこそ歸りけれ。

九 曾我にて虎が名殘惜みし事

おこしの矢
―射おこし
たる矢の意
歟

まことにこの殿原どのはらの事は、これや名鳥昊天めいてうかうてんに翼つばさをならべ遊ぶと雖も、沼澤せうたくに下りてきうそのの憂うれへに遭あひ、大魚深淵だいぎよしんせんの底そこに尾ををふれども、陸くに上ある思あり、と見えたり。十郎も身に思のある者ぞかし。よしなき女の許もとにて、思はずの難なんに遭あはんとしけるぞ、危あやふかりし次第しだいなり。かくて祐成すけなりは虎こを具ぐして曾我に歸り、常つねに住すみける所に隠かくしおき、何時いつよりも細々こまこまとうち語かたりしは、「この度御狩たびみかりの御供おん申し、思はずのおこしの矢やにも中あたり、朽くちはつる埋木むもれぎともなるならば、身こそ貧ひんに生むれめ、鬢びんなるちりの見苦くるしさよ、と人の言はんも口惜かみけづし。髪梳かみりて給たまひ候へ」といひければ、虎こは何としも思はで、數かずの櫛くしを取り散ちらし、暫しばらくく髪かみをぞ梳けづりける。十郎は女の膝ひざに臥ふしながら、虎こが顔かほをつくくくと見て、祐成すけなりを睦むつまじと見んも、これぞ限かぎりなるべき、と思へば、流ながるゝ涙なみだを見て、「例れいならぬ御涙おんなみだ

横縫草摺
鏡の名所

側顔―横顔

摺こらへずして、一度に切れて、朝比奈は後へどうど倒れけり。五郎は少しも働かで、仁王立にぞ立つたりける。扱こそ五郎時致はみぎは優りの大力と、他所の人迄知りにけり。實や此者の父河津三郎は、東八箇國に聞ゆる股野五郎に、片手を放ちて角紙を三番勝ちてこそ、大力の覺は取りたりしぞかし。その子なるをや。力競は叶ふまじ、賺さんものをと打笑ひ、「これく」と請すれば、「餘りの辭退は無禮なり。異體は御免候へ」といひく座敷に出でけるが、持ちたる太刀と草摺にて、末座なる人々の頸の廻り側顔を打ち毆り、さし越えく行き過ぎて、朝比奈が下なる疊に直りける。座敷に餘りて見えたりけり。朝比奈急ぎ座敷を立ち、義盛の前にありける盃を五郎が前にぞ置きたりける。時致盃とり上げて、酌に立つたる朝比奈に色代して、「御盃の前後は遅參の無禮御免あれ。御盃は賜り候ふ」とて、三度までこそ乾したりけれ。「その盃思ひ取り申さん」とて、元の座敷になほりけり。五郎も酌に手をかけ、「近くもまゐらぬ御酌に、時致立たん」とゆるぎ立つ。四郎左衛門座を立つて、「某是に候ふ」とて、銚子に取りつけば、五郎も暫色代す。義盛これを見て、「客人の御酌然るべからず。それく」とありければ、常氏酌にぞ立たりける。朝比奈盃取り上げ三度乾す。その盃を虎飲みて義盛にさす。そ

したる扇あふぎを開き、「何とやらん御座敷おんざしきしうま静りたり。謠うたへや殿原どのはら、はやせや舞はん」とて、既に座敷ざしきを立ちければ、面々めんめんにこそ囃はやしけれ。義秀よしひで拍子びやうしを打ち立てさせ、

君が代は千代ちよに八千代やちよを細石さいせきの

と絞しほり上げて、

巖いはほとなりて苔こけのむすまで

と、短みじかく舞うてをさめけり。

八 朝比奈あさひなと五郎力競ちからくらべの事

四天王を云々―五郎の荒くれ立ちたる様の喩廣目増長持國毘沙門を四天王といふ

かくて朝比奈あさひな三郎、舞まひも過ぎぬれば、五郎が立ちたる前の障子まへを引き開け見れば、案あんに違ちがはず、時致ときさだめは四天王てんわうを作り損そんじたる様さまにて、踏ふみしかりてぞ立ちたりける。朝比奈過あさひなあやまたず、狂言きやうげんに取りなして、「客人きやくじんましますぞや。此方こなたへ入らせ給へ」とて、草摺くさずり二三間けんむずと取りて引きけれども、少すこしも働はたらかず、磐石はんじやくなりとも義秀よしひでが手をかけなば、動うごかぬことやあるべき、と思ひ、力に任せ、えいやくと引きけれども、五郎は物とも思はねば、引くともなく、引かるゝともなく、嘲笑あざわらひてぞ立つたりける。大力おほぢからに引かれて、横縫草よこぬひくさ

袴の着際—
袴の上部

上もなく云
々—無上な
る無禮の振
舞ぞと也

べきところなくして、門の外を廻り、日比祐成に行き連れて通りし細道を廻り、虎が居所にこそ着きにけれ。さて「十郎殿は如何に」と問へば、「和田殿の盃を論じて、唯今事出で来ぬ」と申す。さればこそ、と思ひ、透垣を跳ね越え、兄の居たりける後の障子を隔て立ちたりけり。時致是にありと知られん爲に、筭にて障子越に、袴の着際を刺しければ、十郎「誰ぞ」と問ふ。五郎小聲になりて、「時致是にあり」といふ。十郎聞きて、千萬騎の兵を後に持ちたるよりも、頼もしくぞ思ひける。義盛の聲として、「上もなく振舞ふものかな」と聞えける。祐成の御事ぞと心得、何事もあらば、障子一重踏み破り飛び出でて、一の太刀にて義盛、二の太刀にて朝比奈、その外の奴原何十人もあれかし、物の數にてあらばこそ、と思ひ切り、四尺六寸の太刀、杖につきて立つ。忍びかねたる有様は、たう八里沙門の惡魔を降伏し給ふかとぞ覺えける、夕日脚の事なれば、太刀陰の障子に透きて見えければ、朝比奈是を見て推量し、誠や彼等兄弟は、兄が座敷にある時は、弟が後に立ち添ひ、弟が座敷にある時は、兄が後にあるものを、如何様五郎は後にありと覺えたり。さしたる事もなきに、大事引き出して、何の益かあらん。又さりとては親しき仲ぞかし。何となき體にもてなし、座敷を立たばや、と思ひければ、紅に月出

色めきたる
體一騒ぎ立
つ模様

物の具一甲
冑類の總稱

はるゝとも、かやうの思さし、他所へは渡さじ。南無阿彌陀佛」と高聲なりければ、殊
の外にがくしくぞ見えにける。九十三騎の人々も、義秀の方を見やりて、事や出で來
なんと色めきたる體、さしあらはれたり。十郎もとより騒がぬ男にて、何程の事かある
べき。事出で來なば何十人もあれ、義盛と引つ組んで、勝負をせんするまで、と思ひ切
り、嘲笑ひてぞ居たりける。

七 五郎大礪へ行きし事

こゝに五郎時致は曾我に居たりけるが、父の爲に法華經誦みて、本尊に向ひ念誦しける
が、頻に胸騒しけり。心得ぬ今の胸騒や。いかさま祐成の大礪へ越し給ひぬるが、東國
の武士共、富士野へ打ち出る折節なり。流の遊君ゆる事仕出し給ふにや、と心許なく思
ひければ、帳臺に走り入り、緋緘の腹巻取つて引つ懸け、伊東重代の四尺六寸の赤銅
作の太刀、十文字に結び下け、鞍置くべき暇なければ、裸馬に打ち乗り、二十餘町の
その程を、たゞ一馬場に驅けつけ、見渡せば、長者の門のほとりに、鞍おき馬一二百疋
引き立てたり。遠侍には物の具の音頻にして、唯今こと出で來ぬ、とぞ見えける。入る

御前、その盃何方へも思し召さん方へ思さしし給へ。これぞ誠の心ならん」とありければ、七分に受けたる盃に、千々に心を使ひけり。和田にさしたらんは時の賞玩異議なし、されども祐成の心のうち恥し。流を立つる身なればとて、睦びし人を打ち置きながら、座敷に出づるは本意ならず、況してやこの盃義盛にさしなば、さらに愛でたりと思ひ給はんも口惜し、祐成にさすならば、座敷に事起りなん。斯くあるべしと知るならば、初より出でもせで、内にて如何にもなるべきを、再物思ふ悲しさよ。よしよしこれも前世の事。思はざることあらば、和田の前下りにさし給ふ刀こそ、妾かものよ。支ふる體にてもてなし奪ひ取り、一刀刺し、とにもかくにもと思ひ定めて、義盛一目、祐成一目、心を使ひ案じけり。和田は我にならでは、と思ふ所に、さはなくて、「許させ給へ。さりとては思の方を」と打ち笑ひ、十郎にこそさよれけれ。一座の人々目を見合せ、これは如何にと見る所に、祐成盃とり上げて、「某賜らん事狼藉に似たり。これをば御前に」といふ。義盛聞いて、「志の横取無骨なり、如何でかさるべき。はやく」と色代なり、さのみ辭すべきにあらず。十郎盃とりあけ三度ぞ酌む。義盛居丈高になり、「年ほど物憂き事はなし。義盛が齡二十だにも若くば、御前には背かれじ。たとひ一旦嫌

深淵に臨んで云々―戦々兢々如レ如ニ臨深一
如レ踏ニ薄氷一といふ
詩經の語

といへり。かやうの事をや申すべき。朝比奈なかりせば、よしなき事出で來、十郎も討たれ、和田も人多く亡びて失せなん。誠に深淵に臨んで、薄氷を履むが如く、危かりし事どもなり。

六 虎が 盃 十郎にさしぬる事

義盛は虎を見給ひて嬉しけにして宣ひけるは、「さても十郎殿の内にましくけるや、他所がましく心を隔て給ふものかな。御入を知り候はど、始より申すべかりつるものを、これへく」と請ぜらる。十郎笏とりなほし、さん候ふ、御目にかよるべきを、異體の無骨に候へば、罷り出でざる由色代して、左手の疊になほりけり。虎も座敷に定まれば、盃前にぞ置きたりける。義盛虎をつくぐ見て、「聞きしはものゝ數ならず、かよるものもありけるよ。十郎が心かをかねて出でざるさへ優しく覺ゆるにや。それく」といふ。何となく盃取り上げ、その盃和田飲みて祐成にさす。その盃義秀飲みて面々に下し、思さし思どりその後は亂舞になる。こよに復始めたる土器虎が前にぞ置きたりける。取り上げけるを今一度と強ひられて、受けて持ちけるが、義盛これを見て、「いかに

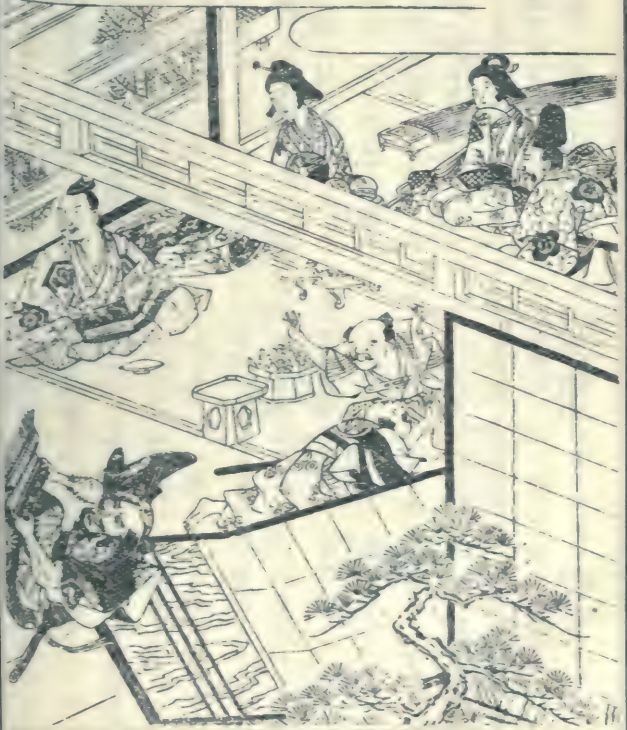
扇笏に云々
―扇を笏の
やうに持つ
て改まりた
る様

御前―虎御
前

になりてはよも出でじ。我またあらく怒りて出さんも耻辱なり。所詮難なきやうにうち
向ひ、賺さばや、と思ひければ、靜に歩み入りけるが、この殿ばら兄弟は、身こそ貧なり
とも、心は貧にあらばこそ。疎忽に入つて細頸うち落され惡しかりなん、と思ひ、扇笏
に取りなほし、畏つて、「これに曾我十郎殿の御入の由、父にて候ふ者承り、御迎のため
に義秀を參らせられて候ふ。何かは苦しく候ふべき。御出ありて親にて候ふものに、御
對面や候ふべき。それにまた某一期の所望の候ふ。御前の事ゆかしき事に、義盛思はれ候
ふが、御座を存じて義秀申し止めて候ふ。然るべくは諸共に御出ありて、父が所望をもか
なへ、義秀が面目施すやうに御計ひ候へ。一向頼み奉り候ふ。さりながら御心に違ひ候は
ば、罷り歸り候ふべし」と、障子越にいひければ、十郎聞きて、頼むといふに和ぎて、「左右
にや及ぶ朝比奈殿、いかでか異議に及ぶべき。立ち給へや御前、祐成も出でん」とて、烏
帽子の筒おし立て、直垂の衣紋引き繕ひ、虎を先に立てよ、各三人出でたりけり。さて
こそ竝み居たりける人々も、生きたる心地はしたりけり。誠に義秀の振舞優なるものか
な。座敷に事も起らず、虎も出でて、十郎も心を破らで事過ぎにけり。これやせうろ
んに、國の將にそきする事は奸臣にあり、家の將に盛に貴うする事は忠臣によつてなり、



朝比奈
草摺曳
之圖



ひ夫死して
は子に従ふ
を女の道と
す
露一袖の元
に通るなる
紐
もろ膝一兩
膝

最期さいごの出で來たるぞや。身に思のあれば、千金萬玉せんきんばんぎよくよりも惜しき命いのちなり。されども遁れのがぬ所は力なし。徒なる死しにをして、五郎に怨うらみられん事こそ思ひやられて悲しけれ。さりながら、かやうの所は神かみも佛ほとけも許し給へ」といふまゝに、烏帽子ゑぼしおしなほし、直垂ひたれの露つゆ結むすんで肩かたにかけ、伊東重代いとうぢうだいの赤銅しやくどう造づくりの太刀たちを二三寸ぬきかけ、片膝かたひざおし立て、一方ひさうの扉しを開き、「ことごとくしや三浦みうらの者ども、何十人もあれ、一番に入らん朝比奈あさひがもろ膝ひざなぎふせ。續つづかん奴やつばら物の數かずにやあるべき。伊東の手竝てなみを見せん。遅おそし」とこそは待ちかけたり。虎こもこの有様ようさまを見て、實けにや冥途めいずより來るなる、獄卒ごくそつの追つ立つる途みちだにも、主君ししやう師匠めいの命いのちには代るぞかし。ましてや夫婦ふうふ恩愛おんあいの契ちがひ淺あからずとは、古今いにしへいままでも傳つたへ聞きこくなるものを、後の世までも離れじ、と思ひ切つて守刀まもりがたな、衣きぬの褌つまに取り含み、三浦の人々いかに如何いかにに勇いさみ亂みだれ入るとも、何となく立ち廻り、よき隙ひまに義盛よしもりを一刀かたなさし、如何いかににもならんと唯一筋ただひとすぢに思ひ定め、祐成すけなり近く寄り、今やと待つぞ優やさしき。時移うつりにければ、和田わだいよく腹はらを立て、「如何いかにに朝比奈あさひはなきか、御迎おんむかへに參れ。無骨むこつの訴訟そしやうも苦しかるまじ」とぞ怒いかりける。義秀よしひで聞きかね、座敷ざしきを立ち、虎こが迎むかへに行きけるが、つくづく案あんずるやう、十郎といふも、伊東の嫡々ちやくちやくたり、心も亦またたて切つたり。始はじめより出さでかやう

五 朝比奈虎が局へ迎にゆきし事

五障—女人
 は一に梵天
 王二に帝釋
 天三に魔王
 四に輪轉聖
 王五に佛身
 となるを得
 ずとの佛說
 三從—儒教
 にて末だ嫁
 せざれば父
 に從ひ嫁し
 ては夫に從

しても母は虎を制しかね、「なにとて母には從はざるや」とぞいひける。虎はなほも涙に咽び、「流を立つる身ほど悲しきことはなし。夫の心を思ひ知れば、母の命に背き、また母に從へば、時の綺羅にめづるに似たり。ともかくにもわが思、亂れそめける黒髪のあかぬ情の悲しさよ。如何なる罪の報にや、女の身とは生れけん。さればにや五障三從と説き給ひけるぞや」とて、さめぐと泣き居たり。十郎この有様を見て、「何かは苦しかるべき。一旦こそあれ、座敷に出て給へ。母の命に背きなば、其の照覽も恐し」と申しければ、虎はこれにも從はず、唯泣くより外の事はなし。義盛これをば知らずして、「何とて虎は遅きやらん」とて、一座の興を失ひけり。母も待ちかねけるにや、「曾我の十郎殿ましますが、さてや出でかね候ふらん」。和田はこれを聞きて、「心得ぬ十郎が振舞かな。我こそ出でて對面せざらめ、流の遊君を塞ぐべきか。誠に僻事なり。四郎左衛門朝比奈はなきか。御迎にまゐれ」といふ。四百餘人の殿ばらもはや事出で來ぬと色めきけり。祐成が在所近ければ、義盛が言葉手に取るやうにぞ聞えける。「不思議やな、思はぬ

刹那―梵語
瞬時の意

夜叉羅刹―
共に梵語、
鬼神惡魔

あんやく―
印鑰なるべ
し

女と書きて判を捺し、箱の底に入れたりしが。刹那も肌を離さじと、頸に懸け持たたり」とて、懷よりも取り出す。「さては疑ふ所なし。汝等は自らが子どもなり」とて、門戸を開きて出でければ、尾花の如く支へたる、鉾劍をも捨てにけり。母も子ども懐しさに、劍の刃も忘れつゝ、彼等が中へ走り入りて、見廻せば、兵も兜を脱ぎ、弓矢を横たへ、各大地に跪く。何時しか母は懷しく思の涙に袖しほる。竝み居たる兵も同じ心になりにけり。彼もこれもそかといふ情の袖も香しく、憐み憐む装は、見るに涙も進みけり。實にや恩愛の中ほど悲しき事あらじ。誠や夜叉羅刹を従へて、猛く勇める武士も、母一人の言葉に皆々靡くぞ哀なる。かくて城中に誘ひ入れ、親子の睦懇なり。

四 辨財天の事

かのふん女と申し人、後には大辨財天と現れ給ふとかや。五百人の人々は五百童子となり、その一はあんやく預り給ふ神と現れ、はうしやうろうの箱をも、その中に持たせ給ふ。一切衆生の願を悉く汲みて安樂世界に迎へんと誓ひ給ふ。かやうに猛き弓取も母には従ふ習ぞかし。

しく名のれ」といひければ、五百餘人の兵聞きて、「彼等には親もなし、氏系圖もなし、生るゝ所を知らざれば、何條誰と名のるべし。朝夕思ふ事とは、寶の欲しきばかりなり。急ぎ藏を開き、財寶を與へ給へ。吾等思ふ程取りて歸らん」といふ。「心得ぬ言葉かな、人により分に隨ひ、氏も名字もある者を、猛惡の身が不思議なり。委しく申せ」といひければ、「問うては何にし給ふべき。さりながらこの川上より流れ來たる五百人の卵の流人なり。謂なければ人知らず。急ぎ寶を施して歸すべし」とぞ申しける。流れ來たる兵といふを、ふん女つくぐと聞きて怪しく思ひ、櫓の下に歩み出でて、「五百人の殿ばら近く寄り給へ。尋ねべき事あり」といひければ、一人堀の際に寄りたり。「そもく流れ來たると仰せられつる言葉について申すぞとよ。妾は何にて流れけるぞ」寶をば出さでむづかしとは言ひながら、「吾等が昔如何なるものか生みたりけん。五百の卵にて水上より流れたりけるを、取り上げて育てけるが、かくなりぬ」といふ。さればこそ、と思ひ、「その卵は何に入れけるぞ」「玉の手箱に入れ、上には銘を書きしなり」。「銘をば何と書きたるぞ」「はうしやうろうの箱と書けり」。「扱は疑ふ所なし、是はそなたのししやうなり。此方の證據には、若し此卵恙なく成長あらば訪ね來よ。ふん

噴物造の—
大きくいか
めしく造り
たる

ば。面もふらず障へ給ふ。火天猛火を放し、風天風を吹かせ、各城を守り給ふ。中にも水天は弓矢を守らんと誓ひ給ふなれば、數の眷屬を引き連れ、妙觀みつちの旗さよせ、殊に進みて見え給ふ。其日の御装束には、九品正覺の直垂に、相好莊嚴の籠手をさし、上求菩提の小具足に、下化衆生の脛當、しくりやうくわんの釧靴はき、大悲大衆の頬當し、無趣方便の赤糸のけをひかせ。紫磨黄金の裾金物をこそ打つたりけれ。萬徳圓滿の月眞向にうち、畢竟空、しくの四方白の兜を猪首に着、五劫思惟の噴物造の太刀を佩き、首楞嚴定の刀をさし、火舍三昧の槻弓、實相般若の弦をかけ、智徳無量の矢數をさし、隨類化現を羽に交へ、箭高に負ひなし給ふ。元より手馴れし大蛇後より匍ひかかり、左右の肩に手をおき、兜の上に頭をもたせ、兩眼の光明にして、時々電四方に散り、紫の舌の色鮮にして、折々火焰を吹き出す勢天に餘る。今の世に兜の龍頭を打つことこの時よりも始りけり。各床几に腰をかけ宣ひけるは、「大修羅王が戰の強きも佛力にはかなはず。ましてやいはん、彼等が勇、物の數にて數ならず、蟻の塔とも覺えたり。城中靜まれ」とぞ下知し給ふ。こゝに城の中より武者一人進み出で申しけるは、「唯今寄せ来る兵は、何處の國の如何なる者ぞ。また如何なる宿意あるぞ。委

修羅一梵語
譯して非天
といふ戰を
好む故に又
戰の意に用
ふ
つなぬき—
つらぬきと
もいふ皮履
の類
六趣—六道
に同じ
三寶—佛法
僧

なりぬべし。案じ給へ」といふ。今一人進みていふやう、「さらば外道どもを語らひ、彼等が神通の力を借りて破つて見ん。」「然るべし」とて、飛天外道といふ者の許へいひ遣りたりければ、素より鬭爭修羅を好むものなれば、同類を催し打つ立ちける。装束には流轉生死の鎧直垂に、惡業煩惱の籠手をさし、貪慾の脇立に、因果接無の脛當に、愚癡暗蔽のつなぬき履き、極大邪見の膝甲に、誹謗三寶の裙金物をぞ打つたりける。三界無安の白星の兜に、六趣輪廻の頬當、瞋恚憤怒の刀をさし、放逸無慚の太刀を佩き、殺生偷盜の大弓に、破戒無明の弦をかけ、苦患極重の簞には、諸法愛著の矢數をさし、四天王の馬の太く逞しきに、四苦八苦の鞍置きてぞ乗つたりける。異類異形の下外道ども、思ひ思ひの装束に、色々の旗さよせ、數を知らずぞ集りける。城中には靜りかへりて音もせず、されども用心嚴しくて、容易く入るべきやうはなし。時を移してゆらへたり。かのふん女と申すは、同じ福者といひながら、三寶を崇め仁義を亂さぬ賢人なり。如何でか諸天も捨て給ふべきならねば、ふん女を渴仰し給ひけり。かくては如何あるべきとて、死生を知らざる外道ども、喚き叫んで亂れ入る。その時惡魔を降伏の四天十二天影向なりて、四角四方を守り給ふ。四天はもとより甲冑をよろひ、弓箭を離きぬ勇士なれ

外道―佛教
にて他の法
門をいふ、
轉じて惡者

て歸り、妻にかくと語る。女、これを見て、「恐しや如何なるものにか解りなん。主も様ありてこそ捨てつらん。急ぎ元の川に入れよ」といふ。男の曰く、「唯置き候へ。斯様なものには不思議もこそあれ。たとひ僻事ありとも吾等は齡幾程もあるべきならねば、彼が様を見よ」とて、物に包み、暖にして置きたりければ、程もなく美しき男子に解りぬ。

「吾古より子のなき事を歎きに思ふに、然るべき瑞相天の憐にや」と悦びて、また見れば、解りくゝて五百人にぞ解り揃ひける。一つを捨て、一つを養はん事恕めしく黙止しがたくて、取り集め養ひけるに。一つも恙なく成長しけるぞ不思議なる。實に夫婦二人の時だにも、渡世かなひ難く乏しかりけるに。況してこの者共を育てける程に、朝夕の生路に佗びければ。此處や彼處に徘徊し、命を助からんとする程に、心ならず猛惡になり、思はずも慾心に住す。瞋恚を旨として驕慢にあまりければ、外道にも近づきけり。或時彼等いひけるは、「吾等一人ならず饑餓に及べり。さればとて徒に身を捨つべきにあらず。この川上にふん女とて長者あり。財寶を藏におき餘る、いざや行きてうち破り寶を取りぬべし」といひければ、一人が進み出でていふ様、「さる事なれども、それ程いみじき果報者を我等卑しき貧力にて、寶を奪はん事思ひも寄らず、却つて身の仇と

三 ふん女が事

そもくふん女と申す由來を委しく尋ぬるに、昔大國流砂の水上に、ふん女といへる女あり、天下に聞ゆる長者なり。金銀珠玉のみならず、七珍萬寶、四方の藏にあまりけり。然れども、如何なる罪の報にや、一人の子なし。悲みて祈れどもかなはず。ある時思はざるに懷妊す、悦の思をなすに、苦めることいふばかりなし。されども子の出で來ぬべきことの嬉しさに、物の數とも思はざりけり。日數積る程に産の紐を解く。見れば人にはあらで、卵を五百生みたり。「これは如何に、一つなりとも不思議なるぞかし。五百まで生るとこと唯事にあらず。縁なき子を強ひて祈るによつて、天の憎を蒙ると覺えたり。解りなば如何なるものにて親をも損じ、人をも害すべきやらん。その上胎卵濕化のうち、卵生罪深し、と説かれたり。置くべからず」とて箱に入れて、流砂の浪に流し捨てけり。不思議なる例なり。遙の川の末にれうかんといふ所に、きよはくといふひんたう無縁の老人あり。旦暮この河の魚族を漁り、身命を助かりけるが、折節釣する所へこの箱流れ寄りたり。取り上げ開き見れば卵なり。何者の子やらんと思ひ、家に取り

胎卵濕化一
之を四生と
いふ其生の
状態により
ての動物の
分類



和田義盛
叔母
對面の圖



遠侍―離座

敷

女房―原本

敷多にうば

うと讀ませ

たり

煩はしく―

不快にて

なか―

却て

心をかねて

―心に對し

憚りて

不孝―勘當

虎に劣らぬ女房ども三十餘人いで立たせ、座敷へこそは出しけれ。朝比奈三郎義秀、古郡左衛門胤氏を始として、八十餘人居流れて、既に酒宴ぞ始りける。されども虎は座敷へ出でざりけり。義盛心得ず思ひて、「この君達もさる事なれども、虎御前の見參の爲なり。などや見え給はぬ。義盛あしくや参りて候ふか」といひければ、母聞きて、「この程煩はしくて」といひながら、座敷を立ち虎が方へ行き、「などや遅く出で給ふぞ。疾く疾く」といひ置きて、母は座敷へ出で、「唯今虎はまるり候ふ」といひければ、義盛盃控へ、今やと待てども見えざりけり。なか―始より心地例ならで、と云ひなばよかるべきを、唯今といふにより、義盛色を損じ、「御心に背くことあらば、罷り立つて重ねてまゐるべし」といふ。母聞き悪様にや、と思ひ、また座敷を立ち、「何とて出で給はぬぞや。時世に従ふならひ、思はぬ人に馴るゝもさのみこそ候へ。怨めしの御振舞や」とて佇む。虎はまた十郎が心をかねて、衣引きかづき打ち臥しぬ。母はこの心を見かねて、「如何にや昔のふん女が事をば知り給はずや。さやうの事だにあるぞかし。なほも出でまじくば、六字の名號も御照覽候へ。生々世々不孝する」といひ捨てゝ座敷へこそは出でにけれ。

願物、なにの御用にや」といふ。「祐成に參らせ、思ふことを」とばかりいひて涙を浮べけり。友の遊君聞きて、不思議やな、思ふ事は何なるらん、と怪みながら、問ふべきにあらず。敵討ちて後にこそ、この事よ、とは知られけり。さればこの人も豫てより、知りけるよ、とは申し合ひけり。祐成物ごしに聞きて、如何でか、是程情深きものに、立聞したりと思はれては、後の怨も残るべし。後暗くも思ひなば來ぬこそ、と思ひつゝ、知らざる體にもてなし、駒の口を暫し控へ、何となく廣縁に下り、鞭にて簾をうち揚げて内に入りぬ。虎もやがて出で、何時よりも睦じく語り寄り、飽かぬ世の中の夢か現か、と思ひ居たりける處に、思の外なる事こそ出で來たれ。

二 和田義盛酒宴の事

さる程に和田義盛一門百八十騎うち連れて、下野へ通りけるが、子どもに向ひいひけるは、「都の事は限あり、田舎にては木瀬川の鵜飼、手越の少將、大磯の虎とて海道一の遊君ぞかし。一獻進めて通らばや」。「然るべく候ふ」とて、かの長の方へ使を立てよ、「斯くぞ」と云はせけるに、長斜ならず悦びて、遠侍の塵取らせ、「義盛これへ」と請じけり。

河
長—遊君の
抱主
黃瀬川手越
—ともに駿

曾我物語 卷第六

一 十郎大磯へ行き立聞の事

さても十郎祐成は三浦より曾我へ歸りけるが、定なき浮世の習、つくぐと案ずるに、明日富士野にうち出でて、歸らんことは不定なり、この二三年情をかけて浅からぬ虎に暇乞はん、とて、宿河原、松井田と申す所より、大磯にこそ行きにけれ。折節鎌倉殿召に從ひ、近國の大名小名うち連れうち連れ通りけり。十郎虎が宿所に立ち寄りてありけるが、心をかへて思ひけるは、國々の侍多く通る折節なれば、流を立つる遊者又我ならぬ人に情もや、と心許なく思はれて、暫く駒を控へて内の體をぞ聞きるたる。折節虎が住家には、友の遊君數多並み居て物語しける中に、虎が聲と覺しくて、「只今上る人々は何處の國の誰人ぞ、聞き給はずや」。「先陣は横山藤馬丞」とぞ申しける。虎聞きて、「實や孔子の言葉に、耳の樂む時には慎むべし、心の驕る時には、恣にすべからざれ、とは申せども、あはれ實に、この殿原の馬鞍鎧腹卷を妾にくれよかし」。女房たちは聞きて、「あはれぬ

あはれぬー不
相應なる

十五 鶯と蛙の歌の事

さても花に啼く鶯、水に棲む蛙さへ、歌をば詠むものを、といひけるは、人皇八代の帝
 孝元天皇の御時、大和の國葛城山の麓孝元寺といふ所に、僧ありけるが、又もなき弟子
 を先立てゝ深く歎き居たり。次の年の春、かの寺の軒端の梅の梢に鳴く鶯の聲を聞け
 ば、初陽毎朝來、不相還本栖と鳴きける、文字にうつせば歌なり。

初春の朝ごとには來れどもあはでぞ還るものとすみかに

と鶯のまさしく詠みたる歌ぞかし。また蛙の歌よみけるとは、昔良貞住吉にゆき、む
 すびし女を尋ねけるに、かの女には逢はずして、あくがれ立ちたりし折節、蛙その前を
 通りし跡を見ければ、三十一文字の歌なり。

住吉のはまのみるめも忘れねば假初人にまたとはれけり

これまた蛙の正しく詠みし歌なり。

むすびし女
 一縁を結び
 し女
 あくがれ
 恍惚たるこ
 と

じやう一執
著の誤歟

萬戸侯一萬
戸を領する
大諸侯

打物一太刀
長刀等の武
器

屑くちびるを返かへさぬはなかりけり。さてかの伍子胥ごししよが眼まなこは吳王ごわうの果はてを見送りて、霜しもの日に解とく
るが如く、時の間に消きえて失しせにけるぞ奇特きせきなる。乃ち吳王ごわう夫差ふさをば典獄てんごくの官くわんに下され
て、會稽山くわいけいざんの麓ふもとにて、遂つひに首かうべを刎はね奉ほうる。哀あはれなりし例ためしとぞ申し傳つたへける。されば古より
今に至るまで、俗そくの諺ことわざに、會稽くわいけいの恥はぢを雪きよむとは、此事このことをいふなるべし、さて越王えつわうは吳
國こくを取るのみならず、隣國りんこく迄まで從したがへ、霸者はしやの盟主めいしゆとなりしかば、その功こうを賞しやうじて、范蠡はんれいを
ば萬戸侯ばんここうに封ほうぜんとし給たまひしかども、范蠡はんれい會かいて祿ろくを受けず、「大名たいめいの下したには久ひさしく居をるべ
からず、功成こうなり名遂なけて身退しりをくは天てんの道みちなり」とて、遂つひに名を變たがへ陶朱公たうしゆこうといはれて、五
湖こといふ所に身を隱かくし、世よを遁のがれて釣つりをして白頭はくとうの翁おきなとなりて、後のちには行方ゆきがた知らずと申
し傳つたへけり。ある人の曰いはく、「越王えつわうは會稽くわいけいの恥はぢを雪きよぎ運命うんめいを開ひらき世よに榮さかゆるなり、今の時とき
致いたは恥はぢを雪きよぐといへども一命いめいを失うしなふ。たとへば少し違ちがふやうなれども、名なを清きよめ譽ほまれを世
に残のこす理ことわりにや。この人々の弓矢ゆみやや執とつての勢いきほひ、打物うちもの取とつての振舞ふるまひ、吳越ごえつの戰たたかひには優まさ
ものかな」と、感かんずる人多おほくかりき。聞きこく人理こころわりとぞ申しける。

玉趾―御足

越王の如く君王の玉趾を戴かん。君もし會稽の恩を忘れずば、今日の死を助け給へ」と言葉盡しけり。越王これを聞きて、古のわが思、今の人の悲こそ思ひ知られて、吳王を殺すに及ばず、その死を救はん事を思ひ煩ひ給へり。范蠡これを聞き大きに怒り越王の前に來り、面を犯して申しけるは、「吳は天より越を與へたり。しかるに今また吳を越に施す。吳王過ぎにし與を取らずして、この害に遭ふ。また越かくの如くの害に遭はん事疑なし。吳王害を憐むこと、君臣ともに肝を碎き、吳王を得ること二十箇年の春秋、豈思ひ知らざらんや。君非を行ふとき、従はざるは忠臣なり」といひ捨て、吳王の使の未だ歸らざるに、范蠡自ら攻鼓を打ちて兵を進め、遂に吳王を生捕にして、軍門の前に引き出す。范蠡が年月の望、憤さこそと思ひ遣られたれ。吳王は既に面縛せられて、このごう門を通り給ひけるに、吳王の忠臣伍子胥が、諫叶はずして首を刎られし時の兩眼、幢に懸けたりしが、吳王の果を見んとて、三年まで枯れずして見開きてありしが、吳王面縛せられ、かの一雙の眼の前をわたりけるを見て、自ら動き活きて笑ふ氣色見えけり。しうじやうの程ぞ恐しき。吳王彼に面を合せんこと、流石恥しくや思ひけん、袖を顔におしあてよ、頭を傾けて通り給ふぞ痛はしき、數萬の兵これを見て、

て二つの眼を抜きて、こう門にかけおきたり。而して後惡事いよく積れども、伍子胥が果を見て敢て諫むる臣下もなし。あさましかりし有様なり。越國の范蠡是を聞き、時既に到りぬと悦びて、自ら二十萬騎の兵を率して向ひけり。折節吳王は晋の國叛くと聞きて、兵を率してかの國へ向はれたる留守なりしかば、防ぐ兵一人もなし。范蠡まづ王宮へ亂れ入り、西施を取り返し、越の王宮へ返し入れ奉り、即ち姑蘇城を燒き拂ふ。晋齊の兩國も越王に志を通じければ、三十萬騎の兵を出し、范蠡が勢に力を合せけり。吳王これを聞き大きに驚き、晋の國の戰をさし措きて、吳國に引き返し、越王に戰をなす。されども越の兵其の勢雲霞の如く前より競へば、後よりは晋の豪敵勝に乗つて追つ驅けたり。吳王大敵に前後を包まれて、逃るべき方なかりければ、死を輕うして戰ふこと三日三夜なり。乃ち范蠡新手を入れ換へ、息をもつがせず攻めける程に、吳王の兵三萬餘騎討たれしかば、僅に百餘人になりにけり。吳王も自ら相戰ふこと三十二箇度なり。夜半に及びて百餘人の兵六十騎になりてこそ、山に登りて越王の方へ使を立て、君王の昔會稽山に苦めおき、越王勾踐が命を助けし事、忘るべきにあらず、自らが臣下となり、今この亂を起すこと、偏に助けし重恩にあらずや。我も今より後、

このこゝ門
— 吳の東門
か

を抜きて、吳王の前に置きいふやう、「この劔を磨ぐこと、邪を退け敵を拂はん爲なり。倩國の傾くべき基を尋ぬるに、みな西施より起れり。さればこれに過ぎたる大敵なし。願くは西施が首を刎ねて、社稷の危きを助けん」といひて、齒嚙をしてぞ立ちたりける。實にや忠言は耳に逆ふ習なれば、吳王大きに怒り、眼の前におきて國傾くといふとも、かろくわれをや叛かん。まして命邪路に入る事その數ならず。これ偏に怨敵の語を受けたりと覺えたり。さあらんにおいては、是非を犯さざるさきに、伍子胥を誅せらるべきにぞ定めける。伍子胥敢てこれを傷まず、「わが君臣の朝恩を捨つべきにあらず、國亂れば一番に出でて、吳王のために屍を曝すべき身なり。越王の兵の手にかゝらんより、君王の手にかゝり、死なんこと恨むべきにあらず。但し君臣下が諫を聞かずして、怒を廣くして我に死を與ふる事、天既に君を捨つる始なり。君越王に滅され、刑戮の罪に伏せられんこと、三箇年を過ぐべからず。願くはわが兩眼を穿ちて、このこゝ門にかけて、その後首を刎ね給へ。一雙の眼枯れずして待ち申すべし、君勾踐に滅されんを見て、笑はん」と申しければ、吳王いよく怒をなして、遂に伍子胥を斬られけり。無慙なりしありさまなり。然れども吳王後悔せられけり。斯くて伍子胥願なればと

の相向ひ脈理を接する事夫婦の契に喩ふ

姑蘇臺―夫差の父闔閭の築きしもの三年材を聚め五年乃ち成る高うして三百里の外を見きといふ

ちぬれば、後朝の袖愁歎に残るといふも餘あり。されども范蠡が諫を違へず、一人の太子をもふり捨てゝ出で給ふ御心も、唯末の世を思ひ給ふゆゑなり。さりながら一方ならぬ別の悲しさ、譬へん方もなかりけり。さてかの西施は一たび笑めば百の媚あり、一たび宮中に入りぬれば吳王心をまどはす。吳王は思よりも心憧れ、姪慾を好みて、夜とも知らず晝ともわかず、遊宴を専として、國の危きをも顧みず、誠に范蠡が諫に違はずと見えたり。こゝに吳王の臣下伍子胥これを歎き、吳王を諫めて曰く、「君見すや、殷の紂王は姐己に迷ひ世を亂し、周の幽王は褒姒を愛して、國を傾けられしこと、遠きにあらざ」と度々諫めけれども、敢てこれを聞かず。或時吳王西施に宴せんとて、群臣を集め、姑蘇臺にして花に酔を進めけるが、伍子胥も威儀を正しくして出でにけり。さしも珠を敷き、黄金を鑲むる瑤階を上るとて、裳裾を高くかゝけて、深き水を渉る時の如くにせり。人これを怪み、その故を問へば、「この姑蘇臺はいま越王に滅され、草深く露滋き地とならんこと遠からず、我若しそれまで命あらば、昔の跡見んに、袖より餘る荆棘の露深がるべし。行末の秋、思へば斯様にして渉らん」とぞ申しける。君王を始として聞く者奇異の思をなせり。果して思ひ合せられけり。また或時伍子胥青蛇の如くなる劍

そばめ―他
へのきて
わりなく―
むやみに哀
げにの意

の肌屢々衰へたる御容、いとどわりなく覺えたり。餘所の袂まで、萎るゝばかりなり。越王この顔にいよく心を睦うし給ひけり。理とぞ見えける。こゝに吳王より使あり、越王驚きて范蠡を出して聞くに、「吾姪を好み色を重くして、美人を索むること天下に遍し。然れども西施が如くの顔色を求め得ず。越王の古會稽山を出でし時、一言の約束忘れ給ふべきにあらず。はやく西施を吳の宮中へかし給はるべし。貴妃の位にそなへん」との使なり。越王聞き、「我吳王に囚はれ恥を忘れ、石淋を嘗めて命を助かりし事も、唯かの西施に逢はんと思ひしなり。されば今西施を他國へ遣さんこと叶ふべからず」と宣ふ。范蠡申しけるは、「誠に君王の仰臣が心にあたはず。つらく事を案するに、西施を惜み給はど、吳越の義兵二たび起りて、此の國を取らるゝのみならず、西施をも奪はれ、社稷をも傾けらるべし。深くこれを謀るに、吳王姪を好み色に迷ふこと疑なし。國潰え民叛かん時に及びて、兵を起し吳を攻められんに、勝つことを立所に決すべし。然あらば西施もかへり、長久なりぬべし」と、涙を流して口説きければ、越王「われ曩に范蠡が諫を用ひずして、吳王に圍まれ命盡きなんとす。今また彼が諫を聞かずは、天の照覧にも背きなん」とて、西施を吳國へ送られけり。互の別今を限、連理枝朽

へて―得て
か

梟松桂の枝
に云々―白
樂天の詩の
句

てその科を得ると見えたり。この時越の國を取らずして、勾踐を返し給はん事、千里の野邊に虎を放つが如し」と諫めけり。吳王用ひずして勾踐を本國に歸されけり。誠に運の極と覺えけり。越王悦びて車の轅を廻らし、急ぎ國にぞ歸りける。路の邊に蛙多く集りて路頭を塞ぐ。勾踐これを見て、「勇士をへて素懷を達すべき瑞相めでたし」とて、車より下りて是を禮して通られけるが、果していふ、隣國の諸侯、「この君は勸むるに諫ありし賢王なり」とて、從ひ附く事數を知らず。然るに瑞相によつて本意を遂げ給ふなり。されば越王は故郷に歸り見給ふに、何時しか三年に荒れはてよ、梟松桂の枝に巢くひ、狐蘭菊の叢に啼き、萩が枝折るよ許に露かよれども、拂ふ人なき閑庭には落葉滿ちて、蕭々たり。哀なりし形なり。かくて越王歸り給ひぬと聞きければ、隠れ居たる范蠡、太子の王範與を宮中に入れ奉りぬ。また后に西施といふ美人あり。これぞ吳國に聞ゆる美人、なんこく、なんい、とうい、西施とて四人の美人なり。中にも西施は顔色世にすぐれ、嬋娟たる顔類なかりしかば、越王ことに寵愛して、暫しも側を離し給はざりき。越王吳王に囚はれし程は、その難を遁れんが爲に、身をそばめ隠れ居給ひしが、越王歸り給ふと聞き、悦びて故宮に參り給ふ。この三年を待ちわびし思に、雪

石淋—腎臟
又は膀胱中
石の如き物
の生ずる病
巫覡—神意
を受けつく
もの、女み
こと男みこ

とぞ、書きたりける。筆勢文章の體まがはぬ范蠡が業なり。さればにや未だ憂き世にながらへ、我が爲に徘徊しけり、志の程哀にも亦頼もしくも思ひ給ふ。一日片時のながらへも怨めしかりつるに、范蠡が諫をうけて、今更命も惜しく思はれけり。斯る所に敵の吳王俄に石淋といふ病をうけて、神心長へに惱亂す。巫覡祈れども驗なく、醫師治すれども癒えずして、露命既に危かりけり。爰に他國より名醫來りて、「この病誠に重しと雖も、醫術及び難きにあらず。若しこの石淋を嘗めて、五味のやうを知る人あらば、その心をうけて療治せんに、即ち癒ゆべし」と申しければ、「誰かこの石淋を嘗めて、味の様を知らすべし」といふに、左右の近臣皆願みて嘗むる者なし。勾踐是を聞き給ひて、「我會稽山に圍まれ、既に誅せらるべかりしを、今迄助け置かれて天下の赦を待つ事、偏に君王の厚恩なり。今我是を以つて報ぜずは、いつの日をか期せん」とて、竊に石淋を取りて嘗め、その味を醫師に告げければ、醫師即ち味を聞きて療治を加ふるに、吳王の病忽に平癒す。吳王大きに喜びて、「人心あり、死を助けずば如何でか今赦心あらん」とて、越王を土の牢より出し、剩へ越の國を與へ、本國に歸り給ふべし」と宣下せられけり。爰に吳王の臣下に伍子胥といふ者あり。吳王の前にて申しけるは、「天の與を取らざれば、却つ

も用ひて例
とせり
しやう一璽
綬か

西伯一周の
文王
重耳一晋の
文公戰國時
代五霸の一
人

の官に下されしかば、きやうこうゑき窮して姑蘇城へ入り給ふ。その姿見る人袖を濡さぬはなかりけり。實にや昨日までは、越國の大王として何か心をたづさへし。弓矢を帶する身とて、今日はかゝる目に逢ふべしとは、誰か知るべき、とて、涙を流さぬはなかりけり。越王かの所に入りぬれば、手械足枷を入れ、頸に綱をさし、土の牢にぞ籠められける。夜明け日暮るれども、日月の光をも見ず、冥暗の中に歳月を送り迎へし涙の露、さこそは袖に積るらめ。思ひやられて哀なり。さる程に國に留めおきし范蠡この事を聞き、怨骨髓に徹りて忍びがたし。あはれ如何にもして我が君を、本國に歸し奉りて、諸共に謀を廻し、會稽の恥を雪めばや、と肺肝を碎きてぞ悲みける。或時范蠡謀を以つて身を窺し、籠に魚を入れて自ら是を荷ひ、商人の眞似をして、吳國をぞ廻りける。吳の城の邊にて、我が君勾踐のおはしける所を、窃に是を問ひければ、人これを委しく教へけり。范蠡嬉しくて、かの禁獄近く行きけれども、警固隙もなかりければ、魚商ふ由にて近づき寄りて、一通の書を魚の腹の中に入れて、獄中に投げ入れた。勾踐怪み思ひて、魚の腹を開きて見れば書あり。詞に曰く、西伯羨里に囚はれ、重耳翟に走る、皆以つて王霸たり。死を敵に許すこと莫れ

此の—吳の
か

素車—表の
時に用ふる
飾なき車、
降服の時に

王の爲に天下の太平を謀るに、豈一日も忠を盡す心を表さざらんや。時に吳王、「つらつ
ら事を計るに、越王戦負けて、力盡きぬと雖も、残る兵いまだ三萬騎あり、これ皆
たゞの兵にあらず。御方はたとひ多しと雖も、昨日の軍に疲れて前後を失ひぬ。敵
は小勢なりと雖も、志を一つにして然も遁れぬ所を知れり。これや窮鼠却りて猫を喰
ひ、鬪雀人を恐れずといふべきにや。若し重ねて戦はば御方には怪多かるべし」と宣
へば、太宰詔が、「唯越王を助け一天の地を與へ、此の下臣となすべし。然らば吳と越と
兩國のみならず、齊楚趙の三箇國悉く朝せずといふ事あるべがらず。これぞ根を深う
して葉を堅くする道なり」と、理を盡しければ、吳王聞き終りて、愆に耽る心を逞しくし
て曰く、「さらば會稽山の圍を解き、越王を助くべし」とぞ定めける。太宰詔急ぎ大夫種に
語る。大きに悦びて越王に告げければ、士卒は色をなほし「萬死を出で一生にあふ事、
偏に大夫種が智謀によれり」とぞ喜びける。さる程に兵共皆國に歸る。太子王龔與に
は大夫種をつけて本國へ歸し、我は素車に乗りて越の國のしやうを首にかけ、苟も吳王
の下臣と稱し、軍門に降り給ひにけり。あさましかりし次第なり。然れどもなほしも吳
王心許やなかりけん、君子刑人に近がずとて、敢て勾踐に面を見え給はず。剩へ典獄

轅門一軍
門、古王者
軍を率ゐて
他に宿する
時は車の長
柄を相對へ
て門とせし
よりいふ

り。また吳王も智淺くして謀短し、色に姪じて道に暗し。されば君臣ともに欺くに
易き所なり。今この戰に負くることも、范蠡が諫を用ひ給はぬに由つてなり。願くは君
王暫く臣下に謀を許して、敗軍數萬の死を救ひ給へ」と、涙を流して申しければ、越
王さしあたる理に折れて、「今より後大夫種が詞に従ふ」とて、重器をも焼かず、太子を
も殺さざりけり。大夫種悦び兜を脱ぎ、旗を卷きて會稽山より下り、「越王の勢既に盡き
て、この軍門に降る」と呼はりければ、吳の兵三十萬騎、勝鬨を作りて萬歳の歡を
ぞ唱へける。大夫種は乃ち吳の轅門に入つて、謹んで、「この上は將軍の下執事に屬す」
といひて、膝行頓首して大宰嚭が前に跪く。太宰嚭哀に思ひ、顔色解けて「越王の命を
ば申し宥むべし」とて、大夫種を連れて吳王の陣に行き、この山かくといふ。吳王彼等
を見て大きに怒つて曰く、「吳と越との戰いまに限らずと雖も、時に到りては勾踐捕は
れ僻事となれり。是天の我に與へたるにあらずや。汝知りながら、彼を助けよといふ、
敢へて忠烈の臣にはあらず」とて、更に用ひ給はず。太宰嚭重ねて申しけるは、「臣不肖な
りと雖も、忝くも將軍の號を許されて、この戰にも一陣たり。然れば謀を廻し
大敵を破り、命を輕んじて勝つことを決せり。是偏に臣下大臣の功とも云ひつべし。君

九門―九泉
の誤にや

この上は腹を切るべし。全く軍の科にあらす、天我を滅せり、怨むべきにあらす。唯范
蠡が諫こそ恥しけれ。従つては臣が志、誠に報ぜざるこそ無念なれ。さりながら重恩は
生々世々に忘れがたし。とてもこれ程の志なれば、明けなば諸共に圍を出でて、呉王の
陣にかけ入つて、屍を軍門に曝し、九門に報すべし」とて、鎧の袖を濡し給へば、兵
も一つに思ひ定まる勢を見て、今までの舊交まことに淺からざるとぞ思はれける。さて
越王の子王鮒與とて、八歳になる太子ありけり。呼び出して、「汝未だ幼稚なり。敵に生
捕られて憂き目を見ん事口惜し。汝を先立てよ、心安く討死して、九泉の苦の下に埋
みなん。冥途までも父子の契をなすべしと思ふなり。急ぎ殺すべし」といひけれども、太
子は何心もなくおはしぬ。又隨身重器を積み重ね、悉く焼き失はんとす。時に越王の左
將軍に、大夫種といふ臣下進み出でて申しけるは、「生を全くして命を待つこと、遠くし
て難し、死を軽くして節を望むことは近くして易し。暫く重器を焼き太子を殺さん事を
止め給へ。我無骨なりと雖も、呉王を欺きて君王の死を救ひ、本國に歸り、二度大軍を
起し、この恥を清めんと存するなり。然るに今この山を圍み、一陣を張る左將軍は主宰
師といふ臣下なり。彼は我が古の朋友なり。誠に血氣の勇士といひながら、心に慾あ

稻麻竹葦—
經文の語、
物の繁多な
る喻
ゆまく—帷
幕か

と三十餘里なり。次の陣を一陣に合せ、馬の息の切るゝ程ぞ追うたりける。吳の兵、思ふ程敵を難所におびき入れて、二十萬騎の兵四方の山より打つて出で、越王勾踐を中に取り籠め、一人も漏さじと攻め戦ふ。越の兵は今朝の戦に遠驅して、馬人ともに疲れたる上、小勢なりければ、吳國の大勢に圍まれて、一所にうち寄り控へたり。進んてかからんとすれば、敵嶮岨に支へて、鏃を揃へて待ちかけたり、退いて拂はんとすれば、鉞先曲れり。されども越王勾踐は堅を破り強きを打つこと、大勢に超えたる人なりければ、事ともせず、かの大勢の中に驅け入つて、十文字に驅け破り追ひ廻して、一所に合せては三所に分れ、四方を拂ひ八方に當り、百度千度の戦に勝劣なし。然りとはいへども多勢に無勢叶はねば、遂に越王はうち敗けて、三萬騎にうちなされけり。されば越王堪へずして會稽山に上りて、うち残されたる勢を見るに、僅に三萬騎になりにけり。馬に離れ矢種悉く盡きて鉞折れければ一戦にも及び難し。隣國の諸侯は勝つことを兩方に窺ひて、何方とも見えす控へたりしが、吳王軍に利ありと見て、悉く吳王の勢にぞ加はりける。今は三十萬騎になりて、かの山を圍むこと稻麻竹葦の如し。越王叶はじと思ひけん、ゆまくの中に入り、兵を集めて曰く、「我が運命既に今この圍にて盡きぬ。」

ず、大きに怒つて、「軍の勝負は勢の多少によらず、唯時の運により、または大將の謀によるなり。されば吳と越との戦度々に及び、雌雄を決すること汝悉く知れり。次に伍子胥があらん程は叶はじといはど、我遂に父祖の敵を討たずして、恨を謝せん事あるべからず。徒にして伍子胥が死ぬるを待たば、生死限あり、老少定らず、伍子胥とわれ何をか先と知らん。これ然しながら汝が愚暗なる故なり。吾また兵を催すこと、定めて吳國へ聞ゆらん。事延びば却つて吳王に亡されなん時に、悔ゆとも益あるまじ」とて、越王十一年二月上旬の比、十萬騎の兵を率して吳國へぞ寄せたりける。吳王これを聞き、「小敵欺くべきにあらず」とて、自ら二十萬騎の勢を率して、吳と越との境夫柘縣といふ所に馳せ向うて、後には會稽山をあて、前にはごせんといふ大河を隔て後陣を取り、敵をはからんが爲に三萬騎をば出して、残り十七萬騎をば後の山に隠し置きけり。越王夫柘縣に臨みて敵を見るに、僅二三萬騎には過ぎざりけり。思はず小勢なりとて、十萬騎の兵を同じ心にかけて出させ、筏を組みて馬をうち渡す。吳の兵かねてより、敵を難所におびき入れて、残さず討たんと定めし事なれば、わざと一戦にも及ばずして、夫柘縣の陣を引き、會稽山に引き籠る。越王の兵勝に乗り、北ぐるを追ふこ

九泉—冥途

社稷—土地
穀物の神に
て國家の意
に用ふ

三冬—冬三
月

に吳國越國とて並の國あり。吳國の王をば闔廬の子にて吳王夫差といひ、越國の王をば
大帝の子にて、越王勾踐とぞいひける。然るにかの兩の王、國を爭ひ戰をなすこと絶
えず。或時は吳王を亡し、或ときは越王を退治し、或時は親の敵となり、或時は子の仇
となる、犠牲甚しく累年に及ぶ。こゝに越王の臣下に范蠡といふ武勇の達者あり。彼
を招き寄せて曰く、「今の吳王は正しき親の敵なり。これを討たずして徒に年を送りて
嘲を天下に遺すこと、父祖の恥を九泉の苔の下に辱しむること、恨つくし難し。され
ば越國の兵を催し、吳國へ打ち越え、吳王を打ち滅して、父祖の恨を報ぜんと思ふな
り。汝は暫國に留りて、社稷を守るべし」と宣ひければ、范蠡申しけるは、「暫く愚意を
以つて事を計るに、今越の力にて吳王を亡さん事難かるべし。そのゆゑは、先兩國の兵
を數ふるに、吳國には二十萬騎あり、越の國には僅十萬騎なり、小を以て大に敵せざれ
となり。その上吳王の臣下に伍子胥とて、智深うして才高き事のみならず、人をなつく
ること雨の降るが如し、かくの如きの勇士あり、かれがあらん程は、吳王を滅さんこと
叶ふべからず。麒麟は角に肉ありて猛き形を現さず、潛龍は三冬に蟄つて一陽來復の
天を待つ。暫く兵を伏して武を隠し、時を待ち給へ」と諫めければ、越王これを用ひ

花に鳴く鶯
云々―古今
集の序文中
の詞

捨つる身に猶思出となるものはとふにとはれぬ情なりけり
まことや天人のゐんせざる所は、禍ありて而も幸なし、と東方朔が詞思ひ知られて
候ふ。然るべき善智識を尋ね、生年十六歳と申すに出家して、諸國を修行して、後には
大磯の虎が住處を訪ね、俱に行ひすまして、八十餘にして大往生を遂げにけり。有り難か
りし志とぞ聞えし。さる程に源太左衛門景季はこの事を聞きて、素よりこの女の心ざ
ま尋常にして、歌の道にも優し、今は曾我五郎こそ敵なれ。行き遣はん所にて本意を達
せん、と思ひければ、さてこそ平塚の宿までは追ひたりけり。その時景季が勢又並ぶ
人やあるべき、と振舞ひしかども、富士の裾野にては、誠に男がましくも見えざりしぞか
し。されば人は世にありとも、よく思慮あるべきものを、とて、皆人申し合れけ
り。五郎もこの事を傳へ聞きて、優しくも亦心許なくもぞ思ひける。是によつていよいよ
身を身とも、世を世とも知らで、思ふ事のみ急ぎけるは、理すぎてぞ聞えける。

十四 吳越の戦の事

そも／＼五郎が富士野にて、會稽の恥を清むといひける由來を委しく尋ぬるに、昔異國

人召し具し、かの淵の邊に行幸なり、叡覽ありければ、申すに違はず、實に石二つあり。不思議に思し召す所に、かの石の上に鴛鴦一番あがりて、鴛鴦の衾の下懷しけに戯れけり。是も彼等が精にてもや、と御覽じけるに、この鴛鴦飛び上り、思羽にて王の首をかき落し、淵に飛び入り失せにけり。それよりして思羽を劔羽と申すなり。

十三 五郎が情かけし女出家の事

さる程に皆人よく聞き給へ。貞女兩夫に見えずとは前にいひつる女の事なり。如何なる貞女か二人の夫に見え、如何なる身にてか引く手數多に生れつらん。さらぬだに我等風情の者は、慾心に住するといひならはせり。己を知る者のために容をつくろふ、と文選の言葉なるをや。我またかひなくしくなければ、景季がまことの妻女になるべき身にもなし、來世こそ終の住處なれ。その上歌は神も佛も納受し、慈悲を垂れ給ふ。されば花に鳴く鶯、水に住む蛙だにも歌をば詠むぞかし。況や人として如何でかこれを恥ぢざるべき」とて、この歌を詠みける。

數ならぬ心の山のたかければおくの深きをたづねこそ入れ

等閑—俗言
のよい加減
深からぬ意

女も王宮の住もの憂くて、唯男の事のみ思ひ歎きければ、この時帝如何せんと思し召し、時の關白りやうはくといふ者を召し、この事問ひ給ふ。さらば彼が男のかんばくを不具になして見せ給へ。思は覺めぬべし、と申したりければ、然るべし、とて、耳鼻をそぎ口を裂きて見せ給ふ。女我故に斯る憂き目に逢ふよ、といよく歎き伏し沈み悲みければ、また臣下に問ひ給ふ。さらばかんばくを殺して見せ給へ、と申しければ、やがて深き淵にぞ沈められける。女聞きて、思少し等閑にして申しけるは、願くはかの淵を見ん、といひけり。大王はや思ひ捨てけり、と喜び給ひ、大臣公卿もろ共にかの淵に臨み、管絃遊宴して遊び給ふ時に、この女門に出て休ふとぞ見えしが、淵に飛び入りて死にけり。大王を始として、敢なさ限なくて、空しく歸り給ひけり。

十二 鴛鴦の劔羽の事

かくて帝還幸ましくて、歎きながらも月日を送り給ふ。幾程なくして、この淵の中に赤き石二つ出でて、抱き合ひてぞありける。誠に不思議なり。かんばく夫婦の靈魂なるをや、と人申しければ、大王聞こし召し、なほもありし面影の忘れ難くて、また官

賢人二君に
仕へず―史
記田單傳中
なる王蠋が
語に忠臣不
レ事二君一
貞女不レ更
二夫一

にして老耄極なし、われ未だ幼少なり、されば神拜政事妄にして、ある詮なき身なれば、都を出でぬ。この程聞きつる事皆左の耳なれば、汚れたる事極なし。それを洗ふにや、といひけり。巢父聞きて、さてはこの川七日濁るべし、汚れたる水飲ひて益なし、とて、牛を牽きて歸りしが、また立ち歸り、さて汝は何處の國にゆき、如何なる賢王をか頼むべき、と問ふ。賢人二君に仕へず、貞女兩夫に見えずとなり、されば首陽山に入り、蘇を折りて過ぎける、と申し傳へ候ひけり。二心なきには如かじとぞ。

十一 貞女が事

こゝにまた貞女兩夫に見えずといふ事あり。さる國にしそうといふ王あり。かんばくといふ臣下を召し使ひ給ふ。或時かんばく結びたる文を落したり。帝御覽じて、如何なる文ぞ、と御尋ありければ、臣宮仕暇なくて日數を送り家に歸らず候ふ。心許なしとて妻の許よりくれたる文、と申す。なほ怪み叡覽あらんと勅説あり。隠すべき事ならねば叡慮に捧ぐ。この文の主呼びて見せよ、と仰せ下されければ、宣旨背き難くて、この女を呼びて見せ奉る。帝御覽じて押し留めおき給ふ。かんばく安からずに思ひけれども叶はず。

歌を詠みおきて出でぬ。

逢ふと見る夢路にとまる宿もがなつらき言葉にまたもかへらん

と書きて、引き結びておきたり。五郎歸りて後、この女立ち出でて見れば、結びたる文あり。取り上げて見れば、日比なれにし五郎が手蹟なり。この歌をつくく見て文を顔にあて、さめくと泣きつゝ、友の遊君に、「これ御覽ぜよや人々、恥とも知らで恥しや。日本我が朝はみづのおの里として、神明光を和け、天の窟戸に閉ち籠らせ給ひし時、あら面白といひ初め給ふも、この三十一字の歌故ぞかし。かくあるべしと知りたらば、如何で情なうあるべき」とぞ思はれける。

十 巢父許由が事

さてもこの女房は、時致が歌を彼方此方に見せ、申しけるは、「昔もさる例あり。大國に潁川といふ川あり。巢父といふ者黄なる牛を牽き來る所に、許由といふ賢人この川の端にて、左の耳を洗ひ居たり。巢父これを見て、汝何によりて左の耳ばかりを洗ふにや」と問ひければ、許由答へて曰く、吾はこの國の賢人といはれしものなり。我が父九十餘

忠臣は云々
—老子に國
家昏亂有二
忠臣—
會稽の恥—
越王勾踐の
故事—
さすが—小
刀、流石

雪ぐ、と申しあへり。「思ふ事だになかりせば、源太が命は危かりし」とぞ申しける。抑こ
の意趣を尋ぬるに、化粧阪の麓に遊君あり、時致情をかけ浅からず思ひしに、引く手數
多の事なれば、梶原が濱出して歸り方に、この女の許にうち寄りて夜と共に遊びけり。
曉歸るとて、如何したりけん腰の刀を忘れて出でけるを、女の許より刀を遣しけるとて、
いそぐとてさすがかたなを忘るゝはおこしものとや人の見るらん
景季馬に乗りながら、左手の鎧をいまだ踏みもなほさず、返歌をぞしたりける。

形見とて置きてこしものそのまゝに返すのみこそさすがなりけれ

その比源太左衛門は、歌道には定家隆なりとも、と思ひしなり。さてもこの歌の面白
さよと思ひそめて、景季通ひなれけり。よその事わざなど戯れければ、女ひき籠り、五
郎一人にも限らず、出仕を止めけり。是をば知らで、五郎かの許にゆき尋ねけれども
逢はざりけり。何によりてかと危く、友の遊君に問ひければ、「梶原源太殿の取りておか
れ、餘の方へは思も寄らず」といひければ、五郎聞きて、流を立つる遊もの、頼むべき
にはあらねども、世にある身ならば、源太には思ひ換へられじ、と身一つのやうに思ひ
けり。貧は諸道の妨とは面白かりける詞かな。人をも世をも怨むべからず、とて、この

ござんめれ
—にこそあ
るめれ

松柏ば云々
—論語に歳
寒然後知こ
松柏之後
凋也

へ、景季うつて來り、「是に控へたるは、曾我の五郎が乗りたる馬ござんめれ」とて、縁の際に駒うち寄せける氣色、怒あまりければ、乗換五六騎馬より下り、廣縁に上る。五郎これを聞きて、惡しかりなると思ひけん、急ぎ内にぞ入りにける。源太この上は尋ぬるに及ばず、とて、手綱かい繰り通りけり。五郎物越に聞き、世に驕り又人も無けなる奴かな。走り出でて一太刀斬り、如何にもならばや、と思ひけれども、この二十餘年惜しかりつる命は、景季が爲にはあらず、祐經にこそ、と思ひ止りけり。是や論語に曰く、事を遂げんには勇ますして萬事を咎めざれ、とは、今の五郎が心なるをや。見聞く輩は、五郎が不覺なりとはいひけれども、敵祐經を討ちて後、引き据ゑられし時、君の御返事をば申さで、先源太に向ひ、「吾殿は年比時致に意趣あり、今は時致が身に思ふ事なし。本意を遂けよく」といひければ、景季御前を罷り立ち、五郎がありける程は参らざりけり。時致は和田畠山左右にありけるその方を見やりて、笑を含みけるこそ、理すべきて覺えける。是や松柏は霜の後にあらはれ、忠臣は世の危きに知らるゝとは、今こそ思ひ知られたれ。暫くもなかりける時致、平塚の宿にてはさこそ思ひつらめ、大事ありて小事なし。身に思あれば萬事をすて、平塚の宿まで遁けたりし、會稽の恥を唯今

明^{めい}を專^{もつぱら}に敬^{うやま}ふべきものをや。

九 五郎女に情懸けし事

さてもこの人々は、三浦^{みうら}より歸^{かへ}るさに、「大磯^{おほいそ}にうち寄りて、虎^{とら}に見參^{けんざん}せん」といひければ「しかるべく候^{こゝろ}ふ。此度^{このたび}出^でて長き別^{わか}れにてもや候^{こゝろ}ふべからん。思^{おも}ひ出して、一遍^{いっぺん}の念佛^{ねんぶつ}も計^{はか}り難^{がた}き事^{こと}にて候^{こゝろ}ふぞかし。誠^{まこと}に思^{おも}ひ切^きられぬ道^{みち}にて候^{こゝろ}ふ。時致^{ときぢね}も化粧^{けいずき}坂^{ざか}の籠^{かご}に知^しりたる者の候^{こゝろ}ふ。五日十日を經^へて行く道^{みち}にても候^{こゝろ}はず、此度^{このたび}出^ででなん後は、復^{また}相^あ見^みん事もかたし。明日^{あした}參^{まゐ}り合^あひ申^{まを}さん」とてうち別^{わか}れにけり。五郎^{ごろう}は一夜^{いっや}を明^{あか}し、明^あけよれば鎌倉^{かまぐら}を出^でて、腰越^{こしごえ}より片瀨^{かたせ}の宿^{しゆく}へぞ通^{とほ}りける。折節^{せふし}梶原源太^{はらけんた}左衛門^{ざゑもん}十四五^{しき}騎^きにてかの宿^{しゆく}におり居^ゐたりしが、五郎^{ごろう}が通^{とほ}るを見て、「申^{まを}すべき仔細^{しさい}候^{こゝろ}ふ。暫^{しば}し止^{とど}り給^{たま}へ」とて、足輕^{あしがら}を走^{はし}らしむ。五郎^{ごろう}豫^{かね}て聞^{きこ}く事^{こと}ありければ、「さしたる急事^{きふじ}の候^{こゝろ}ふ。後日^{ごにち}に見參^{けんざん}に入るべし」とて通^{とほ}りにけり。定^{さだ}めて五郎^{ごろう}は止^{とど}まらん、と片瀨^{かたせ}川^{がは}をかけ渡^{わた}し、向^{むか}の岡^{おか}に駒^{こま}うち上^あげて見^みければ、遙^{はるか}にうちのびぬ。「この者は何^{なん}と心得^{こころえ}て、斯樣^{かやう}には振舞^{ふるま}ふらん」とて、駒^{こま}を靜^{しづ}めて打^うつてゆく。時致^{ときぢね}は馬^{うま}の息休^{いきやす}めんとて、平塚^{ひらつか}の宿^{しゆく}におり居^ゐて、暫^{しば}くありける處

うちのびぬ
—馬にて行
き過ぎたり

鮑魚—乾魚

め。義盛が若盛ならば、その座にても討つべきぞ。よくく申し上げて失ひ給へ。君も一旦は然りと思し召すとも、親しき者の事、惡し様に申さんを、神妙なりとて頼もしくは思し召さじ。その上彼等を失ひ給ふとも、親類多ければ、御身いかでか安穩なるべき。孔子の辭に、善人に交れば、蘭麝の窓に入るが如し、その香残り、惡人に交れば鮑魚の市藏に入るが如し、臭き事残れる、と見えたり。御身に於ては、同じ道をも行くべからず。心を返して見給ふべし。朝恩に誇る敵を目の前におきて、見るも目覺しくてこそいひつらめ。この事訴訟申して、如何程の勳功にか預るべき。武藏相摸には此の殿原の一門ならぬ者や候ふ。かく申す義盛も結ほるとは知り給はずや。昔の御代とだに思はど、などや彼等に矢一つとぶらはざるべき。當代なればこそ、恐をなし敵をば直におきたれ、彼等が心のうち推し測られて哀なり」とて、雙眼に涙を浮べければ、義直つくくくと聞きて、惡しかりなんとや思ひけん、「是も一旦の事にてこそ候へ。この上はとかくの仔細に及ばす」とて、駒の手綱を引き返す。その後は四方やまの物語して、三浦へ打ち連れて歸りけり。この事年ごろ神佛に申せし感應にや、義盛に助けられぬ。然らずば如何でか此の事遁るべき、不思議なりし振舞なり。されば人間は高きも下れるも、五常を以とし、神

や―呼掛の、
詞
野干―狐

程に周章て給ふぞや。何方の事なりとも義盛はなるべからず、御分また隠すべからず」とて、與一が馬の手綱を取り、隙なく問ひければ、與一申す條、「別の仔細にては候はず。曾我の者どもが來り候ひて、親の敵討たんとて、義直を頼み候ふ間、叶ふまじきと申し候へば、五郎と申す烏濟の者が、さんぐに悪口仕り候ふ。當座に如何にもなるべかりしを、彼等は二人某は唯一人候ひし間叶はで、斯様の仔細上へ申し上げて、彼等を失はん爲、鎌倉へ急ぎ候ふ」といひければ、和田是を聞き暫く物をもいはず。稍あつて、「や殿、與一殿、弓矢執るも執らざるも、男と首を刻まるゝ者が、いざや死にゝ行かんとうち頼まんに、辭退するやからをば、人とはいはで犬野干とこそ申せ。就中弓矢の法には、命は塵芥よりも軽くして、名をば千鈞よりも重くせよ、とこそいふに、侍の命は、今日あれば明日までも頼むべきか。聞くべしとてこそ、斯程の大事をいひ聞かせつらめ。然も親しき中ぞかし」と、當る道理をいひ聞かせて曰く、「領承して叶はじと思はゞ、後に辭退するまでぞ。左右なく鼻をつき、剩へ上へ申さんとな。それ程の大事心にかくる上、穩便のものにてあればこそ、當座も吾殿が命をば助けおけ、上様へ申し上ぐると聞きては、今一やりも遣らじ。命惜しくば留り給へ。命ありてこそ、京へも鎌倉へも申し給は

しやうげの
方―生氣の
方、吉方

手越川―駿
河

を、誠し顔に制するぞや。今時我等が身にては思ひも寄らず、馬持たざれば狩場も見たからず。ゆめく披露あるべからず」と、口を固め立たんとす。五郎は耐らぬ男にて、「殊に始の言葉には似ず、思へば恐しきに辭退し給ふか。史記の辭をば聞き給はずや、蛇は蟠れどもしやうげの方に向き、鷲は太歳の方を背きて巢を開き、燕は戊己に巢をくひはじめ、比目魚は港に向ひ方違す、鹿はぎよく所に向ひて臥し候ふなる。かやうの獸だにも分に随ふ心はあるぞとよ。面ばかりは人に似て、魂は畜生にてあるものかな」と言ひ捨てゝ起ちにけり。與一は五郎に惡口せられて、如何にもならばやと思ひしが、我は一人彼等は二人なり、その上五郎は聞ゆる大力なり、小腕取られて叶ふべからず。所詮この事鎌倉殿へ申し上げて、彼等を滅さん事、力もいらで、と思ひ鎖まりぬ。さて彼等遙に行きつらんと思ふ時、急ぎ馬に鞍置かせうち乗り、鎌倉へこそ参りけれ。この事兄弟は夢にも知らでぞ居たりける。こゝに和田義盛は鎌倉より歸りけるに、手越川にて行き逢うたり。與一を見れば、顔の氣色かはり、駒の足並早かりければ、義盛暫く駒を控へ、「何處へぞ」といふ。與一物をもいはで駒を早めけるが、良あつて「鎌倉へ」とばかり答ふ。「さても鎌倉には何事の起り、三浦には何如なる大事の出で來候へば、それ

ありのまゝ
に―下のた
まへなどの
語を略せり

ひとまど―
一先

らん。たとひ如何なる大事なりとも、うち頼み仰せられんに、いかでか垂き奉るべき。ありのまゝに」と云ひければ、十郎小聲になつて、「かねて聞こし召さるらん。我等が身に思ありとは皆人知りて候ふ。然るに敵は大勢にて候ふに、貧なるわらは二人して狙へども叶はず。御分頼まれ給へ。我等三人寄り合ふものならば、如何でか本意を遂げざるべき。親の敵を近くおきて思ふがせん方なさに、申し合はせんとて参りたり。たのまれ給へ」といひければ、與一暫く案じて、「この事こそふつと叶ふまじけれ。思ひ止まり給へ。當世は昔にも似ず、さやうの悪事する者は、片時も立ち忍ぶ方なし。されば親の敵子の敵、宿世の敵と申せども、討ち取ること難し。ましてやいはん御供仕りたる者を、狩場にても旅宿にても誤りては、ひとまども落つべきものか。今度は思ひ止まりて、私歩を狙ひ給へ。その上祐經は君の御切者にて、先祖の伊東を安堵するのみならず、莊園を知行する事数を知らず。敵ありと思ひ用心厳しかるべし。悲なる事仕出し、面々のみならず、母や曾我の太郎を惑者になし給ふな。理を枉げて思ひ止り、如何にもして御不審宥され奉り、奉公をいたし、先祖の伊東に安堵し給へ。面々の有様にて、當御代に敵討たん沙汰をば止り給へ」と大きに驚き申しければ、十郎聞き、「憐しの人や、試みんとていひつる

仔細にや及ぶ―彼はいふまでしな

はれて御供申すべし。時致いふ様、「つくぐ事を案ずるに、隙を求め便宜を窺へばこそ、今まで本意は遂げされ。今度においては一筋に思ひ切り、便宜よくば御前をも恐るべからず、御館をも憚るべからず。夜ともいはす晝とも嫌はず、遠くは射落し、近くは組んで勝負をせん。身のあるものにせばこそ、隙をも窺ひ處をも嫌はめ。若し仕損ずるものならば、悪霊死霊ともなりて、命を奪ふべし。怒なる命生きて、明け暮れ思ふも悲し。今度出でなん後、再歸るべからず、と思ひ切りて候ふは、如何思し召し候ふ」。祐成聞き、「仔細にや及ぶ。某もかくこそ思ひ定めて候へ」とて、各出で立ちけるぞ哀なる。既に鎌倉殿御出まし／＼ければ、この人々は三浦の叔母の許へぞ行きにける。爰に三浦與一といふ者あり。平六兵衛が一腹の兄なり、父は伊東の工藤四郎なり、與一が母は叔母なり、何方も親しかりければ、睦びけるも理なり。十郎弟にいひけるは、「かの與一を頼みて見ん。さりととも否とはいはじ」。五郎聞きて、「小次郎にも御懲り候はで」とはいひながら、若しやと思ひければ、與一が許に行き、この程久しく對面せざる由いひしかば、珍しとて酒取り出し勸めけり。盃二三返過ぎければ、十郎近くゐて、「これへ参る」と別の仔細にあらず、大事を申し合はせんためなり」といふ。與一聞きて、「何事なる

その河の沙
の如く多數
なる喩
かひこー卵

べし。されば我等が命は阿修羅王に奪はるとも、如何でか殺生を犯さんとて、帝釋須彌を出でて、鐵圍山といふ山にかより給ふ。阿修羅これを見て、却つて吾を追ふぞと心得て、逃げければ、その軍に帝釋勝ち給ふ。これも殺生を禁じ給ふ故とかや。この君も鹿の命を惑み、狩座を止め給ふ。如何でかその徳なかるべき、とぞ申しける。

八 三浦與一を頼みし事

明けぬれば君鎌倉へ入り給ふ。兄弟の人々も泣くく、曾我にぞ歸りける。實にや日本國の名將軍の近邊にして、こゝに忍び彼處にまはり、命を捨て身を惜まで、敵を思ふ心のうち、優しといふも餘あり、無慙なりし用意なり。又鎌倉殿梶原を召されて仰せ下されけるは、「侍どもに暇取らすべからず。狩場多しと雖も、富士野に優る所なし、序に狩らんと仰せられければ、景季この旨披露す。曾我の五郎このことを聞き、兄に申しけるは、「吾等が最後こそ近づき候へ。知ろし召され候はずや、國々の侍ども歸さずして、富士野を御狩あるべきにて候ふなり。長らへて思ふも苦し、思し召し定め候へ」といひければ、祐成聞きて、「嬉しき物かな。今度は程近ければ、馬一疋づつだにあらば、さし表

て、道心だうしんを起し給ふ。三百人の郎黨ろうたうまで、道心起し候ふとなり。これにも猶嫌なほきららずして、鹿のために六萬本の卒都婆そとばを書き供養くやうし、六百人の僧そうを請しやうじてかの菩提ぼだいを弔さぶらひ給ひけるとかや。それよりして、朝妻あさづまの狩座かりくらを末代まつだいまで止むべし、との御判ごはんを申し下され、もろ共に判形はんぎやうを添そへて置かれければ、今に至るまで狩場かりばにはならずと申し傳へたり。さればこの野の鹿も、明日の命いのちをや悲かなみて啼なき候ふらん」と申しければ、頼朝聞きこし召し、「それは平家の一類いちるゐにてかやうの善事ぜんじをなしけるにや。吾源氏の正統しやうとうなり。如何いかでかこれを知らざらん」とて、その日の御狩みかりを止め給ふ。そののみならず、末代まつだいまでもこの野に狩かりを止むべし、と朝綱方あそつなへ御判ごはんを下されけり。これ偏ひとへに保昌ほうぢやうの例れいを引かるゝにこそ、と感かんじ申さぬはなかりけり。これも殺生せつしやうを禁じ給ふにや、と人々申し合はれけり。

七 帝釋たいしやくと阿修羅王あしゆわう 戦いくさの事

されば君の御慈悲おひひの深きを以つて、昔を思ふに、天台てんたいの釋しやくに曰く、阿修羅王あしゆわうが軍に、帝釋たいしやく敗け給ひて、須彌山しゆみせんを指して逃にけ上り給ふ。この山峻たけしとは申せども、帝釋たいしやくの眷屬けんそく、恒河沙こうさの如く登のぼらんとす。こゝに金翅鳥こんじてうのかひこ多くして、この戦いくさのために踏み殺されぬ

恒河沙の如く
恒河は
印度の大河

御れう—御
領、頼朝の
こと

和泉式部—
有名なる歌
人、初和泉
守橘道貞に
嫁す由つて
和泉を名と
し後保昌の
妻となる

御れうは青竹おろしの館に入り給ひぬ。更闌け夜靜にして、人靜まりけれども、御酒宴ありけるに、朝綱御氣色にまゐらんとて、とりくの曲どもを申し、御徒然を慰め奉りけり。君御盃を控へさせ給ひける時、「鹿の音微に聞ゆるは何處ぞ」と御尋ありければ、「板鼻のほとり」と申す。君聞し召し、「古の人も、鹿の音近き秋の山越」とこそ詠みしに、夏の野に鹿の鳴くこそ不思議なれ」と仰せ下されければ、朝綱畏つて申しけるは、「さる事の候ふ。昔保昌といひし人、丹後の國に下り給ふ。かの國に朝妻とて日本一の狩座あり。その山の鹿は夕よりも夜に入れば、山には住まで、渚にくだりて數を盡して竝び臥す。その隙に山へ列卒を入れて、夜の中に引き廻し、海には舟を浮べ、曉に及びて廣き濱に追ひ出し、思ひくゝに射とる。海に入るをば櫓權にてうち取らんとす。保昌これを聞き、朝妻に陣を取り、射手を三百人そへ、列卒を山に入れ、明くるを遅しと待ちける所に、夜半ばかりに及び鹿の聲聞えけり。折節和泉式部を召し具したりければ、鹿の音を聞きて、

ことわりやいかでか鹿の鳴かざらんこよひばかりの命と思へば
と詠みたりければ、保昌歌の理にめでて、その日の狩を止め給ふ。心なき鹿の思を憐み

さて君、宇都宮彌三郎を召して、「信濃の御狩とはいへども、下野の那須野に優る狩座はなし。序にかの野を狩らせて御覧せん」と仰せられければ、朝綱承つて、御設の爲に暇申して宇都宮へぞ歸りける。烏帽子子の權守が許をこしらへて、君をいれ奉る。板鼻の宿より宇都宮へ入らせ坐します。かの那須野廣ければ、無勢にては叶ふべからずとて、「面々人を參らせよ」と觸れられければ、仰に従ひて和田左衛門千人まゐらす。畠山も千人、河越小山も千人宛、武田小笠原五百人、澁谷精谷も五百人、土肥岡崎も五百人、松田河村三百人、分々に従ひて、東八箇國の侍ども、思ひ／＼に參らせければ、既に數萬人に及びけり。那須野廣しと申せども、何處に處ありとは見えざりけり。曾我の人々は列卒の者どもにかき紛れ、人目隱に廻りけり。されどもよそ目しけみの草の原、別きて知らるゝ夕風の、誰とも定かに辨へず、青竹おろしの狩場にて、左衛門尉祐經は、二正つれたる牝鹿に目を懸けて、下りざまに落せしを、一目見たりしばかりにて、その日も空しく暮れにけり。無念といふも餘あり。

六 朝妻の狩座の事

此の條伊勢
物語中の贈
答歌を取り
て假作せり

かやうに書きてやりけるが、なほ怪しくて、使の歸るにつきて自らのきて見れば、女の著たりける古晒色次第にうすくなりて、木幡山の奥に入りぬ。いよく怪しくて、つゞきて分け入りみれば、古き墓の中に塚のありけるに、老いたる狐集り居たるが、この文の返事を見て泣き居たり。やゝありて人影のしければ、多かりつる狐ども即ち女になりけり。塚と見えつる處はいみじき家になり、内より若き女出でて「これへ」といひけり。不思議に思ひながら入りぬ。女出であひ様々に款待し、「今宵はこれに」といへば留まりぬ。女の振舞有様露ほども昔に違はず。夜明けぬれば、女「我も故郷に歸りなん」といふ。「故郷とは何處ぞ」と問へば、「和歌浦より玉津島明神の御使なり。御有様知らんとて來れり。今より後も忍びて來るべし」とて、かき消すやうに失にけり。男歸るさに詠めり。

別れをば誰かあはれといはざらんかみもみやるは思ひ知れかし
その後も通りけれども、人には知られざりとなん、伊勢物語の祕事をいふなるをや。

五 那須野の御狩の事

ありとは見えて―新古今集坂上是則、その原や伏屋に生ふるはとき木のありとは見えて逢はぬ君かな

す」とて、上野の國松井田といふ所にて、三百町をぞ賜りける。さて木賊原より伏屋に到るまで、靜に狩りくらし給ひ、誠に聞ゆる名所なり。實にや所の名にし負ふ、木賊原の夕月は、嵐や磨き出すらん。伏屋に近きのきの山、ありとは見えて見えざるは、若しまた雲やかゝるらん。空澄みわたる折柄や、暮るよも惜しくぞ思し召しける。抑夏の野に狐の鳴きたる例にて、昔を思ふに、在五中將業平、姿よからん女をもとめんと思ひしに、伏見の山莊より都へ行きけるが、木幡山の邊にて、よしある女に行き逢ひぬ。とかくいひよりて語ひ具して往によけり。かくて暫し日比經てうち失せぬ。如何なることにかと慕へども叶はずして、思の餘に、かの女の常に住みける處を見ければ。

出でていなば心輕しといひやせん身のありさまを人の知らねばと詠み置きていきけり。如何なる事やらんと思ひて過ぎゆける程に、ある夕暮に古ざれいる著たる女一人來りて、文を前におきぬ。取りて見ればありし女の文なり、いまはとてわすれやすらん玉かづら 俤にのみいとど見えつゝと書ける。男やがて返に

おもふかひなき世なりけりとし月をあだに契りてわれや住ひし

こうくー
鳴聲に更々
の意を懸け
たる歟

々申し合はれける。君も實に御心よけに渡らせ給ひければ、御前伺候の侍ども、御
臆にかゝらんと思はぬ者はなかりけり。されども曾我の人々は、君の御前をも知ら
ず、野干に心をもいれず、その人ばかりをぞ尋ねける。雜人に雜り馬にも乗らざれば、
一日に一度餘所ながら見る日もあり、唯空しくのみぞ日を送りける。さても御狩の人々
は、日の暮るゝをも時の移るをも知らずして狩りけるに、狐啼きて北を指して飛び去り
けり。人々これを止めんとて矢筈を取つて追つ驅けたり。君御覽ぜられ、彼等を召し返
して、「秋の野の狐とこそ云へ、夏の野に狐鳴くこと不思議なり。誰か候ふ。歌よみ候へ」と
仰せ下されければ、祐經承つて、「實に源太が歌には鳴神も愛でて雨晴れ候ひぬ。これに
も歌あらば苦しかるまじ。誰々も」と申されければ、大名小名われもくと案じ詠じ
て見んとすれども、詠む人なかりけり。こゝに武藏の國の住人愛甲三郎、居丈高にな
り、浮べる色見えければ、源太左衛門、「いかさま愛甲が仕りぬと見えて候ふ。はやく」と
と申しければ、やがて、

夜ならばこうくーとこそ鳴くべきにあさまに走るひる狐かな
と申しければ、君聞こし召されて、「神妙に申したり、誠に狐に仰せて吉凶あるべから

四 三原野の御狩の事

花を折り―
美装して

その日は同じ國の三原野を狩らせらるべきにてぞありし。各花ををり出でたちけるも理なり。日本國に名を知らるゝ程の侍参り集ひければ、天下においての晴、何かはこれに勝るべき。既に君御出ありければ、御供の人々は申すに及ばず、見物の貴賤野山も動ぐばかりなり。梶原源太馬駆け廻し、「誰も疎はあるまじけれども、今日の御狩に御前に於て、功名の人は勸賞あるべし、忠節を勵ませとの御説」とて馳せ廻る體の美々しさ、あたりを拂ひてぞ見えし。近年狩らざる野なりければ、鹿數を盡す。老若家を忘れて、我も我もと君の御見参に参る。その日の午の刻に、又空俄に曇り、雷鳴つて雨やうやうこほれ笠を濡す。大將殿景季を召して、「昨日淺間野の雨はさて措きぬ。また三原の雨こそ無念なれば、歌一首」と仰せ下されければ、「源太取りあへず、

きのふこそあさまは降らめ今日はまたみはらしたまへ夕立ちの神

と申しければ、鎌倉殿御感の餘に、碓氷の麓五百餘町の所をぞ賜りける。鳴神もこの歌にやめでたりけん、則ち雨晴れ風止みければ、いよく源太が面目これに若かじとぞ人

しらむ一頁
色を現す

易し。たとひ何十人來るといふとも、まづ一番を斬り伏せよ。二番につゞきてよも入ら
じ。況して三番しらむべし。たとひ乗り越えきり入るとも、裾を薙ぎて薙ぎ伏せよ。構へ
て御分離るゝな。隔てられては叶ふまじ。急ぎて外へは出づべからず。隙間を守りて諸
共に出でて遁れば遁るべし。若又遁れ難なくば、刺し違へては死ぬるとも、雑兵の手に
ばしかゝるな」といひつゝ、側に立てたる太刀取りて、「今や入るか」と待ちかけたり。來
る者共、思はずに靜り返りて音もせず、不思議なり、とて聞く所に、竊に門を敲きけり。
人を出して「誰そ」と問ふ。「和田殿よりの御使なり。晝の喧嘩は危くこそ見えしか、御志
を見るに、思はず袖をこそ絞り候ひつれ。わざと此方へとは申さず候ふ。御用意こそとは
存すれども、國より持たせ候ふ」とて、「樽二つ三つ、糯米添へて」といふ聲を聞けば、義盛
の郎黨にしどろの源七が聲と聞き、急ぎ十郎立ち出でて返事にも及ばず、「畏り入り候ふ。
罷り歸り候はゞ參り申すべし」とて歸しけり。さて酒ども取り散らし、連れたる者ども
にも飲ませ、夜も明けがたになりぬれば、雑人にまじはらんとて、蓑笠藁沓しぱり履
き、夜とともに出でし志、草の蔭なる父精靈も哀とや思ひ給ふらん。心がけこそやさし
けれ。

はその後駒うち寄せ、大方に色代して互に館へ歸りけり。「さても源太が勢はいかに」五郎聞きて、「なに鬼神なりとも、彼が首は危くこそ覺えしか」といふ。十郎聞きて、「身に思だになくばいふに及ばず、心のものにかよりては、如何でかさやうの事あるべき。源太討たん事はいと易し。我等が命も生きがたし。」「さては梶原を討たんとて、心を盡しけるか。向後は心得給ひて身を護ひ、命を全くして心を遂げ給ふべし、返すぐ」といひながら、夜の更くるまでぞ居たりける。

三 和田より雜掌の事

かくて兄弟の人々は、苅谷の宿にありければ、夜半ばかりに數十人が聲して、「正しくこの邊なりつるぞ、此方にめぐれ、彼處を尋ねよ。聲な高くせそ」とて、物の具のおと頻なり。五郎聞きて、「晝の梶原が遺恨にて、徒なる者ども討手におこせりと覺えたり」。十郎聞きて、「靜り候へ。疎忽の沙汰あるべからず。内の體も見苦し。先燈を消せ」とてうち消させ、今やくと待ちかけたり。五郎は太刀おつ取つて、既に館を出でんとす。十郎袖を控へて、「靜り給へ。晝こそあらめ、夜なれば、一方打ち破りて忍ばんこといと

犇き―騷擾
して

冠者―元服
して程もな
き者

通る處に、折節源太左衛門景季三浦の館より歸りけるに、十文字に行き逢ひぬ。この人々は源太と見なし、笠を深く傾け、眦にかけてぞ通りける。源太駒を控へつゝ、「是なる者どもの怪しさよ。止れ」とぞ咎めける。十郎立ち歸り、笠の下より、「和田殿の雜色なり」といふ。「それは何とて忍ぶぞや。名をば何といふぞ」。「藤源次と申す者なり。和田殿の御所へ參られ候ひつる隙を計り、御館の次第を見物仕り候ふ。義盛歸られどきになり候ふ間、急ぎ歸り候ふ」といふ所に、梶原が雜色進み出で、「藤源次は某見知りて候ふ。是はあらぬ者にて候ふ」といひければ、「さればこそ怪しかりつるに、先うち止めよ」とて犇きけり。五郎堪へぬ男にて、太刀取り直し、「あら事々し雜人に目はかくまじ。源太が駒の向隅落き落さんにも堪へじ。落ちん所を刺し殺し、腹切るまで」と呟きて、兄をおし除けかゝりけり。十郎「暫し」と止むる時、折節義盛は御前より歸り給ひしが、源太が聲の高ければ、「何事にや」とて立ち寄りけり。「是は和田殿の御内の者」といふ聲、十郎祐成と聞きなし、よく見れば案にも違はず。兄弟の人々思はぬ姿に身を窺し、思ひ入るたる志、見るに涙ぞこほれける。「あの冠者原は義盛が内の者にて候ふ。奇怪なり罷り退れ」と怒られければ、此人々は死にたき所にてあらざれば、傍にこそ忍ばれけれ。源太

上矢―簾の上にさしたる矢
遠里は云々―攝津に遠里小野といふ名所あれば思ひよそへての筆法

て討つべき様はなかりけり。明くれば信濃と上野の境なる、碓氷の南の坂の下に著き給ふ。その夜も兩國の御家人集りて、辻々を固め知らざる者を咎むれば、寄りて討つべきやうもなし。次の日は碓氷の峠にうち上りて、矢立明神に上矢を進らせ、御狩始わたらせ給ひけり。朝倉山に影深く、露吹き結ぶ風の音、待つばかりとやたはぶらん。まだ立ち残る薄雲の、峰より晴るゝ朝ほらけ、梢まばらの遠里は、小野の里にやつどくらん。所々の高草の、下に聲ある溪の水、岩間々々に傳ひ來て、勢子聲の狩杖音しけく、折から心凄くぞ狩らせ給ひける。野守も驚く許りなり。さる程に晴れたる空俄にかき曇り、鳴神夥しくして、雨かきくれて降りければ、鎌倉殿を始として、皆々とどこほり興を失ひ、花やかなりし姿ども、思の外に引きかへて、千草の蓑、菅の小笠、かはり果てたる村雨に、袂はしをれ裾は濡れ、上下ともに露けき色、不興といふも餘あり。その日は碓氷に歸り給ひて、旅宿の用心あるべし、とて、國々の侍參り集り辻々を固めける。

二 五郎と源太と喧嘩の事

さる程に曾我の人々は、雜人にや紛ると、古き蓑に編笠ふかく引つ被で、太刀脇挟み

そばめ一側
に引きつけ

り。宿々の番の人々うち解け給ふべからず」と、太刀ひきそばめ、館々をいひ廻る。見知りたる人なければ、あはれよきぞと打ち領き、祐經が館へぞ忍び入る。不運の極にや、折ふし新田三郎客人にて、若黨數多立ち隔て、馬見て庭に立ちたりしが、笠のうち怪しと見入れ、立ち退けば、又便宜悪くして、是は御前へ参り候ふ雑色なり。歸りて参らん」といふ様に、足早にこそ出でにけれ。畠山重忠御前より歸られけるに、あうたり。逢ふまじと思ひ、松明の陰へぞ忍びける。雑色燈を振り立て、何者ぞ」と咎めけり。重忠聞きて咎めず、「伴の者ぞ」と宣へば、物をもいはで過ぎにけり。妾許にて見知り給ひつる、と後には思ひ知られけり。重忠この人々の館へ消息あり、「御志ども哀に覚え候ふ。わざと委しくは申さず候ふ。後楯にはなり申すべし。御用意こそ候らめども」とて、糧物少し贈られけり。この人々は返事いひ難くして、唯「畏り存じ候ふ」とばかり言ひて返しけり。隠るゝとはすれども、然るべき人は知りけり。萬餘所目を忍ぶ事なれば、その夜も空しく明けにけり。次の日は大倉小玉の宿々にて、便宜を窺ひけれど、番の人々用心厳しくしければ、その日も討たで暮れにけり。その夜は上野の國松井田の宿に著き給ふ。その夜それにて狙へども、山名里見の人々宿直に参り用心隙なく

に驚かさるる事なしの
下意、君王
聖徳四海靜
平を頌せる
もの

落場——鳥の
下り行く所

々しく候ふべし。斯様の思ひ立つ身は恥をも思ふべからず、榮華名聞は世にありての事にて候ふ。唯簀笠糧料持つ者四五人召し具し、姿をかへて藥杵しほり履きて、弓矢は事々し、太刀許にて難人に交はり、宿々にて便宜を窺ふには如くべからず。曾我には、三浦北條にていつもの如く遊ぶらん、と思し召し候ひなん」と申しければ、「然るべし」とて出でにけり。その日許は馬にぞ乗つたりける。誠に思ひ入つたる姿哀にぞ見えし。鎌倉殿は武藏の國關戸の宿に著かせ給ふ。「旅宿の習、盜人に馬鞍取らるゝな。怪しき者あらば堅く咎むべし」など、用心厳しかりければ、寸の隙もなかりけり。兄弟の人々は、夜もすから目睡む程の枕にもうち寝ねずして、此處や彼處に徘徊して、明しけるこそ無慙なれ。明けよれば入間の久米にて、追鳥狩ぞありける。この人々は列卒の者どもにうち雜り、狩杖振り立てよ、心も起らぬ鳥をたて、落場に目をば懸けずして、若も尋ぬる人もや、と岡の遠見に立ち交り、此處や彼處に狙へども、敵は馬にて馳せ廻り、彼等は徒立なるに、その上弓矢持たざれば、空しく餘所目ばかりにて。その日も暮れて果てにけり。入間川の宿にその夜は著かせ給ふ。國々の人々参りて辻々を固め、厳しかりければ、この人々は夜廻のものにうち紛れ、「御用心候へ。他國より盜賊數多こして候ふな

曾我物語 卷第五

一 淺間の御狩の事

刑鞭云々―
和漢朗詠江
相公の句、
罪人を打つ
鞭を蒲にて
造れるは寛
容を示す也
其さへ用ひ
れば朽ちて
螢に化し去
り臣下の諫
を上る時打
つ鼓も用な
くて苦むし
鳥もその聲

刑鞭蒲朽ちて螢空しく去り、諫鼓苦深うして鳥驚かぬ、御代靜かなるによりて、賴朝は晝夜の遊覽に、月日のゆくを忘れさせ給ひけり。或時梶原を召して、「さしたる事もなきに國々の侍を召すに及ばず、近國の方々あり合はんに従ひて用意あるべし。信濃の國淺間野を狩らせて見ん」と仰せ下されけり。景時承つてこの由を相觸れけり。面々の仕度分々の大事とぞ見えし。曾我五郎聞きて兄に申しけるは、「信濃の淺間を狩らせらるべきにて、近國の侍に觸れられ候ふ。あはれ御供申して便宜を窺ひ候はゞや。斯様の處こそよき隙もありぬべく候へ。思し召し立ち候へ」と申しければ、「如何せん。信濃まで御供仕り候はゞ、吾等がなかに馬の四五疋もありてこそ思ひ立ため」といふ。「左様に思し召し候はゞ、この事一期の間叶ふべからず。恐入つて候へども、惡しき御心得と存じ候ふ。君に仕へ御恩蒙りいみじき身にても候はゞ、馬をも牽かせ、乗換をも具して美

れ。中々御方かやうにあらば、見んとも思ひ寄らじ。生きて妾が孝養に常に見え給へ。吾殿の父討たれ給ひて後は、偏に形見と思ひ、いとほしくも頼もしくも思ふぞとよ。箱王と申せし若者は、不孝にして行方も知らず。吾殿は何を不審して、この程遙に見え給はぬぞ」と口説き給ひけり。後に思ひ合すれば、添ひ果つまじきにて、かやうなりと哀なり。十郎承つて、無慙の子やと御覽ぜんも今幾程と哀にて、「何となく、親しき方に遊び候ふ」とて、扇を取り直し、忍ぶ涙は隙もなし。母また仰せられけるは、「これ程に事々しく親に思はれて何かはせん。せめて五日に一度は、見え給へ」とありければ、十郎涙をおさへて、「承りぬ」とて、罷り立ちにけり。虎をばその夜留め置きけり。

もろゝと—
もろゝとも

とうち詠めて立ちたるところに、十郎三浦より歸りけるが、佇みたる縁の際に駒うち寄せ、廣縁に下り、「如何にや、程遙に見参に入らず、心もとなき」とて、鞭にて簾うち揚げ、立ち入りければ、虎は返事もせずして内に入りぬ。祐成心得ず思ひ、「情は人のためならず、無骨の所へ参りたり。復こそ参らめ」とて、駒ひき寄せ乗らんとす。虎急ぎ立出でて、「さやうに思ひ奉らず。この程かき絶え給へる怨めしさといひ、萬世の中の味氣なくて、涙のこぼるゝ顔の恥しくて」とうち笑ひ、袖さし翳し、「申すべき事の候ふ。暫しや」とて、直垂の袖に取りつきたり。心弱くも祐成は、引かるゝ袖に立ち歸り、「さぞ思すらん。この程は立つ名の餘所にもろゝと疎略はなきを、何となくうち紛れつる本意なさよ」と細々と語り、「今宵は此處に止まりつゝ、枕の上の睦言を夢にもさぞ、と思へども、さして所用の仔細あり。いざさせ給へ」とて誘ひ、乗りたる馬にうち乗せ、曾我の里へぞ歸りける。日比よになしものゝ君を思ふとて、内々母の制し給ふ由聞きければ、幾程あるまじき身の、心苦しく思はれ奉らじ、とて、母が許より北に造りたる家あり、此處に隠しおきぬ。祐成この程遙に母を見奉らず、参りて見まゐらせんとて、杳行隠いまだ脱がざるに、母の方へぞ出でける。祐成を見給ひて、「如何にや遙にこそ覺の

尋常—優美

夏山に—古
今集の歌、
四の句物思
ふ我に

ける。男女の習、旅宿の徒然、一夜の忘れ形見なり。されば虎が心ざま尋常にして、和歌の道に心を寄せ、人丸赤人のあとを尋ね、業平の昔、源氏伊勢物語に情をうつし、春の梢に散りまがふ、霞がぐれの天つ雁、雲居の上に心を残し、秋は月の前に、曇らぬ時雨の夜嵐に、明けゆく雲のうき枕、鹿の音近き野邊ごとに、蟲の聲々もの凄く、哀を催す小田守の、庵さびしき木枯まで、心をやらぬ方はなし。住みも定めぬ世の中の、移り變るも怨めしく、戀のくれとや詐を、頼み顔なるうら情、むかひていふも流石なり。さてまた何時と夕つかた、五月はじめの事なるに、南表の御簾近く立ちいでて、來し方ゆく末の事ども、つく／＼と思ひつらぬるに、誠に男の心ほど、頼み少きものはなし、實に淺からず契りしも、空しかりける妹脊の中、頼みし末も何時しかに、變り果てぬる言の葉かな。さてまた何時の同じ世に、逢ひて怨を語るべき。實にや昔を思ふに、物は遠きを珍しく、年は稀なるを貴しとすと雖も、何とてさのみ疎きやらん、と涙に咽ぶ夕暮に、五月雨の風より晴るゝ雲の絶え間、それとしもなき時鳥、唯一聲に聞き堪へぬ、憂身の上もかくやらん、と古き歌を思ひ出して、

夏山に鳴く時鳥心あらばもの思ふ身に聲な聞かせそ

向顔—對面

ひを呼び出し、十郎に取らせけり。謹んで申しけるは、「仰までも候はず。御計とはゆめゆめ存ぜず。その上身に過り候はねば無念と申すべきにもあらず。さるに取りては苦しく候はぬ」とて、かたかひをば別當の許に捨て置き、曾我の里へぞ歸りける。かの郎黨ども深く勘當しけるとかや。この事を委しく問ひければ、女のわざにてぞありける。されば嫉妬の深き女は、前後を辨へずして家を失ふ。例へば今に初めずといへども、斯程の大事出で來なんと知らで、いひ合せけるぞ實の嫉妬にてぞありける。別當は、しかじたと向顔せざるまで、とて女を離別しける。理とぞ聞えし。さても十郎が爰を遁れけるにて、左傳の詞を思ふに、身に思のある時は、萬恥をすてゝ害を遁れよ、となり。あひ合ふ心なるとかや。

十三 虎を具して曾我へ行きし事

かくて月日を送りけるが、定むる妻持つべからずとて、唯虎が情ばかりに引かれて折々通ひ馴れける。互の志の深き事はふつくんにも劣らず、千代萬代とぞ契りける。抑この者と申すは、母は大磯の長者、父は一年東に流されし伏見大納言實基卿にてぞましまし

長者—遊君
の長

めなり」とて、既に事實に見えけり。始終をも知らず、敵はまた叔母の若黨なり、打ち
ちがへても詮なし。如何にもして遁ればや、と思ひければ、自ら弓を投げ出し、「陳ずる
には似たれども、身におきて事を覺えず。さもあれ僻事ありとも斯様にはあるまじ。靜
まり給へ。別に思ふ仔細ありて降を請ひ申すなり。自然の時思ひ知るべし」といひけれ
ば、伊澤平藏、「仰の如く人の讒言にてもやあるらん。正しくかたかひをば具足して御越
とこそ聞きつるに、さもあらねば改むるに及ばず。其の上御ちんばうの上は重ねて申す
べからず」とて、皆三浦へ歸りけり。十郎は爰にて腹を切り、打ちちがへても慊らずと思
ひけれども、父の爲に供へおきたる命、思はざる事に果すべきか、と思ひ、害を遁れけ
るこそ無慙なれ。別當是を後に傳へ聞きて、涙を流し宣ひけるは、「思ひ忘るゝかと案じ
つるに、未だ心にかけらるゝや。十郎呼べ」とて呼ばせけり。過たず歸り來りぬ。三浦別
當對面して、「扱も是なる者共の、聞き分けたる事もなくて、不思議の振舞仕るとな。全
く某は知らず候ふ。若詐り申さば二所大權現も御照覽候へ。弓矢の冥加立所に絶えなん。
思ひ寄らざる事なり。たとひ面々の過十分にありとも、如何でか斯様の沙汰を致すべき。
それ程の事に迷ふべき身ならず。豫ても知り給ひぬらん、思ひ遣り給へ」とて、かたか

仄聞きて—
薄々聞きて

はげて—矢
を弓の弦に
あてゝ

らんと思ひつゝ、十郎に言ひ合せんとて、急ぎ人を遣して十郎を呼び寄せけり。何時となく行き睦ぶることなれば、叔母は十郎を傍に招き寄せ、「これにかたかひとて召し使ふ女あり、容心様優に品世に超えたり。獨あれば如何なる事もこそと覺束なく覺ゆれば、風の便の音信に待つには音する習なり。何かは苦しかるべき。曾我へ具足し給へかし」と語りければ、親かたのいふ事なり、豫て斯様の事ありとは夢にも知らず、「承りぬ」といふ。叔母やがてかたかひを呼び出して、しかぐと語る。十郎は曾我にさして用の事ありければ、その夜を待つ迄もなく、暮程に歸りけり。この事別當が郎黨ども仄聞きて、かたかひを曾我へ取りて行くぞと心得て、伊澤平藏はかせの源八難波の太郎を先として、宗徒の者ども七八人寄り合ひて、「不思議の事を振舞ひ給ふ祐成かな。是程の事別當に申すまでもあるべからず。いざや行きてかの女奪ひ返さん」。然るべし」とて、馬引き寄せ、打ち乗つて、三浦を打ち出でつづな川の端にて追ひ付きたり。彼等かたて矢をはけて矢筈を取り、餘すまじとて追つ驅けたり。十郎何事とは知らねども、仔細ありと心得て馬より下り立ち、弓とりなほし、「何事にや」と問ふ。この者ども追つ驅け見ればかたかひはなし。されども言ひ懸りたる事なれば、一御振舞然るべからず。尋ねて参らんと

靱一矢を盛
る器
雁股一兩指
を開き種、
たる如き形
の鏃

心安く一
下
思し召せの
語を略す

しるしと存するなり。假令身に過ありとも、一度は御免にや蒙るべき」とぞいひける。五郎は義村が大きな怒りたる氣色を見て、靱より大雁股ぬき出し、矢先を義村にあてて、唯一矢にと思ふ顔、魂さし現れたり。義村五郎が勢を見て、誠に大剛の烏滸の者なり。今勝負しては損なり、後日をこそ、と思ひ鎮めて、何となきじんぎにいひなして静まりぬ。この人々事弱くも見えなば、即ち討ち果すべき體なりしかども、五郎も思ひ切りたる色見えければ、その儘通りにけり。身を軽くして名を重くすれば、十分に死ぬべき害を免るゝとは、かやうの事をいふべきにや。不思議なりし事どもなり。

十二 三浦のかたかひが事

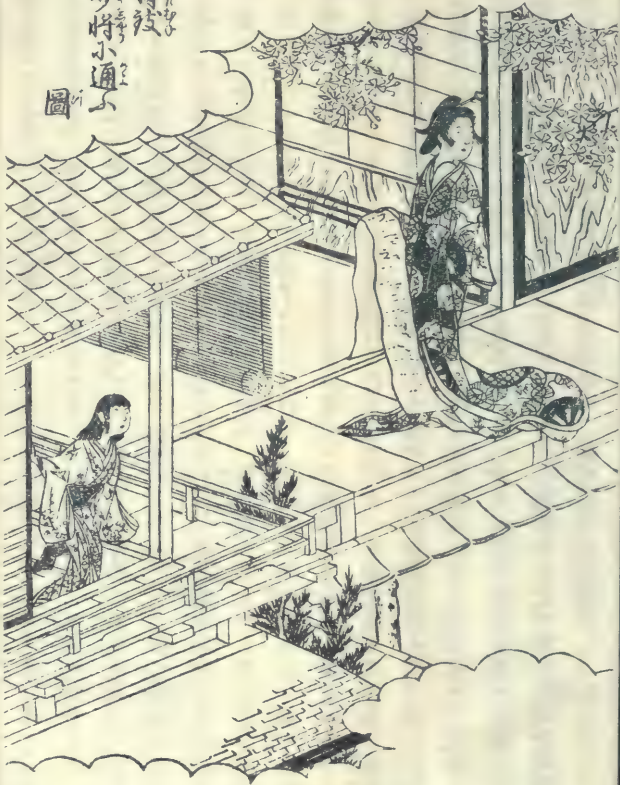
爰にこの人々の叔母聲に、三浦別當といふ者あり。これにかたかひといひて優なる美女を召し使ひけり。別當折々情をかけたらしを、女房安がらずに思ひ、「淵河にも身を沈めん」といひければ、「如何でか彼等體の者に思ひ換へ奉るべき。月待つ程の夕まぐれ、風の便の徒然を慰むにこそ、今より後は思ひ捨つべし。心安く」といひけれども、なほも思ひ止らで、埋火の下に焦るゝ薰物の匂は餘所に現れて、移る心をこのまゝにて事を限

けはくし
く一公に

歸り様―歸
りしな

數を經る程に、父これをば知らずして、平六兵衛に娶すべし、とて請ひけり。忍ぶ事なりければ人知らで、成人の女ひとり置くべきにあらず、とて、三浦へ遣りにけり。女又斯る事ありと言ふべきにあらねば、十郎が方へ忍びて文をやり委しく問ふ。されどもけははしく實の妻とも頼まざりければ、怨の袖萎るゝのみにて、親に計はれて、力及ばずして義村が方へ行きにけり。されども志の深ければ、或時義村が在京の際に、忍びて十郎が許へ文を遣しけり。従妹の文なりければ、祐成見て苦しからずと思ひけれども、留守の間は然るべからずとて返事もせざりけり。人の口の善惡なさは、義村に知らせたり。不思議に思ひ内々尋ね聞かばやと思ふ程に、京都の御用過ぎて鎌倉へ参りけるに、曾我の人々は三浦より歸り様に腰越にて行き遇ひけり。兄弟の人々は三浦の殿原とは知らで、馬鞍見苦しと思ひければ、傍へ駒うち寄せ、人々を通さんとす。平六兵衛は曾我十郎と見て、日比の便宜を喜び、郎黨二三騎あるを遙のあとに残しおき、宗徒の者六七人相具して、この人々の隠れるたる舟の陰におし寄せ、「實や御分は義村が在京の間に聞く事あり」と、苦々しくいひかけたり。されども十郎事ともせず嘲笑ひ、「如何様人の讒言と覺え候ふ。よくく尋ね聞こし召し候へ。斯様の次第見参に入り直に承り、所縁の

時致
少將小通
圖





便宜を狙はん爲にこそ、年來これへもつれ通ひ、砥上が原こそよき原なれ。いざや追ひ付き矢一つ射ん」とて、弓押し張り矢かき負ひ、馬にうち乗り追ひ付き見れば、江間の小四郎うちつれて、五十騎ばかりにてうち圍み歩ませければ、左右なく二騎かけ入りて討たん事も叶ふまじ。一期の大事にてありければ、仕損じ笑はれんより、唯何となく通らんと思ふは如何に」といふ。時致も斯うこそとて、打ち連れて通りけり。「是より歸らば人も怪しと思ふべし。序に三浦へ通り候へ」とて、遙に引き下りて歩ませゆく程に、彼は鎌倉へ往きぬ。兄弟は三浦へこそ往きにけれ。

十一 平六兵衛が喧嘩の事

ことに十郎が身にあてゝ思はぬ不思議ぞ出できける。故を如何にとたづぬるに、三浦の平六兵衛が妻女は、相澤の土肥彌太郎が女なり。この人々とは従兄弟なり。幼少より叔母に養ぜられて伊東にありける程に、十郎と一所に育ちけり。やうく成人する程に、十郎彼に忍びて情を懸けたりける。互の志深ければ、家にも取り据ゑ、まことの妻にも定むべかりしを、敵を討たんと思ひける間、家を忘れて只女の許へぞ通ひける。かくて日

請ひけり
叔母の許
り引取れり

夫の僻事云々―夫の罪科に連座すまじと也

楊妃たうの
醫―楊貴妃
が唐の帝を
魅せし醫の
意歟

も、この爲にかやうになりぬれば、定めたる妻持つべからず。遊者などには夫の僻事か
かるまではあらじ。されば手越、黄瀬川の邊にて、さりぬべき遊君あらば、遊び馴れて通
ひ給へ。しかも道の邊なり。敵を窺ふべき便も然るべし」と申しければ、「さ承り候ふ。さ
りながら執心後世のため然るべからず。一日も命あらん限は、心靜かに念佛申して後世
を願ふべし。吾等が命あるかなきかの如し。今あればあるがやうなり。只今も便宜よく
ば打ち出でなん。阿彌陀佛」と申して過ぎ行きける、心のうちこそ無慙なれ。

十 大磯の虎思ひ染むる事

されば執著身を離れず、をんせい盡きずして、大磯の長者の女虎といひて十七歳になり
ける遊君を、祐成年比思ひ染めて、竊に三年ぞ通ひける。これや古き言葉に、寫し得た
り楊妃たうの醫をなし、表せり人民仰ぎたる屑を、なんと思ひ出して、折々情を残しける。
五郎も陰の如く時の間も離れずして、もろ共に通ひけり。これも唯敵を若しや、と便宜
を狙はんとぞ見えし。志のほど無慙といふも餘あり。或時敵左衛門尉伊豆より鎌倉へ参
りける折節、曾我兄弟大磯にありけるが、五郎見つけて十郎に告けたりけるは、「斯様の

不覺—不心
得

一さう—一
掃歟

ひす—必ず
か

らめども、人々の祖父こそあらめ。さのみ末々まで絶さんこと不便なり、と思し召され、君より御尋ありて、先祖の所領を安堵するか、然らずば別の御恩を蒙り候はど、各迄も面目にて候ふべし、と申して立ちつるぞ。其も殿原を思ひてこそ言ひつらめ。努々憤り給ふべからず、理を枉げて思ひ止り給へ」と宣ひければ、十郎、「承りぬ。但此事は何となき戯に申しつるを、實し顔に申されつらん不覺さよ。且は御推量も候へ。當時我等が姿にて思も寄らぬ事」とて立ちければ、五郎も足拔して立ちけるが、十郎に申しけるは、「さればこそ申しつれ。小次郎を失ふべかりつるものを、助け置きて斯る大事を漏されぬこそ安からね。心に懸らん事をば逡巡ひ候はず、一さうにすべきものを。憐み胸を焼くとはかゝる事をや申すべき。今はかなはじ。吾等が所爲と思はめ」とて息つき居たり。「さてもこの事思ひ止るべきやうに、妻子持ちて安堵せよ、と仰せられつるこそ、耳に留りて候へ。寒き者は珠玉をも貪らで暖寒を思ひ、飢ゑたる者は千金をも顧みずして、一食をひす。身に思のあれば萬事を顧みずして、所領所帯も望なし。思ふ事こそ忙しく存すれ。男の心止るものは妻子に過ぎずと雖も、吾等が討死の後、遺り留りて山野に交らんも不便なり。また男女の習若き子一人もいできたならば如何せん。我法師になるべき身なれど

思はしき者
―心に叶ふ
女

の大事をば如何し給ふべき。妾が生きたらん程は、眼を塞ぎ恥をも餘所にしてましませ。心憂きめを見せ給ふな殿原。今迄ありつけざるこそ心に懸り候へども、何事も思ふ様にあらねばぞとよ。妾が身にては憚あれども、男は思はしき者にだに逢へば、さやうの詮なき心は失するぞや。あはれ父だにましますば、妾に心は盡させじ。如何なる人の聲にもなり、思ひ止まりて念佛をも申し、父にも回向し、妾をも助けよ。論語に曰く、極めて衰ふる時は、必ず復盛なる時あり、と申すに、などや方々のさのみ申す事の叶はざらん悲しさよ。箱王は如何に男にならんといふとも、御邊の止めんに左右なく男にはなるべからず。あはれ實にかなはぬ事なれども、妾死して父だに生きてましますば、如何なる不思議を思ひ立つとも、父の命をば背かじ。二宮の女如何なる事を思ひ立つとも、妾がうち口説きいはんに、などかは聞かで候ふべき。男子のために母親は何にも立たず」とて、さめざめと泣き給ふぞ哀なる。十郎流るゝ涙を直垂の袖にておし止めつしんでぞ居たりける。稍ありて母宣ひけるは、「この事を小次郎大きに驚き制させんとて聞かせたるぞ。さればとて小次郎を怨み給ふな。人に知らすなとて自らが口を固めつるぞ。それ程の大事を左右なく語り申すは、この殿ばら歸り聞きては悪様に思ひ候はんす

つしんで―
謹んでか

うたてさよ
—嘆かはし
きかな

自然の事—
もしもの事

よれ。世にあらんと思はど、恥を忍びて益を蒙れとこそは申せ。實にや河津殿の討たれし時、妾思に堪へかねて云ひし事を聞き保ち給ふか。一旦はさこそ思ひしか、狩場へうち出で給ふに、四五百騎の中に優れて見えしが、歸りざまに引き換へたりし悲しさに、火にも水にも沈まんと思ひしに、五つや三つになりしを、左右の膝に据ゑて、汝二十にならざるさきに、親の讎を討ちて見せよ、と妾いひし時、箱王は聞きも知らず、吾殿云ひつるは、早く大人しくなりて父の讎の首を何時か斬らん、といひしこそ、多くの人をば泣かせしか。それを忘れずして、母がいひし事なればとて、斯様に思ひ立ち給ふかや、うたてさよ。返すくも止まり給へ。此の比は昔の世にも似ず、平家の世には伊豆、駿河にて敵討ちたる人も、武藏、相模、安房、上總へも越えぬれば、日數積り年隔りぬれば、さてのみこそあれ。當代には聊も悪事をする者は、蝦夷が島へ渡りてもその科遁れず。また親しき者迄もその科遁れ難し。女とても所にもおかれず。幼けれども助る事なし。斯様にさしも厳しき世の中に、いかで悪事を思ひ立ち給ふぞ。汝等、十一九つになりし時、祖父伊東の御末とて召し出し、既に斬らるべかりしを、畠山殿自然の事あらば、かより申すべし、とて預り申し、命どもを助けられしぞかし。數ならぬ妾が事はさて措きぬ。重忠

時は妄に無功を賞し、怒る時は濫に無罪を殺す。これは大きな誤なり。佛も深く誠め給ふ。心得べし」といひければ、五郎聞き、「これは無罪を殺すにては候はず。かゝる不覺人、有罪とも無罪とも言葉に立たざる奴をば、急ぎ暇をくれ候ふべきにて候ふ」と申しければ、「如何でか他人にかくとは云ふべき。是も唯我等を世にあれと思ひてこそ云ひつらめ。さらば口を堅めん」とて追ひ付き、「只今申しつる事は戯事なり。眞し顔に人に語り給ふな。若し聞ゆるものならば、偏に御邊の所爲と存じ、永く怨み奉るべし。返す返す」といひければ、「承る」とて去りにけり。この約束ありながら、小次郎思ひけるは、餘所へ洩らさばこそ惡しからめ。母に見參して此の事を委しく語るに、母聞きもあへず十郎を呼びければ、五郎さきに心得て、「この事と覺えたり。時致も身を隠し御供して聞き候はん」とて、十郎と打ち連れて母の所へ來り物越に聞けば、母女房たちを遠のけて、泣く泣く宣ひけるは、「實か、吾殿ばらは、さばかり恐しき世の中に謀叛起さんと宣ふなるか。妾や二宮の姉をば何となれと思ひて、斯る惡事をば思ひ立ち給ふぞ。死したる親のみにて生きたる妾は親ならずや。箱王が男になるも、吾殿が嫌し出してこそ男にはなしつらめ。吾殿無用の事企てつるもの哉。恥は家の疾にて末代まで失せずと雖も、事にこそ

司諸國の訴
訟を裁斷す
る役所

所知—知行
所

を以つて人に勝つものは榮え、力を以つて人に勝つものは遂に亡ぶと見えたり。その上、さばかり果報めでたき左衛門尉を、各の力にて討ち給はん事叶ふまじ。止り給へ」と言ひすてよぞ立ちにける。兄弟の人々は、大事をばいひ聞かせ、言葉にもかけず座敷を蹴立てられぬ、呆果てよぞ居たりける。稍ありて五郎申しけるは、「さればこそ今はよき事あらじ。日本一の不覺人にてありけるもの。所知莊園の敵ならばこそ、訴訟をもいたさめ。不思議の事をいひつるものかな。金を試みるは火なり、人を試みるは酒なり。かの者は酒をだに飲みぬれば、何事がないはんと思ふ者なり。それ大海の邊の猩々は、酒に著して血を絞られ、蒼海の底の犀は、酒を好みて角を切らるゝなり。斯様の理を知りながら、云ひつる事こそ口惜しけれ。一定母や二宮太郎にいひつる事と覺えたり、それならば曾我殿に語りなん。さあらば母も知り給ふべし。彼是以つて祐經に知られて、却て狙はれん事疑なし。かゝる大事こそ候はね。第一上に聞こし召されては、死罪流罪にも行はれ、身を徒にせん事の無念さよ。いざや此の事洩れぬ先に、小次郎が細頸うち落し、九萬八千の軍神の血祭にせん。我等が爲たるとは誰か知るべき」といひければ、十郎聞きて、「さればとて斯程の大事いかでか洩すべき。罪の疑をば輕くし、功の疑をば重くせよ。喜ぶ

いほく—江
北か

別の事なり。いかでか左右なく大事を仰せ出されん。治りがたく覺え候ふ、御思案には過ぐべからず候ふ。若し聞き入れずば、悪き事や出できなん。橘はいほくに生じて根穀となり、水土の異ればなり。隔のあれば、兄弟なり共心をおくべきものをや」といひければ、十郎聞きて、「さり共、其の義はあらじ。男といはるゝ程の者、一定他人なり共、打ち頼まんに聞かざる事やあらん。況して一腹の兄弟にて、いかで同心せざるべき」とて、小次郎を呼びていふ様、「豫ても大方知り給ひぬらん。此の事を思ひ立ちて候ふ。されば、一期の大事此なれば、唯二人して遂げ難し。三人寄り合ふものならば、易かるべし」といひければ、小次郎聞きて大きに騒ぎ、「此事如何思ひ給ふ。當代左様になりては、親の敵其の數ありと雖も、勝負を決する事なし。唯上意を重くして、肩を並べ膝を組む次第なれば、是を恥ともいはずして、所領を持つ折節なり。當時左様の事する者は、剛の者とはいはで、痴者とこそ申せ。誠に敵を眼前におきて見給ふ事の淺ましくば、京都に上り、如何にもして本所の末座にも列りて、院内の御見参に入り、冥加あらば御氣色を窺ひ、院宣令旨を申し下し、鎌倉殿につけ奉り、敵を本所に召し上せ、記録所にて問答し、敵を負かし、所領を心に任すべし。朝敵となりては叶ふべからず。古人の言葉にも、徳

本所—本家
ともいふ莊
園の本主
記録所—諸

生の事にてはあらじ。いざや何方へも行きて慰み候はん」とて、うち連れてぞ出でにける。遊ぶ所は、三浦介義澄は叔母おははなり、土肥次郎が嫡子ちやくしの彌太郎も叔母おははなり、平六兵衛は従姉妹いそこへい、北條殿は烏帽子親えぼしおや、二宮太郎は姉あねなれば、彼等が許に通ひつゝ、二三日四五日づつぞ遊びける。たま／＼曾我に歸りても、五郎は不孝の身なれば、十郎が許に隠れ居て、母の戀しき折々は、物の隙より見奉れども、わが身は見えじと隠れける。されば「人界に生るとはいへども、白駒の隙を過ぐるに似たり。老少不定の習なれば、彼も我も後れ先だつ慣、空しかるべきこそ無念なれ。時致も法師になるべき身の、男になりて母の勘當を蒙るもこの故なり。いかにも疾く急ぎ給へ」と申しければ、「祐成もさぞと思ひ候へ。さりながら今一人も語ふべし」とぞ申しける。

九 小次郎語ひ得ざる事

こゝに京の小次郎とて一腹の兄弟あり。かれは河津殿より先に、京の人に相馴れて設け給ふ子なり。「彼を呼び寄せて語はん」といひければ、五郎聞きて、「御計こそ大事にて候へ。一腹一姓の兄ならば、如何に臆病に候ふとも、罪科遁れ難くて、同意すべし。彼は

良藥は云々
―説苑に見
ゆ孔子家
語、史記留
侯世家等に
は良藥を毒
藥に作る

れしかば、捨てんとせしを、叔父伊東の九郎養育せしかば、それも平家へ参り給ひて後は、思ひかけざる武藏守義信とりて養育して、今は越後のくがみといふ山寺にありと聞けども、父をも見ず母にも親まねば、思ひ出して一遍の念佛を申す事もあらじ。それは唯他人のごとし。かの子をこそ法師になして、父の孝養をもさせんと思ひしに、かやうになり行く事の悲しさよ。而も忘るゝ事はなけれども、心ならず忍びてこそ過せ。今は誰にか後の世をも弔るべき。あはれ斯る憂き身の生をかふる慣、昔よりなどやなかるらん。それ良藥は口に苦くして而も病に利あり、忠言は耳に逆ひて而も行を利せり、と申す言葉のあるなるに、よく／＼案じても見給へ」と泣く／＼口説きければ、五郎物越に聞きて泣き居たりけるが、兄の方に歸りて申しけるは、「只今の母の仰せられし事ども、一々にその謂ありと覺え候ふ。死し給へる父を悲みて孝養を致さんとすれば、生きてまします母の不興を蒙ること、これ誠に不幸の至なり。身の罪の程こそ思ひ知られて候へ。遍く人の知らざる先に、髪を切り候はん」と申しければ、十郎いひけるは、「母の勘當は豫てよき思ひ設けし事なり。さればとて昨日男になりて、今日また入道するに及ばず。人こそ數多知らずとも、まづ北條殿の思はれん事も輕々しく、且は物狂しきにも似たり。死



一萬九千
武藏
之國



假初にも一
一寸とも
けなだらか
に一毛を美
しく

右なく内へも入らざりけり。母待ちかねて、急ぎ見んとて障子を開けよれば、男になり
てぞ居たりける。母思の外にて、二目とも見ず障子を引きたて、「これは夢かや現かや。
心憂や、今より後子とも思ふべからず、見もせず、音にも聞かざらん。何方へも迷ひ行
け。假初にも見ゆべからず。何のいみじさに男にはなりたるぞや。十郎が有様を羨しく
思ふか。一疋持ちたる馬をだに、けなだらかに飼はず、一人具したる下人にだに、四季
折々に扶持をもせず、明け暮れ見苦しけにて、目も當てられず。世にある人々の子共を
見る時は、誰にか劣るべき、と思ふにも、涙の隙はなきぞとよ。思ひ知らずして物に狂ふ
か怨めしや。法師になりぬれば、上臈も下臈も乞食頭陀をしても恥ならず。又下臈なれ
ども智慧才覺あれば、法師に謗なし。十郎だにも男になしと事の悔しくて、入道せよか
し、と思ひたる所に、口惜の有様や。善を見ては喜び、惡を見ては驚け、とこそいへ。
あはれ河津殿程罪深き人はなし。後世弔ふべき人は御敵とて亡び果てぬ。たま／＼持ち
たる子どもさへ、孝養すべき者一人もなし。まことに末の絶えなば、現の本領をよそに
見んも悲しくて、若しやと思ふ頼に、兄は男になしたれども、親の後をこそ繼がざら
め、名をさへかへて曾我十郎なんどといはるゝも口惜し。一人の子は、父死して後生

白覆輪―銀
にて縁とり
たるもの

放し申すべきにあらず。然れば餘所^{よそ}にてもあらば無念^{むねん}なるべし。尤も本望^{もつぞ ほんまう}なり、時政が子と申さん」とて、髪^{かみ}を取り上げて烏帽子^{くわぼし}を著^きせ、曾我の五郎時致^{ごろうときぢ}と名乗^ならせて、鹿毛^{かけ}なる馬の五さう逞^{たくま}しきに、白覆輪^{しろふくりん}の鞍^{くら}おかせ、黒糸^{くろいそ}の腹巻^{はらまき}一領^{りやうぞ}添^そへて引かれけり。「常に越えて遊び給へ」。「定めて母の心には違^{ちが}ひ給ふべし」と色代^{しきだい}して歸りけり。

八 母の勘當かうぶる事

さても箱根^{はこね}の別當^{べつたう}は、箱王^{はこわう}が曾我へ下りし事をば知らで明^あけよれば、授戒^{じゆかい}の用意^{ようい}とて、箱王^{はこわう}を尋ねけるに、閨^ねの枕^{まくら}、衾^{ふすま}もかはらで、主^{ぬし}は見えざりければ、急^{いそ}ぎ曾我へ人を下し尋ねけれども、「これにもなし」と答^{こた}へければ、別當^{べつたう}大^{おほ}きに騒^{さわ}ぎ、方々^{はうはう}を尋ね給ふぞ愚^{おろか}なる。その後、十郎は五郎とうち連^つれて、曾我へ歸り來りぬ。内の者^{うち}ども見て、「箱王^{はこわう}殿^{どの}を男^{をとこ}になし、十郎殿^{じゆらう}の連^つれだち參^{まゐ}らせてましゝたり」といひければ、母聞^{おとこ}きて、「別當^{べつたう}の物騒^{ものさわ}しく尋ね給ひけるぞや。十郎昨日^{きのふ}より見えざるといひつるが、弟^{おとこ}が法師^{はふし}になるを見んとて箱根^{はこね}へ上りけるかや。稚兒^{ちご}にてよりも悪^{わる}きやらん」。男^{をとこ}になりたるといふを、法師^{はふし}になりたると聞きまがひ、何時^{いつ}もの處へ出で、これへ」と宣^{のたま}へども、身の科^{さが}により、五郎は左



菊王丸
小條鉈す
え服之圖



越えて一行
きて
色代―挨拶
ふよう―不
益、やくざ
もの

り給ひける」といひければ、箱王はこわう申しけるは、「母や師匠ししやうの御心に違はん事、如何いかすべきなれども、何方いづかたの御事も一旦いつたんの事と覺えたり」といひければ、十郎聞きて、「その科せがをば祐成すけなりに任せよ。如何いかにも申し許すべし」。夜も明けよれば、「いざや」とて、馬に乗り、ただ二騎ふたき曾我を出でて、北條へこそ行きにけれ。

七 箱王はこわうが元服げんぶくの事

かくて兄弟の人々は、さきくも常つねに越えて遊ぶ所なりければ、時政ときざん見参して、「いかに珍めづしや」と色代しきだいしければ、十郎しやく笏しやくとりなほし申しけるは、「弟にて候ふ童を、母が箱根はこねへ上のせて法師ほうしになさんと仕り候へば、世にふようにて、學問がくもんの名字みやうじをも聞かず、剩あまつぎへ鹿しかとり喰くはで叶かなはじと申し候ふ間、堅固けんこの徒者いたづらもの、教をしへに順したがはざらん弟子でしをば、早く父母に返かへすべき、といふ言葉ことばにつき、里へ追ひ下さるゝ折をりを得て、男をとこにならんと仕り候ふを、母にて候ふ者、曾我太郎など頻しきりに制せいし候ふ間、親したしき三浦みうらの人々伊東の方ほりさまにてと存ぞんじ候へども、御前おんまへにてと存ぞんじ、相具あひぐして参りて候ふ。假令たとひ道の邊はなにて、頭かしらを切りて候ふとも、御前おんまへにて申し候はゞ、その身の勘當かんだうは候ふまじ」と申しければ、「誠に面々めんめんの御事見

—きつぱり

無量劫—劫
は時頭陀—梵語
行脚

候へかし。既に明けなば事定まるべし。うち延びて道のくべきにあらず。よくぞ参り候ひけるものかな。御左右を待ち参らせなば、空しく髪剃られなん。それにつきては一年、鎌倉殿箱根御参詣の時、祐經御供せしを見初しより、少しも忘るゝ隙もなし。假令法師になり候ふとも、この悪念は晴れ候ふまじ。一念無量劫となる事、今に始めざる事にて候へば、思ひ煩ひて罷り下りて候ふ。定めて御上り候はんと思ひ候ひしかども、その義も候はず。申し合せてこそ、ともかくにもなり候はめ。若し又思し召し捨てさせ給はば、この序に上洛して、わが山にて髪剃り落し、肌を墨に染め隠し、足に委せて頭陀乞食して、一期の程親の後世懇に弔ひ奉るべし。また男になり、御豫の御事叶はぬまでも仕るべきか。はや／＼是非の返事を承り切るべし。身の浮沈今に候ふなり。怒に罷り下りて、歸参せんも見苦し。あとに如何ばかり騒ぎ候はん。夜も更け行き候ふ」と責めければ、やゝあつて、「祐成が心を見んとて斯様に宣ふか。烏帽子を著せん事をこそ案ずれ。何しに思案に及ぶべき」といふ。箱王聞きて、「さ程思し召し定むる事、などや豫てより承り候はぬや。某罷り下り候はずは、御左右あるまじきにや」といひければ、十郎聞きて、「これ別當も知り給はぬ事あらじ。夜明けて上らんと存じ候ひしに、嬉しくも下

受戒一僧に
なること

垂髪にて云
々―童姿に
ては装束も
美しきを要
すと也

きようて―
京出か

きはぐと

さる程に歲月過ぎ行きければ、十七にぞなりにける。或時別當箱王を近づけて、「御分は
はや十七になり給へば、上洛し、受戒をし給ふべきなれば、垂髪にて上り給はゞ、物々
しくきようで叶ふまじ。それ又大事なり。これにて髪をおろして上るべし」と宣ひけれ
ば、身に思のあるものを、と思ひながら、「御計」とぞ申されける。さらばとて大衆に觸
れ、出家の用意ある。母の方へもいひ下しけり。既に明日と定まりければ、箱王つくづ
くと思ひけるは、法師になりたりとも、折節につけてこの事思ひ思はゞ罪深かるべし。
一向に思ひ切り、男になりて本意を遂ぐべし。その砌には後悔するとも叶ふまじ。この
事を十郎殿といひ合せて、ともかくにも定めて、と案じ、人にも知らせずして、唯一
人夜に紛れて曾我の里へぞ下りける。山月東に前途を指して、而も思を勞す。邊雲秋冷
しくして、後會を同じくして、而も魂を消すといふ、藤原のとくほが饒別の詩、今更
思ひ出でられて、曾我の里にぞ著きにける。十郎が乳母の家に立ち入りて、十郎を呼び
出して對面しければ、「如何にしてましますや。明日は一定出家のよし聞きつる間、上り
て見奉らんと存する所に、下り給ふことの嬉しさよ」といひければ、箱王聞きて、「のび
のびの御心なるべしと思ひつるに、少しも違はず、かやうの事ははぐと豫てより御定め

と覺え候ふ。何かは苦しく候べき。一眼見えさせ給ひて、彼が念をも晴らさせ給へかし」と申したりければ、君王聞し召し、「さらば」とて、端近く出でさせ給ひて、釜の邊に近づき給ふ。その時眉間尺が首、口に含みおきし劔の先を王に吹きかけければ、即ち大王に飛びつき首をうち落す。伯仲走り寄り、大王の頭を取り、眉間尺が煮らるゝ釜のうちへ投げ入れたり。王の首も勢劣らず、眉間尺が首と喰ひあひけり。その時伯仲山にて約束せし事なれば、「われも大王に野心深し、この爲ぞかし」といひも果てず、わが首をかき斬り、釜の中へ投げ入れたり。この三つの首釜の中にて一日一夜ぞ喰ひあひける。遂に王の首負けにけり。その後二つの首も威勢衰へにけり。執心の程ぞ恐しき。さてこの三つの首を三つの塚につきこめて、三王の三塚とて今にありとぞ傳へける。今の箱王も未幼きものなれども、親の敵に心をかけ、晝夜忘れぬ志、これにも劣らじとぞ見えける。これや文選の言に、流長じては則ち盡き難く、願深くしては則ち朽ち難し、と見えたり。さればこの人々の成長の末、さこそといはぬはなかりけり。

六 箱王曾我へ下りし事

君王の夢に、眉の間一尺ある者來りわれを殺すべし。その名を眉間尺といふ、と見えた
り。王この夢に恐れて、「斯様の者あらば搦めて參らせよ」と、國々に宣旨を下さる。勳功
はこうによるべしとぞ聞えし。爰に伯仲といふ者眉間尺が許に行き、「汝が首多くの功に
仰せ觸れられたり。然るに汝がために君王は正しき親の敵ぞかし。さぞ討ちたく思ふら
ん。わが爲にも亦重き敵なり。己が首を斬りてわれに貸せ。件の劔ともに持ちて行き、
大王に近づき討たんこと易かるべし。されば御分が首を借りて本意を遂ぐるに於ては、
我とても遅速の命、王のために失ひなん」と申しければ、眉間尺聞きて、「父の敵討たんに
おきては、わが命なにか惜しかるべき。構へて」といひて、自ら首をかき落して出しけり。
されども件の劔のさきを喰ひ切りて、口に含み持ちけり。伯仲は劔にとり添へ、王宮に
捧ぐ、大臣に見せられければ、「夢に違はず、眉の間一尺ある首、また劔もわが持ちたる
劔に露も違はず」とて、君王喜び給ふこと限なし。されどもこの首の勢未だ盡きず
眼を見開きたり。大王いよく恐れ給ひて、「さらば釜に入れて煮よ」とて、大きな釜に
この首を入れて、三七日ぞ煮たりける。然れどもなほ眼を塞がず、嘲笑ひてありければ、
その時伯仲申すやう、「これは大王の御敵なれば、帝を見奉らんとこの執心により、勢残る

あらたなる
—靈ある

勘文—考文

莫耶—干將
莫耶の夫婦
吳王闔閭の
爲に二名劍
を鑄し由吳
越春秋に見
えたるを取
りて潤色せ
り

生れ給はず。大王不思議に思し召し、博士を召し御尋ねありければ、「眞に君の御寶なり。但し人にてはあるべからず」と申す。「何者なるべき」と心許なくて待ち給ふ所に、博士の申す如く、人にはあらで、鐵の丸を二つ生み給ひけり。大王これを取りて莫耶を召し、劍に作らせ給ひければ、光世に超え驗あらたなる名劍にてありけり。大王賞玩し、晝夜御身を離し給ふことなし。然るにこの劍常に汗をぞかきける。不思議なりとてまた博士を召し占はせ給ふ。勘文にて申し上げけるは、「過ぎにし金は雌劍雄劍とて劍二つ作りしが、これ夫婦なり。雄劍ばかり參らせて雌劍を隠す故に、妻を戀ひて汗をかき候ふ。是を召して添へて置かるべし」と奏聞申しければ、即ちその鍛冶を召されけり。鍛冶家を出づるとて妻女にあひて申しけるは、「わが隠し置きたる劍を尋ね給ふべきにぞ召さるらん。取り出すまじければ、定めて責め殺されなん。彼の劍は南山のそこもとに埋みおきたり。わが三歳の男子成人の後、掘り出して取らせよ」といひおきて、王宮へ參りぬ。案の如く今一つの劍の行方を尋ね給ふ。知らざる由陳じ申しければ、拷問の後終に責め殺されにけり。さて鍛冶の子二十一歳にして、母の教に従ひ、かの劍を掘り出して持ちけり。されども王威を恐れて、里へは出でず、山に隠れ居たりけるが、ある時

てんの眼―
貂の眼、光
る諭
鰭板―端板
とも書く内
の見苦しき
を隠す爲の
もの

板の陰に郎黨ども立ち圍み、前後左右にありければ、それも叶はず。曉に及ぶ迄心を盡し狙へども、少しの隙なければ、徒に夜を明す心の中ぞ無慙なる。次の日は君御下向の船に召され、蒼海を渡り給ふ。箱王は船津まで人目隠に交りて、敵の後を見送れば、侍ども思ひくゝの館船にて御供申す。箱王は左衛門が船のうちのみ見送りて、泣くより外の事ぞなき。かの松浦佐世姫が雲井の船を見送りて、石となりけん昔を思ひやられて、空しく坊に歸りけり。其の後いよくこの事のみ心にかよりて、一字も忘れじと思ふ經文をもうち捨て、晝夜權現に參り、「今度こそ空しく候ふとも、遂には我が手にかけて給へ」と祈り申すぞ哀なる。

五 眉間尺が事

されば箱王が親の敵を深く思ひ入りたるにつけて昔を思ふに、ある大國に楚莊王といふ大王あり。后數多もち給ふ中に、とうよう夫人と申す后、御身常々熱りければ、鐵の柱にむつれつゝ、御身を冷し給ひけるが、程なく懷妊し給ひけり。大王聞き給ひて、位を讓るべき王子もなかりつるに、誕生なり給はん事よ、と喜び給ひけれども、三年まで

率爾—俄な
る

藁をなす—
屋瓦を連れ
たるやうに
並ぶこと

られよ。叶へて奉るべし。吾殿の兄にも斯様に申すと傳へ給へ。父にも添はでいかに便なくましますらん。行騰乗馬などの用の時は承るべし。身貧にして他人に交らんよりは、親しければ常に訪ひ給へ。實や古き言葉に、貴きは賤きが嫉み、智者をば愚人が悪む。さいじよは千歳に足らず、報は千劫に足らず、と申し傳へたり。扱も見參の始に折節引出物こそなけれ、また空しからも無念なれ。これを」とて、懷より赤木の柄に胴金入れたる刀一腰取り出し、箱王にこそ取らせけれ。何となく請け取れども、箱王は涙に咽びけり。便宜よくば一刀刺さんと思へども、眼を放さず、その上太の男の常に刀に手を置きければ、怒なる事を仕出して、小脇とられて人に笑はれじ、と思ひ止まりぬ。唯いふ事としては「さん候ふ」と許なり。「率爾の見參こそ所存の外なれ、さりながら喜び入り存じ候ふ。里下の序には、吾殿の兄十郎殿とうち連れて來り候へ。返すく」といひて立ちにけり。箱王力及ばず止りぬ。日暮れければ「若や」と便宜を窺ひけれども、宵の程は御前に祇候し居れば、夜更けて罷り出づる所を窺ひけれども、庭上に兵藁をなす、火はてんの眼のやうなれば、却りて我が身を隠さんと立ち忍ぶ事なれば、人までの事は思ひも寄らず、左衛門尉が宿坊と、御前との間なる石橋の邊に徘徊し待ちけれども、緒

長絹―絹布
の一種

男になる―
元服する

方人―味方

れば、左右なく寄りざりけり。祐經猶よく見れば、眼の見返し、顔魂すこしも違ふ所なし。祐經は念誦果てゝの後、大衆の中へ立ち入つて、「伊東入道が孫この御山に候ふと聞く。何處の坊に候ふぞや。名をば何と申し候ふぞ」と問ひければ、或僧申す様、御名をば箱王殿と申して、別當の坊にまし候ふ。「此の比は里に候ふか、これに候ふか」と問ひければ、「是にこそ」とて東西を見廻らし、「長絹の直垂に松に藤を縫うて、黄の糸にて菊綴して、此方向に立ち給ふこそ」と教へければ、さればこそ、と思ひ、元の座にかへり、箱王を招きければ、願ふ所と喜びて、祐經が膝近く寄り添ひけり。左の手にて箱王か肩を抑へ、右の手にては髪をかき撫でて、「天晴父に似給ふものかな。今まで見奉らざる事の本意なさよ。吾殿は河津殿の子息と聞くは眞か。兄は男になり給ふか。曾我太郎は愛しくあたり奉るか。知らざる者の馴れしく斯様に申すとばし思ひ給ふな。御分の父河津殿とは従兄弟なり。殿原にも親しきものとては祐經ばかりなり。見奉れば昔の思ひ出でられて、今更哀に存するぞ。急ぎ法師になり別當につき給へ。弟子多しといふとも、祐經ほどの方人持ちたる人あらじ。便宜を以つて上様へもよき様に申し、寺門の訴訟あらば申し達すべし。今より後は如何なる大事なりとも、心をおかず仰せ

敢なくも
ろく

無下―甚し
くつまらぬ

給ひし程なれ。その人のましまさば四十餘にてあるべし。これより遙に丈高く骨太くして、前より見れば胸そり、後より見れば俯き、側より見れば四角なる大の男にてましまししが、馬の上徒立ならぶ人なし。殊に鹿の上手にて、力の強き事四五箇國には變なき大力なり。されば相摸の國の住人大庭三郎が弟俣野五郎景久とて、角觥に負けざる大力を、伊豆の奥野の狩場にて、片手を放ちて角觥に三番勝ちてこそ、いとど名を揚げ給ひしか。それを最後にて、歸りざまに敢なく討たれ給ひき。大力と申せども死の道には力及ばず」とこそ語りけれ。箱王は父が昔をつくぐと聞きて、今更なる心地して、忍の涙に咽びけり。稍ありて、われこの間祈りし願の叶ふにこそあるべし。窺ひよりて、便宜よくば一刀さし、如何にもならん、と思ひ定めて、「御坊はこれにまします。法師こそよらね、童は近く寄りても苦しからず。山寺に住めばとて、人を見知らぬは無下なり。近く寄りて見知らん」とて、赤地の錦にて柄鞘卷きたる守刀を脇にさし隠し、大衆の中をぬけ出でて、祐經が後近くぞ狙ひ寄りける。祐經も暫の冥加やありけん、梶原三郎兵衛を隔て、箱王を見付けて、これなる童は眼ざし河津三郎に似たるものかな。眞やこの御山には、伊東が孫のありと聞けば、若これにてやあるらん、と目を離さず守りけ

香の直垂—
丁子にて染
め淡紅にて
黄を帯びた
る色の直垂

かくて箱王^{はこわう} 御奉幣^{おんほうへい}の時までも、人一人^{いちにん}もつれず、介錯^{かいしゃく}の僧一人^{あひぐ}相具し、御座所^{ござきところ}の後に
隠^{かく}れ居て、御供^{おんぐも}の人々を、「彼は誰^たぞ、これは如何^{いか}に」と委^{くは}しく問ひければ、この僧鎌倉
の案内者^{あんないしや}にて、大名小名^{だいみやうせうみやう}の名よく知りたれば教^{をし}へけり。されども未だ祐經^{すけつね}をば明^{あか}さず。
あはれ問はばやと思へども、怪^{あや}しく思はれじとて、残^{のこり}の人を問ひまはす。「君^{きみ}の左の一の座
は誰^たぞ」。「彼こそ秩父重忠^{ちちぶのしげただ}よ」。「右の一の座は如何^{いか}に」。「これぞ三浦義盛^{みづらのよしもり}よ」。「さて其次
は誰人^{たれひと}ぞ」。「里見源太^{さとみのみけんた}といふ人よ」。「さてその次は」。「豊島冠者^{としまのくわんじや}といふ人なれ」。「只今^{ただいま}
の、もの仰^{おほ}せられしは誰^{たれ}やらん」。「是こそは當時^{たうじ}聞ゆる梶原平三景時^{かぢはらへいざうかげとき}とて、侍^{さむらい}どもの鬼^{おに}
神^{かみ}に思ふものよ」。「また馬手^{めて}の方にすこし引きのきて、半装束^{はんしやうそく}の數珠^{じゆず}もちて、香^{かう}の直垂^{ひたれ}
著^きたるは如何なる人にて有るやらん」。「彼こそ御分^{ごぶん}たちの一門、伊東の主工^{ぬしくさうさ}藤左衛門^{ふもんすけ}祐
經^{つね}よ。御分^{ごぶん}の父河津殿^{かづのどの}とは從弟^{いそご}なり。御前^{おんまへ}さらぬ切者^{きりもの}」とぞ教へける。さてはそれにて
ありけるよ。この事思ひよりていふやらん、知りぬれども何事かあらんと、思ひこなし
ていふやらん、と何時^{いつ}しか胸^{むね}うち騒^{さわ}ぎ、思ひ寄らざるやうにて、「この者はよき男^{おのこ}にてあ
りけるや。三十二三にぞなるらん。自^{みづか}らが父にや似たる」と問ふ。「少しも似給^{おそ}はず。正^{まさ}
しき兄弟^{けいだい}さへ似たるは少し、況^まして從兄弟^{いそご}に似たるものはなし。年こそ河津殿の討たれ

御調度掛―
主君の弓箭
を持ちて扈
從する役

四方輿―板
輿ともいひ
前に簾を掛
け三方に板
張る儀式の
時に用ふ

をよろひ、弓箭を帶する隨兵は上下に番ひ、左右の帶刀二行に並び、御調度掛の人弓手馬手に相并ぶ。御迎の伶人は伎樂を調へ、羅綾の袂を翻す。御前の舞人は鶏婁を撃つて、ぶかうの踵を敲つ。君の召さるゝ御船には、大船數多組合せ、幔幕をひき、沈の匂ひ四方に滿つ。これや諸佛の弘誓の船も、かくやと思ひ知られたり。侍どもの乗りける船數百艘に及べり。いづれも館をうちたりけり。無雙の武具を立てならべ、靜りかへり漕ぎつれたり。上代は知らず、末代かゝる見物あらじ、と貴賤群集をぞなしける。台主稚兒たちを引きつれ、船津まで御迎に參る。船より社頭までは、四方輿にぞ召されける。神前には禰宜神主幣帛を大床に捧け、別當社僧は經の紐を玉の蓑に解き、神樂男は銅拍子を合せて拜殿に祇候す。加之臨時の加役、當座の神樂、朝倉返しの謠物は、拍子の甲乙を調べて、れいはんじよさいの儀をかへりまうす、しんかんのおこるをけんてうにして、結縁もまた莫大なり。耳目の及ぶ所なり。まうひつに違あらず、高察を仰ぐのみにぞ覺えける。

四

箱王祐經に遭ひし事





朝拜—正月
元日文武百
官の主上を
拜する儀こ
こは只春の
儀式の意

切者—羽振
よき人

しき春の朝拜をも物ならず思ひ焦れて、晝夜權現に参り、「南無歸命頂禮、願はくは父の敵を討たしめ給へ」と、歩を運びけるぞ無慙なる。

三 鎌倉殿箱根御參詣の事

かくて權現の計ひにや、正月十五日に鎌倉殿二所御參詣とぞ聞えける。箱王これを聞き、年來の祈の功積り、神慮の御惑にしかじ、とぞ喜びける。實にや九層の臺は累土より起り、千里の行は一步より始る、といふ老子の教も、功は積りて遂に事をなすものを、と頼もしくぞ思ひける。工藤祐經は切者にてあるなれば、定めて御供には参り候はんを、見知らん事よ、と喜び、その日を待ちし心のうち、唯千歳を送る許なり。傳へ聞く、ほくしうの命も千歳の限を保つなり、それも限あればにや、繫がぬ日數重なりてその折節にもなりにけり。御伴の人々には、和田、畠山、川越、高坂、江戸、豊島、玉井、小山、宇都宮、山名、里見の人々を始として、以上三百五十餘騎、花を織り紅葉を重ね、装束ども綺羅天を輝かし、陣頭に雲を覆ひ、水干、淨衣、白直垂、布衣、權勢あたりを拂ひ、行粧目を驚かす。凡仲間雜色に至る迄、景色に色を盡す。後陣警護の武士は甲冑

元三—元日
歲月日の元
なればいふ

二の宮殿—
異父姉

跡をも妾が後世をも助け給へ」と申されければ、箱王身に思ふ事ありと思ひけれども、「承り候ふ」とぞいひける。母悦びて生年十一歳より箱根に上せ、年月を送りける程に箱王十三にぞなりにける十二月下旬の比、かの坊の稚兒同宿二十餘人ありける者共の許へ、親親き方より面々に音信どもありけるに、下れと書きたる文もあり、或は元三の装束に、師の御坊への贈物添へたる文もあり、或は父の文母の文、叔父叔母の文とて、二つ三つ讀む稚兒もあり、五つ六つ讀む稚兒も有りけり。中にも箱王は唯母の文許に、からがら装束添へて送りける。萬羨しくて、文を袂に引き入れ、傍に行き、泣き萎れて、或稚兒に逢うていひけるは、「人は皆父母の文、親しき方の御文とて、數多讀み給ふに、我は唯母の御文許にて、父とやらんの御文は知らず、何と書かれたるものぞや、見せ給へ。十郎殿と二の宮殿は、何とやらん此の程は、かき絶え訪ひ給はず。曾我殿はましませども、一度の言傳にも預からず。一月に一度なりとも、父の御文とて、學問よくせよ、武勇するな、などといはれ奉らば、如何許か嬉しく恐しくもありなまし。何時よりも怨めしきは今年の暮、戀しく見たきものは父の御文なり」とて、さめぐとぞ泣きける。心なき稚兒も理とや思ひけん、俱に涙を流しけり。されば箱王は新玉の年の祝言をも忘れ、新

曾我物語 卷第四

一 十郎元服の事

隙ゆく駒くわういんをし―
光陰くわういんの過ぎ
易やすき喩よ
光陰惜むべし、時人ときびとを待たざる理ことわり、隙ゆく駒くわういん、繫つながぬ月日重りて、一萬いちまんは十三歳になり
にける。身の不祥ふしやうなるにつけても、また公方こうほうを憚はやる事なれば、竊ひそかに元服げんぷくして、繼父きふちの苗
字じを取り、曾我十郎祐成そがのじふちうすけなりとぞ名のりける。

二 箱王箱根へ上る事

母、弟の箱王はこわうを呼び寄せて宣のたまひけるは、「吾殿わぎのは箱根はこねの別當べつたうの許もとへ行き法師ほうしになり、學問がくもん
して親の後世こせご弔なぐさめ。ゆめく男おとこ義ぎしく思ふべからず。世よを遁のがるゝ身なれば、綾羅錦繡りようらきんしう
の袖そでも、苔こけの衣ころもに同じ。十善帝王じふぜんていわうも身を捨て、人に對たいするに所なし。憂うれきも辛つらきも世の
中は、夢ゆめぞと思ひ定むべし。傳つたへ聞く大目連尊だいもくれんそんじや者は、母の教をしへ給ひし御言葉おんことばを、耳の底みみ
に保たもち給ひてこそ、五百の大阿羅漢だいあらかんには超え給ひしぞかし。構かまへて法師ほうしとなりて、父の

ばかり申されける。さて二人の子どもの馬を先に立て、曾我へ歸りける心のうち譬へん方もなし。母が宿所には、これをば知らで唯泣くばかりなる所へ、人々歸り給ふと告げければ、母を始めて喜ぶこと限なし。一萬が乳母月冨といふ女房、庭上に走り向ひ、馬の口を取り、君だちの御歸、といはんとて、餘に周章て、「馬達の歸り給ふぞや」と呼はりけり。兄弟の人々馬より下り、母が方に行きければ、一門馳せ集り、喜の見參ひまもなし。されば賴朝御憤深く、御慰の遍く廣き事は、めいてんの君は時にへいようの累をなし、じゆんるんの臣は屢親子の悲を懷く、とは、文選の辭なるをや、今更思ひ知られたり。

五戒一佛經
に所謂殺生
偷盜邪淫妄
語飲酒の五
の戒

見參一面

に、これ程面々の申されて、彼等を御助なくば、人頼少く思ひ奉るべし。重忠が一期の大事と思し召し、助け置かれ候へかし」と、誠に思ひ切つたる氣色にて、佛法世法唐土天竺の事まで、引きかけく申されければ、君御思案ありて、「誠にこの人は内には五戒を保ち、外には仁義を本とす賢人ぞかし。この重忠を失ひなば、神の恵に背き、天下も穩かなるまじ」と思し召しければ、「さらばこの者共を助け候へ。但し御分一人には預けぬぞ。今日の訴訟人どもに、悉く許す」と仰せ下されけり。御前伺候の侍ども、思はずに「あつ」とぞ感じける。「實にや重忠身に代へて申さるゝ、一人には御許もなくて、けふの訴訟人どもに、と仰せ下さるゝ有りがたさよ。されば天下の主ともなり給ふ」と重忠感じ申されけるとかや。

十一 兄弟曾我へ歸り喜びし事

其の後重忠は成清を呼びて、「幼き人々の事、やうく申し預り候ひぬ。早々子ども召し連れられ、祐信に御歸り候へ。曾我に心許なく思ひ給ふべし。御見參に入りたく候へども、御前に候ふ間」といひ送りければ、曾我太郎是非を辨へかねて、「畏り存する」と

得、位を永久に保ち給ふと申し傳へて候ふ。彼等もさる者の子にて候へば、御恩を忘れ奉るべきにあらず、遂には御用に立ち申し候はんすれ。君聞こし召し、「夫も臣が貴きにはあらず、ちやうしが賢なるに由つてなり」「さらば某をちやうしと思し召し、彼等を臣下に準へて、御助け候はゞ、後の御先途にもや立ち候ひなん。君君たる時は臣禮を以つてし、臣臣たる時は、君恩を施すところ見えて候へ。頼朝聞こし召し、「彼等何の禮ありし」。重忠承つて、「御助け候はゞ、いかでかその禮なかるべき。君御許なくば、我々までも華に驕るべきにあらず。さあらんに於ては、あはざる訴訟なりとも、一度はなどか御免なからん」。理を破る法はあれども、法を破る理はなし。罪科といひ法といひ、如何でか彼等遁るべき。重忠も申しかゝりたる事なれば、身をも命をも惜まず、高聲になりて申しけるは、「國を亡すてんけんも、三世はきかず、ところ承りて候へ。釋迦如來の、昔せんる仙人と申せし時、道を作り給ふ時、燃燈佛通り給ふに、道惡しくして行き煩ひ給ふ。時に仙人泥の上に臥し給ひて、御髪を敷き、佛を通し奉る。薩埵王子は飢ゑたる虎に身を與へ、慈悲大王は鳩の代りに身を掛くる。是皆末代の衆生を思し召す御慈悲の故ぞかし。就中諸國を治め給ふ事、理非を糺し情を旨とし、恩を本とし給ふべき

やうしが曰く。かの國の貧者を集め、持つ所の寶を取らせぬ、と答ふ。大王不思議に思ひしかども、賢人の計ふことなりしかば、さてのみ過し給ふ。その比國の胡夷起りて大王を傾く、合戦にうち敗けて竝びの國に移りぬ。その時千人の臣下さしも愛せし恩を捨てよ、一度に遁け失せにけり。王一人になりて既に自害に及びける時、ちやうしが曰く、暫く抑へていふ、待ち給へ。この國の市にて買ひ置きし善根、この度尋ねて見ん、とて行く。その寶を得たりし非人の中に、しばうといふ武勇の達者、かの深き志を感じて、多くの兵を語らひ、この王の爲に城郭を拵へ、暫く引き籠りぬ。時あつて運を開き、再び國に歸り給ふ。これ偏にちやうしが買ひおきし善根の故、と國王感じ給ふ。一人當千といふ事、この時よりも始りけり。その時もと遁け失せし千人の臣下、また出でて仕へんといふ。大王聞き給ひて、「また事あらば逃げぬべし。新しき臣下を召し使ふべし、と宣ふ。ちやうし諫めて曰く、始めたる臣下は心知り難し。唯もと遁け失せし臣下を召し使ひ給へ。二度の恩を忘れんや、といふ。大王理を聞き、遁け失せし臣下を悉く尋ね出して召し使ふ。時にまた國大きに起りて、王の宮を傾く。歸り來る所の臣下、二度の忘恩を恥ぢて、身を捨て命を惜まず防ぎ戦ふ。されば勝つ事を千里の外に

やうの義に到りては、頼朝騒ぐべきにあらず。唯天の照覽に身を任せ候ふべし」とて、御返事もなかりけり。

十　ちやうしが事にて兄弟たすかる事

ちやうし―
未詳

並びの國―
隣國

重忠畏つて、「恐れ存する次第にて候へども、昔大國に大王あり。武勇の臣下を集めて千人愛し、玉の冠黄金の沓を與へて召し使ふ。その中の臣下に、ちやうしといふ賢人あり。大王これを召して仰せけるは、朕が七珍萬寶一つとして不足なる事なし。然るに並びの國の市に、寶の數を賣るなり。汝かの市に往きて、わが倉のうちに無からん寶をかうて來るべし、とて、多くの寶を與へぬ。ちやうしこれを受け取り、かの市に往きて見るに、一つとして洩れたる物なし。然れども王宮に善根長く絶えてなかりけり。これを買ひ取らんと思ひ、保つ所の財寶を、かの國の非人どもを集めて悉く施し、手を空しくして歸りぬ。大王問うて曰く、買ひとる所の珍寶はいかに、見ん、と宣ふ。その時ちやうし答へて曰く、王宮の寶藏を見るに、金銀珠玉を始として不足なる事なし。されども善根のなかりしかば、買ひ取りぬ、と答ふ。大王歡喜して、その善根見ん、と宣ふ。ち

せいとうじ
ゆんぎ一政
道順義歟
轉輪聖王一
輪寶を轉じ
て四方を威
服する王人
壽八萬歳以
上の時世に
出づ

亡されぬと覺ゆる。されば彼等をば一々に斬りて、由井の濱にかくべし」と、荒らかにこ
そ仰せけれ。重忠も申しかゝりたる事なれば、言葉もたばはす延び上り、「さん候ふ。亡
びし平家の悪行、如何許とか思し召す。佛法にも恐れず王法にも従はず、官を停め職
を奪ひ、子孫に傳はると雖も、邪なる沙汰は天これを許さざるによつて自滅す。せいた
うじゆんぎにして、政專なれば、末代までも如何でか絶え候ふべき。唯神慮に乖か
で邪なる事さへ候はずば、位は轉輪聖王と等しかるべし」と申されければ、御れう聞こ
し召して、「忠をたかく感じ、科を深く誠る事邪なるべきにや。」「其の義にては候はず、唯
御慈悲渡らせ給へとこそ候へ。御敵の末不忠の至、陳じ申すには非ず。さりながら幼く
候へば成人の程御預け候へかし。忝くも君の御恩に誇り、榮華にそなふる事世の人に優
れたり。されば重忠が訴訟何事も叶ふべし、と人々存する所に、御許されなくば、命生
きても無益なり。御前にて首を召され候へ。それ叶はずば淺間も御照覽候へ。重忠自害仕
り候ふべし。ものその身にては候はずとも、某御前にて失せぬと聞き候はゞ、自害と
は申し候はじ。一門馳せ集り、御不審の歎を申し上げ候ふべし。然らば今日の訴訟人、
定めて同意ありぬべし。さあらんに於ては、諸國の煩とこそ存じ候へ」。君聞こし召し、「さ

かゝりー引
き受け

意に―謝罪
の爲に

池殿―池の
禪尼清盛の
繼母

と仰せられければ、「叶はじとの御誼重ねて申し上ぐる條、恐れにては候へども、成人の後、如何なる振舞仕り候ふとも、重忠かより申すべし。その上一期に一度の大事をこそ、と存じ候うて、常には訴訟を申さず候へ。是一つをば御免わたらせ給へ」と申されければ、君の仰には、「彼等が先祖の不忠みなく存じの事。何とて斯程に宜ふ。此の事かなへぬ意に、武藏の國二十四郡を上らん」と仰せ下されしぞ、誠に忝くは覺えける。重忠承り、「御誼の趣、畏り存ずれども、國を賜はり彼等を誅せられては、世の聞え重忠が恥辱にて候ふべし。某がもと賜りて候ふ所領を參らせ上げ、彼等を助け候ひてこそ、人の思はくも候へ」と申されければ、君御返事にも及ばせ給はず。重忠居丈高になりて、「畏多き申し事にて候へども、平治の亂に義朝討たれ給ひき。その御子として清盛にとりこめられ、既に御命危く渡らせ給ひしに、池殿申されしに因つて助かりましたしぬ。御喜を思し召し寄り、彼等を御助け候へかし。君御顔色かはり、事惡しく見えければ、暫く物も申されず。惡様なり。申し過しぬる、と存じて、唯謹んでありけり。やゝ暫くありて、君如何思し召しけん、御扇を颯と開き、「實に／＼重忠宜ふ如く、平家の一門賴朝に情をかけ助けおきて、賴朝に退治せられぬ。その如く彼等を助けおきて、末代に賴朝

はずとこそ聞け。「かやうの悪人を救ひ盡して、正覺あるべしと承る。それは慈悲にてましまさずや」。君聞こし召し、「誠にそれは佛の御法の言葉、如來に逢ひて問ひたまへ。彼等は世上のせいとうなり。斬らでは叶ふべからず」とて、御氣色悪しく見えければ、そののちは物を申さず。御前伺候の人々も力を落し、如何せんとぞ思はれけるこそうたてけれ。

九

畠山重忠請ひ申さるゝ事

こゝに武藏の國の住人畠山庄司次郎重忠、在鎌倉して筋違橋にありけるが、この事を聞き、取るものも取りあへず急ぎ御前に參られけり。君御覽じて、「重忠珍らしや」と仰せ下されければ、「さん候ふ」とて深く畏りぬ。やゝあつて重忠申されけるは、「伊東が孫どもを濱にて斬られ候ふなる。未だ幼く候へば、成人の程重忠に御預け候へかし」。君聞こし召し、「存じの如く伊東が振舞、條々の旨忘るべきにあらず。彼等が子孫におきては、如何に賤しき者なりとも、助け置かんとは覺えず。これ等は正しき孫ながら、嫡孫ぞかし。頼朝が末の敵となるべし。されば誅しても足らざるものを。頼朝怨み給ふべからず」

れいぎのお
くひ―禮義
の奥祕歟

せられにけり。また千葉介常胤座敷に居代りて、畏つて、「人々の申されて叶はざる所を
申し上ぐる條、誠にてうだうの跡を尋ね、れいぎのおくひにて候へども、龍の鬚を撫で、
虎の尾を踏むも、事による事にて候へば、今日の人々の訴訟御聞き入れ候はど、畏り存
じ候ふべき由、かたぐ申すけに候ふ」と申し上げければ、君聞こし召し、「御分の事身に
代へても餘あり。それを如何にといふに、頼朝石橋山の合戦にうち敗けて、たゞ七騎に
なりて、杉山を出でてゆきの浦に著き、既に自害に及びし時、數千騎にて合力せられ奉
り、今は世を取ること、偏に御分の恩ぞかし。その故忘るべきにあらず。されども伊豆
の伊東が怨めしさは、知り給ひぬらん」と仰せありて、その後は御返事もなし。常胤重
ねて申されけるは、「恐れぞんじ候ふことなれども、某に限らず今日の訴訟人、時にとり
ての御大事、誰か身命を惜み不忠を思ひ奉るものゝ候ふべき。その御志に御免わたらせ
おはしまして、彼等を御助け候へかし。」「さても彼等が祖父は忠の者にはあらざるをや。」「
「さてこそ御慈悲にて御助け候へとは申せ。」「奈落に沈む極重の罪人をば、慈悲の佛だ
にも救ひ給はずとこそ聞け。」「千葉介承つて、「地藏薩埵の第一の誓願には、無佛世界の衆
生を救はんとこそ、誓の深くましますなれ。」「君聞こし召されて、「地藏は未だ正覺なり給

奈落―梵語
地獄のこと

かつうは—
且はの延音

さしきりて
—斷乎とし
て

ば、力及ばず、御前おんまへを罷り立ちにけり。次に和田左衛門義盛御前かしこまに畏り、「景時かげときが親子おやこ申して叶かなひはざる所を、義盛重ねて申し上ぐる條でう、かつうは畏おそれすくならず候へども、人を助くる習ならひ、さのみこそ候へ。義盛御大事よしもりおんだいじにまかり立つこと、度々たびぐなりと雖も、わきては衣笠きぬがさの城じやうにて、御命に替り奉り、御世に出でさせ給ひ候ひぬ。その忠節ちうせつに申しかへて、曾我の子どもを預りおき候はゞ、生前しやうぜんの御恩ごおんと存じ候ふべし」と申されければ、君聞きここし召されて、「かの者どもの事は、斬らで叶ふべからず」と仰せ下されければ、義盛重ねて申されけるは、「素より罪輕くして追罰つゐはつせらるべきを、申し預りては、御恩ごおんと申し難し。重罪ぢゆうざいの者を賜はりてこそ、掟おきてを背く御恩ごおんにて候へ。義盛よしもりが一期いちごの大事、何事か是に如しかん」と、さしきりて申されたりしかば、君も誠まことに難義なんぎに思おもひ召しけるが、暫しばし御思案ごしあんに及び、「御分の所望しよぼう何をか背き申すべき。然れども、この事に於ては頼朝よりともにさしおき給へ。伊東が情なさけなかりし振舞ふるまひ、只今報たぐいまはぜん」と仰せられければ、義盛力及ばずして、御前おんまへを罷り立たれけり。その次に宇都宮彌三郎朝綱思ひけるは、面々めんめん申して叶へられずして罷り立たれぬ。さりながら、若もしや、と存じ御前おんまへに伺候す。君御覽ごらんじて、「今日の訴訟人そしやうにんは叶ふべからず。別に思ふ仔細べちしさいあり」とて、御氣色おんきしよくわ悪わるしかりければ、申し出すに及ばず、退出たいしゆつ

れば、折節朝日輝きて、白く清けなる頸の骨に、太刀影の映りて見えければ、左右なく切るべき所も見えざりけり。祐信猛き武士と申せども、打物を捨てよ口説きけるは、「中々思ひ切りて曾我に留るべかりしものを、これまで來りて憂き目を見ることの口惜しさよ。然るべくは、先某を斬りて後に、彼等を害し給へ」と歎きければ、見物の貴賤「理かな。幼少より育てよ、憐み給へばさぞ不便なるらん」と、弔はぬものはなかりけり。

八 人々君へ参りて兄弟を請ひ申さるゝ事

こよに梶原平三景時近く寄りて、祐信に申しけるは、「御歎を見奉るに、推し測られて覺ゆるなり。暫く待ち給へ。一ばし申して見ん」といひければ、彌太郎大きに喜びて、暫く時をぞ移しけり。誠に景時さしきりて申されんには、叶ひつべし、と人々頼もしくぞ思ひける。景時御前に畏りければ、君御覽じて、「梶原こそ例ならず訴訟顔なれ。」「さん候ふ。曾我太郎が養子の子ども、唯今濱にて誅せられ候ふ。哀某に御預もや候へかし。景時が申す條聞こし召し入れらるべき、と遍く思ひ候ふものをや」と申しければ、君聞こし召して、「今朝より源太が申しつれども預けず。汝怨むべからず」と仰せ下されけれ

遍く―諸人
一同に

龍門原上の
地に―白樂
天が元稹を
悼める詩の
句。龍門原
上土、埋骨
不埋名

ん、顔おし拭ひあざ笑ひ、涙を人に見せざりけり。貴賤惜まぬ者はなし。曾我太郎この色を見て、今は心安くて敷皮に居かゝり、鬢の塵うち拂ひ、心靜に介錯し、「如何に汝等よくよく聞け。始めたることにはあらねども、弓矢の家に生るゝ者は、命よりも名をば惜むものぞとよ。龍門原上の地に骨は埋めども、名をば雲居に遺せ、といふ言葉、豫て聞き置きぬらん。最期見苦しくは見えねども、心を亂さで眼を塞ぎ、掌を合せ、彌陀如來吾等を助け給へ、と深く祈念せよ」。一萬聞きて、「如何に祈り候ふとも、助かる命にて候はぬものを」といひければ、「その助にてはなし。別の助ぞとよ。御分の父一所に迎へ取り給ふべき誓願の助ぞとよ。頼み候へ」といひければ、「申すにや及ぶ。故郷を出でしより、思ひ定むる事なれば、何に心を遺すべき。父に遇ひ奉らん頼こそ嬉しく候へ」とて、西に向ひ各小き手を合せ、「南無」と高らかに聞えければ、堀彌太郎太刀抜きそばめ、二人が後に近づきて、兄を先斬らんは順次なり。然れども弟見て、驚きなんも無慙なり。弟を斬るは逆なり、と思ひ煩ひ立ちたりしを、祐信思ひに堪へかねて、走り寄り取りつき、「然るべくは打物を某に預けられ候へ。我等が手にかけて、後生を弔はん」と申しければ、「御計ひ」とて太刀を取らせけり。祐信とりて、先一萬を斬らんとて、太刀さし上げ見

り。及ぶも及ばざるも皆袂をぞ絞りける。

七 由井の濱へ引き出されし事

濱の表―濱邊

かくて景季やと遙にありて、子共の前に来り、「時こそ移り候へ」といひければ、祐信彼等を出で立たせ、由井の濱へぞ出しける。今に始めぬ鎌倉中の事々しさは、彼等が斬らるゝを見んとて、門前に市をなす。源太が館も濱の表、程遠からで行く程に、羊の歩なほ近く、命も際になりにつけり。既に敷皮敷きて、二人の者共なほしにつけり。今朝までは、さりととも源太や申し助けんと、頼みし心も盡き果て、彼等に向ひ申しけるは、「母が方に思ひおく事はなきか」と問ふ。「唯何事も御心得候うて仰せられ候へ。但最後は御教へ候ひし如く、思ひ切りて未練にも候はざりし」とばかり御語り候へ。「箱王は如何に」と問へば、「同じ御心なり。今一度見奉りて」といひも敢ず、涙に咽び深く歎く色見えけり。一萬是を見て、「母の仰せられし事忘れ給ふか。親、祖父の孫ぞと思ひ切るべし。構へて母や乳母が事思ひ出すべからず。さやうなれば未練の心出でくるぞ。只一條に思ひ切れと教へ給ひし事ぞとよ。人もこそ見れ」と諫めければ、箱王この言葉にや恥ぢにけ

それならで
は―下に冥
途も安かる
べしとも覺
えずなどの
語を略せり
かたは―片
端、不具

りて、御追善に報ぜんと御意の上、力及ばず」と申しければ、祐信頼みし力盡き果てよ、
「今はかなふまじきにや」とて、二人の子共を近づけて、装束ひきつくるひ、髻の塵うち
拂ひ、「汝如何なる報にて、乳のうちにして父に後れ、重代の所領にはなれ、命だにも十
五十三にもならず斬らるゝのみにあらず、母にもまた思を授くることの不思議さよ。祐
信も汝等に後れて、千歳を経るべきか。髻切り、後世惡に弔ひて取らすべし。今生の宿
縁うすくとも、來世にては必ず一蓮に生れあふべし」と涙に咽びけり。子どもは聞き「祖
父御の御事により、我等幼けれども免されず、斬られん事力に及ばず。さりながら殿の
御恩こそ有りがたく思ひ奉り候へ。御遁世ゆめくあるまじき事なり。母御の御思いよい
よ重かるべし。それを慰めて給はり候へ。それならでは」とばかりてに、泣くより外の
事ぞなき。景季が妻女も女房たちひき連れ、中門に出で、物越に彼等が言葉を立ち聞き
て、「實にやさる者の子どもとは聞えたり、優に大人しやかにいひつる言葉かな。餘所に
て聞くだにも哀に無慙なるに、如何に今まで取り育てぬる、母や乳母の思ふらん。かた
はなる子をさへ親は悲む習ぞかし。弓取の子の七つにて、親の敵を討ちける、と申し傳
へたるも、彼等が大人しやかなるにて思ひ知られたり。弓取の子なり」とて涙に咽びけ

成人の程—
成人するま
での間

存じ候ふまじ。斯様に難義の事こそ候はざりしか」と申しければ、君聞こし召されて、「嚙
母も惜みつらん。同じ科とは言ひながら、未だ幼き者共なり。歎きつるか」と仰せられ
ければ、この御言葉に取り付き、畏つて申しけるは、「斯様に申す事畏多く候へども、母
が歎あまりに不便なる次第に候ふ。未だ幼きもの共にて候へば、成人の程景季に預けさ
せ給ひ候へかし」と申しければ、君聞こし召されて、「汝が申す所理と思へども、伊東入道
に情なく當られし事を、聞きも及びぬらん。三歳の若を失はれ、剩へ女房までとり返さ
れて、歎の上に恥を見、その上由井の洞にて、頼朝を討たんとせし怨、條々譬へてやる
方なし。せめて伊豆の國一國の主にもならばや、と明暮祈りしは、伊東にあたり返さん
と願ひしぞかし。さればかの者の末といはんをば、乞食非人なりとも、かけて見んとは
思はざりき。況や彼等は現在の孫なり、しかも嫡孫ぞかし。急ぎ誅して若が孝養に報ず
べし。頼朝怨むべからず」と仰せ下されければ、重ねて申すに及ばで、御前を罷り立ち
にけり。「時を移さず由井の濱にて害せよ」と承りて、宿所に歸る。祐信遅しと待ちうけ
て、さて「彼等が命いかに」と問ふ。「さればこそとよ。再三申しつれども故伊東殿の不忠、
始より終に至るまで御物語ありて、若君の草の蔭にて思し召す所もあり、この人々を斬

人の親の—
後撰集兼輔
人の親の心
は闇にあら
れども子を
思ふ道に惑
ひぬるかな

人の子ども近く居て、今宵ばかりと思ふにも、名残惜しくぞ思はれける。名残の夜半も明け易く、隈なき軒を洩る月も、思の涙にかき曇り、鶏と同じく泣き明かす、心の中こそ無慙なれ。早天に源太左衛門御所へ参りければ、祐信遙に門送して、「彼等が事は一向に頼み奉る。如何にも良きやうに申しなされ、郎黨二人ありと思し召し候へ」と、眞に思ひ入つたる有様哀にて、源太も不便に覺えて、「實にや子ならずば何事かこれ程に宜ふべき。人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ道に迷ふ、とは、實に理と覺えて、景季も子共數多持ちたる身、さら／＼人の上とも存じ候はず」とて、忍の涙を流しけり。「心の及ぶ所は等閑あるべからず候ふ。心やすく思ひ給へ」とて出でければ、頼もしくぞ思ひける。

六 兄弟を梶原請ひ申さるゝ事

その後梶原御前に畏りければ、君御覽じて、「昨日は参らざりけるぞ。祐信は異議にや及びけるか。」「如何でか惜み申すべき。昨夜景季が許まで具足して候ひつるを、夜更け候ふ間、明くるを待ち申して候ふ。從ひ候うては、母や曾我太郎が歎中々申すに及ばず、可愛き有様を見てこそ候へ。同じ仰にて、戦場にして一命を棄て候はん事は、物の數とも

大慈大悲の
誓願—觀世
音菩薩の心
願

つれなく—
氣強く

うやう介錯して、泣く／＼内にぞ入りにける。持佛堂に参りて口説きけるは、「大慈大悲の誓願には、枯れたる草木にも花咲き實のなるところを聞け。などや彼等が命をも助け給はざらん。我幼少の古より、深く頼をかけ奉る。毎日に三卷の普門品解らざる驗に、彼等が命を助け給へ」と、悶え焦れけるぞ無慙なる。せめての事にや、佛に向ひて口説きけるは、「實にや彼等が父の討たれし時、如何なる淵瀬にも入りなん、と思ひ焦れしに、彼等を世に立てんと思ひて、つれなく命ながらへ、飽かぬ住居の心憂かりつるも、偏に子共の爲ぞかし。斬られ参らせて後、一日片時の程も、身は誰がために惜しかるべき。願はくは我等が命も取り給ひて、彼等一所に迎へとり給へ」と、聲も惜まず泣き居たり。實や身に思のある時は、科もましまさぬ神佛を怨み奉り、泣きては口説き、怨みては泣き、伏し沈みけるこそ、せめての事とは覺えけれ。

五 祐信兄弟をつれて鎌倉へ行きし事

さても祐信は梶原もろ共にうち連れて、駒を早むるとはなけれども、夜に入つて鎌倉へこそ著きにけれ。今宵ははるかに更けぬらんとて、景季が館に留めおきたり。祐信は二

斜一尋常

急かす一急
がせすなる
べし

残り惜しかりける。さりともとは思へども、正しき御敵なり、歸らん事は不定なり。留
りて物思はんことも悲しければ、一所にて如何にもならん、と出でたちけるぞ哀なる。
祐信これを見て、大きに制しける、「さりとも斬らるゝまではあるまじ。誰々もよきやう
に申しなし給はど、いかさま遠き國に流しおかれぬと覺えたり。左様なりとも命だにあ
らば」と慰めおきて、二人の子どもを誘ひ出でける、心のうちこそ哀なれ。母は梶原が
見るをも憚らず、事の斜の時にこそ、恥も人目も包るれ、誠の別になりぬれば、徒歩跳
にて乳母ともろ共に、庭上に迷ひ出で、「暫くや殿一萬、止まれや箱王、我が身は何とな
るべき」と、聲も惜まず泣き悲みければ、上下男女もろ共に、今暫くと泣き悲む有様、譬
ふべき方もなし。或は馬の口に取りつき、或は直垂の袖をひかへければ、景季も猛き武
夫とは申せども、涙にせきあへず、「よしなき御使を承つて、かゝる哀を見ることの悲し
さよ」とて、直衣の袖を顔に押しあてゝ泣きけり。母はなほも留まりかねて、門の外まで
惑ひ出でて、彼等が後姿を見送り、泣くより外の事ぞなき。子供も後のみ見返りしかば、
駒をも急がず、後に心は留まりけり。互の思さこそと推し測られて哀なれ。母は子ども
の後も見えず、遠ざかり行きければ、即ち倒れ伏しにけり。女房たち急ぎ引き立て、や

介錯―世話
する

装束には―

此下一本

「羅にあさ

がほ縫うた

る練貫の小

袖に」の句

あり

大口―袴

濡れてや鹿

の―新古今

集家隆下紅

葉かつ散る

山の夕時雨

のれてやひ

とり鹿の啼

くらむ

残り^{このこわり}と存じ候へども、御思は盡くべきにあらず。疾く疾く」と責めければ、祐信「承

り候ふ」とて、嬉しからざる出立を急ぎける。母も今を限の事なれば、介錯するぞ哀な

る。一萬が装束には、精好の大口顯紋紗の直垂をぞ著せたりける。箱王には、紅葉に鹿

畫きたる紅梅の小袖に、大口ばかりぞ著せたりける。かやうに介錯せんことも、今を限

にてもや、と後に廻り前に立ち、つくぐとこれを見るに、一萬が著たる小袖の紋こゝ

ろえぬものかな。さてもあだなる朝顔の、花の上露時の間も、残るためしはなきものを、

さて箱王が小袖の紋、濡れてや鹿の獨啼くらんも、憂き身の上の心地して、いよく袖

こそ濡れまされ。古はなにとも見ざりし衣裳の紋、今は眼に立ちて、思ひのこせる事も

なし。やがて歸るべき途だにも、さしあたりたる別は悲しきに、歸らん事は不定なり。

見々えんことも今ばかりぞ、と思へば、氣も魂も身にそはず。一萬おとなしやかに、

「あまりな御歎き候ひそ。御思を見たてまつれば、冥途やすかるべしとも覺えず。若斬

られまゐらせば、前世の事と思し召せ」といひければ、箱王、「兄の仰せらるゝ如く、御

歎き候ひそ。我々手を出して御敵つかまつる身にてもなし。その上いまだ幼く候へば、

御許もや候ふべき。佛にも御申し候へ」と、誠にけにくしく申すにつけても、いよく名

紅―べに
花、焦るゝ
の序

叶喚大叫喚
―八熱地獄
中の一

れ。身の衰ふるをば知らで、何時か成人して大人しくもなりなん、と月日の如く頼もしく、後の世かけて思ひしに、斬られまゐらせて其後、憂き身は何とながらへん。たゞ諸共に具足して、ともにかくにもなし給へ」と泣き悲むその聲は、門の邊まで聞えけり。實にや園生に植ゑし紅の、焦るゝ色のあらはれて、他所に見えしぞ哀なる。絶えぬ思の餘にや、母は子どもを左右の膝に据ゑおき、髪かき撫でて口説きけるは、「祖父伊東殿、君に情なくあたり奉りし故に、その孫とて汝等を召さるゝぞや、如何なる罪の報にて、人こそ多けれ、御敵とはなりぬらん心憂さよ。さりながら汝等が先祖、當國において誰にかは劣るべき。知らぬ人あるべからず。君の御前なりとも。恐るゝ事なく、最期の所にていひがひなくして叶ふまじ。さしも勇みし親祖父の世にありし故にこそ、御敵ともなり給ひしか。幼くとも思ひ切りて、臆する色あるべからず。健氣に」と申せども、涙にこそ咽びけれ。「實にや叶はぬ事なれども、汝等を留めおき、その代に妾出でて、いかにもなりなば、心安かりなん」と泣きければ、二人の子どもは聞き分けたる事はなけれども、唯泣くより外の事ぞなき。卑しき賤に至るまで、泣き悲むこと、叫喚大叫喚の悲も、これには過ぎじとぞ覺えし。時移りければ景季、使を以つて母の方へ申しけるは、「御名

幼き者二人候ひし、五つ三つにて失ひ候ふ。その思未だ晴れざるに、彼等が母に後れ候ひぬ。一方ならぬ思の淺からざりしに、彼等が母も夫に後れ、子を持ちたるよし聞き候ひしが、しかも親しく候ふ上、失ひし子ども同じ年にて候ふ。されば人の歎をもわれらが思をも語り慰まんと思ひ、おさへ取り、今年は此の者ども十一九つにまかりなり候ふ。殊の外健氣に候ふ間、實子の如く養じ立てよ、この比かやうの仰を蒙るべしとこそ存じ候はね。子に縁なきものは、人の子をも養すまじきにて候ひける」とて、袖を顔におしあてけり。景季も實に理とぞ思ひける。

四 母なげきし事

さても祐信は、「御説違背申すべきにあらず。召し連れて参るべし。さりながら」とて内に入り、彼等が母に申しけるは、「故伊東殿、君の御敵にてうせ給ひしその孫とて、二人の幼き子どもをまるらせよとの御使に、梶原殿の來れり」といひければ、母は聞きもあへず、「心憂や、是は何となり行く世の中ぞや。夢とも現とも覺えず。實に夢ならば覺むる現もありなまし。憂き身の上の悲しきも、彼等二人を持ちてこそ、萬の憂さも慰みつ

きうたうは
丘頭なるべ
し

身にも一臂
我太郎自身

具足して引
き連れて

左右なく一
容易に

「頼朝こそ知らね。何ものぞ」と御尋ねありければ、祐經うけたまはりて、「先年斬られ
参らせ候ひし伊東入道が孫、五つ三つにて父河津に後れ、繼父曾我太郎が許に養ひお
きぬ。成人の後御敵とやなり候ふべき。身にもまた野心あるものにて候ふ」と申し上げ
たりければ、君きこし召し、「不思議なり。祐信は随分心やすき者に思ひつるに、末のか
たきを養ひおくらん不思議さよ。急ぎ梶原召せ」とて召さるゝ。源太景季御前に畏り
ければ、「急ぎ曾我へ下り、伊東入道が孫どもを隠しおくよし聞ゆ。急ぎ具足して参
るべし。若し異議に及ばず、それにて頭を刎ねよ」とぞ仰せける。景季承り、御前を罷
り立ち、急ぎ曾我へぞ下りける。祐信が館近くなりしかば、使者を立て、「曾我殿やま
します。君の御使に景季参りたり」といはせければ、祐信何事なるらんと、「思ひ寄らざる
御出、珍らし」といひければ、景季も暫く辭退して、「さん候ふ、上よりの御使」とばかり
云ひて、面目なき事なれば、左右なく云ひも出さず。やゝありて、「御爲ゆゑしき事なら
ぬ仰を蒙りて候ふ。その故は故伊東入道殿の孫養育の由、君聞こし召して、頼朝が末の
敵なり、急ぎ具して参るべし、との御使蒙り、参りて候ふ」と申しければ、祐信とかく
の返事にも及ばず、やゝありて、「世間に歎深き者を尋ね候ふに、祐信に過ぐべからず。

旂檀—梵語
香木

く人毎に、舌をふり哀を催さぬはなかりけり。良竹は生ひ出づれば直なり、旂檀は嫩葉より香ばしとは、斯様の事に知られたり。されば遂に敵を思ふまゝ討ち、名を萬天の雲に揚げ、威勢一天に餘れり。哀にもいみじきにも申し傳へたるは、この人々の事なり。

三 源太曾我へ兄弟召しの御使に行きし事

不思議—變
事

きうたう狼
煙—狼煙は
兵亂を知
らする爲に
擧ぐる烽火

かくて三年の春秋の過ぐるも夢なれや、早くも一萬十一箱王九つにぞなりにける。その比彼等が身の上に思はぬ不思議ぞ出てきたる。故を如何にと尋ぬるに、鎌倉殿、侍どもに仰せられけるは、「保元の合戦に爲義義朝に斬られ、平治の亂に義朝長田に討たれしよりこの方、驕れる平家を悉く滅し、天下を心の儘にする事、我等が先祖におきては、頼朝に優る果報者あらじ」と仰せ下されければ、御前伺候の侍ども、一同に「さん候ふ」と申し上げければ、伊豆國の住人工藤左衛門祐經畏つて申しけるは、「仰の如く四海靜まり、きうたう狼煙立たざる所に、ま近き御膝の下におきて、幼くは候へども、末の御敵となるべき者こそ、一二人候へ」と申しければ、御前にありける侍ども、誰が身の上やらん、と目を見合せ拳を握らざるはなかりけり。君聞こし召されて御氣色かはり、

れ、構へて構へて」といひて立ちぬ。その後は人目を忍びて兄弟は語りけれども、人には更に知らせざりけり。或日の徒然に友の童もなく、軒の松風耳に留り、暮れやらぬ日は、一萬門に出でて、人目を忍びさめぐと泣きけり。箱王も同じく出でけるが、兄が顔をつくぐと見て、「何を思ひ給へば、兄御は向の山を見てさのみなげかせ給ふぞや」といふ。兄が聞きて、「さればこそとよ、何とやらん殊の外に父の佛思ひ出でられて、戀しく覺ゆるぞ」といひければ、「愚にわたらせ給ふものかな。何程思ひ給ふとも、父は歸り給ふまじ。いざ歸り給へ。童どものまた参り候はんには、嘸物して遊び候はん」とて、うち連れて歸る時もあり。また或夕暮に夜に近き、軒端の雨のものの哀なる折ふしに、箱王門に立ち出で涙に咽ぶ時は、一萬弟が袖をひかへ、「何を思ひ給へば、四方の棺に眼をかけて、さのみなげかせ給ふぞや」。「覺えぬ父御とやらんの戀しきは、かやうに心のすごきやらん。兄御は何とかおはする」とて、さめぐとこそ泣き居たれ。一萬弟が手を取りて、「覺えず知らぬ父を戀しと思はんより、可憐とのみ仰せらるゝ母に、いざや参らん」とて、袖を引きてぞ入りにける。これも人眼を忍ばんとて、互に諫め諫められて、心ばかりと思へども、さすが幼き心にて、忍ぶ他所目の隙々の、洩るゝを見聞

事々しく―
大げさに

構へて―用
心して

りて候ふを、乳母が事々しく申す」といひければ、母涙を流し、「障子の事にてはなきぞとよ。汝等たしかに聞け。殿原が祖父伊東といひし人は、君の若君を殺し奉るのみならず、謀叛の同意たりしに由つて、斬られ奉りし上は、汝等もその孫なればとて、首をも足をももがれ奉るべし。平家の公達をば、腹の中なるをだにも索め失はるゝぞかし。今より後、ゆめく思ひも寄り、いひも出すべからず。あさましき事なり。未だ上にも知ろしめされぬか、御宥ありて、知らず顔にて御尋ねもなき、と覺ゆるなり。構へて、遊ぶとも門より外へ出づべからず。汝等うち連れ遊ぶを、物の隙より忍び見るに、勇み驕るときは自らが心も共に勇しく、うち萎るゝを見る時は、妾が心もともに萎るゝものを、親にもそはぬ孤兒の、育つ行方の無慙さよ。後に立ちそひ見るぞとよ。乳母はかくとも知らせぬぞ。近く寄り候へ」とて、二人が袖を取り引き寄せ、小聲にいふやう、「まことや、さしも恐しき世の中に、惡事思ひ立つとな。さやうの事人に聞かれなば良かるべきか。上様の御耳に入りなば召し捕られ、禁獄死罪にも行はれなん。恐しさよ」とぞ制しける。一萬は顔うち赤めうち傾きて居たり。箱王はうち笑ひ、「乳母が申しなしと覺えたり。さらに後先も知らぬ事なり」と申しければ、母聞きて、「今より後思ひも寄らざ

た又は革的
な射る

篋―矢竹

きものを、腹立や」といへば、兄が聞きて、「それよりも憎きものこそあれ」。「誰なるらん、自らが乗りつる竹馬うち候ひつる事か」。「その事にてはなきぞ。父を討ちける者の憎さに、月日の遅き」といへば、「習はずとも弓矢とる身は弓射ぬ事や候ふべき」。兄が聞きて打ち笑ひ、「和殿様にいふとも、手馴れずしては如何あるべき。射て見よ」とて竹の小弓に篋は薄なる笹作の矢さしつがひ、兄障子を彼方此方に射通し、「何時かわれ等十五十三になり、父の敵にゆき逢ひ、かやうに心の儘に射通さん」。箱王聞きて、「さる事にては候へども、大事の敵弓にては如何と覺えたり。斯様に首を斬らん」とて、障子の紙を切り、高々とさし上げ、側なる木太刀を取りなほし、二つ三つに切つて捨てよ、立ちたる眼ざし、人に變りてぞ見えたりける。

二 兄弟を母の制する事

かくて乳母はこれを忍び見て、恐ろしき人々の企かな。後は如何に、と思ひければ、急ぎ母上にぞ語りける。母聞きて大きに驚き、彼等を一問所に呼びければ、箱王居なほらざるに、障子の破れたるを叱り給ふべき、と心得て、「障子をば存じ候はず。他所の童が破

がねの、西に飛びけるを一萬が見て、「あれ御覽ぜよや箱王殿、雲居の雁の何處を指して飛び行くらん。一つらも離れぬなかの羨しさよ」。弟きよて、「何かはさ程羨むべき。我等が伴ふもの共も、遊べば俱に打ち連れて、歸ればつれて歸るなり」。兄聞きて、「さにはあらず、何れも同じ鳥ならば、鴨をも鷺をもつれよかし。空を飛べども、おのれくが友ばかりなる事ぞとよ。五つあるは、一つは父一つは母、三つは子どもにてぞあるらん。和殿は弟われは兄、母は眞の母なれども、曾我殿まことの父ならず。戀しと思ふその人の、行方も敵のわざぞかし」。箱王聞き、「親の敵とやらの頸の骨は、石金よりも堅きものか」と問へば、兄が聞きて、袖にて弟が口を抑へ、「露がまし、人や聞くらん。聲たかし。隠す事ぞ」といへば、箱王聞きて、「射殺すとも首斬るとも、隠して叶ふべき事か」。『さはなきぞとよ。それまでも忍ぶ習ぞかし。心にのみ思ひて、上にはものを習へとよ。能は稽古によるなるぞ。我等が父は弓の上手にて、鹿をも鳥をも射給ひけるなるぞ。あれ父だにましまさば、馬をも鞍をも用意して賜ひなまし。さあらば犬追物笠懸をも射習ひなん。我等より幼き者も、世にあれば馬に乗り物射る見るも羨し』と口説ければ、箱王聞きて、「父だにましまさば、自らが弓の弦くひ切りたる鼠の首は、射させ参らすべ

上には―表
面は知らぬ
様にて
犬追物笠懸
―共に騎射
の名、慕目
の矢を用ひ

曾我物語 卷第三

一 九月十三夜名ある月に一萬箱王庭に出でて父の事を

歎きし事

そもく伊豆の國赤澤山の麓にて、工藤左衛門尉祐經に討たれし河津の三郎が子二人あり。兄をば一萬といひて五つになり、弟を箱王といひて三つにぞなりにける。父に後れて後、何れも母につき、繼父曾我太郎が許にて育ちけり。やうく成人する程に、父が事を忘れずして歎きけるこそ無慙なれ。人の語れば兄も知り、兄が語れば弟も知り、戀しさのみに明け暮れて、積るは月日ばかりなり。心のつくに従ひて、いよく忘るゝ隙もなし。われら二十になり、父を討ちけん左衛門尉とやらんを討ち取りて、母の御心を慰め、父の孝養にも奉ぜん、と忙はしきは月日なり。數ならぬ身にも日數の積ればにや、憂き事どもに長らへ來て、一萬九つ箱王七つにぞなりにける。折節九月十三夜の、まことに名ある月ながら、限なき影に兄弟、庭に出でて遊びけるが、五つ連れたる雁

御厨―神領
の一種、神
供の料を出
す土地

り。實にや遙に伊豆の國に流罪せられ給ひしとき、かゝるべしとは誰か思ひけめ。一天
四海を從へ、靡かぬ草木もなかりけり。實や史記の辭に、天下安寧なる時はけいしやく
を用ゐずとは、今こそ思ひ知られたれ。平家繁昌の折ふしは、誰やの人かこの一門を亡
すべし、とは思ひける。扱も伊豆の御山にて、夢物語し、同じく合せ奉りしものは勸賞
に預り、藤九郎盛長は上野の總追捕使になさる。景延は若宮の別當神人總官を賜はる上
に、大庭の御厨は先祖には代々數多にわかれたりしを、今度は一圓に賜はりけり。この
外莊園五六箇所賜はつて朝恩に誇りけり。さても先年河津三郎を討ちたりし工藤一藤祐
經は、左衛門尉になりて伊東を賜はる。その外所領あまた拜領して、隨分きりものに
て、晝夜君の御側去らで伺候す。されども傷を蒙る鳥は、天に上りて翼をたよくと雖も、
また地に落つる思あり、釣針を含む魚は深き淵に入つて尾を振ると雖も、遂には陸に上
る憂あり。祐經もかやうに果報いみじくて、公方私、おどろを倒にひくと雖も、敵あ
る身は行末遁れ難くして、終に討たれなんとぞ申しける。

世に出づれば鳳凰翼をのべ、賢臣國に來れば麒麟蹄をとぐ、といふ事も、この君の時に知られたり。めでたかりし御事なり。

二十三 八幡大菩薩の御事

蘇葉―水萍
にょもぎ輕
微の物の清
潔なるは神
供とするよ
り供物の總
稱
でんこ―鎮
護か

そもく八幡大菩薩をば、忝くも鶴ヶ岡に崇め奉る、これを若宮と號す。蘇葉の禰社壇にしゆく、奉幣にんわうのせきしやなり。その垂迹、三所に、仲哀、神功、應神三皇の玉體なり。本地を思へば彌陀三尊の聖影、行教和尚の三衣の袂を顯はし給へり。百皇でん護の誓を起して、一天靜謐の恵まします。實にこれ本朝の宗廟として源氏を守り給ふとかや。現世安穩の方便は觀音勢至神力をうけ給ふ、後生善所の利益は無量壽佛の誓を施し給ふ。仰ぎても信すべきはもつともこの御神なり。父左馬頭の爲に勝長壽院を建立し給ふ。今の御堂これなり。そのほか堂社搭婆を造立し給ふ。佛像經卷をきやうそ

籌策―謀計

うす。征罰の志はやく速にして、善根もまた莫大なり。壽永二年九月四日に坐ながら征夷將軍の院宣を蒙り、建久元年十一月七日に上洛して大納言に補し、同じき十二月五日に右大將に任ず。されば籌策を帷帳のうちにめぐらし、勝つことを千里の外に得た

よき侍の振舞、弓矢の義理これに如かじとて、惜まぬものはなかりけり。

二十二 鎌倉の家的事

佐殿—下に
「の」の字脱
する歟

八島の大殿
—宗盛

寛べん—無
實の罪の意
なるべきも
べんの字未
詳

さても佐殿、北の御方とり奉りし江馬小四郎も討たれけり。その跡を北條四郎時政に、賜はる。さてこそ江馬小四郎とも申しけれ。この外討たるよ侍ども、相摸の國には秦野馬允、大庭三郎、海老名源八、荻野五郎、上總の國には上總介、陸奥には秀衡が子どもを始として、國々の侍五十餘人ぞ討たれける。また平家には八島の大殿、右衛門督清宗、本三位中將重衡を先として、或は斬られ、自害する輩を記すに及ばず。源氏には、御舍弟三河守範頼、九郎判官義經、木曾義仲、甲斐の國には一條次郎忠頼、小田入道、常陸の國には志太三郎先生を始として、以上二十八人、かれこれ討たるよ者百八十餘人なり。この中に寛べんの者は僅三人なり。一條次郎、三河の守、上總介なり。この外は皆自業自得果なり、とぞ宣ひける。さて鎌倉に居所を占めて、郎從以下軒をならべ、貴賤袖をつらねけり。これやせいようの詞に、漢の文王は千里の馬を辭し、晋の武王はちとうの裘をやくととは、今の御代に知られたり。民の竈は朝夕の煙ゆたかなり。賢王

なりとぞ。

二十一 祐清京へ上る事

こよに伊東九郎と申すも、父入道と一所にて誅せらるべきを、彼に於ては頼朝に奉公の者なり、死罪を宥められ、召し使はるべきよし仰せ下されしを、「不忠の者の子面目なし。その上石橋山の合戦に、正しく君を討ち奉らんとうち向ひし身が、命生きて候ふとも、人にひとしく頼まれ奉るべしとも存ぜず。さあらんに於ては首を召されん事こそ深き御恩たるべし」と、望み申しけるもやさしくぞ覺えける。この心なればや、君をも落とし奉りける。と今さら思ひ知られたり。君聞こしめされ、「申し上る所の仁義餘義なし。然れども忠の者を斬りなば天の照覧も如何」とて、斬らるまじきにぞ定まりける。九郎重ねて申しけるは、「御免候はゞ、忽ち平家へまゐり、君の御敵となり参らせ、後矢仕るべし」と、再三申しけれども御用ゐなく、「假令敵となるといふとも、頼朝が手にては、いかでか斬るべき」と仰せ下されければ、力及ばず京都にのほり、平家に奉公いたしけるが、北陸道の合戦の時、加賀の國篠原にて、齋藤別當と一所に討死して名を後代に留む。

因果—佛教
の語、原因
結果の理

兩國にあり。勤行も長へに懈らずとこそ聞えけれ。かやうの畜類だにも後生をば願ふぞかし。この伊東入道は、最期の時にも後生菩提を願はざるぞ愚なる。是を以つて過ぎにし事を案ずるに、親の譲を背くのみならず、現在の兄を調伏し、持つまじき所領を横領せし故、天これを誡めけるとぞ覺えたる。されば惡は一旦の事なり、勝利ありと雖も、遂には正直にして道理道を行くとかや。總じて賴朝に敵したる者こそ多きなかに、目前に誅せられる因果のがれざる理を思へば、昔天然に大王あり、貴き上人ありとて迎を遣し給ふに、この王朝夕碁を好み、臣下を集めてうち給ふ時、「上人参り給ひぬ」と申しければ、碁にきりて然るべき所ありけるを、「きれ」と宣ひけるに、この上人の首を斬れとの宣旨と聞きなして、即ち聖の首をうち斬りぬ。大王夢にも知り給はで、碁をうちてよ「その上人此方へ」と宣ふ。「宣旨にまかせて斬りたり」と申す。大王大きに悲み佛に歎き給ふ。時に佛宣はく、「昔國王は蛙にて土中にありしなり。上人はもと田を作る農人なり。然るに民春田をかへすとて、心ならず唐鋤にて蛙の首をすき切りぬ。その因果のがれずして斬られにけり。因果は斯様なるものをや」と宣へば、國王未來の因果を悲みて、多くの志を盡して、かの苦を免れ給ひけるとかや。人はたと報を知るべき事

二十 奈良の權操僧正の事

これや延暦年中に、奈良の權操僧正は大旱魃に雨の祈の爲、大和の國布留の社にて、藥草喻品を一七日講ぜられけるに、何處ともなく童一人來りて、毎日御經を聽聞しける。七日に滿する時、「何者にや」と御尋ねありければ、「我はこの山の小龍なり、七日の聽聞によつて、安樂世界に生れ候ひなん嬉しさよ」とて、隨喜の涙を流しけり。その時僧正の曰く、「龍は雨を心に任するものなれば、雨を降らしめ候へ」と仰せければ、大龍王の許なくして、我が計らひにてはなり難く候へども、さりながら、後生菩提を御助け給ひ候はど、身は失せ候ふとも、雨を降らし候はん」と申す。「左右にや及ぶ、追善あるべし」と御領承ありしかば、即ち雷となりて天に上り、雨の降ること二時ばかりなり。されども此の龍その身碎けて、五所へぞ落ちにける。僧正憐み給ひて、かの龍の落ちける所にして、一日經を書寫せられけり。その後の僧正の夢に、御弔により即ち蛇身を轉じて佛道に生ず、と見えたり。さてかの五所に五つの寺を建て、今にありと申すなり。寺號は龍門寺、龍泉寺、龍しよく寺、龍はう寺、龍そん寺これなり。紀の國、大和

いしんちう
—殷の紂王
を誤りたる
也

最後の十念
—命終の時
に臨み十遍
の念佛を唱
ふるこゝ

て、相摸の國鎌倉の館にぞつき給ひける。これよりして武士ども、關東に歸服せざるはなかりけり。されば平家驚き騒ぎ、度々討手を向はすと雖も、或は鳥の羽音を聞きて退くものもあり、又は戰場にこらへずして鞭にて打ち落さるゝもあり。これ普通の儀にあらず、たゞ天命の致す所なり。昔周の文王いしんちうを討たんとせしに、東天に雲湧えて雪の降る事一丈餘なり。五色の馬に乗る人門外に來りて、そのことを示しよかば、文王勝つことを得たりき。かるがゆゑに逆臣ほどなく敗北して、天下すなはちおだやかなり。

十九 伊東の入道が斬らるゝ事

さても不忠を振舞ひし伊東入道は生捕られて、聲の三浦介義澄に預けられけるを、先日さいくわのがの罪科遁れ難くして召し出し、鎧摺といふ所にて首を刎ねられけり。最後の十念にも及ばず、西方淨土をも願はず、先祖相傳の所領伊東、河津の方を見やりて、執心深けに思ひやるこそ無慙なれ。

大介一人になりけり。年九十餘になりけるが、子孫に向ひて申しけるは、「兵衛佐殿の浮沈今にあり。己等一人も死に残りたらば、貢ぎ奉れ」と申しおきて腹切り畢んぬ。さても伊東入道は素より佐殿に意越深きものなりければ、一合戦と馳せ向ひけるが、恃みし畠山は打ち負けにし折節なれば、伊豆の御山より引き返しにけり。

十八 頼朝七騎落の事

さても頼朝は無勢たるによつて、心は猛く思はれけれども、この合戦かなふべしとは見えざりけり。されども土肥次郎、岡崎悪四郎、佐々木四郎、命を惜ます戦ひけるその隙に、佐殿は遁れ給ひて杉山に入り給ひぬ。北條三郎宗時、眞田與市も討たれけり。佐殿は七騎にうちなされ、大童になりて大木の中に隠れ、その曉山を忍び出で、安房の國龍崎へ渡り給ふとて、海上にて三浦の人々、和田小太郎義盛に行きあうて、船どもを漕ぎ寄せ、互に合戦の次第を語る。義盛は衣笠の軍に大介討たれし事共語りければ、土肥、岡崎はまた、石橋山の合戦に與市が討たれし事どもを語り、互に鎧の袖をぞ濡しける。さて安房の國に渡り、それより上總に越え、千葉介を相具して、次第に攻め上り給ひ

木曾義仲きそのよしなかにも見せけり。是に因つて國々の源氏謀叛むほんを企て、思々に案あんを廻めぐす所に、平家の郎黨らうだう國々に多おほかりければ、略傳はつでんへ聞きたりけり。

十七 兼隆かねたかが討うたるゝ事

かくて頼朝謀叛よりごろむほんのよし、平家の侍和泉判官兼隆さねらひいつみのはんぐわんかねたかが聞きし上、則ち當國山木たうこくやまきが館たちにありけるを、八月十七日の夜、時政父子を始はじめとして、佐々木四郎高綱ささきよしかつな、伊勢いせの加藤次景高かとうじかげたか、景政かげまさ以下の郎從等らうじうらをさし遣つかはして討ち取りけり。是ぞ合戰かつせんの始はじめなりけり。こゝに相摸さもうの國の住人大庭三郎景親ぢうにんおほほのかかげちか平家の重恩ぢうおんを報はうぜん爲に、當國石橋山たうこくいしはしに追つ驅け、さんぐくに戰うたり。これのみならず、武藏上野の兵ども、われ劣らじと馳はせ向ひて防ぎ戰ふ。その中に畠山重忠はたけやまのしげただは、父重義むしげよし、叔父あしふの有重ありしげ、折節平家の勘當かんだうにて京都きやうとに召し置かるゝ最中さいちゆうなれば、その咎とがをもはらし、國土こくどの狼藉らうぜきをも鎮めんと思ひ、向ひけるが、三浦黨頼朝みうらたうよりともの謀叛むほんに與よ力りきせんとて、馳はせ向ひけるが、鎌倉かまくらの由井ゆゐといふ所にて行きあひ、散々に戰ひけるが、重忠しげただうち負けて、けふの命生いのちいきて武藏むさしに歸りけり。その後江戸えど、上總はじめを始として、武藏むさしの國の住人ぢうにんども一千餘騎三浦みうらへおし寄せ、身命しんみやうを捨てゝ戰ひければ、三浦うち負けて今は

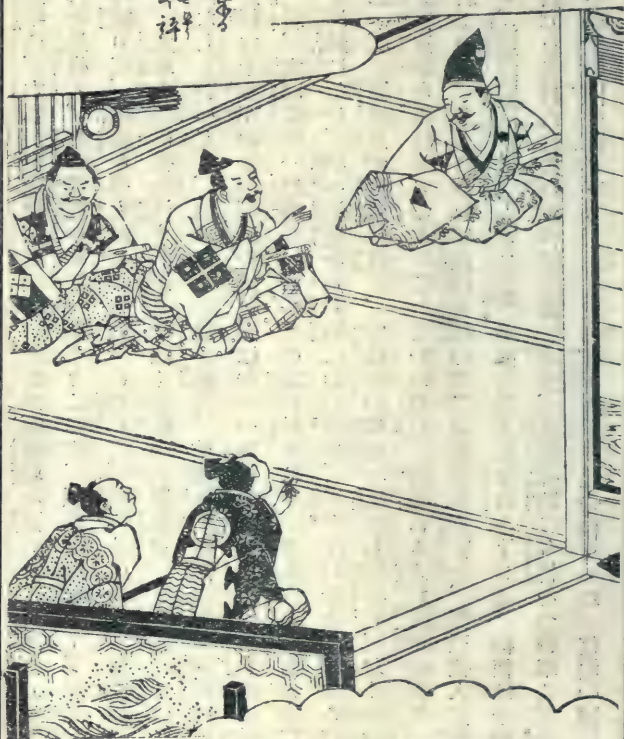
けふけうの假名違ななまがひにて希有きゆう即ち不思議ふしぎの義なるべし

一人―天子
を指す

楊國忠安祿
山―楊國忠
は楊貴妃の
兄安祿山と
共に唐の玄
宗の嬖臣

去ぬる平治元年に、右衛門督藤原信賴の卿、左馬頭源義朝を語りひて、梟惡を企てしに、清盛これを追伐し、件の兇徒を配流せしよりこの方、源氏は退散して平家繁昌す。されば朝恩に誇りて、叡慮を惱し奉ること古今に類なし。剩へその身一人師範にあらずして、忝くも、大政大臣の位を汚す。かくの如く近衛の大將兄弟、左右にならぶこと凡人に於て先例なしといへども、始めてこの義を破る。又佛生の田園を留め神明の國郡を覆し、我が朝六十餘州のうち、三十餘箇國はかの一族知行す。また三公九卿の位、月卿雲客の官職、大略この一門塞ぐ。かやうの驕の餘りにや、さしたる科もなきに、臣下卿相おほく罪科に行ひ、剩へ法皇を鳥羽殿におし籠め、天下をわがまゝにする。つらつら舊記を思へば、楊國忠が叡慮に背き、安祿山が朝章を亂りし惡行も、かくの如くのことなし。人臣王事を奪はざるの外、これていゝ惡行、異國にも未だ先例を聞かず、況やわが朝に於てをや。かよりければ後白河院の第二の皇子高倉宮を、源三位入道賴政謀叛を勧め奉り、治承四年四月二十四日の曉、諸國の源氏に令旨を下さる。御使は十郎藏人行家なり。同じき五月八日に行家伊豆の國に著き、兵衛佐殿に令旨をつけ奉る。令旨の案をかき、やがて常陸の國に下り、一志太三郎先生義憲に此の由をふれ、信濃の國に下り

文光
頼朝
院室とあり
法将軍評
定の図





九月九日禁
中にて催さ
れし宴

八幡三所―
本巻の二十
三段に見ゆ

る月日の光、あまねく君の御恵に洩れたる品はなきにこそ。高きも卑しきも酒は祝にす
ぐれ、神も納受し、佛も憐愍ありとかや。君も聞し召されつる御酒の徳に、過ぎにし憂
きを忘れさせ給ひ、日本國を従へさせ給ふべし。左右の御足にて、そとの濱と鬼界が島
を蹈み給ひけるは、秋津洲残りなく従へさせ給ふべきにや、左右の御袂に月日を宿し給
ひけるは、主上上皇の御後見においては、疑あるべからず候ふ。小松三本頭にいたど
き給へるは、八幡三所の擁護あらたにして、千秋萬歳を保ち給ふべき御瑞相なり。また
南向に歩ませ給ひけるは、主上御在位の時、大極殿の南面にして、天子の御位を踐み給
ふ、とこそ承り候へ。御運を開き給はんこと、これに同じ」と申しければ、佐殿喜び
給ひて、「景延が合するごとく、頼朝世に出づる事あらば、夢合の返答あるべし」とぞ仰
せける。

十六 頼朝謀叛の事

さるほどに頼朝は天下を掌のうちに、いよく思し召し寄り給ひけるは、度々の御瑞
相ども多き故、御謀叛のことと思し召し立ちけり。ことに世間の様を見給ふに、たとへば

馬の寸を云々馬の丈を度るに寸をきといふ也

彭祖—列仙傳に見ゆ

重陽の宴—

一國の守に任ず。桑の木三本より出できたればとて、三木と申すなり。「さてもこの酒は、如何にして出で来るぞ」と尋ね給ふに、せきそが子にくわうりといふ者あり。繼母ことにすぐれて是を憎み、毒を入れくはせけり。されどもくわうり繼母のならひと思ひなずらへて、更に怨むる心なくして、この樹の空洞に入れておき、竹の葉を覆ひて置きたりけるが、初め入れたるは麴となり、後に入れける飯は、天より降る雨露の恵をうけて、美酒とぞなりにける。毒藥變じて藥となるとは、この時よりの言葉なり。また酒をのみて風のさること三寸なれば、三寸とも書けり。これは家隆の卿のいひけるなり。馬の寸をきといへば、その故もあるにや。また風妨ともいへり。風の妨ぐる義なり。又ある者の家に杉三本あり、その木の滴岩のうへに落ちたまり、酒となるといふ説あり。その時は三木と書くべきか。又はしんほうに曰く、新酒百藥の長たりとも書けり。漢書には、せきそみをきて、天命を助くと書けり。又慈童といひし者は、七百歳を経て彭祖と名をかへし仙人、菊水とてあそびけるもこの酒なり。是は法華經普門品の二句の偈を聞きし故に、菊の下ゆく水不死の藥となりけるを、この仙人は用るけるとかや。公にもこれをうつして、重陽の宴とて酒に菊を入れて用る給ふ。上より降る雨露の恵下にさしく

無明―佛教
にて人の邪
見妄執の中
にあるを謂
ふされど、
こゝは只陶
然たる様の
喩なるべし

こしめしけると見つるは理なり。當時君の御有様は、無明の酒に酔はせ給ふなり。然れば酔は遂に醒むるものにて、みきの三文字をかたどり、近くは三月、遠くは三年に、御酔は醒むべし」とぞ申しける。

十五 酒の事

景延かかねて申しけるは、「酒は朋友の徳ありとて、疎きは親み、親しきはなほ親しむ。さるによつて數の異名候ふ。中にもみきと申す事は、昔漢の明帝の御時、三年間渴しければ、水に飢ゑて人民おほく死する。帝大きに歎かせ給ひて、天に祈り給へども驗なし。如何せんと悲み給ひけり。その國の傍にせきそといふ賤しき民あり、かれが家の園に桑の木三本ありけるに、水鳥常におりて遊ぶ。主怪みて行きて見れば、かの木の空に竹の葉覆へるものあり。取りのけて見るに水なり。嘗めて見れば美酒なり。即ちこれを取りて國王に捧ぐ。然るにこの美酒一度口に含めば、七日飢を忘るゝ徳あり。帝感じおほしめして、水鳥の落としおきたる羽をとり、飢ゑて死する者の口に注ぎ給へば、死人悉く蘇り、飢ゑたるものは力を得、めでたしとも云ふばかりなし。即ちせきを召して

一ほん房一
眞字本に一
保房とあり
外の濱―陸
奥津輕郡

爲にめでたき御示現を蒙りて候へ。御耳を敬て、御心を静めたしかに聞し召し候へ。君は矢倉が嶽に御腰をかけられしに、一ほん房は黄金のたいへんざをいだき、實親は御覺をしき、成綱は白銀の折敷に黄金の御盃をする、盛長は白銀の銚子に御盃を進らせつるに、君三度聞し召されて後、箱根の御參詣ありしに、左の御足にて外の濱を踏み、右の御足にては鬼界が島をふみ給ふ。左右の御袂には日月を宿し奉り、小松三本頭にいたゞき、南向きに歩ませ給ふと見奉りぬ」と申しければ、佐殿聞し召して、大きに喜び給ひて、「頼朝この曉不思議の靈夢を蒙りつるぞや。たとへば虚空より山鳩三つ來りて、頼朝が髻に巢をくひ、子を生むと見つるなり。これしかしながら、八幡大菩薩の守らせ給ふ、と頼もしく覺ゆる」と仰せられければ、希代なりける御奇瑞と思はぬ人はなかりけり。

十四 景延が夢合の事

さても景延申しけるは、「盛長が示現に於ては景延合せ候はん。まづ君矢倉が嶽にましましけるは、御先祖八幡殿の御子孫、東八箇國を屋敷どころにさせ給ふべきなり。御酒さ

生きては偕
に老い死し
ては墓穴を
同じくせん
との意
さへの神—
幸神、俗に
縁結びの神
とす

しごとく、遊子いうしはうちに入る事もなくして、月に伴ともなひ歩きしに、これも限かぎりありければ、遂つひに
果敢はかなくなりけり。されども夫婦ふうふもろ共に月に心を留とどめし故に、天上てんじやうの果をうけ、二つ
の星はしとなるとかや、牽牛織女けんぎうしよくぢよこれなり。又さへの神とも申すなり。道祖神だうそじんともあらはれ、
夫婦ふうふの中を守り給ふ御誓おんちかひたのもしくぞ覺おぼえける。また傳へ聞く、漢かんの高祖かうそ伯陽山はくやうざんとい
ふ山にこもり給ひしに、こころ太子もろともに、紫雲しうんを案内しるべとして深き山路ふかやまちにわけ入り
し志、これには過ぎじとぞ見えし。さて佐殿すけどのへ竊ひそかに人を參らせ、かくと申させ給ひしか
ば、鞭むちを揚あげてぞかの山へ登り給ひける。目代もくだいは尋ねけれども、なほ山深く入り給ひけ
れば、力及ばず尋ね得ず。北條は知らず顔がほにて年月をぞ送りける。伊東が振舞ふるまひにはかは
りけるにや、果報くわはうのいたすところなり。

十三 盛長もりながが夢見ゆめみの事

こゝに懷島ふじこころじまの平權守景延へいごんのかみかげのぶといふ者あり。この程兵衛佐殿伊豆の御山おやまに忍びてまします
由傳へ聞き、「斯様かやうの時こそ奉公ほうこうをば致さめ」とて、一夜宿直このゐにまゐりけり。藤九郎盛長とうきゅうもりなが
も同じく宿直このゐつかまつる。夜半やはんばかりに打ち驚おどきて申しけるは、「今夜盛長もりながこそ、君の御

足曳の―山の枕詞

人召し具して、深き叢をわけ、足に任せて行く程に、足曳の山路を越え、夜もすがら伊豆の御山にわけ入り給ひぬ。契朽ちずは出雲路の、神の誓は浅からず、妹脊の仲はかはらじとこそ守り給ふなれ。たのむ惠の朽ちやらで、末の世かけてもろ共に、住みはつべし、と祈り給ひけるとかや。

十二 牽牛織女の事

そもく、出雲路の神と申すは、昔けいしやうといふ國に、男をば伯陽と申し、女をば遊子とて夫婦の者ありけるが、月に伴ひて、夜もすがら寝る事なくして道に立ち、夕には東山の嶺に心をすまし、月の遅く出づるを恨み、曉は西天の雲に嘯き、曇なき夜を喜び、雨雲の空を悲みて年月を送りしに、はくやう九十九の年、死門に臨まんとせし時、ゆうしに向ひ申すやう、「われ月に伴ひて愛づること世の人に超えたり。獨なりとも月を見ることを、怠ることなかれ」といひければ、ゆうし涙を流して、「汝まさに死なば、われ獨月を見ることあるべからず。諸共に死なん」と悲めば、はくやう重ねて申すやう、「偕老同穴の契百歳にあたり。月を形見に見よ」とて、遂に果敢なくなりけり。契り

偕老同穴―

ゆゑしき—
容易ならぬ

伊豫殿—伊
豫守頼義

目代—國司
の代官

その後文の數かきなりければ、夜なく忍びて袂をぞ重ね給ひける。かくて年月を送り給ふほどに、北條四郎時政京より下りけるが、途にてこの事を聞き、ゆゑしき大事出できたり、平家へ聞えては如何ならん、と大きに騒ぎ思ひけり。さりながら靜にものを案ずるに、時政が先祖上總守直隆は、伊豫殿關東下向の時、聲に取り奉りて八幡殿以下の子孫いできたり、今に繁昌ありつる事、世に隠れなしと思ひけるが、いかゞせましとぞ思はれける。

十一 兼隆を聲にとる事

かくて北條はこの事いかにせんと案ずるに、世に聞えなくば、末惡しざまにはあらじ、と思ひけれども、平家の侍に、山木判官兼隆といふ者を同道して下りけり。道にて何となき事の序に、御分を時政が聲に取らん、と云ひたりし言葉の違ひなば、源氏の流人聲に取りたり、と訴へられては、罪科遁れ難し。如何せん、と思ひければ、伊豆の國府に着き、かの目代兼隆に云ひ合せ、知らず顔にて女を山木判官に取らせけり。されども佐殿に契や深かりけん、一夜をも明さで、その夜の中に逃げ出でて、近く召し使ひける女房一

を取り出し、また唐綾からあやの小袖こそで一襲かさね添そへ渡わたされける。十九の君なのめならずよろこに喜びて、我が方に歸かへり、日比ひこほの所望しよきうかなひぬ。この鏡かみの主ぬしになりぬ、と喜びけるぞ愚おろかなる。この二十一の君をば、父ちちことに不便ふびんに思おもひければ、この鏡かみを譲ゆづりけるとかや。さる程ほどに佐殿すけのどの、時政ときまさに女むすめあまたあるよし聞きこし召めし、伊東いとうにも懲こり給たまはず、うはの空なる物思ものおもひを、風のたよりに音おとづればや、と思おもし召めし、内々ないく人に問とひ給たまへば、「當腹たうはら二人は殊ことごとの外惡女あくぢよなり、先せん腹はら二十一のかたへ、御文おんふみならば賜たまはりて參まゐらせん」と申しけり。伊東いとうにて物思ものおもひしも繼母まことははゆゑなり。いかに惡わるくとも當腹たうはらを、と思おもし召めし定められて、十九の方かたへ御文おんふみをぞ遊あそばしける。藤九郎盛長とうきゅうせいながは是こゝろを賜たまはりて、つくづく思おもひけるは、當腹たうはらどもは殊ことごとの外惡女あくぢよの聞きこえあり、君思おんおもし召めし遂さげんことあるべからず。さあらば北條きたじょうにさへ御仲達おんなかたちはせ給たまひては、何方いづかたに御入おんいりあるべき。果報くわほうこそ劣おとり奉ほうるとも、手跡しゆせきはいかで劣おとり奉ほうるべき、とて、御文おんふみを二十一の方かたへぞ書きかへける。さて少將せうしやうの局つばねして參まゐらせたりけり。姫君ひめぎみ御覽ごらんじて、思おもし召めし合あはさるることあり。この曉白あかつき鳩はと一つ飛とび來きりて、口より黄金こがねの箱はこに文ふみを入れて吹ふき出し、妾わらはが膝ひざの上うへにおき、虚空こくうに飛とび去いりぬ。展ひらきて見みれば佐殿すけのどのの御文おんふみなり。急いそぎ箱はこに藏かくむる、と思おもへば夢なり。今現うつしに文ふみを見る事ことの不思議ふしぎさよ、と思おもし召めしてうち置きぬ。

しかば、斯か様のことを思ひ出しけるにや。けにも景行けいかうの帝みかど、橘たちばなを願ねがひ誕生たんじやうありし事、いく程ほどなくて若君わかぎみいできたり。頼朝よりともの後あとをつぎ、四海よそを治め奉る。さればこの夢をいひ威おごして、買ひ取らばや、と思ひければ、「この夢返すく、恐おそしき夢なり。よき夢を見ては三年みさき語らず、惡あしき夢を見ては七日のうちに語りぬれば、大きな慎つつしみあり。如何し給ふべき」とぞ威おごしける。十九の君は伴いつはりとは思ひも寄らで、「さては如何せん、よきに計らひてたびてんや」と大おほきに恐おそれけり。「されば斯か様に惡あしき夢をば轉てんじかへて、難なんを遁のがるゝところ聞きて候へ」。「轉てんずるとは何とする事ぞや。自ら心得がたし。計らひ給へ」とありければ、「されば賣り買ふといへば遁のがるゝなり。賣り給へ」といふ。買ふ者のありてこそ、賣られ候へ、眼めにも見えす手にも取られぬ夢の、など現うつに誰か買ふべし、と思ひ煩わづらふ色見えぬ。「さらばこの夢を妾わらは買ひ取りて、御身の難なんを除き奉らん」といふ。「自らが事は素もとより恨うらみなし。御爲みこころ惡わるしくば如何せん」といひければ、「さればこそとよ、賣り買ふといへば轉てんずるにて、ぬしも自らも苦くるしかるまじ」と、誠まことしやかにこしらへければ、「さらば」と喜よろこびて賣り渡しぬ。その後に悔くやしくやなりなまし、と覺おぼえけり。二十一の君はこの詞ことばにつきて、「何にてか買ひ奉らん。素より所望しょうぼうの物なれば」とて、北條ほうとうの家に傳つたはる唐からの鏡

間守―田道
間守のこと

さつき待つ
云々―古今
集読人不
知の歌也

と、日本紀には見えたり。然るにこの橘は常世の國より三つまるらせたり。折節后懷妊し、かの橘を用る給ひて、懷胎の惱絶えて、御心すどしかりけり。さればかやうのももありけるよ、と朝夕願ひ給へども、我が國になき木の實なりければ力なし。爰に間守といふ大臣あり。この願を聞き、「易き事なり。異國にわたり取りて参らせん」といひて立ちければ、喜び思召して、「さては何日の比歸朝すべき」と宣旨ありければ、「五月には必ず参るべし」と申して渡りぬ。その月を待ても見えずして、六月になりて、われは留まりて、人して橘を十まるらせ、なほ尋ねて参るべし、とて留まりけれども、橘の進る事を、后大きに喜び給ひ、用る給ふ。その徳によりて皇子御誕生あり。御位を保ち給ふ事百二十年なり。景行天皇の御事これなり。その大臣の袖の香に、橘の移り來りけるを、猿丸大夫が歌に、

さつき待つ花たちばなの香をかけばむかしの人の袖のかぞする

と詠みたりけり。我が朝に橘植ふそめけること、この時よりぞ始りける。また橘に盧橘といふ名あり。去年の橘に覆して置けば、今年の夏まであるなり。その色すこし黒きなり。盧の字を黒しとよめばなり。さてもこの二十一の君、女性ながら才覺人にすぐれ

橘の由來—
著く事實に
違へり

さてもかの時政と申すは、平家の末葉といへども、系圖遠くなりぬれば、遠國に住みけ
れども、國一番の大名なり。彼に女三人あり、一人は先腹にて二十一なり。二三は當腹
にて、十九十七にぞなりにける。中にも先腹二十一は美人の聞えあり。殊に父不便に思
ひければ、妹二人よりは優れてぞ思ひける。さる程にその比、十九の君不思議の夢をぞ
見たりける。たとへば、何處ともなく高き峯に登り、月日を左右の袂にをさめ、橘の三
つなりたる枝を。挿頭すと見て思ひけるは、男の身なりとも、みづからと月日を取らん
事あるまじ。ましてや女の身として思ひも寄らず。まことに不思議の夢なり。姊御は知
らせ給ふべし。問ひ奉らん、とて、急ぎ朝日御前の方へ移り、細々と語り給ふ。二十一
の姊君は委しく聞きて、「まことにめでたき夢なり。我等が先祖は今に觀音をあがめ奉る
故、月日を左右の袂にをさめたり。また橘をかさす事は、本説めでたき由來あり」とて、
景行天皇の御事をぞ思ひ出しける。

十 橘の由來の事

そも、橘といふ木の實のはじまりは、人皇十一代の帝垂仁天皇の御時より出でける

すだく—集
る

八 頼朝北條へ入り給ふ事

かくて佐殿は竊にまぎれ出でさせ給ふ。比は八月下旬のことなるに、露吹き結ぶ風の音わが身ひとつに物寂しく、野邊にやすだく蟲の聲、折からことに哀なり。有明の月だに、いまだ出でざるに、いづくをそことも知らねども、途をかへて田の面を傳ひ、草をわけつゝ途すがらの御祈誓には、「南無正八幡大菩薩の御誓に、我が末代に源氏の世となりて、東國に住して夷を平けん、とこそ願ひまします。然るに人すたれ氏亡びて、正統残りて唯頼朝許なり。こんど運をひらかずば、誰あつて家を興さんや。世既に澆季にして、人後胤なし。早く頼朝が冥慮にまかせ、東夷をしたがへ、喜悅の眉を開かしめ給へ。然らずば、せめて當國伊豆の國の匹夫となし、長く本望を遂けしめ給へ」と、御祈誓夜もすがらなり。大菩薩の感應にや、いく程なくして御世に出で給ひけり。さても北條の四郎時政が許へ入り給ひ、一向かれをうち頼みて、年月をこそ送り給ひけれ。

九 時政が女の事

冥加―神佛
の加護

大鹿毛―馬

君臣父子の威を以つて恐るべし。況や討たんとするは親なり、告げ知らするは子なり、かたがた不審に覺えたり。いかさま我を欺罔るにこそ、とて、うち解け給ふ事もなし。「誠に思ひかけられなば、何處へ行きても遁るべきか。されども左右なく自害するに及ばず。人手にかゝらんよりは、汝早く頼朝が首を取りて、父入道に見せよ」と仰せられければ、祐清承りて、「仰せの如く語らひ難き人の心にて候ふ。はちを取りて衣のくびに隠して、しんしの心に違ひしも、伴る企圖なり。君思し召すも御理、誠の志とは思し召さずして、いしやうのはう尤も御疑ことわりなり。忝くも、不忠申し候はゞ、當國二所大明神の御罰を蒙り、弓矢の冥加長く盡きて、祐清が命御前にて、果て候ひなん」と申しければ、佐殿聞し召し、大きに御悦ありて、「かやうに告げ知らする志ならば、いかにもよきやうに相計ひ候へ」と仰せければ、祐清承つて、「藤九郎盛長、彌三郎成綱をば、君御座のやうにて、暫くこれに置かれ候ふべし。君は大鹿毛に召されて、鬼武ばかり召し具し、北條へ御忍び候へ」と申しおきて、「御討手もや参り候はん。事を延ばし候はん」とて、急ぎ御前を立ちにけり。

八劍大明神
―熱田神宮
内に八劍神
社あり

暫く案じて、「天寶十四年の秋七月七日の夜、天にありて願はくは比翼の鳥、地にあらば願はくは連理の枝、天長地久にして盡くる事なからん、と知らず奏せんに、御疑あるべからず」といひて、玉妃は去り給ひぬ。方士歸り参りて、皇帝に奏聞す。「さる事あり、方士誤なし」とて、飛車といふ車に乗り、我が朝尾張の國に天降り、八劍大明神と現れ給ふ。楊貴妃は熱田の明神にてぞわたらせ給ひける。蓬萊宮は即ちこの所、とぞ申し候ふ。兵衛佐殿は、若君北の御方の御行方をも、知らせ奉るものなかりしかば、慰み給ふ心もなかりけり。

七 頼朝伊東を出で給ふ事

かくて頼朝は何となるべき憂き身ぞや、と思ひ暮し給ふに違はず、入道剩へ、佐殿をも夜討にし奉らんとて、郎黨を催しける。ことに祐親が次男伊東九郎祐清といふものあり、窃かに佐殿へ参り申しけるは、「親にて候ふ祐親こそ、物に狂ひ候うて、君を討ち奉らんと仕り候へ。何處へも御忍び候へ」と申しければ、頼朝聞し召し、ちやうさいわうが害に遭ひしも、伴る事は知らでなり。笑の中に刀を抜くは習なり。人の心知り難ければ、

こうけいー
紅閨歎

が子を失ひ、かなはぬ別の袖の涙、こうけいにつらなりし限なり。

六 玄宗皇帝の事

されば北の方の御別、あかぬ御名残の有様、唐に玄宗皇帝に楊貴妃と申せし後は、安祿山が戦の爲に奪はれ、つひに馬嵬が原にして失ひ奉る。皇帝その御思絶えずして、蜀の方士に仰せ、「魂のありかを尋ねよ」とあり。方士神通にて、一天三千界を尋ねまはりしに、こよに大眞苑とうちたる額あり。即ち蓬萊宮これなり。こよに到つて玉妃に逢ひぬ。この處を見れば、浮雲重なりて人跡の通ふべき處ならねば、釵をぬきて扇を敲く時、雙鬟童女二人出でて、「何處より如何なる人ぞ」と問ふ。「唐の太子の使、蜀の方士」と答へければ、「さらばそれに待ち給へ。玉妃にこのよし申さん」とて、内に入りぬ。處は雲海沈々として東天に日暮れなんとす。誠に悄然として待つところに、玉妃出で給ふ、即ちこれ楊貴妃なり。左右の童女七八人あり。方士に揖して、皇帝の安寧を問ふ。方士細やかに答ふ。いひ終りて、玉妃あひ給へる印とや、玉の釵をぬきて方士にたぶ。その時方士「これは世の常にあるものなり、しせうにたらず。叡覽に如何なる密契かありし」。玉妃

揖して一會
釋して

餘れる振舞は、行末いかど、とぞ覺えける。剩へ、北の御方をも取り返し、同じ國の住人に江馬の小次郎にあはせけり。名残惜しかりつる衾の下を出で給ひて、思はぬ方へ今更新枕、かた敷く袖に移り變りし御涙、さこそと思ひやられたり。これも祐親が平家へ恐れ奉ると思へども、わうさうとうけんぶん三公たるにも、やうゆうちうしよぶんが、其の門に詳にせんには如かずと見えたり。

五 王昭君が事

むかし漢の王昭君と申せし后を、胡國の夷に取られ給ひしに、名残の袖は盡き難くして、歎き悲み給ひけるに、王昭君歎の餘に申しけるは、「自らが歎きし褥に、わが姿を寫し留めて歎き給へ。われ夢に來りて逢ふべし」と契りけり。漢王悲みて、かの褥を枕にして泣き伏したまひしかば、夢ともなくまた現ともなく、來りて折々あひにけり。かの昭君が胡國への途すがら、涙にくるゝ四方の山とも里ともわきかねて、袖の乾る間もなかりけり。思ひの餘りに、舊棲を顧みて、「滄波途遠くしては、峽山深し」と詠じつゝ、漢宮萬里の旅の空、今の思に知られたり。佐殿も若君失はれさせ給ひし御心、くわらく

いつき―大
切にし
烏澹がまし
く―愚しく

柴漬―魚を
とる爲に柴
を束れて水
中に沈め置
くもの嬰兒
をその如く
にしたる也

女にあひ、「三つばかりの子の、ものゆゑしきを抱きて、前裁にあそびつるを。誰そと問へば、返事もせて遁けつるは誰にや」と問ふ。繼母の事なりければ、折を得て、「それこそ、御分の在京のあとに、いつき傳き給ふ姫君の、妾が制するを聞かで、美しき殿してまうけ給へる公達よ。御爲にはめでたき孫御前よ」と、烏澹がましく云ひなしけるこそ、實に末も絶え、所領にも離るべき例なれ。されば讒臣は國をみだし、富める人は家を破るといふ言葉、思ひ知られて、あさましかりける次第かな。祐親これを聞き、大きに腹を立て、「親の知らざる聲やある。誰人ぞ今まで知らぬ不思議さよ」と怒りければ、繼母は訴へすましぬるよと嬉しくて、「それこそ、世にありてまことに便まします流人、兵衛佐殿の若君よ」とて、をかしけに嘲弄しければ、いよく腹を立て、「女もち餘りておき所なくば、乞食非人などには取らするとも、今時源氏の流人聲に取り、平家に咎められては如何あるべき、毒の蟲をば頭を挫ぎて腦を取り、敵の末をば胸を割きて膽を取れ、とこそいひ傳へたれ。詮なし」とて、郎黨を呼び寄せて、若君いざなひ出し、伊豆の國松川の奥を尋ね、とどきの淵に柴漬にし奉りけり。情なかりし例なり。是や文選の辭に、しやうにみちては衰を豊年に顯し、朝にありては果を陰德に顯す。まことに身に

經に相具したりしを、取りかへして、土肥彌太郎にあはせけり。三四は未だ伊東が許にぞありける。中にも三は美人の聞あり。佐殿聞こし召して、しほのひる間のつれづれと、忍びてつまを重ね給ふ。頼朝御志淺からで、年月を送り給ふ程に、若君一人出で給ひにけり。

四 若君の御事

斜ならず一通ならず
かほばせき
くに―腹し
き國か

佐殿若君いでき給ひし事を、斜ならず悦ひ思し召して、御名をば千鶴御前とぞつけ給ひける。つらく往事を思ふに、舊主が住ひし古風のかほばせきになれども、勅勘を蒙りて、習はぬ鄙の住居の心地でありつるに、この者出来たる嬉しさよ、十五にならば秩父、足利の人々、三浦、鎌倉、小山、宇都宮を相語らひ、平家にかけて合せ、頼朝果報の程を試さん、ともてなし思ひ傳き給ふ。かくて歳月を経るほどに、若君三歳になり給ふ春の比、伊東京より大番つとめて下りしが、暫は知らざりけり。ある夕暮に花園山を見ておはしければ、折節若君乳母に抱かれ、前裁に遊び給ふ。祐親これを見て、「彼は誰そ」と問ひけれども、返事にも及ばず遁けにけり。怪しく思ひて、即ち内に入り、妻

頼朝作東の娘の
許へ通せぬ国





長生殿に云々―和漢朗詠、長生殿裏春秋富不老門前日月

り、しやうかう殿に寶を積み、一時に燒きすて、災難の疑を止むべし」と申しければ、左右に及ばずとて、たちまちに上、件の曜宿を繰り、諸天を請じ奉りて、かの殿どもを燒きすてられにけり。さてこそ今の世までも、魃鼠啼き騒げば、謹みて水をそよぎ咒ふ、この義によつてなり。されば七百人の敵亡び、七星眼前に降り光を和け給ふこと、七難即滅、七福即生の明文に適ひぬるをや。今の泰山府君の祭これなり。大王かの殿を燒き、政をし給ひて、御位長生殿に榮え、春秋を忘れて、不老門に日月のかけ靜にめぐり、吹く風枝を鳴さず、降る雨壤を動かさず、永久の御世に榮え給ひけるとかや。めでたかりし例なり。

三 賴朝伊東におはせし事

そもく兵衛佐殿、御世になり給ひなば、伊東北條とて左右の翼にて、いづれ勝負あるべきに、北條の末は榮え、伊東の末は絶えける、由來を委しく尋ぬるに、賴朝十三の歳、伊豆の國に流されておはしけるに、かの兩人をうち頼みて、年月を送り給ひけり。然るに伊東の次郎に女四人あり。一は相摸の國の住人三浦介が妻なり。二をば工藤一蘭祐

下剋上—下
として上を
凌ぐ事

大ぎやう—
大業歟

の人形あり。大王の貌を悉くつくり寫して、調伏の壇を立て幣帛供具を備へたり。わ
りて見給へ、東夷七百人ありぬべし。亡すべし」といふ。即ち大王上人に申して、めで
たき聖を請じ奉り、かの柱をわりて見給ふに、違はず。事も凄じきといふも餘りあり。
やがて壇を破り、勘文に任せて、いろ／＼の諸人を集め、その中に怪しきを召し取
り、拷問しければ、悉く白狀す。よつて七百人の敵を悉く召しとり、三百人の首を斬
り給ひぬ。残り四百人斬らんとする時、天下暗闇になりて、夜晝の境もなくして色を失
ふ。人民道路に倒れ伏す。大王驚きて曰く、「朕露ほどの私ありて、かれらが首を斬る
ことなし。下として上を嘲り、下剋上のいましめ、後の世を思ふ故なり。もし又朕に私
あらば、天これを誡むべし。これを測らんとて、三七日飲食を止めて高床に上り、足の
指を爪立てよ、一命を此處にて消えなん。もし誤なくば、諸天憐み給へ」と祈誓し
て、仁王經を書かせられけり。三七日に満ずる時、七星眼前と天降り見え給ふ。やゝあ
りて日月星宿光を和け給ふ。さればこそ政に横儀はなかりける、とて、残る四百人
をも斬り給ひぬ。こよに又博士參内して奏する、「大敵滅びはて、御位長久なるべき事餘
儀なし。されども調伏の大ぎやう、そのこゝろ残りて恐し、所詮に天降り給ふ七星を祭

りければ、三日のうちの御歡おんよろこび、または御歎おんなげとぞ申しける。それにあはせて申すごとく、次の日鳥羽殿とよはのどのを出し奉りて、八條烏丸やちからすまへ入れ奉りて、「これ御歡おんよろこび」とぞ申しける。次の日、皇子高倉宮御謀叛こうくらのみやごひんあらはれ、奈良路にて討たれさせ給ひぬ。かやうの愼つしむふ不思議しぎなりける次第しだいなり。

二 泰山府君たいさんぶくんの事

沈麝—沈ば
木、麝は、獸
より取りた
る香料

むかし大國に大王あり。樓閣ろうかくを好み給ひて、明暮宮殿めいふくぐうでんをつくり給ふ。中にもしやうかう殿でんと號して、高さ二十丈の高樓かうろうを建て、柱はしらには赤銅あかがね、桁梁けたうはりは金銀きんぎなり、軒のきに珠玉瓔珞しゆぎよくやうらくをさけ、壁かべには青蓮しやうれんの華鬘けまんをつけ、うちには瑠璃るりの天蓋てんがいをさけ、四方はうに瑪瑙めなうの幡はたを吊り、庭にはには珊瑚琥珀さんごくはくを敷き滿みてり。吹く風降る雨のたよりに沈麝ちんじやの匂におひに漂たづえへり。山を築きては亭ちんを構かまへ、池をほりては舟を浮べ、水に遊べる鴛鴦せんあうの聲、ひとへに淨土じやうどの莊嚴しやうげんに同じ。人民じんみんこぞりて圍繞ゐねうす。佛菩薩ぶつさつの影向やうがうもこれには如かじとぞ見えし。されば大王玉樓ぎよくろう金殿きんでんに至り、つねに遊覽いうらんす。ある時大講堂だいかうだうの柱はしらに鼯鼠いたち二つ來りて、啼なき騒さわぐこと七日なり。大王怪あやしみ給ひて、博士はかせを召して占うらなはしむるに、勘かんへて奏聞そうもんす。「この柱はしらのうちに七尺

ゆゑしく―
立派に

へうじ―表
事前光の事
なるべし

望^{のぞ}たりぬ」といひて、刺^さし違^{ちが}へく残^{のこ}らず死^しにけり。八幡^やは腹^{はら}十文字^{もんじ}に掻^かき破^{やぶ}り、三十七
にて失^うせにけり。則^{すなは}ち大見^{おほみ}小藤^{ことう}太^たが許^{もと}へ押^おし寄せたり。此^この者^{もの}は元^{もと}より心^{こころ}さがりたる者
にて、八幡^やが討^うたるを聞^ききて、取^とる物^{もの}も取^とりあへず落^おちたりしを、彼^{かの}の境^{さかひ}に追^おひ詰^つめ
て搦^{から}め取^とりて、川^{かは}の端^{はた}にて首^{くび}を刎^はねけり、九郎^{くわ}は二人^{ふたり}が首^{くび}を取^とりて、父^{ちち}入道^{にゅうだう}に見^みせけれ
ば、ゆゑしくも振舞^{ふるま}ひたる、とぞ感^{かん}じける。曾我^{そが}にありける河津^{かづ}が妻女^{さいにょ}も、喜^{よろこ}ぶこと限^{かぎり}
なし。祐清^{すけきよ}は入道^{にゅうだう}が憤^{いきどほり}をやめ、兄^{あに}が敵^{かたき}を討^うちし孝行^{かうかう}、一方^{かた}ならぬ忠^{ちゅう}とぞ見^みえける。さ
ても八幡^や三郎^{はたの}が母^{はは}は、莆美^{くすみの}入道^{にゅうだう}寂心^{じやくしん}が乳母^{めの}子^こなり。八旬^{じゆん}にあまりけるが、残^{のこ}り留^{とど}りて、
思^{おも}ひ餘^{あま}りに口説^{くは}きけるは、「主君^{しゅくん}の爲^{ため}に命^{いのち}を捨^すつる事は本望^{ほんまう}なれども、この亂^{らん}の起原^{おこり}を尋^{たづ}
ぬるに、過^かぎにし親^{おや}の讓^{ゆづり}を背^そき給^{たま}ひしによつてなり。然^{しか}るに寂心^{じやくしん}世^よにましくし時^{とき}、公^{きん}
達^{たち}あまた竝^{なら}みするて、酒宴^{しゆえん}なかばの折節^{せつせふ}、持^もち給^{たま}ひたる盃^{さかずき}の中^{なか}へ、空^{そら}より大^{おほ}きなる鼬^{いた}
鼠^{ねず}一つ落^おち入^いつて、御膝^{おんひざ}の上^{うへ}に飛^とびお^おりぬと見^みえしが、何處^{いづく}ともなく失^うせぬ。希代^{きたい}不^ふ思^し
議^ぎなりとて、やがて勘^{かへ}へさするに、大^{おほ}きなるへうじ慎^{つし}み給^{たま}へ、と申^{まを}したりしを、さした
る祈禱^{きたう}もな^なく過^かぎ給^{たま}ひぬ。幾程^{いくほど}なくして寂心^{じやくしん}は隠^{かく}れ給^{たま}ひけり。さればにや白河^{しらかは}法皇^{ほふわう}も
烏羽^{さば}の離宮^{りきう}に渡^わらせ給^{たま}ひしとき、大^{おほ}きなる鼬^{いた}鼠^{ねず}参^{まゐ}りて、啼^なき騒^{さわ}ぎけり。博士^{はくせ}に御尋^{おんたづね}あ

曾我物語 卷第二

一 大見八幡を討つ事

三千世界は
云々―都良
香竹生島に
ての作和漢
朗詠に出づ

ひた兜―
同甲冑を着
して
矢庭に―即
座に

三千世界は眼の前に盡き、十二因縁は心の裏に空し。憂き世に住むも捨つるも、安からぬ命、いつまで長へて、あらましの身に暮さまし。伊東入道は何につけても、身の行末のあぢきなくして、子息九郎祐清を呼びよせて、「入道が生きての孝養と思ひ、大見八幡が首を取りて見せよ」といひければ、「承りぬ。この間も内々案内者をもつて見せ候へば、他行のよし申し候ふ。もし歸り候はゞ告げ知らすべき由申す者の候ふによつて、待ち候ふ。餘し候ふまじ」とて座敷を立ちぬ。幾程なくして「來りぬ」と告げければ、家の子郎黨八十餘人、直兜にて、鹿野といふ所へ押し寄せたり。八幡三郎はさるものにて、「思ひ設けたり、何處へか退くべき」とて親しき者ども十餘人籠め置きたりしが、矢ども打ち散らし、さしつめ引きつめとりぐ散々に射ける。矢庭に敵あまた射おとし、矢種盡きしかば、さし集りて、「主のために命を捨つる事、露ほども惜しからず。所詮の

塞す―變ふ

入道かあた
り―入道の
縁族せいぢよは
云々―未詳
きんごく―
禁獄か

たる祖父やうばを頼み給ふかや、それ更に叶ふべからず。三郎なければとて、幼いものども數多あれば、露ほども疎ならず、偏に祐重が形見とこそ思ひ奉れ。如何なる有様にても、身を塞さずして、幼いものどもをも育て人となし給へ。されば今更に疎き方へましまさば、われも人も見奉る事叶ふまじ。相摸國曾我太郎と申すは、入道所縁あるものにて候ふ。折節この程、年比の妻女におくれて、歎未だ晴れやらす候ふと承り候ふ。それへやり奉るべし、自ら心をも慰み給へ。入道があたりなれば、隔ての心はあらず」と細々とぞいひける。さて女房にはやがて人をつけ、厳しく守らせければ、尼になるとき隙もなし。即ち入道曾我太郎が許へ、この由委しく文にかきて遣はしければ、祐信文を見て大きに喜び、やがて使とうち連れ、伊東へ越して、子どももろ共に迎へ取りて歸りけり。いつしか斯る振舞は、返すくも口惜しけれども、さる事なれば怨みながらも月日をぞ送りける。これをもつて昔を思ふに、せいぢよは夫のためにきんごくにとめられ、はくえいは夫に後れ、胡の棲處になれしも、心ならざる怨しさ、今さら思ひ知られたり。

忌は―忌中
になりてゝ
り

め怨むべからず」とて、やがて棄てんとせし所に、河津三郎が弟伊東九郎祐清といふものあり。一人も子を持たざりければ、この事を聞き、女房いぞき参りて、「まことや今の幼人を棄てん、と仰せらるゝ由を仄聞きたり。如何でかさる事あるべきぞ。なき人の形見にも見もし給はず、棄て給はんこと罪深かるべし。また善惡の事も、それを節と思へば、折々におもひ出す事の端になるものを、しかも男子にてましませば、妾にたび給へ。養ひ立てゝ、一家の形見にもせん」といひければ、「この身の有様にて身に添ふることと思ひも寄らず候ふ、さやうに思し召さば」とて取らせけり。やがて心易き乳母をつけて養育す。名をは御房とぞいひける。さる程に忌は八十日、産は三十日にもなりけり。百ヶ日に當らん時、必ず尼になりぬべし、とて、袈裟衣をぞ用意したりける。

十六 女房曾我へうつる事

さても、河津が女房は、月日の重なるに従つて、いよく出家遁世の心を思ひ立ちければ、伊東入道この由を傳へ聞きて、人して申しけるは、「まことや、姿を變へんとし給ふなると聞く。子どもをば誰に預け育めとて、さやうの事をば思ひ立ち給ふぞ。老い衰へ

砌—折

指をさして、「かれこそ淨土の父よ」といひければ、一萬弟の箱王が手をひき、「いざや父御の許にまゐらん」と急ぎけれども、箱王は三つになりければ、歩むにはかもゆかず、急ぐ心に弟をすてよ、卒都婆の中を走り廻り、空しく歸りて母の膝の上に倒れ臥して、「佛の中にもわが父はまします」とて泣きければ、乳母も俱に泣き居たり。その日の説法の砌より、一萬が振舞にこそ、貴賤袂を濡しけり。四十九日には八道を供養すとかや。

十五 御房が生るゝ事

さても河津が佛事過ぎしかば、その次の曉方に、女房例ならざれば、人々やがて心得しかば、九月半と申すには、産の紐をぞ解きたりける。誠にこの程の歎にはいかど、と案じけるに、何の恙もなく男子を生みけり。母申しけるは、「おのれは果報すくなきものかな。今少し疾く生れて、などや父を見ざりけるぞ。蜉蝣といふ蟲こそ、朝に生れて夕に死するなれ。汝が命かくの如し。妾も尼になり、山々寺々の籠に閉ぢ籠り、花を摘み水を汲み、佛に供へ奉り、汝が父の孝養にせん、と思へば、身には添へざるぞ。ゆめゆ

身さへ只ならず―懷妊中の身也

六道―地獄餓鬼畜生阿修羅人
墓目―鰐の一種、木にて造り穴ありて鳴る物を傷つけずして取るに用ふ

先をも知らぬ幼きものどもにうち添へて、身さへたどならず。様をかへん、と思へども、尼の身にて過ぐさんところの體も見苦し。また淵河へ沈まんと思ふにも、この身にて死しては、罪深かるべし、と聞けば、ともにかくにも女の身ほど、心うきものはなし」と口説き立て、起臥に泣くより外の事ぞなき。一日片時も忍ぶべき身にてなかりしが、明けぬ暮れぬとせし程に、五七日にもなりにけり。

十四 伊東が出家の事

かくて、父伊東次郎は逆さまなる事なれども、かの者の菩提を弔はんが爲に、出家して六道にあて、三十六本の卒都婆を造立し奉る日、聽聞の貴賤男女、數を盡して參詣する所に、五つになりける一萬が、父の墓目に鞭を取りそへて、「これは父のもの」とて提げければ、母これを見て呼び寄せて、「亡き人のものをば持たぬ事ぞ。みなく捨てよ。行く末はるかのものぞかし。汝が父は佛になり給ひて、極樂淨土にましますぞ。妾もつひには參るべし」といひければ、一萬喜びて、「佛とは何ぞ、極樂とは何處にあるぞや。急ぎましませ、われも行かん」とせめければ、母はいひやる方もなくして、卒都婆の方に

菩提—梵語
佛道の意

三つにぞなりにける。母おもひの餘に、二人の子どもを左右の膝に据ゑ置き、髪かき撫で泣く／＼申しけるは、「腹のうちの子だにも、母のいふ事をば聞き知るものを、まして汝等は五つや三つになるぞかし。十五十三にならば、親の敵を討ちて妾に見せよ」と泣きければ、弟は聞き知らず、手慰して遊びゐるばかりなり。兄は死したる父が顔をつくづくと守りて、わつと泣きしが、涙を抑へて、「いつか大人しくなりて、父の敵の首とつて、人々に見せまゐらせん」とて泣きしかば、知るも知らぬも、おしなべて袖を絞らぬ人はなし。なほも名残を慕ひかね、三日までぞおきたりける。黄泉幽冥の道は如何なる所なれば、一たび去りて二度と歸らぬ習なれば、力及ばず、泣く／＼送り出し、夕の煙となしにけり。女房一つ煙とならんと悲みけり。伊東次郎申しけるは、「恩愛の別夫妻の歎、いづれか劣るべきにはあらねども、憂き世の習力及ばず候ふ。親におくれ夫妻に別るゝごとに命を失ふものならば、生老病死もあるべからず。別は人毎のことなれども、思ひすぐれば自ら忘るゝ心のあるぞとよ、と憂きにつけて身を全くして、後世菩提を弔ひ給へ」とさま／＼に慰めければ、「誠に理なれども、さし當りたる悲しさなれば」とて、悶え焦れけり。「夫の別は昔も今も多き所なり。別の涙袂に留まりて乾く間もなし。あと

や―呼びか
けの詞

あやしの―
卑しき

とすれども、今はそれもかなはず、誰々も近く御いり候ふか。御名残こそ惜しく候へ」とて、父が手に取り付きにけり。伊東涙をおさへて申しけるは、「未練なり。汝敵は覺えずや」といふ。「工藤一薦こそ意趣ある者にて候へ。それに只今大見と八幡見え候ひつれ、怪しく覺え候ふ。従ひ候ひては、祐經在京して公方の御意さかりに候ふなる。然れば殿の御行方いかゞ、と黄泉の障ともなりぬべし。面々たのみ奉る。幼いものまでも」といひもあへず、奥野の露と消えにけり。無慙なる有様とも、申すばかりぞなかりける。伊東は餘りの悲しさに、暫は膝をおろさずして、顔に顔をさしあて口説きけるこそ哀なれ。「や殿きけ河津、頼む方なき祐親をすて何處へ行き給ふぞ。祐親をもつれて行き候へ。母や子どもをば誰に預けて行き給ふぞ。情なの有様や」と歎きければ、土肥次郎も河津が手を取り、「實平も子とては遠平ばかりなり。御身をもちてこそ、月日の如く頼もしかりつるに、斯様になり行き給ふことよ」と泣き悲むこと限なし。國々の人々も同じく一つ所に集りて、互に袖をぞ濡しける。さてあるべきにあらざれば、空しき形骸を昇かせて、家に歸りければ、女房を始として、あやしの賤の男賤の女に至るまで、歎の聲せんかなし。さて、かの河津三郎祐重に男子二人あり。兄は一萬とて五つなり、弟は箱王とて

公方―おほ
やけ向

れ劣らじと進めども、所しも惡所なれば、馬のさくりを辿る程に、二人の敵は逃げ延びぬ。くまもなく待ちけれども、案内者にて思はぬ茂みの途をかへ、大見の庄にぞ入りにける、危かりし命なり。伊東は、河津三郎が臥したる所に立ちよりて、「手は大事なるか」と問ひけれども、音もせず。おし動かして矢を荒く抜きければ、いよく前後も知らざりけり。河津が頭を父伊東が膝にかきのせ、涙を抑へて申しけるは、「こは何となり行く事ぞや。同じ中る矢ならば、など祐親には中らざりけるぞ。齡傾き今日明日をも知らざる憂き身なれども、和殿を持ちてこそ、公方私心安く後の代かけても頼しく思ひつるに、敢なく先だつ事の悲しさよ。今より後誰を頼みてあるべきぞ。汝を留めおき、祐親先立つものならば、思ひおく事よあらじ。老少不定の別こそ悲しけれ」とて、河津が手を取り懷に入れ、くどきけるは、「いかにや定業なりとも、矢一つにて物をも云はで、死ぬるものやある」といひて押し動しければ、その時祐重苦しげなる聲にて、「かくは度々仰せらるれども、誰とも知りたてまつらす候ふ」といふ。土肥次郎申しけるは、「御分の枕にし給ふは父伊東の膝よ。かく宣ふも伊東殿。今またかやうに申すは土肥次郎實平なり。かたきや覺え給ふ」と問ひければ、やゝありて眼を開き、「祐親を見まゐらせん



工藤 休東 祐親と
退入園



連赤鞆―總
ないくつも
連れつりた
る鞆

智者は惑は
ず云々―論
語の語

しほで―鞆
の前輪後輪
に二所づつ
着くる紐

木惡所を嫌はず、さしくれてこそ歩ませけれ。折ふし乗替一騎もつかざれば、一の射翳の前をやり過ぐす。二の射翳の八幡三郎は、もとより騒がぬ男なれば、天の與を取らざるは、却つて科を得るといふ古き言葉を思ひ出ですは、射損すべき。射翳の前を三段ばかり、左手の方へ遣り過ぐして、大の矢矢さしつがひ、よつびき、暫かためてひやうど放つ。思ひもよらで通りける河津が、乗つたる鞍の後の山形を射削り、行膝の着際を前へつとぞ射通しける。河津もよかりけり。弓取りなほし矢とつて番ひ、馬の鼻を引つ返し、四方を見廻す。智者は惑はず、仁者は憂へず、勇者は恐れず、と申せども、大事の痛手なれば、心は猛く思へども、性根次第に亂れ、馬より眞逆様に落ちにけり。後陣にありける父伊東次郎は、これをば夢にも知らずぞ下りける。比は神無月十日餘の事なれば、山めぐりのむら時雨、降りみ降らすみ定めなく、立ちよる雲の絶えぐに、濡れじと駒を早めて、手綱かい繰るところに、一の射翳にありける大見小藤太、待ちうけて射たりけれどもしるしなし。左の手のうちの指二つ、前のしほでの根に射たてたり。伊東は聞ゆる兵にてありければ、敵に二つの矢を射させじ、と大事の手にもてなし、右手の鎧におり下り、馬を小楯にとり、「山賊ありや、先陣は返せ。後陣は進め」と呼はりければ、わ

待ちて見よ」とぞ申しける。

十三 河津三郎うたれし事

されば、この歸足かへりあしを狙ねらひて見ん。然るべし、とて、道をかへて先に立ち、奥野おくのの口、赤澤あかざは山の麓ふもと、八幡山はちまのやまの境さかひにある切所せつしょを尋ねて、椎しひの木三本小楯こだてにとり、一の射騎まがしには大見小藤太おほみこのふじだ、二の射騎まがしには八幡三郎やまのふじのさんらう、手だれなれば餘さじものをとて立つたりけり。各待ちかけける所に、一番に通るは秦野右馬允はだのとうまのじよう、二番に通るは大庭三郎おほはらのさんらう、三番に通るは海老名源八えびなげんぱち、四番には土肥次郎どひのじらう、後陣遙ごちんはるかにひき下りて、流人兵衛佐殿るにんひやうのすけのどのぞ通られける。敵かたきならねば皆やり過すごしぬ。この次に伊東が嫡子河津三郎ちやくしかはづのさんらうぞ來りける。面白くこそ出で立ちたれ。秋野あきのの摺盡すりづくししたる間々に、引きがきしたる直垂ひたしに、斑まだらの行膝裾ひざはきすそたをやかにはきなし、鶴つるの本白もこじろにて作はいだる白しろごしらへの猪矢しや、筈高はずたかに負おひなし、旃檀せんたん籐とうの弓の真中まんなかとり、萌黄もえぎうらつけたる竹笠たけがさ、木枯こがらしに吹きそらせ、宿月毛きつきげの馬の、五寸あまりの大きなが、尾髪おえがみ飽あくまで縮ちぢみたるに、梨子地なしちに蒔まきたる白覆輪しろふりんの鞍くらに、連赤鞆れんじやくしりがいの款冬色くわふしきなるをかけ、含ふく轡わに紺くわんの手綱たづなを入れてぞ乗つたりける。馬も聞ゆる名馬めいはなり、主ぬしも究竟くつきやうの馬乗うまのりにて、伏ふし

切所—要害
射騎—獵師
の鳥獸を射
むとて柴な
ど折りかけ
て身を隠す
所
秋野の云々
—秋野の景
を模様に掲
出したる也
白覆輪—木
鞍の端々を
銀に縁とり
たるもの

聖衆—佛だ
ち
弘誓—佛が
衆生を濟度
せんとの誓
願を舟に喻
ふ

暗き所もなかりしが、天に上る術を習はずして、未だ空しく凡夫に交りありきけり。或時商用の事ありて、長安の市に出でて商人に伴ひしに、ある老人腰に壺をつけて、此の者は市に交りけり。知音は知る理にて、此のもの只人ならずと目を離さで見ると、此の老人側に行き、腰なる壺をおろし、其壺に出で入りにけり。さればこそ仙人なれとて、その人の行方につきて行きて、費長房の曰く、「かの仙人に仕へん」とて三年ぞ仕へける。或時老人の曰く、「汝は如何なる志ありて、三年まで一言葉も違へずわれに仕へけるぞや」費長房聞きて、「われ仙術を習ふと雖も、天に上ることを知らず、老人の壺に出で入り給ふことを教へ給へ」と云ひければ、「易き事なり、わが袖にとりつけ」と云ふ。即ち取りつきければ、二人ともにかの壺の中へと飛び入りぬ。この壺の中にめでたき世界あり。月日の光は空に和ぎ、四方に四季の色を顯はし、百二十丈の宮殿樓閣あり。天にて聖衆舞ひ遊ぶ。鴻鴈鴛鴦の聲和かにして、池には弘誓の舟を浮べり。よくく見廻りて、「今は出でん」といふ。老人竹の杖を與へて、「これをつきて出でよ」といふ。即ちつく、と思へば、時の間にをしみつといふ所に到りぬ。この杖を捨てければ、即ち龍となりて天にあがりぬ。費長房は鶴に乗りて天に上りけり。これも劫を積もる故なり。「三年までこそなくとも、

意趣—遺恨

おつさま—
後方より追
かけながら

劫—時

の、出仕慣れ候はで、かゝる狼藉を仕り候ふ。角觚は負けても恥ならず。わが方人とは云ふべからず。一々に記し申すべきぞ。後日に争ふな」と怒りければ、大庭の鎮め給ふ上は、とて静まりけり。伊東は素より意趣なしとて、聽て面々にこそ静まりけれ。これや瓊瑤は少きを以つて貴なりとし、石礫は多きを以つて賤しとす。人多しと雖も、景信が言葉一つにてぞ静まりける。斯る所に祐經が郎黨ども、彼等に交り窺ひけるが、あつばれ事の出でこよかし。間近くよりて打たんとする由にて、伊東殿をおつさまに射殺さん、とて囁きけり。七日が間夜晝つきて窺へども、然るべき隙なくして、狩場既に過ぎければ、各空しく歸らんとす。小藤太申しけるは、「さても一萬殿の御心をつくして、今や今やと待ち給ふらん、徒に歸らん事こそ口惜しけれ。いざや思ひ切り、とにもかくにもならん」と云ひければ、八幡三郎が申しけるは、「暫く劫を積みて見給へ。いかでか空しからん」とぞ申しける。

十二 費長房が事

去程に、劫を積みて望かなへる譬あり。昔大國に費長房といふ者あり。仙術を習ひ得て

やうもなく
―わけもなく

られず、又かやうのひね者をば、煩わづらひなくのしよりて、小首こくびせめに責めて、せこごめて廻まはる所を大逆手おほざかてに入れて、かい拈ひねりて蹴捨けすてゝ見よ。眞逆様まつきささまに負けぬべし」と、細々こまこまと教へければ、「心得たり」とて出で合ひけり。教の如くに爪先つまさきを立てゝ腕かうなをあけ、隙すきあらばと狙ねらひけり。河津かはづは、前後角觥すまふはこれが初めなれば、やうもなくするくゝと歩みより、俣野またのがぬけんとあひしらふ所を、右の腕かうなをつゝと延べ、俣野またのが前ほろを攔つかんでさしのけ、荒くも働はたらかば、手綱たづなも腰こしも切れぬべし。暫しばらくありてむずと引き寄せ、目より高くさし上げ、半時はんじばかりありて、横よこざまに片手かたてを放ちてしとゝ打つ。俣野またのは臆おそて起きなほり、「角力すまふに負くるは常つねの慣ならひ、何ぞ御分ごぶんが片手業かたてわざは」と云ひければ、河津かはづ云ひけるは、「以前いぜんも勝ちたる角觥すまふを御論候ごろんふ間、今度は眞中まんなかにて片手かたてをもつて打ち申したり。いまだ御不審ごふしんや候ふべき。御覽ごらんじつるか人々」といふ。大庭おほはこれを見て、童わらはに持たせたる太刀たちおつ取り、するりと抜ぬきて飛んでかゝる。座敷俄ざしきにはかに騒さわぎばつと立つ。伊東方いとうほうに寄るものもあり、大庭おほは方かたによる者もあり。兩方りうほうさへんとおり塞ふさがり、銚子てうしき盃踏みみわり酒肴さけさかなをこぼす。雑兵ざふひやう三千餘人よまでも、軍いくさせんとして奔ひしめきけり。兵衛佐殿ひやうゑのすけどのこのよし御覽ごらんじ、「いかに頼朝よりともに、情なさけを捨てゝ仇あだを結び給ふか。大庭おほはの人々」と仰おほせられければ、大庭おほはの平太承りへいだうけたまは、「田舎住居ゐなが ずまひの者ども

れざりーそれのみを主とせる俗言のれきりはきりなどいふ詞に同じかるべし

の根に蹶躓きて、不覺の負をぞしたりけるや。今一番取らん」といふ。大庭これを聞き走り出で、「けに／＼これに木の根あり。真中にて勝負し給へ」といひければ、伊東聞きて申しけるは、「河津が膝少し流れて見え候ふぞ。ねぎりの角觥ならばこそ意趣もあらめ、只一座の一興に負け申して面白し。出であひ申せ」と云ひければ、河津はやがてぞ出でにける。俣野も出でんとしたりしを、一族ども、「いかに取るとも勝つまじきぞ。只この儘にて入り給へ。論の角觥は勝負なし、勝ちたるには優るぞかし。此の度負けば二度の負なるべし」といひければ、俣野が云ふやう、「河津は力は強く覺ゆれども、角觥の故實は候はず。御覽ぜよ」と云ひ捨て、なほも出でんとする所を、暫し留めて云ひけるは、「河津が手合をよく見れば、御分にみぎは優の力なり。彼等體の角觥をば、左右の手を舉げ、爪先を立てと上手にかけて待ち給へ。敵も上手に目をかけて、伸さんと寄る所を小臂をうち舉げ、違ひざまに四ついを取り、足をぬきて跳ね廻れ。大力も跳ねられて、足の立てどの深く所を、捨てと足を取りて見よ。組んではかなふまじきぞ。若しまた組まで叶はずば、うち絡にしはとかけて、髻を地を掃かせ、一跳跳ねてしとと打て。何條七隣八離は見苦しきぞ。侍角力と申すは、寄るかとするれば勝負あり。餘りに早きも見分けら

菩薩なり—
體格をいふ
詞下にある
力士なりも
同じ

大番—諸國
の武者交替
上京して禁
中を護衛し
洛中を巡警
するもの
院内—上皇
主上

白き手綱二筋より合せ、堅くをさめて出でんとす。伊東方のもの出でて、「御角觥に参らん俣野殿」といふ。景久聞きて腹を立て、「角觥はこれに候ふぞ、いで合せ候へ、といふは常の事ぞかし。手角觥の座敷にて、左右なく相手の名字よぶ事なし。氏といひ器量といひ河津にや負くべき。小腕おし折り捨つべきものを」と笑ひて出づるを見れば、菩薩なりにして色淺黒く、丈は六尺二分、歳は三十一にぞなりける。又河津が姿はさし肩にして、顔の骨あれて頸太く頭小さく、すそぶくらに後のをり骨臍の下へ差込み、力士なりにして丈は五尺八分、歳は三十一なり、さし寄り褻取りひし／＼として押し離れ、河津思ひけるは、俣野は聞きつるに似ず。さしたる力にてはなかりけり。今日の人々の多く負けよるは、酒に酔ひたるか臆しける故なるべし。今度は手にも立つまじきものを、と思ひけるが、心をかへて思ふ様、さすがに俣野は角觥の大番勤に都へのほり、三歳の間都にて角觥に馴れ、一度も不覺を取らぬ者なり。その故に院内の御目にかより、日本一番の名を得たる角力なり。今こゝもとにてもものゝ手もなく負かさん事は、却りていひ甲斐なし、と思へば、二度めにはさしより、左右の腕を掴んで右手におはしますさう人の上におしかけ、膝をつかせて入りにけり。俣野はたゞも入らずして、「此處なる木

爪紅―縁の
み紅きこと

無二無三―
むやみやた
ら

老いすげ―
老衰と同じ

ればつと出で、うつればはね越え責めけれども、究竟の上手の大力なれば、續けて二十一番勝ちけり。その時土肥の次郎實平座敷を立ち、爪紅に日を出したる扇を開きて、俣野を暫しあふぎて、「よき御角力かな。天晴實平が年十五も若くば、出でて取らばや」といふ。俣野聞きて、「何かは苦しかるべき、出で給へ。一番とらん、角力は年により候はず」といひければ、土肥は怒に言葉をかけて、おめくといはれて、取るより外の事はなし。伊東は三浦に親しく、河津は土肥が聲なり。土肥が今日の恥辱は、此の一門に離れじ、と思へば、伊東の次郎が嫡子河津三郎祐重をば、父伊東より人重く思ひければ、無二無三の遊なれども、出でてとれといふ人もなし。老の末座にありけるが、座敷を立ちて舅の土肥の次郎に囁きけるは、「今日の御酒盛には老若の嫌なく候ふに、などや祐重一番とも承り候はず、空しく歸り候はど、若き者のおいすけしたるに似て候ふ。御計ひ候へ、一番」といひければ、實平聞きて、俣野の言葉の苦々しさにぞ取らん、と云ふらん。さりながら聲を負しては面目なし、と思ひけん、返事にも及ばで赤面してぞ居たりける。父伊東これを聞き、子ながらも力は強きものを、取らせて見ばや、と思ひけれども遠ふ折節、此の言葉を聞き、「神妙に申したり。出でて取れ」といひければ、直垂ぬぎおき、

さへむー支へむ

あへなくーもろく

合ひける。今は角力すまふは取らで、偏ひとへに當座たうざの口論こうろんとぞ見えける。兩方りやうほうさへんとする所に、彌五郎やごろうひまなくつゝと入り、瀧口たきぐちが小股こまたをかいで、はなじろにおし据ゑたり。勢いきほひたる瀧口たきぐちあへなく負けしかば、暫しばく角觥すまふぞなかりける。彌五郎やごろうは高言かうげんしつる瀧口たきぐちに勝かちて、百千番ひゃくせんぱんの負ふものならず、是に勝かつこそ嬉うれしけれ。何者なにものなりとも、と思ふ所に、桂山かつらやまの又七出またしちでで、手にもたまらず負けて後、究竟くつきやうの角觥すまふ五番まで勝ちて立つたる有様は、勢あまりてぞ見えける。こゝに相摸さうもの國の住人ぢうにん柳下りゅうげの小六郎出せうごろうでで、相澤あひざはの彌五郎やごろうを初はじめとして、よき角觥すまふ六番勝つ。駿河するがの國の住人ぢうにん竹下たけしたの孫八出まごはちでで、小六郎せうごろうを初はじめとして、よき角觥すまふ九番うつて入らんとする所に、大庭おほはが舍弟しやてい侯野またのの五郎出ごろうでで、孫八まごはちを初はじめとして、よき角力すまふ十番勝ちければ、出でて取らんといふものなし。駿河するがの國高橋たかはしの忠六ちゆうろく、「いざや取らん」といふ。側そばにありける海老名えびな秀貞ひでさだ、「これこそ侯野またの五郎よ。道理だうりにて打ちけるぞや」。景久かげひさ聞きて、「角力すまふが絶えて無からんにこそ」といひければ、平太へいだこれを聞き、「侯野またのも手一つ、われも手一つ、臆おそしてばし負けよるか。彼體かれていの角力すまふをば十人許りも、と一擲つかみに思ひ、著きる物をぬぎ置き、手綱たづなかきまうけ、負くれば乗りこえ、うつれば入れかへ、息をもつがせず、隙すきをもあらせず責め倒たふせ」。此の儀面白しとて十人ばかり並み居て、負く

桃華の節會
—三月三日
古この日聞
雞の行事あ
りき

張り合ひ—
打ち合ふ

を含める如くなり。われひと力は知らねども、雲ふきたつる山風の、松と櫻に音立てよ、
鳥も驚く梢か、と諸人目をこそ覺しけれ。彌七は力劣なれども、手あひはましてぞ見え
にける。三郎は力は優りてありければ、組まんとのみにて、さしつめ結べば捨てぬけ、
投ぐれば驅けて廻りしは、桃華の節會の鶏の、心を碎き羽を番ひ、勝負を争ふ闘雞も、
これには過ぎじとぞ見えたりける。老若座敷にこらへかね、天晴うき世の見事や、と上
下暫くのよめきて、東西さらに靜まらず。されども彌七は地下へ押しかけられ、とどろ
ばしりて素首をつかれ、終に彌七ぞ負けたりける。兄の彌六つと出で、三郎をはたと
驟て、仰さまに打ち倒す。瀧口無念に思ひつゝ、弟の三郎が未だ起きざるさきに跳り出
で、大力なりければ、彌六は手にもたまらず負けにけり。兄の彌五郎、第二人負かして
安からずと思ひ、袴の腰解くを遅しとひき切り、手綱二筋釋り合せ、強くをさめ走り出で、
近々とさし合ひ力ひきて見ければ、大の男が踏み張りて、少しも動かされず、一定われ
も負けぬべし。まことにや角觥は力によらず、手だに優れば、みぎは優りの相手をも
打つものを、と思ひ出して、相澤右の拳を握り固め、瀧口が鬚のはづれ切れてのけ、と打
ちければ、瀧口打たれて左右の拳を打ち返へす。其の後負けじ劣らじと、手を放ち張り

河津^{かづ}
保聖^{ほせい}
角力^{かくりき}
之^の
國^{くに}





膽まさりて
—膽力すぐ
れて

しや—人を
罵る時發す
る聲

手綱—繩

まさりて腰の刀をぬき、下に伏しながら大の男をひっかけ、草摺を疊み上げ、急所をひまなくさして跳ね返し、抑へて首をとる時は、大の男もものならず」と嘲笑ひてぞ申しける。瀧口たまらぬ男にて、「首を取るか取らるゝか、力はほかにもあらばこそ。いざや老の御肴に力競の腕角力、一番とらん」と云ふまゝに、座敷を立ち直垂を脱ぎ、「何程の事の候ふべき。しや肋骨二三枚摺み破りて捨つべきものを」とて、つゝと出でけり。彌五郎も「心得たりものゝしや。力拳の堪へん程は、命こそ限よ」といひ、座敷を立つ。一座の人々これを見て、あはや事こそ出で來ぬ、と見るほどに、近くありける相澤に申すやう、「あまり早し瀧口殿、角觥はまづ小童冠者ばらに取らせて、取り上げたるこそ面白けれ。大人氣なし瀧口殿、止まり給へ」と引き据ゑたり。吉川これを見て、「彌五郎殿もまづ抑へよ。相澤が弟の彌七郎に出でよ」といふ。少し辭退に及びしを、船越引き立てよ、手綱とりかへ出しけり。歳におきては十五なり。姿を物に譬ふれば、まだ聲若き鶯の谷より出づるもかくやらん。「誰をか相手にさすべき」と、座敷をきつと見廻しければ、瀧口が弟の三郎出でよ、といふ言葉の下より出にけり。歳におきては十八なり。いづれも角力は上手なれば、各さしよりて棲取したる有様は、春待ちかねてさく梅の雪

殿原。このはら あはれ若くありし時は、これ程の盃さかずき二三十飲みしかども、座敷ざしきに臥す程の事はあらねども、老おいのきはめやらん、腰膝こしひざの立たざるこそ悲しけれ。偏ひとへに白居易はくきぎが昔もかくや老いにけん、今更思ひ出でられて、哀あはれにこそは覺おぼえけれ。

十一 おなじく角觥すまふの事

さる程に、「古いにしへを思ふに秀貞ひでさだが若盛わかざかりには、鷹狩たかがり川狩かはがりの歸足かへりあしには、力業角觥ちからわざすまふがけこそ面白おもしろけれ。若き人々角觥すまふとり給へ、見て遊ばん。見物けんぶつには上うへやあるべき」と云ひければ、伊豆の國の住人ぢゆうにん三島の入道將監居丈高にいだうしやうひんるだけだかになりて、「石轉いしころはかしたきころの瀧口殿たきぐちのと相澤あひさばの彌五郎殿出でてとり給へ。これこそ合比あひごの力と聞け。さもあらば入道にいだういでて行司ぎやうじに立たん」と云ふ。瀧口たきぐち聞きて、「坂東八箇國はんとうはつかくに強き者はなきか。か程の小男を相手にさよるとは、馬の上徒立うまたちなりとも、脇挿わきはさみ立たんに働かはたらさじ」と云ひければ、彌五郎やごろう聞きて、「伊豆、駿河、武藏、相摸に強き者はなきか。瀧口たきぐちがせいと力を羨うらやむは、下藤げふの好む所にこそ。器量きりやうによりて荷にをばもて、侍さむらいは背小せいちうさく力は弱よわけれども、鎧よろひ一領肩りやうにひつかけ、弓おしはり、矢かき負ひ、よき馬にうち乗りて戦場せんぢやうに駆け出でて、思ふ敵かたきにひつ組みて、兩馬りやうばが間に落ち重り、膽き

居丈高一座
せるまゝ肩
をそびやか
して意氣こ
む貌

あやかり

肖にせよ。器量といひ弓矢とりては樊噲、張良なり。あつぱれ侍や」とほめられ、い

よいよ氣色をまし、老の末座敷より進み出で申しけるは、「只今の盃もさる事にて候へど

も、あまりにもどかしく覺え候ふ。大なる盃をもつて、一つづつ御廻し候へかし」と申し

ければ、「瀧口殿の仰こそおもしろけれ」とて、伊東の次郎貝といふ貝を取り出し、此の貝

は日本三番の貝とて院へ參らせたりしを、公家には貝を御用るなき事なれば、武家に下さ

る。太郎貝をば秩父に下さる、提子五つぞ入りける。二郎貝をは三郎に下さる、しんすけ

賜はつて土肥の次郎に取らする。殿上を許されたる器ものとて、祕藏してもちけるを、折

節河津三郎土肥が聲になりて來りしを、引出物にしたりけり。内はおのれなりにして、

外は梨地に蒔きていそなりにめをさしたり、提子三つぞ入りける。これを取り出し、瀧

口が許より始めて、二度づつぞ廻しける。五百餘人のもちたる酒なれば、酒に不足ぞな

かりける。後には亂舞して踊りはねてぞ遊びける。海老名の源八盃ひかへて申しけるは、

「これはめでたき世の中を、現とも定めがたく、昔語にならん事こそ悲しけれ。老少不

定といひながら、若きは頼みあるものを、若殿原のやうに、舞ひ歌はんと思へども、膝

震ひ聲も立たず。りうせきがつかより出でて、はんらうが茫然とせしやうに、酒もれや

提子―銚子

おのれなり

―自然のま

ゝ

いそなり―

磯にありた

る時の如く

に歟

りうせきが

云々―未詳

月の輪—熊
の—にある
白毛の處

靱—箭をさ
す器
行膝—獸皮
にて造り腰
につけて腰
部をおほふ
もの

見て、四方へばつとぞ逃けたりける。瀧口二の矢をつがひ、絞るかへして、月の輪を外
さじと、ゐをかけて射ければ、熊は少しも動かず、矢二つにて止まりけり。その後列卒
の者ども呼び寄せ、熊をかゝせて人々のおり居たる峠にうち上り、急ぎ馬より下り、「肴
たづね候ふとて深入仕り、遅参申すなり。御免候へ」といひて、笠をもぬがず、靱をもと
かず、行膝ながら、弓杖つきて立ちたり。吉川の三郎、俣野に射組みてありけるが、是
を見て、「瀧口殿は聞きしより見増しておほゆるものかな。あつばれ男かな」と賞めけれ
ば、座敷に居煩ひたり。まことに氣色顔にて、何事かな力業して、なほ賞められん、と
思へども、芝居の事なれば、かなはでありけるを、弟の瀧口の三郎と船越の十郎が居た
りける間に、青めなる石の高さ三尺ばかりなるを、よりて持たばやと思ひければ、する
すると歩みけるを見て、弟の家俊立たんとす。膝を押へてはたと睨みて、「弓矢の座敷を
かたさるとは、我居たる家を出でて他所に居わたり、その家に人をおくをこそ座敷かた
さるとは云へ。これ此處なる石の二人が間にありて、つまりやうのにくさにこそ」と云
ひて、右の手をさし延べて、後さまへ押しければ、大石がおされて谷へどうど落ち行く。
海老名の源八がこれを見て、「東八箇國のうちに男子持ちたらん人は、瀧口どのをよき物

座敷―席次
芝居―草生
に座するこ
と

埒―櫓

十三東―一
握即ち指四
本の長さな
一束とす
がし―音の
形容

さる程に柏が峠に各うち上りければ、土肥次郎が申しけるは、「けふの御酒宴は、かねて座敷の御定めあるべし、わかき方々の御違亂もや候ふべき」。大庭平太はこれを聞き、「これは芝居の座敷、誰を上下と定むべき。年寄ふ人の盃は海老名殿より始め、若殿ばらは瀧口殿より始めよ。此の人はいづ方にぞ」と申しければ、弟の三郎聞き、「兄にて候ふものは、熊倉の北の側に鹿の來るを目にかけ、深入りして未だ見えす候へ。家俊こそ参りて候ふ」。土屋が申しけるは、「三郎殿こそ瀧口殿よ、兄弟の中に誰をかわきて隔つべき。其の盃三郎殿よりはじめよ」といふ時、大庭聞き、「瀧口殿は年こそ若けれどもさる人ぞかし。今來るといふをすこしの間待たぬか。左右なく肴あらすな」とて、奥野の山口の方へ迎をやり、瀧口おそしと待つ所に、瀧口は熊倉の北のわきを過ぐるに、埒の外に熊の大きなるを見付けて、もとの繁みへ入れじ、と平野に追ひくだす所に、瀧口大なる伏木に馬を乗りかけ、眞逆さまに馳せ倒す馬を顧みず、弓のもとを左右の鎧に乗りかより、草隠れに矢比すこし延びたりけるを、三人張に十三東の大鎧矢番ひ、拳上にひきかけ、ひやうど放つ。遠鳴して右のをり骨二つ三つはらりと射けづり、鎧はわれて颯と散りければ、鏃は岩にがしとあたる。熊は手を負ひ瀧口に猛りてかゝる。列卒の者どもこれを

白が塚の前行き、「君の御位は思ふまゝなり。いかに嬉しく思ひ給ふらん。われ亦かくの如し。古の契約忘れず」といひて、腹かき切り失せにけり。あはれなりし例なり。されば大見八幡が主の爲に、命を輕んじて伊東を狙ひし志、これには過ぎじとぞ覺えける。

九 奥野の狩座の事

野干—狐の
事なれども
こゝにては
獸の總稱

さても兩三箇國の人々は、各奥野に入り、方々より列卒を入れて、野干を狩りける程に、七日がうちに猪六百、鹿千頭、熊三十七、鼯鼠三百、その外雉、山鳥、猿、兎、貉、狐、狸、豺、狼のたぐひに至るまで、以上その數二千七百餘ぞとぞめられける。今はさのみ野干を亡ぼして何にかはせん、とて各柏ヶ峠にぞ上りける。この程の雜掌は伊東一人して、ひまなかりければ、持たせたる酒人々の見參に入れざるこそ本意なけれ。いざや山陣を取りて、頼朝に今一獻すよめ奉らん。然るべし、とて、宗徒の人々五百餘人、峠におりゐつゝ用意をこそはせられけれ。

十 同じく酒宴の事

奥^{おく}の^の 聖^{せい}の
狩^{かり}みく
大^{おほ}見^み八^や藏^{ざう}
保^へ東^{とう}父^ふ子^し成^{なり}
移^{うつ}一^{いつ}國^{くに}





へ、國王の太子として、優にかひたる言葉かな。斯こそありたけれ」といひけるが、さすが恩愛の別れ、包みかねたる涙の袖、絞りもあへず、よその哀を催しつゝ、相従ふ兵はさし當る道理なれば、ともに感ぜぬはなかりけり。その後太子高聲にいはく、「われは孝明王の太子生年十一歳、父一所に迎へ給へ」といひも果てず、劒をぬき貫かれてぞ伏しぬ。杵臼同じく立ち寄りて、「健氣にも御自害候ふものかな。某もやがて追つ付き奉らん」とて、腹十文字にかき破り、太子の死骸にまろびかゝりて伏しにける有様、見るに言葉も及ばれず、無慙なりし例なり。さて二人が首を取りて國王に捧ぐ。叡覽ありて喜悅の眉を開き給ふ。今は疑ふ所なく、程嬰に心を許し、一の大臣にそなへ給ふこそ、御運の極めとぞ覺えける。さても程嬰は隙を窺ひて、敵の國王をうつて、速に主君の屠岸賈を世に立て、再國王にそなへしかば、元の如く程嬰を相臣に立てらるゝによつて、杵臼きくわくの爲に追善その數を知らず。三年に國ことく々々鎮まりをはりて後、程嬰君に暇を乞ひて曰く、「われ杵臼に契約して、命を君に奉ること遲速を争ひしなり。御位これまでなり。今は思ひおく事なければ、杵臼が草の蔭にての心も恥し、自害仕らん」と申す。帝王大きに歎きて、これを許すことなし。されども隙をはからひ忍び出でて、杵

依怙一片び
いきの意な
れどもこゝ
にては非道

前業―前世
の所業によ
りて今生に
受くる報

る事なれば、靜まりかへりて音もせず。程嬰進み出で申しけるは、「孝明王の太子屠岸賈やまします。程嬰討手に参りたり。雑兵の手に懸り給はんより、急ぎ自害し給へ。遁れ給ふべきにあらず」と申しければ、杵臼立ち出で、「わが君のまします事、隠し申すべきにあらず。待ち給へ。御自害あるべし。さりながら、けふの大將軍の程嬰は、昨日迄は正しき相傳の臣下ぞかし。一旦の依怙に住すとも、終には天罰降り來り、遠からざるに失せなん果を見ばや」とぞ申しける。程嬰是を聞き、「時世に従ふ習、昔はさもこそありつらめ。今また變る折節なり。さればにや君も御運盡き果て、命もつゞまり給ふぞかし。徒事にかゝはりて、命を失ひ給はんより、兜を脱ぎ弓の弦をはづし、降参し給へ。古の情を以て助くべし」とぞいひける。十一歳のきくわく、討手は父よと知りながら、豫て定めし事なれば、父重代の劔を横たへ、高き處に走り上り、「如何に人々聞きたまへ。孝明王の太子として、臣下の手に懸るべき事にもあらず、又臣下心變りを恨むべきにもあらず、たゞ前業こそ拙けれ。さりながら、その家久しき郎黨ぞかし。程嬰出で給へ。日比の好みに今一度見参せん」といふ。程嬰は我が子の振舞を見て、心安く思へども、忍びの涙を進みける。兵怪しくや見るらん、と落つる涙をおし止め、「人々これを聞き給

―誤脱あるべし

なほし―し
は助辭
くわぼく―
和睦か

へて、「斯程に深く思ひ定めて候へば、いかでかおろかなるべき。心安く思し召せ。さりながら、さし當る父母の御別、いかでか惜しからで候ふべき。最期におきては思ひ定めて候ふ」と申しければ、父心安くぞ思ひける。さて又二人寄り合ひ内談する様、「今君の御爲に討たるべき命は易く、残り留りて敵を討ちて、太子を世に立て申さん事、重きが上の大事なり。如何せん、長らへ功をなす事、堪忍精なくしてはなり難し。われ先づ死な」とて、杵臼は十一歳のきくわくをつれて山にこもり、討手を待ちける心のうち、無慙といふもありあり。その後程嬰は敵の王のあたりに行き、「召し仕はれん」と申す。敵王聞き、此の者身をすて面を汚し、我に仕ふべき臣下にあらず。さりながら、世かはり時移ればさもや、と思ひ、傍に許し置くといへども、なほ害心におそれてゆるす心なかりけり。いひ合せたる事なれば、「われ今君王に仕へて二心なし。疑ことわりなれども世界を狭められ、恥辱にかへて助かるなり。なほし用る給はずば、主君の太子臣下の杵臼もろ共に、隠れ居たる處を委しく知れり。討手を賜はつて向ひ、彼等を討ち首を取りて見せまゐらせん」といふ。その時國王くわぼくの心をなし、數千人の兵をさしそへ、彼等が隠れ居たる山へおし寄せ、四方を圍み関の聲をぞ揚げたりける。杵臼は思ひ設けた

優に——殊勝
に

見苦しとて

方に出でん事を、急ぎ給へ」とぞ申しける。その後程嬰はわが子のきくわくを近づけて、「いかに汝委しく聞け。吾等は主君の太子、隠し奉らんとせし故、われ／＼汝等までも敵に捕はれて、犬死をせん事疑なし。然れば汝を太子と偽り奉りて首を取るべし。怨むる事なくして、御命に代り奉りて君を安全ならしめよ。親なればとて、添ひ果つべきにもあらず。來世にて生れ逢ふべし」と申しければ、きくわく聞きも敢ず涙を流して、しばし返事もせざりけり。父この色を見て、「未練なり、汝はや十歳にあまるぞかし。弓矢執る者の子は、腹のうちより物の心は知るぞかし」といさめければ、きくわくこの詞を聞きいひけるは、「わが命惜しきにより泣くにはあらず、まことに某が命一つにて、君と父との孝行に捧げ申さん事、露塵ほども惜しからざるものをや。歎きの中の喜びなり」と、いひも敢へず涙に咽びけり。父是を聞き、「子ながらも優に使ひたる詞かな、未だ幼きものぞかし。誠に我が子なり。成人の後さぞ、と思ひければ、惜しよといふも餘りあり。われ心弱きと見えなば、もし未練にもやなりなん、と思ひければ、流るゝ涙をおし止め、「弓矢の家に生れて、君の爲に命を棄つる事、汝一人にも限らず。最期未練にては君の御爲父が爲中々見苦し、とて一命を損すべきなり」といひければ、きくわく涙をおさ

無慙なる一
二人の心中
を哀と察し
たる語

こはく一強
く

精—精力

に及ばずして、圍かこみのうちを忍しのび出でけり。孝明王心やすくして自害し給ひけり。さて二人の臣下故郷に歸り、太子を誘いさなひ出して養育しけるぞ無慙むざんなる。かくて敵の大王これを聞き傳へ、末の代にはわが敵なり。かの太子おなじく二人の臣下どもの首を取りて來らんものには、勳功は所望しょまうによるべし、と國々に宣旨を下されけり。此の宣旨に従つて、かの人々に心をかけ、いかにもして怪あやしみ索めんと思はぬ者はなかりけり。然れども一所の住居すまひかなはで、或は遠き里にまじはり、深き山に籠りて身を隠すといへども、處なくして二人寄り合ひ、如何せんとぞ歎なげきける。程嬰申しけるは、「われ等が君を養やうじ奉るに、敵かたきこはくして國中に隠れ難し。されば吾等二人がうち一人、敵の王に出で仕へん、といはん時、さるものとて心を許す事あらじ。時に我が子きくわくといひて、十一歳になる子を一人持ちたり。幸わが君と同年なり。これを太子と號がうして、二人がうち一人は山に籠り、一人は討手うってに來り、主従二人を討ち首を取り、敵の王に捧ささげなば、如何でか心許さざるべき。その時敵を易々やすくとうち取るべし」といひければ、杵臼申しけるは、「命長らへて後に、事をなすべき忍耐の精は、遠くして難し。今太子と同じく死せん事は近くして易し。然れば杵臼は、忍耐の精せいすくなき者なり、易きに就き吾まづ死ぬべし。程嬰は敵

家の子——
門の人々
郎黨——家僕

大國——支那

杵臼程嬰——
趙朔の臣に
して屠岸賈
は其の敵な
り事實甚し
く違へり

けなるをうちかたけ、列卒にかきまぎれ、狙ふ所は何處々々ぞ。一日は柏が峠、熊倉が谷、二日は萩が窪、樅が澤、三日は長倉が渡り、朽木が澤、赤澤が峰を始めとして、七日が間附き廻りてぞ狙ひける。然れども伊東は國一番の大名にて、家の子郎黨多かりければ、たやすく討つべきやうぞなかりける。この者どもが心を盡しける有様、たとへいふべき方ぞなき。

八 杵臼程嬰が事

さても此の二人の者ども、仁義を重んじ忠孝を勵まし、心を盡し狙ふ事を思ふに、昔大國に孝明王といふ國王あり。ならびの王と國を爭ひ、軍をし給ふこと度々なり。然るに孝明王戦負けて自害に及ばんとする時に、杵臼程嬰とて二人の臣下あり。彼等を近づけて、「汝等定めて吾とともに、自害せんとぞ思ふらん。これ誠に順路のがるところなし。さりながら吾に一人の太子屠岸賈といひて、十一歳になるを故郷に留め置きたり。吾自害の後、雑兵の手にかゝりて、命を空しくせん事口惜しければ、汝等いかにもして逃れ出でて、かの子をはぐくみ育て、敵を亡し無念を散ぜよ」と宣ひければ、二人の臣下異議

此の中の云
く―河津の
父祐親の詞

めなる。河津かはづはもとより穩便えんべんの者にて、心のうちには殺生せつしやうを禁きんする人なりければ、如何いかにもして、此の度の狩かりを申し止めなばよかるべし、と思へども、多き侍さぶらひの中に、親おやの申す事なれば力及ばで、「あつ」と答へて座敷ざしきを立ち、我と列卒せつそをぞ催もよほしける。「幼きものは馬に乗りて出でよ。大人おとなは弓箭ゆみやをもて」とふれければ、南美くすみの庄廣しやうくしく、老若らうじやく三千四百人ぞ出でたりける。彼等を先として三箇國さんかうくの人々、我もくくと打ち出でたり。伊東河津が妻女さいぢやう數の女房にようばうひきつれて、南の中門ちうもんに立ちいでて、打ち出でける人々を見送りける。中にも河津三郎は、餘よの人にもまがはず、器量骨きりやうこつがら優すぐれたり。「此の中の大将たうしやうといひたりとも悪わるしからじ。子ながらも優いに見ゆるものかな。頼たのもし」と宣のたまひければ、河津が女房これを聞き、「弓矢取ゆみやの物出ものでの姿すがた、女見送めみどること詮せんなし。内に入らせ給へ」といひければ、けにもとて各うちおのゝにぞ入りにける。十月十日あまりに伊豆の奥野おくのへ入りにけり。

七 大見八幡おほみ やはたが伊東を狙ねらひし事

ことに祐經すけつねが二人の郎黨らうだう大見、八幡やはこれを聞き、かやうの所こそよき便宜びんぎなれ。いざやわれ等たよりを狙ねらはん、と各梯おのゝの直垂ちたれに鹿箭しかやさけたる竹簾たけのしぢら取りてつけ、白木の弓の射よ

宗徒の―主
立ちたる

侍―居所

雜掌―賄

大庭が舍弟三郎、俣野五郎、佐越十郎、山内瀧口太郎、同じく三郎、海老名の源八、萩野五郎、駿河の國には竹の下したの孫八、相澤彌五郎、吉川、船越、入江の人々、伊豆の國には北條四郎、同じく三郎、天野藤内、狩野藤五を始めとして、宗徒の人々五百人、伊豆の伊東へぞまゐりける。伊東大きに喜びて、内外の侍一面にとりはらひ、猶狹かりければ、庭に假屋を打ち出し、大幕ひき、上下二千四百五十人の客人を、一日一夜ぞ款待しける。土肥次郎これを見て、「雜掌は百人二百人まではやすかるべきに、既に二三千人の客人を、一人に預くる事無骨なり」といふ。伊東これを聞きて、「河津と申す小郷せうごうを知行せし時にも、何れの誰にか劣り候ふべき。況てや蕭美の庄を總ねて賜はるものならば、などや面々に引出物申さであるべき。これ程の事何かは苦しかるべき」とて、山海の珍物にて三日三夜ぞ款待しける。又海老名の源八が申しけるは、「かゝる寄合にまゐりぬと豫て存じて候はど、國より列卒の用意して、音に聞ゆる奥野に入り、物頭に馬あひつけ、鎧の遠鳴させざるが無念なり」といひければ、伊東これを聞き、「祐親を人と思ひてこそ、國の人々は打寄り、兩三日は遊び給ふらめ。左右なく座敷にて列卒の願ひやうこそ心狭けれ。それく河津三郎、列卒を催して鹿射させ申せ」といひけるぞ、伊東の運のきは

一期に一度とこそ承れ。うけたまはされば古き言葉にも、破れ易き時は、逢ひがたくしてしかも失ひ易し。此の仰こそ面目にて候へ。おほせ めんぼく是非命におきては君にまゐらす」とて、各座敷を起ちければ、頼もしくぞおもひける。伊東は、いさゝかこの儀を知らざりけるこそかなしけれ。

六 頼朝伊東の館にまします事

かくて大見八幡は、伊東を狙ふべき隙を窺ふ程に、その比兵衛佐殿は、伊東の館にましましける所に、相摸國の住人大庭平太景信といふ者あり。一門寄り合ひ酒宴しけるが、申しけるは、「吾等は昔源氏の郎黨なり。然れども今は平家の御恩をもつて、妻子を孚むといへども、古の事忘るべきにあらず。いざや佐殿の何時しか流人として徒然にましますらん。一夜宿直申して慰め奉りて、後日の奉公に申さん、尤も然るべし」とて、一門五十餘人いで立ち、人別さよえ一つあてにぞ持たせける。これを聞きて三浦、鎌倉、土肥次郎、岡崎、本間、澁谷、糟谷、松田、土屋、曾我の人々、思ひくに出でたちける程に、近國の侍聞き傳へ、われも如何でか遁るべき。いざや參らん、とて、相摸の國には

徒然—退屈

さくえ—竹筒、酒を入るゝ器

結句―事の
つまりは

さりげなく
―左様の氣
色を示さず
して

して、また京都に歸り上り竊に住ひぬ。伊東に祐經は惱まされ本意を忘れ、祐經が妻女
とり返し、相摸の國の住人、土肥次郎實平が嫡子彌太郎遠平に合せけり。國には又雙ぶ者
なくぞ見えけり。されどもこうしやうなき不義の富は災の媒、と左傳に見えたり。さ
れば行末いかゞとぞ覺えし。工藤一蕨は愁の事をいひ出して叔父に仲を違はれ、夫妻の
別れ、所帯は奪はれ、身をおきかねて膽やきける間、給仕も疎略になりにけり。されば
にや御氣色も悪しく、朋輩も側目にかかれれば、積鬱堪へ難く思ひ焦れて、竊にまた本
國に下り、大見の小藤太、八幡三郎を招きよせて、泣く／＼さゝやきけるは、「各つぶさに
聞け。相傳の所領を押領せらるゝだにも安からざるに、結句女房まで取り返されて、土
肥彌太郎にあはせらるゝ事、口惜しきとも餘あり。今は命を捨てゝ、矢一つ射ばや、と
思ふなり。顯れてはせんこと叶ふまじ。われ又便宜を窺はゞ、人に見知られて本意を遂
け難し。さればとて止るべきにもあらず、如何せん。各さりけなくして、狩漁の所に
ても便宜をうかどひ、矢一つ射んにや。もし宿意を遂げんに於きては、重恩生々世々に
報じても餘ありぬべし。いかゞせん、」とぞ口説きける。二人の郎黨聞き、一同に申しけ
るは、「それまでも、仰せらるべからず。弓箭を取り、世を渡ると申せども、萬死一生は

進退―所置

烏帽子親―
元服の式に
烏帽子を與
へ實名を付
する人、關
係者中の主
たる者之を
務む

んことを思ふと、かたに見えたり。父祐繼が代には、斯やうにはよも分けじ。今なんぞ半分の主たるべきや。これ偏に親方ながら、伊東が致す所なり。我が身こそ京都に住むとも、前後は皆弓矢の遺恨なり。いかでかこの事怨みざるべき、とて、竊に都を出でて、駿河國高橋といふ所に下り、木津川、船越、荻野、蒲原、入江の人々は、外戚につきて親しかりければ、二百餘人寄り合ひて、祐親討ちて、領所を一人にて進退せん、と思ふ心つきにけり。此の儀神慮もはかりがたし。たとへば差當る道理顯然たりといへども、昔の恩を忘れ、忽に惡行を企むこと、伊東が昔をも思ひ、てんじゆが古をも尋ねべきにや。第一叔父なり、第二養父なり、第三舅なり、第四烏帽子親なり、第五に一族なかの勞者なり、旁以つて疎ならず。かやうに思ひ立つことぞ恐しき。いかにも思慮あるべきものをや。剩へ領地を奪はんこと不可思議なり。斯りける事を祐親かへり聞きて、嫡子河津三郎祐重、次男伊東九郎祐清、その外一門老少呼び集め、用心厳しくしければ、力に及ばず、これや富貴にして善をなし易く、貧賤にして功をなし難し、とは、今こそ思ひ知られたれ。その後伊東次郎、此の事有のまゝ京都へ訴へ申して、永く祐經を本所へ入れ立てずして、年貢所當におきては、芥子ほども残らず横領する間、祐經身の置き所なく

けんばう—
賢謀か

左右なく云
々—彼是穿
議するまで
もなく理に
叶へり

ここに祐繼一期限の病の床に臨む刻、河津次郎日比の意趣を忘れ、忽に訪ひ来る。其の時祐經は生年九歳なりき。叔父河津次郎に地秀文書母どもに預け置きて、八箇年の春秋を送る。親方にあらずんば、伺候の臣と申すべきや。所詮世のけいに任せ、伊東次郎に賜はるべきか、また祐經に賜はるべきか。相傳の道理について、けんばうの上裁を仰がんと欲す。仍て誠恐誠惶言上如件。

仁安二年三月 日

平 祐 經

と書きてさよぐ。公事所に此の狀を披見ありて、さし當る道理に煩ひけるよ、と人々寄り合ひ内談評定するは、祐經が申狀一として僻事なし。是は裁許せずば、けん法に背きなん。また伊東實を上せて、萬事奉行をたのむといふ。然れども祐經は左右なく利運たる間、奉行所の私なり難ければ、安堵の狀二つ書きて、大宮の令旨を添へて下さる。伊東は半分なりとも賜はる所、奉行の御恩と喜びて、本國へぞ下りける。書は辭を盡さず、辭は心を盡さずと雖も、一薦は辭を失ひ、十五より本所にまゐり、日夜朝暮給仕をいたし、今年八箇年と覺ゆるに、重ねて御恩こそ蒙らざらめ、先祖の所領を半分召さるる事、そも何事ぞ。水上濁れる時は清からん事を思ひ、形の歪める時は、陰の素直なら

―打擲の字
音にて罵詈
の義か

水至つて清
ければ云々
―後漢書班
超傳の語

れ。院宣をなし、重ねて堅く召されければ、一門馳せ集り、案者口利寄り合ひ、伴ひ談合するといへども、道理は一つもなかりけり。祐繼存生の時より執心深くして、いかにも此の所を祐親が配領にせん、と多年心に懸け、既に十餘年知行の所なり、一期の大事と金銀を調べ、竊に奉行所へぞ上りける。誠や文選の辭に、青蠅も水精をけがさず、邪論もくの聖をまどはず、とは申せども、奉行のめづるも理なり。又漢書を見るに、水至つて清ければ底に魚棲まず、人至つて善なれば、内に友なし、と見えたり。さればにや奉行まことに寶重くして、祐經が申狀立たざることこそ無念なれ。月明かならんとすれども、浮雲これを覆ひ、水清からんとすれども、泥沙これを汚す。君は賢なりと雖も、臣これを汚す理によつて、本券は箱の底に朽ちて、空しく年月を送る間、祐經鬱憤に住して、重ねて申狀を奉行所にさよぐ。その狀に曰く、

伊豆國の住人伊東の工藤一薦平祐經謹んで言上、

早く御裁許を蒙らんと欲する仔細の事。右件の條、祖父蕭美入道寂心死去の後、親父伊東武者祐繼その舍弟祐親兄弟の中不和なるによつて、對決度々に及ぶと雖も、祐繼當腹寵愛たるによつて、安堵の御下文を賜はつて、既に數箇年を経畢んぬ。こ

御氣色—御
寵愛案者—智者
得替—もと
交代の意な
れどもこゝ
にては所領
を失ふこと
てうちやく

かくて祐經二十五まで給仕懈らざりき。こよに思はざるに田舎の母一期盡きて、形見に父が預け置きし讓狀をとり添へて、祐經が許へぞ上せたりける。祐經これを披見して、こはいかに、伊豆の伊東といふ所は、祖父入道寂心より、父伊東武者祐繼まで、三代相傳の所領なるを、何によつて叔父の河津次郎相續して、この八箇年が間知行しける。いざや冠者原四季の衣更させんとて、暇を申しけれども、御氣色最中なりければ、左右なく御暇賜らざりけり。さらばとて代官を下して催促を致す。伊東是を聞き、祐親より外に全く他の地頭なしとて、冠者原を放逸に追放す。京より下る者は、田舎の仔細をば知らで送け上りぬ。一筋に此の由を訴ふ。その義ならば祐經下らんとて、出で立ちけるが、案者第一の者にて、心を變へて思ひけるは、人の僻事するといふを聞きながら、又下りて劣らじ負けじとせん程に、まさる狼藉ひき出し、兩方得替の身となりぬべし。其の上道理をもちながら、親方に向ひ意趣をこめんこと詮なし、祐經程の者が利運の沙汰に負くべきにあらず。田舎よりかの仁を召し上せて、上裁をこそ仰がめ、と思ひ、當る所の道理をさしつめく、院宣を申し下し、小松殿の御狀を添へ、檢非違使を以つて伊東を京都に召し上せ、眞の知行なる時こそ、田舎にて横紙をも破り、てうちやくどもいひけ

かひなくし
—はきく
して役に立
つ

公文所—所
領に關する
文書を納め
置く所
身をうたせ
—身を苦し
め
一藤—首席

と號す。やがて女萬劫御前にあはせ、その秋相具して上洛し、即ち小松殿の見參に入り、
祐經をば京都に留め置き、わが身は國へぞ下りける。その後はかひなくしき侍の一人も
つけず、おとなしき者もなし。所帯におきては祐親一人して押領し、祐經には屋敷の一
所をも配分せざりけり。實や文選の言葉に、徳を積み功をかさぬること、その善をなさ
ざれども、時に用ゐる事あり、義を捨て理を背くこと、その惡をなさざれども、時に滅
ぶることあり。身の危きは勢の過ぐる所なり、災の積るは、てうのさかんなるを超えて
なり。されども祐經は、誰教ふるとはなきに、公文所を離れず、奉行所におきて身をう
たせ、沙汰になれける程に、善惡を不審し、分別して理非を迷はず、諸事に心をわたし、
手跡普通に優れ、和歌の道を心につけ、かんでうの筵に推參してその衆に列りしかば、
工藤の優男とぞ召されける。十五歳より武者所に侍ひて禮義正くして、男柄尋常なりけ
れば、田舎侍ともなく心にくしとて、二十一歳にして、武者所の一藤を経て、工藤一藤
とぞ召されける。

五

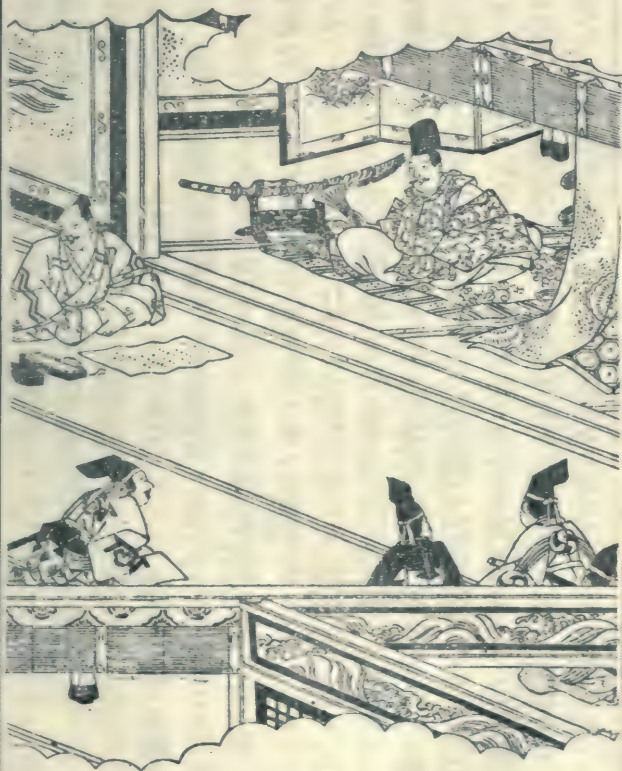
伊東次郎と祐經が爭論の事

神を祭る時は云々―論語に祭如在祭神如在

當庄の本券小松殿の見參に入れ、わ殿の女と金石に此の所を妨なく知行せさせよ」とて、伊東の地券文書を取り出し、金石に見せ、「汝に直に取らすべけれども、いまだ幼稚なり、いづれも親なれば疎にあるべからず。母に預くるぞ。十五にならば取らすべし。よくよく見置け。今より後は河津殿を叔父なりとも、實の親とたのむべし。心おきて憎まれ奉るな。祐繼も草の蔭にて立ち添ひ守るべし」とて、文書母が方へ渡し、今は心やすしとて打ち臥しぬ。かくて日數積り行けば、いよく弱りはてよ、七月十三日の寅の刻に、四十三にて失せにけり。哀なりし例なり。弟の河津次郎は、上には嘆く由なりしかども、下には喜悅の眉を開き、箱根の別當の方をぞ拜みける。一旦の猛惡は勝利ありといへども、終には子孫に報のならひにて、末いかゞとぞ覺えける。やがて河津は我が家を出で、伊東が館に入りかはり、内々存する旨ありければ、兄の爲忠あるよしにて、後家にも子にも劣らず孝養をいたす。七日々々の外、百箇日、一周忌、第三年に至るまで、しよ善の忠節を盡す。人は聞き、「神を祭る時は、神の在ます如くせよ。死に仕ふる時は、生に事ふる如くなれ」とは、論語の言葉なるをや」と感じけるぞ愚なる。さて金石には、心やすき乳母をつけてぞ養じける。遺言を違へず、十五にて元服させ、南美の工藤祐經

祐親 秋經
兩人 孤
六波羅へ
召く 圖





かけこ懸
子にてかゝ
り人の意歎

ゆめく
決して

昆弟の子は
云々兄弟
之子猶子也
は禮記の語
也

かぎりあり廻るべからず。汝を誰か慰み、誰か孚みて育てん」と、さめくと泣きけり。金石は幼ければ、たゞ泣くより外の事はなし。女房近くへ寄り、涙を押へて云ひけるは、「かなはぬ憂き世の習なれども、せめて金石十五にならんを待ち給へかし。さればとて數多ある子にもあらず、またかけごある中の身にてもなし。如何はせん」と歎きけるこそ理なれ。爰に弟の河津次郎祐親訪ひ來りけるが、この有様を見て近くよりて申しけるは、「今をかぎりところ見えさせ給ひて候へ。今生の執心を御止め候ひて、一筋に後生菩提を願ひ給へ。金石殿においては、祐親かくて候へば後見し奉るべし。ゆめく疎略あるべからず。心安く思ひ給へ。さればにや史記の言葉にも、昆弟の子はなほし己が子のごとし、と見えたり。いかでか疎なるべき」と申しければ、祐繼これを聞きて、内に害心あるをば知らで、大きに喜び、かき起され人の肩にかより、手を合せ祐親を拜み、やありて苦しげなる息をつぎ、「いかに候ふ、唯今の仰こそ生前に嬉しく覺え候へ。この比は何となくきせつについて、快からざる事にてましまさんと存する所に、斯様に宣ふこそ、かへすくも本意なれ。されば金石をば偏に、和殿に預け奉る。甥なりとも實子のごとく思ひ、女あまた持ち給ふ中にも、萬劫御前に合せて、十五にならば男になして、

能化―能く導き化する

臺を傾け、安養の淨刹に引攝し給へ。片時も地獄に墮し給ふな、と他念なく祈られけり。後七日の本尊には烏菟沙摩金剛童子、五大明王の利劍殊勝なるを四方にかけて、紫の袈裟を帶し、種々に壇を飾り、肝膽を碎き、汗をも拭はず面をもふらず、餘念なくこそ祈られけれ。昔より今に至るまで、佛法護持の御力今に始めざる事なれば、七日に満ずる寅のなかばに、伊東武者が壯なる首を、明王の劍の先に貫き、壇上に落つると見てければ、さては威験顯れたりとて、別當壇をぞ降り給ひける、恐しかりける事どもなり。

四 同じく伊東が死する事

さても伊東武者は、これをば夢にも知らで、時ならぬ奥野の狩して遊ばんとて、射手をそろへ列卒を催し、若黨數多相具して、伊豆の奥野へぞ入りにける。比しも夏の末つ方、峰に重なる樹の間より、むら／＼に靡くはさぞと見えしより、思はざる風に胃されて、心地例ならず煩ひ、心ざす狩場をも見ずして、近き野邊より歸りけり。日數重る程に、いよいよ重くぞなりにける。その時九つになりける金石を呼びて、自ら手を取り申しけるは、「いかにおのれ、十歳にだにもならざるを見捨てよ、死なんことこそ悲しけれ。生死

天台の教法
止観は智者
大師の説き
たる法門、
圓頓は圓滿
頓速に成佛
する意
三昧―梵語
沈思するこ
と

檀那―梵語
譯して施主
六道―地
獄、餓鬼、畜
生阿修羅、
人、天六

きの辛苦を忍ぶ。三衣を墨に染め、鬚髪を圓め、佛の遺願に任せ、五戒を保ちしよりこのかた、物の命を殺すことなし。佛ことに誡め給ふ。されば衆生の身の中には、三身佛性とて、三體の佛のまします。然るに人の命を奪はんこと、三世の諸佛を失ひ奉るに同じ。もろく、以つて思ひ寄らざる事なり」とて、箱根に上り給ひけり。河津は愁なる事申し出して、別當承引なかりければ、その後消息を以つて、重ねて申しけれども、猶用ひ給はず。如何せんとして、窃に箱根に上り、別當に見參して、近く居寄りて囁きけるは、「ものその身にては候はねども、昔より師檀の契約淺からで、頼み頼まれ奉りぬ、祐親が身においては一生の大事、子々孫々までもこれに如くべからず候ふ。再應に申し入れ候ふ條、實にその恐少からず候へども、かの方へ返り聞えなば、重ねたる難義出來候ふべし。さればにや浮沈におよび候ふ」と、くれぐれ申しければ、初は別當大きに辭退ありけるが、まことに檀那の情もさり難くて、大方領承ありければ、河津は郷へぞ下りける。別當心うき事ながら、檀那の頼むと申しければ、壇を立て莊嚴して、伊東を調伏せられけるこそ恐しけれ。初三日の本尊には來迎の阿彌陀の三尊、六道能化の地藏菩薩、檀那河津の次郎が諸願成就の爲、伊東武者が二なき命をとり、來世にては觀音勢至蓮

對決―双方
をつき合せ
て裁斷する
こと

調伏―人を
祈り殺すこ
と

冥―冥々に
ある神佛

圓頓止觀―

そよそにも申しあひけり。されども祐親止まらで、對決度々に及ぶといへども、讓狀を
さよぐる間、伊東が所領になりて、河津は負けてぞ下りける。其の後上には親みながら、
内々安からぬ事にぞ思ひける。されどもわが力には叶はで年月を送る。或時祐親箱根の
別當を密に呼び下し奉りて、種々に饗し酒宴過ぎしかば、近く寄り畏りて申しけるは、「か
ねてより知し召されて候ふごとく、伊東をば嫡々にて、祐親が相繼ぎ候ふべきを、思
はずの繼女の子來りて、父の墓所先祖重代の所領を横領仕る事、よそにて見え候ふが、
餘りに口惜しく候ふ間。御心をも憚らず申し出し候ふ。然るべくば、伊東武者が二つな
き命を、立所に失ひ候ふ様に、調伏ありて見せ給へ」と申しければ、別當聽き給ひて、
暫く物も宜はで、やゝありて「此の事よく々々聽き給へ。一腹一生にてこそましまさね、
兄弟なる事は眼前なり。公方までも聞し召しひらかれ、既に御下知なさるゝ上は、隔の
御怨はさる事にて候へども、忽に害心を起し、親のおきてを背き給はんこと然るべから
ず。神明は正直の頭にやどり給ふ事なれば、定めて天の加護もあるべからず、冥の照覽
も恐ろし。その上愚僧は幼少より、父母の塵慾を離れ、師匠のかんじんに入つて、諸説
の教法を學し、圓頓止觀の門を望み、一念三昧にかしよくの艱難を思ひ切るとき、法せ

三 伊東を調伏する事

武者所―院
中守護の武
士の誥所

たとへば―
事件を述ぶ
る前置の詞

こゝに伊豆國の住人、伊東次郎祐親が孫、曾我十郎祐成、おなじく五郎時致といふものありて、將軍の陣内をも憚らず、親の敵を討ち取り、藝を戰場に施し、名を後代に留めける、由來を委く尋ねるに、即ち一家の輩、工藤左衛門祐經なり。たとへば伊豆國に伊東、河津、宇佐美、この三箇所を總ねて、蓼美の庄と號する。かの本主は蓼美入道寂心にてありけるが、在國の時は工藤大夫祐隆といひけり。男子あまた持ちたりしが、皆早世して遺跡既に絶えんとす。しかる間、繼娘の子を取りて、嫡子に立て伊東を譲り、武者所にまゐらせ、工藤武者祐繼と號す。また嫡孫あり、次男にたてゝ河津を譲り、河津の二郎と名乗らせける。然る間、寂心逝去の後、祐親思ひけるは、これこそ嫡々なれば嫡子の譲あるべきに、異姓他人の繼女の子、この家に入つて相續するこそ安からね、と思ふ心つきにけり。これ誠に神慮にも背き、子孫も絶えぬべき惡事なるをや。たとひ他人なりといふとも、親養じて譲る上は、違亂の義あるべからず。ましてこれは寂心、内々繼女のもとに通ひて設けたる子なり。實には兄なり。譲りたる上、諍ふ事無益のよし、よ

新發意—新
に佛門に入
りし人の稱
三塔—叡山
にあり、東
塔西塔横川

ばうぎよ—
防禦か
綠林枝枯れ
て—盜賊滅
びて
羽林—近衛
武官の名賴
朝重の唐

田の新發意滿仲、その子攝津守賴光、次男大和守賴親、三男多田法眼とて、山法師にて三塔第一の惡僧なり。四郎河内守賴信、その子伊豫の入道賴義、その嫡子八幡太郎義家、その子但馬守義親、次男河内の判官義忠、三男式部大夫義國、四男六條判官爲義、その子左馬頭義朝、その嫡子鎌倉の惡源太義平、次男中宮大夫進朝長、三男右近衛大將賴朝の上こす源氏ぞなかりける。この六孫王よりこの方、皇子を出でて始めて源の姓を賜はり、正體を去りて人臣に列り給ひて後、多田滿仲より下野守義朝に至るまで、七代は、諸國の竹府に名をかけ、藝を將軍の弓馬に施し、家にあらずして四海を守りしに、白馬猶肥えたり。されば各權を諍ふ故に、互に朝敵になりて、源氏世を亂せば、平氏勅宣を以つてこれを征して朝恩に誇り、平將國を傾くれば、源氏詔命に任せてこれを罰して、勳功を極む。然れば近比平氏退散して、源氏おのづから世に誇り、四海の波瀾を治め、一天のばうぎよ定めしよりこの方、綠林枝枯れて、吹く風穩なり。しかれば歎慮を背くせいらうは、色を雄劍の秋の霜に犯され、朝章を亂す白波音を上弦の月に澄す。これ偏に羽林の威風、前代にも超えて、うんてうの故なり。然るにせいしをひそめて、政途の亂を制し、私曲の諍を止めて歸服せざるはなかりけり。

ける人目も
草もかれぬ
と思へば
かれ―離に
枯を懸く
香爐峯の雪
をば―有名
なる白樂天
の詩句

「香爐峯の雪をば簾をかゝけて見るらん」と、御口吟み給ひけり。中將此の御有様を見奉るに、たゞ夢の心地せられけるが、かく参りて、昔今の事ども申し承るにつけても、御衣の御袂を絞りもあへさせ給はず、鳥飼の院の御遊興、交野の雪の御鷹狩まで、思召し出でられて、中將かくぞ申されける。

忘れては夢かとぞ思ふおもひきやゆきふみわけて君を見むとは
親王も取りあへさせ給はで、返し、

夢かともなにか思はむ世のなかをそむかざりけんことを悔しき

かくて貞觀四年に御出家わたらせ給ひしかば、小野の宮とも申しけり。文徳天皇御年二十にて崩御なりしかば、第二の皇子御年九歳にて御譲を受け給ふ。清和天皇の御事これなり。後には丹波の國水尾の里に閉ぢ籠らせ給ひければ、水尾の帝とぞ申しける。皇子數多おはします。第一を陽成院、第二を貞固親王、第三を貞元親王、第四を貞保親王、この皇子は御琵琶の上手にておはします。桂の親王とも申しけり。心をかけらるゝ女は、月の光を待ちかね、螢を袂につゝむ、この親王の御事なり。今のしけのこの先祖なり。第五貞平親王、第六貞純親王とぞ申しける。六孫王これなり。さればかの親王の嫡子、多

器、一名金剛杵

然るに―然ればの誤か詮議にも云々―朝に訴へんとて會議し當山の殊勳を述ぶる詞

孟冬―初冬人目も云々―古今集源宗干、山里は冬ぞさびしさまさり

牛たけりて聲をたて、繪像の大威徳は、利劔をさよけて振り給ひければ、諸願は成就してけり、と御心をのべ給ふ所に、「御方こそは六番つゞけて勝ち給ひ候へ」と、御使走りつきければ、喜悅の眉を開き、急ぎ壇をぞ降りられける。ありがたき瑞相なり。されば惟仁親王御位に定り、春宮に立たせ給ひけり。然るに延暦寺の大衆の詮議にも、一慧亮腦を碎きしかば、次第位に即き、尊意利劔を振り給へば、菅相れいを垂れ給ふ」とぞ申しける。これに因つて、惟喬の御持僧眞濟僧正は、思死にぞうせ給ひける。皇子も都へ御還なくして、比叡山の麓小野といふ所に閉ち籠らせ給ひけり。比は神無月すゑ、雪氣の空の嵐に冴え。時雨るゝ雲の絶間なく、都に往きかふ人も稀なりけり。況や小野の御住居思ひやられてあはれなり。こゝに在五中將在原業平は、昔の御情浅からざりし人なりければ、紛々たる雪を踏み分け、泣くく御跡を尋ね参りて、見まゐらすれば、孟冬うつり来りて紅葉嵐に絶え、りうるんけんがとう寂々たり。折にまかせ、人目も草もかれぬれば、山里いと寂しきに、みな白妙の庭の面、あと踏みつくる人もなし。親王は端近く出でさせ給ひて、南殿の御格子三間ばかりあけて、四方の山を御覽じ廻らし、實にや、春は青く、夏は茂り、秋は染め、冬は落つるといふ、昭明太子の言思召しつらね、

雲客―四位
五位の殿上
人
翻すによつ
て―此下一
本「須く競
馬にのせ其
の勝負に従
つて」の十
五字あり
ありとぞ見
えし―一本
「ありとぞ
思召されけ
る」
わが山―叡
山
獨鈷―鐵叉
は銅にて造
り眞言の修
法に用ふる

を引き具したてまつり、右近の馬場へ行幸なる。月卿雲客花の袂をかさね、玉の裳をつらね、右近の馬場へ供奉せらる。この事希代の勝事、天下の不思議と見えし。皇子たちも東宮の浮沈これにありとぞ見えし。されば様々の御祈どもありけり。惟喬の御祈の師には、柿本の紀僧正眞濟とて東寺の長者、弘法大師の御弟子なり。惟仁親王の御祈の師には、わが山の住侶に、慧亮和尚とて慈覺大師の御弟子にて、めでたき上人にてぞわたらせ給ひける。西塔の平等坊にて、大威徳の法をぞ行ひける。既に競馬は十番をきはに定められ、六番勝ち給ふ御方に位を御譲あるべきとの御ことなり、されば惟喬の御方に、續けて四番勝ち給ひけり。惟仁の御方へ心をよせたまつる人々は、汗を握り心を碎きて祈念せられけり。惟仁の御方、右近の馬場より、天臺山平等坊の壇所へ、御使馳せ重ること、たゞ櫛の齒を挽くが如し。「既に御方こそ續けて四番負けぬるは」と申しければ、慧亮心憂く思はれ、繪像の大威徳を倒にかけ奉り、三尺の土牛をとつて北向に立て行はれけるに、土牛躍りて西向になれば、南向に取つておし向け、東向になれば、西におしなほし、肝膽をくだきて揉れしが、猶居かねて、獨鈷を以つて、自ら腦をつき摧きて腦を取り、罌粟に混ぜ爐壇にうちくべ、黒煙をたて、一揉もまれ給ひしかば、土

疵を吸ひて
—吳起の故
事を誤り傳
へしに非ざ
るか

祖は三尺の劔を帶して、諸侯を征し給ひき。しかる間、本朝にも中比より、源平の兩氏を定めおかれしよりこの方、武略を振ひ、朝家を守護し、互に名將の名をあらはし、諸國の狼藉を鎮め、既に四百餘回の年月を送り畢んぬ。これ清和の後胤、また桓武の累代なり。然りとはいへども、皇子を出でて、人臣に列り、鐵をかみ、鋒先を爭ふ志、とりどりなりとかや。

二 惟喬惟仁の位争の事

田村の帝—
文徳天皇
そもく源氏といつば、桓武天皇より四代めの皇子を、田村の帝と申しけり。これに皇子二人おはします。第一を惟喬親王と申す。帝ことに御志に思召して、東宮にも立て、御位を譲り奉らばや、と思召されけり。第二の皇子をば惟仁親王と申しき。未だ幼くおはします。御母は染殿の關白忠仁公の御女なりければ、一門の公卿卿相雲客たち、寵愛し奉られければ、これも亦默し難く思召されける。かれは繼體あいぶんの器量なり、これは萬機無異の人相なり。これを背きて寶祚を授くるものならば、用捨私ありて、臣下唇を翻すによつて、御位を譲り奉るべしとて、天安二年三月二日に、二人の皇子たち

忠仁公—良
房
公卿—三位
以上
卿相—公卿
に同じ

曾我物語

卷第一

一 神代の始の事

それ日域秋津洲は、これ國常立尊より事おこり、宇比地邇、須比智邇、男神女神とあらはれ、伊弉諾、伊弉册尊まで、以上天神七代にてわたらせ給ひき。また天照大神より、彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊まで、以上地神五代にて、多くの星霜をおくり給ふ。しかるに神武天皇と申し奉るは、葺不合尊にて、一天の主、百王にも始めとして、天下を治め給ひしよりこのかた、國土を傾け、萬民の懼るゝ謀、文武二道に如くはなし。好文の輩を寵愛せられずば、誰か萬機の政を輔けん。又は勇悍の輩を抽賞せられずば、たれか四海の亂をしづめん。かるが故に、唐の太宗文皇帝は、疵を吸ひて戰士を賞じ、漢の高也

義經記
修

者どもかな。たのみて下りつる義經を討つのみならず、これは現在頼朝が兄弟と知りながら、院宣なればとて、左右なく討ちぬるこそ奇怪なれ」とて、泰衡がそへて参らせた。宗徒の侍二人、其の外雜色下部に至るまで、一人も残さず首を斬りてぞかけられける。やがて軍兵をさし遣し、泰衡うたるべき詮議有りければ、先陣望み申す人々、千葉の介、三浦の介、左馬の介、大學頭、大炊助、梶原をはじめとして、望み申しけれども、「善惡に頼朝私には計らひ難し」とて、若宮に参詣有りけるに、畠山夢想の事有りて、重忠を始めとして、都合其の勢七萬餘騎、奥州へ發向す。昔は十二年まで戦ひける所ぞかし。今度は僅に九十日のうちに、攻め落されけるこそ不思議なれ。錦戸、ひづめ、泰衡、大將以下三百人が首を、畠山が手に取られける。残る所、雜人等に至るまで、みな首を取りければ、數を知らざる所なり。古入道が遺言の如く、錦戸、ひづめの兩人、兩關をふさぎ、泰衡、泉、判官殿の御下知に従ひて、軍をしたりせば、いかでか斯様になり果つべき。親の遺言といひ、君に不忠といひ、惡逆無道を存じ立ちて、命も亡び、子孫絶えて、代々の所領他人の寶となるこそ悲しけれ。武士たらん者は、忠孝を專とせずんばあるべからず。口惜しかりし者共なり。

ながら、ひかふべき者こそ覺えね。かくいふ者をば誰とか思ふ。清和天皇十代の御末、八幡殿には四代の孫、鎌倉殿の御舎弟に、九郎大夫判官殿の御内に十郎權頭兼房。もとは久我大臣殿の侍なり、今は源氏の郎等なり。樊噲を欺く度々の高名その隠れなし。いざや手なみを見せん。法も知らぬ奴原かな」といふこそ久しけれ。長崎太郎が馬手の鎧の草摺、半枚かけて、膝の口、鎧のみつをがね、馬のをりほね、五枚かけて斬りつけた。主も馬も、足を立てかへさず倒れけり。おしかより首をかつんとせし所に、「兄を討たせじ」と、弟の次郎兼房に打つてかゝる。兼房走り違ふ様にして、馬より引き落し、左の脇にかいはさみて、「ひとり越ゆべき死出の山、供して越えよや」とて、骸の中にとび入りけり。兼房思へば恐しや。ひとへに鬼神の振舞なり。是はもとより期したる事なり。長崎の次郎は、勸賞にあづかり、御恩かうぶり、朝恩に誇るべきと思ひしに、心ならずとらはれて、焼死するこそ無慙なれ。

八 秀衡が子共御追討の事

かくて泰衡は、判官殿の御首もたせ鎌倉へ奉る。頼朝仰せけるは、「抑是らは不思議の

通ひけるにや、御目を御覽じあけさせ給ひて、「北の方はいかに」と宣へば、「はや御自害、御側に御入り候ふ」と申せば、御側を探らせ給ひて、「是はたれ」と仰せければ、「若君にてわたらせ給ふ」と申せば、御手をさしわたさせ給ひて、北の方に取りつき給ひぬ。兼房いとど哀ぞまさりける。「はやく城に火をかけよ」とばかりを最後の御言葉にて、ことされ果てさせ給ひけり。

七 兼房が最期の事

十郎權頭「今は中々に心にかゝる事なし」と、獨言し、かねてこしらへたる事なれば、走り廻りて火をかけ、をりふし西風ふき、猛火は程なく御殿に付きけり。御死骸の御上には、遣戸格子をはづしおき、御跡の見えぬ様にはこしらへける。兼房は焰にむせび、東西くれてありけるが、君を守護し申さんとて、最期のいくさ、少くしたりと思ひけん、鎧を脱ぎすて、腹巻の上帯しめ固め、妻戸よりつと出で見れば、其の日の大將、長崎太郎兄弟、壺の内にひかへたり。敵自害の上は、何事か有るべき、とて、油断しけるを、兼房いひけるは、「唐土天竺は知らず、我が朝において、御内の御座所に、馬にのり

御館—義經
かみさま—
御母北の方

に」と有りしかば、兼房目もくれ心も消えて覺えしかども、「かくては叶ふまじ」と、腰の
刀をぬき出し、御肩の上を押へ奉り、右の御脇より左の乳の下へつとさし徹しければ、
御息の下に念佛して、やがてはかなく成り給ひぬ。御衣ひき被け參らせて、君の御側に
おき奉りて、五つにならせ給ふ若君、御乳母の抱き參らせたる所に、つと參り、「御館も
かみさまも、死出の山と申す道こえさせ給ひて、黄泉の遙の界におはしまし候ふなり。
若君もやがて入らせ給へ、と仰せ候ひつる」と申しければ、害し奉るべき兼房がくびに、
抱き付き給ひて、「死出の山とかやに早々參らん。兼房いそぎ參れ」と責め給へば、いと
どせん方なく、前後覺えずに成りて、落涙にせきあへず。「あはれ前の世の罪業こそ悲
しけれ。若君さま御館の御子と生れさせ給ふも、かくあるべき契かや。かめわり山にて、
巢守になせ、と宣ひし御言葉の末、誠に今まで耳にあるやうに覺ゆるぞ」とて、又さめ
ざめと泣きけるが、敵はしきりに近づく、かくては叶はず、と思ひ、二刀さし貫き、「わ
つ」と許宣ひて、御息とまりければ、判官殿の衣の下におし入れ奉る。さて生れて七日
にならせ給ふ姫君も、同じくさし殺し奉る。北の方の衣の下におし入れ奉り、「南無阿
彌陀佛南無阿彌陀佛」と申して、我が身を抱きて立ちたりけり。判官殿いまだ御息の

然の事もあらば、まづ自らを失はれんずらん、と思ひしに、今更驚くべきにあらず。はやはや自らを御手にかけさせ給へ」とて、取りつき給へば、義經、「自害よりさきにこそ、申したく候ひつれども、餘りの痛しさに申し得ず候ふ。今は兼房に仰せ付けられ候へ。兼房ちかく参れ」と有りけれども、何處に刀を立て参らすべしとも覺えずして、ひれ伏しければ、北の方仰せられけるは、「人の親の御目ほど賢かりけり。あれ程の不覺人と御覽じ入つて、多くの者の中に、女にてある自らにつけ給ひたれ。我にいはるとまでも有るまじきぞ。いはぬ先に失ふべきに、暫くも生けておき、恥を見せんとする慨てさよ。さらば刀を参らせよ」とありしかば、兼房申しけるは、「是ばかりこそ不覺なるが道理にて候へ。君御産ならせ給ひて、三日と申すに、兼房を召されて、此の君を汝がはからひなり、と仰かうぶりて候ひしかば、やがて御産所にまゐり、抱きそめまゐらせてより、其の後は出仕のひまだにも覺束なく思ひ参らせ、御成人候へば、女御、后にもせばや、とこそ存じ候ひつるに、北の政所打ち續きかくれさせ給へば、思ふに甲斐なき歎きのみ。神や佛に祈りし祈は空しくて、かやうに見なし奉らんとは、露思はざりしものを」とて、鎧の袖を顔にあてゝ、さめゝと泣きければ、「よしや嘆くとも今はかひあらじ。敵の近づく

北の政所―
攝政關白な
どの妻の稱

脇息一體を
寄せかけ休
むる具
せうと一兄

りこそ、故入道申せし言葉^{ことば}をたがへずして、留まりけるこそ不便^{ふびん}なれ。さて「自害^{じがい}の刻限^{こくげん}になりたるやらん。又自害^{じがい}は如何^{いか}様にしたるを、よきと言ふやらん」と宣^{のたま}へば、「佐藤四郎兵衛^{さとうしやうべゑ}が京^{きやう}にて仕りたるをこそ、後迄^{のちまで}人々ほめ候へ」と申しければ、「仔細^{しさい}なし。さては疵^{きず}の口廣^{くちひろ}きこそよからめ」とて、三條小鍛冶^{さんじやうこかぢ}が宿願^{しゆくぐわん}あつて、鞍馬^{くらま}へ打つて参らせたる刀^{かたな}の六寸五分ありけるを、別當^{べつたう}申しおろして、今の劔^{つるぎ}と名づけて、祕藏^{ひさう}しけるを、判官^{はんわん}をさなくて鞍馬^{くらま}へ御出^{おんいで}の時、守刀^{まもりかたな}に奉りしぞかし。義經^{よしつね}幼少^{えうせう}より祕藏^{ひさう}して身をはなさずして、西國^{さいこく}の合戦^{かせん}にも、鎧^{よろひ}の下にさよれける。彼の刀^{かたな}をもつて、左の乳^ちの下より刀^{かたな}をたて、後^{うしろ}へ徹^{とほ}れとかき切つて、疵^{きず}の口を三方^{はう}へかき破^{やぶ}り、腹^{はら}わたを繰^くり出し、刀^{かたな}を衣^{きぬ}の袖^{そで}にて押し拭^{ぬぐ}ひ、衣^{きぬ}ひきかけ、脇息^{けふそく}してぞおはしましける。北の方^{きたのほう}をよび出し奉りて、宣^{のたま}ひけるは、「今は故入道^{こにふだう}の後家^{ごけ}のかたにても、せうとの方^{ほう}にても、渡^{わた}らせ給へ。みな都^{みやこ}の者^{もの}にて候へば、情^{なさけ}なくはあたり申し候はじ。故郷^{こきやう}へも送り申すべし。今より後^{のち}さこそ便^{たより}を失^{うしな}ひ、御歎^{おんなげ}き候はんとこそ、後の世^{おののよ}までも、心にかより候はんすれども、なにごとも前世^{ぜんせい}の事^{こと}と思し召^{おほ}して、あながちに御歎^{おんなげ}き有るべからず」と申させ給へば、北の方^{きたのほう}、「都^{みやこ}を連れられ参らせて出でしより、今迄^{いままで}長^{なが}らへてあるべしとも覺^しえず。途^{みち}にてこそ、自



先へうちこすやうに見えければ、すはく又狂ふは、とて、走せのきく控へたり。されども倒れたるまゝにて動かす。其の時我もくにとよりけるこそ、をこがましく見えたりけれ。立ちながらすくみたる事は、君の御自害のほど人をよせじ、とて、守護の爲かと覺えて、人々いよく感じける。

六 判官御自害の事

十郎權頭、喜三太は、櫓の上より飛んで下りけるが、喜三太は、首の骨を射られてうせにけり。兼房は楯を後にあて、主殿のたる木に取りつき、持佛堂の廣廂にとび入り、「此處にしやさうと申す雑色、故入道、判官殿へ参らせたる下郎なれども、彼奴原は、自然の御用に立つべき者にて候ふ。御召し使ひ候へ」とあながちに申しければ、別の雑色嫌ひけれども、馬の上を許され申したりけるが、此の度人々多く落ち行けども、彼許とどまりてけり。兼房に申しけるは、「それ見参に入り給ふべきや。しやさうは御内にて、防矢仕り候ふなり。故入道申されし旨の上は、下郎にて候へども、死出の山の御供仕り候ふべし」とて、さんぐに戦ふ程に、面を向ふる者なし。下郎なれども、彼ばか

えせかた人
—よからぬ
味方

りきしゆ—
金剛力士

り、ふつとは切り、馬の太腹前膝ばらりくくと切り付け、馬より落つる所は、長刀の先にて首をはね落し、臂にてたよきおろしなどして、狂ふ程に、一人に切立られて、面を向くるものぞなき。鎧に矢の立つ事数をしらず、折りかけくしたりければ、簀をさかさまに着たるやうにぞ有りける。黒羽、白羽、染羽、いろくの矢ども、風に吹かれて見えければ、武藏野の尾花の秋風に、吹き靡かるゝに異ならず。八方を走りまはりて狂ひけるを、寄手の者ども申しけるは、敵も味方も討死すれども、辨慶ばかりいかに狂へども、死なぬは不思議なり。おとに聞えしにも勝りたり。我らが手にこそかけずとも、鎮守大明神たちよりて、蹴殺し給へ、と呪ひけるこそ烏濤がましけれ。武藏は敵を打ち拂ひて、薙刀をさかさまに杖につきて、仁王立に立ちにけり。偏にりきしゆの如くなり。一口笑ひて立ちたれば、「あれみたまへ。あの法師我らを討たんとて、此方を守らへ、しれ笑ひしてあるは、たゞごとならず、近くよりて討たるな」とて、左右なく近づく者もなし。さる者の申しけるは、「剛の者は立ちながら死する事ある、と言ふぞ。殿原當りて見給へ」と申しければ、「我當らん」といふ者もなし。ある武者馬にて邊を馳せければ、疾くより死にたる者なれば、馬に當りて倒れけり。長刀を握りすくみてあれば、倒れ様に

六道―地獄
餓鬼、畜生、
阿修羅、人、
天道

の所へ雜人を入れたらば、弓矢の疵なるべし。今は力及ばず。假令我れ先立ちたりとも、死出の山にて待つべし。先立ちたらば、誠に三途の河にて待ち候へ。御經も今少しなり。讀果つる程は、死したりとも我を守護せよ」と仰せられければ、「さん候ふ」と申して、簾を引き上げ、君をつくぐと見參らせて、御名殘惜しけに涙に咽びけるが、敵の近く聲を聞き、御暇申して立ち出づる、とて、又立ちかへり、かく申し上げける。

六道のみのちまたに待てよ君後れさきだつならひありともかく忙はしき中にも、未來をかけて申しければ、御返歌に、
後の世もまた後のよもめぐりあへ染むむらさきの雲の上まで

と仰せられければ、聲を立てゝぞ泣きにける。さて片岡とうしろ合せにさし合せて、一町を二手にわけて驅けたりければ、二人にかけ立てられて、寄手の兵共むらめかして引き退く。片岡七騎が中に走り入つて戦ふ程に、肩も腕もこらへずして、疵多く負ひければ、叶はじと思ひけん、腹かき切り失せにけり。辨慶今は一人なり。薙刀の柄、一尺許ふみ折りて、かばとすて、「あはれ中々よきものや。えせかた人の足手にまぎれて、惡かりつるに」とて、きつと踏んばり立つて、敵いれば、よせあはせてはたと切

者に寄り合ふべからず」とて、手綱を控へてよせず。辨慶度々の軍になれたる事なれば、倒るゝやうにては、起き上りく、河原を走りありくに、面を向ふる人ぞなき。さる程に増尾の十郎も討死す。備前の平四郎も、敵あまた討ちとり、我が身も疵あまた負ひければ、自害して失せぬ。片岡と鷲尾一つになりて戦ひけるが、鷲尾は敵五騎打ち取りて死にぬ。片岡一方すきければ、武藏坊、伊勢の三郎と一所にかゝる。伊勢の三郎敵六騎討取り、三騎に手負せて、思ふやうに軍して深手おひければ、暇乞して「死出の山にて待つぞ」とて、自害してんけり。辨慶は敵逐ひ拂ひて、君の御前に参りて、「辨慶こそ参りて候へ」と申しければ、君は法華經の巻を遊ばして御座ましけるが、「いかに」と宣へば、「軍はかぎりに成つて候ふ。備前、鷲尾、増尾、鈴木兄弟、伊勢の三郎、各いくさ思ひのまゝに仕り、討死仕りて候ふ。今は辨慶と片岡許に成つて候ふ。限りにて候ふ程に、君の御目に今一度かゝり候はんずる爲に参りて候ふ。君御先立ち給ひ候はゞ、死出の山にて御待ち候へ。辨慶先立ち参らせ候はゞ、三途の河にて待ち参らせん」と申せば、判官、「今一入名残の惜しきぞよ。死なば一所とこそ契りしに、我も諸共に打ち出でんとすれば、不足なる敵なり。辨慶を内に留めんとすれば、御方のおのゝ討死する。自害

て、返し合せ、右の肩を切られて引きて退く。鈴木すでに弓手に二騎、馬手に三騎切り
 ふせ、七八騎に手負はせて、我が身も痛手負ひ、「龜井の六郎犬死すな。重家は今はかう
 ぞ」と是を最後の言葉にて、腹かき切つてふしにけり。「紀伊の國藤代を出でし日よ
 り、命をば君に奉る。いま思はず一所にて、死し候はんこそ嬉しく候へ。死出の山にて
 は、かならず待ち給へ」とて、鎧の草摺かなぐりすて、「音にも聞くらん目にも見よ。
 鈴木三郎が弟に龜井の六郎、生年廿三、弓矢の手なみ、日比人に知られたれども、東
 の方の奴原は未だ知らじ。始めて物見せん」といひはてず、大勢の中へわつて入り、弓
 手にあひつけ、馬手にせめつけ斬りけるに、面を向ふるものぞなき。敵三騎打ちとり、
 六騎に手をおうせて、我が身も大事の疵數多おひければ、鎧の上帯おしくつろけ、腹か
 き切つて、兄のふしたる所に、同じ枕にふしにけり。さても武藏は、彼にうち合ひ、此
 に打ちあひする程に、咽笛うちさかれ、血出づる事はかぎりなし。世の常の人などは、
 血醉などするぞかし。辨慶は血の出づればいと血をそげえて、人をも人とも思はず、
 前へ流るゝ血は鎧の働くに從ひて、あけちになりて流れける程に、敵申しけるは、「こゝ
 なる法師、あまりの物狂はしさに、前にも母衣かけたるぞ」と申しける。「あれ程のふて

くつばみー
轡あはぬ敵ー
不相當の敵

城の内は僅十騎ばかりにて、何程の立合せんとて舞ひまふらん」とぞ申しける。寄手の者申しけるは、「いかに思召し候ふとも、三萬餘騎ぞかし。舞もおき給へ」と申せば、「三萬も三萬によるべし。十騎も十騎によるぞ。己等が軍せんと企つる様の可笑ければ笑ふぞ。叡山、春日山の麓にて、五月會に競馬をするに少しも違はず。をかしや鈴木、東の方の奴原に、手なみの程を見せてくれうぞ」とて、打物ぬきて鈴木兄弟、辨慶轡を並べて、鉦を傾けて、太刀を甲の眞向にあてよ、どつと喚きてかけたれば、秋風に木の葉を散すに異ならず。寄手の陣へ引き退く。「口には似ざる者や。勢にこそよれ、不覺人共哉。返せや返せや」と喚きけれども、返し合する者もなし。かよりける所に、鈴木の子郎、てる日の太郎と組まんと、「和君はたそ。」「御内の侍にてるひの太郎高治。」「さて和君が主こそ、鎌倉殿の郎等よ。和君が主の祖父清衡、後三年の戦の時、郎等たりける、とこそ聞け。其の子に武衡、其の子に秀衡、その子に泰衡、されば我らが殿には、五代の相傳の郎等ぞかし。重家は鎌倉殿には重代の侍なり。されば重家が爲にはあはぬ敵なり。されども弓矢とる身は逢ふを敵。面白し、泰衡が内には、恥ある者こそきけ。それが恥ある武士に、後をみする事や有る。きたなしや、とどまれ／＼」といはれ

とうたりー
はやしの詞

今日の討手はいかなる者ぞ。秀衡が家の子、長崎の太郎大夫と申す。せめて泰衡、錦戸
などにてあらばこそ、最後の軍をもせめ。東の方の奴原が、郎等に向ひて弓を引き、
矢を放さん事有るべからず、とて、「自害せん」と宣ひけり。爰に北の方の乳母親に、十
郎權頭、喜三太二人は、家の上に上りて、遣戸格子を小楯にして、散々に射る。大手に
は武藏坊、片岡、鈴木兄弟、鷲尾、増尾、伊勢三郎、備前平四郎、以上人々八騎なり。
常陸坊を初めとして、残り十一人の者共、今朝より近き邊の山寺を拜みに出でけるが、
其の儘歸らずして失せにけり。いふばかりなき事どもなり。辨慶其の日の装束には、黒
皮緘の鎧の、裾金物平く打つたるに、黄なる蝶を三つ二つ打つたりけるを着て、大薙刀
の真中握り、うちいたの上に立ちける。「囃せや殿原達、東の方の奴原に物見せん。若か
りし時は、叡山にてよしある方には、詩歌管絃の方にも許され、武勇の道には惡僧の名
を取りき。一手舞うて、東の方の賤しき奴原に見せん」とて、鈴木兄弟に囃させて、
うれしや瀧の水、鳴るは瀧の水、日は照るとも、絶えずとうたり、東の奴原が、鎧
冑を首もろともに、衣川に切り流しつるかな
とぞ舞うたりける。寄手聞きて、「判官殿の御内の人々程剛なる事はなし。寄手三萬騎に、

期したる弓
矢―覺悟の
戦争

妻子など、熊野の者にて候ひしを、送り遣し候うて、今は今生に思ひおく事いさゝかも候はず。但しすこし心にかゝる事の候ふは、昨日着き申すみちにて、馬の足を損じ候うて、痛み候へども、御内の案内如何と存じ申し入れず候ふ。今かく候へば然るべき。是こそ期したる弓矢にて候へ。たとひ是に参りあひ候はずとも、遠き近きの差別にてこそ候へ。君討たれさせ給ひぬ、と承りて候はゞ、何の爲に命をかばひ候ふべき。所々にて死し候はゞ、死出の山路をはるかに後れ奉るべきに、是にて心安く御供仕り候はん」とて、世に心地よけに申しければ、判官も御涙にむせび、打ち領き給ひけり。さて鈴木申し上げけるは、「下人に腹巻ばかりこそ著せて下りて候へ。討死の上具足の善悪はいり候ふまじく候へども、後は聞え候はんこと、無下に候はんか」と申しければ、鎧は數多させたるにて、しきめにまきたる赤糸織の屈強の鎧を取り出し、御馬にそへて下さる。腹巻は舍弟龜井に取らせける。

五 衣川合戦の事

さる程に、寄手長崎大夫のすけを初めとして、三萬餘騎一手になりて押し寄せたり。

しつらひて
設備して

と唐櫃一合、御返事に添へて遣されけり。其の後も文ありけれども、自害の用意仕ると
て、御返事に及ばず。されば、産して七日になり給ふ北の方を呼び出して、申されけるは、
「義経は、關東より院宣下りて、失はるべく候ふ。昔より女の罪科といふ事なし。他所
へ渡らせ給ひ候へ。義経は心靜に自害の用意を仕るべし」と宣へば、北の方聞召しもあ
へず、袖を顔におしあてよ、幼きより、片時も放れじと慕ひし乳母の名残をふりすて
て、つき奉りて下りけるは、斯様に隔て奉らん爲かや。女の習片思こそ恥かしく候へ
ども、人の手に懸けさせ給ふ、御傍をはなれ給はず。判官も涙にむせび給ひ、御詞もな
く、持佛堂の東の正面をしつらひて、入れ奉り給ひけり。

四 鈴木すずきの三郎重家高館へ参る事

重家を御前に召され、「抑吾殿は鎌倉殿より御恩を給ふに、世になき義経がもとに遙々と
來り、いく程なく、かやうの事出で來ること不便なれ」と宣へば、鈴木申しけるは、「さ
ん候ふ。鎌倉殿より、甲斐の國にて、所領一所給はりて候ひしが、寢てもさめても君の御
事、片時も忘れ参らせず。餘りに御面影身にしみて、参りたく存じ候ひし程に、年比の

えいえうー
榮耀歟

孫共を制せばや、と思はれけれども、恥かしくも所領を譲りたる事もなし。我さへ彼等に預けられたる身ながら、勅勘の身なり。院宣くだる上、何と制すとも叶ふまじ。あまり思へば悲しくて、判官殿へ消息を奉る。殿を關東よりうち奉れ、とて、院宣下りぬ。此の間の狩をば、えいえうの狩と思し召すや。命こそ大切に候へ。一先落ちさせ給ふべく候ふやらん。殿の親父義朝は、舍弟信賴に與せられ、謀反の爲にひくわの死罪に行はれ給ひぬ。また基成東國に落つるの身となり、御邊も是に御わたり候へば、千々の縁深かりけり、と思ひ知られて候ひつるに、又おくれ參らせて、歎き候はんことこそ口惜しく候へ。同じ道に御供申し候はんこそ、本意にて候ふべきに、年老い身かひく、數も候はで、かひなき御孝養を申さん事、行くもとまるも同じ道」とかきくとき、泣くく遺されけり。判官此の文を御覽じて、御返事には、

文悦び入り候ふ。仰の如く何方へも、落ちゆくべきにて候へども、勅勘の身として、空を飛び地をくぐるとも叶ひ難く思へば、此處にて自害を仕るべし。さればとて鑄矢の一つも放つべきにても候はず。此の御恩今生にては空しくなりぬ。來世にては必ず一佛淨土の縁となり奉るべし。是は一期のひきにて候ふ。御身を放さず御覽候へ。

せいびやう
—精兵
敢なし—は
かなし

て遣さる。泰衡、いつしか故入道の遺言を背きて、領承申しぬ。但し御せんじを給ひて、
討ち奉るべきよし申しければ、さらばとて安達の四郎清忠をめして、此の二三年知行を
いくまみたるらん、檢見に罷り下るべきよし仰せ出さる。「承り候ふ」とて、清忠奥へぞ下
りける。去程に泰衡俄に狩をぞ始めける。判官も出でて狩し給ふ。清忠紛れ歩きて見奉
るに、疑なき判官殿にておはします。軍は文治五年四月廿九日、巳の時と定めけり。此
の事義經は夢にも知り給はず。かよりし所に、民部の權少輔基成と言ふ人あり。平治の
合戦の時うせ給ひし悪右衛門督信頼の兄にておはします。謀叛の者の一門なれば、とて、
東國に下られたりけるを、故入道情をかけ給へり。其の上秀衡が基成の女に具足して、
子共あまたあり。嫡子二男泰衡、三男泉の三郎忠致、是等三人が祖父なり。されば人を
も具し奉り、少輔の御料とぞ申す。此の子共より先に、嫡子錦戸の太郎頼衡とて、極め
てたけ高く、ゆよく藝能もすぐれ、大の男剛のもの強弓せいびやうにて、謀かしこく
あるを、嫡子に立てたりせばよかるべきに、男の十五より内に設けたる子をば、嫡子に
は立てぬ事なり、とて、當腹の二男を嫡子に立てける。入道思へば敢なかりけり。此の基
成は、判官殿に淺からず申し承り候はれけり。此の事ほのかに聞きて、淺ましく思ひて、

杵、緒方、いそぎ参るべき由を仰せられて、難色駿河の次郎に給ひぬ。夜を日につぎて、京に上り筑紫へ下らんとす。如何なる者かいひけん、此のよし六波羅に聞きて、駿河を召し取りて、下部二十餘人さしそへて、關東へ下されけり。鎌倉殿廻文を御覽じて大きに怒り、「九郎不思議の者かな。同じ兄弟といひながら、頼朝を度々思ひかへるこそ不思議なれ。秀衡も死去しつ、奥も傾かぬに、攻めんになに程の事あるべき」と仰せありければ、梶原御前に候ひけるが、仰にて候へども、愚の御計ひにて候ふや。宣旨なつて、秀衡を召されけるに、昔將門八萬餘騎、今の秀衡十萬八千餘騎にて、片道を給はらば、参るべき由申しけるに、さては叶はずとて止められ、遂に京を見ずとこそ承りて候へ。秀衡一人にても妨け候はど、ねんし白河兩關を固め、判官殿の御下知に従ひて、軍を仕り候はど、日本國の勢をもつて、百年二百年戦ひ候ふとも、一天四海、民の煩とはなり候ふとも、打ち従へん事叶ひ候ふまじ。たゞ泰衡を御賺し候うて、御曹子を討ち参らさせ給ひ、其の後御攻め候はど、然るべく候はんずる由を申しければ、一尤も然るべし」とて、「頼朝私の下知ばかりにて叶ふまじ」とて、院宣を申されけり。泰衡が義經を討ちたらば、本領に常陸の國をそへて、子々孫々に至るまで給ふべき由なり。鎌倉殿御下知をそへ

野べの送りをし給へり。見奉るにいと哀ぞ増さりける。同じ道にと悲み給へども、空しき野邊にたゞ一人、送り棄てよぞ歸り給ふ。あはれなりし事どもなり。

三 秀衡が子共判官殿に謀叛の事

かくて入道死しけれども、かはる事もなく、兄弟の子共、うちかへく判官殿へ出仕して、其の年も暮れにけり。明くる二月の比、泰衡が郎等、なに事をか聞きたりけん、夜ふけ人靜りて、密に來り、泰衡にいひけるは、「判官殿、泉の御曹子と一つにならせ給ひ、御内を打ち奉らんと用意にて候ふ。合戦の習、人に先をせられぬれば、惡しき御事にて候ふなり。急ぎ御用意あるべし」と語りける程に、泰衡聞いて、安からぬ事に思ひ、「さらば用意すべし」とて、二月廿一日、入道の佛事孝養を營まんと用意しけるが、佛事をばさし置き、一腹の舍弟、泉の冠者を夜討にしけるこそうたてけれ。それを見て、兄の錦戸、ひつめの五郎、弟のともとの冠者、此のごと人の上ならずとて、おのゝ心々になりにけり。六親不和にして三寶の加護なしとは、是をいふなり。判官も、さては義經にも思ひかゝらん、とて、武藏坊を召して廻文を書かせらる。九州には、菊地、原田、白

うたてけれ
— 慨がはし
けれ
六親—父子
兄弟夫婦
三寶—佛法
僧

きたる—き
つたるの脱
字ならむ
れんし—念
珠か

にはよもまさじ。各が身をもつて、他國を賜らん事叶ふべからず。鎌倉よりの御使なりとも首を切れ。兩三度に及びて御使きたるならば、其の後はよも下されじ。たとひ下さるるとも、大事にてぞあらんすらん。其の用意をせよ。ねんし白河兩關をば、錦戸に防がせて、判官殿を疎になし奉るべからず。過分の振舞あるべからず。此の遺言をだにも違へずば、末世といふとも、汝等が末の世は安穩なるべし、と心得よ。生を隔つとも」といひ置きて、是を最期の言葉にて、十二月廿一日の曙に、終にはかなくなりぬ。妻子眷屬泣き悲むといへどもかひぞなき。判官殿へ此の由申されければ、驚き思し召して馬に一鞭をすすめて、急ぎおはしたり。空しき死骸に抱きつかせ給ひて、仰せられけるは、「境はるかの道を凌ぎて、是まで下る事も、入道を頼みてこそ下り候へ。父義朝には二歳にて別れ奉りぬ。母は都におはすれ共、平家に渡らせ給へば、互に心よからず。兄弟ありといへども、幼少より方々に有りて、寄り合ふこともなく、剩へあはれみを垂れ給ふべき頼朝には不和なり。いかなる親の歎、子の別れといふとも、是には過ぎじ」と悲みたまふ事かぎりなし。たゞ義經が運のきはむる所とて、さしもにたけき御心を引きかへて、ふかくぞ嘆き給ひける。龜割山にて生れ給へる若君も、判官殿と同じやうに、白き衣を召して、

耆婆—天竺
の名醫
扁鵲—漢土
の名醫

文治四年十二月十日の比より、入道重病をうけて、日數かさなりて弱り行けば、耆婆扁鵲が術だにも、あへて叶ふべきとも見えざれば、秀衡女子息、其の外所従をあつめて、泣くく申されけるは、「限ある業病をうけ、命を惜むなど聞きし事、きはめて人の上にてだにも、いふかひなき事に思ひつるに、身の上になりて、思ひ知られたるなり。其の故は、入道此の度命惜く存することは、判官殿、入道を頼みに思召して、遙の道を妻子具しておはしたるに、せめて十年心安くふるまはせ奉らで、今日明日に入道死ぬるならば、闇の夜にもしびを失ふ如くに、山野に迷ひ給はん事こそ口をしく存すれ。是ばかりこそ、今生に思ひ置くこと、冥途のさばりと覺ゆれ。されども叶はぬならひなれば力なし。判官殿に参り、最期の見参申したく存すれども、餘りに苦しく合期ならず。是へと申さんは其の恐れあり。此の旨を御耳に入れ奉れよ。又各此の遺言を用ふべきか。用ふべきにあらば、いふべき事をしづかにきくべし」と宣へば、各「いかでか背き申すべき」と申しければ、苦しげなる聲にて、「それがし死したらば、さだめて鎌倉殿より、判官殿討ち奉れとの御教書くだるべし。其の勳功には、常陸を賜ふべきとあらんずるぞ。相構へてそれを用ふべからず。入道が身には、出羽奥州過分の所にてあるぞ。況んや親

孝養―供養

に上り、江馬えまの小四郎を引きうけ、其所そこをも斬りぬけしに、普通ふつうの者ならば、それより是へ下るべきに、義經よしつねを慕したひ、在所ありかを知らずして、六條堀河ろくどうほりかはのふるき宿所しゆくしょにかへり來て、義經よしつねを見ると思ひて、爰こゝにて腹はらを切らん、とて、自害じがいしたりし心ざし、彼かれといひこれと言ひ、兄弟の者の心ざしをいつの世に忘るべき。例少ためしうなき剛がうの者として、鎌倉殿かまくらどのも惜をしみ給ひ、孝養けうやうし給ふ、と聞く。汝なんぢも忠信たけのぶに劣るまじき者かな」とて、又御落涙ごらくるみありけり。判官はんぐわん伊勢いせの三郎を召して、小櫻織卯こさくらおさうの花織はなおりの鎧よろひを二人に下されけり。尼公にこうなみだを止めて、「あら有難ありがたの御説ごせつや。さぶらひは剛がうにても剛なるべき者はなし。我が子ながらも剛がうならずば、斯程かほどまでは御説ごせつも有るまじ。汝等なんぢらも成人せいじん仕り、父共ちいどもが如く、君の御用ごように立ち名を後代こうだいにあけよ。不忠ふちうを仕らば、父共ちいどもに劣れる者として、傍輩はうはい達たちに笑はれんぞ。後指うしろさしをさよれ、家の疵きずなるべし。御前おんまへにて申すぞ、よく承り留めよ」とぞ申しける。おのゝ是を聞きて、「兄弟がうが剛がうなりしも道理かな。只今ただいま尼公にこうの申すやう、さしも猛たけき人かな」とおのおの感じかん申しける。

二 秀衡死去の事





汗の如し—
出でひかぬ
喩

思ひ出し、別れし時のやうに聲もをします悲みける。君も哀れにおほし召し、御涙を流させ給ふ。御前なりし人々、秀衡は申すにおよばず、袂を顔におしあてよ、おのゝ涙をぞ流しける。判官孟取りあけ給ひ、義信に下さる。孟のけうはい、當座の會釋、まことにとおとなしく見えければ、「次信によくも似たるものかな。汝が父、八島にて義經が命に代りたりしをこそ、源平兩家の目の前、諸人の目を驚ろかし、類あらじと言ひしが、まことに我が朝の事はいふに及ばず、唐土天竺にも、主君に心ざし深き者多しといへ共、かゝる例なし、とて、三國一の剛の者といはれしぞかし。今日よりしては、義經を父と思へ」と仰せられて、御座近く召されて、おくれの髪を撫でさせ給ひ、御涙せきあへ給はず。其の時龜井、片岡、伊勢、鷲尾、増尾の十郎權頭、あらし辨慶をはじめとして、聲を立てよぞ泣きにける。暫くありて御涙をとどめ、義忠に御孟下され、「汝が父吉野山にて、大衆追つ懸けたりしに、義經をかばひて、一人峰に留らん、といひしを、義經も留めん事を悲み、一處にと千度百度いひしに、侍のことばは綸言にも同じ、なほし汗の如し、とて、已に自害せんとせしまゝに、力及ばず一人峰に残し置きたりしに、數百人の敵を六七騎にて禦ぎ、あまつさへ鬼神の様にいはれし横河の覺範をうち取り、都

髪取りあげ
—童形の垂
髪を取り上
げ結びし也

ふ。有りがたき例には、人々申しあへり。尼公申されけるは、「兄弟の者の孝養、まことに身において有りがたき御心ざし、又は死後の名、何事か是にこえ申すべき。是程の御心ざしを、此の世に長らへて候はゞ、如何ばかりかたじけなく思ひ参らせ候はん、と愈涙つくし難く候ふ。されども今は思ひきり参らせ候ふ。幼き者共をあひつゞき君へ参らせ候はん。いまだ童名にて候ふ」と申しければ、判官「それは秀衡が名をもつくべけれども、兄弟の者共の名残形見なれば、義經名をつけべし。さりながらも秀衡に聞かせよ」と仰せられて、御使有りければ、「入道内々申し上げたき折節候ふ。恐れ入る許に候ふ」と申しければ、「さらば秀衡計らひて」と宣へば、秀衡承り申して、髪取りあげ烏帽子きせ、御前に畏る。判官御覽じて次信が若をば、佐藤三郎義信、忠信が子をば、佐藤四郎義忠と付け給ふ。尼公斜ならず喜び、「いかに泉の三郎、かねて申せし物我が君へ奉れ」と申しければ、佐藤の家に傳はれる重代の太刀を進上す。北の方へは唐綾の御小袖巻絹など取りそへて奉る。其の外侍達にもそれぐに参らせける。尼公いと涙にむせび、「あはれ同じくは兄弟の者共、御供して下り、御前にて孫どもに烏帽子を著せなば、いかばかり嬉しからまし」と流涕こがれければ、二人の嫁も、なき人の事を一しほ

義經記 卷第八

一 次信兄弟御弔の事

さる程に、判官殿、高館にうつらせ給ひて後、佐藤庄司が後家の許へも、折々御使つかはされ憐み給ふ。人々奇異の思ひをなす。ある時武藏を召して仰せられけるは、次信忠信兄弟があとを弔はせ給ふべき由仰せられける。其の次に「四國西國にて討死したる者共、忠の淺深にはよるべからず。死後なれば冥帳に入れて弔へ」と仰せ下さる。辨慶涙をながし、「尤も忝き御こと候ふ。上として斯様に思し召さるゝ事、まことに延喜天曆の帝と申すとも、いかで斯様には渡らせおはしまし候はん。急ぎ思し召し立ち給へ」と申しければ、さらば貴僧たちを請じ、佛事とり行ふべきよし仰せ付けらる。武藏、此の事秀衡に申しければ、入道も且は御心ざしの程を感じ、且は彼等がことを、今一しほ不便に思ひ、頻りに涙にぞ咽びける。兄弟の母尼公の方へも、御使有りける。孫ども後家ども、引き具して参る。御心ざしの餘に、御自筆にも、法華經あそばされ、弔はせ給

まへ衣川ころもがは、東は秀衡ひでひらが館たちなり。西はたうくがいはやとて、しかるべき山につどきたり。かやうに城廓じやうくわくを構かまへて、上見うへぬ鷲わしの如くにておはしけり。昨日きのふまでは空山伏そらやまおし、今日けふはいつしか男をとこになりて、榮華えいけわひらきてぞおはしける。折々ありくごとに北陸道ほくらうだうの御物語おんものがたり、北の方おんの御舉動おるまひなど仰おほせられ、各々おの／＼申し出し、笑草わらひぐさにぞなりにける。かくて年も暮れければ、文治ぶんぢ三年に成りにけり。

手所―直領
もののをの郡
―桃生郡か

みあらめ、出羽の國の者どもに、送られさせおはしまし候はざりけるぞ。急ぎ御迎に人を參らせよ」とて、嫡子もとよしの冠者を呼びて、「判官殿の御迎に參れ」と申しければ、泰衡百五十騎にてぞ參りける。北の方の御迎には、御輿をぞ參らせける。「かくもありけるものを」と仰せられて、磐井の郡におはしましたりければ、秀衡左右なく吾が許へは入れ參らせず、月見殿とて、常に人も通はぬ所にすゑ奉り、日々の椀飯を饗し奉る。北の方には容顏美麗に心優なる女房達十二人、その外下女はした者に至るまで、調へてぞ付け奉る。判官はかねての約束なりければ、名馬百疋、鎧五十領、征矢五十こし、弓五十挺、御手所には、もののをの郡、牡鹿郡、志太郡、玉造、遠田郡とて、國の内にてよき郡、一郡には三千八百町づつ有りけるを、五郡ぞ參らせける。侍共にはすぐれたる膽澤ゑさはましの庄とて、此のうち分々に配分せられけり。「時々はいづくへも出で慰み給へ」とて、骨つよき馬十匹づつ履行膝にいたる迄、心ざしをぞ運びける。「しよせん今はなにと憚るべき。たゞ思ふ様に遊ばせ參らせよ」とて、いつの冠者に申しつけて、兩國の大名三百六十人をすぐつて、日々の椀飯を供へたる。やがて御所つくれとて、秀衡がやしきより西にあたりて、衣河とて、地を引き御所造りて入れ奉る。城の體を見るに、

はかなとばし云々脱字ある歟、意は泣きて怪まれ取り殺さるる様の事になり辨慶恨み給ふなと也

とも、いかでか空しくなすべき」と悲み給へば、武藏是を承つて、「君一人を頼み参らせ候へば、自然の事も候はゞ、又頼み奉るべき方も候ふまじきに、此の若君を見あけ参らせんこそ、頼もしく候へ。是程いつくしき若君を、いかでか失ひ参らせ候ふべき」とて、「果報は、伯父鎌倉殿にあやかり参らせ給ふべし。力はおひくしくは候はねども、辨慶に似給へ。御命は千歳萬歳を保ち給へ」とて、「是より平泉へはさすがに程遠く候ふに、みち行く人に行き逢うて候はんに、はかなとばしむづかりて、辨慶うらみ給ふな」とて、篠懸にかいまきて、笈の中にぞ入れたりける。其の間三日に下り著き給ひけるに、一度なき給はざりけるこそ不思議なれ。其の日はせひのうちといふ所にて、一兩日御身いたはり、明くれば馬を尋ねてのせ奉り、其の日は栗原寺に著き給ふ。それよりして龜井の六郎、伊勢の三郎を御使にて、平泉へぞ遣されける。

九 判官平泉へ御着の事

秀衡、判官の御使と聞き、急ぎ對面す。「此の程北陸道にかよりて、御下りとは内々承り候ひつれども、一定を承らず候ひつるによつて、御迎へをも参らせず。越後越中こそ怨

たな心―掌

すもり―巢
守、鳥の巢
中に卵のか
へらでのこ
るをいふ語
巢守になせ
とは子を取
りあげてそ
のまゝ遺棄
すること

とにこそより候へ。そこ退き給へ、權頭」とて、おし起し奉る。御腰をいただき奉り、「南無八幡大菩薩、ねがはくは御産平安になし給へ。さて我が君をば棄てはて給ひ候ふや」と祈念しければ、常陸坊もたな心を合せてぞ祈りける。權頭は、こゑを立てゝ悲みける。判官も今はかきくれたる心地して、御頭をならべて、ひれふし給ひける。北方御心地つきて、「あら心うや」とて、判官に取りつき給へば、辨慶御腰を抱きあげ奉れば、御産やすくとし給ひける。武藏少人のむづかる御聲を聞いて、篠懸におしまきて、抱き奉る。何とは知らねども、御臍の緒をつぎ參らせて、御湯をひかせ奉らんとて、水瓶にあげよる水にて洗ひ奉り、やがて御名を付け參らせん。これは龜割山の龜の萬劫をとつて、鶴の千歳なぞらへて、龜鶴殿とぞつけ奉る。判官これを御覽じて、「あら幼な者の有様やな。いつか人となりぬべきとも見えす。義經が心安くばこそ、又行末もしづかならめ。物の心を知らぬさきに、疾くく此の山のすもりになせ」と宣ひけり。北の方聞し召して、今まで御身を惱まし奉りたるともおほし召されず、「怨めしくも承り候ふものかな。たましく人界に生を受けたるものを、月日の光をも見せずして、空しくなさん事いかにぞや。御不審かうぶらば、それ權頭取りあけよ。是より都へ抱きて上る

ひれふして
—平たくふ
すてし

るゝ水もなかりければ、武藏坊たゞかきくどき、獨言に申しけるは、「御果報こそ少くお
はするとも、かやうに易き水をだにも、尋ねかねたる悲しさよ」とて、泣くく谷にく
だる程に、山河の流るゝ音を聞き付けて悦び、水を取りて嶺に上らんとすれども、山は
霧深くして、歸るべき方を失ひけり。貝を吹かんとすれども、麓の里ちかよるらん、と思
ひて、左右なく吹かず。されども時刻移つては叶ふまじ、と思ひて、貝をぞ吹きたりける。
嶺にも貝を合せたる。辨慶とかくして、水を持ちて御枕に参りて、参らせんとしければ、
判官涙に咽びて仰せられけるは、「尋ねて参りたるかひもなし。早こときれ果て給ひぬ。
誰に参らせんとて、是まではたしなみけるぞや」とて、泣き給へば、兼房も御枕にひれ
伏してぞ泣き居たり。辨慶も涙をおさへて、御枕によりて御頭をうごかして申しけるは、
「よくく都にとどめ奉らん、と申し候ひしに、心弱くて是迄具足し参らせて、今憂目を
見せ給ふこそ悲しけれ。たとひ定業にて渡らせ給ふとも、是程に辨慶が丹精を出して、
尋ね参りて候ふを、きこしめし入りてこそ、いかにもならせ給ひ候はめ」とて、水を御
口に注ぎ奉りければ、うけ給ふと覺しくて、判官の御手に取り付き給ひて、又消え入り
給へば、判官も共にきえ入る心地しておはしけるを、辨慶「心弱き御事候ふや。事もこ

ついましき
し恥かしさ

けり。いよく御苦痛をせめければ、つゝましさも早忘れさせ給ひて、息ふき出して、「人々近くて叶ふまじ。遠くのけよ」と仰せられければ、さぶらひ共、皆こよかしこへ立ちのきけり。御身ちかくは、十郎權頭、判官殿ばかりぞおはしける。北の方「是とも心安かるべきにはあらねども、せめては力及ばす」とて、又たえ入り給ひけり。判官も今はかくぞと思し召しける。猛き心も失ひはてよ、「かゝるべしとはかねて知りながら、是迄具足し奉り、京をば放れ、思ふ所へは行きつかず、途中にて空しくなし奉らんことの悲しさよ。誰を頼みて、是まではるぐあらぬ里に御身をやつし、義經ひとり慕ひ給ひて、かゝるうき旅の空に迷ひつゝ、片ときも心やすきことを見せ聞かせ奉らず、失ひ奉らん事こそ悲しけれ。人に別れては、かた時もあるべしとも覺えず。たゞ同じ道に」とかきくどき、涙もせきあへず悲み給へば、さぶらひ共も、「軍の陣にてはかくは御座せざりしものを」とみな袂を絞りけり。暫くありて息ふき出して、「水を」と仰せられければ、武藏坊水瓶を取つて出でたりけれ共、雨は降る暗さはくらし、何方へ尋ね行くべきとは覺えねども、足にまかせて谷をさしてぞ下りける。耳をそばだてゝ谷河の水や流るゝと聞きけれども、此の程久しく照りたる空なれば、谷の小河も絶えはてよ、流

ける。

ひきまはすうちはは弓にあらねどもたがやで猿をいて見つるかな

かくてさし上せ給ふ程に、みるたから、竹くらべの杉などといふ所を見給ひて、やむけの大明神を伏し拜み奉る、あい河の津に著き給ふ。判官「よりみちは二日なるが、湊にかよりては、三日にまはる道にて候ふに、龜割山をこえて、へむらの里、姉葉の松へ出でては、すぐに候ふ。いづれをか御覽じて、通らせ給ふべき」と仰せられければ、「名所名所を見たけれども、一日も近く候ふなれば、龜割山とやらんに、かよりてこそ行かめ」とて、かめわり山へぞ懸り給ひける。

八 龜割山にて御産の事

おのゝ龜割山をこえ給ふに、北の方御身をいたはり給ふ事あり。御産近くなりければ、兼房心苦しくぞ思ひける。山深くなるまゝに、いとど絶え入り給へば、時々はもり奉りて行く。麓の里遠ければ、一夜の宿を取るべき所もなし。山の峠にて、道のほとり二町ばかりわけ入りて、ある大木の下に敷皮をしき、木のもとを御産所と定めて、宿し参らせ

雪しる云々
—雪汁交り
て水量の増
したり
いな舟—稻
積舟にて最
上川の名物

のぜんぢやうより、北の腰にながれ落ちけり。熊野には、いはた河、羽黒には清河とて、流きよき名河なり。是にて垢離をかき、權現をふし拜み奉る。無始の罪障も消滅するなれば、こよにては王子々々の御前にて、御神樂など参らせて、思ひくゝの馴れこまひし給へば、夜もほのくゝと明けにけり。やがて御船に乗り給ひて、清川の船頭をいや權の頭とぞ申す。御船支度して参らせけり。水上は雪しる水量まさりて、御舟を上せかねてぞありける。是や此のはるちうさのせうくゝ、しやうのさらしまといふ所に流されて、月影のみよする、はたなかい河のみなかも、稻舟のいつらしかは、最上河のはやき瀬ぞ。こともしらぬひばの聲、霞のひまに紛れる、と歌ひしも今こそ思ひ知られけれ。かくて御舟をのほする程に、せんぢやうより落ちたぎる瀧あり。北の方、「是をば何の瀧といふぞ」と問ひ給へば、白糸の瀧と申しければ、北の方かくぞつゞけ給ふ。

もがみ河せどの岩浪せきとめよらでぞとほるしらいと瀧

もがみがは岩こすなみに月さえてよるおもしろき白糸のたき

と口ずさみつゝ、鎧の明神、冑の明神伏し拜み参らせて、たかやりのせと申す難所を、上せ煩ひておはする所に、上の山のはに、猿の聲のしければ、北の方かくぞつゞけ給ひ

る。判官^{はんぐわん}ごしんし給へば、辨慶^{べんけい}珠數^{しゆず}おし揉みける。此の人々祈り給ひけるけしき、心中^{しんちゆう}のをそろしさにや口^{くち}はしる、幣帛^{へいはく}も静まりければ、惡靈^{あくりやう}も死靈^{しれい}も立ちさり、病人^{びやうにん}即ち平癒^{へいじゆ}す。驗者^{けんじや}いよく尊^{たつぎ}くぞ見え給ふ。其の日は留め奉りけり。日々に起りけるぎやへいは、今は相違^{さうゐ}なし。いと信心^{しんじん}まさり、喜悅^{きえつ}なまめならず。假初^{かりそめ}なれども、權現^{ごんげん}の御威^{おんゐ}光^{くわう}の程も思ひ知られて、尊^{たつぎ}く思ひ召しけり。御祈^{おんいのり}の布施^{ふせ}とて、鹿毛^{かけ}なる馬に黒鞍^{くろくら}おきてまゐらせける。砂金^{しゃきん}百兩^{ひやくりやう}、「國の習候^{ならひ}ふ」とて、鷲^{じゆ}の羽百^{もも}しり、殘^{のこ}の四人の山伏^{やまぶし}に、小袖^{こさそ}一重^{じよう}づつ參らせて、三世^ぜの藥師堂^{やくしだう}へ送り奉る。使^{つかひ}かへりけるに、「御布施^{おんふせ}給はり候ふ事は、さることに候へ共、是もたうの習^{ならひ}にて候へば、羽黒山^{はぐろさん}に暫く參籠^{さんろう}し候はんずれば、下向^{げかう}の時給はるべく候ふ。其の間預^{あづ}け申し候ふべし」とて返^{かへ}されけり。かくてたがはをも立ち給ひ、大泉^{おほいづみ}の莊^{しやう}、大ぼんじを通らせ給ひ、羽黒^{はぐろ}の御山^{おんやま}、よそにて拜^{をが}み給ふにも、御參^{ごさん}籠^{ろう}の御心^{ごこころ}ざしはおはしましけれども、御產^{ごさん}の月既に此の月に當らせ給ふに、萬^{よろづ}おそれをなして、辨慶^{べんけい}許^{いかり}御代官^{ごだいくわん}に參らせらる。殘^{のこ}りの人々には、つけのたかうらへかよりて、清河^{きよがは}に著^つき給ふ。辨慶^{べんけい}はあけなみ山にかよりて、よかはへ參り合ふ。その夜は五所^{ごしよ}の王子^{わうじ}など洗^{せん}ひ清^{きよ}むる池川^{いけがは}の御前^{ごまへ}に、一夜^{いちや}の御通夜^{ごつや}あり。此のきよ河^かと申すは、羽黒權現^{はぐろごんげん}のみたらしなり。つき山

請用―招待

いぬにも云
々―人は勿
論犬にも知
らすなと也

三世の藥師堂へ參らする。客僧達へかく申しければ、判官仰せられけるは、「請用は得たけれども、我らが不淨の身にては、何を祈りても、その驗やあるべき。詮もなからぬもの故に、行きても何かせん」と仰せられければ。武藏坊申しけるは、「君こそ不淨に渡らせ給へ。我等は都を出でしより、精進潔齋もよく候へば、たとひ驗徳の程はなくとも、我らが祈り候はん景氣の恐しさに、などか惡靈も死靈も、顯れざるべき。たま／＼請用にて候ふに、たゞ御出で候へかし」と申して、各よりあひ笑ひ戯れければ、「これは秀衡が知行の所にて候へば、定めてこれも祇候の者にて候はめ。何か苦しく候はん。知らせ給へ」と申しければ。辨慶きよて、「あはれや殿、親の心を子知らずとて、人の心は知りがたし。自然の事あらば、後悔さきに立つべからず。君の御下着の後、實房參らぬ事はあらじ。其の時のものいぬにも知らずべからず」とぞ申しける。さて祈手は、誰をかすべき。ごしんは君、珠數おしもみて候はん爲には、辨慶に過ぎ候ふまじ」とて、出で立ち給ひけり。御供には武藏坊常陸坊、片岡、十郎權の頭、四人たがはが許へ入らせ給ふ。持佛堂に入れ奉る。たがは見參に入りけり。子をばめのとに介錯せさせて、具してぞ出で來りたる。驗者はじめ給ふにより、まはしに十二三ばかり成る童をぞ召されけり。

ぎやへいー
瘡病

これを見て、「何事の咎にて、それ程にさいなみ給ふ」と申しければ、辨慶答へけるは、「これは熊野の山伏にて候ふが、是に候ふ山伏は、子々相傳の者にて候ふが、彼奴をうしなうて候ひつるに、此の程見付けて候ふ間、いかなる咎をもあてよくれうす候ふ。誰か咎め給ふべき」とて、いよく隙なく打つてぞ通りける。關守共是を見て、なんなく木戸をあけてぞ通しける。程なく出羽の國へ入り給ふ。其の日ははらかいといふ所につき給ひて、明くれば、かさどり山などといふ所を過ぎ給ひて、たがはの郡、三世の薬師堂に著き給ふ。是にて雨ふり水まさりければ、二三日御逗留ありけり。こゝにたがはの郡の領主、たがはの太郎實房といふ者あり。若かりし時より、あまた子を持ちたりけるが、皆さきだてゝ、十三になる子一人もちたりけるが、ぎやへいをして、萬事限りになりけり。羽黒近き所なれば、然るべき山伏など請じて、祈られけれども其の驗もなし。此の山伏達おはする由を傳へ聞きて、郎黨共に申しけるは、「熊野羽黒とて、いづれも威光は劣らせ給はぬ事なれども、熊野の權現と申すは、今一しほ尊き御事なれば、行者達もさこそおはすらん。請じ奉りて、驗者一座せさせ奉りて見ばや」とぞ申しける。妻女も此の痛はしさに、「いそぎ御使を參らせ給へ」とて、實房が代官に大内三郎といふ者を、

せ給ひけり。されども風はやむ事なし。さる程に日も既に暮れぬれば、たそがれ時にも
なりにけり。いとど心細く覺えける。能登の國ゆするぎの嶽より、又西風吹きて舟を東
へぞ向けたりける。あはれ順風やとて、風に任せて吹かれゆく程に、夜も夜半ばかりに
なれば、風もしづまり、浪も和ざければ、少し人々心安くて、風をはかりに行く程に、
曉方に、そことも知らぬ所に、御船を走せあけて、陸に上りて、とまやに立ちよりて、
「こゝをば何處といふぞ」と問ひければ、越後の國寺泊とぞ申しける。「思ふ所に着きた
るや」と悦びて、其の夜の内に、くがみといふ所に上りて、みくらまちに宿をかり、明
くれば、彌彦の大明神を拜み奉りて、九十九里の濱にかよりて、蒲原のたちを越えて、
八十八里の濱などといふ所を行き過ぎて、あらかいの松原、いはふねを通りて、せなみ
といふ所に、左やなぐひ、右うつほ、せんがかけはしなどといふ、名所々々を通り給ひ
て、念じゆの關守きびしくて、通るべきやうもなければ、「如何せん」と仰せられければ、
武藏坊申しけるは、「多くの難所を遁れて、是までおはしましたれば、今は何事か候ふべ
き。さりながら用心はせめ」と、判官をば下種山伏に作りなし、二挺の笈を嵩高に持たせ
奉り、辨慶大のしもと杖につき、「歩めや法師」とて、しとどうちて行きければ、關守共

果てれば―
果てぬに

はいで―作
りて

白さや巻―
白柄の短刀

り乗りて押し出す。めうくわんおんの嶽より、おろしたる嵐におひかけて、よな山を過ぎて、かくた山を見つけて、「あれ見給へや、風はいまだ荒し。風弱くならば、艫を添へて押せや」とぞ申しける。あをしまの北を見給へば、白雲の山の腰をはなれて、宙に吹かれて出でくるを、片岡申しけるは、「國の習は知らず、此の雲こそ風雲と覺ゆれ。いか

がすべき」といひも果てねば、北風吹き來て、陸には砂をあげ、沖には潮をまひてぞ吹きたりける。海人の釣舟の浮きぬ沈みぬを見給ふにも、我が舟もかくぞあらめ、と思ひ給ふに、心細くして、はるか沖に漂ひ給ひけり。「とても叶ふまじくば、唯風に任せよ」とて、御舟をば佐渡の島へはせ付けて、まほろしかもかたへ、舟を寄せんとしけれども、浪高くして寄せかねて、松陰が浦へはせもて行き、それも、白山の嶽より嵐したる風烈しくて、佐渡の島をはなれて、熊登の國すどがみさきへぞ向けたりける。さる程に日も暮れがたに成りければ、いとど心ぞ違ひける。御幣をはいで、笈の足に挟みて祈られけるは、「天を祭る事は、さる事にて候へ共、此の風を和らけて、今一度陸に著けてともかくもなさせ給へ」とて、笈の中より白鞘巻を取り出して、「八大龍王に参らせ候ふ」とて、海へ入れ給ふ。北の方も、紅の袴に唐の鏡取りそへて、「龍王に奉る」とて、海に入れさ

斗、白布百端、紺の布百端、鷲の尾百しり、黄金五十兩、毛揃へたる馬七疋、荒薦百枚、これ敷きて積みて進らせば、かたの如くなりとも、濯ぎて奉らん」とぞ申しける。權の頭「いかに思ひ候ふとも、極めて貧なる者にて候ふ程に、叶ひがたく候ふ。悉くにて候はずとも、形の如く申し上げて給ひ候へ」とて、「米三石白布卅端、鷲の羽七しり、黄金十兩、毛そろへたる神馬三疋、これより外は持ちたる者も候はず。然るべく候はゞ申し上げて給ひ候へ」と詫びければ、「いで、さらば、權現の神慮を慰め參らせん」とて、胄小手すねあて鉞など入れたる笈に向ひて禮拜し、何事をか申し、「むつゝかんくらんくそわか／＼」と申して、「をんころ／＼般若々々心經」などぞ祈りける。笈を衝き働かし、て「權現に其の旨申し上げ候ひぬ。よの例なれば、かくは取り行ひ候ひぬ。是等は御邊のはからひにて、羽黒へとゞけ參らせてたび候へ」とて、權の頭がもとにぞ預けより。さて夜も更けよれば、片岡直江の港に下りて見れば、佐渡より渡したりける舟に、苦をもふかず主もなく、櫓權梶なども有りながら、浪に引かれゆられ居たり。片岡これを見て天晴ものや。此の舟を取つて乗らばや、と思ひて、觀音堂に參りて、辨慶にかくと云ひければ、「いざさらば此の舟に取つて乗り、けさの嵐に出さん」とて、港に下り、十餘人と

すね當、柄もなき鉞をぞ入れたりける。とかくすれども、強くからけたり。暗さは暗し、解きかねてぞ有りける。辨慶は手を合せて南無八幡と祈念して、「その笈には權現の渡らせ給ひ候ふ、返すくも不淨にして、罰あたり給ふな」と申しければ、「御正體にて渡らせ給はば、必ずあけずとも、知るべき」とて、笈のかけをと取つて、ひきあけて振りたりければ、小手觸當鉞が、かたりひしりと鳴りければ、權の頭胸うち騒ぎ、「かゝる事こそ候はね。けにく御正體にて、渡らせ給ひ候ひけるを」とて、「それ受け取り給へ」と申しければ、辨慶「さればこそ、さしもいひつる事を。笈すゝがざらんには、左右なく受け取り給ふな。御坊達」と言ひければ、左右なく人も受け取らず「かねて云はぬ事か。すゝがすば祈れ。清めには物が多くいらんするぞ」と云ひければ、權の頭、「理を曲けて受け取り給へ」といへば、「笈すゝがすば、權の頭が許に御正體をふり棄て奉りて、我らは羽黒に参りて、大衆を催して、御迎に参らんするなり」と嚇されて、寄せたりける者も一人々々、散りくくにごなりにける。權の頭一人は大事になりて、「笈をすゝぎ候はんには、如何やうの事を仕り候ふぞ」といひければ、「權現も衆生利益の御慈悲なれば、かたの如く―かたばかり、十分儀禮を整へぬこと

たの如くにてこそあらんすれ。先御幣紙の料に、檀紙百帖、白米三石三斗、黒米三石三

ば、「是は御本尊の渡らせおはしまし候ふ笈を、不淨なる者に、左右なく探させん事、恐れ
にてはあれども、和殿原が疑ひをなし、好む禍なれば、罪をかうぶらんは汝等次第よ。
すは見よ」とて、手にあたる笈一ちやう取つて投げ出す。何となく取つて出したるが、
判官の笈にてぞ有りける。武藏坊是を見てあはよと思ひける所に、卅三枚の櫛を取り出
し、「是は如何」と申しければ、辨慶冷笑ひて、「えいゝ方々は何をもあり給はずや。兒の
髪をば梳らぬか」といひければ、權の頭理と思ひければ、傍に差し置きて唐の鏡を取
り出し、「是は山伏の御道具か」といへば、「兒を具したる旅なれば、化粧の具足を持つま
じきいはれがあらばこそ」といひければ、理とて傍におき、八尺のかけ帶、五尺の鬘
紅の袴、重の衣を取り出して、「是はいかに兒の具足にも、斯様の物の入り候ふか」と
申しければ、「御不審尤もにて候ふ。此の法師が伯母にて候ふもの、羽黒山權現の僧のいち
にて候ふが、かつら袴色よきかけおび、買うて下せと申し候ひし程に、今度の下りに持
ちて下り、悦ばせん爲にて候ふぞ」と云ひければ、「それはさも候はん」と申す。「左候は
ば、今一ちやうの笈を御出し候へ。見候はゞや」と申す。「何挺にてもあれ、心にまかせ
て御覽ぜよ」とて、又一挺投げ出す。片岡が笈にてぞありける。此の笈の中には胃小手

檀那—梵語
施主

どもを先として、理非をも辨へぬ奴原が二百餘人、觀音堂をおしまきたり。折節侍ども、はうく齋料尋ねに行きければ、判官たゞ一人おはしける所へ押し寄す。直江の御堂に騒動する事聞えければ、辨慶走り合はんといそぐ。判官問答し給ひけるは、昨日までは羽黒山伏と宣ひしが、今は羽黒近ければ、引返して、一熊野より羽黒へ参り候ふが、舟を尋ねてこれに候ふ。先達の御坊は、檀那尋ねにおはしまして候ふ。これは御留守に候ふ。何事ぞ」などと問答し給ふ所に、武藏坊、物のかけりたる様にてぞ、出で來り申しけるは、「あの笈の中には、三十三體の聖觀音を、京より下り参らせ候ふが、來月四日の比には、御寶殿に入れ参らせ候はんするぞ。各身不淨なる體にて、左右なく近付きて、權現の御本地汚し給ふな。仰せらるべき事あらば、よそにて仰せられ候へ。權現を汚し参らせ給ふな。汚し給ふ程ならば、笈をすゝがざらんより外は有るまじ」と、嚇しけれども、少しも用ひずして、口々に罵りけり。權の頭巾しけるは、「判官殿みちくも陳じて通り給ふこと、其のかくれなし。是には今ほど守護こそ留守にて候へども、形の如くも、こむせうが承つて候ふ間、上つ方まで聞こしめし候はんする事にて候ふ間、かやうに申し候ふ。さ候はゞ御心休めに、笈一ちやう給て、見まゐらせ候はん」と申しけれ

苔屋―草ぶ
きの家

うきめ―憂
目と海藻と
に懸く

有徳―富豪

りて、いはとのさきといふ所につきて、海人の苔屋に宿をかりて、夜とともに御物語有
りけるに、浦の者共、かちめといふものをかづきけるを見給ひて、北の方かくぞ思ひつ
づけ給ひける。

よもの海なみのよるく來つれども今ぞはじめてうきめをば見る
辨慶これを聞きて、忌々しくぞ思ひければ、かくぞ續け申しける。

浦のみちなみのよるく來つれども今ぞはじめてよきめをば見る

かくていはとのさきをも、出で給ひて、越後の國府直江の津、花園の觀音堂と云ふ所に
つき給ふ。此の本尊と申すは、八幡殿、阿倍の貞任を攻め給ひし時、本國の御祈禱の爲
に、直江の次郎と申しける、有徳の者に仰せ付けて、三十領の鎧を給ひて、建立し給ひ
し、源氏重代の御本尊なりければ、その夜はそれにて終夜、御祈念ありけり。

七 直江の津にて笈さがされし事

こよに越後の國府の守護、鎌倉に上りてなし。浦の代官はらう權の守といふ者あり。山
伏つき給ふと聞きて、浦の者共を催して、櫓權などを、ちぎり木さいばうにして、網人

らせけり。權の頭是を取りて申しけるは、「法にまかせて、取りては候へども、あの御坊のいとほしければ、参らせん」とて判官殿にこそ奉りけれ。武藏坊これを見て、片岡が袖をひかへて、「嗚呼がましや。只あれもそれも、おなじ事ぞ」とさゝやける。かくて六だうじを越えて、なこの林をさして歩み給ひける。武藏忘れんとすれども忘られず、走りよりて、判官の御たもとに取り付きて、聲を立て泣くく申しけるは、「いつまで君をかばひ参らせんとて、現在の主を打ち奉るぞ。冥見の恐もおそろしや。八幡大菩薩も免し給へ。浅ましき世の中かな」とて、さしも猛き辨慶も、伏し轉び泣きければ、侍ども一とところに並み居て、消え入るやうに泣き居たり。判官、「是も人の爲ならず。か程まで果報つたなき義經に、かやうに心ざし深き面々の、行末までもいかどと思へば、涙のこぼるゝぞ」とて、御袖を濡し給ふ。各此の御詞を聞きて、なほも袂を絞りけり。かくする程に日も暮れければ、泣くくたどり給ひけり。やゝありて北の方、「三途の河を渡るこそ、着たる物をはがるゝなれ。少しも違はぬ風情かな」とて、磐瀬の森につき給ふ。其の日は此處にとまり給ひけり。あくれば黒部のやどに、すこし休ませ給ひて、くろべ四十八か瀬の渡をこえ、いちふり、しやうと、うたのわき、蒲原、なかはしといふ所を通



出し、痛はしけもなく、續けうちに散々にぞ打ちたりける。見る人目もあてられざりけり。北の方はあまりの御心うさに、聲を立てても悲むばかりに、思し召しけれども、さすが人目の繁ければ、さらぬやうにておはしけり。平權の頭是を見て、「すべて、羽黒の山伏程、情なき者はなかりけり。判官にてはなしと仰せらるれば、さこそ候はんするに、あれ程にいたはしく、情なく打ち給へるこそ心うけれ。せんする所、是は某が打ち参らせたる杖にてこそ候へ。かゝる御痛はしき事こそ候はね。是に召し候へ」とて、舟をさし寄する。梶取のせ奉りて申しけるは、「さらばはや舟賃なして、こし給へ」といへば、「いつの習に、羽黒山伏の舟賃なしけるぞ」と言ひければ、「日比取りたる事は無けれども、御坊の、餘に放逸に在れば取りこそ渡さんすれ。疾く舟賃なし給へ」とて、舟を渡さず。辨慶、「和殿が様に吾等に當らば、出羽の國へ、一年二年の内に來らぬ事はよもあらじ。坂田の湊は此の少人の父坂田次郎殿の領なり。唯今あたり返さんするもの」とぞ、嚇しけれども、權の頭「何とも宣へ、舟賃取らではえこそわたすまじけれ」とて、わたさず。辨慶「古とられたる例はなけれども、この僻事したるによつて、取らるゝなり」とて、「さらばそれたび候へ」とて、北の方の著給へる、帷子の尋常なるを、脱がせ奉りて、渡守に取

中乗―船中
に乗りたる
者ないふ歟

候へば、兼て仰かうぶりて候ひし間、山伏五人三人はいふに及ばず。十人にならば、所へ仔細を申さで渡したらんは、僻事ぞと仰せ付けられて候ふ、既に十七八人御渡り候へば、怪しく思ひ参らせ候ふ。守護へ其の様を申し候うて、渡し参らせん」と申しければ、武藏坊是を聞きて、妬氣に思ひて、「や殿、さりととも北陸道に、羽黒の讃岐坊を見知らぬ者や有るべき」と申しければ、中乗りに乗りたる男、辨慶をつくぐと見て、「けにくく見参らせたるやうに候ふ。一昨年も、さをともしも上下向毎に、御幣とて申し下し給はりし御坊や」と申しければ、辨慶うれしさに、「目よく見られたり」とぞ申しける。權の頭申しけるは、「こざかしき男の云ひやうかな。見知り奉りたらば、わ男が計ひに渡し奉れ」と申しければ、辨慶これを聞きて、「そもく此のなかにこそ、九郎判官よ、と名をさして宣へ」と申しければ、「あの舳に、村千鳥の摺の衣めしたるこそ、あやしく思ひ奉れ」と申しければ、辨慶、「あれは加賀の白山より連れたりし御坊なり。あの御坊ゆるに所々にて人々に怪めらるゝこそ、詮なけれ」と云ひけれども、返事もせで、打ちうつぶきて居給ひたり。辨慶腹立ちたる姿になりて、走りよりて、舟ばたを踏へて、御腕をつかんで、肩に引つかけて、濱に走りあがり、砂の上にかばと投げ捨て、腰なる扇ぬき

房達、下女に至るまで、思ひくゝに勸進に入り、總じて冥帳につく百五十人、勸進の物は、只今給はるべく候へども、來月中旬に上り候はんずれば、其の時給はり候はん」とて、預け置きてぞ出でにける。馬に乗せられて宮越まで送られけり。行きて判官を尋ね奉れども見え給はず。それより大野の湊にて参りあひけり。「いかに今まで久しく、いかに」と仰せられければ、「様々にもてなされて、夜もすがら經をよみなどして、馬にて是まで送られて候ふ」と申しければ、武藏を人々上げつ下しつ守りける。その日はたけのはしに留り給ひて、明くれば俱利伽羅山を越えて、はせこえが谷を見給ひて、是は平家の多く亡びし所にてあるなるに、とて、各阿彌陀經を讀み、念佛申し、かの亡魂を弔ひてぞ通られける。とかくし給ふ程に、夕日西にかよりて、たそがれ時にも成りければ、まつなかの八幡の御前にして夜を明し給ひけり。

六 如意の渡にて義經を辨慶うち奉る事

城―渡の誤

夜も明けよれば、如意の城を舟に召して、渡りをせんとし給ふに、渡守をば平權の頭とぞ申しける。彼が申しけるは、「暫く申すべき事候ふ。これは越中の守護、ちかき所にて

間所一人目
なき所

東大寺勸進
の山伏―東
大寺再建費
の寄附募集
の山伏

加賀の上品
―上等の加
賀絹

あしく候ふ」と申しければ、「上つ方こそ候ふとも、御後見の御方にそれ申して給ひ候へや」とて、しひて近くぞよりたりける。中間雑色二三人出でて「罷り出でられ候へ」と云ひければ、聞きも入れず。「狼藉なり。さらば搦んで出せ」とて、左右の腕に取り付き、おせどもへせども少しも働かず。「さらば所にな置きそ。放逸にあたりて出せ」とて、大勢ちか付きければ、拳をにぎりて、さんぐにはりければ、或は烏帽子打ちおとされ、髻かよへて、間所に入るもあり。「こよなる法師の狼藉するぞ」とて騒動す。富樫の介も、大口に押入烏帽子きて、手矛を杖につきて、さぶらひにぞ出でにける。辨慶是を見て、「是御覽ぜられ候へ。御内の者共狼藉し候ふ」とて、やがて縁にぞ上りける。富樫是を見て、「如何なる山伏ぞ」といへば、「是は東大寺勸進の山伏にて候ふ。」「いかに御身一人はおはするぞ。」「同行の山伏多く候へ共、さきさま宮越へ通し候ひぬ。是は御内勸進の爲に参りて候ふ。をぢにて候ふ美作の阿闍梨と申すは、東山道をへて信濃の國へ下り候ふ。此の僧は讃岐の阿闍梨と申し候ふが、北陸道にかより、越後に下り候ふ。御内の勸進はいかやうに候ふべき」と申しければ、富樫「よくこそ御出で候へ」とて、加賀の上品五十匹、女房の方より罪障懺悔の爲にとて、白袴一腰、八花形に鑄たる鏡、扱は家子郎黨女

鳥合―昔三
月三日の行
事に關難の
遊ありし也

あがりの松につき給ふ。是れは白山の權現に法施を手向くる所なり。いざや白山を拜ま
んとて、岩本の十一面觀音に御通夜あり。あくれば白山に参りて、によたいこのの宮を
拜み奉らせて、其の日は劔の權現に参り給ひて、御通夜ありて、夜もすがら御神樂参ら
せて、あくればみやしの六郎光あきらが、せとを通り給ひて、加賀の國富樫といふ所も
近くなり、富樫の介と申すは當國の大名なり。鎌倉殿より仰は蒙らねども、内々用心し
て、判官殿を待ち奉るとぞ聞えける。武藏坊申しけるは、「君は是より宮の越へ渡らせお
はしませ。辨慶は富樫が館のやうを、見て参り候はん」と申しければ、「偶あるとも知ら
れで通る道の有るに、よりては何のせんぞ」と仰せられければ、辨慶申しけるは、「中々
行きてこそよく候へ。山伏大勢にて通ると聞えは、大勢にて追ひ掛けられては悪しく候
はんすれば、辨慶ばかりまかり候はん」とて、笈とつて引つかけて、只ひとり行きける。
とがしが城を見れば、三月三日のことなれば、傍には鞠小弓の遊び、かたはらには鳥合、
又管絃酒盛と打ちみえて、酒に酔ひたる所もあり。武藏坊相違なく館のうちに入りて、
侍の縁のきはを通りて、内をさしのぞき見ければ、管絃たゞ今さかりなり。武藏坊大
の聲をあけて、「修行者の候ふ」と申しける。管絃の調子もそれにけり。「御内たゞ今、機嫌

しく吹きたりけり。笠のはを吹きあけたりければ、井上一目見参らせて、判官と御目を見合せ奉り、馬より飛んでおり、大道に畏つて申しけるは、「斯る事こそ候はね。途中にて参りあひ参らせ候ふこそ、無念に存じ候へ。侍ふ所は井上と申して、程遠き所にて候ふ間、あなたへとも申さず候ふ。山伏の色代は恐にて候ふ。疾く」と申して、我が身馬ひきよせて、左右なくも乗らず、はるかに送り奉り、御後とほざる程にもなりぬれば、各馬にぞのりたりける。判官はあまりの事に行きもやらで、頻に見反り給ひつゝ、「七代まで、弓箭の冥加あれ」とぞ、面々に申しけるぞあはれなる。其の日はほろぎといふ所に井上つきて、家の子郎黨どもを呼びて申しけるは、「今日行きあひ参らす山伏をば誰とか見奉る。是は鎌倉殿の御弟判官殿よ。あはれ日比のやうにおはさんには、國の騷動道路の大事とこそ成るべきに、此の御有様になり給へる御事の、いとをしさよ。討ち奉りたらば、千年萬年すぐべきか。あまりの痛はしさに、難なく通し奉りてこそ」と云ひければ、家の子郎黨共これを聞いて、井上の心の中、あはれ情も慈悲も深かりける人や、と頼もしくぞ覺えける。判官その日篠原にとまり給ひけり。明けよれば齋藤別當實盛が、手塚の太郎光盛に討たれける、あいはいけを見て、安宅のわたりを越えて、ね

たす—み
だすの誤な
るべし

く酒氣には、本性をたどすものなれば、暫く、少人に參らせよ。先達の御坊、京の君などといふとも、後は味氣なき娑婆世界の習、北の方に今一つ申せ。熊井や片岡思ひざしせん、伊勢の三郎もちて來よ。いで飲まん、辨慶などといはんほどに、焼野のきどすの頭をかくして、尾を出したる様成るべし。酒は上下向の間、禁酒にて候ふ」とて、長吏のもとへぞ返しける。「希有なる山伏達にて有りけるよ」とて、急ぎそうぜんしたて、御堂へ送りけり。各そうぜんしたためて、夜もあけほのになりければ、今宵の識法をぞ讀みける。伊勢の三郎を使にて、長吏に暇をぞ乞はれける。心ある大衆たち、徒歩にて、むらむらきえ残る雪を踏み分けて、二三町ぞ送りける。恐しく思はれし平泉寺をも、鰐の口のがれたる心地して、足早に通られける。かくてすこの宮を拜みて、かな津のそば野に著き給ふ。唐櫃あまたかよせて、ひき馬其の數あり。ゆよしけなる大名五十騎ばかりにぞ逢うたりける。「これはいかなる人ぞ」と問ひければ、「加賀の國井上左衛門と申す人なり。荒乳の關へ行くぞ」と申しける。判官これを聞き給ひ、「あはれ遁れんとすれども遁れぬものかな。今はかくぞ」と宣ひて、刀の柄に手を打ちかけ給ひて、北の方の背に背をさし合せて、笠のはにて顔をかくして、通さんとし給ふ所に、をりふし風はけ

戦 かせん―合

か御痛はしく、それ程の御誓をば、是にて破り参らせ候ふべき。とくく御代官にても候へ」と申しければ、武藏坊あまりの嬉しさに、腰をおさへ、空へむかひて、溜息ついてぞ居たりける。さうく参りて、「大和坊御代官に笛を仕れ」といはれて、判官佛壇のかけの、ほの暗き所より出で給ひて、少人の末座にぞる給ひける。大衆「さらば管絃の具足参らせよ」と申しければ、長吏の許より、くさきのどうの琴一ちやう錦の袋に入れたる琵琶一面取りよせ、「琴をば御客人に」とて、北の方に参らせける。琵琶をばねんいち殿の前に置き、笙の笛はみたわどのの前におき、横笛は判官の御前におき、かくて管絃ひとときありければ、面白しとも云ふもおろかなり。唯今まではかせんの道にて有るべかりつるに、いかなる佛神の御納受にてや、不思議にぞ覺えし。衆徒も是を見て、「あはれ笛の音や。ねんいちみたわ殿をこそ、よき兒と有りがたく思ひつるに、今此の兒と見比ぶれば、同じ口にも云ふべくもなし」などと、若大衆共口々にぞさよやきける。長吏寺中にかへり、小夜ふけて長吏の許より、やうく菓子つみななどして、瓶子そへて観音堂に送りけり。皆人々疲のぞみければ、「いざや酒のまん」とて、とりぐに申しけるを、武藏坊「あはれ詮なき殿原かな。ほしさのまよに、誰も飲まんずるほどに、程な

詞候はぬ事
—いふまで
もなき事と
の意歟

下には白きなへ色の衣を召したりければ、猶も美しくぞ見え給ひける。御髪尋常に結び
なして、赤木の柄の刀に、だみたる扇さしそへて、御手に横笛持ちて御出あり。御供には
十郎權の頭、片岡、伊勢の三郎、判官殿は殊に近くぞおはしける。自然の事あらば、人
手にはかくまじきものを、とぞ思し召しける。正面に出で給へば、殊に其の時は火を高
く挑けたり。北の方扇取り直し、衣紋かきつくりひ、座敷に直り給ふ。今まではかたく
なはしき所もおはしませず、武藏坊心安く思ひけり。何ともあれ、し損する程ならば、
差し違へていかにもならめ、と思ひければ、長吏に膝をきしりてぞ居たりける。辨慶申
しけるは、「詞候はぬ事、笛においては日本一ぞかし。但し仔細一つ候ふ。此の少人羽黒
におはしまし候ふ時も、明暮笛にのみ心を入れて、學問の御心も空々に御渡り候ひし
程に、去年の八月に羽黒を出でし時、師の御坊、今度の道中、上下向の間笛をふかじと
云ふ誓言をなし給へ、とて、權現の御前にて、鐘を打たせ奉りて候へば、少人の笛をば、御
免候へかし。是に大和坊と申す山伏の候ふが、笛の上手にて候ふ。常に少人も、是にこ
そ御習ひ候へ。御代官に是を參らせ候はどや」と申しければ、長吏是を聞きて、感じ申
しけるは、「あはれ人の親の子を思ふみちあり、師匠の弟子を思ふ心ざし是なり。いかで

花折りて—
美装して

れを聞きて、「易きことや」と返事はしたれども、兩眼まつ暗になるやうにぞ覺えける。さ
てしも有るべきことならねば、「其のやうを少人に申し候はん」とて、西廊下に参りて、
「かゝる事こそ候はね。ありてもあらぬ事を申して候ふほどに、御笛遊ばさせ参らせて、
承るべきよし申し候ふ。いかゞ仕るべく候ふ」と申しければ、「さりとては、吹かすとも
出で給へ」と仰せられければ、「あら心憂や」とて、衣引き被きふし給ふ。衆徒も連りに、
「少人の御出おそく候ふ」と申せば、辨慶「只今々々」と答へて居たり。泉と申す法師い
ひけるは、「さすがに吾が朝には、熊野羽黒とて、大所にて候ふぞかし。それに左右なく
名譽の兒を、平泉寺にて呼び出して、さんぐに嘲弄したりけると聞えん事、此の寺の
恥にあらずや。少人を出し奉りもてなすやうにて、其の序に吹かせたらんは、苦しから
じ」と申しければ、「尤も然るべし」とて、長吏の許に、ねんいち、みたわとて、名譽の
兒あり、花折りて出でたよせ、若大衆の肩首に乗りてぞ來りける。正面の座敷長吏、東
は政所、西は山伏、本尊を後にし奉りて、佛壇の際に南へ向けて、少人の座敷をぞした
りける。二人のちご座敷に直りければ、辨慶参りて、「御出で候へ」と申しければ、北の
方、たゞ闇にまよひたる心地して出て立ち給ふ。昨日の雨にしをれたる顯紋紗の直垂に

リ

「少人^{せうじん}をば誰^{たれ}と申し候ふぞ。」坂田^{さかた}の次郎殿^{じらうだん}と申す人の御子息^{ごしそく}、金王殿^{こんわうだん}とて、羽黒山^{はぐろさん}には、隠^{かく}れなき少人^{せうじん}にて候ふぞ」といひければ、衆徒^{しゆだ}これを聞きて、「此^この者共^{ものども}は、判官^{はんぐわん}にてはなき者ぞ。判官^{はんぐわん}にておはしまさんには、いかでか是程^{こゝろ}に、羽黒^{はぐろ}の案内^{あんない}をば知り給ふべき。金王^{こんわう}と申すは、羽黒^{はぐろ}に名譽^{めいよ}の兒^こにて候ふなるぞ。長吏^{ちやうり}事を聞きて、座敷^{ざしき}に居なほりて、武藏坊^{むさしぼう}を呼びて、「先達^{せんだち}の坊^{ぼう}に申すべき事候ふ」といへば、辨慶^{べんけい}も長吏^{ちやうり}に膝^{ひざ}をくみかけてぞ居たりける。長吏^{ちやうり}申されけるは、「少人^{せうじん}の事承り候ふこそ、心も詞^{ことば}も及ばずおはしまし候ふなれ。學問^{がくもん}のせい^{せい}は、如何様^{いかやう}に在^{おほ}しまし候ふぞ」といひければ、「學問^{がくもん}においては、羽黒山^{はぐろさん}には、竝^{なら}びもおはしまし候はず。申すにつけては、過言^{くわごん}にては候へども、容顔^{ようがん}においては、山三井寺^{やまみづでら}にもおはしまし候ふべき」と譽^ほめたりけり。「學問^{がくもん}のみにも候はず、横笛^{やうてう}においては、日本一^{にっぽんいち}とも申すべし」と云ひければ、長吏^{ちやうり}の弟子^{でし}に、泉美作^{いづみみまさか}と申しける法師^{ほうし}は、極めて案^{あん}ふかき、寺中^{じちゆう}一のえせものなり。長吏^{ちやうり}に申しけるは、「女^めならばこそ、琵琶^{びば}ひく事は常^{つね}の事にて候ふ。是は女^めぞと疑^{うたが}ふ所に、笛^{ふえ}の上手^{じやうず}と申すこそ怪^{あや}しく候へ。けに兒^こか笛^{ふえ}を吹^ふかせて見候はん」と申す。長吏^{ちやうり}けにもとて、「哀^{かな}れさ候はど、音^{おと}に聞えさせ給^{たま}ふ御笛^{おんふえ}を、承^{うけ}り候うて、世^よの末^{すゑ}の物語^{ものがたり}にも傳^{つた}へ候はどや」とぞ申されける。辨慶^{べんけい}こ

ひたかぶと
——同甲冑
を着したる
をいふ

うちまかせ
ては云々——
普通には山
伏たちの來
懸らぬ所な

間もいと懶く、夢に辿る心地して、平泉寺の觀音堂にぞつき給ふ。大衆ども是を聞き
て長吏の許にぞ告げたりける。政所の勢を催して、寺中と一統になりて、詮議しけるは、
「當時關東の山伏禁制にて候ふに、此の山伏はたゞ人とも見えず。判官は天津、坂本、荒
乳の山も通られて候ふなり。寄せて見ばや。如何様にも是は判官にておはすると覺え
候ふ」と詮議す。尤もとて大衆出でたつ。かの平泉寺と申すは山門の末寺なり。されば
衆徒の規則も、山上に劣らず。大衆二百人、政所の勢もひたかぶとにて、夜半ばかりに
觀音堂にぞ押かけたる。十餘人は東の廊下にぞ居たりける。判官と北の方は、西の廊下
におはしたる。辨慶参りて、「今はこそと覺え候ふ。是は餘の所には似べくも候はず。い
かど御計ひ候ふ。さりながら、叶はざる迄は、辨慶陳じて見候はん間、叶ふまじけに候
はど、太刀をぬき、憎い奴原など申して、飛んでおり候はど、君は御自害候へ」とぞ申
して出でける。大衆に問答の間、にくい奴原といふ聲すると、耳を立てよぞ聞き給ふ。心
細くぞありける。衆徒申しけるは、「抑も是はどこの山伏にて候ふぞ。打任せては、止まら
ぬ所にて候ふに」と申しければ、辨慶申しけるは、「出羽の國羽黒山の山伏にて候ふ。」「羽
黒には誰と申す人ぞ。」「大黒堂の別當に、讃岐の阿闍梨と申す者にて候ふ」と答へけり。

もの
ごほふじん
―護法、佛
法守護の覺
神

良は七堂の大伽藍、初瀬は十一面觀音、稻荷祇園住吉、加茂、春日大明神、比叡山王七社の宮、願くは判官此の道にかけ參らせて、荒乳の關守の手にかけて、留めさせ奉り、名を後代に上げて、勳功たいくわいならば、羽黒山の讃岐坊が、驗徳の程を見せ給へ」とぞ祈りける。關守ども是を聽聞し、さも頼もしけにぞ思ひける。心中には、「八幡大菩薩願はくは、送りこう迎ひこうとなりて、奥州まで左右なく届け奉り給へ」と祈ける心の中こそ、哀なる祈とは覺ゆれ。夢に道行く心地して、荒乳の關をも通り給ふ。其の日は敦賀の津に下りて、せいたい菩薩の御前にて、一夜御通夜有りて、出羽へ下る舟を尋ね給へども、未だ二月の初の事なれば、風烈しくして行き通ふ舟もなかりけり。力およばず夜を明して、木邊といふ山を越えて、日數も経れば越前の國の國府にぞつき給ふ。それにて三日御逗留ありけり。

五 平泉寺御見物の事

「横道なれども、いざや當國に聽えたる、平泉寺を拜まん」と仰ける。各心得ず思ひけれども、仰なればさらばとて、平泉寺へぞかゝられける。その日は雨ふり風吹きて、世

長數物一番
卒の頭領ら
しき者

大苛高の珠
數—珠數の
粒の平たき

ぎて洗足し、思ひくゝに寝ぬ起きぬなど、したり顔に振舞ひければ、關守共、「是は判官殿にておはせぬ氣なり。たゞ通せや」とて、關の戸を開きたれども、急がぬ體にて、一度には出でずして、一人づつ二人づつ、靜に立ち休らひくゝぞ出で給ふ。常陸坊は、人より先に出でたりけるが、跡をかへり見ければ、判官と武藏坊が、いまだ關の縁にぞ居給へり。辨慶申しけるは、「關手御免候ふ上、判官にてはなしといふ、仰かうぶり候ひぬ。かたぐもつて喜び入つて候へども、此の二三日、少人に物參らせ候はず候へば、心苦しく候ふ。關屋の兵糧米、少し給ひ候うて、少人に參らせて通り候はばや。且うは御祈禱、且うは御情にてこそ候へ」と云ひければ、關守共、「物も覺えぬ山伏かな。判官かと申せば、口強に返事し給ふ。又齋料乞ひ給ふ事は、いかど」と申しければ、長數物、「まことは御祈禱にてこそあれ。それ參らせよ」と云ひければ、唐櫃の蓋に、白米一ふた入れて參らせける。辨慶是を取つて、「大和坊、是を取れ」といひければ、傍よりさし出でて請け取り給ひけり。辨慶長押の上について居て、腰なる法螺貝取り出し、おびたゞしく吹きならし、首にかけたる大苛高の珠數とつて押し揉みて、尊けにぞ祈りける。「日本第一大りやう權現、熊野は三所權現、大峰八大金剛童子、葛城は十萬の満山のごほふ神、奈

道せん―道
饒なるべし

新しき事を承り候ふものかな。いつの習に、羽黒山伏の、關手なす法やある。例なきことは叶ふまじき」といひければ、關守共是を聞きて、「判官にてはおはせぬ」と云ふもあり、或は「判官なれども、世に越えたる人にておはしませば、武坊藏などいふ者こそ、かやうに陳ずらめ」なぞ申す。又或者出でて申しけるは、「さ候はど、關東へ人を參らせ、左右を承り候はんほど、是に留め置き候はん」と申しければ、辨慶「これは金剛童子の御計ひにてこそ。關東の御使、上下の程、關屋の兵糧米にて、道せんくはで、御祈禱申して、心安く暫く休みて下るべし」とて、ちつとも騒がず、十挺の笈をば、關屋の内に取り入れて、十餘人の人々、むらくと内に入つて、つくとしてぞ居たる。猶も關守怪しく思ひけり。辨慶關守に向つて、問はず語りをぞ申し居たる。此の少人は出羽の國の、坂田の次郎殿と申す人の君達、羽黒山にて金王殿と申す少人なり。熊野にて年籠りして、都にて日數をへて、北陸道の雪きえて、山家々々に傳ひて、粟の齎料など尋ねてさいしきなどなりとも、取りて下るべく候ひつるに、餘りに此の少人故郷の事をのみ仰せられ候ふ間、未だ雪も消え候はねども、この道に思ひ立ち候うて、如何せんと歎き候ひつるに、是にて暫く日數を経候はん事こそ、嬉しく候へ」と、物語などして、草鞋をぬ

關手—關守
人の心付
渡賃—川な
どの渡し賃

かうけ—高
家、權貴

候へ」とぞ申しける。いはれて關屋の縁に居給へる、是こそ判官にておはしましけれ。辨慶申しけるは、「是は羽黒山の讃岐坊と申す山伏にて候ふが、熊野に參りて、年籠りして、下向申し候ふ。九郎判官殿とかやをば、美濃の國とやらん、尾張の國とやらんより、生捕りて都へ上るとやらん、承り候ひしが、羽黒山伏が判官といはるべき様こそなければ」と云ひけれども、何と陳じ給へども、弓に矢をはけ、太刀長刀の鞘をはづしてぞ居たりける。あとの人々も七人連れてぞ來りける。いとど關守共、さればこそとて、「大勢の中に取り籠めて、たゞ打ち殺せ」と喚きければ、北の方消え入る心地し給ひけり。ある關守申しけるは、「暫く靜まり給へ。判官ならぬ山伏殺して、後の大事なり。關手を乞て見よ。昔より今に至るまで、羽黒山伏の渡賃、關手なす事はなきぞ。判官ならば仔細を知らずして。關手をなして通らんと急ぐべし。現の山伏ならば、よも關手をばなさじと、是をもつて知るべき」とて、さかくしけなる男進み出でて申しけるは、「所詮山伏なりとても、五人三人こそあらめ。十六七人の人々に、いかで關手を取らではあるべき。關手なしで通り給へ。鎌倉殿の御教書にも、かうけをつけきはらず、關手を取りて關守共の、兵糧米にせよと候ふ間、關手を給はり候はん」とぞ申しける。辨慶いひけるは、「事

繋き置かれ
たる者―嫌
疑によりて
捕留せられ
たる者

頭、根尾、熊井、龜井、駿河、喜三太御供にて、其のあひ五町ばかり隔てける。先の勢は木戸口に行き向ひたりければ、關守是を見て、すはやといふこそ久しけれ。百人ばかり、七人をなかに取りこめて、「是こそ判官殿よ」と申しければ、繋ぎ置かれたる者ども、「行方も知らぬ我らに、憂目を見せ給ふ。是こそ判官の正身よ」と喚きければ、身の毛もよだつばかりなり。判官進み出でて仰せられけるは、「抑も羽黒山伏の何事をして候へば、是程に騒動せられ候ふやらん」と宣へば、「何條羽黒山伏。九郎判官殿にてこそおはしませ」と申しければ、「此の關屋の大將軍は、誰殿と申すぞ」と問ひ給へば、「當國の住人敦賀の兵衛、加賀の國の井上左衛門と申す人にて候へ。兵衛は今朝下り候ひぬ。井上は金津におはする」と申しければ、「主もおはせざらん所にて、羽黒山伏に手かけて、主に禍かくな。其の儀ならば此の笈の中に、羽黒の權現の御正體觀音のおはしますに、此の關屋を、御むろ殿と定めて、八重のしめを引きて、御櫛をふれ」とぞ仰せられける。關守ども申しけるは、「けに判官にておはしませずば、其の様をこそ仰せらるべく候ふに、主に禍をかくべからんやうは、如何にぞ」と咎めける。辨慶これを聞きて、「かたの如く先達候はんずる上は、山法師が申す事を御咎め候うては詮なし。やあ大和坊、そこ退き

ふていー今の俗言にもあり、心太くなること

かよらせ給ふべし。彼奴は、君を見知り参らせ候ふにおいては、疑もなき作事をして、君をたばかり参らせんとこそすると覺え候ふ。先へやりても後へかへしても、よき事はあるまじ」と申しければ、「よきやうに計らへ」とぞ仰せられける。武藏坊立ちそひて、「どの山を、どの狭間にかよりて行かんするぞ」と、問ふやうにもてなし、弓手の腕をさしのべて、たて首をつかみ、逆様に取つて伏せ、こはむねを踏へて、刀をぬきて心もとにさしあてよ、「おのれ有りのまゝに申せ」と、責めければ、震ひく申しけるは、「誠には、上田左衛門に候ひしが、恨むる事候うて、加賀の國、井上左衛門が内に候ひしを、見知り参らせて候ふと申して候へば、罷り向ひ参らせて、賺し参らせ候へ、と仰せられ候へども、いかでか君をばおろかに存じ参らすべき」と申しければ、「それこそ己が、後事よ」とて、まん中二刀さし貫き、首掻き放し雪の中に踏み込みて、さらぬ體にてぞ通り給ふ。井上が下人平三郎と云ふ男にてぞありける。餘りに下郎の口きよたるは、反つて身を食むとは是なり。扱十餘人の人々、とてもかくてもと打ちふてよ、關屋をさしてぞおはしける。十町ばかり近づきて、勢を二手に分けたりけり。判官殿の御供には、武藏坊、片岡、伊勢の三郎、常陸坊、是を初めとして七人、今一手には、北の方の御供して、十郎權の

と云ふ所につきて、すぎのをか、舟に棹さして、あいかはの津につかせ給ひて、道は又二つと、最上の郡にかゝりて、いなを關をこえて、宮城野の原、躑躅のをか、ちかの鹽釜、松島と申す名所々々見給ひては、三日横道にて候ふ。かなよりの地藏堂、かめわり山を越えては、むかし出羽の郡司が娘、小野の小町と申す者の住み候ひける、玉造むろの里と申す所、また小町が關寺に候ひける時、業平の中將あづまへ下り給ひけるに、妹の姉葉がもとへ、文かきてことづてしに、中將下り給ひて、姉葉を尋ね給へば、空しくなりて、年久しく成りぬ、と申せば、姉葉がしるしはなきか、と仰せられければ、ある人墓に植ゑたる松をこそ、あねはの松とは申し候へ、と申しければ、中將あねはが墓に行きて、松の下に文を埋めて、よみ給ひける歌、

くり原やあねはの松の人ならばみやこの苞にいざといはましものを

伊勢物語の歌第一の句くり原のとあり第五句のものは衍也

とよみ給ひける名木を御覽じては、松山一つだにも越えつれ。秀衡が館は近く候ふ。理に枉けて、此道にかゝらせ給ふべし」と申しければ、判官是を聞き給ひて、「これは只者にてはなし。八幡の御計ひと覺ゆるぞ。いざや此の道にかゝりてゆかん」と仰せられければ、辨慶申しけるは、「かゝらせ給ふべき。わざと憂目を御らんせん、と思召されば、

こふ一國府

寺を泊一を
は衍なるべ
し

いかに口きよたる辨慶も、力なくて伏し目になりにけり。「せんなき御事かな。此の道の
末には、君を待ち参らせ候ふものを、たゞ是より御歸り候へかし。此の山の峠より、東
へ向うてのうみ越にかよりて、燧が城へ出で、越前の國こふにかよりて、平泉寺を拜み
給うて熊坂へ出で、すかうの宮をよそに見て、かなづのうは野へ出で、篠原安宅のわた
りをせさせ給ひて、根上りの松を眺めて、白山の權現をよそにて禮し給ひ、加賀の國宮
のこしに出でて、大の渡し給ひて、あをがさきの橋を越えて、たけの栗殻山を経て、
くろさか口の麓を、こいしやうにかよりて、六とうじの渡して、なごの林を眺めて、い
はせの渡、四十八か瀬を越え、宮崎の郡を、いちふりにかよりて、蒲原ながいしかと申
す難所を経て、のうみの山をよそに伏し拜み給ひ、越後の國、國府につきて、直江の津
より舟に召して、よな山をおきがけに、卅三里のかりや濱、かづきしらさきを漕ぎ過ぎ
て、寺を泊に舟をつけ、くりみやいしを拜みて、九十九里の濱にかよりて、乗足、蒲原、
八十里の濱、せなみ、あらかは、いはふねといふ所に著きて、すとうとみちは、ゆきしろ
みづに、山河まさりて叶ふまじ。いはひがさきにかよりて、おちむつやなかざか、ねん
じゆの關、大泉の莊、大ほんじを、通らせ給ひて、羽黒の權現をふし拜み参らせ、清河

立文―杉原
鳥の子薄様
の類の全紙
に文かきて
巻きたるも
の

人敦賀の兵衛、加賀の國の住人井上左衛門、兩人承りて、荒乳の山の關屋をこしらへて、夜三百人、晝二百人の關守をすゑて、關屋の前に亂杭を打ちて、色も白く向齒のそりなどしたる者をば、道をもすぐにやらす、判官殿とて搦め置きて、糺問してぞ弄きける。みち行く人の判官殿を見奉りては、「此の山伏たちも、此の難をばよも遁れ給はじ」とぞ申しける。聞くにつけても、いとど行く先も物憂く思し召しける所に、越前の方より、あさぎ直垂きたる男の、立文持ちて忙はしけにてぞ行き逢ひける。判官是を見給ひて、「なにとも彼奴は仔細ありて通る奴にてあるぞ」と宣ひける。笠の端にて顔かくして通さんとし給ふ所に、十餘人の中を分け入りて、判官の御前にひざまづきて、「かゝる事こそ候はね。君は何處へとて、御下り候ふぞ」と申しければ、片岡申しけるは、「君とは誰ぞ。此の中に、汝に君とかしづかるべき者こそ覺えね」と云ひければ、武藏坊これを聞きて、「京の君の事か、宣旨の君の事か」といひければ、かの男「何しにかくは仰せ候ふぞ。君をば見知り參らせて候ふ間、かくは申し候ふぞ。是は越後の國の住人、上田左衛門と申す人の内に候ひしが、平家追討の時も御供仕りて候ひし間、見知り奉り候ふ。壇浦の合戦の時、越前と能登加賀三箇國の人数、着到つけ給ひし武藏坊と見奉るは、僻事か」と申せば、

せんぢやう
—山上なる
べし

腰—山の中
腹

ひて、「それ程知りたらば、しらぬ義經にいはせんよりも、など疾くよりは申さぬぞ」と仰せければ、「辨慶申し候はんずる所を、君の遮りて仰せ候へば、いかでが辨慶申すべき。此の山をあら血の山と申すことは、加賀の國にしも、白山と申すに、女體ここのりうぐうの宮とて、おはしましけるが、志賀の都にして、辛崎の明神に、見え染められ參らせ給ひて、年月を送り給ひける程に、懷妊既に其の月近くなり給ひしかば、同じくは我が國にて、誕生あるべしとて、加賀の國へ下り給ひける程に、此の山のせんぢやうにて、俄に御腹の氣つき給ひけるを、明神御産近づきたるにこそ、とて、御腰を抱き參らせ給ひたりければ、即ち御産なりてけり。其の時産の荒血をこほさせ給ひけるによりて、あら血の山とは申し候へ。さてこそあらしいの山、あら血の山のいはれ知られ候へ」と申しければ、判官「義經もかくこそ知りたり」とて、笑ひ給ひけり。

四 三の口の關とほり給ふ事

夜もすでに明けよれば、荒乳の山を出で、越前の國へ入り給ふ。荒乳の山の北の腰に、若狭へ通ふ道あり、のうみ山に行く道もあり、そこを三の口とぞ申しける。越前の國の住

歩み給ふべきやうぞなき。荒乳の山と申すは、人跡たえて、古木たち枯れ、巖石峨々と
して、路すなほならぬ山なれば、岩角をそばだて、木の根は枕を並べたり。いつ踏み
習はせ給はねば、左右の御足より流るゝ血は、紅を注ぐが如くにて、あちの山の岩角
染めぬ所ぞなかりける。少々の事こそ、柿の衣にもおそれけれ、見奉る山伏ども、あま
りの御痛はしさに、時々かはりくぞ、負ひ奉りける。かくて山深く分け入り給ふ程に、
日も既に暮れにけり。路の邊二町許分け入つて、大木のもとに敷皮をしき、笈をそば
だて、北の方を休め奉る。北の方、「恐ろしの山や。是をば何山といふやらん」と問
ひ給へば、判官、「是は昔はあらしい山と申しけるが、當時はあちの山と申す」と仰せ
ければ、「面白や、昔はあらしいの山といひけるを、何とてあちの山と名づけよん」と
宣へば、「此の山は、あまり巖石にて候ふ程に、東より都に上り、京より東に下る者の
足を踏み損じて、血を流す間、あちの山とは、申しけるなり」と宣へば、武藏坊、是
を聞きて、「あはれ是程跡形なき事を仰せ候ふ御事は候はず。人の足より血を踏み垂らせ
ばとて、あら血の山と申し候はんには、日本國の巖石ならん山の、あちの山ならぬこ
とは候はじ。此の山の仔細は、辨慶こそよく知りて候へ」と申しければ、判官きよ給

候はんすれば、暇申して何處にも君の渡らせおはしまさん所を承りて、参りて見参らせ候はん」とて歸りけり。下臈なれども情ありてぞ覺えける。大津次郎は、家に歸りて見ければ、女は「昨日の腹をするかねて、未だ臥してぞ居たりける。大津次郎、「や御前く」といひけれども音もせず。「哀れわ女はせんなき事を思ふなり。山伏とぶめて判官殿と號して、既に憂目を見んとせしよな。舟に乗せて海津の浦まで送り、船賃などと責めければ、法もなく物をいひつる間、憎さに、かなぐり取りたる物を見よ」とて、太刀と腹巻とを取り出して、がばと置きければ、寢亂れ髪の際より、恐しけなる眼しばたとき、流石に今は心地取り直したる氣色にて、「それも妾が徳にてこそあれ」とて、大笑にゑみたる面を見れば、あまりに疎ましくぞありける。男いふとも、女の身にては、いかどなど制しこそすべきに、思ひ立ちぬるこそ、恐しけれ。

三 荒乳山の事

判官は、海津の浦を立ち給ひて、近江の國と越前の堺なる荒乳の山へぞかより給ふ。をとよひ都を出で給うて、大津の浦につき、昨日は御舟に召され、舟心にそんじ給ひて、

荒乳山―越前、古昔三關の一

寂照—大江
定基の法名
うづらなく
云々—金葉
集に見たる
源俊賴の歌
にして寂照
のに非ず

る。風かぜに任まかせて行く程に、夜半やはんばかりに、西近江にしあふみ、いづくとも知らぬ浦うらを過ぎゆく程に、磯浪いそなみの聞えければ、「此處ここはいづくぞ」と問ひ給へば、「近江の國堅田かただの浦うら」とぞ申しける。北きたの方かたこれを聞こし召して、かくぞ續つづけ給ひける。

鳴なりがふすいさはの水みづのつもりて堅田かただの浪なみのうつぞやさしき

白鬚しらひげの明神みょうじんをよそにて拜をがみ奉り、參河みかはの入道にふだうじやくせう寂昭じやくせうが、

うづらなく眞野まのの入江いりえのうら風かぜにをばななみよる秋あきの夕ゆふぐれ

と云ひけん古ふるき心も、今こそ思ひ知られけれ、今津いまつの浦うらをこぎ過ぎて、海津かいづの浦うらに著つき

にける。十餘人じゆにんの人々をあけ奉りて、大津次郎おほつは御暇おんいさま申すなり。爰こゝに不思議ふしぎなる事あり。

南より北へ吹ふきつる風かぜの、今又北より南へぞ吹きける。判官はんぐわん仰おほせられけるは、「彼奴きやつ

は同じおなつぎの者ながらも、情なさけあるものかな。知らせばや」と思おもひ召めし、武藏坊むさしぼうを召して、

「知らせて下らば、後聞のちきて哀あはれとも思ふべし、知らせばや」と宣へば、辨慶べんけい大津次郎おほつを招まね

きて、「和君わきみなれば知らするぞ。君にて渡わたらせ給ふなり。道みちにてともかくもならせ給はど、

子孫しそんの守まもりともせよ」とて、笈おひの中より、萌黄もんぎの腹卷はらまきに小覆輪こふくりんの太刀たちを取り添へてぞ給たび

にける。大津次郎おほつ是を給ひて、「いつ迄までも御供おんごも申したく候へ共、なか／＼君の御爲みためあしく

何として遁れさせ給ひ候ふべき。是に山科左衛門と申す人、城廓を構へて、判官殿を待ち申し候ふ。急ぎ御出で候へ。是に小舟を一艘持ちて候ふに召されて、客僧達の御中に、舟に心得させ給ひて候はゞ、急ぎ御出で候へ」と申しける。辨慶申しけるは、「身に誤りたる事は候はねども、左様に所に煩ひ候はんするには、取りおかれ候うては、日數も延び候はんず。さ候はゞ暇を申す」とて出で給ひければ、「舟をば海津の浦にめし捨てよ、とく荒乳の山を越えて越前の國へ入らせ給へ」と申しける。判官出でさせ給へば、大津次郎も船津に参り、御船をこしらへてぞ参らせける。かくて大津次郎、山科左衛門の許に走り歸りて、申しけるは、「海津の浦に弟にて候ふ者、ちうように逢ひて、疵を蒙りて候ふ、と承り候ふ間、暇申して、別の事候はずば、頓てこそ参り候はん」と申しければ、「それ程の大事は、疾く」とぞ申しける。大津次郎家に歸りて、太刀取つて脇に挟みて、矢かき負ひ、弓押し張り御舟にをどり入つて、「御供申し候はん」とて、大津の浦をおし出す。勢多のかは風烈しくて、舟に帆をあけたりける。大津次郎申しけるは「此方はあはづ大わうの立て給ふ、石のたうさん、こよに見え候ふは、辛崎の松。あれは比叡山」と申す。山王の御寶殿を顧み給へば、其のゆくさは竹生島と申して、拜ませ奉

かしこまし
—喧すし、
静にと制止
の詞

さやなみ—
さいなみ
(打擲)

ふに付いては、金剛童子こんがうこうじの恐おそれもあり。けに又判官殿はうぐわんどのにておはしませばとて、忝かたじけなくも鎌倉殿の御弟みせにてましませば恐おそれあり。我が思おもひかより奉りても、輒たやすかるべき事ならず。かしこまし—とぞいひける。女をこれを聞きて、「ぢたいわ男をとこは、妻め子こに甲斐々々かひ々々しくあるばかりを、本ほんとする男をとこなり。女をの申す事は、上うへつ方の御耳おんみみに入らぬ事やある。城じやうへ出で、さらば参りて申さん」とて、小袖取こそでつて打ちかけ、やがて走り出はして行きける。大津次郎おほつ是を見て、彼奴きやつを放はなし立てよは悪あしかりなんとや思おもひけん、門もんの外そとに追おひつきて、「よかれ、今いまに始はじめたる事か。風かぜになびく刈萱かりかや、男おとこに従したがふ女」とて、引き伏ふせて、心のゆくゆくぞさやなみける。かの女をは極きまめたるえせ者ものなりければ、大路おほぢに倒たふれて喚をきけるは、「大津次郎おほつは、極きまめたるひが事ことの奴やつにて候ふぞ。判官はうぐわんの方人かたうしするぞ」とぞ申しける。所の者ものこれを聞きて申しけるは、「大津次郎おほつの女をこそ、例れいの醉狂さひぐるひして、男おとこに打たるよとてをめくは、又多くの法師ほふしの歎なげきともならんや。たゞ放はなし合あせて打たせよ」とて、とりさふる者ものなければ、ふす—打たれて、臥ふしにけり。大津次郎おほつは直垂ひたし取りて着きて、御上おんうへに参りて、火打ひち消けして申しけるは、「斯くる口惜くちをしき事こそ御座ござ候はね。女をめが物に狂くるひ候ふ。是聞こし召され候へ。何なにとも御渡おんわたり候へ。今夜こんやは是にて明あさせ給ひて、明日あしたの御難ごなんをば、

せんぼふー
懺法、天台
大師の作な
る懺悔の法
を記せる書
にて佛前に
誦するもの

おほつ 大津のなぎさに、大きな家あり。これは鹽津、海津、山田、矢走、粟津、松本に聞
えたる商人の宗徒の者、大津次郎と申す者の家なり。辨慶宿を借らせけるは、「羽黒山伏
の熊野に年籠りして下向し候ふ。宿をたび候へ」と借らせたりければ、宿づたふ習なれ
ば、左右なく宿を參らせたり。さ夜うち更けて、せんぼふ阿彌陀經を同音にぞよみ給ひ
ける。是ぞ勤の始めなる。大津次郎は、左衛門の召にて城にあり。大津の次郎が妻、物
ごしに見奉りて、あらいつくしの山伏兒や。遠國の道者とは宣へども、衣裳のいつく
しさよ。いかにもたゞ人にはあらず。但し判官殿、山伏になりて下り給ふなるに、山伏
大勢とどめて、城に聞えては身の爲も大事なり。次郎を呼びて、此の事を知らせて、判
官殿にてましますば、城まで申さずとも、私にも討ちても搦めても、鎌倉殿の見參に入
れて、勳功に與りたらば、然るべき、と思ひければ、城へ使を遣はして、男を呼び寄せ
て、一間なる所へ招きて云ひけるは、「時しもこそ多けれ、今夜しもわれく判官殿に、
宿を貸し參らせて候ふは、如何せんする。御邊の親類、我が兄弟を集めて、搦めばや」と
ぞ申しける。男申しけるは、「壁に耳、石に口と云ふ事あり。判官殿にておはすればと
て、何か苦しかるべき。搦め參らせたればとて、勳功もあるまじ。誠の山伏に渡らせ給

春をだに見すてゝかへる雁金のなにのなさけに音をばなくらん

ところへ打ち過ぎければ、逢坂の蟬丸の住み給ふ薬屋のとこを來て見れば、垣根に忍ぶ交りの忘れ草打ち交り、荒れたる宿の事なれば、月の影のみ昔に變らじ、と思ひ知られて哀なる。軒の忍を取り給ひて奉り給へば、北の方都にて見しよりも、しのぶ哀の打ち添ひて、いと哀に思し召して、かくぞ續け給ふ。

住みなれし都を出でてしのぶ草おくしら露はなみだなりけり

かくて大津の浦も近くなる。春の日の長きに、終日歩むくとし給へども、關寺の入相の鐘、今日も暮れぬと打ちならし、あやしの民の宿借る程になりぬれば、大津の浦にぞかかり給ひける。

二 大津次郎の事

爰に又うき事ぞ出で來たる。天に口なし人を以つていはせよと、誰が披露するとしもなけれども、判官山伏になりて、其の勢十餘人にて、都を出で給ふと聞えしかば、大津の領主山科の左衛門、園城寺の法師を語らひて、城廓を構へて相待つ。されども判官は、



八聲の鳥一
番雞は必
ず八聲鳴く
よりいと
の説

出でさせ給ひけれども、八聲の鳥もしどろに鳴きて、寺々の鐘の聲はや打ちならす程に、明けけれども、やう／＼粟田口まで出で給ふ。武藏坊片岡に申しけるは、「いかとせん、いざや北の御方の御足早くなし奉るべし。片岡に申せ」と云ひければ、御前に参りて申しける様は、「かやうに御渡り候はど、道行くべしとも存じ候はず。君は御心靜に御下り候へ。我らは御さきに下り候うて、秀衡に御所造らせて、御迎へにまゐり候はん」と申して、御さきに立たせ給ひければ、判官の仰には、「いかに人の御名殘惜しく思ひ参らせ候へども、是等に捨てられては叶ふまじ。都の遠くならぬ先に、兼房御供して歸れ」と仰せられて、捨て置きて進み給へば、さしも忍び給ひし御人の、御聲を立てと仰せられるは、「今より後は道遠しとも悲むまじ。誰に預け置きて、何處へ行けとて捨て給ふぞ」とて、聲を立てと悲み給へば、武藏、又立ち歸り具足し奉りける。粟田口を過ぎて、松坂近くなりければ、春の空の曙に霞にまがふ雁の、かすかに鳴きて通りけるを聞き給ひて、判官かくぞ續け給ふ。

みこしちのやへの白雲かきわけてうらやましくも歸るかりがね
北の方もかくぞつゞけ給ふ。

か
い
り
き
—
戒
力
、
佛
の
力
也

ども、御姿少しも兒に違はせおはしまし候はず、何事もかいらきと申す御事にて、渡らせ給ひ候ひける」と申す内にも、哀れを催す涙の頻にこほれけれども、さらぬ體にてぞありける。去程に二月二日、まだ夜深に、今出川を出でんとし給ふに、西の妻戸に人の音しける。いかなる者なるらん、と御覽すれば、北の方の御めのと、十郎權頭兼房、白き直垂に、褐の袴きて、白髪まじりのもとどり引き亂し、頭巾うちき、「年より候ふとも、是非とも御供申し候はん」とて参りたり。北の方、「妻子をば誰に預け置きて参るべき」と宣へば、「相傳の御主を妻子に思ひかへ参らすべきか」と申しもあへず、涙にむせびけり。六十三に成りけるまよに、よき丈な山伏にてぞありける。兼房泪を押へて申しけるは、「君は清和天皇の御末、北の方は久我殿の姫君ぞかし。たゞ假初に、花紅葉の御遊び、御物詣なりとも、ようの御車などこそ召さるべきに、はる／＼東の路に、徒跣にて出でたち給ふ御果報の程こそ、目も當られず悲し。涙を流しければ、残りの山伏どもよ、「理なり。誠に世には神も佛もましまさぬか」とて、各淨衣の袖をぞ絞りける。御手に手を取り組みて歩ませ奉れども、いつか習はせ給はねば、たゞ一所にぞおはしける。面白き事どもを語り出して、御心を慰め奉りて、進め給ひけり。まだ夜ぶかに今出川をば

だみたる扇
—彩色繪の
扇

出居—表座
敷

に、習はぬ振舞をさへして下らんずる、と思ふなり。はや夜も更くるに、とく／＼と仰せられければ、辨慶御介錯にぞ参りける。いはつきといふ刀をぬきて、清水を流したる御髪おんぐしの、たけに餘るを、御腰おんこしにくらべて、情なくもぶつと切る。すそをば細く刈りなして、高く結び上げて、薄化粧うすけしやうに御眉細く作り、御装束は、匂ふ色に、花やうを引き重ねて、うら山吹一かさね、唐綾からあやの御小袖、袴淺黄のかたびらを、上にぞきせ奉る。白き大口顯紋紗おほくちけんしやの直垂をきせ奉り、綾の脛巾はだきに草鞋はかせ奉る。袴のくより高く結び、しらうちでの笠かさを著せ奉る。赤木の柄の刀に、だみたる扇さしそへ、遊ばさねども、漢竹かんちくのやう笛ふえを持ち奉る。紺地の錦の經袋こんぢにしききやうふくろに、法花經ほけきやうの五の巻を入れて、かけさせ奉る。我が御身一つだにも、苦しかるべきに、萬の物を取りつけ奉りたれば、しどけなけにぞ見え給ふ。是やこの王昭君わうせうくんが、胡國ここくの夷えいに具せられて、下りけん心の中も、さこそと思ひ知られけれ。斯様に出で立ち給ひて、四間の御出居に、燈火數多ともしひあまたかき立て、武藏坊むさしぼうを傍に置きて、北の方を引き立て、御手を取りて、あなた此方へ歩ませ奉り、「義經山伏に似るや。人は兒に似たるぞ」と仰せける。辨慶申しけるは、「君は鞍馬に渡らせ給ひしかば、山伏にも馴れさせ給ひ候ひつれば、申すに及ばず。北の方はいつ習はせおはしまさね

る、と哀あはれにて急いそぎ判官はんくわんにかくと申せば、判官はんくわんさらばとておはして、「御心おんこころみじかの御恨おんぐらみかな。義經よしつねも御迎おんむかひへにまゐりて候へ」とて、つと入り給ひたりければ、夢ゆめの心地こころちして、問ふに辛つらさの御涙おんなみだいとどせきあへ給はず。判官はんくわん、「扱さても義經よしつねが、今の姿すがたを御覽ごらんぜられれば、日ひ比ころの御心ごころざしも、興きようさめてこそ思おもひ召めされ給はめ。あらぬ姿すがたにて候ふものを」と仰おほせられければ、「あらしに聞きし御姿おんすがたの、様さまの變かはりたるやらん」と仰おほせられければ、「これ御覽ごらんじ候へ」とて、上の衣うへ きぬをおし除のけ給ひたれば、柿かきの衣ころもに小袴頭巾こはかまごきんをぞ著き給ひける。北きた

少人せうじん—稚兒ちご

の方見かたみ習なまらはせ給はぬ御心ごころに、疎うそからは恐おそしくも覺おぼえぬべけれども、「扱さて我われをば如何様いかように出で立たせて具ぐし給ふべきぞや」と仰おほせられければ、武藏坊むさしほう「山伏やまぶしの同道どうだうには、少人せうじんの様ようにこそ、作つくりなし參らせ候はんすれ。容顔ようがんも御おんつくろひ候はゞ、苦くるしくも渡わたらせ候ふまじく候ふ。御年おんとしの程ほども、よき程に見えさせおはしまし候へば、つくろひ申すべく候ふが、たゞ御振舞おんふるまひこそ御大事ごだいじにて候はんすれ。北陸道ほくりくどうと申すは、山伏やまぶしの多き國くににて候へば、花はなの枝えだなどを、これ少人せうじんへと參らせいはん時は、男子そのこぞの言葉ことばをならはせ給ひて、衣紋えもんかき繕つくろひ、姿すがたを男をとこの如ごとくに、御振舞おんふるまひひ候へ。此の年月このとしつきのやうに、たをやかに物恥ものちかしき御心ごころづき、御振舞おんふるまひにては、堅固叶けんこはせ給ひ候ふまじく候ふ」と申しければ、「されば人の御德おんとく

たをやかに
—しなやか
に

給ひ候ふとも、かひあらじ。御心ざしありし程は、四國西國の波の上までも、具足せられしぞかし。さればいつしか變る心の怨しさよ。大物の浦とかやより、都へ歸されし其の後には、思ひ絶えたる言の葉を、また廻り來るとかく慰め給ひしかば、心弱くも打ち解けて、二度うき言の葉にかよりぬるこそ悲しけれ。申すにつけていかにぞや、と覺のれども、知られず知られて、我如何もなりなば、後世までも、けに残すは罪深き事、と聞く程に申し候ふぞ。過ぎぬる夏の比より、心亂れて苦しく候ひしを、たどならぬとかや人の申し候ひしが、月日に添へてゆふべも苦しくなり増されば、其の隠れあるまじ。六波羅へも聞えて、兵衛の佐殿は情なき人、と聞けば、取りも下されざらん。北白河の靜は、歌をうたひ、舞もまへばこそ、一の咎は遁れけれ。我々はそれにも似べからず、たゞ今憂き名を流さん事こそ悲しけれ。何と云ひても、人の心強きなれば力なし」と打ちくどき、涙もせきあへず仰せければ、武藏坊も涙に咽び給ひけり。燈火のあかりにて、常に住みなれ給ひつる、御障子の引手の本を見ければ、御手跡と覺えて、

つらからば我も心の替れかしなどうき人の戀しからん
とぞ遊ばされたりけるを、辨慶これを見て、いまだ御事をば忘れ參らせさせ給はざりけ

源氏の大将
の云々―光
源氏の君が
零落せる常
陸宮の姫君
を訪ひ給ひ
しこと蓬生
の巻に見ゆ

の、古御所へぞおはしましける。荒れたる宿のくせなれば、軒のしのぶに露おきて、籬の梅もにほひあり。かの源氏の大將の、荒れたる宿を尋ねつと、露分け入り給ひける、古きよしも今こそ思ひ知られける。判官をば中門の廊に隠し奉りて、辨慶は御妻戸の際に参り、「人や御渡り候ふ」と問ひければ、「何處より」とこたふる。「堀川の方より」と申しければ、御妻戸をあけて見給へば、辨慶にてぞありける。日比は人づてにこそ聞き給ひしに、餘の御嬉しさに、北の方簾の際に寄り給ひて、「人はいづくにぞ」と問ひ給へば、「堀川に渡らせ給ひ候ふが、明日は陸奥へ御下り候ふと申せ、と仰の候ひつるは、日比の御約束には、いかなる有様にてこそ、具足し参らせ候はん、と申しては候へども、路々も差し塞がれて候ふなれば、人をさへ具足し参らせて、憂き目を見せ候はん事、痛はしく思ひ参らせ候へば、義經御さきに下り候うて、若し長らへて候はど、來年春の比は、必ず御迎に人を参らせ候ふべし。それまでは御心永く待たせおはしまし候へ、と申せとこそ仰せられ候ひつれ」と申しければ、「此の度だにも具して下り給はぬ人の、何の故にか慙と迎ひには給はるべき。あはれ下りつき給はざらん先に、老少不定の習なれば、兎も角もなりたらば、迎も遁れざりけるもの故に、など具して下らざりけん、と後悔し

すかけし
麻にて製し
修驗者の上
に著る衣

ちうちやう
—ちうびう
(綱纏)の誤
にはあらぬ
歟さすれば
からみつく
こと

こそ候はんすれ。山伏の頭巾篠懸に、笈かけて女房をさきに立てたらんするは、さしも尊き行者にも見え候ふまじ。又敵追ひかけられん其の時は、女房を靜に歩ませ奉り、さきに立てたらむは、よかるまじく候ふ」と申しけるが、思へばいとほしや、此の人は久我大臣殿の姫君、九にて父大臣殿には後れ参らさせ給ひぬ。十三にて母北の方に後れ給ひぬ。其の後は乳母の十郎權の頭より外に、頼む方まします。容顔いつくしく、御情深く渡らせ給ひけれども、十六の御歳は微かなる御住居なりしを、いかなる風の便にか、此の君に見染められ参らせ給ひしよりこの方、君より外に又知る人も渡らせ給はぬぞかし。ちうちやうの藤は松に離れて便りなし。三従の女は夫に離れて力なし。又奥州へ下り給ひたるとても、情も知らぬ東女を、見せ奉らんもいたはしく、御心の中も推量に、臆氣ならではよも仰せられ出さじ。さらば具し奉りて下らばや、と思ひければ、「あはれ人の御心としては、上下の分別は候はず。移れば變る習の候ふに、さらば入らせおはしました、事の躰を御覽じて、誠に下らせおはしますべきにても候はど、具足し参らせ給ひ候へかし」と申しければ、判官よに嬉しけにて、「いざさらば」とて、御柿の衣の上に、薄衣かづき給ひて御出である。武藏も淨衣に衣かづきて、一條今出川の久我大臣殿

括高らかに結びて、新宮やうの長頭巾をぞ懸けたりける。岩通と言ふ太刀あひちかにさ
 しなして、ほら貝をぞ下けたりける。武藏坊は喜三太と云ふ下部を、強力になして、か
 けさせたる笈の足に、るめ彫りたる鉞に、刃八寸許有りけるをぞ結び添へたる。てんし
 やうには四尺五寸の大太刀を、眞横様にぞ置きたりける。心つきも出立も哀先達やとぞ
 見えける。惣じて勢は十六人、笈十挺有り。一挺の笈には鈴、獨鉗、花瓶、火舎、あか
 つき、金剛童子の本尊を納れたりける。一挺の笈には、折らぬ烏帽子十頭、直垂、大口
 等を入れたりける。残八挺の笈には、皆鎧腹巻をぞ入れたりける。斯様に出で立ち給ふ
 事は、正月の末、御吉日は二月二日なり。判官殿の奥州に下らんとて、侍共を召して、
 「かやうに出で立つと雖も、猶も都に思ひ置く事のみ多し。中にも一條今出河の邊にあ
 りし人は、未だありもやすらん。具して下らんなどいひしに、知らせずして下りなば、さ
 こそ名残も深く候はんすらめ。苦しかるまじくば、具して下らばや」と宣ひければ、片
 岡武藏坊申しけるは、「御供申すべき者は、皆これへ参り候ふ。今出河には誰か御渡り候ふ
 やらん。北の御方の事候ふやらん」と申しければ、此の比の御身にては、流石にそよと
 も仰せられかねて、つくぐと打ち案じ給ひておはしける。辨慶申しけるは、「事も事に

こんづーこ
んがう即ち
草履に非ざ
る歟

山伏の熊野へ参り、下向するぞと申すべき。其より彼方にては熊野山伏の羽黒に参ると申すべき」と申しければ、「羽黒の案内知りたらん者やある。羽黒にはどの坊に誰がしといふ者ぞ、と問はんするは、いかゞせんする」。辨慶申しけるは、「西塔に候ひし時、羽黒の者とて、御上の坊に候ひし者、申し候ひしは、大黒塔の別當の坊に、荒讃岐と申す法師に、辨慶はちとも違はぬ由申し候ひしかば、辨慶をば荒讃岐と申し候ふべし。常陸坊をば小先達として、筑前坊とぞ申しける」。判官仰せられけるは、「元より法師なれば、御邊たちは戒名せずとも苦しかるまじ。何ぞ男の頭巾すどかけ笈かけたらんするが、片岡或は伊勢の三郎、増尾などといひたらんするは、似ぬことにてあらんするはいかに」、「さらば皆坊號をせよ」とて、思ひくゝに名をぞ付けよる。片岡は京の君、伊勢の三郎をば宣旨の君、熊井太郎は治部の君とぞ申しける。扱上野坊、上總坊、下野坊などと云ふ、名を付けてぞ呼びける。判官殿は殊に知る人おはしければ、垢の付きたる白き小袖二つに、矢筈付けたる地白の帷子に、葛大口村千鳥をいかりにしたる柿の衣に、ふりたる頭巾、目の際までひつこうで、戒名をば大和坊とぞ申しける。思ひくゝの出立をぞしける。辨慶は大先達にてありければ、袖短なる淨衣に、かちんの脛巾に、こんづはいて、袴の

きら／＼し
く立派

と申しければ、「終にはさこそあらんずらめども、南都くわんじゆ坊の、千度出家せよと教化せられしを背きて、今身の置き所なきまゝに、出家しける、と聞えんも恥しければ、此の度はいかにもして、様をまかへず下らばや」と宣ひければ、片岡申しけるは、「さらば山伏の御姿にて、御下り候へ」と申しければ、「いさとよ、それも如何あらんずらん。都を出でし日よりして、比叡山王、越前の國に氣比の社平泉寺、加賀の國しも白山、越中の國におきくかみ、出羽の國には羽黒山とて、山社多き所なれば、山伏の行き逢ひて、一乗菩提の峯、しやかの嶽の有様、八大金剛童子のごしんさし、富士の峯、山伏の禮義などを問ふ時は、誰かきら／＼しく答へて通るべき」と仰せければ、武藏坊申しけるは、「夫程の事こそ、易く御入り候ふ。君は鞍馬におはしましよかば、山伏の事はあら／＼御存じ候ふらん。常陸坊は園城寺に候ひしかば申すに及ばず、辨慶は西塔に候ひしかば、一乗菩提のこと、あら／＼存じて候へば、などか陳ぜで候ふべき。山伏の勤には、せんほう阿彌陀經をだにも、詳らかに讀み候ひぬれば、堅固苦しくも候ふまじ。たゞ御思し召し立たせ給へ」とぞ申しける。「どこ山伏と問はんずる時は、どこ山伏とかいはんずる」。「越後の國直江の津は、北陸道の中途にて候へば、夫より此方にては羽黒

義經記 卷第七

一 判官北國落の事

節所一切所
險要

文治二年正月の末になりぬれば、大夫判官は、六條堀河に、忍びておはしける時もあり、又嵯峨の片ほとりに、忍びておはしける時もありけるが、都には判官殿の御故に、人々多く損じければ、義經ゆゑ、民の煩ひとなり、人數多損するなれば、いかなる所にもありと聞き、見ばやと思はれければ、今は奥州へ下らばや、とて、別れくになりける侍共を召されける。十六人は、一人も心變りなくてぞ参りける。「奥州へ下らんと思ふに、何れの道にかよりてかよからんずるぞ」と、仰せられければ、各申しけるは、「東海道こそ名所にて候へ。東山道は節所なれば、自然の事のあらんずる時は、除けて行くべき方もなし。北陸道越前の國敦賀の津に下りて、出羽の國の方へ行かんずる船に便船して、よかるべし」とて道は定め、「扱姿をばいかやうにして下るべき」と様々に申しける中に、増尾の七郎申しけるは、「御心安く御下あるべきにて候はよ、御出家候うて、御下り候へ」

けさせ給ひて、かるくしくも譽めさせ給ふ物かな。二位殿より御引出物、色々給はりしを、判官殿の御祈りの爲に、若宮の別當に参りて、堀の藤次が女房諸共に、打ちつれてぞ歸りける。明くれば都にとて上り、北白川の宿所に歸りてあれども、物をもはかしく見入れず、憂かりし事の忘れがたければ、訪ひくる人も物うしとて、たゞ思ひ入りてぞ有りける、母の禪師も慰め兼ねて、いとど思ひ深かりけり。あけくれ持佛堂に引き籠り、經をよみ佛の御名を唱へて有りけるが、斯る浮世に長らへても、何かせんとや思ひけん、母にも知らせず髪を切りてそりこほし、てんりう寺の麓に、草の庵を引きむすび、ぜんじ諸共に、行ひすましてぞ有りける。姿心人にすぐれたり、惜しかるべき年ぞかし。十九にて様をかへ、次の年の秋の暮には、思ひや胸に積りけん、念佛申し往生をぞ遂げにけり。聞く人貞女の心ざし、感じけるとも聞えける。

をだまき—
草を巻きつ
けて環状を
なせるもの
くりかへし
の序とす、
此の歌伊勢
物語に見え
て第一の句
古のとあり
吉野山云々
—古今集忠
峯のみ吉野
の山の白雪
ふみわけて
入りにし人
のおとづれ
もせぬをす
こし變へて
歌へり

海道^{かいだう}の長旅^{ながたび}にて、やせ衰^{おとろ}へて見えたれ共、静^{しづか}を見るに、我が朝^{あさ}に女^{をんな}ありとも知られたり」
とぞ、仰^{おほ}せられける。静^{しづか}其^{その}の日は、白拍子^{しらびやうし}は、多く知りたれども、殊^{こと}に心にそむものな
れば、しんむしやうの曲^{きよく}と云ふ、白拍子^{しらびやうし}の上手^{じやうず}なれば、心も及ばぬ聲色^{こゑいろ}にて、はたとあ
けてぞ歌^{うた}ひける。上下^{じやうげ}あと感じ^{かん}ずる聲^{こゑ}、雲^{くも}にも響^{ひび}く許^{ばかり}なり。近^{ちか}きは聞いて感じ^{かん}じけり。聲^{こゑ}も
聞えぬも、さこそ有るらめ、とてぞ感じ^{かん}じける。しんむしやうの曲^{きよく}、中^{なか}らばかり數^{かず}へたりけ
る所に、祐經^{すけつね}心なしと思ひけん、水干^{みづで}の袖^{そで}をはづして、せめをぞ打ちたりける。静^{しづか}君
が代^よを歌^{うた}ひあけたりければ、人々是^{こゝ}を聞き、一情^{なせむ}なき祐經^{すけつね}かな。今一折舞^{せりま}はせよかし」と
ぞ申しける。せんずる所敵^{てき}のまへの舞^{まひ}ぞかし。思ふ事を歌^{うた}はどや、と思ひて、
しづやしづしづのをだまき繰^くり返^{かへ}し昔^{むかし}を今になすよしもがな
吉野山みねの白雪^{しらゆき}ふみわけて入りにしひとのあとぞこひしき
と歌^{うた}ひたりければ、鎌倉殿^{かまくらどの}みすをさと下^{くだ}し給ひけり。鎌倉殿^{かまくらどの}、「白拍子^{しらびやうし}は興^{きよう}さめたるもの
にて有りけるや。今の舞^{まひ}ひやう歌^{うた}ひ様^{やう}けしからず、頼朝^{よりとも}田舎^{いなか}に住^すみ馴^なれしかば、聞き知
らじとて歌^{うた}ひける。賤^{しづ}のをだまき繰^くり返^{かへ}しとは、頼朝^{よりとも}が世^よつきて、九郎^{くわう}が世^よになれとや」
「あはれおほけなく覺^{おも}えし人の跡^{あと}たえにけり」と、歌^{うた}ひたりければ、御簾^{みす}を高^{たか}らかにあ



やうでうー
横笛はうでんー
寶殿
面はゆくー
恥しく

き直垂に、紫革の紐付けて、折るほしのかた／＼をきつと引き立て、松風と名付けたる、漢竹のやうでうを持ち、袴のそばたからかに引きあけて、幕さつと引きあげ、つと出でたれば、大の男の重らかに歩みなして、舞臺にのほり、祐經が左の方にぞ居なほりける。名を得たる美男なりければ、あはれなりとぞ見えける。其の年廿三にぞ成りける。鎌倉殿を御覽じて、みすの内より「あはれがくたうや」とぞ、譽めさせ給ひける。時に取ては興深しとぞ見えける。靜是を見て、よくぞ辭退したりける。同じくは舞ふとも、斯るがくたうにてこそ舞ふべけれ。心かるくも舞ひたりけり。いかに輕々數あらん、とぞ思ひける。禪師をよびて、舞の装束をぞしたりける。松にかゝれる藤の花、池の汀に咲きみだれ、そら吹く風は山かすみ、初音のかしき杜鵑の聲も、折知り顔にぞ覺えける。靜が其の日の装束には、白き小袖一かさね、唐綾を上ひき重ねて、白き袴ふみしだき、わりびし縫ひたる水干に、たけなる髪を高らかに結びなして、此の程のなけきに面やせて、薄けしやう眉細やかに作りなし、皆紅の扇を開き、ほうでんに向ひて立ちたり。さすが鎌倉殿の御前にての舞なれば、面はゆくや思ひけん、舞ひかねてぞ休らひける。二位殿は之を御覽じて、「去年の冬、四國の波の上にてゆられ、吉野の雪にまよひ、今年は

ぞくしやう
—族姓

なんれう—
南鐐、良質
の銀

やある」と、仰せられければ、和田の小太郎申しけるは、「畠山こそ院の御感に入りし、
笛にて候へ」と申しければ、「いかでか畠山の賢人第一の、異様のがくたうにならんとは、
假初なりともよもいはじ」と、仰せられければ、「御説と申して見候はん」とて、畠山の
座敷へ行きけり。畠山に此の仔細を「御説にて候ふ」と申しければ、畠山「君のみうちき
りせめたる、工藤左衛門つづみ打ちて、八箇國の侍の所司梶原が銅拍子合せて、重忠が
笛吹きたらんするは、ぞくしやう正しき、樂黨にてぞあらんずらん」と打ち笑ひ、仰に
從ひ參らすべき由を申し給ひつゝ、三人のがくたうは、所々より思ひくに出で立ち出
でられけり。左衛門の尉は、こんくすの袴に、とくさ色の水干に、立烏帽子、したんの
唐羊の革にて張りたる、鼓のむつの緒の調をかき合せて、左の脇にかいはさみて、袴の
そば高らかに差し挟み、上のまつ山廻廊の天井に響かせ、手色打ちならして、残りの樂
黨を待ちかけたり。梶原はこん葛の袴に、山鳩色の水干たてゑほし、なんれうを以つて
つづりたる、黄金のきくがた打つたる銅拍子に、たくほくの緒を入れて、祐經が右の座
敷に直りて、鼓の手色に従ひて、鈴蟲などの鳴く様に合せて畠山を待ちけり。畠山は幕
の綻びより、座敷の體をさしのぞきて、別して色々しくも出で立たず、白き大口に、白

どびやうし
銅拍子、
眞鍮にて造
り鑢鉢に似
て小なる樂
器

りて、法樂に舞ひ候はめ」とて、頓て立つけしきに見えければ、大名小名是を見て、興醒めてぞありける。鎌倉殿も聞こし召して、「世間せばき事かな。鎌倉にて舞はせんとしけるに、つどみ打のなくて、遂にまはざりけりと、聞えん事こそ恥かしけれ。梶原侍どもの中に鼓打つべき者や有る。尋ねて打たせよ」と、仰せられければ、景時申しけるは、「左衛門の尉こそ、小松殿の御時、内の御神樂に召され候ひけるに、殿上に名を得たる小鼓の上手にて候ふなれ」と、申したりければ、「さらば祐經打ちて舞はせよ」と、仰蒙りて申しけるは、「あまり久しく仕らで、鼓の手色などこそ、思ふ程に候ふまじけれ共、御説にて候へば、仕りてこそ見候はめ。たどし鼓一ちやうにては、叶ふまじ。鉦の役を召され候へ」と申したり。「鉦は誰か有るべき」と仰せられければ、「中沼の五郎こそ候へ」と、申しければ、「尋ね打たせよ」と仰せければ、「眼病に身を損じて、出仕を仕らず」と申しければ、「さ候はど景時仕りて、見候はばや」と申せば、「なんほうの梶原はどびやうしぞ」と、左衛門に御尋有り。「中沼に次いでは、梶原こそ」と、申したりければ、「さては苦しかるまじ」とて、鉦の役とぞ聞えける。佐原の十郎申しけるは、「時の調子は大事の物にて候ふに、誰にか音とりを吹かせばや」と申せば、鎌倉殿「誰か笛吹きぬべき者

さしも聞えぬ—それ程有名ならぬ

ちぐさに—千種に、いろくに

来る。左衛門の尉藤次が女房もろともに、打ちつれて廻廊にぞ詣でたりける。禪師、さ
いばら、そのこま、其の日の役人なりければ、静と連れ廻廊の舞臺へなほる。左衛門の
女房は、同じ姿なる女房達、三十餘人引き具して、座敷に入りける。静は神前に向ひて、
念誦してぞ居たりける、先磯の禪師、珍らしからねども、法樂の爲なれば、佐原につゞみ
打たせて、すきものゝせうしやと云ふ、白拍子を數へてぞ舞ひたりける。心も言葉も及
ばれず。「さしも聞えぬ禪師が舞だにも、是程におもしろきに、まして静が名にし負うたる
舞なれば、さこそ面白かるらん」とぞ、申しあひける。静「人の振舞、幕の引き様、如
何様にも、鎌倉殿の御參詣と覺えたり。祐經が女房すかして、鎌倉殿の御前にて舞はす
ると覺ゆる。あはれ何ともして、今日の舞をまはで歸らばや」とぞ、ちぐさに案じ居たりけ
る。左衛門の尉を呼びて申しけるは、「今日は鎌倉殿御參詣と覺え候ふ。都にて内侍所に
召されし時は、内藏頭のぶみつに囃されて、舞ひたりしぞかし。神泉苑の池の雨乞の時
は、四條のきすはらに囃されてより舞ひ候ひしが、此の度は御不審の身にて、召し下さ
れ候ひしかば、つゞみ打などをも連れても下り候はず。母にて候ふ人の形の如くの、か
ひなさしを法樂せられ候はど、我々は都に上り、又こそつゞみ打用意して、わざと下

かひなさし
― 脇指、舞
ふこと

もんしや―
紋紗

の時に御かひなさし」と、高らかに申したりければ、鎌倉殿頓て御參詣有りけり。靜舞ひぬると聞きて、若宮には門前に市をなす。拜殿廻廊の前、雜人共えいやづきをして、物の差別も聞え候はず」と申しければ、小舎人を召して、「放逸にあたりおひ出せ」と仰せける。源太承りて、「御説ぞ」と云ひけれども用ひず。小舎人ばら、はういつにさんぐに打つ。男は烏帽子を打ち落し、法師は笠を打ち落さる。疵を蒙るもの數多有りけれど、「是程の見物を、一期に一度の大事ぞ。疵はつく共入らんず」とて、身のなり行く末を知らずして、くどり入る間、中々騒動する事夥し。佐原の十郎申しけるは、「あはれ兼て知り候はど、廻廊の真中に、舞臺を張りて、參らせ候はんするものを」と申しけり。鎌倉殿聞こし召し、「あはれ是は誰が申しつるぞ」と、御尋ね有りければ、「佐原の十郎申して候ふ」と申す。「さはら故實の者なり。尤もさるべし。頓て仕度して參らせよ」と、仰せられけり。十郎承りて、急ぎの事なりければ、若宮しゆりの爲に、積み置かれたる材木を、一時に運ばせて、高さ三尺に舞臺をはりて、唐綾もんしやを以つてぞ包みたる。鎌倉殿御感有りける。靜を待つに、日は己に巳の時許に成るまで參詣なし。「いかなる靜なれば、是程に人の心を盡すらん」などとぞ申しける。遙に日闌けて、輿をかきてぞ出で

わらはも此所のこさいの者にて候へば、明日まだ夜こめて、御參詣候うて、思し召す御宿願も遂けさせおはしまし、其の次に、御かひなさし、法樂し參らさせ給ひ候ひなば、鎌倉殿と判官殿と、御中も直らせ御座し候うて、思し召す盡なるべし。奥州に渡らせ給ひ候ふ判官殿も、聞こし召し傳へさせ給はゞ、我がために、丹誠を致しまるらせ給ふと聞こし召しては、如何許嬉しとこそ、思し召し候はんすれ。たまゝかゝる次でならでは、いかでかさる事候ふべき。理をまけて御參詣候へ。あまりに見奉りてより、いとど疎に思ひまゐらせず候へば、責めての事に申し候ふなり。御參詣候はゞ、御供申し候はん」とぞ賺しける。靜是を聞きて、けにとや思ひけん、母の禪師を招きて、「いかゞ有るべき」と云ひければ、禪師も、あはれさもあらまほしく、思ひければ、「是は八幡の御託宣にてこそ候へ。是程ふかにく思し召しける嬉しさよ。疾く参らせ給へ」と、云ひければ、「さらば晝は叶ふまじ。寅の時に参りて、辰の時にかたの如くに舞ひて歸らばや」とぞ申しける。左衛門の女房、祐經にはや聞かせたくて、斯と云はせければ、祐經壁を隔てゝ聞く事なれば、使の出でぬまに、馬に打ち乗り、急ぎ鎌倉殿へ参りて、侍につと入れば、君を初め参らせて、侍ども「いかにや」と問ひ給へば、「寅の時の參詣、辰

おんじやう
—音聲
もじうつり
—節まはし
かうけつ—
頼頼、しぼ
り染

和光同塵—
神佛のその
威靈を隠し
塵俗と相混
じて導き給
ふないふ

壁に立ちそふ人も聞け。終日の狂言は、千年の命を延ぶるなり。我も歌ひて遊ばんとて、別の白拍手をぞかぞへける。おんじやう、もじうつり、心も言葉も及ばれず。左衛門の尉藤次、壁を隔てゝ是を聞いて、「あはれうちまかせの座敷ならば、などか推参せざるべき」とて、心も空にあこがるゝ許なり。白拍子過ぎければ、錦の袋に入れたる琵琶一面、かうけつの袋に入りたる、琴一ちやう取り出して、琵琶をばそのこま袋より取り出して、緒あはせて、左衛門の尉の女房の前におく。琴をばさいばら取り出しことち立て、靜が前にぞ置きたりける。管絃過ぎければ、又左衛門の女房、心有る様の物語などせられつゝ、今やいはましくとぞ思ひける。「昔の京をばなんばの京とぞ申しけるに、愛宕の郡に都を立てられしより以來、東海道をはるかに下りて、由井のあしかどより、東相摸の國をさかのほり、由井のこし、ひづめの小林、鶴が岡のふもとに、今の八幡をいはひ奉る。鎌倉殿にも氏神なれば、判官殿をなどか守り奉り給はざらん。和光同塵は、結縁の初め、八相成道は、利物の終り、何事か御祈りの感應なからんや。當國一のぶさうにて渡らせ給へば、夕はさんろうの輩、門前に市をなす。朝には參詣の輩、肩をならべて踵をつぐ。然れば日中には叶ひ候ふまじ。堀殿の妻女、若宮の案内者にておはしまし候ふ。

狂言綺語の
たはふ―れ
詩歌文章音
曲などを弄
ぶこと

數へ―謠ふ

東國に下りけり。年久しくなりたれども、さすが狂言綺語のたはぶれも、未だ忘れざりければ、賺さん事も易しと思ひけん、急ぎ出で立ち、藤次が宿所に行きけり。祐經先さきに行きて、磯の禪師に云ひけるは、「此の程何となく、打ち紛れ候へば、疎なるとぞ思し召され候ふらん。三島の社へ御參詣にて、渡らせ給ひ候ひつる程に、是も召し具せられ、日々の御社參にて渡らせ給へば、精進なくては叶ひ難く候ふ間、打ち絶え参り候はねば、返すく恐れ入りて候ふ。祐經が妻女も都の者にて候ふ。堀殿の宿所まで参りて候ふ。それく禪師よき様に申させ候へ」と申して、我が身は歸る體にもてなして、傍に隠れてぞ候ひける。磯の禪師、靜に此の由を語れば、「左衛門の常にとぶらひ給ふだに、有難く思ひ候ふに、女房の御出までは、思ひもよらず候ふに、是までの御おとづれ、悦び入りて候ふ」とて、我が方をこしらへてぞいれける。藤次が妻女諸共に行きてぞもてなしける。人を賺さんとする事なれば、酒宴はじめ、幾程もなかりけるに、祐經が女房今様をぞ謠ひける。藤次が妻女も催馬樂をぞ歌ひける。磯の禪師珍しからぬ事なれども、きせんと云ふ白拍子をぞ數へける。催馬樂、そのこまも、主に劣らぬ上手どもなりければ、共にうたひて遊びけり。春の夜の朧の空に雨ふりて、ことさら世間しづかなり。

こつなきー
無骨、無風
流なる

御説にてだにも舞ひ給はぬ人を、某申したればとて、舞ひ給はんとも覺えず。かゝる御説こそ大事なれ、と思ひ煩ひ、急ぎ我が家に歸り、妻女に申しけるは、「鎌倉殿より、いみじき大事を承つてこそ候へ。梶原を御使にて、仰せられつるだにももちひ給はぬ静を、我らに参りて、賺し舞はせよ、と仰せ蒙りたるこそ、祐經が爲には大事に候へ」といひければ、女房聞きて、「夫は梶原にもよるべからず、左衛門の尉にもよるべからず。情は人の爲にもあらばこそ。景時が田舎男にて、こつなき様の風情にて、舞をまひ給へとこそ申しつらめ。御身とてもさこそ御座せんすらめ。たゞ様々の菓子を用意して、堀殿のもとへ行きて、訪らひ奉るやうにて、内々こしらへすかし奉らんに、などか叶はざるべき」とよに易けに云ひける。祐經が妻女と申すは、千葉の介が在京の時、設けたりし京わらはの娘、小松殿の御内に、冷泉殿の御局とて、おとなしき人にてぞ有りける。おうち伊藤の次郎に、中を違ひて、本領を取らるゝのみならず、飽ぬ中を引き分けられて、其の本意を遂げん、と思ひ、伊豆へ下らんとしけるを、小松殿、祐經に名残を惜ませ給ひて、「年こそ少しおとなしけれ共、是を見よ」とて、祐經に見え初めて、互の志深かりけり。治承に小松殿の隠れさせ給ひて後は、頼む方なかりければ、祐經に具足せられて、

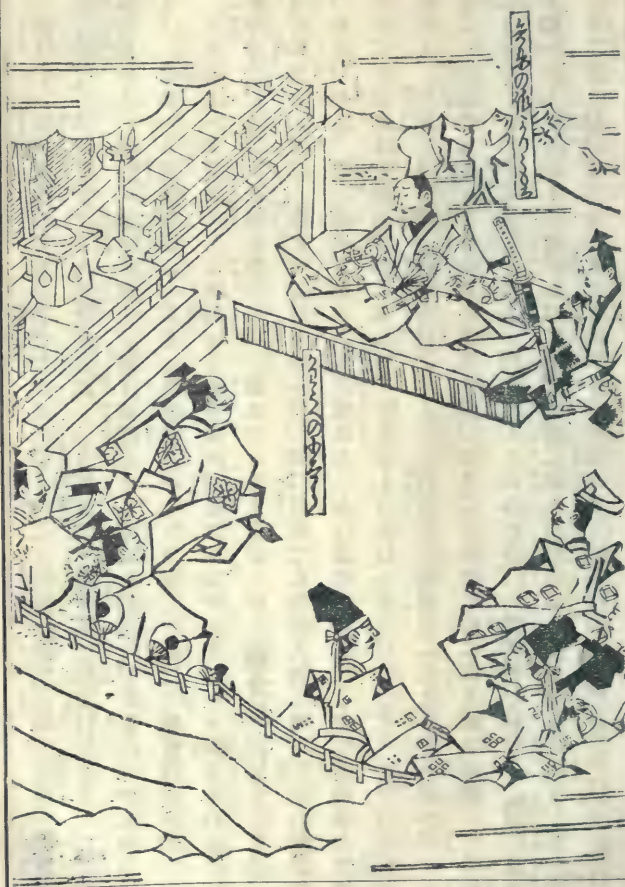
京童にて—
京育にて

此の道ならんには、かゝる一方ならぬ、嘆のたえぬ身に、さりとて憂き人の前にて、舞へなどと、容易く言はれつるこそ安からぬ。中々つたへ給ふ母の心こそ恨めしけれ。然れば舞はど舞はせん、と思し召しけるか」とて、梶原には、返事にも及ばず。禪師、梶原に此の由を云ひければ、相違して歸りけり。御所には今やくと待ち給ひける所に、景時参りたり。二位殿の御方より、「いかに返事は」と御使有り。「御説と申しつれ共、返事だにも申され候はぬ」と申しければ、鎌倉殿も「元より思ひつる事を、都に歸りてあらん時、内裏、院の御所にて、兵衛佐の舞まへといはざりけるか、と御尋あらん時、梶原を使にて、舞へと申され候ひしかども、何のいみじさに舞ひ候ふべき、とて、遂に舞はず、と申さば、頼朝がかひなきに似たり。いかど有るべき。誰にてか言はすべき」と仰せられければ、梶原申しけるは、「工藤左衛門こそ、都に候ひし時も、判官殿、常に御日かけられし者にて候へ。しかも京童にて口きよにて候ふ。彼に仰せ付けらるべく候はん」と申しければ、「祐經召せ」とて召されけり。其の比左衛門、たうのづしに候ひけるを、梶原つれてぞ参りける。鎌倉殿仰せられけるは、「梶原以つていはすれども、返事をだにもせず。御へん行きてすかして舞はせや」と仰せられければ、斯る難義の御使かな。

分 なから―半

召 御氣色―思

の曲といふ白拍子を、なから許舞ひたりしに、みこしの嶽、愛宕山の方より、黒雲俄に出で来て、洛中にかよると見えければ、八大龍王鳴り渡りて、稻妻ひかめきしに、諸人目を驚かし、三日の洪水を流し、國土安穩なりしかば、扱こそ靜が舞にじけん有りけるとて、日本一と宣旨を賜はりける、と承り候ひし」と申しければ、鎌倉殿是を聞こし召して、「扱も一番見たし」とぞ仰せられける。「誰にかいはせんする」と仰せられければ、梶原申しけるは、「景時が計ひにて、舞はせん」とぞ申しける、鎌倉殿、「いかゞ有るべき」とぞ仰せられける。梶原申しけるは、「我が朝に住居せん程の人の、君の仰をいかでか背き参らせ候ふべき。其の上既に死罪に定まりしを、景時が申してこそ、宥め奉りて候ひしかば、是非とも舞はせ参らせんする」と申しければ、「然らば行きてすかせ」と仰せられけり。梶原行きて磯の禪師を呼び出して、「鎌倉殿の御酒氣にこそ御渡り候へ。かよる所に、川越の太郎、御事を申し出され候ひつるに、あはれ音に聞え給ふ御舞、一番見参らせばや、との御氣色にて候ふ。何か苦しく候ふべき。一番御舞ひ候ひて、君に見せ奉り給へかし」と申したりければ、此の由靜に語れば、「あら心うや」と許にて、衣引きかづきて伏し給ひけるが、「凡て人のかやうの道を立てける程の、口惜しき事はなかりけり。



つゝ井一圓
形の掘井戸
じげんなう
じゆうー示
現納受

たけられ、其の形見にも見るべき子を失はれ、何のいみじきに頼朝の前にて舞ふべき」と仰せられければ、「人々は尤もの御説なり。さりながら、如何して見んするぞ」と申しける。「抑いか程の舞なれば、斯程に人々念をかけらるゝぞ」と仰せられければ、梶原、「舞に於ては、日本一にて候ふ」とぞ申しける。鎌倉殿、「ことごとくしや、何處にて舞ひて、日本一とは申しけるぞ」。梶原申しけるは、「一歳百日の旱魃の候ひけるに、賀茂川桂川皆瀬きれて流れず、つゝ井の水も絶えて、國土のなやみにて候ひけるに、しだい久しきれいもん、比叡の山、三井寺、東大寺、興福寺などの有驗の高僧貴僧百人、神泉苑の池にて、仁王經を講じ奉らば、八大龍王もじげんなうじゆう垂れ給ふべし、と申しければ、百人の高僧貴僧を請じ、仁王經を講ぜられしかども、其の驗もなかりけり。又ある人申しけるは、容顏美麗なる白拍子を百人召して、院御幸なりて、神泉苑の池にて舞はせられば、龍神納受し給はんと云へば、さらばとて御幸有りて百人の白拍子をして舞はせられしに、九十九人舞ひたりしに、其の驗もなかりけり。靜一人舞ひたりとても、龍神示現有るべきか。内侍所に召されて、祿おもき者にて候ふに、と申したりければ、とても人數なれば唯舞はせよ、と仰せ下されければ、靜が舞ひたりけるに、しんむしやう

あいしやう
—哀傷か

く身にそへて悲みけり。「あいしやうとて、親の嘆きは、ことに罪深き事にて候ふものを」とて、藤次が計らひにて、少人の葬送、故左馬頭殿の爲に建立せられける勝長壽院の東に、埋みて歸りけり。「斯る物うき鎌倉に、一日にても有るべき様なし、」とて、急ぎ都へ上らんとぞ出で立ちける。

七 静若宮八幡へ参詣の事

磯の禪師申しけるは、「少人の事は思ひ設けたることなれば、扱おきぬ、御身安穩ならば、若官へ参らん、と兼ての宿願なれば、いかでか只は上り給ふべき。八幡はあらちを五十日忌ませ給ふなれば、精進潔齋してこそ参り給はめ。其の程は是にて日數を待ち給へ」とて一日々と逗留有りけり。さる程に鎌倉殿、三島の御社参とぞ聞えける。八箇國の侍ども御供申しける。御社参の御徒然に、様々の物語をぞ申しける。其の中に川越の太郎、静が事を申し出したりければ、各「かやうの序ならでは、いかでか下り給ふべき。あはれ音に聞ゆる舞を、一番御覽せられざらんは、無念に候ふ」と申しければ、鎌倉殿仰せられけるは、「静は九郎に思はれて、身をくわしよくにするなる上、思ふ中をさま

へぞ下りける。堀の藤次も禪師をとぶらひて、跡につきてぞ下りける。靜も共に慕ひけれども、堀が妻女申しけるは、「産の別れなり」とて、様々に諫め取り止めければ、出でつる妻戸の口に倒れ伏してぞ悲みける。禪師は濱に尋ね、馬の跡を尋ねれども、少人の死骸もなし。「今生の契りこそ少からめ、空しき姿を今一度見せ給へ」と悲みつゝ、渚を西へ歩みける所に、稻瀬川の端には、眞砂に戯れて、子供あまた遊びけるに逢うて、「馬に乗りたる男の、くがと泣きたる子や棄つる」と問へば、「何は見わけ候はね共、あの汀の材木の上にこそ、なけ入れつれ」と云ひける。藤次が下人下りて見ければ、只今迄は、菫む花のやうなりつる少人の、いつしか今は引きかへて、空しき姿を尋ね出して、磯の禪師に見せければ、おしまきたる衣の色はかはらねども、跡なき姿と成りはてけるこそ悲しけれ。「若しや若しや」と濱の砂の暖かなる上に、衣のつまを打ち敷きて置きたりけれども、事きれ果てゝ見えしかば、取りて歸りて母に見せて、悲ませんも中々罪深し、と思ひて、爰に埋まんとて、濱の砂を手にて掘りたれども、爰も淺ましき牛馬の蹄の通ふ所とて、いたはしければ、さしも廣き濱なれども、捨て置くべき所もなし。唯むなしき姿を抱きて宿所にぞ歸りける。靜是を請け取り、生をかへたるものを、隔てな

中々―却つて

御産所に畏りて申しけるは、「御産の左右を申せ、と仰せ蒙り候ふ間、只今参りて申し候はんずる」と申しければ、「逆も遁るまじき事ならねば、疾くく」とぞ云ひける。親家参り、此の由を申したりければ、安達の新三郎を召して、「藤次が宿所に静が産したり。頼朝が鹿毛の馬に乗りて行き、由井の濱にて失へ」と仰せられければ、清常御馬賜はつて打ち出で、藤次の宿所に参りて、禪師に向ひて、「鎌倉殿の御使に参りて候ふ。少人は若君にて渡らせられ給ひ候ふ由聞召して、抱きそめ参らせよ、との御説にて候ふ」と申しければ、「憐れはかなき清常かな。すかさば誠と思ふべきかや。親をさへ失へ、と仰せられし敵の子、殊に男子なれば、疾く失へ、とこそ有るらめ。暫し最期の出立せさせん」と申されければ、新三郎岩木ならねば、さすが憐に思ひけるか、心弱く待ちけるが、斯くて心よわくて叶ふまじ、と思ひ、「ことぐしく候ふ。御出立も入り候ふまじ」とて、禪師が抱きたるを奪ひ取り、脇に挟み馬に打ち乗り、由井の濱にはせ出でけり。禪師悲みけるは、「長へて見せ給へ、と申さばこそ僻事ならめ。今一度幼なき顔を見せ給へ」と悲みければ、「御覽じては中々思ひ重なり給ひなん」と情なき氣色にて、霞を隔て遠ざかる。禪師は草履をだにも穿きあへず、薄絹かづかず、そのこま許具して、濱の方

其の心―産氣

預り参らせ候ひぬ。判官殿の聞こし召さるゝ所も有り、是にて能々勞り参らせよ」とて、我は側に候うて、やかたをば御産所と名付けて、心有る女房達、十餘人付け奉りてぞ欸待しける。磯の禪師は都の神佛にぞ祈り申しける。「稻荷、祇園、賀茂、春日、日吉、山王七社、八幡大菩薩、靜が胎内にある子を、例ひ男子なりとも女子になして給べ」とぞ申しける。斯くて月日かさなれば、其の月にもなりにけり。靜思ひの外に、堅牢地神も憐み給ひけるにや、痛むこともなく、其の心付く、と聞きて、藤次の妻女、禪師諸共にあつかひけり。殊更御産も平安なり。少人泣き給ふ聲を聞きて、禪師餘りの嬉しさに、白き絹におし卷きて見れば、祈る祈りは空しくて、三神相應したる若君にてぞおはしける。唯一目見て、「あな心憂や」とて打ち伏しけり。靜是を見て、いとど心も消えて思ひけり。「男子か女子か」と問へ共答へねば、禪師の抱きたる子を見れば男子なり。一目見て、「あら心うや」とて衣を被きて伏しぬ。稍有りて、「いかなる十惡五逆の者の、偶々人界に生を受けながら、月日の光をも定かに見奉らずして、生れて一日一夜をだにも過さで、頓て冥途に歸らんこそ無慙なれ。前業限り有る事なれば、世をも人をも恨むべからず、と思へども、今の名殘、別の悲しきぞや」とて、袖を顔におし當てよぞ泣き居たり。藤次

少人こそ云
々―妊める
子こそ殺す
べけれ

とて、恐^{おそ}しき事に云ひ習はし候ふに、靜^{しづか}を失^{うしな}ひて、名^なを流し給はん事こそ淺^{あさ}ましけれ」とぞ、つぶやきける。梶原此の事を聞きてつい立ち、御前^{おんまへ}に参り、畏^{かしこま}つてぞ居たりける。人々是を見て、「あな心うや。又如何^{いか}なる事をか、申さんすらん」と耳をそばだてよぞ聞きけるに、「靜^{しづか}の事承り候ふ。少人^{せうじん}こそ限り候はんすれ、母御前^{ははごぜん}をさへ失^{うしな}ひ参らせ給はん事、その罪^{つみ}いかでか、遁^{のが}れさせ給ふべき。胎内^{たいない}に宿^{やど}る十月を待つこそ久しく候へ、是^{すて}は、既に來月御産あるべきにて候へば、源太^{げんだ}が宿所^{しゆくしょ}を御産所と定^{さだ}めて、若君姫君^{わかぎみひめぎみ}の左^さ右^うを申し上ぐべき」と申したりければ、御前^{おんまへ}なる人々袖^{そで}をひき膝^{ひざ}をさし、「此の世の中はいかさま末代^{まつだい}といひながら、たゞ事^{こと}あらじ。是程に梶原^{かぢはら}が、人の爲に憐^{あはれ}むおもひて、申したることはなし」とぞ申しあへり。靜^{しづか}是を聞き、「都^{みやこ}を出でし時よりして、梶原^{かぢはら}と云ふ名を聞くだにも心憂^{うれ}かりしに、況^まして景時^{かげとき}が宿所^{しゆくしょ}に在りて、産^{さん}の時自然^{しぜん}の事あらば、冥途^{よみち}の障^{さはり}とも成るべし。あはれ同じくは堀殿^{ほりどの}の承^{うけたまはり}ならば、いか許^{はか}り嬉^{うれ}しかりなん」と工藤^{くどう}左衛門^{さゑもん}して申したりければ、鎌倉殿に申し入れければ、「道理なれば易き事なり」と仰^{おほ}せられて、堀^{ほり}の藤次返^{とうじかへ}したふ。「時に取つて親家面目^{ちかいへめんぼく}」とぞ申しける。藤次^{とうじ}は急ぎ宿所^{しゆくしょ}に歸^{かへ}りて、妻女^{さいぢよ}に逢^あひて云ひけるは、「梶原^{かぢはらすで}既に申し給ひて候ひつるに、靜^{しづか}の訴訟^{そしやう}にて、親家^{ちかいへ}に返^{かへ}し

年までは、多くの人々仰せられしかども、靡く心も候はざりしかども、院の御幸に召し
具せられ参らせて、神泉苑の池にて、雨の祈りの舞の時、判官に見え初められ参らせて、
堀川の御所に召され参らせしかば、唯假初の御遊びの爲と、思ひ候ひしに、理なき御
心ざしにて、人々あまた渡らせ給ひしかども、所々の御住居にてこそ、渡らせ給ひしに、
堀川殿に取り置かれ参らせしかば、清和天皇の御末、鎌倉殿の御弟にて渡らせ給へば、
是こそ身に取りては面目、と思ひしに、今かゝるべし、とかねては夢にもいかでか知り
候ふべき」とて、さめぐと泣きければ、御前の人々は是を聞きて、「鎌倉殿の御前をも憚
らず、來し方より今迄の、靜が身の上を、おめす臆せず申したりく」とて各讃め給
ひけり。其の後鎌倉殿仰せられけるは、「九郎が子を妊じたる事、世に隠れなし。只今陳
じ申すに及ばず。近き程に産すべきところ聞きつれ。賴朝が爲には、全く敵の末なれば、
靜が胎内をあげ、子を取つて失へ。梶原」とぞ仰せける。靜も母も是を聞きて、兎角の
御返事にも及ばず、手に手を取り組み、顔に顔を合せて、聲も惜まず悲みけり。二位殿
も聞こし召して、靜が心の中、さこそと思ひやられ給ひけん、御幕の内に御落涙の音頻
りにこそ聞えけれ。侍ども承りて、「かゝる情なき事こそなけれ。然らぬだに、東國は遠國

ゆう—優、
容貌すぐれ
たるをいふ

下らん、と思ひ、預りの武士の命をも背きて、徒跣にてぞ下りける。幼少より召し使ひしさいはう、そのあまと申しける二人のはした者、年ごろ馴れし主の名残を惜みて、泣く泣く連れてぞ下りける。親家も、道すがら様々に勞はりてぞ下りける。兎角して都を出で、十四日に鎌倉に著きたり。此の由申し上げければ、靜を召して尋ねべき事有りとして、大名小名をぞ召されける。和田、畠山、宇都宮、千葉、葛西、江戸、河越を初として、其の數を盡して參る。鎌倉殿には、門前に市をなして夥し。二位殿も靜を御覽ぜられんとて、幔幕を引き、女房其の數參り集り給ひけり。藤次ばかりこそ、靜を具して參りたれ。鎌倉殿靜を御覽じて、ゆうなりけり。現在弟の九郎だにも、愛せざりせば、とぞ思し召しける、御氣色に見え給ひけり。母の禪師も、二人のはした者も、御前へはまるり得ず、門前に泣き居たり。鎌倉殿是を聞こし召して、「門前に女の聲として、さも高聲に泣き叫ぶは、如何なる者ぞ」と御尋ね有りければ、藤次承り、「靜が母と、二人の下女にて候ふ」と申しければ、鎌倉殿、「女は苦しかるまじ。此方へ召せ」とて召されけり。鎌倉殿仰せられけるは、「殿上人には見せ奉らずして、など九郎には見せけるぞ。其の上下天下の敵に成り參らせたる者にて有るに」と仰せられければ、禪師申しけるは、「靜十五の

覺束なく―
不安心なり

にてはよも御坐まし候ふまじ。君の御代の間は、何事か候ふべき。君達の御行方こそ覺束なく思ひ参らせ候へ。都にて宣旨院宣を御申し候うてこそ、下し給ひて御座近く置き参らせさせ給ひ、御産の體御覽じて、若君にて渡らせ給ひ候はゞ、君の御計ひにて候ふべし。姫君にて候はゞ、御前に参らせ給ふべし」と申したりければ、「然らば」とて堀の藤次を御使にて都へ上せられける。藤次六波羅にも著きしかば、北條殿と打ち連れ、院の御所に参りて、此の由を奏聞しければ、院宣には、「先の勸修坊の如くには有るべからず。時政が計略に尋ね出し、關東へ下すべき」と仰せ下されければ、北白川にて尋ねけれども、遂に遁るべきにはあらねども、一旦の悲みを遁れん爲に、法勝寺なる所に隠れ居たりしを、尋ね出して、母の禪師諸共に具足して、六波羅に行く。堀の藤次請け取りて、下らんとしける磯の禪師が心の中こそ無慙なれ。共に下らんとすれば、眼のあたり憂き目を見んずらんとかなしき、又止まらんとすれば、唯獨さし放つて、遙々と下さん事もいたはしく、それ人の習にて、子五人十人持ちたるも、一人かくれば嘆くぞかし、況んや、自らがたゞ獨り持ちたる子なれば、止まりても絶えて有るべきとも覺えず。去りとても愚なる子かや。姿形は王城に聞えたり、能は天下に隠れなし。兎に角に諸共に

訪ひくるも物うし、とて、閉門しておはしけるが、自筆に二百三十六部の經を書き供養して、判官の御菩提を弔ひて、我が御身をば水食を止めて、七十餘にて往生をぞ遂けられける。

六 静鎌倉へ下る事

とぶらひー
尋ね

大夫判官四國へ赴き給ひし時、六人の女房達、白拍子五人惣じて十一人の中に、ことに御心ざし深かりしは、北白川の静と云ふ白拍子、吉野の奥まで具せられたりけり。都へかへされて、母の禪師が許にぞ候ひける。判官殿の御子を姪じて、近き程に産をすべきにてありしを、六波羅に此の事聞えて、北條殿江馬の小四郎を召して、仰せ合せられけるは、「關東へ申させ給はでは叶ふまじ」とて、早馬を以つて申されければ、鎌倉殿、梶原を召して、「九郎が思ふ者に、静と云ふ白拍子、近き程に産すべき由なり。如何有るべき」と仰せられければ、景時申しけるは、「異朝をとぶらひ候ふにも、敵の子を姪じて候ふ女をば、頭を碎き骨をひしぎ、髓を抜かるゝ程の罪科にて候ふなれば、もし若君にておはしまし候はゞ、判官殿に似參らせ候ふとも、又御一門に似參らせ候ふとも、愚なる人

しよし―所
司、取締役

と候ふ」と申したりければ、とくこ、「仰はさる事にて候へども、一兩年も鎌倉に有り度も候はず」とぞ仰せられける。重ねて「佛法興隆の爲にて候ふ」と申されければ、「さらば三年は是れにこそ候はめ」と仰せられけり。鎌倉殿大きに悦び給ひて、「いづくにかすゑ奉るべき」と仰せられしかば、佐原の十郎申しけるは、「あはれよき序にて候ふ物かな。大御堂の別當になし参らせ給へかし」と申されたりければ、「いしく申したり」とて、佐原の十郎初めて奉行を承りて、大御堂の造營を仕り、勝長壽院のうしろに、檜皮の御山庄を作りて入れ奉り、鎌倉殿も日々の御参詣にてぞ候ひける。門前に鞍置馬たち止む隙なし。鎌倉は是れぞ佛法の初なり。折々ごとに、「判官殿御中直り給へ」と仰せられければ、「易き事にて候ふ」とは申し給ひけれども、梶原平三、八ヶ國の侍のよしなりければ、景時父子が命に隨ふ者、風に草木のなびく風情なれば、鎌倉殿も、御心に任せ給はず。かくて秀衡が存生のほどは、さて過ぎぬ。死去の後は嫡子元吉の冠者がはからひと申して、文治五年四月廿四日に、判官討たれ給ひぬと聞こし召しければ、「誰の爲に今まで鎌倉に長らへけるぞ。か程うき鎌倉殿に、暇乞も無益」とて、急ぎ上洛あり。院もなほ御たつとみ深くして、東大寺に歸りて、此の程すたれたる所ども造營し給ひ、人の

承り—君命
を奉じての
預り人

十惡五逆—
前に出せり

たの如くも智恵有る者に物を思はするは、何の益か有るべき。いかなる人承りにて候ふぞ。疾くく首をはねて、鎌倉殿の憤りを休め奉り給へや」と残る所もなく宣ひて、はらくと泣き給へば、心有る侍ども、袖をぬらさぬ人はなし。頼朝も御簾をさつと打ちおろし給ひて、萬事御前鎮まりぬ。やゝ有りて、「人や候ふ」と仰せられければ、佐原の十郎、和田の小太郎、畠山三人、御前に畏まつてぞ候ひける。鎌倉殿高らかに仰せられけるは、「かゝる事こそなけれ。六波羅にて尋ね聞くべかりしを、梶原申すに付けて、御坊を是まで呼び下し奉りて、さんぐに惡口せられ奉りたるに、頼朝こそ返事に及ばず、身の置所なけれ。あはれ人の陳狀や、尤もかくこそ陳じたくあれ。誠の上人にておはしましける人かな。理にてこそ、日本第一の大伽藍の院主とも成り給ひけれ。朝家の御祈にも召されけることわり」とぞ感ぜられける。「此の人を鎌倉に、せめて三年とぞめ奉りて、此の所を佛法の地となさばや」と仰せければ、和田の小太郎、佐原の十郎承り、くわんじゆ坊に申しけるは、「東大寺と申すは、星霜久しく成りて、利益候ふ所なり。今の鎌倉と申すは、治承四年の冬の比、初めて立てし所なり。十惡五逆破戒無慚の輩のみ多く候へは、是にせめては、三年渡らせおはしまして、御利益候へかし、と申せ

つたく奈良法師くみせよ、と申したること更になし。其のちうように南都を落ち給ひし間、心の中いか許やる方もなく、おはしますらんと存じ候うて、いさめたる事候ひし。四國九國の者を召し候へ。東大寺興福寺は、とくこが計らひなり。君は天下の御覺のいみじくて、院の御感にも入らせ給ひて候へば、在京して、日本を半國づつ知行し給へ、と勧め申せしかども、とくこが心をきやうしやくして、出で給へば、中々恥かしくこそ、思ひ奉り候ひしか。君にも知られぬ宮づかひにては候へども、殿の御爲にも祈りしぞがし。平家追討の爲に、西國に赴き給ひしに、渡邊にて、源氏の祈りしつべき者や有る、と尋ねられ候ひけるに、いかなるをこの者が、見參に入れて候ふ、とくこを見參に入れて候ひければ、平家を呪咀して源氏を祈れ、と仰せられ候ひしに、其の罪のがれなん、とたび／＼辭退申しとかば、御坊も平家と一つになるか、と仰せられ候ひし恐ろしさに、源氏を祈り奉りし時も、天に二の日照し給はず、二人の國王なしとこそ申し候へども、我が朝を御兄弟、手に握り給へ、とこそ祈り參らせしに、判官は生付不運の人なれば、つひに世にも立ち給はず。日本國残る所なく、殿一人して知行し給ふ事、これはとくこが祈の感應する所にあらずや。是より外はいかに糺問せらるゝとも、申すべき事候はず。か

けうりやう
―考量なる
べし
わざん―讒
言

を脇に挟み、三尺の劔をはきて、西海の波にたゞよひ、野山を家とし、命を捨て身を忘れ、いつしか平家を討ち落して、御身をせめて一兩年世にあらせ奉らばや、と骨髓をくだき給ひしに、人の讒言今に初めたる事にては候はねども、深き心ざしを忘れて、兄弟の中不和に成り給ひし事のみこそ、甚以つておろかなれ。親は一世の契、主は三世の契と申せども、是が初やらん、中やらん、終やらん、我も知らず。兄弟は後生までの契とこそ承り候へ。其の中をたがへ給ふとて、殿をば人の數にてはおはせぬ人、と世には申すけにこそ候へ。去年十二月廿四日の夜打ち更けて、日比は千騎萬騎を引き具してこそおはしまし候ひしに、侍一人をだにも具せず、腹巻許に太刀はきて、あみ笠といふ物うちき、萬事を頼むとておはしたりしかば、いにしへ見ず知らぬ人なりとも、いかでか一度の慈悲を垂れざらん。一度はくんこう望み、いかなる時は祈りしぞ。いかなる時は討ち奉るべき。是を以つてけうりやうし給へ。あらぬ様に人申したりし事のもれ候ふ。けにこそ、去年の冬の暮に出家し給へ、と度々勧め申しよかども、其の梶原が爲に出家はしたくもなし、と宣ひ候ひつる。其の比、判官殿はきたまひし太刀を奪ひ取り奉らんとて、惡僧ども斬られ參らせて候ひしを、人のわざんを構へて、申し候ひつらん。ま

いやくの
弟一つと
末の弟

きもならはぬ言葉かな。和僧はいかに。とくこと名字を呼びたりとも、不覺人にてはよ
もあらじ。和僧と宣ひたればとて、高名も有るまじ。都にて聞きしには、國の將軍
と成りて、かゝる果報にも生れけり。情もおはすると聞きしに、果報は生付の物なり。
殿の爲にてもいやくの弟、九郎判官には、はるかに劣り給ひたる人にて有りけるや。
申すに付けて詮なき事にては候へども、平治に御邊の父、下野の左馬頭、衛門督にくみ
して、京の軍に討ち負けて、東國の方へ落ち給ひし時、義平も斬られぬ、朝長も死しぬ。
明くる正月の初には、父も討たれしに、御邊の命を死し兼ねて、美濃の國伊吹山の邊を
迷ひありき、ふもとの者どもに生けどられ、都までひき上せ、源氏の名を流し、すでに
誅せられ給ふべかりしに、池殿の哀憐ふかくして、死罪を申しなだめられて、彌平兵衛
に預けられ、永暦の八月の比かとよ、伊豆の北條なごやの蛭が島といふ所に流され、廿
一年の星霜を経て、田舎人と成りて、さこそ頑固はしくおはすため、と思ひしに、少しも
違はざりけり。あらむざんや、九郎判官と敬拜し給ふ事、ことわりかな。判官と申すは
情も有り、心も剛なり、慈悲ふかくおはしまし候ふなり。治承四年の秋の比、奥州より
馬の腹筋はせきり、駿河の國浮島が原におり居て、一方の大將軍請け取りて、一張の弓

飲む、無言
にて意氣こ
み居る形容

おだし―糧
便なり

小舎人―厩
の下人

「抑僧徒の身と申すは、釋尊の教法學びて、師匠のかんしんに入つしより此のかた、いき
ようを正しく、三衣を墨に染めて、佛法をこうりうし、經論諸教のまへに眼をさらし、
無縁の人を弔ひ、結縁の者を導くこそ、僧徒の法とは申し候へ。何ぞ謀叛の者とくみし
て、世をくつがへさんとの計略世にかくれなし。九郎天下の大事になり、國土の亂をた
くむ者を入れ立てよ、あまつさへ奈良法師を我に與せよ、と宣ふに、用ひざる者をば、九
郎にはなち合せて斬らせ給ふ條、甚おだしからず。それを不思議と思ふ所に、猶以つて
四國西國の軍兵を一つになし、中國畿内の者どもを召して、召されんに參らざる者をば、
片岡、武藏など申す荒者どもをさし遣し、追討して御覽ぜよ。他所は知らず、東大寺興
福寺は、とくこがはからひなれば、叶へざらん時は、討死せよなどと、勸め給ひたる
事、以つての外に覺えて候ふに、人をつけて都まで送られ候ひけるは、九郎が在所におい
ては知りたるらん。虚言をかまへず正直に申され候へ。其の旨なくば、健ならん小舎
人めらに仰せ付けて、糺問を以つて尋ねん時、頼朝こそ全く僻事の者にはあるまじけ
れ」としたよかに問はれければ、勸修坊は、とかくの返事にも及ばず、はらくと
泪をながし、手をにぎりて膝の上におき、「萬事をしづめて、人々聞き給へ。そもく聞

當座―此の
席即ち賴朝
の居室

は中門ちゅうもんの下口しもぐちと申し上げ候ふ。是は、判官殿はんぐわんだんにくみし奉りたりといふ其の故と覺おぼえ候ふ。流石りうじきに勸修坊くしゅうぼうと申すは、御學匠おんがくしやうと申し、天子てんしの御師匠おんししやうと申し、東大寺とうだいじの院主いんじゆにておはしまし候ふ。御氣色ごきしよくわたらせ給ふによつてこそ、是迄まぎも申し下し參らせおはしまして候へ。さこそ遠國えんこくにて候ふとも、座敷ざしきしどろにては、世よの聞えも惡しく存ぞんじ候ふ。下口しもぐちなどにての御尋ねおんたづねには、一言ごんも御返事ごへんじは申され候はじ。たゞ當座たうざの御對面ごたいめんや候ふべからんと申されたりければ、「賴朝よりとももかくこそ思ひつれ」とて、御簾みすを日比ひひより高くまかせて、御座敷ござしきには紫むらさきべりの簀たてふ、水干みづかんに立烏帽子たちえぼしにて、御見參ごけんさんあり。堀ほりの藤次とうじ勸修坊くしゅうぼうを入れ奉る。鎌倉殿かまくらだん思おもひ召めしけるは、何ともあれ、僧徒そうどうなれば、糾問きうもんは叶かなふまじ。言葉ことばを以もつて責めせふせて、問はんするものを、と思おもひ召めしけり。とくこ御座敷ござしきに居なほり給ひけれ、とかく仰おほせ出されたる事もなく笑わらひて、大の御眼おんまなこにてはたと睨にらませ給ひてぞおはしける。とくこ是を見て、あはれ人の御心ごこころの中もさこそ有らめ、と思はれければ、手てを握にぎりて膝ひざの上におきて、鎌倉殿かまくらだんをつくぐと守りて、御問狀ごんもんじやうも陳狀ちんじやうもさこそあらんすらん、と覺えて、人々かたづ固唾かたづをのみ居たりけり。賴朝堀よりともほりの藤次とうじを召して、「是がくわんじゆ坊か」と仰おほせられければ、親家ちかいへかしこまつてぞ候ひける。しばらくありて、鎌倉殿かまくらだん仰おほせられけるは、

かたづなの
む一口にた
めたる唾を

候はんずるにて候ふ」と申しければ、とくこ「道の程の御情こそ悦び入つて候へ」と仰せられけるこそ哀なれ。夜を日につぎて下りけるほどに、十四日に鎌倉に著き給ふ。堀の藤次の宿所に入れ奉りて、四五日は鎌倉殿にも申し入れず。或時とくこに申しけるは、「御いたはしく候ふとて、鎌倉殿にも申し入れず候ひつれども、いつまで申さでは候ふべきなれば、只今出仕つかまつり候ふ。今日御見参有るべきところ覺え候ひぬ」と申しければ、「思ふも中々心ぐるし。疾くして見参に入り、御問状をも承り候うて、愚僧の旨の申し度こそ候へ」と仰せられければ、藤次、頼朝の御前に参り、この由申しあぐる。梶原を召して、「今日の中に、とくこに尋ね聞くべき事あり。侍ども召せ」と仰せられければ、承りて召しけるに、侍には誰々ぞ。和田の小太郎義盛、佐原の十郎、千葉の介、笠井の兵衛、豊田の太郎、宇都宮の彌三郎、うなかみの次郎、小山の四郎、なかぬまの五郎、小野寺のぜんじ太郎、川越の小太郎、同じく小次郎、畠山の次郎、稻毛の三郎、梶原平三父子ぞ召されける。鎌倉殿仰せられけるは、「くわんじゆ坊に尋ね問はする座敷には、いくの程かよかるべき」。梶原申しけるは、「御中門の下口邊こそ能く候はん」と申しければ、畠山、御前にかしこまり、申されけるは、「くわんじゆ坊の御座敷の事承り候ふに、梶原

腰輿―牛輿
ともいひ人
の手にかけ
行く輿

護摩―梵語
燃焼の義祈
禱の時ぬる
での木を佛
前に焚くこ
と

傳馬―驛々
より公用の
爲に出す馬

て、いとど涙に咽び給ひけり。此のくわんじゆ坊と申すは、本朝大會の大伽藍、東大寺の院主、當帝の御師となり、廣大慈悲の知識なり。院參し給ふ時、腰輿牛車に召されて、あざやかなる中童子大童子、然るべき大衆あまた御供して參られし時は、左右の大臣もあつて、各渴仰し給ひしぞかし。今はいつしか引きかへて、日ごろ著給ひし素絹の御衣をば召されず、麻の衣の賤しきに、剃らで久しき御髪、護摩の煙にふすぶる御けしき、なかく尊くぞ見奉る。六波羅を出し奉りて、見なれぬ武士を御覽じけるだに悲しきに、淺ましげなる傳馬に乗せ奉る。所々の落馬は目もあてられず覺えたり。栗田口打ち過ぎて、松坂こえて、これや逢坂の蟬丸の住み給ひし四宮河原を打ち過ぎて、逢坂の關を越えければ、小野の小町が住みなれし關寺をふし拜み、園城寺を弓手になし、大津、うち出の濱過ぎて、瀬多の唐橋ふみならし、野路の篠原も近くなり、忘れんとすれど忘れず、常に都の方をかへりみて、行けばやうく都は遠くなりけり。音には聞けど目にはみぬ、小野のすりはり、霞に曇るかどみ山、膽吹の嶽も近くなる。其の日は堀の藤次鏡の宿にとどまり、次の日いたはしくや思ひけん、長者に輿をかりて乗せ奉り、「都を御出の時、かくこそ召させ參らすべく候ひしかども、鎌倉の聞え其の憚りにて、御馬を參らせ

方かたの候ふ。是へ参り候ふを聞きては、尋ねべき人にて候ふが、來られ候はぬは、いか様
 にも世に憚はばかりをなし候ひて、と覺おぼえ候ふ。苦くるしかるまじく候はど、此の人に見参けんざんし下らば
 や」と仰おほせられければ、義時承り、「名を何と申すぞ」と言ひければ、「元は黒谷に住すみ候
 ひしが、此の程は東山に法然坊」と仰おほせられければ、「扱さては。近き所におはしまし候ふ上人
 の御事候ふ」とて、頓やがて御使を奉る。上人大きに悦よろこび給ひて、急いそぎ來り給ふ。二人の知
 識御目を見合せ、互に御涙に咽おんなみだび給ひけり。勸修坊仰ほうおほせられけるは、「見参に入つて候ふ
 ことは、悦よろこび入つて候へども、面目なき事の候ふぞ。僧徒の身として、謀叛の人むはんに與くみ
 たりとて、東國まで取り下され候ふ。其の難なんを遁のがれて歸らん事も不定なり。されば、古
 より、先に立ち参らせば弔さめらはれ参らせん、先にたゞせ給ひ候はど、御菩提ごぼだいを弔さめらひ参らせん、
 と契ちぎり申して候ひしに、先立ち参らせて、とぶらはれ参らせんこそ、悦よろこび入りて候へ。是
 を持佛堂の御前に置かせ給ひ、御目に懸り候はん度毎に、思おもひ召し出し後世を弔さめらひて給
 はり候へ」とて、九條の袈裟をはづし奉り給へば、東山の上人泣くく請け取り給ひけ
 り。東山の上人、紺地の錦の經袋より、一卷の法花經を取り出し、くわんじゆ坊に参
 らせ給ふ。互に御かたみを取りかはして、上人歸り給ひければ、とくこは六條に止まり

世も斯様になれば、末の代もいかゞあらんずらん」とて、涙にむせび給ひけり。「たとひ宣旨院宣なりとも、南都にてこそ屍を捨てられ共、其も僧徒の身として穩便ならねば、東國の兵衛佐は、諸法も知らぬ人にてあるなるに、哀れついでもがな、關東へ下り、兵衛佐を教化せばや、と思ひつるに、下れと宣ふこそ嬉しけれ」とて、頓て出で立ち給ひけり。公卿殿上人の君達、學問の心ざしおはしましければ、師弟の別れを悲み、東國まで御供申すべき由を申し給へども、とくこ仰せられけるは、「ゆめく有るべからず。身罪科の爲に召し下され候ふ間、とがとて其の難をば、いかでか遁れさせ給ふべき」といさめ給へば、泣く／＼跡に止まり給ふ。「兎も角も成りぬ、と聞こし召されば、跡を弔はせ給へ。若し存命へて如何なる野の末、山の奥にもあり、と聞き給はゞ、跡をとぶらひ渡らせ給へ」と泣く／＼契りて出で給ふ。此の別を物に譬ふれば、釋尊の御入滅の時、十六羅漢、五百人の御弟子、五十二類に至るまで、悲み奉りしも、いかでか是にはまさるべき。かくて、とくこ北條に具せられて平の京に入り給ふ。六條の持佛堂に入れ奉りて、やう／＼にぞ勞り奉る。江間の小四郎申しけるは、「何事をも思し召し候はゞ、承りて南都へも申すべく候ふ」と申されければ、「何事をか申すべき。但し此の邊に年來知りたる

平の京—平
安城、京都

まろ―自稱
の代名詞

御大事にて候へ。僧徒の身として、左様の事思し召し立ち候はんこそ、不思議に候へ」と申す所に、又北條より飛脚到來して、判官殿南都にはおはせず、とくこがはからひにて、隠し奉る由申されければ、梶原申しけるは、「さらば、宣旨院宣をも蒙り給ひて、勸修坊を是へ下して、判官の御行方御尋ね候へ。陳狀にしたがひて、死罪流罪にも」と申しければ、いそぎ堀の藤次親家に仰せ付けられ、五十餘騎にて馳せ上り、六波羅に著きて此の由を申しければ、北條殿、親家を召し具して、院の御所に參じて、仔細を申されければ、院宣には、「まろがはからひに有るべからず。くわんじゆ坊といふは、當代の御祈の師、佛法興隆有驗廣大慈悲の知識なり。内裏へ巨細申さでは叶ふまじ」とて、内裏へ奏聞せられければ、「佛法興隆の有驗たる人にて、も、左様に僻事などを企てんにおいて、は、朕も叶はせ給ふべからず。頼朝が憤る所理ならずといふ事なし。義經も本朝の敵たる上は、くわんじゆ坊を渡すべし」と宣旨下りければ、時政悦をなして、三百餘騎にて南都にはせ下りて、くわんじゆ坊に、宣旨の趣を披露せられたり。とくこ是を聞きて、「世は末代といひながら、王法の盡きぬこそ悲しけれ。上古は宣旨と申しければ、枯れたる草木も花咲き實を結び、空とぶ翼も落ちけるとこそ承り傳へしに、されば今は

義經より外は、と思ひつるに、此のとくこは、世に越えたる剛の人にておはしける、と思し召されければ、やがて其の夜の内に、南都をば出でさせ給ひけり。いかでか獨りは出し参らせんなれば、我が爲に心やすき御弟子六人つけ奉り、京へぞ送り奉りける。「六條堀川なる所にしばらく待ち給へ」とて、行き方しらず失せ給ひぬ。六人の人々空しくぞ歸りける。それより後はくわんじゆ坊も、判官の御行方をば知り奉らず。されども奈良には人多く死しぬ。但馬や披露したりけん、判官、くわんじゆ坊のもとにて、謀叛を起して、かたらふ所の大衆したがはぬをば、とくこ判官にはなちあはせ奉る、と風聞しける。

五 關東よりくわんじゆ坊を召さるゝ事

南都に判官殿おはします由、六波羅に聞えければ、北條大きに驚き、急ぎ鎌倉へ申されけり。頼朝、梶原を召して仰せられけるは、「南都のくわんじゆ坊といふ者、九郎にくみして世を亂すなるが、奈良法師も大勢うたれて有るなり。和泉河内の者ども、九郎に思ひ付かぬさきに、是はからへ」と仰せられければ、梶原申しけるは、「それこそゆゑしき

荒乳の山—
越前、古の
三關の一

にも入り給ひしかば、宣旨院宣も申させ給はんに、誰か劣るべき。御身は都に在京して、四國九國の軍兵を召さんに、などか参らで候ふべき。畿内中國の軍兵も一統になりて参るべし。鎮西の菊池、原田、松浦、うすき、べつきの者ども召されずるに参らずば、片岡、武藏などのあら者どもをさし遣し、少々追討し給へ。他所はみだるゝ事も候ひなん。半國一になり、荒乳の山、伊勢の鈴鹿山を切りふさぎ、逢坂の關を一つにして、兵衛佐殿の代官、關より西へ入れん事有るべからず。とくこもかく候へば、興福寺、東大寺、山、三井寺、吉野、十津川、鞍馬、清水、一つにして参らせん事は、易き事にてこそ候へ。それも叶ふまじく候はど、とくこが一度の恩をも忘れじと思ふ者、二三百人も候ふ。彼等を召して城廓を構へ、櫓をかき、御内に候ふ一人當千の兵どもを召し具し、やぐらへ上りて弓取りて候はど、心剛なる者どもに軍せさせ、よそにてものを見候ふべし。自然味方ほろび候はど、幼少の時より頼み奉る本尊の御前にて、とくこ持經せば、御身は念佛申させ給ひて、腹を切らせ給へ。とくこも劔を身に立てよ、後生までも連れ参らせん。今生は御祈の師、來世は善知識にてこそ候はんすれ」と誠に頼もしけにぞ申されける。是について、暫くあらまほしく思はれけれども、世の人の心知りがたく、我が朝には

れうじー聊
爾、過失

御覺えー御
寵愛

んとし給へば、とくこは「いかなる事ぞや、暫く是におはしまし候ふべきか、と存じ候ひつるに、思の外御出で候はんずるこそ、心得難く候へ。いかさま人の中言に付きて候ふ、と覺え候ふ。たとひ如何なる事を人申し候ふとも、身として用ふべからず。しばしは是におはしまして、明年の春の比、何方へもわたらせ給へ。ゆめく叶ひ候ふまじ」と御名残をしきまゝにとめ奉り給へば、判官申されけるは、「今宵こそ名残をしく思し召され候ふとも、明日門外に候ふ事、御覽じ候ひなば、義經が愛想もつきて、思し召されんする」と仰せられければ、くわんじゆ坊是を聞きて、「いか様にも今宵ちうように逢はせ給ふ、と覺えて候ふ。此の程わが大衆ども、朝恩のあまりに、夜なく人の太刀を奪ひ取るよし、承り候ひつるが、御佩刀は世にこえたりければ、奪ひ取り奉らん、とて、しやつばらが斬られ参らせて候ふらん。それに付きては何事の大事か候ふべき。れうじに聞え候はゞ、とくこが爲にふしくなるやうも候ふらん。定めて關東へも訴へ。都に北條おはしまし候へば、時政私には叶ふまじとて、關東へ仔細を申されずらん。鎌倉殿も左右なく宣旨院宣なくては、南都へ大勢をばよも向けられ候はじ。其程の儀にて候はば、御身平家追討の後は、都におはしまして、一天の君の御覺もめでたく、院の御感

不覺人―未
練者

ちうよう―
重要歟、前
にちんじち
うようとあ
り
三世―過去
現在未來

むねにてたゞき伏せ、生けながらつかんで取り給ふ。「おのれは南都にて、何と言ふ者ぞ」と問ひ給へば、「但馬の阿闍梨」と申しければ、「命は惜しきか」と宣へば、「生を享けたる者の、命をしからぬ者や候ふ」と申しければ、「扱は聞くには似ず、おのれは不覺人なりけるや。頭を切りて捨てばや、と思へども、おのれは法師なり、某は俗なり。俗の身として僧を斬らん事、佛を害し奉るに似たり。おのれをば助くるなり。此の後斯様の狼藉すべからず。明日南都にて披露すべき様は、それがしこそ、源九郎と組んだりつれ、といはゞ、扱剛の者といはれんするぞ。印はいかに、と人とはゞ、なしと答へては人用ふべからず。是をしるしにせよ」とて、大の法師を取つてあふのけ、胸をふまへ刀をぬきて、耳鼻をけづりて放されけり。中々死にたらばよかるべし、と歎きけれども甲斐ぞなき。其の夜南都をばかき消す様にぞ失せにけり。判官は、此のちうようにあはせ給ひて、くわんじゆ坊に歸りて、持佛堂にとくこをよび奉りて、暇申して、「是にて年を送りたく思ひ候へども、存する旨候ふ間、都の方へ罷り出で候ふ。此の程の御情盡し難く覺え候ふ。もし浮世に長らへ候はゞ申すに及ばず、又死して候ふ、と聞し召し候はゞ、後世を頼み奉る。師弟は三世の契と申し候へば、來世にて必ず參會し奉り候ふべし」とて、出で

毛を吹きて
云々―韓非
子の語、小
過えも搜し
求むる喻な
がら爰は注
意して便宜
を求むる意

けうがる―
興味ありと
する

切所―原本
節所に作
る、難所の
こと

申せば、「それは臆病のいたる所ぞ。など取らざらん」といへば、「それはさる事にて、便宜悪しくては、いかど有るべからん」と申しければ、「さればこそ毛を吹きて、疵を求むるにてあれ。人のよこがみを破るになれば、さこそあれ」とて、くわんじゆ坊のほとりを狙ふ。各六人築土の蔭のほの暗き所に立ちて、「太刀の鞘に腹巻の草摺をなけかけて、爰なる男の人を打つぞや、といはど、各聲に付きて走り出で、いかなる痴者ぞ。佛法興隆の所に、たびく慮外して、罪作ること心えね。命な殺しそ。侍ならばもとどりを切つて、寺中を追へ。凡下ならば耳鼻を削りておひ出せ、とて、取らぬは不覺人ども」とて、ひしくと出であひ、進みよりける。判官はいつもの事なれば、心をすまして、笛を吹き給ひておはしけり。けうがる風情にて、通らんとする者有り。判官の太刀の尻鞘に、腹巻の草摺をはらりとあてよ、「爰なる男の、人を打つぞや」といひければ、殘の法師ども、「さなはいはせそ」とて、三方より追ひかよりたり。かゝる難こそなければ、と思し召し、太刀ぬいて、築土をうしろにあてよ、待ちかけ給ふ所に、長刀さし出せばふつと切り、長刀こそぞりの間に、四つ切り落し給へり。斯様にさんぐに切り給へば、五人をば同じ枕に切りふせ給ふ。但馬は手を負うて逃けて行くを、切所に追つかけ、太刀の

樊噲漢人高
祖の臣鴻門
の會の勇士

主―持主

らぬ來世を助からん、と思し召されずや」と勸め奉り給ひければ、判官 申させ給ひけるは、「度々仰蒙り候へども、いま一兩年もつれなき 髻つけて、つらく世の有様も見ん」とこそ宣ひけれ。されども、もしや出家の心出で來給ふ、とたつとき法文などを、常は説き聞かせ奉り給ひけれども、出家の御心はなかりけり。夜は御つれづれなるまゝに、くわんじの坊の門外に佇み、笛を吹き鳴し、なぐさませ給ひけるほどに、其の比奈良法師の中に、但馬の阿闍梨と言ふ者有り。同宿に、和泉美作辨の君、是等六人くみして申しけるは、「我等南都にて惡行無道なる名を取りたれども、別に爲出したる事もなし。いざや夜々たよすみて、人の持ちたる太刀を奪ひて、我等が重寶にせん」とぞ言ひける。尤もしかるべし」とて、夜々人の太刀を取りありく。樊噲が謀をなすもかくやらん。但馬の阿闍梨申しけるは、「口比はありとも覺えぬ冠者、きはめて色白くせいも小さきがよき腹卷着て、黄金作りの太刀の、心もおよばぬを佩き、くわんじの坊の門外に、よなよな佇むぞ。おのれが太刀やらん、主にも過分したる太刀なり。いざ寄りて取らん」とぞ申しける。美作申しけるは、「あはれ詮なき事を宣ふものかな。此の程九郎判官殿の、吉野の修行に攻められて、くわんじの坊を頼みておはする、と聞く。たゞ置かせ給へ」と

始めたる云
々―今同始
めての直言
にはあらね
ど
弓取―武士

給へるものかな。始めたる事にてはなけれ共」とぞ呶きける。「後代の例に首をば懸けよ」とて、堀の彌太郎承りて、座敷より立ちて、由井の濱、八幡の鳥居の東にぞ懸けられける。三日過ぎて御尋ね有りければ、「未だ濱に候ふ」と申しければ、「不便なり國遠ければ親しき者知らで取らざるらめ。剛の者の首を久しく晒しては、所の惡魔となる事も有り。首を召し返せ」とて、たゞも捨てられず、左馬頭殿の御供養に作られたる勝長壽院の後に、埋めさせ給ひける。猶も不便にや思し召されけん、別當の方へ仰せ有りて、一百三十六部の經を書きて供養せられけり。昔も今も、是程の弓取あらじとぞ申しける。

四 判官南都へ忍び御出ある事

扱も判官は、南都くわんじの坊の許へおはしましたりける程に、くわんじの坊是を見奉りて、大に悦び、幼少の時より崇め奉りける、普賢虚空藏のわたらせ給ひける佛殿に入れ奉りて、様々にいたはり奉る。折々ごとに申されけるは、「御身は三年に平家を責め給ひ、多くの命を亡し給ひしかば、其の罪いかでかのがれ給ふべき。一心に御菩提心をおこさせ給ひて、高野粉川に閉ぢこもり、佛の御名を唱へさせ給ひて、今生いく程な

まもられむ
―見詰めら
れむ

ば、「何處いづくの國たれがし、某たれがしと申まをす者ものぞ」と御尋おんたづねある。「判官殿はうぐわんどのの郎等らうどう、佐藤四郎兵衛さとうしやうべゑと申まをす者にて候まをふ」と申しければ、「討手うっては誰たれ」と仰おほせければ、「北條きたじょう」とぞ申しける。初めたる事にてはなけれども、いしうし給たまひつる、との御氣色おんきしよくなり。自害じがいの體最期ていさいきの時の言葉ことば、細々こまこまと申さなければ、鎌倉殿がう「あはれ剛かうの者かな。人ごとこに此この心こころを持もたばや。九郎くわうにつきたる若わか黨たう、一人として愚おろかなる者なけれ。秀衡ひでひらも見みる所有しやうりてこそ、多くの侍さむらいの中に、是ら兄弟けいだいをば附つけつらめ。いかなれば、東國とうこくに是程このほどの者なからん。餘よの者百人を召よし使つかはんよりも、九郎くわうが心ざしをふつと忘わすれて、賴朝よりともに仕つかへば、大國小國だいくせうこくは知しらず、八ヶ國やつかくにおいては、何れいづの國くににても一國いっくには」とぞ仰おほせける。千葉ちのば、葛西かさい、是こを承うけり、「あはれ由よしなき者の有ありさま様さまかな。生きてだにも候まをふならば」とぞ申しける。畠山はたけやま申まをされるは、「心及こころおよばず、よくこそ死しし候まをへばこそ、君きみの御氣色おんきしよくよく候まをへ。生きて捕とらり下くだり参まゐらせ候まをはんするに、判官殿はうぐわんどのの御行方おんゆきへしらぬ事はあらじ、とて、糺問きうもん強きやうくせられ参まゐらせなば、生きたるかひも候まをふまじ。終つひに死しすべき者のよの侍さむらいどもに顔かほを守まもられんも、心憂こころうれかるべし。忠信程たけのぶの剛かうの者、日本にっぽんを賜たまぶとも、判官殿はうぐわんどのの御心おんこころざしを忘わすれ参まゐらせて、君きみに隨したがひ参まゐらせ候まをふまじきものを」と殘のこる所ところなく申まをされける。大井おほゐ、宇都宮うつのみやは、袖そでをひき膝ひざをさして、「よくく申し

そ悲しけれ。是もたゞ餘りに判官を戀し、と思ひ奉るゆゑに、是迄命は長きかや。是ぞ判官のたびたりし御佩刀、是を御かたみに見て、冥途も心安く行かん」とて、ぬいて置きたりける太刀を取つて、先を口にふくみて、膝をおさへて立ちあがり、手をはなつて俯伏にがばと倒れけり。鐔は口にとどまり、きつさは鬢の髪をわけて、後にするりとぞ通りける。惜かるべき命かな。文治二年正月六日の辰の刻に、終に人手にかゝらずして、生年二十八にて失せにけり。

三 忠信が首鎌倉へ下る事

北條殿の郎等、伊豆の國の住人、みまの彌太郎と申す者、四郎兵衛が死骸のあたりに立ちよりて、首をかき落し、六波羅に持参し、大路をわたして東國へ下るべき、とぞ聞えける。されども、朝敵の者の獄門にかけらるべきこそ大路を渡せ、是は頼朝が敵、義經が郎等をや。別して渡さるべき首ならず、と公卿より仰せられければ、北條、理とて渡さず、小四郎五十騎の勢を具して、首を持たせて關東へ下る。正月二十日に京を出でて、同じく廿一日に下著し、鎌倉殿の見参に入れて、「謀叛の者の首取りて候ふ」と申しけれ

こころさき
—心さきと
書きてむな
さきと讀む
べきを誤り
たるならむ

と申しければ、「さらば靜に腹を切らせて、首を取れ」とて、手綱をうち捨て是を見る。
心安けに思ひて、念佛高聲に三十遍許申して、願以此功德と回向して、大の刀を抜きて、
引合をふつと切つて、膝をつい立て、居長高になり、刀を取りなほし、左の脇の下にが
ばとさし貫きて、右の方の脇の下へするりと引き廻し、心さきに貫きて、臍の下までか
き落し、刀をおし拭ひて打ちみて、「あ刀や、まうふさに誂へて、能々作ると言ひたりし
印あり。腹を切るに、少しも物のさはるやうにも無きものかな。此刀を捨てたらば、屍
にそへて東國まで取られんす。若き者ども、よき刀あしき刀といはれん事もよしなし。
冥途までも持つべき」とて、おし拭ひて鞘にさして、膝の下におしかくいて、疵の口を
攫みて引きあげ、拳を握りて腹の中に入れて、腹わたをつかみ出し、縁の上にさんく
に打ち散し、「冥途まで持つ刀をばかくするぞ」とて、柄を心もとへさしこみ、鞘はをり
骨の下へつき入れて、手をむずと組み、死にけもなくて、息強氣に、念佛申して居たり。
扱も命死にかねて、世間の無常を觀じて申しけるは、「あはれなりける娑婆世界の習ひか
な。老少不定のさかひ、けに定めなかりけり。いかなる者の、矢一に死をして、跡まで
も妻子に憂目見すらん。忠信いかなる身を持つて、身を殺すに死にかねたる業のほどこ

我等が君—
義經

ちんじちう
よう—珍事
重要なるべ
し

るに、甲の星金物かぶせ ほしかなものがとして見えたり。取り下して草摺くさずりながに著くだし、矢かき負ひ弓おしはり、すびき打ちして、北條殿の二百餘騎おそ遅し、と待つ所に、間もすかさずおし寄せたり。先陣はせんじん おほには大庭にこみ入りて、後陣は門外にひかへたり。江間の小四郎義時よしとき、まりのかよりを小楯こだてに取つて申されけるは、「きたなし四郎兵衛、とても遁るまじきぞ、あらはに出で給へ。大將軍は北條殿、かく申すは、江間の小四郎義時よしときと言ふ者なり。はやく出で給へ」といへば、忠信たけのぶ是を聞きて、縁の上に立ちたるが、都のもとがばとつき落し、手矢取つてさしはけ申しけるは、「江間の小四郎に申すべき事有り。あはれ御邊達ごへんたちは、法を知り給はぬ者かな。保元、平治の合戦あひせんと申すは、上と上との御事なれば、内裏だいりにも御所しよにも恐れをなし、思ふ様にこそ振舞ひしか、是はそれには似るべくもなし。某と御邊ごへんとは、私戦わたくしあいにてこそあれ、鎌倉殿も左馬頭殿の御君達ごんきんだち、我等が君も御兄弟ぞかし。例へば人して申しけるは、小四郎殿へ申し候ふ。伊豆駿河の若黨わかたうの、殊ことの外の狼藉ろうしやくに見え候ふを、萬事ばんじを鎮めて、剛がうの者の腹切はらきりるやうを御覽ごらんぜよや。東國とうこくの方へも、主に心ざしも有り、ちんじちうようにも逢ひ、また敵に首を取らせじとて、自害じがいせんずる者の爲に、是こそ末代まつだいの手本てほんよ。鎌倉殿にも自害じがいの様をも、最期さいごの言葉をも、見參けんさんに入れて給へ」

出居―表座敷

四方白―四隅の白き青丸木の弓―木弓、木竹取交ぜて作れる弓に對へていふ

後不覺にこそなりにけれ。見たき所を見廻りて、さて出居にさし出でて、簾所々に切つて落し、葎あけて、太刀取り直し、衣の袖にておし拭ひ、「何にてもあれ」と獨言云ひて、北條の二百餘騎をたゞ獨して待ちかけたり。あはれ敵や、能き敵かな。關東にては鎌倉殿の御舅、都にては六波羅殿、我が身に取りては過分の敵ぞかし。あたら敵に犬死せんするこそ悲しけれ。よからん鎧一領、やなぐひ一腰もがな、最後の軍して腹切りなんと思ひ居たりけるが、誠に是は鎧一領残されし事の有りしぞかし。去年十一月十三日に都を出でて、四國の方へ下り給ひし時、都の名残を捨てかねて、其の夜は鳥羽の湊に一夜宿し給ひたりし時に、常陸坊を召して、義經が住みたる六條堀川には、いか成る者の住まんずらん、と仰せければ、常陸坊申しけるは、たれか住み候はん。おのづから天魔の棲處とこそ成り候はん、と申しければ、義經が住みなれし所に、天魔の棲所とならん事憂かるべし。主の爲に重き甲冑を置きつれば、守となりて惡魔をよせぬ事の有なるぞ、とて、小櫻緘の鎧、四方白の甲、山鳥の羽の矢十六さして、丸木の弓一張そへて、置かれたりしぞかし。未だ有りもやすらん、と思ひ、天井にひたくと上りて、さしのぞきて見れば、巳の時許の事なれば、東の山より日の光さしたる隙間より入つて輝きた

月はもり云々―月光の洩れてさしこむやうにと
星はたまれ―星は雨の誤ならむ歟しどろ―亂

りて見ければ、上薄く葺きける屋根なれば、月はもり星はたまれ、と葺きければ、所々は疎なり。すくやか者にて有る間、左右の腕を上げ、家を引きあげ、つと出でて、梢を鳥の飛ぶが如くに、散りにちつてぞ落ちて行く。江間の小四郎是を見て、「すはや敵は落つるぞ。たゞ射殺せ」とて精兵どもにさんぐに射さす。手にもたまらざりければ、矢頃遠くぞなりにける。未だ明ほのゝ事なれば、町里小路にはづし置きたる雜車、駒の蹄しどろにして、思ふ様にも断けざりければ、かくて忠信をぞ失ひける。其のまゝ落ち行かば、中々しおふすべかりつるに、我が行方を案じ思うて、片ほとりは在京の者に下知して、指し塞がれなん。洛中は北條殿父子の勢を以つて搜されん。とても遁れぬ物のゑに、末々の奴原の手にかよりて、射殺されんこそ口惜しけれ。一兩年も判官のすみ給ひし六條堀川の御所に参りて、君を見参らする、と思ひて、其處にてともかくもならばや、と思ひて、六條堀川の方へぞ行きける。去年まで住みなれ給ひし跡を、歸り來て見れば、今年はいつしか引きかへて、門おしたつる者もなく、縁とひとしく塵積り、葎、遣戸皆くづれたり。御簾をば常に風ぞ巻く。一間の障子の内に分け入りて見れば、蜘蛛の糸をみだしたり。是を見るにつけても、日比はかくはなかりしものを、と思ひければ、猛き心も前

生有る物必ず滅す。其の期は力及ばずや、屋島、津の國、長門の壇の浦、吉野の奥の合戦まで、随分身をばなきものところ思ひつれども、其の期ならねば今日まで延びぬ。然りとはいへども、たゞ今が最期にて有りけるを、驚くこそ愚なれ。さればとて犬死すべきやうなし」とて、ひらくとぞ出で立ちける。白き小袖に黄なる大口、直垂の袖を結びて肩にうちこし、昨日みだしたる髪を、未だ梳りもせず取り上げ、一所に結び、烏帽子引き立ておしもうで、盆のくほに引き入れて、烏帽子懸を以つて、額にむすと結びて、太刀を取りさし、うつぶきて見れば、未だほの暗くて、物の具の色は見えず、敵はむらむらに控へたり。中々なかを通りて、まぎれ行かばや、とぞ思ひける。されども敵甲冑をよるひ、矢をはけて、駒に鞭を進めたり。追ひかけて散々に射られんず。薄手おうて死にもやらず、生きながら六波羅へ取られなんす。判官のおはする所知らんずらん、と問はど、知らずと申さば、さらばはういつに當れ、とて糺問せられ、一旦知らずと申すとも、次第に性根みだれなん後には、有りのまゝに白狀したらば、吉野の奥に留まりて、君に命を參らせたる心さしも、無になりなん事こそ悲しけれ。いかにもして爰をのがればや、とぞ思ひける。中門の縁にさし入つて見ければ、上に古りたる座敷有り。直と上

腹を云々―
腹立つを堪
へ兼ねて

よと云ふ宣旨院宣もなし。欲に耽つて合戦に忠を致したるとても、御説ならねば御恩も有るべからず。仕損じては一門の瑕瑾なるべく候ふ間、景久は叶ふまじ。猶も御心ざし切ならん人に仰せられ候へ」と云ひすて、急ぎ宿所へ歸りつゝ、色をも香をも知らぬ無道の女と思ひ知り、終に是をば問はざりけり。斯様に梶原にも疎まれ、腹をするかねて、六波羅へ申さん、と思ひつゝ、五日の夜に入りて、はした者一人召し具して六波羅へ参り江間の小四郎を呼び出して、此の由傳へければ、北條殿にかくと申されたり。「時刻を移さず寄せて捕れ」とて、二百騎の勢にて四條室町にご押寄せたり。昨日一日今宵よもすがら、名残の酒とて強ひたりければ、前後も知らず臥したりけり。頼む女は心がはりして失せぬ。常に髮梳などしける、はした者の有りけるが、忠信が臥したる所にはしり入りて、荒らかに起して、「敵よせて候ふぞ」と告げたりける。

二 忠信最後の事

忠信敵の聲におどろき、起きあがり、太刀取りなほし、さしくとみて見ければ、四方に敵みちゝたり、遁れて出づべき方なし。内にて獨言にいひけるは「初有る物は終有り、





理なき―甚しくはかなき

るに、初て見えそめてけり。今の男と申すは、世にある者なり。思ひ替へじ、と思ひ、此の事を梶原に知らせて、討つか搦むるかして、鎌倉殿の見参に入れたらば、勳功疑ひ有るべからずなど思ひ知らせん、と思ひけり。かよりければ、五條西洞院にありける梶原が許へ、使をぞやりける。急ぎ梶原女の許へぞ行きける。忠信をば一間なる所にかくし置き、梶原三郎をぞもてなしける。其の後耳に口をあてゝ呶きけるは、「呼びたて申す事は別の仔細なし。判官殿の郎等、佐藤四郎兵衛と申すもの有り。吉野の戦に討ち漏されて、過ぎぬる廿九日の暮方よりは是に在り。明日は陸奥へ下らん、と出で立つ。下りて後知せ奉らぬとて、恨み給ふな。我と手を碎かずとも、足輕どもさし遣し、討つか搦むるかして、鎌倉殿の見参に入れて、勳功をも望み給へ」とぞ申しける。梶原三郎是を聞いて、あまりの事なれば、中々とかく物もいはず、唯うとましき者の、あはれに理なきを尋ぬるに、稻妻、陽炎、水の上に降る雪、それよりも猶あだなるは、女の心なりけるや。是をば夢にも知らずして、是を頼みて身をいたづらになす忠信こそ、無慘なれ。梶原三郎申しけるは、「承り候ひぬ。景久は一門の大事を身にあてゝ、三年在京仕るべく候ふが、今年も二年になり候ふ。在京の者のりやうやくは叶はぬ事にて候ふ。さればとて忠信追討せ

やう／＼に
いさま／＼

青陽—春の
色は青く氣
は陽なれば
いふ

ひたるも、あはれ詮なき事かな、と思ふに、我さへ女を具足せん事も如何ぞ、と思ひしかば、飽かぬ名残をふり棄てよ、獨四國へ下りしが、心ざし未だ忘れざりければ、二十九日の夜打ち更けて、女を尋ねて行きけり。女出であひて、斜ならず悦びて、我が方に隠しおき、やう／＼にいたはり、父の入道に此の事知らせたりければ、忠信を一問なる所に呼びて申しけるは、「苟且に出でさせ給ひしよりこの方は、いづくにととも御行方を承らず候ひつるに、物ならぬ入道を頼みて、是までおはしましたる事こそ、嬉しく候へ」とて、そこにて年をぞ送らせけり。青陽の春も來て、嶽々の雪むら消え、裾野も青葉まじりになりたらば陸奥へ下らん、とぞ思ひける。かよりし程に、天に口なし人を以つていはせよ、と誰が披露するともなけれども、忠信が都にある由聞えければ、六波羅より探すべき由披露す。忠信是を聞きて、「我のゑに人に恥を見せじとて、」正月四日に京を出でんとしけるが、今日は口も忌む事有り、とて立たざりけり。五日は女に名残を惜まれでたらず、六日の曉は一定出でんとぞしける。すべて男の頼むまじきは女なり。昨日までは連理の契り比翼の語らひ淺からず、いかなる天魔の勸めにてや有りけん、夜の程に女心がはりをぞしたりける。忠信京を出でて後、東國の住人梶原と申す者在京したりけ

義經記 卷第六

一 忠信都へ忍び上る事

元三十一正月
元日、歲月
日の元なれ
ばいふ

扱も佐藤四郎兵衛は、十二月二十三日に都に歸りて、晝は片ほとりに忍び、夜は洛中に入り、判官の御行方を尋ねけり。されども、人まちくゝに申しければ、一定をしらず。或は吉野川に身を投げ給ひけるとも聞ゆる、或は北國にかゝりて陸奥へ下り給ひけるとも申し、聞きも定めざりければ、都にて日を送る。とかうする程に、十二月二十九日になりけり。一日片時も、心安く暮すべき方もなくて、年の内も今日ばかりなり。明日になれば、新玉の年立ち返る春の初にて、元三の儀式なども事よろしからず、何處に一夜をだにも明すべきとも覺えず。其の比忠信他事なく思ふ女一人、四條室町に、小柴の入道と申す者の女に、かやと申す女なり。判官都におはせし時より見初めて、淺からぬ心ざしにて有りければ、判官都を出で給ひし時も、津の國川尻まで慕ひて、いかならん舟の中、波の上までも、と慕ひしかども、判官の北の御方あまた、一船にのせ奉り給

け。今夜は思ふ事なし」とて、其の夜はそれにて夜をあかす。明くれば十二月廿三日なり。「さのみ山路は物憂し。いざや麓へ」と宣ひて、麓をさして下り、北の岡、しけみが谷といふ所までは出で給ひたりけるが、里近かりければ、賤の男賤の女も、軒をならべたり。「落人のならひは、鎧をきては叶ふまじ。我ら世にだにもあらば、鎧も心に任せぬべし。命にすぎたる物あらじ」とて、しけみが谷の古木の本に、鎧腹巻十六領ぬぎ捨て、方々にぞ落ち給ふ。「明年の正月の末、二月の初には、奥州へ下らんすれば、其の時かならず、一條今出川の邊にて行きあふべし」と仰せければ、承りて、おのく泣く泣く立ち別れ、あるひは木幡、おつがは、醍醐、山科へ行く人も有り、鞍馬の奥へ行くもあり、洛中に忍ぶ人も有り。判官は侍一人も具し給はず、雑色をも連れ給はず、しきたんと申す腹巻めし、太刀脇に挟み、十二月廿三日の夜のうち更けて、南都の勸修坊とくこの許へぞおはしける。

くりかた一
栗形歟、器
具の緒を貫
く所、半圓
形にして栗
に似たるよ
り云ふ

君の君にてわたらせ給はど、これに心ざしを、思ひまゐらせば、毛けよき鎧よろひ、骨強ほねつよき馬な
どを給てこそ、御恩ごおんのやうにも思ひまゐらせ候ふべきに、これを給て、然るべき御恩ごおんの
やうに思ひなし、悦よろこぶこそ悲しけれ」とて、鬼神きじんをあざむき妻子さいしをもかへり見ず、命いのちを
も塵芥ちりめくたとも思はぬ武士もゝさふども、みな鎧よろひの袖そでをぞ濡ぬしける、こころの中こそ悲しけれ。判官はくわんも
御涙おんなみだをながし給ふ。辨慶べんけいも頻しきりに涙なみだはこぼるれども、さらぬ體ていにもてなし、「此の殿原どのはらの様
に、人の參らせたる物を持ちてたべ、とて、泣かれぬものを泣かんとするは、をこの者に
てこそあれ。かひなきは力に及ばざる事なり。身を助け候はん許はかりに我もちたり。殿原どのはらも手
手に取りて持たぬこそ不覺ふかくなれ。ことならねども、是にもちて候ふ」とて、餅甘許もちひ はかりぞ取り
出しける。君もいしうしたり、と思召おぼしめしけるに、御前ごぜんにひざまづきて、左の脇ひだりわきの下より、
黒くろかりける物の大なるを取り出し、雪ゆきの上にぞ置きたりける。片岡かたおか、なになるらん、と
思ひて、さしよりて見れば、栗形打かほらけちたる小つゝみに、酒さけを入れて持ちたりけり。懷
より土器かはらけ二つ取り出し、一つをば君の御前ごぜんにさし置きて、三度參らせて、筒打つづうちふりて
申すやう、「飲手のみては多し。酒さけは筒つゝにてちひさし。思ふ程あらばこそ、少しづつも」とて飲
ませ、殘のこる酒さけをば、もちたる土器かはらけにて、さしうけさしうけ三ど飲みて、「雨あめもふれ風かぜも吹

たそがれ時
―黄昏
念なく―殘
念にも
相かまへた
る―其の事
に注意を拂
ひたる者
引合―鐵の
右脇にて引
き合する所
さんじんご
わう―山神
牛王歟

と、をり返し／＼舞うたれば、たれとはしらず衆徒の中より、「をこの奴にてあるぞや」とぞいひける。「おのれども、何ともいはいへ」とて、其の日は其處にてくらしけり。たそがれ時にもなりしかば、判官、侍どもに仰せけるは、「そも御嶽左衛門は、いしう心ざし有りて、參らせつる酒肴を念なく追ひちらされたるこそ、本意なけれ。誰か其の用意相かまへたる參らせよ。つかれ休めて、一先おちん」とぞ仰せける。「皆人は敵の近付き候ふ間、先にと急ぎ候ひつる程に、相構へたる者も候はず」と申しければ、「人々はたゞ後を期せぬぞとよ。義經は我が身ばかりは、構へて持ちたるぞ」とて、間おなじ様に立ち給ふぞと見えしに、いつの程にか取り給ひけん、たちばな餅を、甘ばかり檀紙につよみて、引合に取り出させ給ひけり。辨慶を召して「是一つづつ」と仰せければ、直垂の袖の上におきて、讓葉を折りて敷き、「一つをば一乗の佛に奉る。一つをば菩提の佛に奉る。一つをば道の神に奉る。一つをばさんじんごわうに」とて置きたりけり。餅も見れば十六あり。人も十六人、君の御前に一つさし置き、殘をば面々にぞ配りける。「今一つのこるに、佛の餅とて、四つ置きたるに取り具して、五つをば、それがしが徳分にせん」と申す。みな人々これを給て、手々に持ちてぞ泣きける。「あはれなりける世の習かな。



御説—仰

「是は、武藏坊といふをこの者めが所爲にてあるぞ。暫くるては、中々をこの者がまし。又水上を廻らんするは、日數をへてこそ廻らんすれ。いざや歸りて詮議せん」とぞ申しける。きたなし。ついでにはね入つて死なん、といふ者一人もなし。「尤も此の義につけや」とて、もとの跡へぞ歸りける。判官、是を御覽じて、片岡を召して仰せけるは、「吉野法師にあうて、いはんするやうは、義經が此の川を越えかねてありつるに、是まで送りこしたるこそ嬉しけれ」と云ひ聞かせよ。後の爲もこそあれ」と仰せければ、片岡、白木の弓に、大のかぶら取りてつがひ、谷ごしに一矢射かけて、「御説ぞく」と云ひかけけれども、聞えぬ様にしてぞ行きける。辨慶は濡れたる鎧きて、大きなるふし木にのほりて、大衆を呼びて申しけるは、「情ある大衆あらば、西塔に聞えたる武藏が亂拍子みよ」とぞ申しける。大衆是を聞き入るゝ者もあり、「片岡はやせや」と申しければ、まことや中差にて、弓の本をたゞいて、萬歳樂とぞはやしける。辨慶折ふし舞ひたりければ、大衆も行きかねて、是を見る。舞はおもしろくありけれども、笑事をぞ歌ひける。春は櫻の流るれば、吉野川とも名付けたり。秋は紅葉のながるれば、龍田川ともいひつべし。冬も末になりぬれば、法師も紅葉て流れたり。

こかい、
巨海

引きかづく
―竹を持つ
たまゝ轉倒
す

を思し召し出して、感じ給ひける。「歌を好みしきよちよくは、舟に乗りて翻へし、笛を
好みしほうちよは、竹に乗りてくつがへす。大國の穆王は、壁に上りて天にあらり、ちや
うはくばうは、浮木に乗りてこかいを渡る。義經は、竹馬に乗りて今の山川を渡る」とぞ
宣ひて、上の山にぞあがり給ふ。ある谷の洞に風少しのどけき所あり、「敵川を越えば、
下り矢さきに一矢いて、矢種つきば腹をきれ。彼奴ばら渡りえずは、嘲弄してかへせや」
とぞ仰せける、大衆程なく押しよせ、「かしこうぞ越え給ひたり。爰やこゆる、彼處やこ
ゆる」と口々にのゝしりけり。治部の法眼申しけるは、「判官なればとて、鬼神にても、
よもあらじ。越えたる所はあるらん」と向を見れば、靡きたる竹を見つけて、さればこ
そと思ひて、「是に取り付きこえんには、誰かこえざらん。よれや者ども」とぞ申しける。
鐵漿黒なる法師、腹巻に袖付けてきたるが、手鉾長刀脇に挟みて、三人手に手を取りく
みて、えい聲を出してぞはねたりける。竹の末に取り付きて、えいやと引きたりけれ
ば、武藏が、たゞ今本を切つてさしたる竹なれば、引きかづくとぞ見えし。岩波にたよ
きこめられて、二度とも見えず、底の水屑となりにけり。向には、上の山にて十六人、同
音にとつと笑ひ給へば、大衆あまり安からずして音もせず。ひたかのぜんじ申しけるは、

あけまぎ—
鎧の背後に
垂下せる組

けう—希
有、不思議
孔子のさば
れ—さばれ
は倒れの誤
なるべし孔
子の如き人
にも過失あ
りとの諺

やえいや」といふ聲ぞ聞えける。水は早く、岩波にたよきかけられ、たと流れに流れ行く。判官是を御覽じて、「あはや仕損じたるは」と仰せられて、熊手を取りなほし、川ばたに走りより來で、とほるあけまぎに引つかけ、「是見よや」と仰せられければ、伊勢の三郎つと寄りて、熊手の柄をむずと取る、判官さしのぞきて見給へば、鎧きて、人にすぐれたる大の法師を、熊手にかけて、中に提けたりければ、水たぶくとしてぞ引きあけける。けうの命生きて、御前に苦笑してぞ出でにける。判官是を御覽じて、餘りにくさに、「いかに口のきよたるには似ざりけり」と仰せられければ、「あやまちは常の事。孔子のさばれと申す事候はずや」と狂言をぞ申しける。皆人は、思ひくゝに落ち行けども、武藏坊は落ちもせず、一村ありける竹の中に分け入りて、三本おひたる竹の本に、物をいふ様にかきくどき、申しけるは、「竹も生ある物、我も生ある人間。竹は根ある物なれば、青陽の春も來らば、又子をもさしかへて見るべし。我等は、此度死しては二度歸らぬ習ひなれば、竹を切るぞ。我等が命にかはれ」とて、三本の竹を切り、本には雪をかけ、末をば水にかけてぞ出したりける。判官に追ひ付き參らせて、「あとを斯様にしたよめたる」と申しける。判官跡をかへりみ給へば、山川なればたぎりて落つるむかしの事

つらぬき—
鞣、皮にて
製し足には
く具

やうは、いかに」と云ひければ、判官是を聞き給ひて、「何事を申すぞ。辨慶」と問ひ給へば、
「根尾に鎧ぬぎて渡れと申し候ひし」と申せば、「和君がはからひに、平に脱がせよ」とぞ
仰せける。みな人は三十にも足らぬ健者どもなり。根尾は其の中に老體なり。五十六に
ぞ成りにける。「理をまけて、都にとどまれ」と度々仰せけれども、「君にてわたらせ給ひ
し程は、御恩にて妻子を助け、君又かくならせ給へば、我都にとどまりて、初めて人に
追從せん事なし」とて、思ひ切りてぞ是まで参りける。仰にしたがひて、鎧に具足をぬ
ぎ置き、かくても叶ふべしとも覺えねば、弓の弦をはづし集めて、一つに結び、端をむ
かひに投げこして、「其方へ引け、強くひかへよ。ちやうど取りつけ」とて、したのもろ
きふちを、水につけてぞ、引きこしける。辨慶ひとり残りて、判官の越え給ひつる所を
ばこさず、川上へ一段ばかり上りて、岩角にふり積みたる雪を、長刀の柄にて打ちらは
ひて、申しけるは、「是程の山川をこえかねて、あの竹に取り付き、がたりびしりとし給
ふこそ、見苦しけれ。そのき給へ。此の川さうなく跳ねこえて、見参に入らん」と申
しければ、判官これを聞き給ひて、「義經をへんしゆするぞ。目な見やりそ」と仰せられ
て、つらぬきの緒の解けたるを、結ばんとて、甲の鍔をかたぶけておはしける時、「えい

ものにて云
々―雜作な
かりし也

けんこ―必
定

る中に、殊に高くおひたる竹三本、末は一つに結ほられて、日比ふりたる雪に押されて、河中へ撓みかゝりたるが、竹の末には、環絡をさけたるに似たる垂氷ぞさがりける。判官も是を見給ひて、「義經、とても越えつべしとは覺えねども、いでや瀬ぶみして見ん。越しそんじて川へ入らば、誰もつゞきて入れよ」と仰せければ、「さ承り候ひぬ」とぞ申しける。判官其の日の装束は、赤地の錦の直垂に、くれなる末濃の鎧に、白星の甲の緒をしめ、金作りの太刀はき、大中黒の矢、かしら高に負ひなし、弓に熊手を取りそへ、弓手の脇にかい挟み、川のはたに歩みよりて、草摺からんで、鉦をかたぶけ、えい聲を出してはね給ふ。竹の末に、かばと飛び付きて、左右なくするりと渡り給ふ。草摺濡れたりけるを、さつくと打ちはらひ、「そなたより見つるよりは、物にてはなかりけり。續けや殿原」と仰をかうぶり、越すものは誰ぞ。片岡、伊勢、熊井、備前、鷲尾、常陸坊、雑色駿河次郎、下部に喜三太、是等を初として、十六人が、十四人は越えぬ。いま二人はむかひにあり。一人は根尾の十郎、一人は武藏坊なり。根尾こえんとする所に、武藏坊、射向の袖をひかへて申しけるは、「御邊の膝のふるひやうを見るに、けんこ叶ふまじ。鎧ぬぎて越せよや」と申しける。「皆人の着てこゆる鎧を、それがし一人脱ぐべき

紅蓮―血の
池地獄

節所―切所
と書くを可
とす、險阻
の地

ば、聞かぬよしにて、鍾をかたむけて、揉みにもうでぞ落ち行きける。爰に難所一つあり。吉野川の水上、白糸の瀧とぞ申しける。上を見れば、五丈許なる瀧の、糸を亂したるが如し。下を見れば、三丈れきくとある紅蓮の淵、水上はとほし、雪の滴瀝に水量まさりて、瀬々の岩間をたよく波、ほうらいをくづすが如し。此方もむかひも、水のおもて面は二丈ばかりなる磐石の、屏風を立てたるが如し。秋の末より冬の今まで、降りつむ雪は消えもせで、雪も氷もひとへに箔をのべたるが如し、武藏坊は人より先に、川のはたに行きて見ければ、いかにして、行くべきとも見えず。されども人をいためんとや思ひけん、又例の事なれば、「是程の山川を遅参し給ふか。こゝを越し給へや」とぞ申しける。判官宣ひけるは、「何として是れをば越すべきぞ。たゞ思ひ切つて腹切れや」とぞ宣ひける。辨慶申しけるは、「人をば知るべからず、武藏は」とて、川の端へよりけるが、左右眼をふさぎ祈誓申しける。「源氏をまもり給ふ八幡大菩薩は、いつの程に我が君をば、忘れ参らせ給ふぞ。安穩に守り納受し給へ」と申し、目を開き見たりければ、四五段ばかり下に、興ある節所あり。走りよりて見れば、兩方さし出でたる山、さきの如くに、水は深きたがりて落ちたるが、向を見れば、岸の崩れたる所に、竹の一叢生ひた

案―思慮

見給ひて、「奇異の事を覺えける物かな。何處にて是をば習ひけるぞ」と仰せられければ、「櫻本の僧正のもとに候ひし時、法相三論の遺教の中に書きて候ふ」と申しけり。「あはれ文武二道の碩學や」とぞ讀めさせ給ふ。武藏坊、「我より外に、心も剛に、案もふかき者あらじ」と自稱して、心しづかに落ちけるに、大衆程なくぞ續きける。其の日の先陣は治部の法眼ぞしりたりける。衆徒に逢うて申しけるは、「こゝに、不思議のあるはいかに。今まで谷へ下りてある跡の、今はまた、谷よりこなたへ来る。いかど」と申しければ、後陣にいわう禪師といふ者、走りよりて是れを見て、「さること有らん。九郎判官と申すは、鞍馬そだちの人なり。文武二道にこえたり。つきそふ郎等、一人當千ならぬはなし。其の中に法師二人あり。一人は園城寺の法師に、常陸坊海尊とて、儒學者なり。一人は櫻本の僧正の弟子、武藏坊と申すは、異朝我が朝の合戦の次第を、めい／＼に存じたる者にてある間、かうふ山の北の腰にて、一つの象に責め立てられて、履を逆様にはきおちたる、はらない國の帝の先例をひきたる事も有らん。すきな有らせそ。ただ追ひかけよや」と申しけり。矢比になるまでは音もせで、近付きて同音に鬨をどつと作りければ、十六人一同におどろく所に、判官「もとよりいふ事を聞かで」と宣ひけれ

踏みしだき
し 踏みちら

朕が恩を忘るゝな、と宣旨をふくめて、敵陣へはなち給ふ。大象いかりをなして、悪象なれば、天に向ひて一聲吠えければ、大なるほら貝を、千揃へて吹くが如し。其の聲骨髄にとほり、譬へがたし。左の足を出して、其方をふみければ、一度に五十人の武者をふみ殺す。七日七夜の合戦に、五十一萬騎みな討たれぬ。供奉の公卿侍三人、上下十騎に討ちなされ、かうふ山の北のこしへ、逃げこもり給ふ。比は神無月廿日あまりの事なれば、麓に紅葉ちりしきて、むらく雪のあけほのを踏みしだきて落ち行く。國王御身を助けんためにや、履をさかさまに穿きておち給ふ。さきは後、あとは先にぞなりにける。追手をみて、是はいわうの賢王にてましませば、いかなる計略にてやあるらん。此の山は虎ふす山なれば、夕日西にかたぶきては、我等が命もはかり難し、とて麓の里にぞ歸りける。國王御命をたすかり給ひて、我が國へ歸りて、五十六萬騎の勢を揃へて、今度の合戦に打ち勝つて、悦かさね給ひしも、履をさかさまにはき給ひしいはれなり。異朝の賢王もかくこそましませしか。君は、本朝の武士の大將軍、清和天皇の十代の御末になり給へり。敵驕らば我おごらざれ、敵おごらずば、我おこれ、と申す本文あり。人をば知るべからず、辨慶においては」とて、眞先に穿いてぞ進みける。判官是を

善惡—善惡
は兎も角も

栗散國—小
國、佛經の
語

云ふ事を申しつるに、御笑ひ候ひつる」と申せば、「まことに逆櫓と云ふ事も知らず、まして履をさかさまにはく、といふ事は、今こそ初めてきけ。さらば善惡、はきて末代の瑕瑾にもなるまじくば穿くべし」とぞ宜ひける。辨慶「さらば語り申さん」とて、十六の大國、五百の中國、無量の栗散國までの、代々の御門の次第々々、其の合戦の様をかたり居たれば、敵は矢比に近付けども、眞國に立ち並びて、しづく」とぞ語らせて聞き給ふ。「十六の大國の内に、西天竺と覺えて候ふ。しらない國はらない國と申す國あり。彼國の境に、かうふ山とまうす山あり。麓に千里の廣野あり。此のかうふ山は、寶の山にて、たやすく人をも入れざりしを、はらない國の王、此の山を取らん、と思し召して、五十一萬騎の軍兵を具して、しらない國へ打ち入り給ふ。彼の國の王も、賢王にて渡らせ給ひける間、かねて是を知り給ふ事あり。かうふ山の北の腰に、せんのほらと云ふ所あり。是に千頭の象あり。中に一の大象あり。國王此の象を取りて飼ひ給ふに、一日に四百石を食む。公卿詮議有りて、此の象をかひ給ひては、何の益かましますさん、と申されければ、御門の仰せには、歩合戦にあふ事なからんや、と宣旨を下し給ひしに、思ひの外に此の軍出で來にければ、武士を向けられず、此の象を召して、御口を象の耳にあてよ、

爪木―薪、
爪先に折り
取るよりの
稱

櫃かきすゑて、酒に望をなす人もあり、飯をしたよめんとする人もあり、思ふ様に取り
ちらして、行はんとし給ふ所に、東の杉山の方に、人の聲幽に聞えけるを、怪しとや思
し召されけん、「賣炭の翁も通はねば、炭焼とも覺えず、峯の細道遠ければ、賤が爪木の
斧の音とも思はれず」とうしろをきと見給へば、一昨日中院の谷にて、四郎兵衛に討ち
洩されたる吉野法師、いまだ憤り忘れずして、甲冑をよろひ、百五十人ばかりぞ出で
来る。「すはや敵よ」と宣ひければ、骸の上の恥をもかへり見ず、皆散々にぞなりにける。
常陸坊は、人よりさきに落ちにけり。跡を顧みければ、武藏坊も君も、いまだもとの所
に働かずして居給ふ。「我等が是まで落つるに、此の人々とどまり給ふは、いかなる事を
か思し召し候ふやらん」と申しも果てざりけるに、二合の長櫃を、一合づつ取りて、東
の磐石へ向けて、投げおとし、つみたる菓子をは、雪の底に、心しづかにほり埋みてぞ
立ち給ひける。辨慶は、遙のさきに延びたる常陸坊に追ひつき、各あとを見るに、曇り
なき鏡を見るが如し。「たれも命をしくば、履をさかさまにはきておち給へや」とぞ申し
ける。判官是を聞き給ひて、「武藏坊は、奇異の事を常に申すぞとよ。いか様に履をば、
逆様にはくべきぞ」と仰せければ、武藏坊申しけるは、「扱こそ君は、梶原が舟に逆櫓と

六 吉野法師判官を追つ掛け奉る事

扱きも義經よしつね、十二月廿三日に、くうしやうのしやう、しいの嶺みね、ゆづりはの峠たうけといふ難所なんじよを越こえて、こうしうが谷たににかより、櫻谷さくらやと云ふ所にぞおはしける。雪ゆきふり埋うづみ、凍氷つら氷るて、一方ひとかたならぬ山路やまぢなれば、みな人疲つかれにのぞみて、太刀たちを枕まくらにしなどして、伏ふしたりけり。判官はんくわん心許こころもとなく思おもひ召めして、武藏坊むさしぼうを召めして仰おほせられけるは、「抑此おちこの山の麓ふもとに義經よしつねに頼たのまれぬべき者やある。酒さけを乞こひて、疲つかれを休やすめて、一先ひとまづおちばや」とぞ仰おほせける。辨べん慶けい申しけるは、「誰たれか心易こころやすく頼たのまれ参まゐらせ候たうはんとも覺おぼえず候たうふ。但此ただしの山の麓ふもとに、彌勒みらく堂だうの立たせおはしまし候たうふ。聖武天皇しやうむてんわうの御建立ごこんりふの所ところにて、南都なんどの勸修坊くわんじゆぼうの、別當べつたうにてわたらせ給たまひ候たうへば、其だいの代官だいくわんに、御嶽左衛門みたけさゑもんと申し候たうふ者、則すなはち別當べつたうにて候たうふ」と申しければ、「頼たのむ方は有ありけるござんなれ」と仰おほせられて、御文ごぶんあそばして武藏坊むさしぼうにたぶ。麓ふもとに下くだりて、左衛門さゑもんに此このよし云いひければ、「程ほど近くおはしましけるに、今まで仰蒙おほせかうらざりけるよ」とて、身みに親したしき者もの五い六ろく人にんよびて、様々さまざまの菓子くわしつみ、酒飯しゆはんともに、長櫃ながびつ二合にがふ、櫻谷さくらやへぞ参まゐらせけり。「是程心こころやすかりける事ことを」と仰おほせられて、十六人じふにの中に、二合にがふの長

かう—剛な
るべし

なりては力及ばず。八幡大菩薩、示現を垂れ給へ、と祈誓して、えい聲を出して跳ねたりければ、うしろの山へ、左右なくとび付きて、上の山にのほり、松の一むら有りける所に鎧ぬぎ、甲の鉢を枕にして、敵の慌てふためく有様を見てぞ居たりける。大衆申しけるは、「あら恐しや、判官殿かと思ひつれば、佐藤四郎兵衛にてありけるもの。たばかれ、多くの人を討たせつるこそ安からね。大將軍ならばこそ、首を取つて鎌倉殿の見参にも入れめ。にくし、たゞ置きて、焼き殺せや」とぞいひける。火も消え、焰もしづまりて後、「やけたる首をなりとも、御坊の見参に入れよ」とて、手々にさがせども、死骸も知れざりければ、焼けたる首もなし。扱こそ大衆は、「人の心は、かうにても、かうなるべき者なり。死しての後までも、かばねの上の恥を見えじ、とて、塵灰に焼け失せたるらめ」と申して、寺中にぞ歸りける。忠信其の夜は、藏王權現の御前にて夜をあかし、鎧をば權現の御前にさし置きて、廿一日の明ほのに、御嶽を出でて、廿三日の暮ほどに、危き命いきて、二たび都へぞ入りにける。

うすまいて居たり。山科やましなの法眼ほふけん申しけるは、「落人おちうごを寺中じちゆうに入れて、夜よを明あかさん事も心得ず。我等世にだにもあらば、是程の家一日に一つづつも作りけん。たゞ焼やき出して討ち殺せ」とこそ申しける。忠信ただのぶは内にて是を聞きて、敵てきに焼やき殺ころされて、有りといはれんするは口惜くししかるべし、手づから焼死やけしにけるといはれん、と思ひて、屏風びやうぶ一雙さうに火を付けて、天井てんじやうへ投げあけたり。大衆たいしゆ是を見て、「あはや内より火を出したるぞ。出で給はん所を射ころせ」とて、矢をはけ太刀長刀たちながなたをかまへて待ちかけたり。焼やきあけて忠信ただのぶは、廣縁えんに立ちて申しけるは、「大衆たいしゆども萬事ばんじをしづめて是を聞け、まことに判官殿はんぐわんどのと思ひ奉るかや。君はいつか落ちさせ給ひけん、是は九郎判官きゆうぐわんにては渡らせ給はぬぞ。御内に佐藤四郎兵衛藤原の忠信ただのぶといふ者なり。我が打ち取り、人の討ち取りたるなどと、後日ごにちに爭ふべからず。たゞ今腹はらを切るぞ。くびを取りて、鎌倉殿ゆかんどのの見參けんさんに入れよや」とて、刀かたなをぬき、左の脇わきにさし貫つらぬく様やうにして、刀かたなをば鞘きやにさして、内へ飛んで歸り、走り入り、内殿ないでんのひきばし取つて、天井てんじやうに上りて見ければ、東のとびのをは、未だ焼やけざりけり。せき板いたをがばとふみはなして、飛んで出で見ければ、山を切りて崖がけづく作りにしたる樓ろうなれば、山と坊はうとの間一町あまりには過ぎざりけり。是程の所を、はね損きんじて、死する程の業ごんに

とびのを一
鷄尾、屋の
棟の端に付
くる飾

方丈―寺の
長老の居所

提子―銚子

けるが、左の方に大なる家有り。是は山科の法眼と申す者の坊なり。さし入りて見れば、方丈には人一人もなし。厨の傍に、法師二人、兒三人居たり。様々の菓子どもつみて、瓶子の口包ませ、立てたりけり。四郎兵衛是を見て、「是こそよき所なれ。何ともあれ、おのれらが酒もりの銚子は外れんすらん」と、太刀打ちかたけて縁の板を荒らかにふみて、内につと入る。兒も法師もいかでか驚かで有るべき。腰やぬけたりけん、取る物も取りあへず、高這にして三方へ逃げちる。忠信は思ふ座敷にむずと居なほり、菓子ども引きよせて、思ふ様にしたよめて、疲を休めて居ける所に、大衆は聲々にこそをめきけれ。忠信是を聞きて、提子盃とりまはらん程に、時刻うつしては叶ふまじ、と思ひ、酒に長じたる男にて、瓶子のくびに手を入れて、かたはらを引きこほして、うち飲んで、甲は膝の上にさし置き、少しも騒がず、火にて額をあぶりけるが、重き鎧は着たり、雪をば深くこぎたり。軍疲に酒は飲みつ、火にはあたる、敵のよせて喚くをば夢にも知らず、眠り居たりけり。大衆は爰に押しよせて、「九郎判官是に御わたり候ふか。出でさせ給へ」と云ひける。聲におどろき、甲を着火うち消し、「何に憚るぞや。心ざしの有る者は、こなたへ参れや」と申しけれども、命を二つ持ちたらばこそ、左右なくも入らめ。たゞ外に

ばし休やすみて、おさへて首くびをかき落し、太刀たちのさきにさし貫つらぬきて、中院ちゅういんの峯みねに上りて、大衆たいしゆの聲こゑを以て、「大衆たいしゆの中に此こゝの首見くび知りたる者や有る。音おとに聞えたる覺範かくはんが首くびをば、義經よしつねが取つたるぞ。門弟もんていあらば取つて孝養けうやうせよ。取らせん」とて、雪ゆきの中へぞなけ捨すてける。大衆たいしゆ是を見て、「覺範かくはんさへも叶かなはず、まして我らさこそあらんず。いざや鐘かねに歸りて、後ご日の詮議せんぎにせん」と申しければ、「きたなし、共に死なん」と申す者もなく、「此議このぎに同どうず」とぞ申して、大衆は鐘かねに歸りければ、忠信たけのぶひとり吉野すに捨てられて、東西とうざいを聞きければ、甲斐かひなき命いのち生きて「我を助けよ」と言ふ者も有り、空むなしきやからも有り。忠信たけのぶ等共を見けれども、一人も息の通ふ者なし。比こゝろは廿日の事なれば、曉あかつきかけて出づる月、宵よひはいまだ闇くらかりけり。忠信たけのぶは必ず死なれざらん命いのちを、死なんとせんも詮せんなし。大衆たいしゆと寺中じちゆうの方へ行かん、とぞ思ひける。甲かをばぬいて高紐たかひもにかけ、亂みだしたる髪かみを取りあけ、血ちの付きたる太刀たち拭ぬぐひ打ちかつぎ、大衆たいしゆよりさきに、寺中じちゆうの方へぞ行きける。大衆たいしゆを見て、聲こゑ々に喚をきける。「寺中じちゆうの者どもは聞かざるかや。九郎判官殿はうぐわんどのは、山の軍いくさにまけ給ひて、寺中じちゆうへ落ち給ふぞ。それ遁にがし奉るな」とぞをめきける。風は吹く、雪は降る、人々是を聞き付けず。忠信たけのぶは大門だいもんにさし入りて、御在所ございしょの方をふし拜をがみ、南大門みなみだいもんをまつ下くだりに行き

弓手も妻手
も―左も右
も

分
なから―半

さしのぞきて見れば、下は四十丈許なる磐石なり。是ぞ龍返しとて、人も向はぬ難所なり。弓手も妻手も、足のたてどもなき深き谷の、面を向くべきやうもなし。敵は後に雲霞の如くに續きたり。爰にて斬られたらば、あへなく討たれたるとぞいはれんずる。かしこにて死したらば、自害したりといはん、と思ひて、草摺つかんで、磐石に向ひて、えい聲を出してはねおりけり。二丈ばかり飛び落ちて、岩のはざまに足ふみ直し、甲の鏝おしのけて見れば、覺範も谷をのぞきてぞ立ちたりけり。「正なく見えさせ給ふぞや。返し合せ給へや。君の御供とだに思ひ参らせ候はど、西は西國の博多の津、北はほくさん佐渡の島、東は蝦夷の千島までも、御供申さんずるぞ」と、申しも果てず、えいごゑを出して、跳ねたりけり。如何したりけん、運のきはめの悲しさは、草摺をふし木の角に引きかけて、まつ逆様に、どうどころび、忠信が打物ひつさけて待つ所へ、のさくと轉びてぞ來りける。起きあがる所を、以つて開いて丁どうつ。太刀は聞ゆる寶物なり、腕は強かりけり。甲の眞向はたと打ちわり、しや面をなから許ぞ切り付けよる。太刀を引けばかばとふす。起きん／＼としけれども、たゞ弱りに弱りて、膝をおさへてたゞ一聲、うんと許を最期にて、四十一にてぞ死しにける。思ふ所に切りふせて、忠信は、し

末の世の云々―末代までも我が敵と思はん

もうけ太刀にぞ成りにける。大衆是を見て、「覺範こそうけ太刀に見ゆれ。いざや下り合ひて、助けん」といひければ、「尤もさ有るべし」とて、おりあふ大衆は誰々ぞ。いわう禪師、常陸の禪師、主殿のすけ、やくいのかみ、かへり坂の小ひじり、治部の法眼、山科の法眼とて、究竟のもの七人、喚きてかよる。忠信是を見て、夢を見る様に思ふ處に、覺範叱つて申しけるは、「こはいかに衆徒、狼藉に見え候ふぞや。大將軍の軍をば、放ちあはせてこそ物を見れ。落ち合ひては、末代の瑕疵にいはんずる爲かや。末の世の敵と思はんずるぞや」と申す間、「おち合ひたりとても、嬉しともいはざらん物のゑに、たゞ放ち合せて、物を見よ」とて、一人もたちあはず。忠信は、にくし、彼奴一ひきひきて見ばや、とぞ思ひける。持ちたる太刀を打ち振りて、甲の鉢の上にがらりと投げかけて、すこしひるむ所を、はきぞへの太刀を抜きて、走りかよりて丁どうつ。内甲へ太刀の鋒先を入れたりけり。あはやと見ゆるところを、傾けて丁どつく。鉢つけを、したゝかにつかれけれども、頸には仔細なし。忠信は三四段ばかり、ひいて行く。大のふし木の有り、たまらずゆらりとぞ越えにける。覺範おひかけて、むすど打つ。打ちはづして、ふし木に太刀を打ちつらぬきて、抜かんくとする隙に、忠信、三四段許するくくと飛びて、

―雁股は二指を廣げたる如き形せる矢根

かなぐりすて―放擲して

に引きて待つ所に、覺範一の矢を射そんじて、念なく思ひなして、二の矢を取つてつがひ、そごろ引く所を、よつ引いてひやうど射る。覺範が弓の鳥うちを、はたと射られて、弓手へ投げ捨て、腰なる簾かなぐりすて、「我も人も運のきはめは、前業限り有り。さらば見參せん」とて、三尺九寸の太刀抜き、稻妻の様にふりて、眞向にあてよ、喚きてかよる。四郎兵衛も思ひまうけたる事なれば、弓と簾をなけ捨てよ、三尺五寸のつどら井と言ふ太刀ぬきて、待ちかけたり。覺範は象の牙を磨くが如く、喚いてかよる。四郎兵衛も獅子の忿をなして、待ちかけたり。近付くかとすれば、はやりきたる太刀の、左手も右手もきらはす、薙打にさんくんに打ちてかよる。忠信も、入りちがへてぞ切り合ひける。打ち合する音のはためく事、御神樂の銅拍子を打つが如し。敵は、太刀を以つて開いたる脇の下よりつとよりて、荒鷹の鳥やをくどらんとする様に、鏑をかたぶけ亂れ入りてぞ切りたりける。大の法師攻め立てられて、額に汗をながし、今はかうとぞ思ひける。忠信は、酒飯をもしたとめずして、けふ三日に成りければ、打つ太刀も弱りける。大衆は是を見て、「よしや覺範勝にのれ。源氏はうけ太刀に見え給ふぞ。すきなあらせそ」と、力をそへてぞ切らせける。しばしは進みて切りけるが、いかどしたりけん、是

存ぜうー存
ぜん

沓卷一鏃の
本の糸にて
巻きたる所

小がりまた

名聞と存ぜうするに、御手はず給はりては、後世のうつたへところ、存じ候はんずれ」と申して、四人張に十四束を取つてはけ、かなぐり引きによつ引きて、ひやうど放つ。忠信、弓杖つきて立ちけるを、弓手の太刀打をば射て射こし、うしろの椎の木に、沓卷せめて立つ。四郎兵衛是を見て、はしたなく射たる物かな。保元の合戦に、鎮西の八郎御曹子の、七人張に十五束をいて、遊ばしたりしに、鏃きたる者を、射ぬきたまひしが、それは上古の事。末代にはいかでか、是程の弓勢有るべしとも覺えず。一の矢射損じて、二の矢をば、たゞ中を射んと思ふらん。胸中射られて叶はじと思ひければ、矢り矢をさしはけて、あてゝはさしゆるしく、二三度しけるが、矢比は少し遠し、風は谷より吹きあぐる、思ふ所へはよも行かじ。たとへ中てたりとも、大力にて有るなれば、鏃の下に、札よき腹巻などや着たるらん。裏かゝせずしては、弓箭の疵に成りなん。主を射ば、い損ずる事も有るべし。弓を射ばや、とぞ思ひける。大唐の養由は、柳の葉を百歩に立てゝ、百矢を射けるに、百矢あたりけるとかや。我が朝の忠信は、こうかいを五段に立てゝ射はづさず。まして弓手のものをや。矢比はすこし遠けれども、何しに射はづすべき、とぞ思ひけるが、はけたる矢をば雪の上に立て、小がりまたをさしはけて、小引

さかづらゐ
びら―獸皮
を包みて藤
にて巻きた
る古製の籠

あざむきて
―侮りて

横川―叡山
三塔の一

はきたりける。さかつらゐびら、矢くばり尋常なるに、塗篋に黒羽を以つてはぎたる矢の、ふとさは笛竹などのやうなるが、篋巻よりかみ、十四五束にたぶくと切りたるを、つみさしに指して頭高におひなし、糸包のゆみの九尺許有りける四人張を杖につき、ふしきに上りて申しけるは、「抑このたび衆徒のいくさを見候ふに、まことに臆地もなくしなされて候ふものかな。源氏を小勢なればとて、あざむきて仕損ぜられ候ふかや。九郎判官と申すは、世に超えたる大將軍なり。召し使はるゝ者、一人當千ならぬはなし。源氏の郎等ども、皆うたれ候ひぬ。身方の衆徒、大勢死に候ひぬ。源氏の大將軍と、大衆の大將軍と、運比べの軍仕り候はん。かく申すは何者ぞや、と思し召す。紀伊の國の住人、鈴木黨の中に、さる者有りとばかり聞こし召してもや候はん。以前に候ひつる、川づらの法眼と申す、不覺人には似候ふまじ。幼少の時よりして、腹悪しきえせ者の名をえ候うて、紀伊の國を追ひ出だされて、奈良の都、東大寺に候ひし、惡僧たつる曲者に、東大寺も追ひ出されて、横川と申す所に候ひし。それも寺中を追ひ出だされて、川づらの法眼と申す者を頼みて、此の二年こそ吉野には候へ。さればとて横川より出で來り候ふとて、其の異名を横川の前司覺範と申すものにて候ふが、中差參らせて、現世の

射むけの袖
―鎧の左袖

えせ方人―
よくもなき
味方

黒革を云々
―大荒目の
鎧のこと

弟ていとうすまいたらんずる隙すきを守り、さんぐに射はらひて、身方みかたの矢だねつきば、打物うちものの鞘さやをはづし、亂みだれ入りて討死うちじにせよ」と、いひも果はてざりけるに、大衆たいしゆでう所々にたよすみて居たり。「あはれ間隙ひまや、いざやいくさせん」とて、射むけの袖を楯たてとして、さんざんにこそ射たりけれ。暫しばらく有りて、後うしろへさつと退のきて見れば、六人の郎等ろうとうも、四人は討たれて二人になる。二人も思ひ切りたる事なれば、忠信たけのぶを射させじとや思ひけん、矢面やおもてに立ちてぞ防ふせぎける。一人はいはう禪師ぜんじが射ける矢に、首くびの骨ほねを射られて死ぬ。一人は治部ちぶの法眼ほふけんがいける矢に、脇わきつほ射られて失うせにけり。六人の郎等ろうとう皆討たれば、忠信たけのぶ一人になりて、「中々なか／＼えせ方人かたうぢありつるは、足あしにまぎれて惡わるかりつるに」と言ひて、簾れんをさぐり見ければ、尖矢さがりや一つ、かりまた一つぞ、射のこして有りける。「あはれよからん敵かたきの來きれかし。尋常じんじやうなる矢一つ射て、腹切はらきらん」とぞ思ひける。川かはつらの法眼ほふけんは、其の日の矢や合あはせに仕損しそんじて、何の用にもあはせで、其の門弟もんてい三十人許はかり、まばらに渦うづまいて立たちたるうしろより、其のたけ六尺許はかりなる法師ほうしの、きはめて色黒いろくろかりけるが、装束しやうそくも眞黒まつくろにぞしたりける。襦かちんの直垂じちたれに、黒革くろがひを二寸に切つて、一寸はたよみて織おつしたる鎧よろひに、五枚甲まいがひのためしたるを、猪頭ぶくびに著きなして、三尺九寸有りけるこくしつの太刀たちに、熊くまの皮かわの後鞘しりぞや入れてぞ

手楯―手に
持つ楯

きたる惡僧の、弓手の小腕を、楯の板をそへて射きり、雁股は手楯に立つ、矢の下にが
ばとぞ射たふしたる。大衆大きにあきれたる所に、忠信弓のもとをたよいて喚くやう、
「よしや者ども、勝にのりて、大手は進め。からめ手はめぐれや。伊勢の三郎、熊井
太郎、鷲尾、備前はなきか。片岡の八郎よ、西塔の武藏坊はなきか。しやつ原逃すな」
などと、影もなき人々を呼ばはり、喚きければ、川くらの法眼是を聞きて、「まことや判
官の御内には、是等こそ手にもたまらぬ者どもなれ。矢ごろに近付きては叶ふまじ」と
て、三方へさつとぞ散りにけり。是をものに譬ふれば、龍田初瀬のもみぢ葉の、嵐に散
るに異ならず。敵追ひちらして楯取りてうち被ぎ、身方の陣へつきむかへて、七人は手
楯のかげに並み居て、敵に矢をぞ盡させける。大衆は手楯を取られ、安からぬ事に思ひ、
精兵をすぐりて、矢面に立ち、さんぐくに射る。弓の弦の音、杉山にひゞくことおびた
どし。楯の面に矢の當る事、板屋の上に降る霰、砂子をちらす如くなり。半時ばかり射
けれども矢を射ざりけり。六人のものども思ひ切りたる事なれば、「いつの爲に命を惜む
べき。いざや軍せん」とぞ申しける。四郎兵衛、是を聞きて申しけるは、「たどおきて矢
種を竭させよ。吉野法師は今日こそ軍の初なるらん。やがて矢もなき弓を持ち、その門

おしつけ—
鎧の背の上
部にある板

るな、慥に聞け。吉野のこぼし法師原」とぞいひける。川くらのほふけん法眼、是を聞きて、賤しけ
にいはいれたりと思ひて、惡所あくしよもきらはず、谷たにごしに喚をめきてぞかよる。忠信たのぶ是を見て、六
人の者どもに逢ひて申しけるは、「是等を近付ちかづけては惡しかるべし。御邊達ごへんたちは、是これにて敵
の間答もんたふをせよ。それがしは、中差なかざし二三に弓持ゆみもつて、細谷川ほそたにがはの水上みなかみを渡りて、敵てきのうし
ろより狙ねらひより、鎬かぶら一つぞかぎりにてあらん、楯たてついて居たる惡僧あくそうめが、首くびの骨ほねかお
しつけかを一矢射て、残る奴輩やつはらおひちらし、楯取たてつて打ちかつぎ、中院ちゅうゐんの嶺みねに上りて、
敵てきに矢を射盡つくさせ、身方みかたも矢種やだねのつきば、小太刀こたちをぬき、大勢たいぜいの中へ走り入りて、切死きりじに
に死ねや」とぞ申しける。大將軍がよかりければ、付きそふ若黨わかだうも、一人として惡わるきは
なし。残のこりの者ども申しけるは、一敵てきは大勢たいぜいにて候ふに仕損しそんじ給ふなよ」と申しければ、
「おいて物ものを見よ」とて、中差なかざしかぶら矢一つおつ取り添そへて、弓杖ゆんづゑつき、一ばんの谷たにを
走りあがりて、細谷川ほそたにがはの水上みなかみをわたりて、敵てきのうしろの小暗こくらき所より、ねらひよりて見
れば、枝えだは夜叉やしやの頭かしらの如くなるふし木あり。つと上りて見れば、弓手ゆんでにあひつけて、矢
先に射よけにぞ見えたりけり。三人張はりに十三束そくみつ三ぶせ取つてはけ、思ふさまに引きつ
め、鎬かぶらもとへからりと引つかけて、暫しかためてひやうど射る。末強すゑつよに遠鳴さきなりして、楯たてつ

寄足、進撃
石うち―驚
の尾の下に
重なる羽

出で立ちたり。萌黄の直垂に、紫糸の鎧きて、三枚甲の緒をしめて、じんせい作りの太刀はき、石うちの征矢の廿四さしたるを、頭高におひなして、二所籐の弓の真中取りて、我に劣らぬ悪僧五六人前後に歩ませて、まつさきに見えたる法師は、四十ばかりに見えけるが、褐の直垂に、黒革絨の腹巻、黒漆の太刀をはき、椎の木の四枚楯つかせ、矢比にぞ寄せたりける。川くらの法眼、楯のおもてに進み出でて、大音あけて申しけるは「抑此の山には、鎌倉殿の御弟判官殿の、渡らせ給ひ候ふ由承りて、吉野の執行こそまかり向ひ候へ。わたくしらは何の遺恨候はねば、一先落ちさせ給ふべく候ふか。又討死あそばし候はんか。御前に誰がしか御渡り候ふ。よき様に申され候へや」と、さかくしけに申したりければ、四郎兵衛是を聞きて、「あら事も愚や、清和天皇の御末、九郎判官殿の御渡り候ふ、とは今まで御邊達は知らざりけるか。日來よしみ有るは、訪らひ参らせたらんは、何の苦しきぞ。人の讒言によりて、鎌倉殿御中當時不和におはしますとも、無實なれば、などか思し召し直し給はざらん。あはれ末の大事な。仔細を向うて聞け、と言ふ御使何者とか思ふらん。鎌足の内大臣の御末、淡海公の後胤、佐藤左衛門のりたかには孫、信夫の庄司が二男、四郎兵衛の尉、藤原の忠信と言ふ者なり。後に論ず

延びさせ—
逃げ

あをほろ鏑
—ほろは鳥
の兩翼の下
に連なる羽
その青色な
るにて作さ
たる鏑矢

はちばみ—
蜂食、蜂を
好み食ふ一
種の鷹

川くら—後
には川つら
とあり何處
も原本の儘
よぜあし—

に延びさせたまふらんと思ひ、忠信は三滋目結の直垂に、緋緘の鎧、白星の甲の緒をしめ、淡海公より傳はりたる、つどら井といふ太刀、三尺五寸有りけるを佩き、判官より給はりたる、金作りの太刀を佩き添へ、にし大中黒の、廿四指したる上矢には、あをほろ鏑の目より、下六寸許有るに、大の雁股すけて、佐藤の家に傳へてさす事なれば、はちばみの羽を以つて作いだる、ひとつ中差を、いづれの矢よりも、一寸はずを出して指したりけるを、頭高におひなし、ふし木の弓のほこ短く、射よけなるを持ち、手勢七人、中院の東谷にとどまりて、雪の山を高くつきて、讓葉櫛葉をさんぐに切りさして、前には大木を五六本楯に取りて、麓の大衆二三百を、今や今やとぞ待ちたりけるが、されども敵は寄せざりけり。かくて日を暮すべき様もなし。「いざや追ひつき参らせて、判官の御供申さん」と、陣をさりて二町許尋ね行きけれども、風烈しくて、雪ふりければ、其の跡も皆白妙になりにつければ、力およばず前の所へ歸りにけり。酉の時ばかりに、大衆三百人ばかり、谷を隔てゝおしよせて、同音に関をぞ作りける。七人も向の杉山の中より、幽に関を合せけり。さてこそ、敵爰に有りとは知られけれ。其の日は執行の代官に、川くら法師と申して、惡僧有り。よぜあしの先陣をぞしたりける。法師なれども、尋常に

りて、いかばかり嘆き候はんずらん。それこそ罪深く覺えて候へ。君の御下り候うて、御心やすく、渡らせおはしまし候はど、次信忠信が孝養は候はずとも、母一人、不便の仰をこそ預り度候へ」と、申しも果てず、袖を顔におしあてゝ泣きければ、判官も涙を流し給ふ。十六人の人々も、皆鎧の袖をぞ濡しける。「さて一人留まるか」と、仰せられければ、「奥州より連れ候ひし若黨、五十餘人候ひしが、或は死し、或は故郷に返し候ひぬ。今五六人候ふこそ死なんと申すけに候へ。」「扱義經が者は、留まらぬか」と仰せられければ、「備前、鷲尾こそ、とどまらんと申し候へども、君をみつぎ參らせ給へ、とて留め申さず。御内の雑色二人も、何事もあらば一所にて候ふと申し候ふ間、とどまりけに候ふ」と申しければ、判官聞こし召して、「彼等が心こそ神妙なれ」とぞ仰せける。

五 忠信吉野山の合戦の事

それ師の命に代りしは、ないこうちせうの弟子、せうくう阿闍梨。夫の命にかはりしは、とうふがぜんぢになりけり。今命を捨て身を捨てゝ、主の命に代り、名を後代に残すべき事、源氏の郎等に如くはなし。上古は知らず、末代にためし有りがたし。義經今は遙

血をあえし
―あやすに
同じ、注ぐ
ことにて恥
しむる意

なりて、我許物を思ふ、子共に縁のなき身なりけり。信夫の庄司に過ぎわかれ、たまたま近付きて、不便にあたられし、伊達の娘にも過ぎ別れ、一方ならぬ歎なれども、和殿ばらを成人させて、一所にこそなけれども、國のうちにありと思へば、頼もしくこそ思ひつるに、秀衡何と思し召し候ふやらん、二人の子どもを、皆御供せさせ給へば、一旦の恨はさることなれども、子どもを成人せさせて、人数に思はれ奉るこそ嬉しけれ。隙なく合戦に逢ふとも、臆病の振舞して、父のかばねに血をあえし給ふなよ。高名して、四國西國の果におはすとも、一年二年に、一度も命あらん程は、下りて見もし見えられよ。一人とどまりて、一人たえたるだに悲しきに、二人ながら遙々と別れては、いかでせん、とて、聲も惜まず泣き候ひしを振り捨て、さ承り候ふとばかり申して、打ち出で候ふよりこのかた、三四年終に音信も仕らず。去年の春の比、わざと人を下して、次信討たれ候ひぬ、と告げて候ひしかば、身もたえなんと悲み候ひけるが、次信が事はさて力及ばず。明年の春の比にもなりなば、忠信が下らんと言ふ嬉しさよ。はや今年の月日も過ぎよかしなどと、待ち候ふなるに、君の御下り候はゞ、母にて候ふ者、急ぎ平泉へ参り、忠信は何處に候ふぞ、と申さば、次信は八島、忠信は吉野にて、討たれけると承

心付きて―
物の分別つ
きて

取つて、鎌倉殿の見参けんざんに入れよ、とて、腹はらかき切り死なん後は、君の御號おんがうも何か苦しく候はん」とぞ申しける。「尤も最期もつとさいごの時、かやうにだに申しわけて、死に候ひなば何か苦しかるべき。殿原どのはら」と仰おほせられて、清和天皇せいわてんわうの御號おんがうを預あづかる。是を現世げんせの名聞みやうもん、後の世のうつたへとも思ひける。「御邊ごへんが着きたる鎧よろひは、いかなる鎧よろひぞ」と仰おほせければ、「是は次信つぎのぶが最後さいごの時、着きて候ひし」と申せば、「それは能登守のさのかみの矢にたまらず、徹とほりたりし鎧よろひの、頼たのむ所なし。衆徒しゆだの中には、聞ゆる精兵せいひやうの有りけるぞ。是を着きよ」とて、緋緘ひきぎしの鎧よろひに、白星しらぼしの甲かぶとをそへて給はりけり。着きたりける鎧よろひを脱ぬぎて、雪ゆきの上にさし置き、「雜色ざふしき共にたび候へ」と申しければ、「義經よしつねも着替きかへべき鎧よろひもなし」とて、召めしぞ換かへられける。まことに例たとなき御事にぞ有りける。「さて故郷こきやうに思ひ置く事はなきか」と、仰おほせられければ、「我も人も衆生界しゆじやうかいの習ならひにて、などか故郷こきやうの事を思はざらん。國を出でし時、三歳さんさいなり候ふ子を、一人とぞめ置きて候ひしぞ。かの者に心付きて、父は何處いづくにやらんと尋ね候ふべきなれば、聞かまほしく候へ。平泉出でし時、君ははや御立候ひしかば、鳥の鳴きて通るやうに、信夫しのぶをうち通り候ひしに、母の所に立ちより、暇いとまごひ候ひしかば、齡よはひおとろへて、二人の子どもの袖そでにすがりて、悲み候ひし事今の様に覺おぼえ候ふ。老おいの末に

し上げたき事の候へども、恐れをなして申さず候ふ」と申しければ、「最期にてあるに、何事にて申せ」と仰を蒙り、ひざまづきて申しけるは、「君は大勢にて落ちさせ給はゞ、それがしは此處に一人とどまり候ふべし。吉野の執行おし寄せ候うて、此所に九郎判官殿の渡らせ給ひ候ふか、と申し候はんに、忠信と名乗候はゞ、大衆は極めたる華飾の者にて候へば、大將軍もおはしまさざらん所にて、わたくし軍益なしとて、歸り候はん事こそ、末代まで恥辱になりぬべく候へ。けふ許清和天皇の御號を、預るべく候はん」とぞ申しける。「尤もさるべき事なれども、純友將門も天命を背き參らせしかば、終に滅びぬ。ましてやいはん、義經は院宣にも叶はず、日比よしみありつる者ども、心變りしつる上、力およばず。今日をくらし、夕を明すべき身にてもなければ、終に遁れなからん物ゆゑに、清和の名を許しけり、といはれん事は、他の謗をばいかどすべき」と仰せられければ、忠信申しけるは、「やうにこそより候はんすれ。大衆おしよせて候はゞ、簾の矢をさんざんに射つくし、矢種つきば太刀を抜き、大勢の中へ亂れ入り、切りて後刀をぬき、腹を切り候はん時、まことに是は九郎判官と思ひまゐらせ候はんすれ。實には御内に佐藤四郎兵衛と言ふ者なり。君の御號をかりまゐらせて、合戦に忠を致しつるなり。首を

けんのひか
きて一劍形
の溝を彫り
て

「御邊が佩きたる太刀は、寸の長き太刀なれば、ながれに臨んでは叶ふまじ。身の疲れたる時太刀の延びたるは悪しかりなん。これを以て最期の軍せよ」とて、金作の太刀の二尺七寸ありけるに、けんのひかきて、地膚心も及ばざるを、取り出して賜はりけり。「此の太刀寸こそ短けれども、身に置いては一物にてあるぞ。義經も身にかへて思ふ太刀なり。それをいかにと言ふに、平家の兵ども、兵船を揃へし時に、熊野の別當の權現の御劍を、申しおろして賜ひしを、信心を致したりしによりてや、三年に朝敵をたひらけて、義朝の會稽の恥を雪ぎたりき。命にかへて思へども、御邊も身にかへれば取らするぞ。義經に添うたりと思へ」とぞ仰せられける。四郎兵衛、是を給はりて戴き、「あはれ御佩刀や、是御覽候へ。兄にて候ひし次信は、八島の合戦に、君の御命にかはり参らせて候ひしかば、奥州の基衡が参らせて候ひし太夫黒といふ馬を給はりて、冥途までも乗り候ひぬ。忠信忠をいたし候へば、御祕藏の御佩刀給はりて候ひぬ。是を人の上と思し召すべからず。誰もく皆かくこそ候はんずれ」と申しければ、おのく涙をぞ流しける。判官仰せられけるは、「何事か思ひおく事のある」。「御いとま給はり候ひぬ。何事を思ひおくべしとも覺え候はず。但し末代までも、弓矢の瑕瑾なるべし。すこし申

綸言―天子
の言玄冬―四季
を色に配し
て春を青、
夏を赤、秋
を白、冬を
黒即ち玄と

して、君に命を奉りて、名を後代にあけよ。矢にもあたり死しける、と聞かば、孝養は秀衡が忠を致すべし。高名度々に及ばず勳功は、君の御はからひとこそ申し含められしか。命を生きて、故郷へ歸れ、と申したる事も候はず。信夫にとどめ候ひし母一人候ふも、其の時を最後と許こそ、申し切りて候ひしか。弓箭とる身のならひ、今日は人の上、明日は御身の上、皆かくこそ候はん。君こそ御心弱く渡らせ給ひ候ふとも、人々それよき様に申させ給ひ候へや」とぞ申しける。武藏坊、是を聞きて申しけるは、「弓矢取る者の言は綸言に同じ。言葉に出しつる事を、ひるがへす事は候はじ。たゞ心安く御暇を賜はりたし」とぞ申しける。判官、しばらく物をも仰せられざりけるが、やゝありて、「惜むとも叶ふまじ。さらば心にまかせよ」とぞ仰せられける。忠信承りて嬉しけに思ひて、たゞ一人、吉野の奥にぞ留まりける。されば、夕には月星の光を戴き、朝にはけうくんの霧を拂ひ、玄冬素雪の冬の夜も、九夏三伏の夏の朝にも、日夜朝暮、片時もはなれ奉らず、仕へ奉りし御主の御名残も、今許なりければ、日比は坂上の田村丸、藤原の利仁にも、劣らじと思ひしが、さすがに今は心細くぞ思ひける。十六人の人々も、面に暇乞して、前後不覺になりにけり。又判官、忠信を近く召して、仰せられけるは、

四 忠信吉野にとどまる事

淡海公―鎌
足の子不比
等

十六人思ひくゝに落ちかゝる所に、音に聞えたる剛の者あり。先祖を委しくたづぬるに、鎌足大臣の御末、淡海公の後胤、佐藤のりたかが孫、信夫の佐藤庄司が二男、四郎兵衛藤原の忠信と言ふ侍あり。人も多く候ふに、御前に進み出で、雪の上に跪きて申しけるは、「君の御有様と我らが身を、物によくく譬ふれば、屠所におもむく羊夫婦の思ひも、いかでか是には勝るべき。君は御心安く落ちさせ給ひ候へ。忠信は此處に止まり候うて、麓の大衆を待ちえて、一方の防矢仕り、一先落し参らせ候はゞや」と申しければ、「尤も心ざしは嬉しけれども、御邊の兄次信が、八島の軍の時、義經が爲に命を捨て、能登殿の矢さきに中りて亡せしかども、是まで御邊のつき給ひたれば、次信も兄弟ながら、未だある心地してこそ思ひつれ。年の内は、思へばいく程もなし。人も命あり、我も長らへたらば、明年の正月の末、二月初には、陸奥へ下らんすれば、御邊も下りて、秀衡をも見よかし。又信夫の里に、とどめ置きし妻子をも、今一度見給へかし」と仰せられければ、「さ承り候ひぬ。治承二年の秋の比、陸奥を罷り出で候ひし時も、今日より

矢比―矢を
中つるに程
よき距離
すくやか者
―強健者

を見て、あはやと思ひ、取つて返して、中院の谷に参りて、「騒ぐまでこそかたからめ、敵こそ矢比に成りて候へ」と申しければ、判官、是を聞き給ひて、「東國の武士か、吉野法師か」と仰せられければ、「麓の衆徒にて候ふ」と申しければ、「扱は叶ふまじ。それらは所の案内者なり。すくやか者を先に立て、惡所に向ひて追ひ懸けられて叶ふまじ。誰か此の山の案内を知つたる者あらば、先立て一先落ちん」と仰せられける。武藏坊申しけるは、「此の山の案内しる者、臍氣にても候はず。異朝を訪らふに、いわう山、かうふ山、しのこう山とて、三の山あり。いちぜうとは葛城、菩提とは此の山の事なり。役の行者と申し奉りし貴僧、精進潔齋し給ひて、優婆塞の宮のうつろひをもみしとりねを立てしかば、川瀬の波にやめうちけん、と崇め奉りし正身の不動、立ち給へり。さる間此の山は、不淨にてはおほろけにても、人の入る山ならず。それも立ち入りて見る事は候はねども、あらく承はり候ふ。三方は難所にて候ふ。一方は敵の矢さき、西は深き谷にて、鳥の音も幽なり。北は龍返とて、おち止まる所は、山川のたぎりて流るゝなり。東は大和の國、宇多へ續きて候ふぞ。こなたへ落ちさせ給へや」と申しける。

かもめじり
—鷗の尻羽
の如く上方
に反見たる
佩き方
つなぬき—
足に穿つ具

けるは、「曲事を仰せられ候ふぞとよ。寺中の近所に居て、麓に鐘の聞ゆるを、敵の寄するとて、落ち行かんには、敵寄せぬ山々はよもあらじ。たゞ君は暫し此處に渡らせおはしませ。辨慶麓に罷り下り、寺中の騒動を見て参り候はん」と申しければ、「尤もさこそありたけれども御邊は、比叡の山にてそせいしたりし人なり。吉野十津川の者共に、見知られてや有るらん」と仰せられければ、武藏坊畏つて申しけるは、「櫻本に久しく候ひしかども、彼奴ばらには、見知られたる事も候はず」と申しもあへず、やがて御前を立ち、褐の直垂に、黒系緘の鎧着て、法師なれども、常に頭を剃らざりければ、三寸ばかり生ひたる頭に、揉烏帽子に、結びかしらして、四尺二寸ありける黒漆の太刀、かもめじりにぞ佩きなしたる。三日月の如くに、そりたる長刀杖につき、熊の皮のつなぬき穿きて、昨日ふりたる雪を、時の落花の如く蹴散し、山下をさして下りけり。彌勒堂の東、大日堂の上より見渡せば、寺中騒動して、大衆南大門に詮議し、上を下へ返したり。宿老は講堂にあり、小法師原は、詮議の中をしさつて逸ける。若大衆のかね黒なるが、腹巻に袖付けて、甲の緒をしめ、しこの矢筈さがりに負ひなして、弓杖につき、長刀手々にひつさけて、宿老よりさきに立ち、百人ばかり山口にこそ臨みけれ。辨慶是

雪群山に降りつみて、谷の小川もひそかなり。駒の蹄も通はねば、鞍皆具も付けず、下人どもを具せざれば、兵糧米も持たれず、皆人つかれに臨みて、前後も知らず臥しにけり。未だあけほの事なるに、遙の麓に、鐘の聲の聞えければ、判官あやしく思し召して、侍どもを召して仰せられけるは、「晨朝の鐘過ぎて、又鐘の鳴るこそ怪しけれ。此の山の麓と申すは、欽明天皇の御建立の、吉野の御嶽藏王權現とて、靈驗無雙のかたのはつだい、金剛童子、勝手ひめぐりしき王子、さうけやこさうけの明神とて、薨を並べ給へる山上なり。さればにや、執行を初として衆徒、華飾世に越えて、公家にも武家にも従はず、必ず宣旨、院宣はなくとも、關東へ忠節の爲に、甲冑をよろひ、大衆の詮議するかや」とぞ宣ひける。備前の平四郎は、「自然の事候はんするに一先落つべきかや、又返して討死するか、腹を切るか。其の時に臨んで、周章てふためきては叶はじ。よきやうに、人々計らひ申され候へや」と申しければ、伊勢の三郎、「申すに付けて臆病の致す所に候へども、見えたる徴なくて、自害無益なり。衆徒に逢うて討死詮なし。たゞ幾度もあしきのよからん方へ、一先落ちせさ給へや」と申しければ、常陸坊是を聞きて、「いしくも申され候ふ物かな。誰もかくこそ存じ候へ。尤も」と申しければ、武藏坊申し

あしき一足
がくり歟

三衣―僧衣
大衣、五條、
七條の稱、

刹那―梵語
瞬時

さて明けよれば、衆徒講堂の庭に衆會して、「九郎判官殿は、中院谷におはすなり。いざや寄せて討ち取りて、鎌倉殿の見參に入らん」とぞ申しける。老僧、是を聞きて、「あはれ詮なき詮議かな。我が爲めの敵にもあらず。さればとて、朝敵にてもなし。たゞ兵衛佐殿の爲にこそ不和なれ。三衣を墨に染めながら、甲冑をよるひ、弓箭を取つて、戰場に出でん事、かつうは穩便ならず」と諫めければ、若大衆是を聞きて、「それはさる事に候へども、いにしへ治承の事を聞き給へ。高倉の宮御謀叛に、三井寺などに、與し參らせ候ひしかども、山は心がはり仕り、三井寺法師は忠を致し、南都はいまだ參らず、宮は奈良へ落ちさせ給ひけるが、光明山の鳥居の前にて、流矢にあたつて、かくれさせ給ひぬ。南都は未だ參らずといへども、宮にくみし參らせたる咎によつて、太政入道ごの殿、伽藍をほろほし奉りし事を、人の上と思ふべきにあらず。判官此の山におはする由、關東に聞えなば、東國の武士ども承りて、我が山に押寄せて、欽明天皇のみづから、末代までと建立し給ひし所、刹那に燒き滅さん事、口惜しき事にはあらずや」と申しければ、老僧達も、「此の上はともかくも」といひければ、其の日を待ちくらし、明くれば廿日の曉、大衆詮議の大鐘をぞ撞きにける。判官は、中院谷といふ所におはしけるが、

執行——山の寺務を統ぶる職

放逸に——手荒く

やう／＼に——様々に

にして見知りたるぞ」といへば、一年都に百日の日でりのありしに、院の御幸ありて、百人の白拍子の中にも、靜が舞ひたりしこそ、三日の洪水流れたり。さてこそ日本一といふ宣旨を下されたりしか。其の時見たりしなり」と申しければ、若大衆ども申しけるは、「さては判官殿の御行方をば、此の人こそ知りたるらん。いざや留めて聞かん」と申しければ、各同心に、「尤も然るべし」とて、執行の坊の前に、關をすゑて、道者の下向を待つ所に、紛れて下向しけるを、大衆とどめて、「靜と見奉る。判官は何處におはしますぞ」と問ひければ、「御行方知らず候ふ」とぞ申しける。小法師原、荒らかにいひけるは、「女なりとも、所にな置きそ。たゞ放逸にあたれ」と罵りければ、靜いかにとしてかくさばや、と思へども、女の心の果敢なさは、我が身うきめに逢はん事の恐しさに、泣く泣くありのまよにぞ語りける。さればこそ、情ありける人にてありける者を、とて、執行の坊に取り入れて、やう／＼にいたはり、其の日は一日留めて、明くれば馬にのせて、人をつけ、北白川へぞ送りける。是は衆徒の情とぞ申しける。

三 義經吉野山を落ち給ふ事

悦よろこびを重かさね給たまふ權現ごんげんにて渡わたらせ給たまふ。是私わたくしに申まをすにはあらず、ひとへに權現ごんげんの詔宣たくせんにてぞ渡わたらせ給たまふ」と申まをされければ、靜しづか是こゝを聞ききて、恐おそしや、我われは、此この世よの中に名なを得えたる者ものぞかし。神かみは正直しやうじきの頭かうべにやどり給たまふなれば、かくて空むなしからん事こともおそれあり。舞まひまでなくとも、法樂ほふらくの事ことは苦くるしかるまじ。我われを見知みしりたる人ひとは、よもあらず、と思おもひければ、物ものは多おほくならひ知しりたりけれども、別べつして白拍子しらびやうしの上手じやうずにてありければ、音曲おんきよくち文字じうつり、心こゝろも言ことも及およばれず、聞きく人涙ひとなみだをながし、袖そでを絞しぼらぬはなかりけり。遂つひにかくぞ歌うたひける。

ありのすさみのにくきだに、ありきのあとは戀こひしきに、飽はなかで離はなれし面影おもかげを、いつの世よにかは忘わするべき。別わかれの殊ことに悲かなしきは、親おやのわかれ子このわかれ、すぐれてけに悲かなしきは、夫妻ふさいの別わかれなりけり。

と涙なみだのしきりに進すすみければ、衣きぬ引きかづき伏ふしにけり。人々ひと是こゝを聞きき、「音聲おんじやうの聞きき事ことかな、何様なにさまたゞ人ひとにてはなし。殊ことに夫をうを戀こひふる人ひとと覺おぼゆるぞ。いかなる人ひとの此この人ひとの妻つまとなり、是程心こゝろを焦こすらん」とぞ申まをしける。治部ちぶの法眼ほふげんと申まをす人ひと、是こゝを聞ききて、「面白おもしろきこそ理ことわりよ。誰たれと思おもひければ、是こゝこそ、音おとに聞きこえし靜しづかよ」と申まをしければ、同宿聞どうじゆくきて、「いか

にわざと一特

垂跡—神の出現

果てしかば、静もおき居て、念誦してぞ居たりける。藝にしたがひて、思ひくゝのなれ
小舞する中にも、面白かりし事は、近江の國より参りける猿樂、伊勢の國より参りける
白拍子も、一番まうてぞ入りにける。静これを見て、「あはれ、我れも打ち解けたりせば、
丹精を運ばざらん。願くは權現の、此の度安穩に都に返し給へ。又あかで別れし判官を、
事故なく今一たび引きあはせ給へ。さもあらば、母の禪師とわざと参らん」とぞ祈り
ける。道者は皆下向して後、静正面に参りて念誦して居たりける所に、若大衆の申しけ
るは、「あらしの女の姿や、たゞ人とも覺えず。いかなる人にておはすらむ。あのやう
の人の中にこそ、面白き事もあれ。いざや勸めて見ん」とて、正面に近付きしに、素絹
の衣を着たりける老僧の、半装束の珠數持ちて立ちしが、「あはれ、權現の御前にて、何事
にても御入り候へ。御法樂候へかし」とありしかば、静、是を聞きて、「何事を申すべきと
も覺えず候ふ。近き程の者にて候ふ。毎月に参籠申すなり。させる藝能ある身にても候
はどこそ」と申しければ、「哀れ、此の權現は、靈驗無雙に渡らせ給ふ物を、且は罪障懺悔
の爲にてこそ候へ。此の垂跡は、藝ある人の御前にて、丹精はこばぬは、思ひに思ひを
重ね給ふ。面白からぬ事なりとも、我が身にしる事の程を、丹精を運びぬれば、悦びに又

たゆくーだ
るく

られて、鏡を見るが如くなり。されば身たゆくして働かず、其の夜はよもすがら山路に迷ひ明しけり。十六日の晝程に、判官にははなされ奉りぬ。けふ十七日の暮まで獨山路に迷ひける、心の中こそ悲しけれ。雪踏み分けたる道を見て、判官の近所にやおはすらん、又我れすてし者どもの、此の邊にやあるらん、と思ひつゝ、足をはかりに行く程に、やうく大道にぞ出でにける。是は何方へ行く道やらん、と思ひて、暫く立ち休らひけるが、後に聞けば宇多へかよふ道なり。西をさして行く程に、遙なる深き谷に燈火幽に見えければ、いかなる里やらん、賣炭の翁も通はざれば、焼く炭竈の火にてもなし。秋の暮ならば、澤邊の螢かとも疑ふべき。かくてやうく近付きて見ければ、藏王權現の御前の燈籠の火にてぞありける。さし入りて見たりければ、寺中には道者大門に充滿ちたり。靜是を見て、いかなる所にて渡らせ給ふらん、と思ひて、ある御堂のかたはらに、暫く休み、「是はいづくぞ」と人に問ひければ、「吉野の御嶽」とぞ申しける。靜嬉しさ限なし。月日こそ多けれ、けふは十六日、此の御縁日ぞかし。たふとく思ひければ、道者に紛れ、御正面に近付きて、拜み參らせければ、内陣外陣の貴賤、なか／＼數を知らず。大衆の所作の間は、苦みのあまりに、衣引きかづき伏したりけり。勤行も

二 靜吉野山に捨てらるゝ事

そとろに—
類に
足をはかり
に—足にま
かせて
たぐへて—
和して

供したる者ども、判官の給びたる財寶を取りて、かき消す様にぞ失せにける。靜は日暮るゝに隨ひて、今や—と待ちけれども、歸りて事問ふ人もなし。せめて思ひの餘りに、泣く／＼枯木のもとを立ち出でて、足にまかせて迷ひける。耳に聞ゆるものとは、杉の枯葉をわたる風、眼にさへぎるものとは、梢まばらに照す月、そとろに物悲しくて、足をはかりに行く程に、高き峯に上りて、聲を立てゝ喚きければ、谷の底に、木魂の響きければ、我れを問ふか、と思はれて、泣く／＼谷に下りて見れば、雪深き道なれば、跡踏みつくる人もなし。又谷にて悲む聲の、嵐に類へて聞えけるに、耳をそばだてて聞きければ、幽かに聞ゆる物とは、雪の下行く細谷川の水の音、聞くにつらさぞまさりける。泣く／＼峰にかへり上りて見ければ、我が歩みたる跡より外に、雪ふみ分くる人もなし。かくて谷へ下り嶺に上りせし程に、はきたる履も雪に取られ、著たる笠も風にとらる。足は皆ふみ損じ、流るゝ血は、紅をそよぐが如し。吉野の山の白雪も、染めぬ所ぞなかりける。袖は涙にしほれて、袂に垂氷ぞながれける。裾はつらゝに閉ぢ

ふかく給ひ
つれども—
ふかく居給
ひつれども
の脱文歟

き、行きては歸りし給ひけり。峰に上り谷に下りて行き給ふ程に、姿の見え給ふ程は、
靜はるゝと見送りけり。たがひに姿の見えぬ程に隔てば、山彦の響く程にぞ喚きけ
る。五人の者どもやうゝに慰めて、三四の峠までは下りけり。二人の侍、三人の難色
をよびて、語りけるは、「各いかにかはからふ。判官も御心ざしは深く給ひつれども、御
身の置き所なく思し召して、行方知れず失せさせ給ふ。我れとても、麓に下り、落人
供し歩きては、いかでか此の難所をばのがるべき。是は麓近き所なれば、捨て置き奉る
とても、いかにもして、麓に歸り給はぬ事はよもあらじ。いざや一先落ちて、身を助け
ん」とぞいひける。恥をも恥と知り、又情をも捨てまじき侍だにも、かやうにいひけれ
ば、まして次の者どもは、「いかやうにも、御はからひ候へかし」といひければ、ある枯
木の下に敷革しき、「此處に暫く御休み候へ」とて、申しけるは、「此の山の麓に、十一面觀
音の立たせ給ひて候ふ所あり。親しく候ふ者の、別當にて候へば、尋ねて下り候うて、
御身の様を申し合せて、苦しかるまじきに候はゞ、入れ參らせて、暫く御身をもいたは
り參らせて、山づたひに都へ送り參らせ度こそ候へ」と申しければ、「ともかくもよき様
に、各々計らひ給へ」とぞ宣ひける。

見るとても嬉しくもなします鏡こひしき人の影をとめねば

とよみたれば、判官、枕を取り出して、「身をはなさで是を見給へ」とて、かくなん、

いそけども行きもやられず草枕しづかに馴れし心ならひに

其の數一多

それのみならず、財寶を其の數取り出して給ひけり。其の中に、殊に秘藏せられたりける紫檀の胸に、羊の革にて張りたりける啄木のしらべの鼓を給はりて、仰せられけるは、

「此の鼓は、義經秘藏して持ちつるなり。白河院の御時、法住寺の長老の入唐の時、二

の重寶を渡されけり。名曲といふ琵琶、初音といふ鼓これなり。名曲は、内裏にあり

けるが、保元の合戦の時、新院の御所にて、焼けてなし。初音は、讃岐守正盛に給は

つて、秘藏して持ちたりけるが、正盛死去の後、忠盛是を傳へて持ちたりけるを、清盛

の後は誰か持ちたりけん、八島の合戦の時、わざとや海に入れられけん、又取り落して

やありけん、波にゆられてありけるを、伊勢の三郎、熊手にかけて取りあけたりしを、

義經、取つて鎌倉に奉る」とぞ宣ひける。靜なくく是を給はりて持ちけり。今は何

と思ふとも、留まるべきにあらず、とて、是非を二つに分けより。判官思ひ切り給ふ時は、

靜思ひきらず、靜思ひ切る時は、判官思ひ切り給はず、互に行きもやらず、歸りては行

くし葛城山の岩崖に住すること三
十年

びんのかみ
―かみは鏡
なるべし

れあり、是より歸りて、禪師の許に忍びて、明年の春を待ち給へ。義經も明年の春、實に叶ふまじくば、出家をせんずれば、人も心ざしあらば、共に様をもかへ、經をも讀み、念佛をも申さばや。今生後生、などか一所にあらざらん」と仰せられければ、靜、聞きもあへず衣の袖を顔にあてよ、泣くより外の事ぞなき。御心ざし盡きせざりし程は、四國の波のうへまでも、ぐそくせられ奉る。契つきぬれば力及ばず、只憂身の程こそ、思ひ知りて悲しけれ。申すに付けてもいかにぞや、過ぎにし夏の比より、たゞならぬ事とかや申すは、産すべき物にも早定りぬ。世に隠れもなき事にて候へば、六波羅へも、鎌倉へも聞えんずらん。東の人は情なき、と聞けば、今に取り下されて、いかなる憂目を見んずらん。たゞ思し召し切りて、是にていかにもなし給へ。御爲にも、身づからが爲にも、なか／＼生きて物思はんよりも」と、かきくどき申しければ、「たゞ都へ上り給へ」と仰せられけれども、御膝の上に顔をあて、聲を立てよぞ泣きふしける。侍共も是を見て、皆袂をぞ濡しける。判官びんの髪を取り出して、「是こそ朝夕に顔をうつしつれ。見ん度に、義經を見る、と思ひて見給へ」とて給ひにけり。是給はりて、今なき人の様に、胸にあてよぞこがれける。涙の隙よりかくぞ詠じける。

ゆゑしき—
結構なる

役の行者—
文武皇天頃
の人術を善

が名残捨て難く、とにかくに心を碎き給ひつゝ、涙に咽び給ひけり。判官、武藏を召して仰せられけるは、「人々の心中を、義經知らぬ事はなけれども、わづかの契りを捨てかねて、是まで女を具しつゝこそ、身ながらも實に心得ね。是より靜を都へ返さばや、と思ふはいかどあるべき」。武藏坊、畏つて申しけるは、「是こそゆゑしき御はからひ候ふよ。辨慶も、かくこそ申し度候ひつれども、恐をなしまゐらせてこそ候へ。斯様に思し召し立ちて、日の暮れ候はぬさきに、疾く御急ぎ候へ」と申せば、何しに返さんといひて、又思ひかへさじといはん事も、侍共の心中、いかにぞや、と思はれければ、力及ばず、「靜を京へ返さばや」と仰せられければ、侍二人、雑色三人、御供申すべき由を申しければ、「偏に義經に、命をくれたるところを思はんずれ。道の程、能々いたはりて、都へ歸りて各はそれよりして、何方へも心に任すべし」と仰を蒙りて、靜を召して仰せけるは、「武藏つきて、都へ返すにはあらず。是までひき具足したりつるも、心ざし愚ならぬ故、心苦しかるべき旅の空に、人目をかへり見ず、具足しつれども、よく聞けば、此の山は、役の行者のふみ初め給ひし菩提の峯なれば、精進潔齋せでは、いかでか叶ふまじき峯なるを、我が身の業にをかされて、是まで具し奉る事、神慮のおそ





義經記 卷第五

一 判官吉野山に入り給ふ事

つらゝ氷柱

目な見合せ
そ一靜の顔
も見るなと
憎みし也

都に春は來たれども、吉野はまだ冬ごもる、いはんや年の暮なれば、谷の小川もつららゐて、一方ならぬ山なれども、判官あかぬ名残を捨てかねて、靜を此處まで具せられたりける。様々の難所を経て、一二の峽間、三四の峠、杉の壇と云ふ所まで、分け入りたまひけり。武藏坊申しけるは、「此の君の御供申し、不足なく見する物は面倒なり。四國の供も、一舟に十餘人取り奉り給ひて、心安くもなかりしに、此の深山まで、具足し給ふこそ心得ね。かく御供してありき、麓の里へ聞えなば、いやしき奴原が手にかかりなどして、射殺されて、名をながさん事は、口惜かるべし。いかゞはからふ片岡。いざや一先落ちて、身をも助からん」と申しければ、「それもさすがあるべき。いかゞぞ。たゞ目な見合せ」とこそ申しける。判官、聞き給ひ、苦しき事にぞ思し召しける。靜が名残を捨てじとすれば、かれらは中をたがひぬ。また彼れらが中を違はじとすれば、靜

げしやくー
外戚

靜をば、心ざし深くや思はれけん、具し給ひて大物の浦をば立ち給ひて、渡邊に着きて、
明くれば住吉の神主長盛がもとに着き給ひて、一夜を明し給ひて、大和の國宇多の郡、
岸の岡と申す所に著き給ひて、けしやくに付きて、御親人のもとに、暫しおはしけり。
北條の四郎時政、伊賀伊勢の國を越えて、宇多へ寄する、と聞えければ、我れゆゑ人に大
事をかけじ、とて、文治元年十二月十四日の曙に、籠に馬を乗りすて、春は花の名山
と名を得たる吉野の山にぞ、籠られける。

からめかし
てーがらが
らさせて

しや、小溝こみちの太郎たろうとこそ見れ。かへし合せあはせよや」といひけれども、聞きも入れず引きけるを、「漕こけや海尊かいそん」といひければ、舟端ふなはたを踏ふまへて、ぎしめかして漕こぎたりける。五艘ごそうの真中まんなかへ、するりと漕こぎ入れければ、熊手くまでを以もつて敵てきの舟ふねに打ち貫つらぬき、引きよせゆらりと乗りうつり、ともよりへさきに向むかつて、薙打なぎうちにからめかして、ひしぎ付けてぞ通とほりける。手に當あたる者はいふに及およばず、當あたらぬ者も、覺おぼえず知らず、海うみへ飛び入り失うせにけり。判官はんぐわん、是を見給みたまひて、「片岡かたおかあれ制せいせよ。さのみ罪つみな作りそ」と仰おほせられければ、「御誼ごぎやうにて候こうふ。さのみ罪つみな作つくられそ」といひければ、辨慶べんけい、是を聞ききて、「何を申まをすぞよ。末すえも通とほらぬ青道心あおだうしん、御誼ごぎやうを耳みみにな入れそ。八方はうほうを攻せめよ」とて、さんぐくに攻せむる。杉舟二艘すぎふねそうは失うせて、三艘そうは助たすかり、大物だぶつの浦うらへぞ逃にけ上ありける。其の内、判官はんぐわん、軍いくさに勝かちちすまし給たまひけり。御舟みふねの中うちにも手負おふ者十六人、死する者八人ぞ有ありける。死したる者をば、敵てきに首くびを取とられじ、と大物だぶつの沖おきにぞ沈しづめける。其の日は御舟みふねにて、日ひを暮くらし給たまふ。夜に入いりければ、人々皆陸みなくに上あり給たまひて、心ざしは切きなれども、かくては叶かなふまじとて、皆みな方々かたへぞ送おくられける。二位大納言にいたなごんの姫君ひめぎみは、駿河しゅんがの次郎承じやうじやうりて送り奉ほうる。久我大臣くがだいじん殿どのの姫君ひめぎみをば、喜三太きさんだおくり奉ほうる。その外ほか残のこりの人々は、みな縁々えんえんにつれてぞ送り給たまひける。

つか装束一
つる装束の
誤かといふ
つる装束は
金具に鎧の
彫物あるも
の

りて、陸にあけたりける舟を、五艘おし下し、百騎を五手に分けて、我れ先にとおし出す。是を見て、辨慶は、黒革織の鎧を着、海尊は黒絲織の鎧着たり。常陸坊はもとより、屈強の楫取なりければ、小舟に取り乗り、武藏坊は、わざと弓矢をば持たざりけり。四尺二寸ありけるつか装束の太刀佩いて、巖通しと云ふ刀をさし、猪のめほりたる鉞、薙鎌熊手を舟にからりひしりと取り入れて、身を離さず持ちける物は、櫟の木の棒の、一丈二尺ありけるに、鐵ふせて、上に蛭巻したるに、石づきしたるを、脇にはさみて、小舟の軸に飛びのる。「やうもなき事、此の船をあの中にするりとこぎ入れよ。其の時、熊手取つて、敵の舟ばたにひつかけ、するりと引きよせて、かばと乗り移り、甲の眞向、籠手のつがひ、膝のふし、腰骨、なぎ打ちに、さんぐに打たんする程に、甲の鉢だにもわれれば、主めが頭もたまるまじ。たゞ追ひて物を見よ」と呟きごととして疫神のわたるやうにておし出す。御方は目をすましてこれを見る。小溝の太郎申しけるは、「抑、是程の大勢の中に、只二人乗りてよる者は、何者にてか有らん」といへば、ある者之を見て、「一人は武藏坊、一人は常陸坊」とぞ申しける。小溝是を聞きて、「それならば、手にもたまるまじぞ」とて、舟を大物へぞ向けさせける。辨慶これを見て、聲をあけて、「きたな

せがい―舟
棚端に板を
渡し縁の如
くしたる所

精びやう―
精兵
つるべ矢―
連發の矢

さみ、矢櫃一合、せがいの上にからと置きて、蓋を取りて除けよれば、篋をもためて節の上をかきこそけて、羽をばかはぎに作ぎたる矢の、櫟と黒櫟と強けなる所を拵へて、まはり四寸、長さ六寸に拵へて、つのきわりを五六寸入れたりける。「何共あれ、是を以つて主を射ばこそ、鎧裏かゝぬともいはれめ。四國がたの杉舟の端薄なるに、大勢は込み乗りて、舟の足は入りたり。水際を五寸許さしさせて、矢目ぢかにひやうど射るならば、鑿を以つて破る様にこそあらんすらめ。水舟に入らば、ふみ沈めくゝて、皆うせんずるものを、助舟よらば、精びやう小びやうをば嫌ふべからず、つるべ矢に射てくれん」とぞ申しける。兵共、「承り候ふと申しける。」片岡、せがいの上に片膝ついて、さしつめ引きつめ、さんぐにこそ射たりけれ。櫟の木わりを、十四五板、巾をきたりければ、水一杯入る。慌てふためきて踏み返し、目の前にて杉舟三艘まで失せにけり。豊島の冠者うせにければ、大物の浦に船こぎよせて、むなしき體をかきて、泣くく宿所へぞ歸りける。武藏坊は、常陸坊を呼びて申しけるは、「安からぬ事かな。軍すべかりつる物を、かくて、日を暮さんこと、寶の山に入りて、手を空しくしたるにてこそあれ」と後悔する所に、小溝の太郎は、大物に軍ありと聞きて、百騎の勢にて、大物の浦にはせ下

三つがけ—
三伏と同じ
きならむ即
ち指三本伏
せたる長さ

沙汰のかぎ
り—論外

十三束三つがけ、取つてつがひ、よく引きてひやうど射る。鎧は遠鳴して大の雁股の手さき、内甲に入るとぞ見えし。首の骨をかけて、ふつと射ちぎりて、かりまたは鉢付に立つ。首は甲の鉢につれて、海にたぶとぞ入りにける。上野の判官、是を見て、「さないはせそ」とて、押しちがへて簾の中差取つて、よく引きてひやうど射る。忠信が矢さしはけて立つたる弓手の甲の鉢を射削りて、鎧は海へ入る。忠信是を見て、「地體此の國の住人は、敵射る様をば知らざりける奴に、手なみの程を見せん」とて、尖矢をさしはけて、小びきに引いて待つ。敵一の矢射損じて無念にや思ひけん。二の矢を取つてつがひ、打ち上ぐる所を、よく引きてひやうど射る。弓手の脇の下より、右手の脇に五寸許射出す、則ち海へたぶと入る。忠信次の矢をはけながら、御前に参りける。不覺とも高名とも、沙汰のかぎりとして、一の筆にぞ付けられける。豊島の冠者と、上野の判官討たれければ、郎等ども矢比より遠く漕ぎのけたり。片岡、「いかに四郎兵衛殿、軍は何とし給ひたり」といへば、「手の上手が仕りて候ふ」と申しければ、「退き給へ。さらば經春も、矢一つ射てみん」といひければ、さらばとて退きにけり。片岡しろき直垂に、黄白地の鎧着て、わざと甲は着ざりけり。折烏帽子に、ゑぼしがけて、白木の弓、脇には

みつしげめ
ゆひ―三つ
目結を繁く
染めたるも
の
いかもの作
り―大きく
威嚴ある造
方
たかうすび
やう―驚の
羽の本末薄
く黒きなう
すべうとい
ひ其真中に
一所薄黒く
熊鷹の羽の
如き文ある
をたかうす
べうといふ
と貞丈の説

「かゝる事こそ御座候へ。此の人ども、先がけ論する間に、敵は近付きぬ。あはれ仰を蒙りて、忠信さきを仕り候はどや」と申しければ、判官、「いしう申したる物かな。望めか」と思ひつる所に」とて、頓て忠信にさきがけを給はりて、みつしげめゆひの直垂に、萌黄緘の鎧に、三枚甲の緒をしめ、いかもの作りの太刀をはき、たかうすびやうの矢二十四さしたるを、頭だかに負ひなして、上矢に大の鎧二つさしたりけるふぢまきの弓もちて、舳に打ち渡して出で合ひたり。豊島の冠者、上野の判官、兩大將軍として、搔楯かいたる小舟に取り乗りて、矢比に漕寄て申しけるは、「抑此の御舟は、判官殿の御舟と見參らせて候ふ。かく申すは、豊島の冠者と上野の判官と申す者にて候ふ。鎌倉殿の御使と申す所に、さうなく落人の入らせ給ひ候ふを、もらし參らせ候はん事、弓箭の恥辱にて候ふと存ずる間、參りて候ふ」と申しければ、「四郎兵衛忠信と申す者にて候ふ」といひもはてずつと立ち上り、豊島の冠者いひけるは、「代官は自身に同じとて、大の鎧を打ちはめて、よく引きてひやうど射る。鎧は遠鳴して、舟端にどうど立つ。四郎兵衛是を見て、「時のつぐりと、日の敵は、真中をぶつと射ちぎりたるこそ面白けれ。忠信程の源氏の郎等を、下乗せらるゝ武士とこそ覺えね。手竝を見給へ」とて、三人張に、

六 住吉大物二か所合戦の事

天に口なし、人を以つていはせよと。大物の浦にも騒動す。よひには見えぬ小船の、夜の中に着きて、苦をとらせて、是ぞ怪むければ、「何舟にてある。引きよせて見ん」とて、五百餘騎三十艘の舟に取り乗りておし出す。潮干なれども小舟なりければ、足は早し、屈強の揖取はのせたり。思ふ様に漕ぎかけて、大船を中に取りこめ、もらすな、とぞ罵りける。判官御覽じて、「敵が進めばとて、身方はあわつな。義經が舟と見ば、さうなくよも近付かじ。狼藉をせば、武者に目なかけそ。柄ながき熊手にて、大將と思しきやつを、手取りにせよ」とぞ宣ひける。武藏坊申しけるは、「仰はさる事にて候へども、舟の中のいくさは、大事の物にて候ふ。今日の矢合は、餘の人の望み有るべからず。辨慶仕り候はん」と申しければ、片岡、是を聞きて、「僧道の法には、無縁の人をとぶらひ、結縁の者を導くこそ、法師とは申せ。軍といへば、御邊の先だつ事はいかゞ。そこのき給へ。經春矢一つ射ん」とぞ申しける。辨慶是を聞きて、「御邊より外は、此の殿の御内に、弓箭とる者はなきか」とぞ申しける。佐藤四郎兵衛、是を聞きて、御前に畏つて申しけるは、

搔楯—かき
並ぶる楯

いさり火の
—新古今集
攝政太政大
臣の歌

齡八旬よはひはちじゆんにたけたる老人らうじんたどじり只一人たゝずみにけり。「是はどの國の、いづくの所ぞ」と問ひければ、「爰こゝに迷ふまよは常の事、國に迷ふまよこそ怪しけれ。さらぬだに此の所は、二三日騷動さうどうする事のあるに、判官の昨日是を出でて、四國へとて下り給ひしが、夜の間に風かはりたり。此の浦にぞ着き給ふらん、とて、當國の住人、豐島の藏人、上野の判官、小溝の太郎承りて、陸にあがり、五百匹の名馬に鞍置きて、磯には三十艘の杉舟に、搔楯をかき、判官を待ちかけたり。もし其の方はうさまの人ならば、急ぎ一まづ落ちて遁れ給へ」と仰せられければ、片岡、さらぬ體にて申しけるは、「是は淡路の國の者にて候ふが、一昨日の釣にまかり出で、大風にはなされて、たゞ今是につきて候ふなり。ありのまゝに知らせ給へ」と申しければ、古歌をぞ詠じ給ひけり。

いさり火のむかしの光ほの見えて葦屋のさにとぶ螢かな
と詠じて、かきけすやうに失せにけり。後に聞きければ、住吉の明神をいはひ奉りたる所なり。憐みを垂れ給ひける、とぞ覺えける。片岡、やがて歸り参りて、此の由申しければ、「さては舟をおし出せ」と仰せられければ、潮は干たり、御舟を出しかねて、心ならず夜をぞ明しける。

やほ一彌帆
本帆の外に
軸に張る帆

片唾をのむ
一唾を口に
ためて一心
になること

へば、五十ばかりになる楫取出でて、「これは又、昨日の風よ」と申せば、片岡申しけるは、「あは、男よく見て申せ。昨日は北の風。吹きかはす風ならば、巽か南にてぞあるらん。風下は津の國にてぞあるらん」と申せば、判官、仰せられけるは、「御邊だちは案内を知らぬ者なり。彼等は案内者なれば、たゞ帆をひきて吹かせよ」とてやほの柱を立てて、やほを引きて走らかす。曉になりて、知らぬ干渴に御舟をはせ据ゑたり。「潮は満つるか、引くか。」「ひき候ふ」と申せば、「さらば潮満つるを待て」とて、舟の端、波にたよかせて、夜の明くるを待ち給へば、陸の方に大鐘の聲こそ聞えけれ。判官「鐘の聲の聞ゆるは、渚の近きと覺ゆるぞ。誰かはある。舟に乗りて行き見て見よ」と仰せられければ、「いかなる人にか承るべき」と片唾をのむ所に、「幾度なりとも、器量の者こそ行かんずれ。片岡行き見て見よ」と仰せられける。承りて、逆澤潟の腹巻きて、太刀ばかり佩いて、屈強の舟乗なりければ、端船に乗り左右なく磯に押しよせて、あがりて見れば、海士の鹽やく苦屋の、軒を並べたり。片岡より問はどや、と思ひけれども、我が身は心うちとけねば、苦屋の前を打ち過ぎて、一町あがりて見れば、大なる鳥居あり。鳥居につきて行き見て見れば、ふりたる神を祝ひまゐらせたる所なり。片岡近付きて拜み奉れば、

さどめかし
—ざあ—
音立てゝ

を掛けて見ければ、大の男の合せて抱くにさしも合はぬ程なり。柱の高さは、四五丈もあらんと思ふ程なり。武庫山よりおろす嵐につめられて、雪と雨とに濡れて氷はただ銀箔を、延べたるにぞ似たりける。いかにもして上るべきとも覺えず。判官、これを見給ひて、「あゝしたり、片岡」と力を添へられて、えいと聲を出し上れば、するりと落ち落ち二三度しけるが、命を捨てゝ上りける。二丈許上りて聞きければ、物の音、舟の中に答へて地震の如くに鳴りて聞えければ、あはや何やらんと聞く所に、濱浦より立ちたる風の時雨につれしきたる。「それ聞くや。楫取、後より風の來るぞ、波をよく見よ。風をきらせよ」といひも果てざりければ、吹きもて來て、帆にひしくとあつるかとするれば、風につきてさどめかし走りけるが、何所とは知らず、二所に物のはたくと鳴りければ、舟の中に同音にわつとぞ喚きける。帆柱はせみのもとより、二丈許おきて、下をふつと折れにけり。柱海に入りければ、舟は浮先につとはせ延びけり。片岡、するりと下りて舟ばりを踏みはり、ないがまを八の綱手に引きかけて、かなぐり落ちたりければ、折れたる柱を風に吹かせて、終夜波にゆられける程に、曉にもなりければ、宵の風はしづまりたるに。また風吹き來る。辨慶、「是はいづくより吹きたる風やらん」とい

にては皆心々におはしけれども、一所にさし集ひ、中々都にてともかくにもなるべかりしを、と悲み給ひけり。判官、心もとなさに立ち出で給ひて、「今宵は何時にかなりぬらん」と宣へば、「子の時の終には成りぬらん」と申せば、「あはれ疾くして、夜の明けよかし。雲を一目見て、ともかくにもならん」などと仰せられける。「そもく侍の中にも、下部の中にも、器量の者やある。帆柱に上りて、薙鎌にて、せみの綱を切れ」とぞ仰せられける。辨慶、「人は運のきはめに成りぬれば、日比おはせぬ心のつかせ給へる」と呟きければ、判官、「それは必ず御邊に上れといはどこそ。御邊は比叡の山そだちの者にて叶ふまじ。常陸坊は、近江の海水にて小舟などにこそ訓練したりとも、大船には叶ふまじ。伊勢の三郎は上野の者、四郎兵衛は奥州の者なり。片岡こそ、常陸の國、鹿島、行方といふ荒磯にぞ生したる者なり。志太の三郎、浮島にありける時も、常に行きて遊びけるに、源平の亂出で來候はど、葦の葉を舟にしたりとも、異朝へも渡りなん、と歎じける。片岡上れ」と仰せられければ、「承りて候ふ」とて、やがて御前を立ちて、小袖直垂ぬぎ、手綱二筋をよりて胴に巻き、髻ひきぐして押し入れ、烏帽子に額結ひて、やいばの薙鎌とつて、手綱にさし、大勢の中をかき分けて、柱よせに上り、手

せみは帆柱
の上なる滑
車

黄水をつく
一胃液を吐
く

優なる―上
品なる

たび大風に逢ひしぞかし。綱手をさけて引かせよ。苦を捲きてつけよ」と下知しければ、綱をさけ苦をつけよれども、少しもしるしなし。川尻を出でし時、西國船の石多く取り入れたりければ、葛を以つて中を結び、投入れたりけれども、綱も石も底へは沈みかねて、上に引かれて行く程の、大風にてぞありける。舟の腹をたよく波の音におどろき、馬どもの嘶ふこそおびたどしき。今朝までは、さりとともと思ひける人、舟底にひれ伏して、黄水をつくこそ悲しけれ。是を御覽じて、「たゞ帆の中を破つて風を通せ」とて、薙鎌を以つて帆の中をさんぐに破つて、風を通せども、へさきには白波たてよ、千の鋒をつくが如く、さる程に日も暮れぬ。先にも舟が行かねば、篝火もたかず、後にも舟のつどかねば、海士の焼く火も、見えざりけり。空さへ曇りたれば、四三の星も見えず、只長夜の闇に迷ひける。せめて我が身獨の事ならば、如何せん、都におはしましける時、人知れず情ふかき人にて、おはしましよかば、忍びて通ひ給ひける女房二十四人とぞ聞えし。其の中にも御心ざし深かりしは、平大納言の御娘、大臣殿の姫君、唐橋の大納言、鳥飼の中納言の御娘、この人々は、皆さすがに優なる御事にてぞおはしける。其の外靜などを初として、白拍子五人、惣じて十一人、一つ舟にぞ乗り給へる。都

たまらじ—
我が矢先に
堪へじ

さへて射んずる程に、風雲ならば、射るとも消えうせじ。天の政にてある間、平家の惡靈ならばよもたまらじ。それにしるしなくば、神を崇め奉り、佛を尊み參らせて、祈り祭りもよもあらじ。源氏の郎等ながら、俗姓正しき侍ぞかし。天兒屋根の御苗裔、熊野別當辨せうが子に、西塔の武藏坊辨慶」と名乗つて、矢つぎ早に、さんんゝに射たりければ、冬の空の夕日あかりの事なれば、潮もかどやきて、中差いづくにおちつくとは見えねども、死靈なりければ、かき消すやうに失せにけり。船の中には是を見て、「あらしや、武藏坊だになかりせば、大事出で來たらん」とぞ申し合ひける。「押せや者ども」ととて、漕ぐ程に、淡路の國みつしまの東をかすかに見てゆく程に、さきの山の北の腰に、又黒雲の車輪の様なるが出で來る。判官「あれはいかに」と仰せられければ、辨慶「これこそ風雲よ」と申しも果てぬに、大風おちきたる。比は十一月下旬の事なれば、霞まじりて降りければ、東西の磯も見えわかず。麓には風はけしく、津の國武庫山おろし、日の暮るゝにしたがひて、いとど烈しくなりける。判官、楫取水手に仰せられけるは、「風の強きに、沖中にひけよ」と仰せられけれ。帆を下さんとすれども、雨に濡れて、せみもとつまりてさがらず。辨慶、片岡に申しけるは、「西國の合戦の時、たび

せみもと—

わたらせ給
ふまじ―御
無事にはあ
るまじ

とぞ仰せられける。辨慶申しけるは、「此の雲のけしきを見候ふに、よも風雲にては候ふまじ。君はいつの程に思し召し忘れ給ひて候ふぞ。平家を攻めさせ給ひし時、平家の公達、多く波のそこに屍を沈め、苦の下に骨を埋み給ひし時、仰せられ候ひし事は、今のやうにこそ候へ。源氏は八幡の護り給へば、ことに重ねて、日にそへ安穩ならん、と仰せられし。いか様にも、是は君の御ため、惡風とこそ思ひ候へ。あの雪くだけで御舟にかよらば、君もわたらせ給ふまじ。我等も二度故郷へ歸らん事、不定なり」とぞ申しける。判官、是を聞こし召して、「何かさる事のあらん」とぞ仰せられける。辨慶申しけるは、「君は、度々辨慶が申す事を、御用ひ候はで、御後悔候へ。さ候はど見參に入れ候はん」とて、採烏帽子引きこうで、太刀長刀は持たざりけり。白篋にくぐひの羽にて作ぎたる矢に、白木の弓取りそへ、舟の舳に突立て、人に向つて物を云ふ様に、かきくどきて申すやう、「天神七代、地神五代は神の御世、神武天皇より、四十一代の御門より以來、保元平治とて兩度の合戦、知らずこれら兩度にも、鎮西の八郎御曹子こそ、五人張に十五束を射給ひ、名をあけ給ひし。それより後は絶えて久しくなりたり。さては源氏の郎等の中に、辨慶こそかたの如くも、弓矢取つて人數にいはれたれ。風雲の方へさ



伊勢の海士
の―後撰集
に鈴鹿山伊
勢をの海士
のすて衣し
はなれたり
と人やみる
らむ

へいた―軸
板敷

馬ども立てゝ四國地を心ざす。舟の中、波の上のすまひこそ悲しけれ。伊勢をの海士のぬれ衣、ほす隙もなきたよりかな。入江々々の葦の葉に、繋ぎおきたる藻刈舟、荒磯かけて漕ぐ時は、渚々に鳴く千鳥、折知りかほにぞ聞えける。霞へだてゝ漕ぐ時は、沖に鷗のなく聲も、敵の関の聲かと思ひける。風にまかせ、潮にしたがひてこぐ程に、弓手は、住吉明神ありがたし、とふし拜み、右手を見れば、西の宮、蘆屋の里、生田の森をよそになし、和田の岬をこぎ過ぎて、淡路の瀬門も近くなる、繪島が磯を右手になして、こがれ行く程に、時雨の隙より見給へは、高き山のかすかに見えければ、船の中にてこれを見て、「あの山は、何れの國の何處の山ぞ」と申しければ、そんじやうその國の山と申せども。委しくは知りたる人もなし。武藏坊は、船ばたを枕にして臥したりけるが、がはと起きて、舟のへいたにつたつて、たゞ一目見て申しけるは、「遠くもなかりけるものを、遠き様に見なし給ひけり。あれこそ、播磨の國書寫の嶽の見ゆるや」とぞ申しける。「山は書寫の山なれども、義經心にかゝる事のあるは、此の山の西の方より黒雲の俄に、山上へきれてかゝる。日も西にかたぶき候はゞ、定めて大風ふくべし、と覺ゆるぞ。自然に風落ち來たらば、いかなる島蔭、荒磯にも、舟を馳せあけて、人の命を助けよ」

尋常に―立
派に

小具足―常
の具足著て
鎧の胴を著
ぬこと
毛つかへ―
馬の毛を揃
へたること

れば、「とりぐにこそ候へども、菊池こそ、猶も頼もしき者にて候へ。但し猛勢なる事は、緒方こそまさりて候ふらん」と申しければ、「菊池頼まれよ」と仰せられければ、菊池の次郎申しけるは、「尤も仰にしたがひ参らせたく候へども、子にて候ふ者を關東へ参らせて候ふ間、父子兩方へまゐり候はん事、いかゞ候ふべきや」と申しければ、「さらば討て」とて、武藏坊、伊勢の三郎を大將軍にて、菊池が宿所へ押し寄せける。菊池は、矢種ある程射つくして、家に火をかけて自害してけり。さてこそ、緒方の三郎参りけれ。判官、叔父備前守を伴ひて、十一月三日に、都を出で給ふ。「義經が國入りの初なれば、引き繕へ」とて、尋常にこそ出で立たれけれ。其の比、世にもてなしける磯の禪師が娘に、靜といふ白拍子を狩装束せさせてぞ、召し具せられける。我が身は、赤地の錦の直垂に、小具足ばかりにて、黒き馬のふとく遅しきに、尾がみ飽くまでたよひたるに、白覆輪の鞍置きてぞ乗り給ふ。黒糸おどしの鎧きて、黒き馬に白覆輪の鞍おきて、乗りたる者五十騎、萌黄織の鎧に、鹿毛なる馬に乗つたる者五十騎、毛つかへに其の數うたせて、其の後は打ちこみに百騎二百騎うちける。以上其の勢一萬五千餘騎なり。西國に聞えたる月丸といふ大船に、五百人の勢を取りのせて、財寶をつみ、二十五正の

てうしなる
べき間―朝
旨を下さる
べきに由つ
て
大物―攝津

り候ひしは、先祖の恥をきよめんする事にて候へども、逆鱗を休め奉らんが爲なり。然れば朝恩として抽賞をも行はるべき所に、鎌倉の源二位、義經に野心を存するによつて、追討の爲に官軍をはなち遣す由承り候ふ。所詮相坂の關より西を給はるべき由をこそ、存じ候へども、四國九國ばかりを給はりて、罷り下り候はばや」と申されける。是によつて理なるてうしなるべき間、公卿詮議あり。各申されけるは、「義經が申す所も不便なれども、是に宣旨を下されば、源二位の憤ふかゝるべし。また宣旨を下されずば、木曾が都にてふるまひし如く義經がふるまはゞ、世は代にても候ふまじ。所詮、とても源二位討手を上せ候ふなる上は、義經に宣旨を給ひ下して、近國の源氏どもに仰せ付け、大物にて討たせらるべく候ふや」と各申されければ、宣旨を下されけり。かゝりければ、判官は西國へ下らん、とて、出で立ち給ふ。折ふし西國の兵ども、其の數おほく上りたりける中にも、緒方の三郎維義が上りけるを召して、「九國を給はりて下るなり。汝たのまれてや」と仰せられければ、維義、申しけるは、菊池の次郎折節上洛仕りて候ふなれば、定めて召され候はんすらん。菊池を誅せられば、仰に隨ひ申すべきよし申す。判官は、辨慶伊勢の三郎を召して、「菊池と、緒方と、何れにて有るらん」と仰せられけ

ける。判官はうぐわん聞こし召して、「土佐は剛がうの者にて有りけるや。さてこそ鎌倉殿たのの頼み給ふらめ。大事めいしうごの囚人めしうごを切るべきやらん、切るまじきやらん。それ武藏むさしはからへ」と仰おほせられければ、「大力おほぢからを獄屋ごくやに籠置こめおきて、ふみ破やぶりては詮せんなし。頓やがて斬きれ」とて、喜三太きさんだに縄なはどりさせて、六條河原でうがはらに引き出し、駿河次郎たぢは大刀たちどりにて、斬きらせけり。相摸さもうの八郎おなじく、同太郎おなじくは十九、いほうの五郎ごろうは三十三にて斬きられけり。打ち洩もろされたる者ども、下りて鎌倉殿かまくらでんに参りて、「土佐は仕損しそんじ、判官はうぐわんご殿に斬きられ参まゐらせ候こうひぬ」と申せば、「頼朝ようそうが代官だいくわんに上のほせたる者おきを押おさへて切るこそ、遺恨ゐこんなれ」と仰おほせられければ、侍さむらいども、「斬きり給ふこそことわりよ。現在げんざいの討手うってなれば」と皆人々みな申しける。

五 義經都落よしつねみやこの事

とにもかくにも、討手うってを上のほせよ、とて、北條きたじょうの四郎時政しやうじまうを大將軍たいしやうにて都みやこへ上ある。畠山はたけやまは、辭退じたい申まうしたりけれども、重ねて御説ごせつ有りければ、武藏七黨むさしななだうを相具あひぐして、尾張おとの國熱田あつたの宮みやにはせ向むかふ。後陣ごじんは山田やまだの四郎與政しやうよしまう、一千餘騎せんにじゆきにて關東くわんとうを門出かどいす、と聞えけり。十一月一日いちにち大夫たいふの判官はうぐわん、三位を以もつて院いんへ奏聞そうもんせられけるは、「義經命よしつねいのちを棄すてよ、朝敵てうてきを退治たいぢ仕

そば一岨、
山腹の險路

處を尋ねありく程に、喜三太は、「むかひに見え候ふ伏木に、上りて立ちたり。鷲尾殿の立ち給へる後の大木のうつろに、物のはたらく様に候ふこそ、あやしく覺え候ふ」と申せば、太刀打ち振りて見れば、土佐は、叶はじと思ひけん、木のうつろよりつと出て、眞下にくだる。辨慶これを見て、大手を廣げて、「いかに土佐、何處まで」と追つかくる。土佐もきこゆる足早きものなれば、辨慶より三段許さきだつ。はるかなる谷の底にて、「片岡爰に待つぞ。たゞ追ひ下せ」と申しける。此の聲を聞きて、叶はじ、と思ひけん、そばをかい回りて上りけるを、忠信が大雁股をさしはけて、あますまじとて下り矢さきに、小引に引きてさしあてたり。土佐は、腹をも切らずして、武藏坊にさうなく取られにけり。さて鞍馬へ具して行き、東光坊より大衆五十人付けてぞ、送られける。「土佐を搦めて参りて候ふ」と申しければ、大庭に引きするさせ、縁に出でさせ給ひて、「いかに昌俊、起請は書くよりして、しるし有るものを、何しに書きたるぞ。生きて歸りたくば、歸さんするぞ。如何」と仰せられければ、頭地に付けて、「猩々は血を惜む、犀は角を惜む。日本の武士は名を惜むと申す事の候ふ。生きて歸りて侍共に二度面をむくべしとも覺え候はず。たゞ御恩には、疾くく首を召され候へ」とぞ申し

さんづー馬
の尻尾の上
ゐのめー鍼
の頭の影り
こみ

うつろー空
洞

とよる。叶はじとや思ひけん、鞭を當てぞ落ちける。「きたなし餘すまじ」とておつかけ
大まさかりを以つて開いて丁ど打つ。馬のさんづにゐのめの隠るゝ程打ちこみ、えいと
いひてぞ引きたりける。馬こらへずしてどうど臥す。五郎を取つて押へ、上帯にてから
めて参りける。土佐の太郎と、一所につなぎ置く。昌俊は、身方の打たれ、あるひは落
ち行くを見て、我は太郎五郎を捕られて、生きて何かせん、とや思ひけん、其の勢十七騎
にて、思ひ切つて戦ひける。かなはじとや思ひけん、徒武者かけ散して、六條河原まで
打つて出で、十七騎が十騎は落ちて、七騎になる。鴨川を上りに、鞍馬をさして落ち行
く。別當は、判官殿の御師匠、衆徒は、契深くおはしければ、後は知らず。判官殿の思
し召す所もこそあれ、とて、鞍馬百坊おこつて、追ひ手と一つになりて尋ねけり。判官、
「無下なる者どもかな。土佐め程の者をにがしける無念さよ。しやつを逃すな」と、仰せ
られければ、堀川殿をば、在京の者どもに守護させて、判官の侍一人も残らず、追ひ
かけける。土佐は、鞍馬をもおひ出されて僧正が谷にぞこもりける。大勢つどいて攻めけ
れば、鎧をば貴船の大明神にぬぎて参らせ、主は大木のうつろに逃げ入りける。辨慶、
片岡、土佐を失ひて、「何ともあれ、是をにがしては、君の御氣色もいかゞ」とて、此處彼

泉殿―池水
に向ひて造
れる屋

ころすこそ安けれ。生きながら取れ、と仰せ蒙り候ふこそ、以つての外の大事なれ。さり
ながら」ととて、大長刀を持ちて、走り出でければ、辨慶「あはや、彼奴に先せられて
叶はじ」と、鉞ひつさけて飛んで出づ。喜三太は、卯の花垣のさきをつい通りて、泉殿
の縁のきはを西をさしてぞ出でける。爰に黃月毛なる馬に乗つたる者、馬に息をつかせ
て、弓杖にすがりてひかへたり。喜三太はしりよりて、「爰にひかへたるは、誰」と問ひ
ければ、「土佐が嫡子、土佐の太郎、生年十九」と名乗つて歩ませむかふ。「是こそ喜三
太よ」ととつとよる。叶はじと思ひけん、馬の鼻をかへして落ちけるを、餘すまじ
とて追つかけたり。早打の長馳したる馬の、夜もすがら軍にはせめたりけり。揉めど
ももめども、一所にて踊るやうなり。大長刀を以つて開いて丁ど斬る。左右のからすが
しら、つと斬る。馬さかさまに轉びければ、主は馬より下にぞしかれける。取りておさ
へて、鎧の上帶解きて、疵一つもつけず、搦めて参るを、下部に仰せて、御馬屋の柱に、
立ちながら結びつけさせられける。辨慶、喜三太にさきをせられて、安からず思ひて、
走りまはる所に、南の御縁に伏繩目の鎧きたる者、一騎ひかへたり。辨慶はしりよりて
「誰」と問ふ。「土佐がいとこ、いほうの五郎盛直」とぞ申しける。「是こそ辨慶よ」ととつ

むげ―基だ
つまらぬ

常の仰を―
母に對して
不斷御詞懸
けられたし

ひつるに」と仰せられて、御涙にむせび給へば、源三よに嬉しけに打ち領きたり。鷲尾の七郎、近くありけるが、「いかに源三、弓矢取る者の、矢一筋にて死するは、むけなる事ぞ。故郷へ何事も申し遣はさぬか」といひければ、返事にも及ばず、「和殿の枕におはしまし候ふは、君にて御座候ふ」と申しければ、源三息の下より申しける。「まさしく君の御膝もとにて死に候へば、一期の面目なり。今は何事をか思ひ置く事の候ふべき。なれども過ぎにし春の比、親にて候ふ者の、信濃へ下りしに、かまへて暇申して、冬の比は下れと申し候ふ間、承ると申して候ひしに、下人が空しき骨を持ちて下り、母に見せて候はゞ、さこそ悲み候はん。つらく是をこそ。不便に思ひ候へとよ。君都におはしまさん程は、常の仰せを蒙りたく候へ」と申せば、「それ心やすく思ひ候へ。常々問はする」と仰せられければ、よに嬉しけにて、涙をながしける。限と見えしかば、鷲尾よりて、念佛をすゝめければ、高聲に申し、君の御膝の上にして、生年二十五にて失せにけり。判官、辨慶、喜三太を召して、「軍はいか様にしなしたるぞ」と仰せられければ、「土佐が勢は、二三十騎許こそ」と申せば、「江田を打たせたるが安からぬに、土佐めが一類一人も洩さず、命な殺しそ。生捕りて參らせよ」と仰せられける。喜三太申しけるは、「敵射

御不審—御勘當

佐が勢の中にかかりて、首二つ生捕り、三人して見参に入る。伊勢の三郎、生捕二人、首三つ取つて参らする。龜井の六郎、備前の平四郎二人うちて参る。彼等を初として、生捕、ぶん取り、思ひくゝにぞしける。その中にも軍のあはれなりしは、江田の源三にてとどめたり。宵には御不審にて、京極にありけるが、堀川殿に軍有り、と聞きて馳せ参り、敵二人が首取りて、「武藏坊、明日見参に入りて給ひ候へ」といひて、又戦の陣に出でけるが、土佐が射ける矢に、首の骨の中せめてぞ射られける。はけたる矢を打ち上げて、引かんくゝとしけるが、只弱りにぞ弱りける。太刀を抜き杖につき、はふくゝ参りて、縁へ上らんとしけれども、上りかねて、「誰か御渡り候ふ」と申しければ、御前なる女房立ち出でて、「何事ぞ」と答へければ、「江田の源三にて候ふ。大事の手負うて、今を限と存じ候ふ。見参に入れてたび候へ」と申しければ、判官、是を聞き給ひて、浅ましけに思召して、火を灯しさし上げて御覽すれば、黒つばの矢の、おびたゞしかりけるを、射立てられてぞ伏したりける。判官、「いかに人々」と仰せられければ、息の下にて申す様、「御不審蒙りて候へども、今は最後にて候ふ。御赦免蒙り、黄泉を心安く、参り候はばや」と申しければ、「もとより汝久しく勘當すべきや。たゞ一旦の事をこそい

も見給へ。天兒屋根の御苗裔、熊野別當辨せうが嫡子に、西塔の武藏坊辨慶とて、判官の御内に、一人當千の者にて候ふ」とぞ申しける。判官、「興ある法師のたはぶれかな。時にこそよれ」と仰せられける。「さは候へども、仰せ蒙り候へば、爰にて名乗り申すべき」と猶も戯言をぞ申しける。判官、「されば土佐に寄せられたるぞ」。辨慶、「さしも申しつる事を、聞こし召し入れ給はで、御用心も候はで、左右なくきやつばらを門外まで、馬の蹄を向けさせぬるこそ、安からず候へ」と申しければ、「いかにもして、きやつを生取りて見んずる」と仰せられければ、「たゞ置かせ給へ。しやつがあらん方に、辨慶に向ひて、つかんで見参に入れ候はん」と申しければ、「人を見て、人を見るにも、辨慶が様なる人こそなけれ。喜三太めに、軍させたる事はなけれども、軍には誰にも劣らじ。大將軍は御邊に奉るぞ。軍は喜三太にせさせよ」と仰せられける。喜三太は、櫓に上りて大音あけて申しけるは、「六條殿に夜討入りたり。御内の人々はなきか。在京の人はなきか。只今参らぬ輩は、明日は、謀叛の與黨なるべし」と呼はりける。爰に聞き付け、かしこに聞き付け、京白川一つになりて騒動す。判官殿の侍どもを初めとして、此處彼處よりはせ來る。土佐が勢をうちにとり籠めて、散々に攻む。片岡の八郎、土

され一札

ば、草摺くさずりのしどろなるひやうし、鎧よろひのさねよきに、太刀たちはき棒打ぼううちちつきて、高足駄たかあしだはきて、殿の方とのほうからりくとしてぞ参りける。大御門おほみかどは貫くわんの本きさよれたり、と思ひて小門こもんよりさし入り、御馬屋みうまやの後にうしろにて聞きければ、大庭おほにはに馬あしあきの足音あしおと、六種震動ろくしゆしんどうの如し。あら心憂うや、早敵はやてきのよせたりける物を、と思ひて、御馬屋みうまやにさし入りて見れば、大黒おほぐろはなし。今宵よひの戦いくさに召よされける、と思ひて、東の中門とうちもんにつと上りて見れば、判官はんぐわん、喜三きさん太許御馬たしごまぞひにて、たゞ一騎いつきひかへ給へり。辨慶べんけい、是を見て、「あら心安こころやすや。さりながら、憎にくさもにくや。さしも人の申しつるを聞き給はで、肝きもつぶし候はん」とつぶやき言ことして、縁えんの板いたふみならし、西にしへ向むきて、どうくど行きける。判官はんぐわん、あはやと思し召めして、さしのぞき見給へば、大だいの法師ほうしの、鎧よろひ著きたるにぞありける。土佐とさめが、後うしろより入りけるか、とて、矢やさしはけて馬打うまうちちよせ、「あれに通とおる法師ほうしは誰たれなるらん。名のれ。名のらで過失あやまちせられ候ふな」と仰おほせられけれども、札さねよき鎧よろひなりければ、さうなく裏うらはかよじ。と思ひて、音おともせず。射損いそんする事も有り、と思し召めし、矢やをば簾えきらにさし、太刀たちのつかに手をかけ、ずはとぬいて、「誰たれぞ、名のらできらるよな」とて、頓やがて近付きよづき給へば、此の殿は、打物取うちものつては、燐はんくわい、張良ちやうりやうにも劣おとらぬ人ぞ、と思ひて、「遠さほくは音にも聞き給へ。今は近し、目に

うらはかゝ
じ一裏へは
通らじ

はぶくらせ
めて一矢羽
の所までぎ
つしりと

は、よりて組め」とぞ申しける。土佐、是を聞きて、安からず思ひければ、戸びらの隙よりねらひよりて、十三束よつびき、ひやうど射る。喜三太が弓手の太刀打を、はぶくらせめてつと射通す。かひかなぐりて棄て、喜三太、弓をがはと投げすて、大長刀の真中取つて、戸びらを左右へおし開き、「よれや者ども」と待つ所に、敵鬚を竝べて、をめてかけ入る。諸手ひらいて、さんぐに斬る。馬の平首、胸板、前の膝をさんざんに斬られて、馬倒れければ、主はさかさまに落つる所を、長刀をおつ取りのべ、すんど切つてぞ落しける。其の外向ふ者共、重手を負ひて引き退く。されども大勢にて攻めければ、走り歸りて、御馬の口にすがる。さしのぞき御覽すれば、胸板より下は、血にぞなりたる。「おのれは手を負ふたるか」「さん候ふ」と申す。「大事の手ならば、退け」と仰せられければ、「合戦の庭に出でて、死するは弓矢の面目なり」と申しければ、「彼奴は健氣者」と宣ひける。「何ともあれ、おのれと義經とだにあらば」とぞ、仰せられける。されども、判官も、かけ出で給はず、土佐も左右なくかけも入らず、兩方しばし休らふ所に、武藏坊、六條の宿所に臥したりけるが、今宵は何とやらん、夜こそ寢られね。さても土佐こそ、京に有るぞかし。殿の方覺束なし。めぐりて歸らばや、と思ひけれ

て大筋をひきたるもの
白篋―白き矢竹
白木の弓―漆を塗らす
籐をも巻かぬ弓

鞠のかより―就鞠の時
の目標にする樹木

やと思ひて、出居の柱におしあてゝ、えいやと張り、鐘を撞くやうに、弦打ちやうくとして、大庭にぞ走り出でけり。下薦なれども弓矢取る事は、純友、將門、養由にも劣らぬ程の上手なり。四人張に十四束をぞ射ける。我が爲にはよし、と悦びて、門外に出で向つて、貫の木をはづし、戸びらの片方おし開き見ければ、限なき月に、甲の星もきらとして、内甲すきて、射よけにこそ見えたりける。片膝つき矢つぎ早に、指しつめ引きつめ、さんざんに射る。土佐が眞先かけたる郎等、五六騎射おとし、矢庭に二人ぞ失せにける。土佐、叶はじとや思ひけん、さつと引きにけり。「土佐、きたなし。かくて鎌倉殿の御代官はするか」とて、戸びらの陰にひかへたり。土佐是を聞き、「かく宣ふは誰人ぞ。名乗り給へ。かく申すはすゝき黨に、土佐坊昌俊なり。鎌倉殿の御代官と名乗れれども、下薦なれば、敵のきらふ事もありなん」と音もせず。かくて判官は、大黒といふ馬に、金覆輪の鞍おかせて、赤地の錦の直垂に、緋緘の鎧著、蹴形打つたる白星の甲の緒をしめ、金作りの太刀はいて、切斑の征矢おひて、重籐の弓の眞中にぎり、馬引きよせ、召して大庭にかけ出で、鞠のかよりにて、喜三太と召しければ、喜三太申しけるは、「下なき下郎の、今夜のさきかけ承りて候ふなり。生年二十三、我と思はん者

きせなが—
大將の著ろ
鏡

さうなく—
容易に

大引兩—横
に筋を引く
を引兩とい
ふ、是は直
垂の脊より
兩袖へかけ

土佐が大勢おしよせ、関をどつとつくる。靜はときの聲におどろき、判官殿をおしうご
かして、「敵のよせたる」と申せども、前後も知らず臥し給ふ。唐櫃のふたをあけて、御
きせながを取り出し、御身に投げかけたりければ、かつばと起き給ひ、「何事やらん」と
宣へば、「敵のよせて候ふぞ」と申しければ、「あはれ女の心程、けしからぬ物はなし。思
ふに土佐めこそ寄せつらん。人々はおはせぬか。あれ追ひはらへ」と宣ひけり、「侍一
人もなし。宵に御いとま給はりて、皆々宿へ歸り給ひぬ」と申しければ、「さぞ有るらん。
さるにても、男はなきか」と仰せられければ、女房達はしり回りて、下部に喜三太許な
り。「喜三太參れ」と召されければ、南面の沓ぬぎに、畏つてぞ候ひける。「近う參れ」と
召しけれども、日比參らぬ所なれば、左右なく參り得ず。「きやつは何とて參らぬ」と仰
せければ、葎の際まで參りたり。「義經が出でんほど、汝鎧著て、出で向ひて、義經を待
ちつけよ」と仰せられける。「承り候ふ」とて、大引兩の直垂に、逆澤瀉の腹巻著て、長刀
ばかりをおつ取り、下へ飛んで下りけるが、「あはれ御出居の方に、御弓の候ふらん」と
申せば、「入りて見よ」と仰せける。走り入りて見ければ、白簷に鶴の羽を以てはぎたる
くつまきの上十四束に拵へて、白木の弓、握り太なるを添へてぞ置きたる。あはれもの

はした者—
下司

おちにける
—白狀せり
いんぢ—印
地、あふれ
者

判官は、終日の酒盛に酔ひ給ひて、前後も知らず臥し給ふ。其の比判官は、靜といふ遊女を召し置かれたり。賢々しき者にて、是程の大事を聞きながら、斯様に打ちとけ給ふも、御運の末やらん、と思ひ、はした者を一人、土佐が宿所へ遣はして、「氣色を見て參れ」と有りければ、はした者行きて見るに、たゞ今甲の緒をしめ、馬ひつ立て、既に出でんとす。猶も立ち入りて奥にて見すまし申さん、とて、ふるひく入る程に、土佐がしもべども是を見て、「此處なる女は、たゞ者ならず」と申しければ、「さも有らん召し取れとて、かの女をとらへ、上げつ下しつ拷問す。暫らくは落ちざりけれども、餘りにつよく責められて、ありのまゝにぞおちにける。斯様の者を許しては悪しかるべし、とて、頓て刺し殺してすてにけり。土佐が勢百騎、白川のいんぢ五十人、相かたらひ、京の案内者として、十月十七日の丑の刻ばかりに、六條堀川におしよせたり。かくて堀川の御所には、今宵は夜も更け、何事もあらじ、と各宿へ歸る。武藏坊、片岡兩人は、六條なる女の許へ行きてなし。佐藤四郎、伊勢の三郎は、室町なる女の許へ行きてなし。根尾、鷺尾は、堀川の宿へ行きてなし。其の夜は、下部に、喜三太と申す者許ぞ候ひける。判官も、其の夜は更くるまで酒もりして、前後も知らず臥し給ひける。かゝる所に、

そればや争ふ云々それ猶も抗辯するか

様の仁、一人も召し具せず候ふ。熊野三つの御山の間、山賊みちくへ候ふと承り候ふ間、若きやつばらを少々召し具して候ふ。それを人の申し候はん」判官仰せられけるは、「汝が下部どもの、明日京都は大戦にてあらんずるぞ、と言ひけるぞ。それはや争ふ」と仰せられければ、土佐、申しけるは、「斯様に人の無實を申し付くるに置いては、私には陳じ開きがたく候ふ。御免蒙り候うて、起請文をかき候はん」と申しければ、判官「神は非禮をうけ給はずといへば、疾くく起請をかけ。免すべし」との御説にて、熊野の牛王七枚にかよせ、「三枚は八幡宮に納め、一枚は熊野に納め、今三枚は土佐が五體にをさめよ」とて、焼きて灰になして飲みにけり。「此の上は」とて許されぬ。土佐ゆるされて出でざまに、時刻うつしてこそ、冥罰も神罰も蒙らめ。今宵をば過すまじ物を、と思ひける。宿へ歸りて、今宵寄せずば叶ふまじきとて、各ひしめきける。判官の御前には、武藏を始めとして、侍ども申しけるは、「起請と申すは、少事にこそ書かすれ。是程の大事に、今宵は御用心有るべく候ふ」と申せば、判官は、「何程の事かあらん」と宣ひける。「さりながら、今宵は打ち解くる事候ふまじ」と申せば、判官、「今宵何事も有るならば、只義經にまかせよ。侍どもは皆々宿々に歸れ」と宣ひければ、各宿所へぞ歸りける。

看病—療養

何れか君にて云々—義經も鎌倉殿もともに君なれば二心なしとの意

慶が馬のある上は、たゞく是に乗り給へ」とて、土佐が小腕を、むずと取り引きたつる。土佐も聞ゆる大力なりしかども、辨慶に引き立てられて、縁のきはまで出でにける。武藏が下人心得て、縁のきはに馬を引きよせたりければ、辨慶、土佐がよわ腰、むずと抱き、鞍壺にどうと乗せ、我が身も後馬にむすとのり、手綱土佐に取らせて叶はじ、と思ひ、うしろより取り、鞭に鐙を合せて、六條堀川に馳せつき、其の由申し上げたりければ、判官、南面の廣廂に出で向ひ給ひて、土佐を近く召して、事の仔細を尋ね給ふ。土佐陳じ申しけるやうは、「鎌倉殿の御代官に、熊野に参り候ふ。江田殿に申し上げ候ふ如く、とく参り候うて、鎌倉の様をも申し上げ候はん、と存じ候ひつれども、路次より風の心地にて候ふ間、少し看病仕り罷り出でん、と存じ候ふ所へ、御使重り候ふ程に、恐れ存じ候うて参りて候ふ」と申す。判官聞こし召し、「おのれは、義經追討の使として、上るところを聞け。勢をばいか程持ちたるぞ」と、仰せられければ、土佐、謹んで申しけるは、「ゆめく存じよらざる事にて候ふ。人の讒言にてぞ候ふらん。何れか君にて渡らせ給はぬ。定めて權現も、示現しましく候はん」と申せば、「西國の合戦に疵をかうぶり、未だ其の疵愈えぬ輩が、生疵持ちながら、熊野参詣に苦しからぬか」と仰せられければ、「左

れめ—睨み

と仰せられければ、「畏つて承り候ふ」とて、御前を罷り立ち、思ふ程こそ出で立ちけれ。
黒革緘の鎧着、五枚冑の緒をしめ、四尺五寸の太刀をはき、判官殿の祕藏せられたる
大黒といふ名馬に、裸背馬にぞ乗りにける。人數多にて叶ふまじ、と雜色一人召し具し
て、土佐が宿へぞ打ち入りける。土佐が居ける座敷の縁の上にゆらりとあがり、簾をさ
つと打ちあけて、座敷の體を見ければ、郎等ども七八十人許並み居て、夜討の評定をぞ
しける。もとより臆せぬ武藏にて、郎等共をはたと睨み、「人々御免候へ」といふまゝに、
銚子土器蹴ちらかし、土佐が居たる横座に、むすど鎧の草摺を居かけて、座敷の體をね
め回はし、其の後土佐をはたとにらみ、「いかに御邊は、いかなる御代官なりとも、在京
あるならば、まづ堀川殿へ参りて、關東の仔細を申さるべきに、今まで遅参は尾籠の致
す所なり」とさも荒けなくいひければ、土佐坊、仔細をいはんとする所に、辨慶いはせ
も果てず、「申すべき事あらば、君の御前にて、随分陳じ申されよ。出でさせ給へ」と手
を取つて引きたつる。兵ども、是を見て色を損じ、土佐思ひ切り給ふ程ならば、打ち合
はんずる體なれども、さすがに案ふかき土佐坊にて、さらぬ體にもてなし、「やがて歸ら
ん」と申しける程に、侍共も力及ばず、「暫く、馬に鞍置かせん」といひけるを、「辨

三つの御山
—本宮新宮
那智の熊野
三山

をめたる—
臆したる

いしくも—
よくも

る。土佐坊ば、脇息によりかゝりて居ける所へ、江田、つよと行きて、仰せ含めらるゝ旨をいひければ、土佐、陳じ申しけるやうは、「先珍らしう候ふ江田殿、さて某上洛の事、別の仔細にて候はず。鎌倉殿、三つの御山へ、宿願の御事候うて、御代官に熊野へ参詣仕り候ふ。鎌倉には、さしたる事も候はず。最前に参じ候はん、と随分存じ候ひしに、路次より風の心地あしく候ふ故、今夜養生を仕り、明日参じ、御目見えを仕るべき由、申し含め、只今子にて候ふ者を進じ候はんと存ずる折節、御使に預り、畏り入り候ふ由申させ給へ」と申しければ、江田は歸り参り、この由を申す。判官殿、日比は侍共に向ひ、御言葉を荒々しくも、宣はざりしかども、たゞ今は大きに怒つて、宣ひけるは、「土佐め程の法師、異議をいはせけるは、偏に御邊がをめたるによつてなり。向後の出仕無益なり」と大きに怒り給へば、江田は、御前をまかり立ち、宿所へもかへらず、御前を隔てゝ居たりけり。武藏坊は、御酒宴過ぎし時、我が宿所へ歸りしが、御内にも無くおはすらんと思ひて参りける。判官御覽じて、「いしくも参り給ひ候ふ。たゞ今かゝる不思議こそあれ。其の法師、急ぎ引つ立て参れ、とて、江田の源三を遣はして候へば、土佐が返事に隨ひて、歸り來るなり。御邊ゆき向つて、土佐を召してまゐれ」

くだんの事
―彼の事件

披露―他言

せんに―先
に

尾籠―をこ
の宛字を音
讀して不都
合の意とす

かき人のいひやうかな。一日も逗留あらば、見んすらん」といひければ、今一人の男の申しけるは、「和殿はらも今宵ばかりこそ静ならんすれ。明日は都はくだんの事にて、大亂にてあらんすれ。されば我々までも如何あらんすらん、と恐しさよ」とまうしければ、源三これを聞きて、かれらが跡に付きて物語をぞしたりける。「是も地體は、相摸の國の者にて候ひしが、主に付きて、在京して候ふが、我が國の人と聞けば、いとどなつかしく存じ候ふ」などと賺されて、同國の人と聞けば、申し候ふぞ。實に鎌倉殿、御弟九郎判官殿を、討ち参らせよとの討手の御使を給はりて上られ候ふ。披露は詮なく候ふ」と申しける。江田是を聞きて、我が宿所へ歸るに及ばず、堀川殿に走り参り、此の由を申し上ぐ。判官は少しも騒がず、「さこそあらんすらん。さりながら御邊行き向ひて、土佐にいはんするやうは、是より關東に下したる者は、京都の仔細をせんに鎌倉殿へ申すべし。又關東より上らん者は、最前に義經が許に來りて、事の仔細を申すべき所に、今まで遅く参る、尾籠なり。きつと参るべき、と時刻をうつさず、召して参れ」と仰せられける。江田承りて、土佐が宿所油の小路に行きて見れば、馬ども皆鞍おろし、湯洗ひなどしける。また傍を見れば屈強の兵士、五六十人並み居て、何とは知らず評定しけ

やうにて、五十六騎にて、我が身は京へ入りけり。残りのこは引きさがりて入りにけり。祇ぎ園をん大路おほぢを通りて、河原かはらを打ち渡りて、東の洞院とういんを下りに打つ程に、判官殿はんぐわんどのの御内に、信濃の國の住人に、江田えだの源三げんざうといふ者あり。三條京極でうきやうごくの女の許もとに通ひけるが、堀川殿ほりかはどのを出でて行くほどに、五條ごでうの東の洞院とういんにて、はたと行き逢ひたり。人の屋陰やかげのほの暗ぐらき所にて見ければ、熊野くまのまうでと見なして、いづくよりの道者だうじややらん、と先陣せんじんをとほして、後陣ごじんを見れば、二階堂にかいだうの土佐と見なして、土佐が此この比くら、大勢たいせいにて、熊野詣くまのまうですべしとこそ覺えね、と思ひ案あんするに、吾等が君と鎌倉殿と御不和おんふわになり給へば、何となくよりて問はばや、と思ひけれども、ありのまゝにはよもいはじ。なか／＼知らぬ由して、土佐が下人げにんめをすかして問はゞや、と思ひて待つ所に、案あんの如く、後おくればせの者ども、「六條ろくじょうの坊門油ほうもんあぶらの小路こうぢへは、何方いつかたへ行くぞ」と問ひければ、しか／＼に教をしへける。江田えだは、彼そでが袖そでをひかへて申しけるは、「これは何れいづの國の、誰たれと申す御大名おだいみやうぞ」と問ひければ、「相摸いもちの國、二階堂にかいだう土佐殿」とぞ申しける。跡あとより來る者申しけるは、「さもあれ、身みの一期いちご、見物けんぶつは京きやうとこそ聞くに、何ぞ日中にちちうに京入りきやういをばし給はで、道みちにて目をくらし給ふぞ。ことさら重荷おもには持ちたり、夜は暗くらし」と呺つゐやきければ、今一人がいひけるは、「心みじ

京上りして
云々―京上
りして御奉
公を終へ知
行所へ就か
む

打ち任せて
の―尋常の
しで―紙に
て切りたる
幣

しけるは、「鎌倉殿より、勳功をこそ賜はりて候へ。急ぎ京のほりして、所知入りせん。疾く下りて用意せよ」とぞ申しける。「それは常々の奉公か、又何によりての勳功に候ふぞ」と申せば、「九郎判官殿を討ちて参らせよとの仰せ承りて候ふ」といひければ、物に心得たる者は、「安房上總も、命ありてこそ取らんすれ。生きてふたたび歸らばこそ」と申す者もあり。或は、「主の世におはせば、我等も、などか世にならざるらん」と勇む者もあり。されば心はさまざまなり。土佐は、もとより賢き者なれば、打ち任せての京上りの體にては叶ふまじ、とて、白布を持つて、皆淨衣を拵へて、烏帽子にしでを付けさせ、法師には頭巾にしでを付け、引かせたる馬にも、尾かみにしで付け、神馬と名づけ引きける。鎧腹巻を入れたる唐櫃を、薦にて包み注連を引き、熊野の初穂物といふ札を付けたり。鎌倉殿の吉日、判官殿の悪日を選び、九十三騎にて鎌倉を立ちて、其の日は酒匂の宿にぞ著きたりける。當國の一の宮と申すは、梶原が知行の所なり。嫡子の源太をくだして、白栗毛なる馬白茸毛なる馬二匹に、白鞍置せてぞひきたる。これにもしで付け、神馬と名付けたり。夜を日につぎて打つ程に、九日と申すに京に著く。いまだ日高しとて、四の宮河原などにて日をくらし、九十三騎を三手に分けて、あからさまなる

蛭卷―長刀
柄などを藤
にて間を置
き巻くこと

楯つき軍
對抗の戦

と申す。鎌倉殿、「さればこそ、土佐より外に誰か向ふべき、と思ひつるに、すこしも違はず。源太これへ参り候へ」と仰せられければ、畏つてぞ居たりける。「ありつる物は、如何に」と仰せありければ、納殿の方よりして、身は一尺二寸ありける手鉾の、蛭卷白くしたるを、細貝を目貫にしたるを持ちて参る。「土佐が膝の上に置け」とぞ宣ひける。「これは大和の千手院につくらせて、祕藏して持ちたれども、頼朝が敵打つには、束長き物を先とす。和泉の判官を討ちし時に、やすく首を取りて、参らせたなり。これを持ちてのほり、九郎が首をさし貫き参らせよ」と仰せられけるは、情なくぞ聞えける。梶原を召して、「安房上總の者ども、土佐が供せよ」とぞ仰せられける。承りて、詮なき多勢かな。させる寄合の、楯つき軍はすまじい。ねらひよりて夜討にせん、と思ひければ、「大勢は詮なく候ふ。土佐が手勢許りにて、上り候はん」と申す。「手勢はいか程あるぞ」と宣へば、「百人ばかりは候ふらん」「さては不足なし」とぞ仰せられける。土佐思ひけるは、大勢を連れ上りなば、若ししおほせたらん時、勳功を配分せざらんも悪し。せんとすれば、安房、上總、畠多く田はすくなし。徳分すくなくて不足なり、と酒飲むかた口に案じつと、御引出物たまはりて、二階堂に歸り、家の子郎等をよびて申

四 土佐坊義經の討手に上る事

「二階堂の土佐坊召せ」とて、召されけり。鎌倉殿よま所に御座まして、土佐坊召され参る。梶原「土佐参じて候ふ」と申しければ、鎌倉殿是へと召す。御前にかしこまる。源太を召して、「土佐に酒飲せよ」と御説ありければ、梶原、殊の外にもてなしけり。鎌倉殿仰せられけるは、「和田、畠山に仰せけれども、あへてこれを用ひず。九郎が都に居て、院の御氣色よきまゝに、世を亂さんとする間、川越の太郎に仰せけれども、縁あればとて用ひず。土佐より外に頼むべき者なし。しかも都の案内者なり。上りて九郎を打ちて参らせよ。其の勤功には、安房、上總を給はるべき」とぞ仰せられける。土佐申しけるは、「かしこまり承り候ふ。御一門をほろほし奉れ」と仰せを蒙り候ふこそ、歎き入り存じ候ふ」と申しければ、鎌倉殿、氣色大きに變り、惡しく見えさせ給へば、土佐謹んでこそ候ひける。重ねて仰せられけるは、「さては九郎に組したるにや」と仰せければ、詮する所、親の首切るも、君の命なり。上と上との合戦には、侍、命を捨てずしては討つべきにあらず、と思ひ、「さ候はど、仰せに隨ひ候はん。恐にて候へば、色代ばかり」

妄語破禁の
罪を糺す熊
野の神符に
て熊野牛王
寶印の六字
と神使たる
烏七十五隻
とを印す

冥道―神佛

の裏を以て、全く野心を挾まざるむね、日本國中大小の神祇、冥道を請じおどろかし奉りて、數通の起請文をかき進ずるといへども、猶以て御宥免なし。それ我が國は神國なり。神は非禮をうけ給はず。頼む所他にあらず、偏に貴殿廣大の御慈悲を仰ぎ、便宜を窺ひ、上聞に達せしめ、祕計をめぐらし、過誤なきむねに、宥ぜられ、放免に預らば、積善の餘慶家門に及び、榮花を長く子孫に傳へ、よつて年來の愁眉を開き、一期の安寧を得んこと書紙につくさず。併しながら、省略せしめ候ひをはんぬ。義經、誠恐謹言。

元暦二年六月五日

源 義 經

進上 因幡守殿

とぞ書かれたる。これを聞こし召して、二位殿を始め奉りて、御前の女房達に至るまで、涙をぞ流されける。さてこそ暫くさし置かれけれ。判官は、都に院の御氣色よくて、京都の守護には、義經に過ぎたる者あらじとの御氣色なり。萬事あふぎ奉る。かくて秋も暮れ、冬の初にもなりしかば、梶原が憤やすからずして、しきりに讒言申しければ、二位殿、さもと思はれける。

經廻―立ち
まはり生活
すること

尊靈、再誕の縁にあらずんば、誰人か愚意の悲歎を申しひらかん。何れの輩か哀憐を垂れんや。事あたらしき申し状、述懐に似たりといへども、義經、身體髪膚を、父母に受け、いくばく時節を経ずして、故頭殿、御他界の間、孤子となつて、母の懷中に抱かれて、大和の國宇多郡、龍門の牧に赴きしより以來、一日片時も安堵の思ひに住せず、かひなき命を存すといへども、京都の經廻、難治の間、身在々所所にかくし、邊土遠國をすみかとして、土民、百姓等に、服仕せらる。然れども幸慶忽ちに純熟して、平家の一族追討の爲に上洛せしむる。先木曾義仲を誅戮の後、平家を攻め傾けんが爲に、ある時は峨々たる巖石に、駿馬に鞭うつて、敵のために、命を滅さんことを顧みず。ある時は、漫々たる大海に、風波の難を凌ぎ、身を海底に沈めん事をいたますして、屍を鯨鯢の腮にかく。然のみならず、甲冑を枕とし、弓箭を業とする本意。しかしながら、亡魂の爵債をやすめ奉り、年來の宿望を遂げんと欲する外は他事なし。あまつさへ、義經五位の尉に補任せらるゝの條、當家の重職、何事か是にしかん。然りと雖も、今愁ひふかく歎切なり。佛神の御助けにあらざるより外は、いかでか愁訴を達せん。これによつて、諸寺、諸社の、牛王寶印

對面當座の
贈物として

會稽の恥辱
—越王勾踐
の故事

守護に、置き參らせ給ひ候うて、御後を守らせ給ひて候はん程の御心やすき事は、何事か候ふべき」と憚る所なく申し捨てゝ立たれける。二位殿ことわりと思し召しけるにや、其の後は、仰せ出さるゝ事もなし。腰越にこの事を聞き給ひて、野心をさし挾まざる旨、數通の起請文を書き進じられけれども、猶御承引なかりければ、重ねて申狀をぞ參らせられける。

三 腰越の申狀の事

源義經、恐れながら申し上ぐる意趣は、代官の其の一に選ばれ、勅宣の御使として、朝敵を傾け、會稽の恥辱をすゝぐ、勳功に行はるべき處に、思の外、虎口の讒言によつて、莫大の勳功を黙止せられ、義經犯す事なうして咎を蒙り、過誤なしといへども、功ありて御勘氣を蒙るの間、空しく紅涙にしづむ。讒者の實否をたゞされず、鎌倉中へだに入れられざるの間、素意を陳ぶるに能はず、徒に數日をおくる。此の時に當つて、長く恩顔を拜し奉らず。骨肉同胞の儀、既に絶え、宿運、極めて空しきに似たるか。將又、前世の業因を感じるか。悲しきかな、此の條、故亡父の

院―後白河
法皇

甲斐ぞなき。鎌倉には、二位殿、川越かはこえの太郎を召めして、「九郎が院ゐんの御氣色ごきしよくよきまよに、世よを亂みださん、と内々みづかたくむなり。西國さいごくの侍さむらいども附つかぬさきに、腰越こしこえに馳はせ向むかひ候へ」と、仰おほせられければ、川越かはこえ申まをされけるは、「何事なにことにても候へ、君きみの御説ごせつを背そむき申すべきにては候はねども、且かつは知ろしめして候ふやうに、娘むすめにて候ふ者を、判官殿はんぐわんだんの召めしおかれて候ふ間、身みに取りてはいたはしく候ふ。他人たにんに仰おほせ付けられ候へ」と申し捨てよぞ立たれける。道理ことわりなれば、重かさねても仰おほせ出でされず。又畠山はたけやまを召めして、仰おほせられけるは、「川越かはこえに申し候へば、親したしくなり候ふとて、叶かなはじと申す。さればとて、世よを亂みださんとふるまひ候ふ九郎を、其そののまゝ置くべきやうなし。御邊ごへん打ち向むかひ給たまひ候ふべし。吉例きしれいなり。さも候はど、伊豆、駿河りやうごく、兩國ふたくにを奉ほうらん」と仰おほせられければ、畠山はたけやま、萬ばんに憚はどからぬ人にて申されけるは、「御説ごせつ背そむきがたく候へども、八幡大菩薩はちまんだいぼさつの御誓ごちかひにも、人の國より我が國、他人たにんよりも我が人をこそ守まもらんとこそ承うけり候へ。他人たにんと親したしきといひ較くらぶれば、たとふる方なし。梶原かははらと申すは、一旦いつたんの便びんによりて、召めしつかはるゝ者なり。彼そが讒言ざんげんにより、年來としごうの忠ちゆうと申し、御兄弟おんながの御中おんちゆうと申し、假令たとへ御恨おんうらみ候ふとも、九國きうごくにても参まゐらせ給ひて、見参けんさんとて、重忠しゆうたけに給たまひ候はんずる伊豆、駿河兩國りやうごくを勸賞けんじやうの引出物ひきでに参まゐらせ給ひ、京都きやうとの

見参とて―

あまなふ—
甘繩の音便

報なれば、さりととも存じ候ふ。御子孫の世には、いかゞ候はんずらん。又御一言申して
も、何とか御坐候はん」と申しければ、君この由を聞こし召して、「梶原が申す事は、僞
などはあらじ。なれども一方を聞きて、相はからはん事は、政道の汚るゝ所なり。九郎
が著きたるなれば、明日これにて、梶原に問答せさせ候ふべし」と仰せられける。大
名小名、これを聞きて、「今の御説の如くにてぞ。判官もとよりあやまり給はねば、も
し助かり給ふことも有りなん。されども景時が、逆櫓立てんと論のやまざる所に、壇
の浦にて互に先がけ争ひて、矢筈を取り給ひし其の遺恨に、かやうに讒言まうせば、終
にはいかゞあらんずらん」と申しける。召し合せんと仰せられいふ時に、梶原あまなふ
の宿所に歸りて、僞まうさぬ由、起請を書きて參らせければ、この上はとて、大臣殿をば
腰越より鎌倉にうけ取り、判官をば腰越に止めらる。判官、「先祖の恥をきよめ、亡魂の
憤を休め奉る事は本意なれども、随分二位殿の氣色にあひ叶ひ奉らんとてこそ、身を
くだきては振舞ひしか。恩賞に行はれんするか、と思ひつるに、向顔をだにも遂けられ
ざる上は、日來の忠も益なし。あはれ、これは梶原めが讒言ごさんなれ。西國にて切り
て棄つべきやつを、哀憐をたれてたすけ置きて、敵となしぬるよ」と後悔し給へども

西をば義經給はらん。天に二の日なし、地に二人の王なしといへども、此の後は、二人の將軍やあらんずらん、と仰せ候ひしぞかし。かくて武功の達者、一度も馴れぬ船戦にも、風波の難を恐れず、舟ばたを走り給ふこと、鳥の如し。一の谷の合戦にも、城は無雙の城なり、平家は十萬餘騎なり。身方は六萬五千餘騎なり。城は無勢にて、寄手は多勢こそ、軍の勝負は決し候ふに、城は多勢、案内者、寄手は無案内の者共なり。たやすく落つべきとも見え候はざりしを、鵜鳥越とて、鳥獸も通ひがたき巖石を、無勢にて落し、平家を終に追ひおとし給ふことは、凡夫のわざならず。今度、八島の軍に、大風にて波おびたどしくして、船の通ふべきやうもなかりしを、たど舟五艘にてはせ渡し、僅に五千餘騎にて、左右なく八島の城におしよせて、平家の數萬餘騎を追ひおとし、壇の浦のつめ軍までも、終に弱氣を見せ給はず。漢土本朝にも、これ程の大將軍、いかでか有るべきとて、東國西國の兵ども、一同に仰ぎ奉る。野心を挟みたる人にておはすれば、人ごとに情をかけ、侍までも目をかけられし間、侍どもあはれ頼むべき主かな、とこの殿に命を奉らん事は、塵よりも惜しからじ、と申して、心をかけ奉りて候ふ。それに左右なく、鎌倉中に入れ参らせ給ひて御坐候はんこと、いぶせく候ふ。御一期の程、君の御果

と申しも敢へず、又涙をながし給ひけるこそ哀なれ。さてこそ、この御曹子^{おんざうし}を大將軍にて上せ給ひけり。

二 義經平家の討手に上り給ふ事

院内―上皇
主上

本三位の中
將―平重衡
三河殿―三
河守範賴

御曹子^{おんざうし}、壽永三年に上落^{しやうらく}して平家を追ひ落し、一の谷^{いちのや}、八島^{やしま}、壇の浦^{だんのうら}、所々の忠をいたし、さきがけ身をくだき、終に平家を攻めほろぼして、大將軍、前の内大臣宗盛父子を、生捕り^{いけぞ}、三十人具足^{ぐそく}して上落^{しやうらく}し、院内の見參^{みんない}に入つて後、去ぬる元暦元年に、檢非違使^{けんぴゐし}五位の尉^{じやう}になり給ふ。大夫判官^{たいふはんぐわん}、宗盛父子を具足^{ぐそく}して、腰越^{こしごえ}に著き給ひし時、梶原申しけるは、「判官殿こそ大臣殿父子を具足^{ぐそく}して、腰越^{こしごえ}に著かせ給ひて候ふなれ。君は、如何^{いかで}御計^{はか}らひ候ふ。判官殿^{はんぐわんどの}は、身に野心^{やしん}をさし挟みたる御事にて候ふ。その義如何^ぎと申すに、一の谷^{いちのや}の合戦^{かつせん}に、城の三郎高家^{たかいへ}、本三位の中將以下^{ほんざんみ}取り奉り、三河殿^{みかほどの}の手に渡りて候ふを、判官^{はんぐわんおほい}大に怒り給ひて、三河殿^{みかほどの}は、大方^{おほほかた}の事にてこそ。義經^{よしつね}が手にぞ渡るべき物を、奇怪^{きぐわい}の者のふるまひかな。よせて討たん、と候ひしを、景時^{かげとき}がはからひに、土肥^{どひ}の次郎^{じやう}が手に渡してこそ、判官^{はんぐわん}はしづまり給ひしなれ。その上平家を打ち取つては、關より

刑部丞―新
羅三郎義光方便をつく
る―義經を
除がむとの
手だてを廻
す

度の壽命を助けて、本意をとけさせて給へ、と祈誓せられければ、まことに、八幡大菩薩の感應にや有りけん、都におはする御弟、刑部丞は内裏に候ひけるが、俄に内裏を紛れ出で、奥州の覺束なきとて、二百餘騎にて下られける。路次にて勢、打ちくははり、三千餘騎にて、栗屋川に馳せ來て、八幡殿と一つになりて、終に奥州をしたがへ給ひける。その時の御心も、頼朝御邊を待ちえ參らせたる心も、いかでか是にまさるべき。今日より後は、魚と水との如くにして、先祖の恥を雪ぎ、亡魂の憤りを休めん」と宣ひもあへず涙を流し給ひけり。御曹子は、とかくの返事もなくして、袂をぞ絞られける。これを見て大名小名、たがひの心の中おしはかられて、みな袖をぞ濡されける。暫くありて、御曹子申されけるは、「仰せの如く、幼少の時御目にかよりて候ひけるやらん。配所へ御下りの後は、義經も山科に候ひしが、七歳の時鞍馬へ參り、十六までかたの如く學問を仕り、さては京都に候ひしが、内々平家方便をつくる由、承り候ふ間、奥州に下向仕りて、秀衡を頼み候ひつるが、御謀叛のよし承りて、取りあへず走せまゐる。今は君を見奉り候へば、故頭の殿の、御見參に入り候ふ心地してこそ候へ。命をば、故頭の殿に參らせ候ふ。身をば、君に參らする上は、いかど仰せに従ひ參らせでは候べき」





後、佐殿すけどの涙をおさへて、「さても頭の殿かうどのに、おくれ奉りて、その後、御おんゆくへを承り候はす。幼少えうせうにおはし候ふ時、見奉りしばかりなり。頼朝よりとも、池いけの尼あまの宥なだめられしによりて、伊豆いずの配所はいしょにて伊東北條いとうへいじょうに守護しゆごせられ、心にまかせぬ身にて候ひし程に、奥州あうしうへ御下向おんげかうの由は、幽かすかに承りて候ひしかども、音信おとづれだにも申さず候。兄弟あり、と思し召し忘れ候はで、取り敢あへず御上おんのぼり候ふこと、申し盡つくしがたく、悦よろこび入り候ふ。これ御覽ごらん候へ。かゝる大事をこそ、思ひ企くはだてゝ候へ。八箇國の人々を初はじめとして候へども、皆他人みなたにんなれば、身みの一大事を申し合する人もなし。みな平家に相從あひしたがひたる人々なれば、頼朝よりともがよわけを守り給ふらん、と思へば、夜よもよもすがら、平家の事のみ思ひ、又或時は、平家の討手うってのぼ上のぼせばや、と思へども、身は一人なり、頼朝よりとも自身しんすゝみ候へば、東國とうこくおほつかなし。代官だいくわんを上のぼせんとすれば、心やすき兄弟もなし。他人たにんを上のぼせんとすれば、平家と一つになりて、却かへつて東國とうこくをや攻めんと存する間、それも叫かなひがたく、今御邊ごへんを待ち付けて候へば、故左馬頭殿さまのかうどの、蘇生よみがへらせ給ひたるやうにこそ思ひ候へ。我等が先祖八幡殿はちまんどのの、後三年ごさんねんの合戦せんに、むなうの城しろを攻められしに、多勢たぜい皆亡みなほろされて、無勢むぜいになりて、栗屋川くりやがはのはたにおし下りて、幣帛へいはくを捧さかけて、王城わうじやうをふし拜をがみ、南無八幡大菩薩なむはちまんたいぼさつ、御擁護ごようごをあらためず、今

繁藤の弓—
強固ならし
むる爲に藤
を繁く巻き
たる弓

色代—挨拶

心のゆく程

ふ。童名は牛若と申し候ひしが、近年奥州に下向仕り候うて居候ひつるが、御謀叛の由承り、夜を日につぎて、馳せ参じて候ふ。見参に入れて給ひ候へ」と仰せられければ、堀の彌太郎、さては御兄弟にてまし／＼けり、と馬より飛んで下り、御曹子の乳母子、佐藤三郎をよび出して色代あり。彌太郎、一町ばかり馬を曳かせけり。かくて佐殿の御前に参り、此の由を申し上げければ、佐殿は善惡に、騷がぬ人にておはしけるが、今度は殊の外嬉しけにて、「さらば、是へおはしまし候へ。見参せん」とのたまへば、彌太郎やがて参り、御曹子に、此の由を申す。御曹子、大きに悦び、急ぎ参り給ふ。佐藤三郎、同四郎、伊勢の三郎これら三騎召し連れて参らるゝ。佐殿御陣と申すは、大幕百八十町ひきたりければ、その内は、八ヶ國の大名小名並み居たり、各々敷皮にてぞありける。佐殿、御座敷には、疊一疊しきたれども、佐殿も、敷皮にぞおはしける。御曹子、冑を脱ぎて童にもたせ、弓取りなほし、幕のきはに畏まりてぞおはしける。その時、佐殿敷皮をさり、我が身は、疊にぞ直られける。「それ／＼」とぞ仰せらるゝ。しばらく辭退して、敷皮にぞなほられける。佐殿は、御曹子をつく／＼と御覽じて、先涙にぞ咽はれける。御曹子もそのいろは知らねども、共に涙にむせび給ふ。互に心のゆく程泣きて

義經記 卷第四

一 頼朝義經に對面の事

假名實名—
通稱と名乗

五枚兜—鐙
の五枚ある
兜

九郎御曹子浮島が原に着き給ひ、兵衛佐殿の陣の前、三町ばかり引き退いて陣を取り、しばらく息をぞ休められける。佐殿これを御覽じて、「爰に白旗白印にて、清けなる武者五六十騎ばかり見えたるは、誰なるらん覺束なし。信濃の人々は、一木曾に従ひて止まりぬ。甲斐の殿原は二陣なり。いかなる人ぞ。假名實名を尋ねて参れ」とて、堀の彌太郎を御使にて遣され、家の子郎等數多引き具して参る。間をへだてて彌太郎一騎すゝみ出で申しけるは、「こゝに白じるしにておはしまし候ふは、誰人にて渡らせ候ふぞ。假名實名を慥に承り候へ、と鎌倉殿のおほせにて候ふ」と申しければ、其の中に二十四五ばかりなる男の、色白く尋常なるが、赤地の錦の直垂に、紫裾濃の鎧の、裾金物うちたるを着、白星の五枚兜に、蹴形打ちて猪頸に着、大中黒の矢おひ、繁籐の弓持ちて、黒き馬の太く逞しきに乗りたるが、歩ませ出でて申されけるは、「鎌倉殿も知ろしめされて候

越え給ひぬ」とぞ聞えける。いとど心許こころもとなくて、駒こまを早めて打ち給ひける程に、足柄山あしがらやまうち越えて、伊豆の國府こふに着き給ふ。「佐殿すけどのは昨日此處こゝを立ち給ひて、駿河の國千本の松まつ原浮島はらうきしまが原はらに」と申しければ、さては程近しとて、駒こまを早めてぞ急いそがれける。

取りあへざ
りければ―
早急の事な
れば
かつがつ―
辛うじて

とろろがけ
にて―俗言
のどん／＼
かけて

給ふなり。兩國の兵ども催せ」とぞ申しける、御曹子、仰せられけるは、「千騎萬騎も具
足したく候へども、事延びて叶ふまじ」とて、打ち出で給ふ。取り敢へざりければ、ま
づかつ／＼三百餘騎を奉りける。御曹子の郎等には西塔の武藏坊、又園城寺の法師の尋
ねて参りたる常陸坊、伊勢の三郎、佐藤三郎次信、同四郎忠信、これらを先として三百
餘騎、馬の腹筋馳せ切り、脛砕くるをも知らず、揉みにもうで馳せ上る。あつかしの中
山馳せ越えて、安達の大城打ち通り、行力の原しゝちを見給へば、「勢こそまばらに成り
たるぞ」と仰せられけるに、「或は馬の爪かゝせ、或は脛を馳せ砕きて、少々道にとどま
り、是までは百五十騎御座候ふ」と申しければ、「百騎が十騎にならむ迄も、打てや者ども、
後をかへり見るべからず」とて、とろろがけにて歩ませける。木津川を打ち過ぎて、
さけはしの宿に着きて、馬を休めて、絹河のわたりして、宇都の宮の大明神ふし拜み参
らせ、室の八島をよそに見て、武藏の國足立の郡、こかは口につき給ふ。御曹子の御勢、
八十五騎にぞなりにける。板橋に馳せつきて、「兵衛佐殿は」と問ひ給へば、「一昨日是を立
たせ給ひて候ふ」と申す。武藏の國府の六所の町につきて、「佐殿」と仰せければ、一昨日
通らせ給ひて候ふ。相摸の平塚に」とぞ申しける。平塚につきて聞き給へば、「はや足柄を

石濱—墨田
川沿岸橋場
今戸一帯の
舊名

のわたりうきよしに浮橋うきはしを組くんで、頼朝よりともに、加勢かせいを武藏むさしの國王子板橋いたはしにつけよ」とぞ宣のたまひける。
江戸えどの太郎承りて、一い首くびを召めさるるともいかでか渡わたすべき」と申す處に、千葉ちばの介すけ、葛西かさいの
兵衛ひょうゑを招まねきて申しけるは、一いざや江戸えどの太郎を助けん」とて、兩人ふたりが知行所ちぎやうしよは、今井いまたる、栗
河か、かめなし、うしまと申す所より、海人あまの釣舟つりふねを數千艘さう上あせて、石濱いしはまと申す所は江戸えど
の太郎が知行所ちぎやうしよなり、折節せりふしさい西國舟いこくふねの着つきたるを、數千艘さうあつめ、三日の内に浮橋うきはしをくみて、
江戸えどの太郎に合力がふりよくす。佐殿御覽すけどのごらんじ、神妙しんべうなる由仰せられ、さてこそふとひ墨田すみだ打ち越え
て、板橋いたはしにつき給ひけり。

八 頼朝謀叛よりともむ ほんにより義經奥州よしつねあうしうより出で給ふ事

去程きりやうに佐殿すけどのの謀叛むほん、奥州あうしうに聞えければ、御弟九郎義經おしつね、元吉もとよしの冠者くわんじや泰衡たいかうを召して、秀衡ひでひら
に仰せけるは、一ひ兵衛佐殿ひやうゑのすけどのこそ、謀叛むほんをおこして、八箇國はつかくを從したがへて、平家へいけを攻めんとて、都
へ上り給ふと承りて候へ。義經よしつねかくて候ふこそ心苦しく候へば、追ひ付おき奉りて、一方
の大將軍のあきをも望のぞまばや」とぞ仰せられける。秀衡ひでひら申しけるは、一い今まで君きみの思おもひ召し立めた
ぬ御事ごことこそ、僻事ひがことにて候へ」とて、泉いづみの冠者くわんじやを呼びて、一い關東くわんとうに事出で來、源氏げんし打ち出で

黨一武士の
團隊

すむだ一墨
田
きやつ一彼
奴

義、黨には、丹、横山、馳せ参る。畠山、稻毛は未だ参らず。秩父の庄司、小山田の別當は、在京によりて参らず。相摸の國には、本間澁谷馳せ参る。大場、股野、山内は参らず。治承四年九月十一日、武藏と下野の境なる松戸の庄、市河といふ所に着き給ふ。御勢八萬九千とぞ聞えける。爰に坂東に名を得たる大河一つあり。此の河の水上は、上野の國刀根の庄、藤原といふ所より落ちて水上とほし。末に下りては在五中將の墨田河とぞ名付けたる。海より潮さしあけて、水上には雨ふり洪水岸を浸して流れたり。偏に海を見る如く、水にせかれて五日逗留し給ひ、すむだのわたり兩所に陣取りて、櫓をかき、やぐらの柱には、馬をつないで、源氏を待ちかけたり。兵衛佐殿は、是を御覽じて、「彼奴が首取れ」と宣へば、急ぎやぐらの柱を切りおとして、筏にし、市河に参り、葛西の兵衛について、見参に入るべき由、申したりけれども、用ひ給はず。重ねて申しければ、「いかさまにも、頼朝をそねむと思ふぞ。伊勢の加藤次心ゆるすな」と仰せられける。江戸の太郎色を失ひける所に、千葉の介、近所に有りながらいかど有るべき。成胤申さん、とて、御前にかしこまつて、不便の事を申しければ、佐殿仰せられけるは、「江戸の太郎八箇國の大福長者と聞くに、頼朝が多勢、此の二三日水にせかれて渡しかねたるに、水

介—上總介
平廣常黒つば—鷲
の黒羽

も介すけの八郎はいまだ見えす。私わたくしに廣常ひろつね申しけるは、「抑おさへ兵衛佐殿ひやうさのすけどのの、安房上總あはふのすけに打ち越えて、二箇國ふたにの軍兵ぐんびやうをそろへ給ふなるに、未だ廣常ひろつねが許もとへ、御使おんつかひを給はらぬこそ心得ね。今日けふ待ち奉りて、仰蒙おほせかうらずは、千葉葛西ちのかさいを催もよほして、きさうとの濱はまにおし向ひて、源氏を引き立て奉らん」と議ぎする所に、藤九郎盛長とうさうもりなが、褐かちんの直垂ひたれに、黒草織くろかはおしの腹巻はらまきに、黒つばの矢負やおひ、塗籠ぬりかご藤の弓持ちて、介すけの八郎のもとにぞ來りける。上總すけさうの介殿すけどのに見參けんざんと申しければ、兵衛佐殿ひやうさのすけどのの御使おんつかひ、と申せば嬉うれしく思ひ、急いそぎ出で逢ひて對面たいめんす。御教書みけうしょをたまはり拜見はいけんして、家の子郎等いえのこらうどうも、さし遣つかはせよ、と仰おほせられんとこそ思ひつるに、今まで廣常ひろつねが、遅おそく參るこそ奇怪きかいなれ、と書き給ひたるを打ち見て、「あはれ殿どのの御書ごしよかな。かくこそあらまほしけれ」とて、則ち千葉ちなはの介すけの許もとへ送る。葛西かさい、豊田とよた、うらの守かみ、上總すけさうの介すけのもとへ馳はせよりて、千葉上總ちなはかづさの介すけを大將軍たいてんとして、三千餘騎さんせんじゆ開發かいまつの濱はまに馳はせ來り、源氏げんしにつく。兵衛佐殿ひやうさのすけどの、四萬餘騎よしまんじゆになりて、上總すけさうの館やかたにつき給ふ。かくする程ほどにこそ久ひさしけれ。されども八箇國はつには、源氏げんしに心ざしある國なりければ、我もくと馳はせ參る。常陸常陸の國には、しらと、行方なみかた、志田しだ、東條とうじょう、佐竹さたけの別當べつたう秀義ひでよし、たけちの平武者へいむしやの太郎しや、しほち道綱みちつな、上野上野の國には、大胡おほこの太郎たろう、山やまかみさゑよりの小太郎せうたろう重房しげふさ、同じく喜三郎きさう重

龍島―獵島
とも書く房
州海岸の地
名
不運の宮―
高倉宮以仁
王

と申して、明れば洲の崎を立ちて、ばんどう、ばんさいにかより、眞野の館を出で、小湊のわたりして、那古の觀音をふし拜み、雀島の大明神の御前にて、かたの如くの御神樂を參らせて、龍島に著き給ひぬ。加藤次申しけるは、「悲しきかなや、保元に爲義斬られ給ふ、平治に義朝討たれ給ひて後は、源氏の子孫皆絶えはてよ、弓馬の名埋んで、星霜を送り給ふ。たま／＼も源氏思ひ立ち給へば、不運の宮に與し參らせて、世を損じ給ふこそかなしけれ」と申しければ、兵衛佐殿仰せられけるは、「かく心弱くと思ひそ。八幡大菩薩、いかでか思し召し捨てさせ給ふべき」と、諫め給ひけるこそ頼もしく覺ゆれ。さる程に三浦の和田の小太郎、佐原の十郎、栗濱の浦より小舟に取り乗りて、宗徒の輩三百餘人、りよう島へ參りて源氏につく。安房の國の住人、町野太郎、案内の大夫、是等二人を大將として、五百餘騎馳せ來り、源氏につく。源氏八百餘騎になり、いとど力つきて、鞭を上げてうつ程に、安房と上總の境なるつくしうみの渡をして、上總の國、佐貫のえだ濱を急がせ給ひて、磯が崎をうち通りて、篠部、いかいしりといふ所につき給ふ。上總の國の住人、いほう、いなん、廳北、廳南、うさ、山のへ、あひかくはのかみの勢、都合一千餘騎、するかはといふ所に、はせ來つて、源氏に加はる。されど

會そが許もとより送られて、上野の伊勢いせの三郎がもとまでおはしけれ。是より義盛御供して、平泉ひらいづみへ下りけり。

七 頼朝謀叛の事

兼隆―伊豆
の目代同國
八牧に鎮す

治承四年八月十七日に、頼朝謀叛起し給ひて、泉の判官兼隆を夜討にして、同き十九日、相摸の國小早河こはやかはの合戦にうち負けて、土肥の杉山に引き籠り給ふ。大場の三郎、股野の五郎、土肥の杉山を攻むる。廿六日のあけほのに、伊豆の國眞鶴が崎より船に乗りて、三浦を心ざしておし出す。折節風烈しくて、岬へ舟をよせかねて、廿八日の夕暮に、安房の國洲の崎といふ所に、御舟をはせ上げて、其夜は、瀧の口の大明神に御通夜ありて、夜と共に祈誓をぞ申されけるに、明神の示し給ふぞ、と覺しくて、御寶殿の御戸をいつくしき御手にて押し開き、一首の歌をぞあそばしける。

みなもとはおなじながれぞいはし水たれせき上げよ雲の上まで
兵衛佐殿夢うちさめて、明神を三度拜し奉りて、

みなもとはおなじながれぞいはし水せきあけて給へ雲の上まで

らに打ちふして上に打ち乗りゐて、「扱さて從したがふや否いなや」と仰おほせられければ、「是ぜんも前世ぜんぜの事ことに
てこそ候さうはん。さらば從したがひ參まゐらせん」と申しければ、着きたる腹はら巻まきを御おん曹ざう子し重かさねて着き給たまひ
て、二振ふたよりの太刀たちを取り、辨べん慶けいを先まに立たてゝ、その夜よの中に、山科やましなへ具ぐしておはしまし、
疵きずを痍いして、其そのの後つ連つれて京きやうへおはして、辨べん慶けいと二人ふたりして、平家へいけを狙ねらひ給たまひける。其その
時けんぜん見けん參ぜんに入り始めてより、心こざし又また二つなく、身みにそふ影かげの如ごとく、つき添そひ奉ほうり、三年さんねん
に攻せめおとし給たまひしにも、度々たびたびの高名かうみやうを極きめぬ。奥州あうしう衣川ころもがはの最後さいごの合戦かつせんまで、御おん供ごし
て終つひに討死うちじにしてける武藏坊むさしぼう辨慶べんけいこれなり。かくて都みやこには、九郎くわう義經ぎけい、武藏坊むさしぼうといふ兵
士ものをかたらひて平家へいけをねらふ、と聞きこえありけり。おはしける所しは、四條しでうの上人しやうにんが許もとにおは
する由よし、六波羅ろくはらへこそ訴うつたり。六波羅はらより大勢たいぜいおしよせて、上人しやうにんをとる。その時おんざう御曹おんざう
子しおはしけれども、手てにもたまらず失うし給たまひけれ。御曹おんざう子し、此このの事こともれぬ程ほどにてあれ、い
ざや奥おくへ下くだらん、とて、都みやこを出でて給たまひ、東山道とうざんどうにかゝりて、木曾きそがもとにおはして、「都みやこの
住居すまひかなひ難がたく、奥州あうしうへ下くだり候さうへ。斯かくて御渡おんわたり候さうへば、萬事ばんじは頼たのしくこそ思おもひ奉ほうれ。東
國こく北國ほくこくのつはものを催もよほし給たまへ。義經よしつねも奥州あうしうよりさし合あはせて、本意ほんいを遂ぞげ候さうはんところ思
ひ候さうへ。是これは伊豆いずの國くに近く候さうへば、常つねに兵衛佐殿ひやうのすけのどのの御方おんへも、御おとづれ候さうへ」とて、木

分内—境内

目をさます
—おどろく行道—法會
の時經よみ
連れて佛前
を廻ること

重代の太刀にて叶ふまじ。」「さ候はど、いざさせ給へ。武藝に付きて勝負次第に給はり候はむ」と申しければ、「それならば参り逢ふべし」と宣へば、辨慶頓て太刀を抜く。御曹子も抜き合せ、さんぐくに打ち合ふ。人を見えて、「こはいかに御坊の是程分内も狭き所にて、しかも幼き人とたはぶれは何事ぞ。その太刀さし給へ」といへども、聞きも入れず。御曹子上なる衣を抜ぎて棄て給へば、下は直垂腹巻をぞ着給へる。此の人も、ただ人にはおはせざりけりとて、人目をさます。女や尼童ども、あはてふためき、縁より下へ落つる者もあり、御堂の戸をたて、入れじとする者もあり。されども二人はやがて舞臺へひいておりあふて戦ひける。退いつ進んづ打ちあひける間、初は人もおちて寄りざりけるが、後には面白さに、行道をする様に、つきてめぐり是を見る。よそ人いひけるは、「抑兒がまさるか、法師がまさるか。」「いや兒こそまさるよ。法師は物にてもなきぞ。はや弱りて見ゆるぞ」と申しければ、辨慶是を聞きて、扱ははや、我は下になるござんなれ、とて心ほそく思ひける。御曹子も思ひ切り給ふ。辨慶は思ひ切つてぞ打ちあひける。辨慶少し打ちはづす所を、御曹子走りかよつて斬り給へば、辨慶が弓手の脇の下に、きつさを打ちこまれて、ひるむ所を太刀の背にて、さんぐくに打ちひしぎ、まく

参り―参詣
者
かたぐ―
大勢の貴人
方

ゐいやづき
―ゐいやゐ
いやと掛聲
して突くと

るは、「不思議の奴かな。おのれが様なる乞食は、木の下萱のもとにて申すとも、佛の方
便にてましませば、聞し召し入れられんぞ。かたぐ―おはします所にて、狼藉なり。そ
こ退き候へ」と仰せられけれども、辨慶、「情なくも宜ふ物かな。昨日の夜より見参に入り
て候ふかひもなく候ふ。其方へ参り候はん」と申しも果さず、二疊の疊をのり越え、
御側へ参る。人推参卑陋なりとにくみける。かよりける所に、御曹子の持ち給へる御經
をおつ取りて、さつと開いて、「あはれ御經や。御邊の經か、人の經か」と申しける。さ
れども返事もし給はず、「御邊も讀み給へ、我れも讀み候はん」といひて讀みけり。辨慶
は西塔に聞えたる持經者なり。御曹子は鞍馬の兒にて、習ひ給ひたれば、辨慶が甲の聲
御曹子の乙の聲、入りちがへて、一の巻半巻許ぞ讀まれたる。参る人のゐいやづきも、
はたとしづまり、行人の鈴の聲も止めて、是を聽聞しけり。萬々世間澄み渡りて、尊
さ心も及ばず。しばらくありて、「知る人のあるに、立ちよりて又こそ見参せめ」とて立
ち給ふ。辨慶是を聞きて、「現在目の前に、おはする時だにも、たまらぬ人の、いつをか
待ち奉るべき。御出で候へ」とて、御手を取りて引き立て、南面の扉のもとに行きて、
申しけるは、「持ち給へる太刀の眞實ほしく候ふに、それ給ひ候へ」と申しければ、「是は

召しける。辨慶、此のたくみを知らず、太刀に目をかけて、跡につきてぞ参りける。清水の正面に参りて、御堂の内を拜み奉れば、人の勤行の聲は、とり／＼なり、と申せば、殊に正面の内の格子のきはに、法花經の一の巻の初を尊く讀み給ふ聲を聞きて、辨慶思ひけるは、あら不思議やな。此の經よみたる聲は、ありつる男の、悪いやつと云ひつる聲に、さも似たる物かな。よりて見ん、と思ひて、持ちたる長刀をば、正面の長押の上にさしあけて、佩きたる太刀許もちて、大勢の居たる中を、「御堂の役人にて候ふ。通させ給へ」とて、人の肩をもきらはず、押へて通りけり。御曹子の、經あそばして居給へる後にふみはたばりて、立ち上りけり。御燈の影より人を見えて、「あら嚴しの法師の、丈の高さよ」とぞ申しける。何として知りて是迄來たるらん、と御曹子は見給へども、辨慶は見付けず。只今迄は男にておはしつるが、女の装束にて、衣打ちかづき居給ひけり。武藏坊、思ひわづらひでぞありける。中々是非なく推參せばや、と思ひ、太刀の尻鞆にて、脇の下をしたゝかにつき動して、「兒か女房か。是も参りにて候ふぞ。あなたへよらせ給へ」と申しけれども、返事もし給はず。辨慶、さればこそ、たゞ者にてはあらず。ありつる人ぞ、と思ひ、又したゝかにこそ衝いたりけれ。その時御曹子仰せられけ

尻鞆―獸の
毛皮にて造
り太刀の鞆
おほひ置く
もの

にて有名な
る寺

ともすれば
動もすれ

ば

いぶせく

うるさく

こは言葉

強き言葉

眞下に坂

の上方より

相傳にして

相傳の從

者の如くに

して

も欲しからず。たゞ此の男の持ちたる太刀を取らせて給べ、と祈誓して、門前にて待ち
かけたり。御曹子、ともすればいぶせく思し召しければ、坂の上を見あけ給ふに、かの
法師こそ昨日に引きかへて、腹巻着て太刀わきに挿み、長刀杖につき待ちかけたり。御
曹子見給ひて、くせものかな。又今宵も是にありけるや、と思ひ給ひて、少しも退か
門をさして上り給へば、辨慶「たゞ今參り給ふ人は、昨日の夜天神にて、見參に入りて
候ふ御方にや」と申しければ、御曹子、「さる事もや」と宣へば、「さて持ち給へる太刀
をば、たび候ふまじきか」とぞ申しける。御曹子、「幾度もたゞは取らすまじ。ほしくば
寄りて取れ」と宣へば、いつもこは言葉かはらざりけり、とて長刀打ちふり、眞下に喚
いてかゝる。御曹子太刀抜き合せてかゝり給ふ。辨慶が大長刀を打ち流して、手なみの
程を見しかば、あやと肝を消す。さもあれ、手にもたまらぬ人かな、と思ひけり。御曹子、
よもすがら「終夜かくて遊びたくあれども、觀音に宿願あり」とて、うち行き給ひぬ。辨慶獨言
に、「手に取りたる物を、失ひたる心地する」とぞ申しける。御曹子、何ともあれきやつ
は健氣なる者なり。あはれ曉にてあれかし。持ちたる太刀長刀打ちおとして、薄手おふ
せて、生捕にして、ひとり歩くはつれ々なるに、相傳にして、召し使はゞや、とぞ思し

大國の穆王
は云々―周
の穆王なる
べし

祇園精舎―
祇陀園に建
てたる印度

ちかけたり。築土よりゆらりと飛びおり給へば、辨慶太刀打ちふりてつと寄る。九尺の築土よりおり給へる、と覺えしが、三尺許おちつかで、中に御座しけるが、又取つて返し上にゆらりと飛び上り給ふ。大國の穆王は、六韜をよみ、八尺の壁を踏んで天にさがりしをこそ上古の不思議、と思ひしに、末代といへども、九郎御曹子は、六韜を讀みて、九尺の築土。を一飛のうちに中より飛びかへり給ふ。辨慶は、今宵は空しく歸りけり。

六 義經辨慶と君臣の契約の事

此は六月十八日なるに、清水の觀音に上下參籠す。辨慶も何ともあれ昨夕の男、清水にこそ有るらん、に、参りて見ばや、と思ひて参りける。あからさまに清水に参り、惣門にたすみて、待ちけれども見え給はず。今宵もかくて歸らんとする所に、いつもの癖なれば、夜ふけて清水坂の邊に、例の笛こそ聞えけれ。辨慶聞きてあら面白の笛の音や、あれをこそ待ちつれ。此の觀音と申すは、坂上の田村丸の、建立し奉りし御佛なり。我十三遍の身を變じて、衆生の願を滿てずば、祇園精舎の雲に交り、長く正覺を取らじ、と誓ひ、我が地に入らん者には福德を授けん、と誓ひ給ふ御佛なり。されども辨慶は、福德

築土の覆ひ
―土堀の屋
根

て、築土のもとに走りより給ふ。武藏坊是を見て、「鬼神ともいへ、當時我を相手にすべき者こそ覚えね」とて、もつて開いて丁ど打つ。御曹子「彼奴はけなげ者かな」とて、電の如くに弓手の脇へつと入り給へば、打ち開く太刀にて、築土の腹に切先打ち立て、抜かんとしける隙に、御曹子走りよりて、左手の足を指し出して、辨慶が胸をしたゝかに踏み給へば、持ちたる太刀をがらりと捨てたるを取つて、えいやといふ聲のうちに、九尺許ありける築土に、ゆらりと飛び上り給ふ。辨慶胸いたく踏まれぬ。鬼神に太刀とられたる心地して、呆れてぞ立つたりける。御曹子「是より後に、かゝる狼藉すな。さるをこの者有り、とかねて聞きつるぞ。太刀も取りて行かん、と思へども、ほしさに取りたると思はんする程に、取らするぞ」とて、築土の覆ひに押しあてゝ、踏み歪めてぞ投げかけ給ふ。太刀取つて押し直し、御曹子の方をつらけに見やりて、「念なく御邊はせられて候ふ物かな。常に此の邊におはする人と見るぞ。今宵こそ仕損ずるとも、是より後に於ては心ゆるすまじき物を」とつぶやきくぞ行きける。御曹子、是を見給ひて、何ともあれ、きやつは山法師にてぞ有らん、と思し召しければ、「山法師人の器量に似ざりけり」と宣へども、返事もせず、何ともあれ、築土よりおり給はん所を斬らんする物を、と思ひて待

さしくどみて一身をか
がめて
心も及ばぬ
―何ともか
ともいばれ
ぬ程立派な
る

健
けなげ―強

を持ちたらば取らん、と思ひて笛の音の近付きければ、さしくどみて見れば、未だ若
き人の、白き直垂に胸板を白くしたる腹巻に、金作りの太刀の、心も及ばぬをはかれた
り。辨慶是を見て、あはれ太刀や。何ともあれ、取らんする物を、と思ひて待つ所に、
後に聞けば、おそろしき人にてぞありける。辨慶はいかでか知るべき。御曹子は見給ひ
て、あたりに目をも放たれず。木のもとを見給ひければ、けしからぬ法師の、太刀わき
ばさみて立ちたるを見給へば、彼奴はたゞ者ならず、此の比都に人の太刀を奪ひ取る者
は、きやつにてあり、と思はれて、少しもひるまずかゝり給ふ。辨慶、さしもけなげなる
人の、太刀をだにも奪ひ取るに、まして是程なるやさ男、よりて乞はゞ姿にも聲にも怖
ぢて出さんずらん。實にくれずば、突倒しうばひ取らん、と支度して、辨慶あらは
れ出でよ申しけるは、一、只今しづまりて敵を待つ所に、けしからぬ人の物の具して通り給
ふこそ、怪しく存じ候へ。左右なくえこそ通すまじけれ。然らずば其の太刀こなたへ給は
りて、通られ候へ」と申しければ、御曹子、是を聞き給ひて、「此の程さるをこの者あり
とは聞き及びたり。左右なく得こそ取らすまじけれ。ほしくばよりて取れ」とぞ仰せら
れける。―さて見參に參らん」とて、太刀を抜いて飛んでかゝる。御曹子も小太刀を抜い

胡籀—箭を
盛る器

五 辨慶洛中にて人の太刀を取りし事

辨慶思ひけるは、人の重寶は千そろへて持つぞ。奥州の秀衡は、名馬千疋、鎧千領もつ。松浦の大夫は、胡籀千腰弓千張。斯様に重寶を揃へて持つに、我々は、かはりのなければ、替へて持つべき様もなし。詮ずる所、夜に入りて京中に佇みて、人の佩きたる太刀千振取つて、我が重寶にせん、と思ひ、夜なく人の太刀を奪ひ取る。しばしこそ有りけれ、「當時洛中に長一丈許ある天狗法師のありて、人の太刀を取る」とぞ申しけれ。かくて今年も暮れければ、次の年の五月の末、六月の初までに、多くの太刀を取つたり。樋口烏丸の御堂の天井におく、數へ見たりければ、九百九十九腰こそ取りたりける。六月十七日五條の天神に參りて、夜と共に祈念申しけるは、「今夜の御利生に、よからん太刀を與へてたび給へ」と祈誓し、夜深ければ天神の御前に出で、南へ向つて行きければ、人の家の築土のきはに佇みて、天神へまゐる人の中に、よき太刀持ちたる人をぞ待ち居たる。曉方に成りて堀河を下りに行きければ、面白く笛の音こそ聞えけれ。辨慶是を聞きて、面白や、さ夜ふけて、天神へ參る人の吹く笛は、法師やらん男やらん。よからん太刀

詮する所―
結局

山門さんもんにありし鬼若おにわかが事ござんなれば、是これが惡事あくじ、山上さんじやうの大事だいじにならぬさきに、鎮しづめたらんこそ君ならめ。かいゑんが惡事あくじ、是非ぜひなし。詮せんする所ところかいゑんを召よせ。かいゑんこそ、佛法ほふわうほふの怨敵をんできなれ。しやつを取とつて糾問きうもんせよ」とて、津つの國くにの住人ぢやうじん、毘陽野こやのの太郎承たうらうつて、百騎ひやくきの勢せいにて馳はせ向むひ、かいゑんを召よして院いんの御所ごしょに參まゐる。「汝一人がはからひか、與くみしたる者の有ありけるか」と尋たづねらる。糾問きうもん嚴きびしかりければ、とても生きてはらはん事不定ふぢやうなれば、日比ひこほにくかりし者ものを入れればや、と思おもひて、與くみしたる衆徒しゆだとては十一人までぞ白狀はくじやうに入いれたりける。又また毘陽野こやのの太郎馳はせ向むふ所に、かねて聞きえければ、さきだて十一人參まゐり向むふ。されども白狀はくじやうに載のせたりとて召よし置おかる。陳ちんするに及およばず、かいゑんは終つひに責せめ殺ころさる。死ししける時も「我一人の咎とがならぬに、殘のこりをば失うしなはれずば、死しすとも惡あく靈りやうとならん」とぞいひける。かくいはざるだにも有あるべし。さらば斬きれ、とて十一人も皆みな斬きられにけり。武藏坊都むさしほうみやこにありけるが、是これを聞ききて、「かゝる心地こころちよき事こそなけれ。居ゐながら敵思かたきふやうに、あたりたる事こそなけれ。辨慶べんけいが惡事あくじは、朝あすの御祈おんいのりに成なりける」とて、いとど惡事あくじをぞしたりける。



淺ましー驚
嘆すべし

崖^{がけ}作りにしたる坊^{ぼく}なれば、何かは一つも残^{のこ}らず、やうく残^{のこ}るものとしては、石^{いし}ずゑのみ
残りけり。廿一日の巳^みの時^{とき}許^かに、武藏坊^{むさしぼく}は、書寫^{しよしや}を出で京へぞ行きける。其の日一日歩^{あゆ}み、
その夜もあゆみて、廿二日の朝^{あさ}に、京へぞ著^あきにける。其の日は都大雨大風吹きて、人
の往來^{ゆきき}もなかりけるに、辨慶装束^{べんけいしやうそく}をぞしたりける。長直垂^{ながぢつたれ}に、赤き袴^{あか はかま}をぞ着^きたりける。い
かにしてか上りけん、さ夜更^{よふ}け人しづまりて後、院^{いん}の御所^{ごしよ}の築土^{つち}に上り、手を廣^{ひろ}けて火
をともし、大^{だい}の聲^{こゑ}にてわつと喚^{よめ}きて、東の方へぞ走りける。又取つてかへし、門の
上につい立つて、恐^{おそ}しけなる聲^{こゑ}にて、「あら淺まし、いかなるふしぎにてか候ふやらん。
性空上人^{しやうくうしやうにん}の手づからみづから立て給ひし書寫^{しよしや}の山、昨日^{きのふ}のあした、大衆^{たいしゆ}と修行者^{しゆぎやうじや}との
口論^{こうろん}によりて、堂塔^{だうたふ}五十四ヶ所、三百坊^{はう}、一時に煙^{けふり}と成^{なり}りぬ」と呼^よばはつて、かきけす
様に失^うせにけり。院^{いん}の御所^{ごしよ}には是を聞こし召し、何ゆゑ書寫^{しよしや}は焼^やけたる、と早馬^{はやば}を立てよ
御尋^{おんたづ}ねあり。一誠^{いっしやう}に焼^やけたらば、かくとうを初^{はじめ}として、衆徒^{しゆだ}を追ひ出せ」との院宣^{いんせん}なり。寺
中^{ちゆう}の下^{しも}へ向ひて見れば、一字も残^{のこ}らず焼^やけければ、全く時^まをうつさず、参^まりて陳^{ちん}じ申^{まう}さ
んとて、馳^{せま}上^うり、院^{いん}の御所^{ごしよ}に参^まじて、陳^{ちん}じ申しければ、「さらば罪科^{ざいこ}の者を申せ」と仰^{おほ}せ
下^{くだ}さる。「修行者^{しゆぎやうじや}には武藏坊^{むさしぼく}、衆徒^{しゆだ}にはかいゑん」と申す。公卿^{くきやう}是を聞き給ひて、「さては

來
ぢたい一元

方へ行く。衆徒是を見て、「修行者御免候へ。それはぢたい酒狂する者にて候ふぞ」と申しければ、辨慶、「見苦しく見えさせ給ふものかな。日比の約束には、修行者の酒狂は衆鎮め、衆徒の酒狂ひをば修行者鎮めよ、との御約束と承り候ひしかば、命をば殺すまじ」といつて、一振ふつて「えいやと」いひて、講堂の軒の高さ、一丈一尺ありける上に、投げ上げたれば、一たまりもたまらず、ころ／＼と轉び落ち、雨おち石たよきにどうど落つる。取つておさへて、骨は碎けよ、脛はひしけよと踏みたり。左手の小腕ふみ折り、右手のあばら骨二枚損ず。中々にいふにかひなしとて、いふばかりもなし。かいゑんが持ちたる燃えざしを、さらば捨ててもせて、持ちながら投げあけられて、かう堂の軒に打ちはさむ。折ふし風は谷より吹きあけたり。かうだうの軒に吹き付けて、焼けあがりたり。九間の講堂、七間の廊下、多寶の塔、文珠堂、五重の塔に吹き付けて、一字ものこらず、性空上人の御影堂、是を初めて堂塔社々の數、五十四ヶ所ぞ焼けたりける。武藏坊是を見て、現在佛法の仇と成るべし。咎をだに犯しつる上は、まして大衆の坊々どもは、助け置きて何にかせん、と思ひて、西坂本にはしり下り、松明に火を付けて、軒を並べたる坊々に、一々に火をぞ付けたりける。谷より嶺へぞ焼けて行く。山を切りて

けうー希有

くの木一樹
今くぬぎと
いふかうーかう
べの誤なる
べし

きて、「けうなるべし。修行法師めが面や」とるだけ高になりて申しける。「あまりに此の山の衆徒は、きやうこが過ぎて、修行者めらに、目を見せて、すでに後悔し給ふらんものを、いでならはさん」とてつと立つ。あは事出できたりとして犇く。辨慶是をみて、「面白し、彼奴こそ相手きらはすのえせ者よ。おのれが腕のぬくるか、辨慶が腦のくだくるか。思へば、辨慶がつらに物を書きたる奴か。にくい奴かな」とて、棒取りなほし待ちかけたり。かいゑんが寺の法師ばら、五六人座敷に在りけるが、是を見て、「見苦しく候ふ。あれ程の法師、縁より下に蹴落して、首の骨ふみ折つてすてん」とて、衣の袖を取つて結び肩にかけ、喚き叫んでかゝるを見て、辨慶えいやと立ちあがり、棒を取つて直し、薙打に一度に縁より下になぎ落しける。かいゑん、是を見て走り立ちて、あたりを見れども打つべき杖なし。末座を見れば、くの木を打ち切りくべたる燃えさしをおつ取り、すびつ押しにじりて、「一定か、わ法師」とて、走りかゝる。辨慶しきりに腹を立てよ、持て開いて丁ど打つ。かいゑん、走り違へてむすと打つ。辨慶がしと合せて、くゞり入りて、左手のかひなさしのべ、かうを攫んでえいと引きよせ、右手のかひなを以て、かいゑんが股をつかみそへて、目より高くおしあけて、講堂の大庭の



あともそと
もーうんと
もすんとも
からめかし
ーからく
させて

くわんたい
ー緩怠

三百人許居ながれたり。縁の上には中居の者ども、小ほうしばら、一人ものこらず催したり。残る所なく寺中上を下にかへして、出で来る事なれば、千人許ぞありける。その中に、あしく候ふともいはず、足駄踏み鳴し、肩をも膝をもふみ付けて通りけり。あともそともいはず、一定事も出で来りなん、と思ひ、皆肩をふまれて通しけり。階のもとに行きて見れば、小袖どもひしとぬぎたり。我もぬぎて置かばや、と思ひけるが、禍を除くに似たり、と思ひ、はきながらからめかしてぞ上りけり。衆徒も咎めんとすれば、事みだれぬべし。せんずる所取りあひてせんなし、とて、皆小門の方へぞかくれける。辨慶は、長押の際を、足駄はきながら彼方此方へぞありきける。かくとう一見苦しき物かな。さすが此の山と申すは、性空上人の建立せられし寺なり。然るべき人おはするうへ、幼き人の腰もとを、あしだはいて通るやうこそ奇怪なれ」ととがめられて、辨慶ついさつて申しけるは、「かくとうの仰は勿論に候ふ。左様に縁の上に、あしだはいて候ふだにも、狼藉なりと咎め給ふ程の衆徒の、何のくわんたいに、修行者のつらをば、足駄にしてはかれけるぞ」と申しければ、道理なれば衆徒音もせず。中々はなち合せて置きたらば、かくとうの計ひに、いか様にもすかして出すべかりしを、禍おこりける。信濃坊是を聞

りければ、廿二三許なる法師の、衣の下に、伏繩目のよろひ腹卷着てぞ出で来る。辨慶
是を見て、こはいかに。今日は穩便の詮議とこそ聞きつるに、きやつが風情こそけしか
らね。ないく聞くぞ、衆徒僻事をなすならば、かうをこえ、修行者ひがことあらば、
小法師ばらに、はなち合せよといふなるに、かくて出で大勢の中に取り籠められ叶ふま
じ。我れもさらば行きて出で立たばや、と思ひて、がくとうの坊に走り入りて、こはい
かに、と人のとふ返しをもせず、人も許さざりけるに、いつ案内は知らねども、納殿に
つと走り入りて、唐櫃一合取つて出で、褐の直垂に、黒糸絨の腹卷きて九十日剃らぬか
しらに、揉烏帽子に鉢巻し、櫟の木を以つてけづりたる棒の、八角にかどを立てよ、もと
を一尺ばかりまろくしたるを、引杖にして、高足駄をはいて、御堂の前にぞ出で来る。
大衆是を見て、「爰に出で来る者は何者ぞ」といひければ、「是こそ聞ゆる修行者よ。」「あ
ら怪しからぬ有様かな。こなたへ呼びてよかるべきか、捨て置きてよかるべきか。」「捨て
置きてもよかるまじ。」「さらば目な見せそ」と申しける。辨慶是をみて、いかにともい
はんか、と思ひつるに、衆徒のふしめに成りつるこそ心得ね。善惡をよそにて聞けば、大事
なり。近付きてきかばや、と思ひ走りよつて見ければ、講堂には老僧兒どもうち交りて、

ふしめ―下
目を使ふ臆
したる體

彼處へ―此
下誤脱ある
べし

ならはして
―打ちたし
なめて
食議―會議

と思ひて、拳こぶしを握り膝ひざを立て、「何のをかしきぞ」と眼まなこに角を立てにらみ廻まわしけり。がくとう是を見給ひ、「あはや此の者けしきこそ損そんじて見え候へ。いかさま寺の大事と成りなん」と宣ひて、「詮せんなき事に候ふ。御身の事にては候はぬぞ。よその事を笑わらひて候ふ。何のせんかおはすべき」と宣へば、座敷ざしきを立つて、但馬の阿闍梨あじかりといふ者の坊、其の間一町許あり。是も修行者のよりあひ所にてありければ、彼處へ行きあふ人々も辨慶べんけいを笑わらはぬ人はなし。怪あやしと思ひて、水に影かげをうつして見れば、つらに物をぞ書かれたる。さればこそ。是程の恥はぢにあたつて、一時いつときなりとも有りてせんなし。何方いづかたへも行かん、と思ひけるが、又打ちかへし思ひけるは、我一人が故に、山の名を下さん事こそ心うけれど、諸人しよじんをさんぐに悪口あくこうして、咎とがむる者をばならはして、恥はぢを雪すすぎて出でばや、と思ひて、人々の坊中はうちうへめぐり、さんぐに悪口あくこうす。がくとう此の事を聞きて、「何ともあれ、書寫法師しよしやほふし、面つらをはりふせられぬ、と覺ゆる。此の事せんぎ會議して、此の中にひがことの者あらば、それを取りて、修行者しゆぎやうじやに取らせて、大事をやめん」とて、衆徒しゆだう催もよほして、講堂かうだうにして、がくとう詮議せんぎす。されども辨慶べんけいはなかりけり。がくとう使者ししやを立てけれども、老僧らうそうの使のあるにも、出でざりけり。重ねて使あるに、東坂ひがしざかの上にさしのぞきて、後うしろの方を見た

國に一國々
にの誤か

かんにたへ
て一甚だし
く感じて

かくて一夏も過ぎ、秋の初にもなりしかば、また國に修行せむ、とぞ思ひける。されども名
残を惜みて、出でもやらで居たり。扱しも有るべき事ならねば、七月下旬に、かくとう
に暇こはんとて行きたりければ、兒大衆酒宴してぞ有りける。辨慶、參じてせんなしと
思ひて出でけるが、新しき障子一間立てたる所あり。此處に晝寢せばや、と思ひてしばら
く伏しけるに、其の比書寫に、相手きはぬ、いさかひ好む者あり、信濃坊かいゑんと
ぞ申しける。辨慶が寢たるを見て、多くの修行者見つれども、きやつ程の廣言して、に
くけなる者こそなけれ。きやつに恥をあたへて、寺中をおひ出さん、と思ひて、硯の
墨すりながし、武藏坊が面に、二くだり物を書きたりけり。片面にはあしだと書く、片
面には、書寫法師の足駄にはくとかきて、辨慶は平足駄とぞ成りにけり、面をふめども起
きもあがらず、と書き付けて、小法師ばらを二三十人集めて、板壁を敲いて同音にどつ
と笑はせける。武藏坊、あしき所に推參したりけるや、と思ひて、衣の袂引きつくるひて、
衆徒の中へぞ出でにける。衆徒是を見て、目ひき鼻ひき笑ひけり。人はかんにたへて笑
へども、我は知らねばをかしからず。人の笑ふに笑はずは、辨慶偏執に似たりと思ひ、
共に笑ひ顔してぞ笑ひける。されども座敷の體ふしぎに見えければ、辨慶は我が身の上、

四 書寫山炎上の事

辨慶、阿波の國より、播磨の國にわたり、書寫山に參り、性空上人の御影を拜み奉り、既に下向せんとしたるが、同じくは一夏こもらばや、と思ひける。此の夏と申すは、諸國の修行者充滿して、餘念もなく勤めける。大衆はかくとうの坊に集會し、修行者は行ひ所につく。夏僧はこくさうの御堂にて、人について夏中のやうを聞きて、學頭の坊に入りける。辨慶は推參して、長押の上にいくけなる風情して、かくとうの座敷を、暫く眺みて居たりけり。かくとうども是を見て、「一昨日きのふの座敷にも有りとも覺えぬ法師の、推參せられ候ふは、いづくよりの修行」と問ひければ、「比叡の山の者にて候ふ」と申しければ、「比叡の山はどれより」「櫻本より」と申す。「僧正の御弟子か」と申せば、「さん候ふ」「御俗姓は」と問はれて、ことくしげなる聲をして、「天兒屋根の御苗裔、なかのくわんはくどうりやう中關白道隆の末、熊野の別當の子にて候ふ」と申しけるが、一夏の間はいかにも心に入りて、勤め退轉なく行ひて居たりける。衆徒も、初の景氣今の風情相違して見えたり。されば人にはなれて見えたり。穩便の者にて有りけるや、とぞ譽めける。辨慶思ひけるは、

長押—下長
押、敷居の
下に横に長
くわたせる
材
かくとう—
學頭

退轉—懈怠

戒名―法師名

がう―剛

あくがれ―
心落ちつか
ずして浮か
れいづるこ
と

れば、頭は丸く見えける。かくては叶はじとて、戒名をば何とかいはまし、と思ひけるが、昔此の山に惡を好む者あり、西塔の武藏坊とぞ申しける。廿一にて惡をしそめて、六十一にて死にけるが、端座合掌して、往生を遂けたると聞く。我れも其の名を付いて呼ばれたらば、がうになる事もあらめ、西塔の武藏坊といふべし。實名は父の別當は辨せうと名のり、其の師匠はくわん慶なれば、辨せうの辨とくわん慶の慶とを取つて辨慶とぞ名乗ける。昨日までは鬼若、今日はいつしか武藏坊辨慶とぞ申しける。山上を出で、小原の別所と申す所に、山法師の住み荒したる坊に、誰とむるとはなけれども、しばらくは尊けにてぞ居たりける。されども兒なりし時だにも、みめわろく心いさうなれば、人もてなさず、まして訪ひ來る人もなければ、是をも幾程なくあくがれ出で、諸國修行にとて又出で、津の國河尻に下り、難波潟を眺めて、兵庫のしまなどいふ所をとほりて、明石の浦より船に乗りて、阿波の國について、焼山鶴が峯を拜みて、讃岐の志度の道場、伊豫のすかうに出でて、土佐の幡多又をがみけり。かくて正月も末に成りければ、また阿波の國へぞ歸りける。

になること有り。院宣にて是を鎮めつれば、一日のうちに、天下無双の願所五十四か所ぞといふ事あり。「今年六十一年に相當る。只捨て置け」とぞ仰せける。衆徒憤り申しけるは、「鬼若一人に、三千の衆徒と思し召しかへられ候ふこそ、遺恨なれ。さらば山王の御輿をふり奉らん」と申しければ、神には御領を參らせ給ひければ、衆徒、此の上はとてしづまりけり。此の事鬼若に聞かすな、とて、かくし置きたりしを、いかなる嗚呼の者が知らせけん、「是は遺恨なり」とて、いとどさんぐに振舞ひける。僧正もてあつかひて、「あらば有ると見よ。なくばなしと見よ」とて、目も見せ給はざりけり。

三 辨慶山門を出づる事

鬼若、僧正のにくみ給へる山を聞きて、頼みたる師の御坊だに斯様に思はれんに、山に有りても詮なし。目にも見えざらん方へ行かん、と思ひ立ちて出でけるが、かくては何處にても、山門の鬼若とぞいはれんすらん。學文に不足なし。法師に成りてこそ行かめ、と思ひて、髪剃り衣を取りそへて、美作治部卿といふ者の湯殿にはしり入りて、鹽の水にて手づから髪を洗ひ、所々おしどりにしたりける。かの水に影をうつして見け

ぶよう―武勇

はり―打ち

不祥―不幸

山上へ―この下誤脱あるべし

らめ、人の所に學文する者をだに、すかし出して不定になす事いはれなし」とて、僧正のもとに、訴訟の絶ゆる事なし。かく訴へ来る者をば、讐敵の様に思ひ、其の人の方へ走り入りて、部妻戸をさんぐに打ち破りけれども、惡事もぶようも、鎮むべきやうぞなき。其の故は、父は熊野の別當なり。養父は山の井殿、祖父は二位の大納言、師匠は三千坊の學頭の兒にてある間、手をもさしてはよき事あるまじ、とて、只打ち任せてぞ狂はせける。されば相手はかはれども、鬼若はかはらず、いさかひの絶ゆる事なし。拳をにぎり人をはりければ、人々路次をも直にとほりえず、たま／＼逢ふ者も、道を避けなどしければ、其の時は異議なくとほして後、逢ひたる時取つて押へて、「さもあれ、過ぎし比は、行きあひ參らせて候ふに、道をよけられしは、何の遺恨にて候ひけるぞ」といひければ、恐しさに膝ふるひなどする者を、腕ねぢ、こぶしを以つて押し倒しねぢたふしなどする程に、逢ふ者の不祥にてぞありける。衆徒是を詮議して、僧正の見なりとも、山の大事にて有るぞ。とて、大衆三百人、院の御所へ參りて申しければ、「それ程のひが事の者をば、急ぎ追ひ失へ」と院宣有りければ、大衆悦び、山上へ佛所に公卿詮議有りて、古き日記見給へば、六十一年に山上にかよる不思議の者出で來ければ、朝家の祈禱

ふぜい—風
情、様子

さか—し
く—伶俐な
り
せい—精神

よかるべき
—下にの
一字を脱す
る歟

かへつて親をも導くべし」と打ちくどき申されければ、さらばとて叔母に取らせける。
産所に行きて、産湯をあびせて、鬼若と名を付けて、五十一日過ぎければ、京へ具して
上り、乳母を付けて、もてなしかしづきける程に、鬼若五歳にては、世の人十二三程に
見えける。六歳の年、疱瘡といふものをして、いとど色も黒く、髪は生れたるまよなれ
ば、肩より下へおひ下りて、髪の方ぜいも男になして叶ふまじ。法師になさんとて、比
叡の山の學頭西塔櫻本の僧正のもとに、申されけるは、「三位殿の爲には、養子にて候ふ。
學問のために奉り候ふ。みめかたちは、参らするに付けて恥ぢ入りて候へども、心はさ
かさかしく候ふ。文の一卷もよませて給ひ候へ。心の不定に候はんは、直させ給ひて、
いか様にも御計ひに任せ候ふ」とて、上せけり。櫻本にて學文する程に、せい、月日の
かさなるに随ひて、人に勝れてはか／＼し。學文世にこえて器用なり。されば衆徒も、
「形はいかにも悪かれ、學文こそ大なり」とて、いよく指南し給ひける。かくて學文
に心をだにも入れなばよかるべき。力もよく、骨もふとく逞しくなる儘に、師の仰に
も随はず、児法師ばらを語ひて、人も行かぬ御堂のうしろの山の奥などへ伴ひ行きて、
腕おし、頸引、相撲などぞ好みける。衆徒此の事を聞きて、「わが身こそいたづら者な

むか齒—前齒

ふしづけ—
柴に束れて
沈むること

あら人神—
生神

る者」と問はれければ、生れ落ちたるふしぎは、世の常の二三歳ばかりにて、髪は肩のかくるゝ程に生ひて、奥齒むか齒は、特に大きに生ひてぞ生れけれ。別當に此の由を申しければ、「さては鬼神ごさんなれ。しやつを置いては、佛法の仇となりなんするぞ。水の底にふしづけにもし、深山に磔にもせよ」とぞ宣ひける。母これを聞き、「それはさる事なれども、親となり子と成ることも、此の世一つならぬ事ぞ、と承る。忽ちにいかゞ失なはん」となけき入りてぞおはしける所に、山の井の三位といひける人の北の方は、別當の妹なりしが、別當に、をさなき人の御不審をとひ給へば、「人の生るよと申すは、九月十月にてこそ極めて候へ。既に此のものは、十八月に生れて候へば、助け置きても親のあたとも成るべく候へば、助け置く事候ふまじ」と宣ひける。をば御前聞き給ひて、「腹の内にて久しくして生れたる者、親の爲に悪しからんには候はず。それもうこしの黃石が子、腹の内にて八十年の齡を送り、白髮生ひて生れける。年は二百八十歳。たけ低く色黒くして、世の人には變りけり。されども八幡大菩薩の御使者、あら人神といははれ給ふ。只みづからに給はり候へ。京へ具して上り、能くば男になして、三位殿へ奉るべし。悪しくは法師にもなして、經の一卷も讀ませたらば、そうとうの身となりて、

したん―自
歎歎、自ら
得意になる
こと

て、熊野山滅亡せられん事、本朝の大事なり。右大臣には此の姫君を内より返し奉り給はど、何の御憤か有るべき。又二位の大納言の御墳、熊野の別當何か苦しかるべき。年たけたる許にてこそあれ。天兒屋根の御苗裔中關白道隆の御子孫なり、苦しかるまじ」とぞせんぎ事了りて、切部の王子に早馬を立て、此の由を申されければ、右大臣、公卿僉議の上は申すに及ばず、とて、打ち捨てゝ歸り上り給ふ。二位大納言は、我れ獨して憤るべきならず、とて、打ち連れ奉りて、上洛有りければ、熊野も都も靜なりといへども、やゝもすれば兵ども、我らがする事は、宣旨院宣にも従がはどこそ、としたんして、彌代を世ともせざりけり。扱姫君は別當に隨ひて、年月を経る程に、別當は六十一、姫君に馴れて子をまうけんするこそ嬉しけれ。男子ならば佛法の種をつがせて、熊野をも譲るべし、とて、かくて月日を待つ程に、限ある月に生れずして、十八月にぞ生れける。

二 辨慶生るゝ事

別當、此の子の遅く生るゝ事不思議に思はれければ、産所に人をつかはして、「いか様な





おもむき—
心の赴、發
企
よろひ—着
る

政所—家政
なとりまか
なふ所

れは思ひまうけたる事なれ。新宮熊野の地へ、敵に足をふませばこそ」とぞ宣ひける。
先々の僻事と申すは、大衆のおもむきを、別當のしづめ給ふだにも、やゝもすれば衆徒
はやりき。いはんや是は別當おこし給ふ事なれば、衆徒もつはものをすゝめけり。我れ
も我れもと甲冑をよろひ、先さまに走り下りて、同者を待つ所に、又跡より大勢ときを
作りて追つかけたり。恥をはづべき侍どもみな逃げける。衆徒輿を取つて歸り、別當に
奉る。我がもとは上下の行所なりければ、もし京方の者ありや、とて、政所におき奉り、も
ろともに朝暮引き籠りてぞおはしける。もし京より返し合する事もや、と用心きびしく
したりけり。されども私の計にてあらざれば、急ぎ都へはせ上りて、此の由を申したり
ければ、右大臣殿大きに憤り給ひて、訴へ申されたりければ、やがて院宣を下して、和
泉、河内、伊賀、伊勢の住人どもを催して、師長、大納言殿兩大將として、七千餘騎に
て、「熊野の別當を追ひ出して、則ち別當になせ」とて、熊野におしよせ給ひて攻め給へ
ば、衆徒身を捨てゝ防ぐ。京方叶はじと思ひけん、切部の王子に陣を取つて、京へは
や馬を立て申されければ、「合戦遅々する仔細あり。其の故は、公卿詮議有りて、平宰相
信成の御娘、美人にておはしましよかば、内へ召されさせ給ひけるを、今此の事によつ

宿願をほどく―報賽、俗にいふ禮参り

懺法―法華懺法のこと
天台大師の作にて懺悔の談を記せるもの常に佛前にて誦す

詣をとけて、王子々々の御前にて、宿願をほどき候ふべし」と祈られければ、程なく平癒し給ひぬ。其の次の年の春、宿願をはらさせ給はん爲に、参詣あり。師長大納言殿よりして、百人同者つけ奉りて、三の山の御参詣を事故なく遂げ給ふ。本宮せうしやう殿に御通夜ありけるに、別當も入堂したりけり。遙に夜ふけて、内陣にひそめきたり。何事ならん、と姫君御覽する所に、「別當の参り給ひたる」とぞ申したる。別當かすかなる燈火の影より、此の姫君を見奉り給ひて、さしも然るべき行人にておはしけるが、未懺法だにも過ぎざるに、急ぎ下向して、大衆を呼びて「いかなる人ぞ」と問はれければ、「是は二位の大納言殿の姫君、右大臣殿の北の方」とぞ申しける。別當「それは約束許にてこそあるなれ。未近付き給はず候ふと聞くぞ。さきく大衆の、あはれ熊野に何事も出で來よかし、と人の心をも我が心をも、見んといひしは今ぞかし。出で立ちてあしきのなからん所に、同者を射ちらして、此の人を取りてくれよかし。別當が兒にせん」とぞ宣ひける。大衆これを聞きて、「さては佛法のあた、王法の敵とやなり給はんすらん」と申しければ、「臆病の至る所にてこそあれ。かゝる事を企つるならひ、大納言殿師長、院の御前へ参り、訴訟申し給はゞ、大納言を大將として、畿内の兵こそ向はんすらめ。そ

義經記 卷第三

一 熊野の別當亂行の事

雲の上人
殿上人

義經の御内に聞えたる、一人當千の剛の者あり。族姓を尋ぬるに、天兒屋根の御苗裔、中關白道隆の後胤、熊野の別當辨せうが嫡子、西塔の武藏坊辨慶とぞ申しける。かれが出來る由來を尋ぬるに、二位の大納言と申す人は、公達あまた持ち給ひたりけれども、親に先だち皆うせ給ふ。年たけ齡傾きて、一人の姫君をまうけ給ひたり。天下第一の美人にておはしければ、雲の上人我もくと望をかけ給ひけれども、更に用ひ給はず。大臣師長ねんごろに申されければ、さるべき由申されけれども、今年は忌むべき事あり、東の方は叶はじ。明年の春の比、と約束せられけり。御年十五と申す夏の比、いかなる宿願にか、五條の天神に参り給ひて、御通夜し給ひたりけるに、辰巳の方より俄に風吹き來りて、御身にあたる、と思ひ給ひければ、物狂はしくいたはりぞ出で來給ひたる。大納言師長、熊野を信じ参らせ給ひける程に、「今度の病たすけさせ給へ。明年の春の比は、参

靈死靈などの
つきて崇
を爲すこと

ず、十六と申す年、終に歎き死になりけり。法眼はかねて物をぞ思ひける。いかならむ
世にも有らばや、とかしづきける娘には別れ、頼みつる弟子をば斬られぬ。自然の事あ
らば、一方の大將にもなり給ふべき義經は、中違ひ奉りぬ。彼れといひ此れといひ、一方
ならぬ歎き、思ひ入りてぞありける。後悔そこにてたえずとは、此の事なり。只人は情あ
るべき浮世なり。

かまへて—
その方の準
備
さらぬ—さ
あらぬ

物の怪—生

脇に花の木ありける下に、ほのくらき所あり。此處に立ち給ひて、「内に人やある」と仰せありければ、内よりも、「誰れ」と申す。「義經なり。此處あけよ」と仰せありければ、これを聞き、「湛海を待つ所に、おはしたるは、よき事よもあらじ。あけて入れまゐらせんか」といひければ、門あけんとする者もあり、橋渡さんとする者もあり、走り舞ふ所に、何處よりか越えられけん、築地の上に、首三つ引きさけて出で來り給ふ。おの／＼臆を消し居る所に、人さきに内に入り、「大かた身に叶はぬ事にて候ひつれども、かまへてかまへて首取りて見せよ、と仰せ候ひつる間、湛海が首取りて參りたる」とて、法眼が膝の上に投げられければ、興さめてこそ思へども、會釋せでは叶はじと思ひけん、さらぬ様にて「かたじけなし」とは申せども、よに苦々しくぞ見えける。「悦び入りて候ふ」とて、内に急ぎにけ入る。御曹子今宵は爰に留まらばや、と思し召しけれども、女に暇はせ給ひて、山科へとて出で給ふ。あかぬ名殘の惜しければ、泪に袖を濡し給ふ。法眼が女跡にひれふし、泣き悲めども甲斐ぞなき。忘れんとすれども忘れず。まどろめば夢に見え、さむれば面影にそふ。思ひは彌まさりして、やる方もなし。冬も末になりければ、思ひの數やつもりけん、物の怪などといひしが、祈れども叶はず、藥にても助から

さして―鎖
して
口―幅

ひつめ、はたと切り、此處に追ひつめ、はたと切り、枕をならべて二人切り給へり。残り
りは方々へ逃げにけり。三の首を取り集めて、天神の御前に杉のあるもとに、念佛申し
おはしたりけるが、此の首をすてゝや行かん、持ちてや行かん、と思し召し、法眼が、か
まへてかまへて首取りて見せよ、と誂へつるに、持ちて行きてくれて膽をつぶさせん、
と思し召し、三の首を太刀の先にさし貫き歸り給ひ、法眼が許におはして御覽すれば、
門をさして橋をはづしたれば、只今たゞきて、義經といはゞよもあけじ。これほどの所
は、はね越し入らばや、と思し召し、口一丈の堀、八尺の築土に、飛び上り給ふ。梢に
鳥のつたふ如し。内に入り御覽すれば、非番當番の者ども伏したり。縁に上り見給へば、
火ほのゝとかがよけて、法花經の二卷目半巻ばかり、讀みて居たりけるが、天井を見あ
けて、世間の無常をこそ觀じける。「六韜兵法を讀まんとて、一字をだにも讀まずして、
今湛海が手にかゝらんすらん。南無阿彌陀佛」と獨言に申しける。あら憎の者の面や。
太刀のむねにて打たばや、と思し召しけるが、女が歎かん事、不便に思し召して、法眼
が命をば助け給ひけり。やがて内へ入らん、と思し召しけるが、弓矢を取る者の、立聞な
んどしたるかと思はれんすらん、とて、首をまた引きさけて、門の方へ出で給ふ。門の



僻事一誤

ひるむ一弱
る

厳し一物に
すぐれたる
こと

る聲色して、河の邊より、「世になし源氏、参るや」といひも果てざるに、太刀打ちふり、
わつと喚いて出でたまふ。「湛海と見るは僻事か。かくいふこそ義經よ」とて、追つかけ
給ふ。今迄は、とこそせめ、かくこそせめ、と言ひけれども、その期になりぬれば、三
方へさつと散る。湛海もついて二段ばかりぞ逃げにける。「生きても死しても、弓矢取る
者の、臆病程の恥やある」とて、長刀を取りなほし、返し合す。御曹子は、小太刀にて
走り合ひ散々に打ち合ひ給ふ。もとよりの事なれば、切り立てられ、今はかなはじとや
思ひけん、長刀取りなほし、散々に打ちあひけるが、少しひるむ所を、長刀の柄を打ち
給ふ。長刀からりと投げかけたる時に、小太刀を打ちふり、走りかよりて、ちやうど切
り給へば、切先頸の上にかゝるとぞ見えし、首は前へぞ落ちにける。年三十八にてぞ亡
せにける。酒を好みし猩々は、樽のほとりにつながれ、惡を好みし湛海は、由なき者に
與して亡せにけり。五人の者どもこれを見て、さしも厳しかりつる湛海だにもかくなり
たり。ましてわれく叶ふまじき、と思ひて、皆ちりぐにぞ成りにける。御曹子これ
を御覽じて、「憎し、一人もあますまじ。湛海とつれて出づる時は、一所とこそいひつら
ん。きたなし。返し合せよ」と仰せありければ、いとど足ばやにぞ逃けにける。彼處に追

あえさん―
注がむ
あからさま
―かりそめ

らんに切きつて、社壇しゃだんに血ちをあえさんも、神慮しんりょのおそれあり。下向げかうの道みちを、と思し召おほめし、
現在げんざいのかたきをとほし、下向げかうをぞ待ち給ふ。津つの國くにの、二葉ふたはの松まつの根ねざしそめて、千代ちよ
を待つよりもなほ久し。淇海たんかい天神てんじんに参りて見れども、人もなし。聖ひじりにあうて、あからさ
まなる様やうにて、「さる體ていの冠者くわんじやなどや参りて候うひつる」と問ひければ、「左様さやうの人は、と
く参り下向げかうせられぬる」と申しける。淇海たんかいは、やすからず、「疾さくより参りなば、逃のがすま
じきを。定めて法眼ほふけんが家に有るらん。行きてせめ出して切きつてすてん」とぞ申しける。尤
も然るべし、とて、七人つれて天神てんじんを出づ。あはやと思し召おほめし、さきの所に待ち給ふ。そ
の間二段たんばかりちかづきたるが、淇海たんかいの弟子でし、禪師ぜんしと申す法師ほふしまうしけるは、「左馬頭さまのかう
の殿どのの公達きんだち、鞍馬くらまにありし牛若殿うしかぎの、男をとこに成りて、源九郎げんくろうと申し候ふは、法眼ほふけんの娘むすめに近付
きけるなれば、女をんなの男をとこにあひぬれば、正體しやうたいなきものなり。もし此の事をほの聞き、男に
かくと知らせなば、かやうの木きの蔭かげにも待つらん。あたりに目めな離はなし給ふな」と申しけ
る。淇海たんかい「音おとなしそ」とぞ申しける。「いざ、この者よびて見ん。剛がうの者ならば、よもか
くれじ。臆病者おくびやうものならば、我等が氣色けしきに恐おそれて、出づまじきものを」とぞいひける。あは
れ、只出ただでたらんよりも、有るかといふ聲こゑについて出でばや、と思はれけるに、憎にくけな

節繩目―染
革の名紺薄
青白の三色
をつゝら拆
に染めたる
が幕の手繩
を伏せたる
が如くなる
よりいふ
しゆつちや
う頭巾―剃
髮者の被る
頭巾

なつて、天神と號し奉る。ねがはくは、湛海を義經に相違なく手にかけてさせて給べ」と祈念し、御前を立ちて、南へ向ひて四五段ばかり歩ませ給へば、大木一本あり。この木の下のはの暗きところ、五六人がぼ隠るべきところを御覽じて、あはれ所や。爰に待ちて切つてくれればや、と思し召し、太刀を抜き、待ち給ふ所に、湛海こそ出で來たれ。屈強の者五六人に腹卷きせて、前後にあゆませて、我が身は聞ゆるいんぢの大將なり。人には一様かはりて出で立ちけり。褐の直垂に、節繩目の腹卷きて、赤銅作の太刀をはき、一尺三寸有りける刀に、こめんやうなめしにて、表鞘を包みてむすとさし、大長刀の鞘を外し、杖につき、法師なれども、常に頭を剃らざれば、おつゝかみ頭に生ひたるに、しゆつちやう頭巾ひつかごみ、鬼の如くに見えける。さしくどもみて、御覽すれば、首のまはりに、かゝる物もなく、よに斬りよけなり。いかに切り損すべき、と待ち給ふも知らずして、御曹子の立ち給へる方へ向ひて、「大慈大悲の天神、願はくは聞ゆる男を、湛海が手にかけてたべ」とぞ祈請しける。御曹子これを御覽じて、いかなる剛の者も、只今死なんずる事は知らずや。直に斬らばや、と思し召しけるが、しばらく我が頼む天神を大慈大悲と祈念するに、義經は悦の禱なり、きやつは參の禱ぞかし。未だ所作もはてさ

きやうしや
く—景迹に
て勘考の意
なるべし

精好—練糸
を經とし生
糸を緯とし
て織りたる
絹織物

なり果てよ、夫妻の恨後の世まで残るべき、とつくぐと思ひつどくるに、親子は一世、
夫は二世の契なり。とても人に別れて、片時も世に長らへてあらばこそ、憂きもつらきも
忍ばれめ。親の命を思ひすてよ、かくと知らせ奉る。「只これより何方へも落ちさせ給へ。
昨日晝程に、湛海を召しよせて、酒を勧められしに、あやしき言葉の候ひつるぞ。堅固
の若者ぞと仰せける。湛海、一刀にはたらじといひしは、御身の上。かく申すは、女の
心のうち、かへりてきやうしやくせさせ給ふべきなれども、賢人二君につかへず、貞女
兩夫に見えず、と申す事の候へば、知らせ奉るなり」とて、袖を顔におしあてよ、忍びも
あへず泣き居たり。御曹子これを聞し召し、「もとより打ちとけ、思はず知らず候ふこそ
迷もすれ。知りたりせば、しやつめには斬られまじ。とくより参り候はん」とて出で給
ふ。比は十二月二十七日、夜ふけがたの事なれば、御装束は白小袖一重、藍揃ひきかさね、
精好の大口に、唐織物の直垂にきごめして、太刀わきばさみ、暇申して出で給へば、姫
君は、これやかぎりの別なるらんと悲み給へり。妻戸の脇に、衣かつぎてぞ臥し給へり。
御曹子は天神にひざまづき、祈念申させ給ひけるは、「南無天満大自在天神、利生靈地す
なはち歸縁の福を蒙り、禮拜のともがらは、千萬の諸願成就す。爰に社壇ましますと

印地―喧嘩

をこがまし
く―愚かし
く、義經の
意中を也

人―夫

に京にも御入り候はゞ、萬事頼み奉り存じ候ふ。さても北白川に、湛海と申す奴、御入り候ふが、何故ともなく法眼が爲に仇をなし候ふ。哀れ失はせ候うて給はり候へ。今宵五條天神に参り候ふなれば、君も御参籠候うて、きやつを切つて、頭を取りてたまはり候はゞ、今生の面目申し盡しがたく候ふ」とぞ申しける。あはれ人の心も計りがたく思し召しけれども、「さ承り候ふ。身に於いて叶ひ難くは候へども、罷り向ひてこそ見候はめ。何程の事の候ふべき。しやつも印地をこそ仕習うて候ふらめ。義經は、先に天神に参り、下向しざまにしやつが首切りて、参らせ候はんこと、風の塵拂ふ如くにてこそ候ふらめ」と言葉を放つて仰せありければ、法眼何と和君が仕度するとも、先に人をやりて待たすれば、と世にをこがましくぞ思ひける。「左候はゞ、やがて歸りまらん」とて、出で給ひ、そのまゝ天神にと思し召しけれども、法眼が娘に御心ざし深かりければ、御方へ入らせ給ひて、「たゞいま天神にこそ参り候へ」とのたまへば、「それは何故ぞや」と申しければ、「法眼の、湛海斬れと宣ひて候ふによつてなり」と仰せければ、聞きもあへず、さめざめと泣きて、悲しきかなや。父の心を知りたれば、人の最期も今を限なり。これを知らせんとすれば父に不孝の子たるべし、と思へば、契り置きつる言の葉、みな偽りと

ことくし
一仰山らし

素絹の衣—
白絹の僧服

跡なし人—
筋目なき人

しければ、「未だ年も若く、十七八かと覺え候ふ。よき腹巻に、金作の太刀の心も及ばぬを持ちたるぞ。心許し給ふな」と申しければ、湛海是を聞きて、申しけるは、「何條、それ程の小男の、分に過ぎたる太刀佩いて候ふとも、何事か有るべき。一刀にはよも足り候はじ。ことくし」とつぶやきて、法眼がもとを出でにけり。法眼すかしおふせたりと、世に嬉しけにて、日來は音にも聞かじとしける御曹子の方へ、申しけるは、見參に入り候ふべき由を申しければ、出でて何にかせん、と思し召しけれども、呼ぶに出でずば臆したるにこそ、と思し召し、「頓て參り候ふべき」とて、使をかへし給ひける。此の由を申しければ、世に心ちよけにて、日比の見參所へ入れ奉り、尊けに見えんが爲に、素絹の衣に、袈裟かけて、机に法花經一部おきて、一の卷の紐をとき、妙法蓮花經と讀みあぐる所へ、憚る所なくつと入り給へば、法眼片膝を立て、「これへく」と申しける。すなはち法眼と對座に直らせ給ふ。法眼申しけるは、「去ぬる春の比より、御入り候ふとは知りまゐらせて候へども、如何なる跡なし人にて渡らせ給ふやらん、と思ひ參らせて候へば、忝くも、左馬頭の殿の公達にて渡らせ給ふこそ、忝き御事にて候へ。この僧ほどの、淺ましき次の者などを、親子の御契の由承り候ふ。まことしからず候へども、誠

異姓他人な
れば―義經
をいふ
行にて―修
行者の戒を
守る故に

ぞ振舞はれける程に、法眼もはや心得て、「さもあれ、その男は何故に、姫が方にはあるぞ」と怒りける。ある人の申しけるは、御方におはします人は、左馬頭の公達と承り候ふよし申せば、法眼聞きて、世になし源氏入れ立てよ、すべて六波羅へ聞えなば、なじかはよかるべき。今生は子なれども、後の世の敵にてありけりや。斬りて棄てばや、と思へども、子を害せんこと、五逆の罪のがれ難し。異姓他人なれば、これを切つて、平家の御見参に入りて、勳功に預らばや、と思ひて、うがよひけれども、我が身は行にて叶はず。あはれ心も剛ならん者もがな。斬らせばや、と思ふ。その比北白川に、世に越えたる者あり。法眼には妹婿なり。しかも弟子なり。その名を湛海坊とぞ申しける。かれが許に使者をつかはし申しければ、程なく湛海來たり。四間なる所に入れて様々にもてなし、申しけるは、「御邊を喚び奉ること、別の仔細になし。去春の比より、法眼が許に、さる體なる冠者一人、下野の左馬頭の公達など申す。助け置きては悪しかるべし。御邊より外に頼むべき人もなし。夕さり五條の天神へ参り、この人をすかし出すならば、首を斬つて見せ給へ。さもあらば、五六年望み給ひし六韜兵法をも、御邊に奉らん」といひければ、「さ承りぬ。善惡まかり向ひてこそ見候はめ。抑いか様なる人にておはしまし候ふぞ」と申

やうく—
様々

明日聞きて
—明日父に
聞かれて

すかして御返事を取りて参らせ候はん」と申す。「女性の習なれば、ちかづかせ給ひて候はど、などか此の文、御覽ぜで候ふべき」と申せば、次の者ながらも、斯様に情ある者もありけるかや、と文遊ばして給はる。我が主の方に行き、やう／＼にすかして、御返事取りてまゐらす。御曹子、それよりして、法眼の方へはさし出で給はず、たゞおほかたに引き籠りてぞおはしける。法眼が申しけるは、「斯る心地よき事こそなけれ。目にも見えず、音にも聞えざらん方に、行き失せよかし」と思ひつるに、失ひたるこそ嬉しけれ」とぞ宣ひける。御曹子、「人にしのぶ程、けに心苦しきものはなし。何時までかくて有るべきならねば、法眼にかくと知らせばや」とぞのたまひける。姫君、御袂にすがり悲み給へども、「我は六韜に望あり。さらばそれを見せ給ひ候はんにや」と宣ひければ、明日聞きて、父に失はれん事力なし、と思ひけれども、幸壽を具して、父の秘蔵しける寶藏に入りて、重々の巻物の中に、鐵卷したる唐櫃に入りたる六韜兵法、一卷の書を取り出して奉る。御曹子、悦び給ひて、ひき廣げて御覽じて、晝は終日に書き給ふ。夜は終夜これを復し給ひ、七月上旬の比よりこれをよみはじめて、十一月十日比になりければ、十六卷を一字も残らず覚えさせ給ふ。讀み給ひての後は、此處にあり、彼處にあり、と

いんぢの大
將―印地打
とて石など
打ちあふ兒
戯あり、轉
じて野武士
あふれ者な
どの義とす
その大將
幸ひて―婚
嫁して
方―妻
しれごと―
痴事
斜ならず―
一通ならず

幾人有る」と問ひたまへば、「男子二人、女子三人、第二人。」家にあるか。「はやと申す所に、いんぢの大將して御入り候ふ。」「又三人の女子は何處に有るぞ。」「所々に幸ひて、皆上臈堀を取りて渡らせ給ひ候ふ」と申せば、「堀は誰。」「嫡女は平宰相信業の卿の方、一人は烏飼の中將にさいはひ給へる」と申せば、「何條法眼が身として上臈堀取ること過分なり。法眼世に越えて、しれごとをするなれば、人々に面打たれん時、方人して家の恥をも清めんとはよも思はじ。それよりも、われ／＼斯様にあるほどに、堀に取りたらば、舅の恥をすゝがんものを。主にさいへ」と仰せられければ、幸壽、此の事を承りて、「女にて候ふとも、左様に申して候はんずるには、首を斬られ候はんずるにて候ふ」と申しければ、「斯様に知る人に成るも、此世ならぬ契にてこそあらめ。隠して詮なし。人々に知らすなよ。われは、左馬頭の子源九郎といふものなり。六韜兵法といふものに望をなすによりて、法眼も心よからねども、斯様にてあるなり。その文のありどころ知らせよ」とぞ仰せける。「いかでか知り候ふべき。それは法眼の斜ならず重寶とこそ承りて候へ」と申せば、「さては、いかゞせん」とぞ仰せける。「さ候はど、文をあそばして、給はり候へ。法眼のなめならず寵愛の姫君の方へ、人にも見えさせ給はぬを、

しがくー
それときま
りて

これ程の狼藉者を、誰がはからひとして、門より内へ入れけるぞ」と言ふ。御曹子思し召しけるは、憎い奴かな。望をかくる六韜こそ見せざらめ。剩へあら言葉をいふこそ不思議なれ。何時の用に帶したる太刀ぞ。しやつ斬つてくればや、と思し召しけるが、よしよし、しかく一字をも讀ますとも。法眼は師なり、義經は弟子なり。それを背きたらば、堅牢地神の恐れもこそあれ。法眼をたすけてこそ、六韜兵法のありどころをも知らんすれ、と思し召しなほし、法眼を助けてこそいられるは、つぎたる首かな、と見えし。そのまゝ人知れず、法眼が許にて、明し暮し給ひける。出でてより、飯をしたゝめ給はねども、瘦せ衰へもしたまはず、日にしたがひて、美しき衣がへなんと召されけり。何處へおはしましけるやらんとぞ、人々怪しみをなす。夜は、四條の聖のもとにぞおはしましける。かくて法眼が内に、幸壽の前とて女あり。次の者ながら、情あるものにて、常は訪ひ奉りけり。自然知人なるまゝ、御曹子、物語のついでに、「抑法眼は何といふぞ」と仰せられければ、「何とも仰せ候はぬ」と申す。「さりながら」と問はせ給へば、「過ぎし比は、あらばありと見よ、なくばなきと見て、人々ものないひそ、とこそ仰せ候ひし」と申しければ、「義經に心許しもせざりけるござんなれ。まことは、法眼に子は



世に無者―
日隆者

ひつかうで
―引きこみ
て、引きか
ぶりて
凡下―下賤
の民

天上―天は
殿の義か

頼み奉らんする爲に、御入り候ふやらん。御對面候はん時も、世に無者など仰せられ候ひて、持ちたまへる太刀のむねにて、一打ちもあてられさせ給ふな」と申しける。法眼これを聞きて、「けなけ者ならば、行きて對面せん」とて出でたち、生絹の直垂に、緋織の腹巻着て、草履をはき、頭巾耳の際までひつかうで、大手鉾を杖につきて、縁とうとうと踏みならし、暫く凝視りて「抑、法眼に物いはんといふなる人は、侍か凡下か」とぞいひける。御曹子、門のわきより、するりと出でて、「某申すにて候ふぞ」とて、縁の上に上り給ひける。法眼これを見て、縁より下におり立つて畏らんとするに、思ひのほか、法眼にむす膝をきしりてぞ居たりける。「御邊は、法眼に、物いはんと仰せられける人か」と申しければ、「さん候ふ」。「何事仰せ候ふべき。弓の一張、矢の一筋などの御所望か」と申しければ、「やあ御坊、それほどの事企てよ、是まで來らんや。まことか御坊は、異朝の書を將門が傳へし六韜兵法といふ文、天上より給はりて、秘藏して持ち給ふとな。その文、私ならぬものぞ。御坊もちたればとて、讀み知らずば、をしへ傳ふべき事もあるまじ。理を枉けて、某にその文見せ給へ。一日の中に讀みて、御邊にも知らせをしへて返さんぞ」と仰せありければ、法眼、齒嚙をして申しけるは、「洛中に

ござんなれ
—こそある
なれ

歸れ」と仰せられける。童申しけるは、「法眼は、くわしよく世に越えたる人にて、然るべき人達の御入りの時だにも、子どもを代官に出し、我は出合ひ参らせぬくせ人にて候ふ。ましておのくの様な人の御出を賞翫候うて、對面あること候ふまじ」と申しければ、御曹子、「きやつは、不思議のもののいひ事かな。主もいはぬさきに、人の返事をすべからん事はいかに。入りにてこの様を、言ひて歸れ」とぞ仰せられける。「申すとも、御用ひあるべしとも覺え申さず候へども、申して見候はん」とて、内に入り、主の前にひざまづき、「斯る事こそ候はね。門に、年の比十七八かと覺え候ふ小冠者一人、たとすみ候ふが、法眼はおはするか、と問ひ奉り候ふ程に、御渡り候ふと申して候へば、御對面あるべきやらん」と申しける。「法眼を、洛中にて見さけて、左様にいふべき人こそ覺えね。人の使か、おのれが言葉か、よく聞きかへせ」と申しける。童申しけるは、「此人の氣色を見候ふに、主など持つべき人にてはなし。また郎等かと見候へば、折節に直垂を召して候ふ。兒達かと覺え候ふ。かね黒に眉取りて候ふが、良き腹巻に、金作の太刀を佩かれて候ふ。あはれ、この人は、源氏の大將軍にて在しますござんなれ。この程世を亂さんとうけたまはり候ふが、法眼は、世に越えたる人にて御渡り候へば、一方の大將軍とも

くわしよく
—華飾

者すくなし。當國の住人、田原藤太秀郷は、勅宣を先として、將門を追討の爲に東國に下る。相馬の小次郎、防ぎ戦ふといへども、四年に味方滅びにけり。最後の時威力を修してこそ、一張の弓に八つの矢はけて、一度に之を放つに、八人の敵をば射たりけれ。それより後は、又絶えて久しく讀む人もなし。只徒に代々の御門の御寶藏に、籠め置かれたりけるを、その比一條堀河に、陰陽師の法師に鬼一法眼とて、文武二道の達者あり。天下の御祈禱してありけるが、これを賜はりて、秘藏してぞ持ちたりける。御曹子、これを聞き給ひて、頓て山科を出でよ、法眼の許に佇みて見給へば、京中なれども居たる所もしたとかにこしらへ、四方に堀をほりて水をたよへ、八つの櫓をあけたりけり。夕には、申の刻、酉の時になれば、橋をはづし、朝には、巳午の刻まで門を開かず、人のいふ事、耳のよそになして居たる、大くわしよくの者なり。御曹子さし入りて見給へば、侍の縁のきはに、十七八ばかりなる童一人たよすみてあり。扇さし上げて、招き給へば、何事ぞと申しける。「おのれは内の者か」と仰せられければ、「さん候ふ」と申す。法眼は是に候ふか」と仰せられければ、「これに」と申す。「さらば、おのれに頼むべきことあり。法眼にいはんずる様は、門に見も知らぬ冠者、物申さんといふ、と急度いひて

上らばや、と思し召し、假初の歩のやうにて京へ上らせ給ふ、とて、伊勢の三郎が許に御座して、暫くやすらひて東山道にかより、木曾の冠者の許におはして、謀叛の次第を仰せ合されて都に上り、片邊の山科に知る人ありける所に渡らせ給ひて、京の機嫌をぞ窺ひ給ひける。

七 鬼一法眼の事

爰に代々の御門の御寶、天下に祕藏せられたる十六卷の書あり。異朝にも我が朝にも、傳へし人一人として愚なる事なし。異朝には太公望、是を讀みて八尺の壁に上り、天に上る徳を得たり。張良は、一卷の書と名付けて、これを讀みて、三尺の竹に上りて虚空をかける。樊噲は、これを傳へて、甲冑をよるひ弓箭を取つて、敵に向ひて怒れば、頭の甲の鉢をとぼす。本朝の武士には、坂上田村丸これを讀み傳へて、あくしのたかまろを取り、藤原の利仁これを讀みて、あかゞしらの四郎將軍を取る。それより後は絶えて久しかりけるを、下野の國の住人相馬の小次郎將門これを讀み傳へて、我が身のせいたんむしやなるに依つて、朝敵となる。されども天命を背く者の、やゝもすれば世を保つか

椀飯―椀盛
飯の事にて
饗應の意

き一とて、泰衡を呼びて申しけるは、「兩國の大名、三百六十人をすぐりて、日々の椀飯を參らせて、君を守護し奉れ。御ひきで物には、十八萬騎持ちて候ふ郎等を、十萬をば二人の子供に給ひ候へ。今八萬をば君に奉る。君の御事は、さて置きぬ。吉次が御供申さでは、いかでか御下り候ふべき。秀衡を秀衡と思はん者は、吉次に引出物せよ」と申しければ、嫡子泰衡、白皮百枚、鷲の羽百しり、良き馬三十疋、白鞍置きてぞ引きにける。二男基衡も、これに劣らず引出物しけり。その外、家の子郎等、我おとらじと引きにける。秀衡、これを見て、「獅子の皮も鷲の尾も、今はよも不足あらじ。御邊の好むものなれば」とて、貝摺りたる唐櫃の蓋に、砂金一蓋入れてぞ取らせける。吉次、この君の御供し、道々の難を遁れたるのみならず、徳つきて斯る事にも逢ひけるものよ。ひとへに多門の御利生とぞ思ひける。かくて商を仕り候ふとも、よき資本を儲けたり、不足あらじ、と思ひ、京へ急ぎ上り給ひけり。かくて今年も暮れば、御年十七にぞ成り給ふ。さても年月を送り給へども、秀衡も申す目もなし。御曹子も如何あるべきとも、仰せ出だされず。中々都にだにもあるならば、學問をも逢け、見度き事をも見るべきに、かくても叶ふまじ。都へ上らばや、とぞ思ひける。泰衡にいふとも叶ふまじ。知らせずして、

下りける。

六

義經秀衡に御對面の事

吉次は、急ぎ秀衡に此の由申しければ、折節、風の心地し伏したりけるが、嫡子、元吉冠者泰衡、二男、泉冠者基衡を呼びて申しけるは、「さればこそ、過ぎし比黄なる鳩來りて、秀衡が家の内へ飛び入る、と夢に見えたりしかば、いか様、源氏のおとづれ、うけたまはらん瑞相やらん、と思ひつるに、頭殿の公達の御下りあるこそ嬉しけれ。かき起せ」とて、人の肩を押へて、烏帽子取つて引つこみ、直垂取つて打ちかけ、申しけるは、「この殿は、幼くおはするとも、狂言綺語の戯れも、仁義禮智信も、正しくぞおはすらん。この程のいたはりに、さこそ家の内も見苦しかるらん。庭の草取らせよ。泰衡、基衡は、やゝ出でて御迎ひに參れ。事々しからぬ様にて參れ」と、申されければ、畏まつて承り、其の勢三百五十餘騎、栗原寺へぞ馳せ參る。御曹子の御目にかよる。栗原の大衆五十人、送り參らする。秀衡が申しけるは、「是まではるゝ御入り候ふ事、返すゝ畏り入り存じ候ふ。兩國を手に握りて候へども、思ふ様にも振舞れず候ふ。今は何の憚か候ふべ

いたはりー
病氣

世に―まこ
とに

今は云々―
吉次の詞

あたり―あ
たかの誤歟

姉葉の松―
陸前栗原郡
姉葉にある
有名なる松

ん、此の山は、當國の名山にてあるなるに、とて、追つついて見たまへば、御先に立ちたる吉次にてぞ有りける。商人の習ひにて、此處彼處にて日を送りける程に、九日先に立ち参るらせたるが、今追ひつき給ひける。吉次、御曹子を見付け参らせて、世に嬉しくぞ思ひける。御曹子も御覽じて嬉しくぞ思し召す、「陵が事は如何に」と申しければ、「頼まれず候ふ間、家に火をかけて、散々に焼き拂ひ、これまで來たるなり」と仰せられければ、吉次、今の心地して恐しくぞ思ひける。「御供の人は如何なる人ぞ」と申せば、「上野の足柄の者ぞ」と仰せられける。「今は御供も入るまじ。君御着き候ふて後、尋ねて下り給へ。跡に妻子の歎き給ふべきも、いたはしくこそ候へ。自然の事候はん時こそ、御供候はめ一とて、やうく止めければ、伊勢の三郎をば上野へぞかへされける。それよりして、治承四年を待たれけるこそ久しけれ。かくて夜を口について下り給ふほどに、武隈の松、阿武隈川と申す、名所々々を過ぎて、宮城野の原、躑躅の岡を詠めて、千賀の鹽竈へ詣で給ふ。あたりの松、籬の島を見て、顯佛上人の舊跡松島を拜ませ給ひて、紫の大明神の御前にぞ参り給ひ、御祈誓申させ給ひて、姉葉の松を打ちながめ、栗原にも着き給ふ。吉次は、栗原の別當の坊に入れ奉りて、我が身は平泉へぞ

人にも見え
給へー再婚
せよ

それんー外
れむ
まづー
きつゝの誤
歟

すり衣ー草
木の葉など
をすりつけ
て模様とせ
るもの、信
夫郡の名産

治承四年、源平亂出で來しかば、御身に添ふ影の如くにて、鎌倉殿の御中不快にならせ給ひし時まで、奥州に御供して、名を後代にあけたりし伊勢の三郎義盛とは、その時の宿の主なり。義盛、内に入りて、女房に向つて、「いかなる人ぞ、と思ひしに、我が爲には、相傳の御主にて渡らせ給ひけるぞや。さればこれより御供して、奥州へくだるべし和御前は、これにて明年の春の比まで待ち給へ。もしその比も過き行かば、はじめて人にも見え給へ。たとひ人に見え給ふとも、義盛がこゝと忘れ給ふな」と申しければ、女房泣くより外のことぞなき。「たゞ假初の旅だにも、主の跡は物憂きに、飽かで別るゝ面影を何時の世にかは忘るべき」と歎けど、甲斐ぞなかりける。剛の者の癖なれば、一筋に思ひ切りて、やがて御供してぞ下りける。下野の室の八島を餘所に見て、宇都の宮の大明神を伏し拜み、行方の原にさしかより、實方の中將の、あたりの野邊の白檀弓、おしはり、すびきし肩にかけ、なれぬ程は何れをそれん、馴れての後はそるぞ悔しきと詠めけん、あたりの野邊を見て過ぎ、淺香の沼の菖蒲草、影さへ見ゆる淺香山、まづまづ馴れにし信夫の里のすり衣、など申しける、名所々々を見給ひて、伊達の郡あつかしの中山越え給ひて、まだ曙の事なるに、道行き通るを聞き給ひて、今追ひついて物問は

に、かんらひ終に御赦免もなく、この所にて空しくなる。その後、母にて候ふ者の、胎内に宿りながら、父にわかれて、果報拙き者なりとて、棄て置き候ふを、母方の伯父にて候ふ者、不便の事と思ひて育てられ成人し、十三と申すに、元服せよと申し候ひしに、我が父といふもの如何なる人にてありけるや、と母に問ひしとき、母は涙に咽び、とかくの返事も申さず、暫時ありて、汝が父は、伊勢の國二見の浦の人とかや。名は、伊勢のかんらひ義連といひしなり。左馬頭殿のことに不便に思し召されしに、思ひの外
の事ありて、此の國に有りし時、おのれを懷妊して、七月と申すに、遂に空しく成りしなり、と申しよかば、父は伊勢のかんらひといひければ、我をば、伊勢の三郎と申し、父が義連と名のれば、我は義盛と名のり候ふ。此の年比、平家の世になり、源氏は、みな滅びはてよ、たま／＼残りとはまり給ひしも、押し籠められ、散々にならせ給ふ、と承りしほど、たよりも知らず候へば、尋ね参らする事もなし。心に物を思ひしに、只今君を拜み参らせ候ふ事、三世の契りと申しながら、ひとへに八幡大菩薩の、御引合せとこそぞ存じ候へ」とて、來し方行く末の物語どもを、たがひに申し給ひつゝ、たゞ苟且のやうにありしかども、その時御目にかより参らせて、又心なくして御供申し、奥州へくだり、

自然の時―
自ら事の生
ぜし時

かんらひ―
かんなき巫
乗合―車に
乗りながら
貴人に行き
逢ひ下車さ
せる事

自然の時は尋ね参らすべし。今一兩日も、御逗留候へかし」と申す。「東山道へ、かよら
せ給ひ候はゞ、碓氷の峠、東海道にかよらば、足柄まで送り参らすべし」と申しければ、
都になからん者ゆへに、尋ねられんといはんも詮なし。此の者を見るに、二心なんどは、
よもあらじ。知らせばや、と思し召し、「これは奥州の方へ下る者なり。平治の亂に亡びし
下野の左馬頭が季の子に牛若とて、鞍馬に學問して候ひしが、いま男になりて、左馬
の九郎義經と申す者なり。奥州へ秀衡を頼みて下り候ふ。今自然として知る人になりた
ることの嬉しさ」と仰せければ、主の男、こはいかにといふまゝに、御前へまゐりて
御袂にしかと取りつき、何とも物をばいはずして、はらくとぞ泣き居たり。「あら無慚
や、此方より問ひ奉らずば、いかでか知り奉るべきぞ」と申しける。我等が爲には、重
代の君にて、御渡り候ふものを、かく申せば、いかなる者ぞ、と思し召すらん。親にて
候ひしものは、伊勢の國、二見の者にて候ふ。伊勢のかんらひ義連と申して、大神宮の神
主にて候ひけるが、一年都にて、清水に詣で給ひしに、下向の折節、九條の上人と申す
に乗合し、これを罪科にて、上野の國成島と申す所に、流され参らせて、年月を送りし
に、故郷を忘れんその爲に、妻女をまうけて候ひしが、頓て懷妊仕り、七月になり候ふ

暮日―鋪の
如き製の鐵
にて妖怪な
どを調伏す
るに用ふ
出居―客間
くつろげ―
廣げ

なし。近くは三日、遠くは七日のうちに、事に逢ふたる人にてぞあるらん。我も入も世になし者のちうじちうやうに逢ふ事、つねの習ひなり。御酒を申さばや」とて、様々の菓子どもを調へて、はしたものに瓶子いだかせて、女を先に立てゝ二間にまゐり、御酒すゝめ奉る。されども敢て食し召し給はず。主申しけるは、一御酒きこし召し候へ。いか様、御用心と覺え候ふ。姿こそあやしの男にて候ふとも、某かくて候ふ上は、御宿直仕り候ふべし。人はなきか一と呼びければ、四天の如くなる男、五六人出て來たる。御客人をまうけ奉るぞ。御用心と覺え候ふ。今宵は寐られ候ふな。御宿直仕れ」といひければ、「承り候ふ」とて、藝目のおと、弓の弦おし張りなどして、御宿直仕り、我が身も、出居の蔀あけて燈臺二所に立てゝ、腹巻取つて側におき、弓おし張り、矢束解いて、押しくつろけて、太刀取つて膝の下に置き、あたりに犬の吠え、風の木末をならすをも、「誰、あれ斬れ」とぞ申しける。其夜は寢もせで明しける。御曹子、あはれきやつは、健氣ものかな、と思し召しけり。明くれば御立あらんとし給ふを、様々に申しとどめ奉り、苟且のやうになりつれども、是に二三口とどまり給ひけり。あるじの男、申しけるは「そもく都にては、いかなる人にて渡らせ給ひ候ふぞ。我等も、知る人の候はねば、

ふくろ心―
梟の如き無
慈悲の心と
の意歟

女に逢ふてにくけなる事いはれんずらん、と思し召して、壁に耳をあてゝ聞き給へば、
「や御前々々」と押し驚かせば、暫時は音もせず。遙にして寐覺めたる風情して、「いか
に」といふ。「二間にねたる人、誰」といふ。「我知らぬ人なり」とぞ申しける。「されども
知られず知らぬ人をば、男のなき跡に、誰がはからひに置きたるぞ」と世に憎氣に申
しければ、あは、事こそ出で來たるぞ、と聞こし召しける程に、女、申しけるは、「知ら
ぬ人なれども、日は暮れぬ、行き方は遠し、と打ちわび給ひつれども、人の在しまさぬ
跡にとめ參らせては、御言葉の末も知りがたく侍れば叶はじ、と申しつれども、色を
も香をも知る人ぞしる、と仰せられつる御言葉に恥ぢて、今夜の宿を參らせつるなり。
いかなる事ありとも、今宵ばかりは、何か苦しかるべき」と申しければ、男「さてもさ
ても、和御前をば、志賀の都のふくろ心は、東の奥の者にこそ思ひつるに、色をも香を
もしる人ぞ知る、と仰せられける、ことばの末をわきまへて宿を貸しぬるこそやさしけ
れ。何事有りととも、苦しかるまじきぞ。今宵一夜はあかせ參らせよ」とぞ申しける。
御曹子、あはれ、然るべき佛神の御恵かな。憎けなる事をだにもいはど、ゆよしき大事
は出で來ん、と思し召しける。主いひけるは、「いか様にも、この殿は、たゞ人にては

ましてやい
はんーまし
ていはんや
也

ちぎりきー
乳まで程の
長さの棒
さいぼうー
さへ棒にて
防ぎ支へる
川の棒なる
べし

ひぬ」とぞ仰せける。如何なる男を持ちて、是程には怖づらん。おのれが男に越えたる、
陵が家にだに火をかけ、さんくんに焼き拂ひて、これまで來りつるぞかし。ましてや
いはん、女の情ありて、とどめたらんに、男來りて憎氣にも申さば、何時の爲に持ち
たる太刀ぞ。これござんなれ、と思し召し、太刀抜きかけて、膝の下にしき、直垂の袖
を顔にかけて、虚寢入してぞ待ち給ふ。立て給へと申しつる障子をば、ことに廣くあけ、
消したまへと申しつる火をば、いとど高きかき立て、夜のふくるに従ひて、今やくと
待ち給ふ。子の刻ばかりに成りぬれば、主の男、出で來たり、槇の板戸を押し開き、内
へ入るを見給へば、年のころ二十四五ばかりなる男の、葦の落葉つけたる淺黄の直
垂に、萌黄織の腹巻に、太刀佩いて、大の手鉾を杖につき、我れに劣らぬ若黨四五人、
猪の目ぼりたる鉞、刃の薙鎌、長刀、ちぎりき、さいほう、手々に持ちて、たゞ今事に
逢ひたるけしきにて、四天王のごとくにして出で來たる。女の身にて、怖れつるも道理
かな。きやつは、けなけ者かな、とぞ御覽じける。彼の男、二間に人ありと見て、沓脱に
上りあがりける。大の眼を見開きて、太刀取り直し、「これへ」とぞ仰せられける。男は、
けしからず思ひて、返事も申さず、障子引き立て、足ばやに内に入る。何様にも、

いたはしく
氣の毒

色をも香をも
古今集
に君ならで
誰にか見せ
む梅の花色
をも香をも
知る人ぞし
る

けより、「何事候ふぞ」と申しければ、「京の者にて候ふが、當國の多胡と申す所へ、人を尋ねて、下り候ふが、此の邊の案内知らず候ふ。日は早暮れぬ。一夜の宿をかし給へ」と仰せられければ、此の女申しけるは、「やすき程にて候へども、主にて候ふもの、留守にて候ふが、今宵夜ふけてこそ來り候はんすれ。人に違ひて情なき者にて候ふ。如何なる事をか申し候はんすらん。それこそ、御爲いたはしく候へ。いかゞすべき。餘の方へも御入り候へかし」と申しければ、「殿の入れさせ給ひて、無念の事候はゞ、その時こそ、虎ふす野邊にもまかり出で候はめ」と仰せられければ、女、思ひみだしたり。御曹子、「今夜一夜は、只かし給へ。色をも香をも、知る人ぞしる」とて、遠侍へするりと入りてぞおはしける。女力及ばず、内に入りて大人しき人に、「いかにせんずるぞ」と云ひければ、「一河の流を汲むも、皆これ他生の縁なり。何かくるしく候ふべき。遠侍には、かなふまじ」。一間所へ請じ奉り、様々の菓子を取り出して、御酒すゝめ奉れども少しも聞し召し入れ給はず。女申しけるは、「この家の主は、世に超えたるえせ者に候ふ。相構へてく、見えさせ給ふな。御燈火を消し、障子引き立てよ、御休み候へ。八聲の鳥も鳴き候はゞ、御心ざしの方へ、急ぎく御出で候へ」と申しければ、「うけたまはり候

心もあるべからず、とて、その夜の夜半ばかりに陵の家に、火をかけて、残る處もなく散々に焼き拂ひて、かき消す如くにうせ給ひける。かくて行には、下野の國、横山の原、室の八島、しの河、關山に人を付けられて、叶まじ、と思し召して、墨田川邊を馬にまかせて、歩ませ給ひける程に、馬の足早くて、二日に通りける所を、一日に上野の國板鼻といふ所につき給ひけり。

五 伊勢三郎義經の臣下に初めて成る事

かくて、日も暮方になりぬ。賤が廬は、軒を並べてありけれども、一夜を明かしたまふべき所もなし。引き入りてまや一つあり。情ある住處とおほしくて、竹の透垣に、櫓の板戸をたてたり。池をほり、汀にむれ居る鳥を見給ふにつけても、情ありて御覽すれば、庭に打ち入り、縁のきはにより給ひて、「御内へ、物申さん」と仰せられければ、十二三ばかりなるはした者出でて、「何事」と申しければ、「この家には、おのれより外に、大人しき者はなしか。人あらば出でよ。云ふべき事あり」とて、返されければ、主に此の由を語る。やゝありて、年の程十八九ばかりなる女の童の優なるが、一間の障子のか

まや一眞屋
兩方へ簾を
葺きおろし
たる今日普
通あるが如
き家、四阿
造に對して
いふ

る也
遠侍—中門
の傍に在る
廊の如き所
にて番の侍
の詰所

志
ほうじ—芳

居ながれたり。御曹子おんざうしは人を招きまねよせて、「御内に、案内あんない申さん」と宣のたまひければ、「いづくよりぞ」と申す。「京の方より。かねて見参けんさんに入りて候ふ者なり」と仰おほせけり。主に此の事を申しければ、「いかやうなる人ぞ」と申せば、「そのすがた、尋常じんじやうにまします」と申しければ、「さらば、これへと申せ」とて、入れ奉る。陵みささぎ、「いかなる人にて渡らせ給ふぞ」と申しければ、「幼少えうせうにて見参けんさんに入りて候ひし、御覽ごらんじ忘れ候ふや。鞍馬くらまの東光坊とうくわうぼうの許もとにて、何事もあらん時、尋ねよと候ひし程に、萬事ばんじ頼み奉りて下り候ふ」と仰おほせられければ、陵みささぎ、此の事を聞きて、斯る事こそなけれ。成人せいじんしたる子どもは、皆京に上りて小松殿こまつどのの御内にあり。われ／＼が源氏にくみせば、二人の子ども徒いたづらになるべし、と思ひわづらひて、暫く打ち案じ、申しけるは、「さ思おもひ召めし立たせ給ひ、畏かしまつて候へども、平治の亂みだれの時、すでに兄弟誅ちうせられ給ふべく候ひしを、七條朱雀しちでうしゆじやかの方に、清盛きよもりちかづかせ給ひて、そのほうじにより命いのちを助からせ給ひぬ。老少不定らうせうふぢやうのさかひ、定めなきことにて候へども、清盛きよもりいかにもなり給ひて後、思おもひ召めし立たせたまひ候へかし」と申しければ、御曹子おんざうし聞し召して、あはれ彼奴きやつは、日本一の不覺人ふかくじんにてありけるや。あはれ、とは思おもひ召めしけれども、力およばず。その日は暮くらし給ひけり。頼たのまれざらんもの故に、執しよ

し人の母方の伯父おぢ 陵介みきしげのよけと申す人の嫡子ちやくし、陵の兵衛みきしげ ひやうゑとぞ申しける。

四 義經 陵が館を焼き給ふ事

急度きつど思おもし召めし出されけるは、義經よしつねが九つの年、鞍馬くらまの寺にありて、東光坊とうくわうぼうの膝の上に寝ねたりし。あはれ幼き人の御目のけきしや。いかなる人の君達きんだちにて渡らせ給ひ候ふやらん、と言ひしかば、これこそ左馬頭さまた殿の公達きんだちと宣ひしかば、あはれ末の世に、平家の爲には大事かな。この人々をたすけ奉りて、日本國に置かれん事こそ、獅子虎ししこを千里の野へ、放つにてあれ。成人せいじんし給ひ候はど、必定謀叛ひつぢやうむはんをおこし給ふべし。聞きもおかせ給へ。自然しぜんの事の候はん時、御尋ね候へ。下野の國に下道祖しもさへと申す所に候ふ、といひしなり。はるくくと奥州おくしうへ下らんよりも、陵みきしげが許へ行かばや、と思し召し、吉次きちじをば、「下野の室八島むろやしまにて待て、義經よしつねは人をたづねて、やがて追ひつかんするぞ」とて、陵が許へぞおはしける。吉次は、心ならず先立ち參らせて奥州へ下りける。御曹子おんそうしは、陵が宿所へ尋ねて御覽ごらんするに、まことに世にありし、と思しきて、門には、鞍置くらきたる馬ども、其の數引つ立てたり。さしのぞきて見たまへば、遠侍とほざかりひに、屈強くつきやうの若き者ども、五十ばかり

世にありし
一時世に逢
ひて繁榮せ

大衣、七條、
五條の三種
あるよりい
ふ

伊豆の國府
—三島

在五中將—
在原業平

弓箭きうせんを帶たいする事いかにぞや、と思へば、打ち連れ奉らず。且かつは頭殿かうのどのの御菩提ごぼだいをも、誰たれかはとぶらひ奉らん。かつうは一門の人々の祈いのりをこそ仕つかまつらんすれ。一ヶ月いっげつをだにも、添そひ奉らず、離はなれ奉らんことこそ悲かなしけれ。兵衛佐殿ひやうさのすけどのも、伊豆の國の、北條ほうてうにおはしませども、警固けいこの者共ものども、きびしく守護しゆごし奉る、と申せば、文ふみをだに參らせず、近所きんじよを頼たのみにて、音信おとづれもなし。御身みみとても、この度見參たびけんさんし給はん事、不定ふちやうなれば文ふみを書き置き給へ。そのやうを申すべし」と仰おほせられければ、文書ふみかきて、跡あとに留めおき、その日は伊豆の國府こくふに著つきたまふ。夜もすがら祈念きねん申されけるは、「南無御堂大明神、走湯權現、吉祥駒形、願ねがはくは、義經よしつねを三十萬騎の大將軍となし給へ。さらぬ外は、此の山より西へ越えさせ給ふな」と、精誠せいせいをつくし祈請きせいし給ひけるこそ、十六の盛さかには恐ろしき。足柄あしがらの宿しゆくを打ち過ぎて、武藏野の堀金ほりかねの井ゐをよそに見て、在五中將ざいごうちうじやうのながめける、深ふかきよしみを思ひて、下野の國庄しやうたかのと云ふ所に着つきたまふ。日數ひかずふる程にしたがひて都みやこはとほく東あづまは近くなるまゝに、その夜は、都みやこの事思おもし召し出されける。宿しゆくのあるじを召して、「これは何處いづくの國ぞ」と御問ひありければ、「下野の國」と申しける。「此の所は郡か庄か」と宣へば、「下野の庄しやう」とぞ申しける。「この庄しやうの領主りやうしゆは誰たれと云ふぞ」。「少納言信西せうなごんしんせいと申せ

も一八男を
九に呼ぶこ
と
實名一名乗

御曹子一ま
だ部屋住な
る若君

三衣一僧衣

義朝、兄は義平と申しける。われは義經といはれん一とて、昨日までは、遮那王殿、今日
は、左馬の九郎義經と名をかへて、熱田の宮を過ぎ、なにと鳴海の鹽干濱、三河の
國、八橋を打ち越えて、遠江の國、濱名の橋を打ちながめて、通らせ給ひけり。日比は、
業平、山蔭中將などのながめける名所々々は、多けれども、牛若殿、打ちとけたる時
こそ面白けれ。思ひあるときは、名所も舊跡も何ならずとて、打ち過ぎ給へば、宇津の
山を越え過ぎて、駿河なる浮島が原にご著き給ひける。

三 阿野の禪師に御對面の事

是れより、阿野の禪師の御許へ、御使まゐらせ給ひける。禪師大に悦び給ひて、御曹子
を入れ奉り、たがひに御日を見合せて、過ぎにし方の事ども、物語りつゞけ給ひて、御
涙にむせび給ひける。「不思議の御事かな。離れし時は、二歳になり給ふ。この日比は、
何處におはするとも知り奉らず。これ程に成人して、斯る大事を思ひ立ち給ふ嬉しさ
よ。我れも共に打ち出で、一所にて、ともかくも、なりたく候へども、たま／＼釋尊の
經法をまなんで、尋常の閑處に入りしより以來、三衣を墨に染めぬれば、甲冑をよろひ、

いさめごと
—教誡

未になると

れければ、大宮司、いそぎ御迎に人を参らせ、入れ奉り、やう／＼にいたはり奉りける。やがて、次の日立たんとし給へば、様々にいさめごとに参加り、とかくする程に、三日までぞ熱田におはします。遮那王殿、吉次に仰せられけるは、「童にて下らんはわろし。かり烏帽子なりとも着て下らばや、と思ふはいかにすべき。吉次いかやうにも、御計らひ候へ」とぞ仰せける。大宮司、烏帽子奉り、取りあけ烏帽子をぞ召されける。「かくて下り、秀衡が、名をば何と申すぞ、と問はん時、遮那王といひて、男になりたるかひなし。これにて、名を更へずして、下り着きたらば、定めて元服せよ、といはれんずらん。秀衡は、我々が爲には相傳の者なり。他の誹りもあるぞかし。これは、熱田の明神の御前、しかも、兵衛佐殿の母御前も、これにおはします。これにて思ひ立ん」とて、精進潔齋して、大明神に、御参りあり。大宮司、吉次も、御供仕る。二人に仰せけるは、「左馬頭殿の子供、嫡子惡源太、一男進朝長、三男兵衛佐、四男蒲殿、五郎はけんじの君、六郎は京の君、七郎は、惡禪師の君、われは、左馬の八郎とこそ、いはるべきに、保元の合戦に、叔父鎮西の八郎、名をながし給ひし事なれば、その跡をつがんこと由なし。末になるとも苦しかるまじ。われは左馬九郎といはるべし。實名は、祖父は爲義、父は

道以下の首、五人切りて、通るものを、何者とか思ふらん。金商人、三條の吉次が爲には縁あり、これを十六にての初業よ。委しき旨を聞きたくば、鞍馬の東光坊の許にて聞け。承安二年二月四日、

いとよい
よく

くせ川ーく
ひぜ(株瀬)
川なるべし

とぞ書きて、立てられける。さてこそ後には、源氏の門出しすましたりとぞ、舌を巻きて怖ぢあひける。その日、鏡の宿を立ち給ひけり。吉次は、いとどかしづき奉りてぞ下りける。小野の摺針打ち過ぎて、番場醒井すぎければ、今日も程なく行き暮れて、美濃の國青墓の宿にぞ着き給ふ。これは義朝、浅からず思ひ給ひける、長者があとなり。兄の中宮大夫の墓所を尋ね給ひて、御出あり。夜と共に法華經讀誦して、明くれば卒塔婆をつくり、みづから梵字を書きて、供養してぞ通られける。子安の森をよそに見て、くせ川を打ちわたり、洲股川を曙にながめて通りつゝ、今日も三日になりければ、尾張の國、熱田の宮につき給ひけり。

二 遮那王殿元服の事

熱田の前の大宮司は、義朝の舅なり。今の大宮司は小舅なり。兵衛佐殿母御前も、熱田のそとの濱といふ所にぞ、おはします。父の御かたみ、と思し召して、吉次を以つて申さ





くきなが—
柄の下方を
持つこと
しやつら—
しやはのこ
しる詞

矢庭—即座

にと思ひて、もつて開いてむずと打つ。大の男の太刀の寸は、延びたり。天井の縁と太刀打ちつらぬき、引きかぬる所を、小太刀を以つて、ちやうと受けとめ、左手の腕に、袖をそへて、ふつと打ち落し、返す太刀に首打ち落す。藤澤入道は、これを見て、「あゝ斬つたり、其所をひくな」とて、大長刀打ちふりて、走りかゝる。是れにかゝり合ひて、散に斬りあひ給ふ。藤澤入道、長刀を莖長に取りて、するりとさし出す。走りかゝり給ふ。太刀は聞ゆる剣なれば、長刀の柄つんと切りてぞ落されけり。やがて太刀を抜かんとしけるを、抜きも果てさせず、切り付け給へば、甲の眞向、しや面かけて、切り付け給ひけり。吉次は、物の蔭にて是れを見て、恐しき殿のふるまひかな。いかに我をきたなしと思し召さるらん、と思ひ、臥したりける帳臺へつと入り、腹巻取つて着、髻解き亂し、太刀を抜き、敵の捨てたる松明打ち振り、大庭に走り出でて、遮那王殿と一つになりて、追つとまくつと、散々に戦ひ、屈強の者共五人、矢庭に切り給ふ。二人は手を負ひて北へゆく。一人追ひにがす。残る盗人のこらす落ち失せけり。明くれば宿の東のはづれに、五人が首をかけ、札を書きてぞ添へられける。

音にも聞くらん、目にも見よ。出羽の國の住人、由利の太郎、越後の國の住人藤澤入

大口一袴

領巾一古婦
人の項にか
けて飾とせ
しゆ

らすべし、とて、大口の上に腹巻取りて引きかけ、太刀取り脇にはさみ、唐綾の小袖取りてうち被き、一間なる障子の中をするりと出で、屏風一よろひ引き疊たよみ、前におしあたる八人の盗人を、今やと待ち給ふ。「吉次奴に、目ばし放すな」とて、をめてかかる。屏風の蔭に人ありとは知らで、松明をふつて、さしあけ見れば、いつくしきとも斜ならず、南都山門に聞えたる兒、鞍馬を出で給へる事なれば、極めて色しろく、かね黒に眉細くつくりて、衣かづきたまひけるを見れば、松浦狹夜媛が、領布ふる野べに年をへし、寢亂れて見ゆる黛の、鶯の羽風に亂れぬべくぞ見え給ふ。立宗皇帝の代なりせば、楊貴妃ともいひつべし。漢の武帝の時ならば、李夫人かとも疑ふべし。傾城と心得て、屏風におし纏ひてぞ通りける。人もなきやうに思はれて、生きては何の益あるべき。末の世に、いかゞしければ、義朝の子牛若といふもの謀叛をおこし、奥州へ下るとて、鏡の宿にて、強盗にあひて、甲斐なき命生きて、今また忝くも太政大臣に、心をかけたりなど、といはれん事こそ悲しけれ。とてもかくても逃るまじ、と思し召し、太刀を抜き、多勢の中へ走り入り給ふ。八人は、左右へさつと散る。由利の太郎之を見て、「女かと思ひたれば、世に豪なるものにてありけるものを」とて、散々に切り合ふ。一太刀

尻鞘―獸の
毛皮にて製
し鞘にばめ
て雨露をし
のぐもの
れんちう―
簾中、奥の
方

道、「順風に帆をあけ、棹さし押しよせて、しやつが商物とりて、わが黨どもに酒飲ま
せて通れ」とて出で立ちける。屈強の足輕ども五六人、腹巻きて、油さしたる車松明、五
六臺に火をつけて、天にさし上げければ、外は暗けれども、内は日中のやうに拵へ、由利
の太郎と藤澤入道とは、大將として、其の勢八人つれて出で立ち、由利は、唐萌黃の直
垂に、萌黃緘の腹巻着て、折烏帽子に打ちかけして、三尺五寸の太刀佩きてぞ出でにけ
る。藤澤は、褐の直垂に、黒革緘の鎧着て、甲の緒をしめ、黒塗の太刀に、熊の革の尻
鞘入れ、大薙刀を杖につき、夜半ばかりに、長者の許に打ち入りたり。つと入りて見れ
ば、人もなし。中の間に入りて見れども、人もなし。こは如何なる事ぞ、とて、れんちう
に深くみだれ入りて、障子五六間切りたふす。吉次、これに驚き、かばと起きて見れば、
鬼王の如くにて出で来る。これは、宗高が財寶に目をかけて、出で來たるを知らず、源
氏の公達具し奉り、奥州へくだる事、六波羅に聞えて討手の向ひたる、と心得て、取る物
も取あへず、貝吹いてぞ逃けにける。遮那王殿、これを見給ひて、すべて人の頼むまじ
きものは、次の者にてありけるや。かたの如くも侍ならば、かくはあるまじきものを、
とてもかくても、都を出でし日よりして、命をば、寶ゆへに棄て、屍をば、鏡の宿にさ

吳藍―紅花

ぶだう―無
道
せんとう
山盜なるべ
し

壁に耳、岩に口といふ事あり。吳藍は、園生に植へてもかくれなし」と申しければ、吉次申しけるは、一何ぞ、それにては候はず。身が親しき者にて候ふ」と申しけれども、長者一人は何ともいはいへ」とて、座敷を立ちて、幼き人の袖を引き、上の座敷になほし奉り、酒をすゝめて、夜ふかければ、我が方へぞ入れ奉る。吉次も酒に酔ひ伏しにけり。その夜、鏡の宿にぶだうの事こそありけれ。その年は、世の中饑饉なりければ、出羽國に聞ゆるせんとうの大將に、山利の太郎と申す者と、越後の國に名を得たる頸城の郡の住人、藤澤の入道と申すもの、二人語らひ、信濃國に越えて、さんの權正子息太郎、遠江國に、蒲の與一、駿河の國に興津の十郎、上野に豐岡源八、以下の者共、いづれも聞ゆる盗人、宗徒のもの二十五人、その勢七十人つれて、「東海道は衰微す。少しよからん山家々々に居たりける徳人あらば、追ひ落して、わが黨どもに、興ある酒飲ませて都に上り、夏もすぎ秋風立たば、北國にかより、國へ下らん」とて、宿々、山家々々に押し入り、おし取りてぞ上りける。その夜、鏡の宿長者の軒を並べてやどしける。山利の太郎、藤澤に申しけるは、一都に聞えたる吉次といふ金商人、奥州へ下るとて、多くの賣物を持ち、今宵長者のもとに宿りたり。いかどすべき」といひければ、藤澤、入

義經記 卷第二

一 鏡の宿にて吉次宿に強盜入る事

いづくしき
—美しき

そもく、都ちかき所なれば、人目もつゝましくて、傾城の遙の末座に、遮那王殿をなほしける、恐れ入りてぞ覺ゆる。酒三獻過ぎて、長者、吉次が袖に取り付きて、申しけるは、「そもく御邊は、一年に一度、二年に一度、此の道をとほらぬ事なし。されどもこれ程、いづくしき子具し奉りたる事、これぞ始なり。御身の爲には親しき人か、または他人か」とぞ問ひける。「親しくはなし。また他人にてもなし」とぞ申しける。長者、涙をはらくと流し、「あはれなる事どもかな。何しに生きて初めて、かゝる憂き目を見るらん。たゞ昔の御事、今の心地してぞ覺ゆるぞや。此の殿のたちふるまひ、客身ざま、頭の殿の二男、朝長殿にすこしも違ひたまはぬものかな。言葉の末を以つても具し奉りたるかや。保元平治より以來、源氏の子孫、此所やかしこに、打ち籠められておはするぞかし。成人して思ひ立ちたまふ事あらば、よくく拵へ奉りて、わたし參らせ給へ。

唐橋^{からはし}打ち渡り、鏡^{かて}の宿^{ふしゆく}に著^つき給ふ。
た出し、色々^{いろ／＼}にこそもてなしけれ。

長者^{ちやうじや}は、吉次^{きちじ}が年比^{とし／＼}の知^しる人^{ひと}なりければ、女房^{にようばう}あま

いかけ地—
金粉を隙な
く散らし懸
けたるもの

恥ある一名
譽を重んず
る

て、月毛なる馬に、沃懸地の鞍をおきて、大斑の行膝、鞍おほひにしてぞ出で來たる。
遮那王殿、「いかに約束せばや」と宣へば、馬より急ぎ飛んで下り、馬引き寄せのせ奉り、か
かる縁に遇ひけるよ、とよに嬉しくぞ思はせ給ひける。吉次を招きて宣ひけるは、「宿
の馬の腹筋馳せ切つて、雜人めらが追ひつかん、顧るに、かけ足になつて下らん、と覺
ゆるなり。鞍馬になしといはゞ、都に尋ねべし。都になしといはゞ、大衆ども定めて東
海道へぞ下らんずらん、とて、摺針山より此方にて、追つかけられて、歸れといはん
ずるものなり。歸らざらんも、仁義禮智信にもはづれなん。都は敵の邊なり。足柄山を
越えんまでこそ大事なれ。坂東と云ふは、源氏に心ざしのある國なり。言葉の末を以て、
宿々の馬取りて、乗り下るべし。白川の關をだにも越えば、秀衡が知行の所なれば、雨
の降るやらん、風の吹くやらんも、知るまじきぞ」とのたまへば、吉次、是を聞きて、
かゝる恐しき事あらじ。毛のなだらかならん馬一匹をだにも、乗りたまはずして、恥あ
る郎等の一騎をだにも具し給はで、現在の敵の知行する國の馬を取りて下らん、と宣ふ
こそ恐しけれ、とぞ思ひける。されども、命に隨ひ駒を早めてくだる程に、松坂をも越
えて、四の宮河原を見て過ぎ、逢坂の關を打ち越えて、大津の濱をも通りつゝ、勢多の

三光ば日月
星なれば語
熱せざるが
如し、三光
或は三更歟

ふうでうー
横笛

秋毛―鹿の

し給へども、涙に咽び給ひけり。されども、弱くては叶ふべきにあらざれば、承安二年二月二日の曙に、鞍馬をぞ出で給ふ。白き小袖一重に唐綾を着重ね、はりま淺黄の衫を上召し、しろき大口に唐織物の直垂めし、敷妙と云ふ腹巻きごめにして、紺地の錦にて柄鞘包みたる守刀、金作の太刀佩いて、薄化粧に眉細く作りて、髪高く結びあけ、心細けにて壁を隔てゝ出で立ち給ふが、我れならぬ人の音信れて、通らん度に、さる者はにありしぞ、と思ひ出でよ、跡をも訪ひ給へかし、と思はれければ、漢竹のようでうを取り出し、半時許ふきて、音をだに跡の形見とて、泣くく鞍馬を出で給ひ、その夜は、四條の正門坊の宿へ出で給ひて、奥州へ下るよし仰せられければ、「善惡御供申し候はん」と出で立ちけり。遮那王殿のたまひけるは、一御邊は都に留りて、平家のなり行く様を見て、知らせよ」とて、京にぞ留められける。さて、遮那王殿、栗田口まで出で給ふ。正門坊も、それまで送り奉り、十禪寺の御前にて、吉次を待ち給へば、吉次、いまだ夜深に京を出でて、栗田口に出で來たる。種々の寶を二十餘疋に負ふせて、先に立て、我が身は、京を尋常にぞ出で立ちける。あひく引き書きしたる摺盡の直垂に、秋毛の行膝はいて、黒栗毛なる馬に、角覆輪の鞍おきてぞ乗りたりける。兒を載せ奉らんと

坂の關を打ち越えて、都に攻め上り、十萬騎をば天下の御所に參らせて、源氏すごさん
由を申さんに、平家猶も都に繁昌して空しかるべくは、名をば後の世にとどめ、屍をば
都に晒さん事、身に取りては何の不足か有るべき、と思ひ立ち給ふも、十六の盛には恐
しくぞ覺えける。この男めに知らせばや、と思し召し、近く召して仰られけるは、「汝なれ
ば知らするぞ、人に披露あるべからず。我れこそ、左馬頭義朝が子にてあれ。秀衡が許へ
文一つことづてばや。いつの比、返事を取りてくれんするぞ」と仰られければ、吉次、座
敷をすべり下り、烏帽子のさきを地につけて、申しけるは、「御事をば、秀衡、以前に申
され候ふ。御文よりも只御下り候へ。道の程御宿直仕り候はんずる」と申しければ、文
の返事待たんも心許なし。さらば連れて下らばや、と思し召しける。「いつの比下り候は
んするぞ」とのたまへば、「明日吉日にて候ふ間、かたの如くの門出仕り候はんずる」と
申しければ、「さらば、栗田口十禪寺の御前にて待たんするぞ」と宣ひければ、吉次、「さ
承り候ふ」とて下向してけり。遮那王殿、別當の坊に歸りて、心の中許に出で立ち給ふ。

けうくん
香熏歟
三光の星

七歳の春の比より、十六の今に至るまで、朝にはけうくんの霧を拂ひ、夕には三光の星
を戴き、日夜朝暮、馴れしなじみの師匠の御名残も今許、と思はれければ、頻に忍ぶと

淡海—淡海
公不比等

方人—味方

の名を挙げ給ふ。その時、奥州へ御供申し候ひし。三つうの少將に十一代の末淡海の後胤、藤原の清衡と申す者、國の警護に留められて候ひけるが、和田の郡にありければ、わたしの清衡と申し候ひし。兩國を手に握つて候ひし。十四道の弓取、五十萬騎、秀衡が伺候の郎等十八萬騎持ちて候ふ。是れこそ、源平の亂出で來らば、御方人ともなりぬべき者にて候へ」と申しける。

七 遮那王殿鞍馬いでの事

遮那王殿、是れを聞き給ひて、かねて聞きしに少しも違はず、世にあるものござんなれ。あはれ下らばや。左右なく頼れたらば、十八萬騎の勢を、十萬騎をば國に留め、八萬騎をば率して、坂東に打ち出で、八ヶ國は、源氏に心ざしある國なり。下野殿の國なり。是れを始として、十二萬騎を催し、二十萬騎になして、十萬騎をば、伊豆國兵衛佐殿へ奉り、十萬騎をば木曾殿につけて、我が身は、越後の國に打ち越し、鵜川、佐橋、金津、奥山の勢を催して、越中、能登、加賀、越前の軍兵を靡けて十萬騎になして、荒乳の中山を馳越えて、西近江に懸りて大津の浦に着きて、坂東の二十萬騎を待ち得て、逢

くわんたー
源太の詛言

白木山―陸
中和賀郡白
木峠

を、内裏に参らせけり。汝が名をば何と云ふぞ、と御尋ありけるに、辰の年の辰の時にうまれ候ふとて、名をばくわんたと申し候ふ、と申しければ、無官の者に、合戦の大將さする例なし、とて、元服させよ、とて、後藤内範明をさし添へられて、八幡宮にて元服させて、八幡太郎義家と號す。その時、御門より給はりたる鎧をこそ、源太が産衣と申しけり。秩父の十郎重國、先陣を承りて奥州へ打ち下る。あつかしゑの城を攻めけるに、猶も源氏打ち負けて、事悪しかりなん、とて、急ぎ都へ早馬を立て、この由を申しければ、年號が悪しければ、とて、康平元年と改められ、同年四月二十一日、あつかしゑの城を追ひ落す。しからざるにかゝりて、いさむ關をせめ越えて、最上の郡に籠る。源氏續いて攻め給ひしかば、おからの中山打ち越えて、仙北金澤の城に引き籠り、それにて一兩年を送り、戦ひつれども、鎌倉の權五郎景政、三浦の平大夫爲繼、大藏大夫光任、これらは命を捨て、攻めける程に、金澤の城をも落されて、白木山にかゝりて、衣川の城に籠る。爲繼、景政、重ねて攻めかゝる。康平三年六月二十一日に、貞任は大事の手を負ひ、梶子色の衣を着て、磐手の野邊にぞ伏しにける。弟の宗任は降人となる。境の冠者、後藤内、生捕にして、やがて斬られぬ。義家、都に馳せ上り、内の見参に入れて、末代まで

あつかしゑ
の中山―陸
前刈田郡に
阿津賀志山
あり是なる
べく下のあ
かゑも今所
ならむ

いづれも八尺に劣るはなし。中にも境冠者は一丈三寸候ひける。安倍權守の世までは、宣旨院宣にも畏れて、毎年上洛して、逆鱗をやすめ奉る。安倍權守死去の後、宣旨を背き、たま／＼院宣なる時は、北陸道七箇國の片道を給はりて上洛仕るべき由、申され候ひければ、片道給はるべき、とて、下さるべかりしを、公卿詮議ありて、是天命を背くにこそ候へ。源平の大將を下し、追討せさせ給へ、と申されければ、源賴義、勅宣を承りて、十一萬騎の軍兵を率して、安部を追討の爲に、陸奥國へ下り給ふ。駿河國の住人、高橋大藏大夫に先陣をさせて、下野の國いもうと云ふ所に着き、貞任是を聞きて栗屋川の城を去つて、あつかしゑの中山を後にあてゝ、安達の郡に木戸を立て、行方の原に馳せ向ひて源氏を待つ。大藏大夫大將として五百餘騎、白川の關を打ち越えて、行方の原に馳付き、貞任を攻む。其の日の軍に打ち負けて、淺香の沼へ引き退く。伊達郡、あつかしゑの中山に楯籠り、源氏は信夫の里駿河三河のはた、はやしろと云ふ所に陣を取つて、七年夜晝戦ひ暮すに、源氏の十一萬騎皆討たれて、叶じと思けん、賴義京へ上りて内裏に参り、賴義叶ふまじき由を申されければ、汝叶はずば代官を下し、急ぎ追討せよ、と重ねて宣旨を下されければ、急ぎ六條堀川の宿所へ歸り、十三になる子息

かしづき—
謹仕す

徳付けばや
—利益を得
む

りて、源氏を君とかしづき奉り、上みぬ驚おどろの如くにてあらばや、と宣のたまひ候ふものを、と云いひ奉り誘拐きうかいし参らせ、御供ごこうして秀衡ひでひらの見参けんざんに入れ、引出物ひきでもの取りて徳付とくづかばや、と思おもひ御前ごぜんに畏かしこつて申しけるは、「君は、都みやこにはいかなる人の君達きんたちにておはしますやらん。これは京の者にて候ふが、金を商あきなひて毎年奥州まいねんあうしゅうへ下る者にて候ふが、奥方おくがたに知しり召めしたる人や御入り候ふ」と申しければ、「片ほとりの者なり」と仰おほせられて、返事へんじもし給はず。これこそは、聞ゆる黄金商人吉次こがねあきうぢきよじといふなり。奥州あうしゅうの案内者あんないしややらん。彼に問はどや、と思召おぼしめして、「陸奥みちのくにといふは、いか程の廣ひろき國ぞ」と問ひ給へば、「大過たいくわの國にて候ふ。常陸國みちのくにと、陸奥國みちのくにとの堺さかひ、菊多きくたの關せきと申して、出羽でほと奥州あうしゅうとの堺さかひをば、なん關せきと申す。その中、五十四郡」と申しければ、「その中に、源平亂出げんぺいのらんしゅで來たらんに、用に立つべき者、いか程あるべき」と問ひ給へば、國の案内あんないは知りたり、吉次きちじ、暗くらからずぞ申しける。「昔兩國の大將軍をば、をかの大夫たいふとぞ申しける。彼が一人の子あり。嫡子栗屋川次郎貞任ちやくしきりやがはのさだたふ、二男なんご鳥海三郎宗任ひねたふむねたふ、家任いへたふ、盛任もりたふ、繁任しげたふとて、六人の末の子に、境の冠者さかひくわんじやりやうぞうとて、霧きりをおこし霞立かすみて、敵おこる時は、水の底、海の中にて、日を送りなどする曲者くせものなり。これら兄弟、丈の高さ唐人にも越えたり。貞任さだたふが丈は九尺五寸、宗任むねたふが丈は八尺五寸、



金商人一砂
金の賣買を
業とする者

く思はれけん。さらばとて覺日坊へ入れ奉り給ひけり。御名をばかへられて、遮那王殿とぞ申しける。それより後には、貴船まうでも止まりぬ。日々に多門に日參して、謀叛の事をぞ祈られける。

六 吉次が奥州物語の事

かくて、年も暮れぬれば、御年十六にぞなり給ふ。多門の御前に参りて、所作しておはしける所に、その比、三條に太福長者あり。その名を吉次信高とぞ申しける。毎年、奥州に下る金商人なりけるが、鞍馬を信じ奉りける間、それも多門に参りて、念誦して居たりけるが、この幼い人を見奉りて、あら、うつくしの御稚兒や。いかなる人の、君達やらん。然るべき人にてましまさば、大衆も數多付き参らすべきに、度々見申すに、只一人おはしますこそ怪しけれ。この山に、左馬頭殿の君達の、おはするものを。眞やらん秀衡も、鞍馬と申す山寺に、左馬頭殿の君達おはしますなれば、太宰大貳清盛の、日本六十六箇國を従へん、と常は宣ふなるに、源氏の御君達を、一人下し参らせ、磐井郡に京を立て、二人の子共を、兩國の領主させて、秀衡生きたらん程は、大炊介に成

―毬打の説
音、木丸を
打ちて遊ぶ
一の兒戯

ちやうの玉のやうなる物を取り出し、木の枝にかけ、一つをば、重盛が首と名づけ、一つをば、清盛が首とて懸けられけるが、かくて曉にもなれば、我が方に歸り、衣引きかづきて伏し給ふ。是を知らず、和泉と申す法師の、御介錯申しけるが、此の御有様ただ事にはあらじ、と思ひて目を放さず。ある夜御跡を慕ひて、かくれて草むらの陰に忍びて見ければ、斯様にふるまひ給ふ間、いそぎ鞍馬に歸りて、東光坊に此の由申しければ、阿闍梨大きに驚き、量智房阿闍梨につけ、寺に觸れて、「牛若殿の御髪剃り奉れ」とぞ申されける。量智房、此の事を聞き給ひ、「幼き人も様にこそよれ。容顔世に超えておはすれば、今年の受戒、痛はしくこそおはすれ。明年の春の比、そり参らせ給へ」と申しければ、「誰も御名残さこそと思ひ候へども、斯様に御心不用になりて御渡り候へば、我が爲、御身のため、然るべからず候ふ。只そり奉れ」とのたまひければ、牛若殿、何ともあれ、寄りて剃らんとする者をば、突かんするものを、と刀のつかに手をかけておはしましければ、左右なくよりて剃るべしとも見えす。覺日坊の律師申されけるは、「これは諸國の寄合所にて、靜ならぬ間、學問も御心に入らず候へば、某が所は、かたはらにて候へば、御心靜に御學問候へかし」と申されければ、東光坊も、流石いたはし

あらたに—
威靈あり

未申—西南
ざつちやう

ける。謀叛をおこす程ならば、早業をせでは叶ふまじ。先はやわぎを習はん、とて、この坊は諸人のよりあひ所なり。いかにもかなひ難し、とて、鞍馬の奥に僧正が谷といふ所あり、昔は、いかなる人の崇め奉りけん、貴船の明神とて、靈驗殊勝にわたらせ給ひける。智慧ある上人も行ひけり。鈴の聲も怠らず、神主もありけるが、御神樂の鼓の音もたえず、あらたに渡らせ給ひしかども、世末になれば、佛の方便も、神の験徳も劣らせ給ひて、人住み荒し、偏に天狗の住所となりて、夕日西にかたづけば、物怪、喚き叫ぶ。されば、参りよる人をも取りなやます間、参籠する人もなかりけり。されども牛若、かよる所のある由を聞き給ひ、晝は學問し給ふ體にもてなし。夜は、日ごろ一所にてもかくも成り参らせん、と申しつる大衆にも、知らせずして、別當の御護に参らせたる。しきたいと云ふ腹巻に、黄金作の太刀はきて、たゞ一人、貴船の明神へまゐり給ひ、念誦申させ給ひけるは、「南無大慈明神、八幡大菩薩、掌を合せて、源氏を守らせ給へ。宿願まこと成就あらば、玉の御寶殿つくり、千町の所領を寄進し奉らん」と祈請し、正面より未申に向ひて立ち給ふ。四方の草木をば、平家の一類と名付け、大木二本ありけるを、一本をば清盛と名付け、太刀を抜きてさんぐに切り、懷よりぎつ

夏—夏の修
行期

たばかり—
偽り計り

ひければ、折節せつふしその比、四條じようの御堂みどうも、夏の時分ときぶんにてありけるを打ち捨て、やがて鞍馬くらまへとぞ上りける。別當べつたうの縁えんに佇たふすみける程に、「四條じようの聖つじ在おほしたり」と申しければ、「承り候ふ」と申し、さらばとて、東光坊とうくわうぼうの許もとにぞ置かれける。内々ないくには、惡心あくしんをさしはさみ謀叛むはんを起して、來れるとも知らざりけり。ある夜のつれづれに人しづまつて、牛若殿うしかぎののおはする所へ参りて、御耳みみに口を當てゝ申しけるは、「知ししめされず候ふや、今まで思おもし召めし立ち候はぬ。君は清和天皇十代の御末、左馬頭殿さまたのどのの御子。かく申すは、頭殿かうのどのの御乳母子ごに、鎌田かまたの次郎兵衛ひやうゑが子にて候ふ。御一門の源氏國々に打ち籠められて在するをば、心憂うれしとは思おもひ召めされず候ふや」と申しければ、その比ころ、平家の世よを取りて盛なれば、たばかりて云ふやらん、と打ち解さけ給はざりければ、源氏重代ぢゆうだいの事をくはしく申しける。身こそ知り給はねども、かねて左様さやうの者あり、と聞きしかば、さては一所いっしょにては叶かなふまじ。所々にて、とて、正門坊しやうもんぼうをば返されけり。

五 牛若貴船詣の事

うしかきぶねまうで

正門しやうもんにあひ給ひて後は、學問がくもんの事、跡形あとがたなくわすれ果てゝ、明暮謀叛めくろぼはんの事をのみ思おもし召めし

めざましく
―心外に

實にくくし
―人物らし

けるが、故里の事を思ひ出して、都にのほりて、四條の御堂に、行ひすまして居たりけり。法名をば、正門坊とぞ申しける。また、四條の聖とも申しけり。勤修の際には、平家の繁昌しけるを見て、目ざましくぞ思ひける。いかなれば、平家の、太政大臣の官にあがり、末までも臣下卿相になり給ふらん。源氏は、保元平治の合戦に皆亡ほされて、おとなしきは斬られ、おさあいは、爰かしこに押し籠められて、今まで頭をさし出し給はず。果報も生れかはり、心も剛にあらんずる源氏の、あはれ思し召し立ち給へかし。何方へなりとも、御供して、世をみだし本意を遂げばや、とぞ思ひける。つとめの隙々には、指を折りて國々の源氏をぞ數へける。紀伊の國には、新宮の十郎義盛、河内國には石川の判官義通、攝津の國には多田藏人行綱、都には源三位頼政卿、京の君圓信、近江の國には佐々木の源三秀義、尾張の國には蒲の冠者、駿河の國には阿野の禪師、伊豆の國には兵衛の佐頼朝、常陸の國には志太の三郎先生義範、佐竹の別當昌義、上野の國には、利根、吾妻、是は國を隔てゝ遠ければ力及ばず。都近き所には、鞍馬にこそ、頭の殿の末の御子、牛若殿とておはするものを、参りて見奉り、心がら實にくくおはしまさば、文給はりて、伊豆の國へ下り、兵衛佐殿の御方に参り、國を催して世を亂さばや、と思

膽氣—なみ
大抵

ふりたる—
古き

男になして
—元服せさ
す

はん」と申されける。さなくとも、稚兒を里へ下す事、膽氣ならぬにて候ふ。一年に一度、二年に一度も下さる。かゝる學問の性いみじき人の、いかなる天魔のすゝめにや有りけん。十五とまうす秋の比より、學問の心、以つての外にかはりけり。その故は、ふるき郎等の謀叛を勸むるにてぞありける。

四 正門坊の事

四條室町に、ふりたる郎等のありける。すり法師なりけるが、これは恐しき者の子孫なり。左馬頭殿の御乳母子、鎌田の次郎正清が子なり。平治の亂の時は、十一歳になりけるを、長田の庄司、これを斬るべき由きこえければ、外戚親しき者ありけるが、やうやうに隠し置き、十九にて男になして、鎌田の三郎正近とぞ申しける。正近、二十一年の年思ひけるは、保元に爲義討たれ給ひぬ、平治に義朝討たれ給ひて後は、子孫たえ果てよ、弓馬の名を埋んで星霜をおくり給ふ。その時清盛に亡されし者なれば、出家して諸國を修行して、主の御菩提をも弔ひ、親の後世をも弔ひ候はどや、と思ひければ、鎮西の方へぞ修行しける。筑前の國御笠の郡、太宰府の安樂寺と云ふ所に、學問してあり

おだしき—
穩和なる

五更—今の
午前四時頃
山—比叡山

るは、「義朝の末の子、牛若殿と申し候ふを、且は知し召してこそ候ふらめ。平家、世ざかりにて候ふに、女の身として持ちたるも、心ぐるしく候へば、鞍馬へ参らせ候ふべし。猛くとも、おだしき心もつけ、書の一巻をも讀ませ、經の一字をも覚えさせて給はり候へ」と申されければ、東光房の御返事には、「故頭殿の君達にて、渡らせ給ひ候ふこそ、殊に悦び入りて候へ」とて、山科へ急ぎ御迎に人をぞ参らせける。七歳と申す二月初に、鞍馬へとてぞ上られける。その後晝は、終日に師の御坊の御前にて、經を讀み書學して、夕日西に傾けば、夜の更け行くに、佛の御あかしの消ゆるまでは、共に物をよみ、五更の天にもなれども、雨もよひもすくまで、學問に心をのみぞ盡しける。東光坊も、山、三井寺にも、これ程の兒あるべしとも覺えず、學問の精と申し、心ざま眉目容貌、類なくおはしければ、量智坊の阿闍梨、覺日坊の律師も、「かくて二十ばかりまでも、學問し給ひ候はど、鞍馬の東光坊より、後も佛法の種をつぎ、多門の御實にも、なり給はんずる人」とぞ申されける。母もこれを聞き、「牛若學問の精よく候ふとも、里に常にありなんどし候はど、心も不用になり、學問をも怠りなんす。戀しく見たけれ、と申し候はど、わざと人を給はり候ふて、母はそれまで参り、見もし人に見えられて、返し候

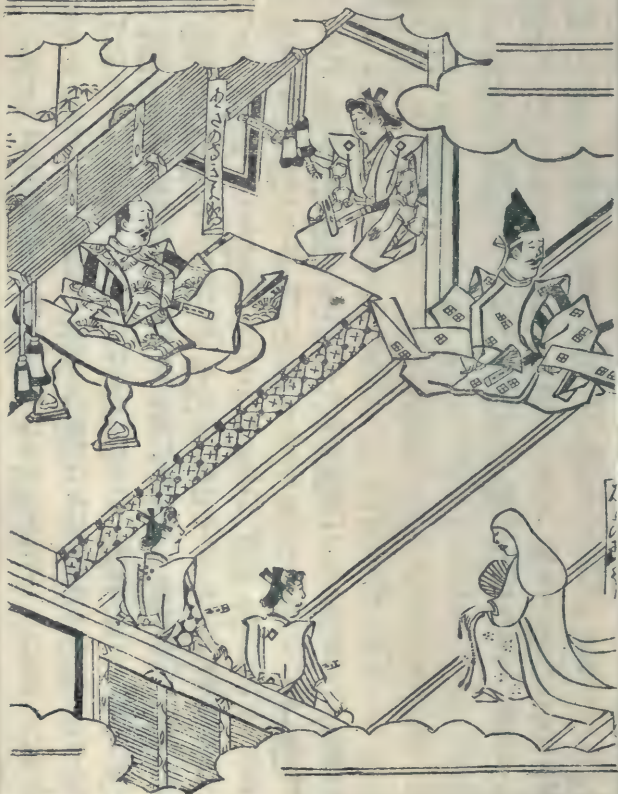
そし―庶子

洲股河―美濃

り。今若、八歳と申す春の比より、觀音寺にのほせ學問させて、十八の年、しやうかい
禪師の君とぞ申しける。後には駿河の國富士の裾野におはしけるが、惡禪師と申しけり。
八條におはしけるは、そしにておはしけれども、腹あしく恐しき人にて、賀茂、春日、稻
荷、祇園の御祭ごとに平家を狙ふ。後には紀伊國にありける。新宮の十郎義盛、世をみ
だりし時、東海道の洲股河にて討れけり。牛若は、四の年まで母の許にありけるが、世
のおさあいものよりも、心ざま振舞、人にすぐれしかば、清盛、常は心にかけて宣ひけ
るは、敵の子を一所にて育てよは、終にはいかどあるべき、と思召しければ、京より東、
山科といふ所に、源氏相傳の遁世して、かすかなる住居にてありける所に、七歳まで育
て給ひけり。

三 牛若鞍馬いりの事

常磐が子共、成人するに隨ひて、なか／＼心苦しく、初めて人に従はせんも由なし。習
はねば殿上にも、交はるべくもなし。たゞ法師になして、跡をも弔ひてなんと思ひて、
鞍馬の別當、東光房の阿闍梨は、義朝の祈師にておはしける程に、御使を遣して仰せけ





李夫人―孝
武皇帝の宮
人

を失ふべし。子に親をばいかと思ひかへ候ふべき。親の孝養する者をば、堅牢地神も納受あるとなれば、子共の爲にもなりなんと思ひ續け、三人の子をひき具して、泣くく京へぞ出でにける。六條へこの事聞えければ、惡七兵衛景清、監物太郎に仰せ付け、子どもを具して六條へ参りける。清盛、常磐を見給ひて、日比は火にも水にも思はれけるが、いま怒れる心も和ぎけり。常磐と申すは、日本一の美人なり。九條院は、色好にておはしましければ、洛中より容顔美麗なる女房を千人めされて、その中よりも百人えらび、百人の中より十人すぐり、十人の中より、一人えらび出されたる美人なり。まことに、漢の李夫人、楊貴妃も是には過ぎじ、と覺えける。清盛御心を移され、我にだに従ふものならば、末の世には、此者共の子孫の、いかなる仇ともならばなれ、三人の子共をも助けばや、と思はれける。頼方、景清に仰せ付けて、七條朱雀にぞ置かれける。日番をも頼方がはからひにして守護しける。清盛、常は常磐が許へ文を遣されけれども、取りてだに見ず。されども、文の数も重なりければ、貞女兩夫に見えずと云ふ語にもはづれ、又世の人の誹をも思はれけれども、たゞ三人の子共を助けん爲に、馴れぬ衾のもとに、新枕を並べ給ひけり。さてこそ、常磐は三人の子共をば、所々にて成人させ給ひけ

せんぞく—
山賊なるべし

なる。惡源太をば北國の勢を具せとて、越前へ下す。それも叶はざるにや、近江の石山寺に籠りけるを、平家聞き付け、難波妹尾をさし遣して生捕り、都へ上り、六條河原にて斬られけり。弟の朝長も、せんぞくが射ける矢に、弓手の膝口を、したよかに射られて、美濃國青墓といふ宿にて死にけり。その外子共、方々に數多ありけり。尾張國熱田の大宮司の女の腹にも、一人ありけり。遠江國蒲と云ふ所にて、成人し給ひて、蒲の御曹子とぞ申しける。後には三河守と名乗り給ふ。九條院の常磐が腹にも三人あり。今若七つ、乙若五つ、牛若當歳子なり。清盛、これを取つて斬るべき由をぞ申しける。

二 常磐都落の事

けいやく—
契約

永暦元年正月十七日の曉、常磐三人の子共ひき具して、大和の國宇陀郡岸の岡と云ふ所に、けいやくの親き者あり。之を頼み尋ねて行きけれども、世間の亂るゝ折ふしなれば頼まれず、其國の大東寺と云ふ所に、隠れ居たりける。常磐が母關屋と申す者、楊桃町にありけるを、六條より取り出し、拷問せらるゝ由聞えければ、常磐はこれを悲み、母の命を助けんとすれば、三人の子共を斬らるべし。子共を助けんとすれば、老いたる母

義經記

卷 第一

一 義朝都落の事

利仁（ほんとう）—左大臣藤原魚名六世の孫鎮守府將軍
下野の—下野守
おさあい—幼者

本朝（ほんとう）の昔を尋ねれば、田村（たむら）、利仁（としひと）、將門（まさかど）、純友（すみとも）、保昌（はうしやう）、賴光（らいくわう）、漢（かん）の樊噲（はんくわい）、張良（ちやうりやう）は、武勇（ぶゆう）といへども、名をのみ聞きて目には見ず。眼前（まのあたり）に藝（けい）を世にほどこし、萬事（ばんじ）の目を驚（おどろ）かし給ひしは、下野（きの）の左馬頭（さのかみ）義朝（よしとも）の末の子、源九郎義經（げん らうよしつね）とて、我が朝（てう）にならびなき名將軍（めいしやうぐん）にておはしけり。父義朝（よしとも）は、平治元年二月廿七日に、衛門督藤原信賴（ゑもんのかみふぢはらのよりきやう）卿にくみして、京（きやう）の軍（いくさ）に打ち負けぬ。重代（ぢゆうだい）の郎等（らうどう）ども、みな討（う）たれしかば、その勢（せい）二十餘騎になりて、東國の方へぞ落ち給ひける。成人（せいじん）の子共（こども）をばひき具（ぐ）して、おさあいをば都に捨てゝぞ落ちられける。嫡子（ちやくしか）鎌倉（かまくら）の惡源太義平（あくげんた よしひら）、二男中宮大夫進朝長（ちうぐうのたいふしんちやうなが）十六、三男兵衛佐賴朝（ひやうゑのすけよりとも）十二に

- 六 菅丞相の御事・・・・・・・・・・七五六
七 兄弟神にいはるゝ事・・・・・・・・七五七

卷第十二

- 一 虎箱根にて行き別れし事・・・・・・・・七五九
二 井出の館のあと見し事・・・・・・・・七六〇
三 手越の少將に遇ひし事・・・・・・・・七六三
四 少將出家の事・・・・・・・・七六四
五 虎と少將法然に逢ひ奉りし事・・・・・・・・七六六
六 虎大磯に閉ぢ籠りし事・・・・・・・・七六六
七 母と二宮の姉大磯へ尋ね行きし事・・・・・・・・七六六
八 虎出逢ひ呼びいれし事・・・・・・・・七六八
九 少將法門の事・・・・・・・・七七二
十 母と二宮行き別れし事・・・・・・・・七七六

四	鬼王團三郎曾我へ歸りし事	六八二
五	悉達太子の事	六八五
六	兄弟出立の事	六八六
七	館々の前にて咎められし事	六八七
八	波斯匿王の事	六九〇
九	祐經館をかへし事	六九三
十	祐經討ちし事	六九三
十一	王藤内を討ちし事	六九五
十二	祐經にとどめを刺す事	六九六
十三	十番斬の事	七〇一
十四	祐成討死の事	七〇六
十五	五郎召捕らるゝ事	七〇八

卷第十

一	五郎御前へ召し出され聞召し 問はるゝ事	七二三
---	------------------------	-----

二	大房が事	七二三
三	五郎が斬らるゝ事	七二四
四	伊豆次郎が流されし事	七二六
五	鬼王團三郎曾我へ歸りし事	七二七
六	同じく彼者共が遁世の事	七二九
七	曾我にての追善の事	七二九
八	禪師法師が自害の事	七三三
九	京の小次郎が死する事	七三六
十	三浦の與一が出家の事	七三七

卷第十一

一	虎曾我へ來りし事	七三九
二	母虎を具して箱根へ上りし事	七四三
三	鬼の子捕らるゝ事	七四五
四	箱根にて佛事の事	七四八
五	貧女が一燈の事	七五〇

二	小袖乞の事	六〇七
三	しやうめつ婆羅門の事	六二〇
四	斑足王の事	六二三
五	母の勘當宥さるゝ事	六二六
六	李將軍が事	六三四
七	三井寺の智興大師の事	六三七
八	泣不動の事	六三二
九	鞠子川の事	六三三
十	二宮の太郎に逢ひし事	六三五
十一	矢立の杉の事	六三七

卷第八

一	箱根にて暇乞の事	六三九
二	同く別當に逢ふ事	六三九
三	太刀刀の由來の事	六四〇
四	三島にて笠懸を射たる事	六四四

五	浮島が原の事	六四五
六	富士の狩場への事	六四六
七	源太と重保が鹿論の事	六四九
八	燕の國早魃の事	六五二
九	新田が猪に乗る事	六五三
十	船の始りの事	六五八
十一	祐經を射んとせし事	六五九
十二	島山歌にて訪はれし事	六六三
十三	館廻りの事	六六五
十四	祐經が館へ行きし事	六六六
十五	屋形の次第五郎に語る事	六七二

卷第九

一	和田の館へ行きし事	六七七
二	兄弟館をかへし事	六八〇
三	曾我への文かきし事	六八一

二	五郎と源太と喧嘩の事	五三八
三	和田より雜掌の事	五三〇
四	三原野の御狩の事	五三三
五	那須野の御狩の事	五三五
六	朝妻の狩座の事	五三六
七	帝釋と阿修羅王戰の事	五三八
八	三浦與一を頼みし事	五三九
九	五郎女に情懸けし事	五四五
十	巢父許由が事	五四八
十一	貞女が事	五四九
十二	鴛鴦の劔羽の事	五五〇
十三	五郎が情かけし女出家の事	五五一
十四	吳越の戰の事	五五二
十五	鶯と蛙の歌の事	五六七

卷第六

一	十郎大磯へ行て立聞の事	五六九
二	和田義盛酒宴の事	五七〇
三	ふん女が事	五七四
四	辨財天の事	五七九
五	朝比奈虎が局へ迎にゆきし事	五八〇
六	虎が孟十郎にさしぬる事	五八五
七	五郎大磯へ行し事	五八七
八	朝比奈と五郎力競の事	五八九
九	曾我にて虎が名殘惜みし事	五九一
十	山彦山にての事	五九七
十一	比叡山始の事	五九九
十二	ぶつしやうこくの雨の事	六〇二
十三	嵯峨の釋迦作り奉りし事	六〇三

卷第七

一	千草の花見し事	六〇五
---	---------	-----

一 九月十三夜名ある月に一萬箱王庭に

出でて父の事を歎きし事……………四五三

二 兄弟を母の制する事……………四五五

三 源太曾我へ兄弟召しの御使に

行きし事……………四五八

四 母なげきし事……………四六〇

五 祐信兄弟をつれて鎌倉へ行きし事……………四六四

六 兄弟を梶原請ひ申さるゝ事……………四六五

七 由井の濱へ引出されし事……………四六八

八 人々君へ参りて兄弟を請ひ

申さるゝ事……………四七〇

九 畠山重忠請申さるゝ事……………四七三

十 ちやうしが事にて兄弟たずかる事……………四七六

十一 兄弟曾我へ歸り喜びし事……………四七九

卷第四

一 十郎元服の事……………四八一

二 箱王箱根へ上る事……………四八一

三 鎌倉殿箱根御參詣の事……………四八三

四 箱王祐經に遭ひし事……………四八六

五 眉間尺が事……………四九一

六 箱王曾我へ下りし事……………四九四

七 箱王が元服の事……………四九七

八 母の勘當かうぶる事……………五〇〇

九 小次郎語ひ得ざる事……………五〇五

十 大磯の虎思ひ染むる事……………五二

十一 平六兵衛が喧嘩の事……………五二三

十二 三浦のかたかひが事……………五一七

十三 虎を具して曾我へ行きし事……………五二〇

卷第五

一 淺間の御狩の事……………五二五

十二	おなじく角觚の事	三九二
十三	費長房が事	四〇二
十四	河津三郎うたれし事	四〇四
十五	伊東が出家の事	四〇一
十六	御房が生るゝ事	四〇二
十七	女房曾我へうつる事	四〇三

卷第二

一	大見八幡を討つ事	四一五
二	泰山府君の事	四一七
三	頼朝伊東におぼせし事	四一九
四	若君の御事	四二二
五	王昭君が事	四二四
六	玄宗皇帝の事	四二五
七	頼朝伊東を出で給ふ事	四二六
八	頼朝北條へ入り給ふ事	四二八

九	時政が女の事	四二八
十	橘の由來の事	四二九
十一	兼隆を賀にとる事	四三三
十二	牽牛織女の事	四三四
十三	盛長が夢見の事	四三五
十四	景延が夢合の事	四三六
十五	酒の事	四三七
十六	頼朝謀叛の事	四三九
十七	兼隆が討たるゝ事	四四三
十八	頼朝七騎落の事	四四四
十九	伊東の入道が斬らるゝ事	四四五
二十	奈良の權操僧正の事	四四六
二十一	祐清京へ上る事	四四八
二十二	鎌倉の家の事	四四九
二十三	八幡大菩薩の御事	四五〇

卷第三

二	大津次郎の事	二七八
三	荒乳山の事	二八三
四	三の口の關とほり給ふ事	二八五
五	平泉寺御見物の事	二九四
六	如意の渡にて義經を辨慶うち奉る事	三〇四
七	直江の津にて笈さがされし事	三〇九
八	龜割山にて御産の事	三三〇
九	判官平泉へ御着の事	三三四

卷第八

一	次信兄弟御弔の事	三七
二	秀衡死去の事	三三
三	秀衡が子共判官殿に謀叛の事	三五
四	鈴木の三郎重家高館へ参る事	三九
五	衣川合戦の事	三四〇
六	判官御自害の事	三三七

曾我物語

卷第一

七	兼房が最後の事	三五二
八	秀衡が子共御追討の事	三五三

一	神代の始の事	三五七
二	惟喬惟仁の位争の事	三五八
三	伊東を調伏する事	三六三
四	同じく伊東が死する事	三六六
五	伊東の次郎と祐經が争論の事	三七二
六	頼朝伊東の館にまします事	三七七
七	大見八幡か伊東を狙ひし事	三七九
八	杵臼程嬰が事	三八〇
九	奥野の狩座の事	三八八
十	同じく酒宴の事	三八八

- 八 賴朝謀叛により義經奥州より出で給ふ事……………一〇三

卷第四

- 一 賴朝義經に對面の事……………一〇五
二 義經平家の討手に上り給ふ事……………一二一
三 腰越の申狀の事……………一二五
四 土佐坊義經の討手に上る事……………一二八
五 義經都落の事……………一三八
六 住吉大物二か所合戦の事……………一五〇

卷第五

- 一 判官吉野山に入り給ふ事……………一五七
二 靜吉野山に捨てらるゝ事……………一六四
三 義經吉野山を落ち給ふ事……………一六八

- 四 忠信吉野にとゞまる事……………一七三
五 忠信吉野山の合戦の事……………一七九
六 吉野法師判官を追ひ掛け奉る事……………一九四

卷第六

- 一 忠信都へ忍び上る事……………二〇九
二 忠信最後の事……………二一四
三 忠信が首鎌倉へ下る事……………二二〇
四 判官南都へ忍び御出ある事……………二二三
五 關東よりくわんじゆ坊を召さるゝ事……………二三八
六 靜鎌倉へ下る事……………二四一
七 靜若宮八幡へ參詣の事……………二四九

卷第七

- 一 判官北國落の事……………二五六

目次

義經記

卷第一

- 一 義經都落の事……………一
- 二 常磐都落の事……………二
- 三 牛若鞍馬いりの事……………六
- 四 正門坊の事……………八
- 五 牛若貴船詣の事……………一〇
- 六 吉次が奥州物語の事……………三
- 七 遮那王殿鞍馬いでゐの事……………八

卷第二

- 一 鏡の宿にて吉次宿に強盗入る事……………三
- 二 遮那王殿元服の事……………三〇
- 三 阿野の禪師に御對面の事……………三三
- 四 義經陵が館を焼き給ふ事……………三六
- 五 伊勢の三郎義經の臣下に始めて成る事……………四
- 六 義經秀衡に御對面の事……………四五
- 七 鬼一法眼の事……………四七

卷第三

- 一 熊野の別當亂行の事……………七
- 二 辨慶生るゝ事……………七
- 三 辨慶山門を出づる事……………六
- 四 書寫山炎上の事……………六
- 五 辨慶洛中にて人の太刀を取りし事……………八
- 六 義經辨慶と君臣の契約の事……………九
- 七 頼朝謀叛の事……………九

原作に近き歟は、尙大に學者の討究を要すべき所たり。今は貞享四年の刊本を以て底本とし、參するに寛文三年本、和田信二郎氏の和州忍辱山本等を以てせり。義經記に至りては異本と稱すべきものなく、類本も亦稀なり。今は元祿十年の刊本を底本とし、同二年刊行の別本を以て參照せり。其他覆刻につきての用意は、一に他の本文庫本に同じ。

烏野幸次氏は、本書の校訂につきて助力せられたる所多く、黒川眞道和田信二郎二氏は、祕籍の借覽を快諾して校訂上多大の便宜を與へられたり。特に記して謝意を表す。

大正二年一月

校訂者

武

笠

三

緒言

義經辨慶の武勇談、曾我兄弟の讐討は、我が國民の間に語り傳へられたる物語の中、特に勇ましく、特にあはれ深く、よく國民性に契合して人氣あるものの一にして、随つて、古來の文學美術の材を之に採りたるもの、殆ど指を屈するに堪へず。而も肇めて之を結構鹽梅して、趣味饒かなる一篇の詩的物語となし、此英雄譚をして永く國民の間に不死ならしめ、後世の文學者美術家の爲に、好箇の題材を提示したるは、實に本卷收むる所の義經記、曾我物語の二書なりとす。

二書共に、從來室町時代初期の作物として認めらるれども、孰れも其作者を詳にせず。曾我物語は、眞字本以下異本類本頗る多く、そのいづれが最も

爐邊に携へ行き、軽く片手に捧げ得べき書籍は、要するに最も有用なる書籍なり。

ジョンソン

PL
790
G5
1913



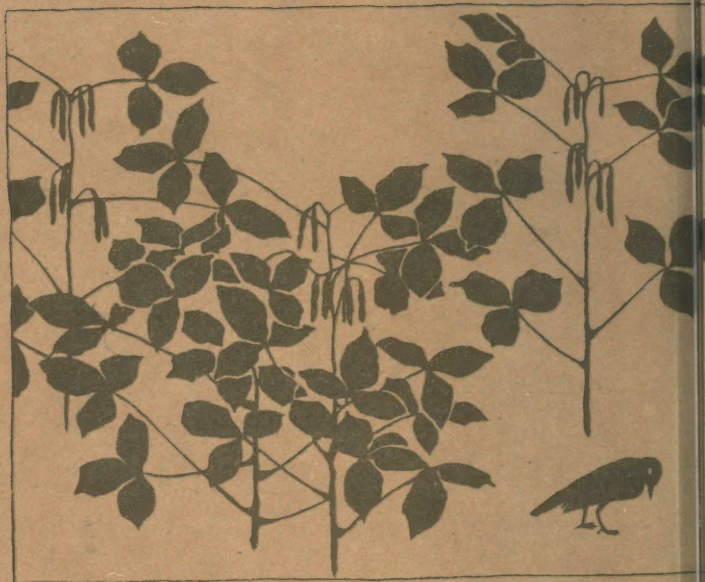
曾義

秋經
物

語記

全全





PL
790
G5
1913

Gikeiki
Gikeiki

Ea
Asi
Stu

G

PL
790
G5
1913

TEIR CARD

.....

.....

.....

FEB 11 1969

